

---

# 竜が辿り着いた幻想郷

ベヘモス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜が辿り着いた幻想郷

### 【Nコード】

N2724W

### 【作者名】

ベヘモス

### 【あらすじ】

元は同じ存在の筈にも関わらず、二つに分かれてしまった竜は、世界の在り方を巡って対立した。

人に失望した竜と、残忍さを知っても人を信じ続けた竜。

二人はお互いの全てを賭けて戦い……その果てに勝利したのは、最後まで人を信じ続けた竜だった。

しかし、自らの力はこの世界に不用のものと思った竜は、自らの意志でその力を捨てた。

身体から解き放たれた力は、虚空を巡る回る内に自我を持ち幻想郷

へと辿り着く。

人と妖怪が暮らす幻想の世界で、竜は何を想うのだろうか……。

## 第一話 竜の目覚め

?????Slide

ある日の朝。私は何時もの様に神社の境内を掃除しようとしたら、境内に見慣れない服を着た青い髪の少年が倒れているのを発見した。彼の服装は里の人間の物とは違い、袖の無い白い服に鉄紺てつこん色に近いズボンズボンを穿いている。

里の人間はこんな服は着ないだろうし、彼から感じられる気配も人の物じゃない。だからと言って妖怪が放つものとも違う。

どちらかと言うと………龍に近い雰囲気すら感じられる。

でも、此処で龍と言えば最高神の龍神だけの筈。

龍神が下界に下りて来るはずありえない事だし、今私の目の前に居るのが龍神だとは思えない。

だったら彼は一体なんなのか。

幾ら考えても答えは出ないけど、もし龍神の血族だったらこのままにしておく訳にもいかない。

「……………はあ。メンドクサイな」

私は溜息を吐きながらも、倒れている彼を神社へと運んだ。

?????Slide out

……………俺は今夢を見ている。

夢の内容は、俺が？神？<sup>オレ</sup>を捨てた時の事。  
もう一人の自分と戦い、その末に俺が選んだ答え。…あの世界には、  
もう？うつろわざるもの？は必要なかったから。  
だから、あの選択に後悔はしていない。…でも、如何して俺はこ  
んな夢を視ているんだろう。俺は他の竜達と一緒にあの世界から消  
えた筈なのに……。

「……う、うん……」

眠っていた俺は、差し込んでくる光の眩しさで目を覚ました。  
目を覚ました俺の眼に最初に入ってきたのは、初めて見る内装の部  
屋だった。

今まで世界を旅して来たけど、こんな内装の部屋は初めてだ。  
木で出来た家と言うのは確かにあったし、床で寝るのも初めてじゃ  
ないけど……建物の構造そのものが違う。

なんでこんな所で寝てるのか覚えてないけど、今は此処が何処なの  
か考えるのが先決か。

「あ、漸く起きた」

「……？」

半身を起した所でドア……と思うものが開き、腋出しの変わった形  
の紅白の衣装を着た黒髪の少女がこの部屋に入ってきた。

あの子は一体誰だろう。この家の子かな？ と言うか、腋を出して  
寒くないのかな？

……服の袖が無くて、腋を出してるのは俺も一緒か。

「アンタ、人の家で何日眠ってるのよ」

「……一体何日寝てたんだ？」

「三日よ三日。全く、死んだ様に眠ってるから既に死んでるのかと思っただじゃない」

「あゝ、随分眠ってたんだな」

「……暢気ねアンタ」

黒髪の少女は、俺の発言に呆れているが……そんなに呆れる様な事か？

もう一人の自分だったアイツは、数百年間寝てた記憶があるし、三日くらいなら呆れる事もないと思う。

「まあ良いわ。……それでアンタは一体何者なの？」

「……？ それはどう言う意味だ？」

「言葉の通りの意味よ。見た目は人間だけど、気配は人のそれとは明らかに違う。でも、妖怪なんかの気配とも違うし……」

「……………」

彼女が言う妖怪ってのが何か分からないけど、人じゃないって事は……やっぱり俺はリュウが捨てた力なんだな。

だとすると、俺は自分の事を彼女になんて説明すれば良いんだろう。

かつて神と呼ばれていた者……は、少し違うかな。

俺の意識はどちらかと言うと、フォーウルよりもリュウに近いみたいだ。

分かれていた力が一つに戻った事で、二人の力を使えると思うけど……今は関係ないな。

こうなると、本当になんて説明すれば良いのか分からなくなるな。今の俺は竜の力が、肉体と意志を持って一人歩きしてる様なもんだし。

……ややこしく考えるより、一から説明した方が良いか。

「…少し長い話になるけど、良いかな？」

「出来るだけ手短にお願ひするわ」

「え、ええ〜……」

あの旅を記憶を短く話すのって、結構大変な気がするんだけど……。まあ、俺の事を説明する上で話さなくても良い事も多いし、なんとか頑張ってみるか。

「…一番最初の始まりは、とある世界に一体の竜が召喚された事から」

こうして俺は話し始めた。二つの身体に分かれてしまった一頭の竜かみが世界を巡る物語を……。二つに分かれた竜は世界を巡り、様々な人に出会い、様々な出来事に関わる。

…そして世界を巡る内に二人は違う答えに辿り着き、全ての始まりの地で二人は戦った。

「戦いの末、分かれた竜は元に戻り……そして神である事を止めた」

「……それじゃ、アンタは一体なんなの？」

「俺は、その神と呼ばれた竜の力そのものかな。だから君の言う通り、俺は人でもなければ、妖怪と呼ばれる存在でもないんだ」

「……それでアンタはこれから如何する積もり」

「如何もしないかな。この力を使って世界を滅ぼそうとは思わない。だからと言って、他に行く宛もないし」

「そう。……だったら暫く家に居なさいよ」

「いいのか？」

「良いも何も、アンタみたいなのを野放しにしてる方が危ないですよ」

「……それもそうか」

さつき自分でも言ったが、今の俺は竜の力そのもの。

今は人の姿をして落ち着いているけど、何時暴走するか分からない。そんな危険な存在を放置するよりも、傍に置いて監視してた方が良いのかもしれないな。

「でも、君の力で俺を止められるの？」

「舐めないで頂戴。こっに見えても私は幻想郷のバランスーで、異変や妖怪退治は私の仕事なのよ」



「……つまり？」

「つまり、アンタみたいなのを退治する専門家って事よ」

「そっか。それなら安心だな」

「そう言う事。……それじゃ、ちょっと食事を持って来るから少し待ってなさいよリュウ」

「……リュウ？」

「アンタの名前よ。…さっきの話しを聞く限りだと名前も無さそうだし、竜の力そのものなんでしょ？ だからそう呼ばせて貰うわ」

「……」

彼女に？リュウ？と呼ばれた時、俺は戸惑いと懐かしさを感じた。この名前はもう二度と呼ばれる事はないと思っていたし、俺はアイツじゃない。

……でも、そう呼ばれるのも嫌じゃなかった。

「それじゃ、持って来るから待ってなさいよ」

「その前に聞きたい事があるんだけど」

「ん？ なによ」

「君の名前はなんて言うの？」

「…霊夢よ。博麗霊夢」

「そっか。…それじゃ、今日から宜しくな霊夢」

「……先に言っておくけど、アンタにも色々働いて貰うからその積もりでいなさいよ」

「わ、分かったよ……」

俺がそう返事すると、彼女……もとい霊夢は部屋を出て行った。

霊夢は色々働いて貰うって言ってたけど、一体俺に何をさせる積もりなんだろ……。

## 第一話 竜の目覚め（後書き）

初めまして、ベヘモスと言う者です。

この度、東方とBOFのクロス作品を唐突に書きたくなったので書く事にしました。

時系列的に言いますと、主人公はBOF？のED後で、幻想郷の時系列は紅霧異変前になります。

今後リュウは、博麗神社に居候して平凡な日常を満喫しつつ、様々な異変に巻き込まれていきます。

一応、ラスボス的なキャラは考えてあるので、その異変まではリュウの異変解決物語になると思います。

BOFを知らない方も居ると思いますが……別に原作を知らなくても問題ないかと。

とりあえず東方風に言うと、主人公は？様々な竜に変身する程度の能力？を持っていると考えて下さい。

様々と言っても、変身出来るのは八体だけですけどね。

それでは次回の更新でお会いしましょう。

## 第二話 竜の居候

霊夢の家……じゃなくて、博麗神社に居候が決まった翌日。

俺は朝食を食べた後、霊夢から仕事を頼まれた……と言っか、押し付けられた。

その仕事と言うのが、この神社の境内の掃除。

普段は霊夢が一人で掃除しているそうだが、今後は俺に掃除を任せる様だ。

「しかし、この時間にする事が掃除だけとは……」

渡された箒を片手に呟くものの、巫女の仕事を知らないんだし、雑用を頼まれるのは当然と考え割り切る事にした。

とは言え、俺が掃除をしてるなんてフォウルが知ったらどんな反応をするのやら。

元は同じ存在だとして、永い時間分かれていたから俺とは性格が全然違うんだよな。

「……アイツならきつと、『何故その様な事をしなければ為らない』とか言つて、霊夢と喧嘩しそうだな」

その事を考えると、何故か苦笑いが零れた。

自分であるのに何処か他人の様な感じだからか、それとも考えるだけ無駄だからか。

どちらの答えも正しい様な気がするが、今は置いておこう。

コレ以上物思いに耽っていると、霊夢に怒られそうだし。

「……よし、それじゃ頑張ってみるか」

俺は箒を握り締め、慣れない手付きで境内の掃除を始めた。

……

……

…

掃除を始めて大体1・2時間が経っただろうか。……掃除は未だに終わっていない。

……いや、うん。正直言つて、掃除と言うものを舐めてました。

この作業つて、こんなにもメンドクサイものだったんだな。

旅をしていたから、料理を作ったり使った食器を洗ったりはしてたけど、こんな風に掃除をした記憶はないな。

フォウルの時なんて戦う事しかしてなかったから、料理を作るなんて事はなかったし。

それにアイツは、西の大陸を統一した帝国の初代皇帝だから、掃除をするなんて発想自体が無い様な気がする。

こうやって考えてみると、本当に俺とフォウルって違うな。

一つになる前は分からなかったけど、今ならアイツとの違いや考えが良く分かる。

……でも、やっぱり俺はリュウより的人格だ。考えが分かっててもアイツの様に人を滅ぼそうとは思えない。

俺はリュウの様に力を捨てる事は出来ない。だったら、あの古竜達のようにこの地を見守るのも良いのかも知れないな。

「もし、少しお時間宜しいかしら？」

「…？」

掃除をしながら色々と考えていると、紫色のドレスを着て日傘を差した金髪の女性に話し掛けられた。

幾ら俺が物思いに耽っていたとは言え、話し掛けられるまで彼女の存在に気が付かないとは思わなかったな。

「えっと…俺に何か用ですか？」

「いえ、貴方ではなく霊夢に用があるのだけど…何処に居るか知らないかしら？」

「霊夢なら母屋の方に居ると思いますよ」

「そう。有り難うね、異世界の竜さん」

「えっ？」

女性がそう言うと、そのまま母屋の方へと歩いていった。

俺は彼女に声を掛けようと思ったけど、なんでか言葉が出て来なかった。

如何して言葉が出て来なかったのか分からないけど、あまり彼女に関わりたくない…そう思ったからだ。

「……………今日も平和ねえ」

そんな事を呟きつつ、縁側で用意したお茶を一杯飲む。

リユウが境内の掃除をしてくれるお陰で、私は普段よりものんびりしてられる。

最初にアイツを拾った時は如何しようかと思ったけど、こうして見ると良い拾いモノだったのかも。

……………まあ、掃除の腕前はイマイチみたいだけど。

昨日の話しを聞く限りは、まともな掃除の経験が無いみたいだし、多少時間が掛かるのは仕方が無いか。

それに、アイツに頼める仕事って言う雑用しかないのよね。流石に巫女の仕事は任せるわけにもいかないし。

「ハア〜イ。お久し振り霊夢」

「帰れ」

「……………いきなりそれは酷いじゃない」

縁側でお茶をしていたら、いきなり八雲 紫がやって来た。

全く、このスキマ妖怪は何をしに来たのやら。……………本当に下らない用事だったら、全力で追い返そう。

「今日は何をしに来たのよ。下らない用事だったら怒るわよ」

「全然下らなくないわよ。……………今日来たのは、あの竜に付いてよ」

「リュウが如何したのよ」

「惚けるんじゃないの。…貴女も気が付いてるでしょ。あの莫大な力を」

「……………」

成る程、紫が何を言いに来たのか分かったわ。

要するに、リュウの力が幻想郷の害になるか如何かって話しね。

まあ、紫の心配も分からなくも無いけれど、私は其処まで気にしなくても良い様な気がするな。

「単純な力なら鬼を陵駕する程よ。幾ら修行をサボリがちの貴女でも理解出来るでしょ？」

「当たり前よ。アイツの力が分からない程鈍っちゃいないわ」

「だったら、何故あの竜を住まわせるの」

「別に大した理由は無いわよ。ただ、アイツを放り出すのが危険だと思っただけよ」

「……………本当にそれだけ？」

「如何言う意味よ」

「別に大した理由はないわよ」

「ふん……。それで？ アンタから見てリュウは如何なの？」



「…正直、訳が分からないわ」

「でしようね」

アイツが持っている力を見たら弱い妖怪は逃げ出すだろうし、紫の様に強い妖怪は警戒を始める筈。

でも、実際のアイツを見るとごく普通の少年と言った感じにしか映らない。

確かに力は神と崇められるだけのモノはあるんだけど、威厳と言うものが一切ない。

正直な話し、あの性格なら人里で暮らしてもバレないと思うのよね。

「様子を見るために近付いたら、境内を掃除してる上に、普通に應對されて拍子抜けだったわ」

「アレだけの力があるのに、境内の掃除をしてたら妖怪賢者のアンタでも拍子抜けするか」

「…それと同時に、霊夢の神経の太さにも驚いたわ」

「失礼ね。私の何処が凶太いのよ」

「其処までは言っていないわよ」

「言ってるようなもんじゃない」

否定する紫に私は思わず食い掛かった。

神経が凶太いと言われて嬉しくないし、コイツにだけは凶太いなんて言われたくない。

「まあ、それは置いておくとして」

「置いとかないでよ」

「 今後は彼を如何する積もり?」

「 ……別に如何もしないわ。このまま神社に居候させるだけよ」

「もし暴れだしたら如何するの?」

「その時は……私がアイツを討ち取る。元々そう言う約束だしね」

「そう。なら、もっと真面目に修行しなさい」

紫はそう言うと、地面に作ったスキマに潜り忽然と姿を消した。全く、最後の最後で小言を言って行ったわね。如何言う形であれ、巫女の仕事をこなしてるんだし問題ないじゃない。

紫が消えた縁側で一人、温くなったお茶を啜りそんな事を思った。

……

……

…

紫が帰ってから少し経って、リュウが私の元にやって来た。

如何やら境内の掃除が漸く終わったみたい。……でも、二時間半は掛かり過ぎね。

「全く。もつと手早く出来なかったの」

「初めてだから勝手が分からなくて」

「言い訳しない」

「はい、すみません」

私が叱るとリュウは少し落ち込むが、その姿を見ると本当に竜なのか疑問に為ってくる。

いや、コイツから感じられる力は明らかに人の物じゃない……んだけど、なんか釈然としない。

別に媚び諂ってる訳じゃないんだけど、如何しても納得出来ないのよね。

これじゃ、何処にでも居る普通の少年と変わらないじゃないの。

「……………」

「ん？ 俺の顔に何か付いてるのか？」

「ええ。目と鼻と口が付いてるわ」

「いや、それは付いていて当然だろ」

適当にからかって見ても、返って来る反応は普通なもの。

これで変な返しをされても困るけど、これじゃ益々威厳が無くなるわね。

……威厳のあるリュウか。イマイチ想像出来ないわね。

「ねえ、リュウ。ちょっと威厳のある一言を言ってみてよ」

「へっ？　なんで？」

「良いから」

「……………余に従え愚民共」

「うわ、似合わない上に無性に腹が立つ」

「言わせたの霊夢だろ?!」

「うっさい」

こうして話していると、こいつに威厳なんてものを求めるのは無理ね。全然似合わないし。

そう考えると、今のリュウが一番合ってるのかも知れないわね。

日本の神様だって、時には人間以上に人間くさく為るんだし。

「…それじゃ、食料買いに行くわよ」

「今から？」

「そうよ。元々一人分しか蓄えてないのに、アンタが居候するんじや数日で蓄えが無くなるわ」

「成る程」

「分かったんなら、荷物持ち宜しくね」

「りょーかい」

こうして私とリュウは、神社を下りて人里へと向かった。  
本当は空を飛んで行けば速いんだけど……まあ、道案内がてらノン  
ビリ歩いて行きますか。

**第三話 動かない古道具屋（前書き）**

今回は霊夢視点です

### 第三話 動かない古道具屋

私はリュウを連れて人里にやって来た。

リュウは里が珍しいのか、入り口に着いた時から辺りをキョロキョロと見渡している。

今まで旅をしていたのだし、この程度の事で驚かないで欲しいわ。

「ちょっと、いい加減落ち着きなさいよ」

「あ、悪い。余りにも珍しかったからつい」

「ついつて、アンタ今まで旅してきたんじゃないの？」

「してたけど、此処みたいな家や人の服装は見た事無いから」

「ふん」

如何やら、コイツが居た世界にはこの里に近い形の集落は無かったみたい。

前に聞いた話は、飽く迄もリュウの人となりを聞くだけのものだから、どんな場所を旅してたのかは聞いてなかったな。

まあ、今すぐ聞き出さなくちゃいけない訳でもないし、気が向いたらで良いか。

「ほら、さっさと買い物を買ませるわよ」

「へい」

一応返事はするものの、リュウは相変わらず辺りを見渡している。

幻想郷に住んでいる私には何が珍しいのか分からないけど、コイツに取っては違うみたいね。

でも、物凄く恥かしいから今すぐ止めて欲しい。……口で言っても分からないなら、実力行使で分からせれば良いか。

「……なあ霊夢。今、殺気みたいなのを感じたんだが」

「気のせいでしょ」

「そ、そうか？」

「そんな事より早く行くわよ」

「あ、ああ」

今一つ釈然としてないようだけど、リュウは漸く落ち着いて私の後を付いて来た。

それにしても、リュウの奴意外と勘が良いのね。

まあ、人里で暴れる必要が無くなったから良いんだけどね。

リュウに里を案内しつつ必要な物を買っていると、突然リュウがとある道具屋の前で立ち止まった。

特に急ぎの用もないし、コイツが何に興味を示したのか気になり、私も隣に立ち視線の先を追ってみる。

リュウの視線の先を追って行って有ったのは、籠に入れられた何の変哲もない竹竿だった。

「……その竿に何かあるの？」

「いや、只の竹竿だけど」



「それなら、何で熱心に見てるのよ」

「…あの竹竿が欲しいなあ〜って」

「却下」

「即答された?!」

全く、行き成り立ち止まるから何事かと思えば……釣竿が欲しいなんてね。

意外な趣味と言えそうだけど、今回は食料を買いに來ただけ竿を買いに來たんじゃないのよ。……それに値段も高いし。

只の釣竿の筈なのに、4500円って一体如何言う事よ。高が竹竿じゃない。

仮に使っている竹が良いとしても、こんな竿なら500円かそこで十分よ。

「……靈夢、如何しても駄目か?」

「駄目よ。…ほら、何時までも立ち止まってないで行くわよ」

「うう…無念だ……」

無念と言いつつもリュウは、私の後について來る。

お財布を握っているが私でコイツは居候だからか、はっきり却下してしまえば強く出たりしないみたい。

リュウに物欲が強いのか知らないけど、今後の為にもお財布は確り握っておかないとね。……それにしても

「……釣り、したかったな」

物凄く落ち込んでるわね。

別にあの釣竿が欲しかった訳じゃないみたいだけど、どれだけ釣りが好きなのやら。

……ずっとこんな調子だと、なんか悪い事したみたいで申し訳なくなってるわね。

安かったら買ってあげても良かったけど、あの値段は如何考えてもぼったくりでしょ。……リュウには悪いけど、今回は我慢して貰うわ。その後私は、落ち込んでいるリュウを引き連れて手早く買い物を済ませた。

……

……

…

リュウを人里に案内してから一週間が経った。

落ち込んでいたリュウだったけど、翌日にはケロツとした様子で雑用をこなしていた。

一日で機嫌が治ってくれたのは良かったんだけど、本人に聞いたなら笑いながら『居候だし、霊夢に無理は言えないって』と言っていた。幾ら竜とは言え、ちゃんと遠慮と言うものをしてるみたいで助かるわ。

「それじゃ、ちょっと出掛けて来るから留守番よろしく」

「いつてらっしゃい」

私はリュウを神社に一人残し、魔法の森にある香霖堂へと向かった。香霖堂と言うのは、知り合いの半妖 森近 霖之助 が経営している珍品道具屋の事。

珍品道具屋と言うよりも、古道具屋と言った方が正しい気もするけど。

あの店に取り扱っている物の大半が拾って来た物で、霖之助さんは変わり者だし。

……まあ、道具作りの腕は確かだから別に良いか。

それに幻想入りした道具を取り扱う唯一の店で、ツケが利くから大助かりだしね。

「……やっぱり、飛んでいくと早く着けるわね」

神社を出て三十分もしない内に香霖堂に到着した。

店の中は色んな物が置いてあってゴチャゴチャしてるけど、もう少し整理する気は無いのかしら。

……どの道、魔理沙が持<sup>ぬすんで</sup>って行くからキチンと整理する必要も無いのか。

「いらっしやい霊夢。約一週間振りだね」

店の奥から、眼鏡を掛けた白髪の青年が顔を出した。

彼がこの店の店主の霖之助さんだ。

若い様に見えるけど、本人曰く私の何倍も生きているんだとか。

「久し振り、霖之助さん。今日はお札と針を注文しに来たわ」

「……またツケかい？」

「当然」

「いい加減、溜まったツケを払って欲しいんだけど」

「気が向いたら払うわ」

「やれやれ。…用意して来るから、少し待って居てくれ」

それだけ言い残すと霖之助さんは店の奥に引っ込んでいった。

この間は特にする事も無く、お茶を飲もうにも準備するのが手間だから置いてある物を見てみよう。

何か使えそうな物が有ったら貰って行く事にしよう。……当然ツケで。

使えそうな物と言っても、この店の置いてある殆どの物が外の世界の道具だから、イマイチ何に使うのか分からないのよね。

霖之助さんが居れば、如何言う用途の道具が聞けるけど……今は無理か。

それにしても、前に来た時よりもゴチャゴチャしている様な気がするんだけど……私の気のせい？

元々色々な道具を置いてあるからそう感じてたんだけど、久々に来たから余計にそう感じるわね。

大小さまざまな物を無造作に置いてあるから、何処に何があるのか良く分からない……って、また変な物が紛れてるわね。

「お待たせ、霊夢。ご注文の品が出来上がったよ」

「ねえ、霖之助さん。この紅く光る石は何？」

「ああ、それはフェアリドロップと言う金属の一種だよ」

「金属って……これが？」

「ああ」

霖之助さんはそう説明してくれるけど、名前と見た目からしても金属には見えないわね。

どちらかと言うと、宝石の原石と言われた方が信じれそう。

「……もしかして、それが欲しいのかい？」

「別に良いわ。買った所で漬物石にしか使い道無さそうだし」

「確かにそうかもしれないね」

「その代わりに、これを貰っていくわ」

「釣竿？」

私が指指したのは、店の中を物色中に見つけた釣竿。

まあ、私の知っているのは少し違って、持ち手の近くに取っ手が付いた丸い器具がある奴だけだ。

見た感じからして釣竿だと思ったけど、どうやら間違いじゃなかったみたいね。

「君が釣りだなんて、珍しいね」

「私じゃなくて、今ウチに居候してる奴が欲しそうにしてたのよ」

「博麗神社に居候って……もしかして、その人は外来人かい？」

「うーん……そんなところかな」

「……？ 随分と曖昧な返答だね」

「色々あるのよ」

「そうかい。…それじゃ、その釣竿を包むから渡してくれ」

「はいはい」

私は釣竿と、ついでに針と糸を霖之助さんに渡した。

この竿の値段は、里で見た竹の奴の半分以下の値段で買うことが出来た。

……やっぱりあの竿はぼったくりよね。如何考えてもあの値段は可笑しい。

支払いは何時も通りツケにしてもらった私は、商品を受け取り店を後にした。

品物を手に神社への帰り道を飛んでいると、正面から白黒の魔法使いが箒に跨ってこっちに来るのが見える。

あんな格好をしているのは魔理沙一人だけ……何をそんなに慌てているのやら。

「ちょっと魔理沙。そんなに慌てて如何したのよ」

「よ、よう、霊夢か。わりいけど私は忙しいんだ。だから先を急が

せて貰うぜ！」

「あ、ちょっと！」

何を慌てているのか知らないけど、魔理沙は止まる事無く大慌てて行ってしまった。

アイツがあんなに慌てているのは珍しいけど、神社の方からやって来たのが気に為るわね。

神社にリュウが居るし、変な事には為ってないと思うけど……なんかやな予感がするわ。

リュウは恐らく無事だろうけど、神社がどうなってるのか不安ね。今は一刻も早く神社に帰る事にしましょう。

……

……

…

急ぎ帰った私の眼に飛び込んで来たのは、何かに吹き飛ばされた様に荒れ果てた境内と、それを直そうと必至に作業しているリュウの姿だった。

幸いにも神社本体は無事だったけど、境内の方は滅茶苦茶になっている。

なんでこうなったのか知らないけど、恐らく当事者である筈のリュウに聞けば分かるわね。

「…リュウ、ちょっと良い」

「お、お帰り霊夢。……もしかしなくても、怒ってるよな」

「とりあえず、何が遭ったのか話なさい」

「魔理沙って言う奴と戦って、マスタースパークなる魔法を放たれました」

「……そう」

あの時は、魔理沙が慌てている理由が分からなかったけど、これではつきりしたわ。

アイツ、遊びに来たと思ったたら何をぶっ放してるのよ！

如何言う経緯があるのか知らないけど、少しは限度を考えなさいよ！！

「魔理沙め、今度会ったら只じゃおかないわ。それとリュウ！」

「はい！ なんででしょうか!？」

「アンタは荒れた境内の片付け。それが終わるまで晩御飯は抜きよ！！」

「そんな殺生な?!」

「……なんか文句ある?」

「いえ、ありません……」

全く、留守番を任せたらコレか。  
リュウが自分から喧嘩を売ったのかは兎も角、何を如何したらこうなるのよ。

……はあ。これじゃ、買って来た釣竿はお預けね。





#### 第四話 普通の魔法使い（前書き）

これは霊夢が香霖堂で買い物してる時の話。

## 第四話 普通の魔法使い

霊夢が仕事道具を買いに行っている頃、俺は暇を持て余していた。今日の雑用は大体終わっているし、食料の買出しはまだ行かなくても大丈夫。

暇潰しに剣の素振りをしようにも、手元に剣がない。釣りに行くこうにも釣竿がない。

……何か他の趣味でも見つけないと、暇で死にそうになるな。

「お〜い、霊夢。居るか〜」

特にする事も無く縁側で呆けていると、空から黒いとんがり帽子に黒系の服に白いエプロンを付けた、ウェーブのかかった金髪ロングの少女がやって来た。

一週間ほどこの神社で暮らしているが、人が尋ねて来たのはこれで二度目だな。

……いや、あの女性は人じゃないから違うか。

「霊夢、居ないのか〜……って、お前誰？」

「俺の名前はリュウ。そう言うアンタは泥棒か？」

「いや、わたしは『普通の魔法使い』の霧雨 魔理沙だ」

普通の魔法使いって……。魔法使いに普通とか関係あるのか？ それに俺の記憶の中にある魔法使いは……少なくとも人じゃなかったな。

アレを人と認めたら、俺の中にある何かが崩れる気がするし。

「それで霧雨さん」

「魔理沙で良いぜ。霧雨さんなんて言われたら、背中がむず痒く為  
つちまう」

「それじゃ魔理沙。一体なんの用で此処に来たんだ？ 参拝  
ならちゃんと正面から来てくれないと」

「違う違う。参拝じゃなくて、霊夢に用事があつて来たんだ」

「霊夢は買出しに行ってるから居ないぞ」

「如何やらそうみたいだな」

俺は魔理沙に霊夢の外出を告げたが、彼女は帰らず縁側に座り込ん  
だ。

突然の訪問者だけど、特別追いつ返す理由も無いし此処はほつとい  
ても良いか。

そう考えた俺は、魔理沙を持って成す事も追いつ返す事もせず、ただボ  
ーっとする事にした。

「リュウ…って言ったか。お前は霊夢ん家で何してんだ？」

「俺は博麗神社（こゝろ）に居候（まゐ）していてね。だから留守番してるんだ」

「……居候（まゐ）ってマジでか？」

「そうだけど、驚く様な事か？」

「いや、普通驚くだろ」

如何やら魔理沙の中では、霊夢が居候を許可するイメージが無いらしく、かなり驚いた様子だ。

魔理沙と霊夢がどの位の付き合いなのか知らないけど、そんなに驚く事か？

俺は此処で暮らす様になってまだ一週間しか経ってないし、霊夢について魔理沙ほど知っている訳じゃないからイマイチ分からないな。

「お前、一体どんな手を使ったんだ？」

「どんなって……別に何もしてないけど」

「何もしてない訳無いだろ。あのメンドクサガリな霊夢の所に居候なんて……いや、メンドクサガリ屋だからこそ許可を出したのか？」

「……魔理沙の中にある霊夢のイメージってどんなんだよ」

「メンドクサガリ屋、怠け者、働かない博麗の巫女」

「酷い……」

怠け者って、確かに霊夢は俺に仕事を任せて一人お茶を飲んでる事が多いけど、ちゃんと仕事はしているぞ。

大体、俺にこの神社の仕事を全部任せられる訳ないんだし、『働かない博麗の巫女』は言い過ぎだ。

……まあ、メンドクサガリ屋なのは否定しないけどね。

「ところで、魔理沙はなにしに来たんだ？」

「わたしか？ わたしは新作のスペカが出来たから霊夢で試し撃ちをしようと思ってるな」

「……スペカってなに？」

「お前、スペカを知らないのか？」

「うん。初めて聞いた」

「そうか。……ならば、このわたしが特別にスペカに付いて教えてやるぜ！」

「はい？」

魔理沙は立ち上がってそう言って来たけど、只単にさっき言っていた新作とやらの試し撃ちがしたいだけなんじゃないのか？

……  
……  
……

スペカに付いて教えると言われたが、俺は自身は特に興味は無かった。

だと言うのに魔理沙は強引に俺を境内に連れ出し、スペカに付いて説明し始めた。

スペカについて色々と説明してくれたが、極端に言って仕舞えばこれは決闘紛いの遊びらしい。

魔理沙も『この世でもっとも無駄なゲーム』だと言ってるし。

……それを聞くと、尚更興味が無くなって来るな。

「それでスペルカードにも色々な種類があつて……って、ちゃんと話を聞いてるか？」

「まあ一応。とりあえず、相手に自分のスペカが全て攻略される前に撃ち落とせば勝ちって事だろ」

「撃ち落とすって言うか、相手の体力が尽きればこっちの勝ちだ」

「似た様なモノじゃないのか？」

「違うぜ。精神的な勝負と言う面もあるから、自分のガッツが切れても負けになるんだ」

「へえ」

ガッツが切れたら負けになるってのはなんとなく理解出来るけど、精神的な勝負って如何言う事だ？

まさか、相手のトラウマを思い出させる……なんて事はないか。そんな事をされたら、俺の力が暴走しかねないから止めて欲しいな。

「まあ、口であれこれ言っても分からないだろうし、手っ取り早く見せるか」

「そうしてくれ」

「今回は説明だから、私は三枚のスペカを使うぜ」

「なら俺は、その三枚全てを回避しければ良いのか」

「回避以外の手段で攻略出来るなら、それでも構わないがな」

「了解」

「それじゃ一枚目。：魔符『スターダストレヴァリエ』！」

魔理沙が箒に跨って空へ飛び、カードを手にそう宣言すると、彼女の周囲に大量の星屑が出現し一斉に降り注ぎ始めた。

一個の星屑の大きさは大した事無いが、降り注ぐ星の数が多い。

俺は魔理沙との距離を離して回避を試みるが、この姿では無傷の回避は無理みたいだ。

現に今も幾つかの星屑が俺の頬や服を掠めている。

「ほらほら。そんな避け方じゃいずれ当たっちゃまうぜ」

「それくらい、分かってる…って！」

一応あの星屑の軌道を把握してるんだけど、身体がその反応に追いついてくれない。

俺の敗北条件が、体力切れかガッツ切れだけだから多少当たっても大丈夫だけど、どうせなら一回も被弾しないで勝ちたい。

さっきの説明だと、掠めたりするのは被弾にはならないみたいだし、かすり傷は気にせずに避け続けるか。

多少のかすり傷は出来るものの、俺は必至になって魔理沙の星屑を避け続けた。

俺が避け続けていると星屑の勢いは段々と弱まっていき、少しすると星屑は完全に降り止んだ。



「……むう。意外と粘るな」

「そろどうも」

「なら、次のスペカだ！」

もう次のスペカを使うのか。何が来るのか分からないが、用心はしておかないとな。

魔理沙はさつき、スペカにも色々な種類があるって言ってたけど、今度のは如何言うタイプなんだ？

あの星屑みたいなのは、回避が面倒だから出来れば遠慮したいな。

「光符『アースライトレイ』！」

二枚目のカードを取り出し、そう宣言した魔理沙は何処からとも無く大量の小瓶を取り出し、上空からばら撒いて来た。

一体何がしたいのか分からず、その場で様子を窺っていると……地面に落ちたビンが割れ、其処から眩い光が一斉に立ち上って来た。

「な、なんだこれ?!」

俺は突然の出来事に驚いたものの、光は上に立ち上るだけで、星屑よりは軌道がはつきりしている。

はつきりしてはいるが……魔理沙が投げる小瓶の数が多く、ちょっと油断していると直ぐ隣りで光が出現するから心臓に悪い。……それでもまだ、さつきの星屑よりは避けやすいかな？

「フハハハッ！ ビンはまだまだあるんだぞ！」

「手加減なしかよ!!」

「勝負は常に非情なものだぜ!!」

「ぬわ〜!!」

どうやら魔理沙は手加減を知らない……と言っか、する気が無いらしい。

今も両手で抱えられるだけの小瓶を一齐に地面に落としてる。

そう言えば、地面に落ちた小瓶ってどうなるんだろう? もし破片が残ってたら……後で掃除確定だな。

「隙あり!」

「あぶなッ?!」

俺の隙を付いて投げられた小瓶は、俺の足元近くで炸裂した。

直ぐに後ろに跳ぶことで、掠りながらもなんとか回避出来たけど……

…あと少しでも遅かったら被弾してたな。

全く、戦闘中になに変な事を考えているのやら。そう言っつのは後で考えるべきだろ。

「惜しい! あと少しだったのに」

「いや、本当にな。アレは危なかった」

「さっきので『アースライトレイ』も切れたし、次で最後だな」

「やっとか……。この遊びって結構集中力使うんだな」

「わたしのはまだ回避し易い方だと思うぞ」

「……アレでか？」

「アレでだ」

スペカに初めて触れたからイマイチ信じられないんだが、コレ以上に回避し辛い弾幕ってなんだよ。

今でも精一杯なのに、コレ以上のは無傷で攻略出来る気がしないな。

「さて、次のカードで最後の訳だが……これはさっきの二枚とは一味違っぜ」

「あの二つも大分差があると思うけどな」

「それとも違っつて事だ。……それにコイツは回避出来ないと思っしな」

「……？ 如何言う事だ？」

「ソイツは喰らってからのお楽しみってな。……それじゃ行くぜ！！」

そう言うつと魔理沙は今まで乗っていた筈から降り、帽子の中から八角形の道具を取り出した。

そして、道具の反対の手からスペカを持ち

「恋符『マスタースパーク』！！」

さっきの二枚と同様に宣言した。

宣言した魔理沙は、八角形の道具を俺に向けて超極太のレーザーを放ってきた。

放たれたレーザーの速度は、今の俺の速度の遙か上に行く。  
今から回避出来るはずも無く、このままだと間違いなく直撃する。  
それにしても、このレーザーって生身で受けても平気なのか？ な  
んか危ない気がするんだけど。

……仕方が無い。アレを使うか。

「……でえあああああッ!」

回避出来ないと悟った俺は、力を解放してあのレーザーを受け止める事に決めた。

### 魔理沙 Side

わたしが放った『マスタースパーク』は、間違いなくリュウの奴に命中した。

命中した筈なんだけど、レーザーが当たる前に立ち上った赤い光が気に為る。

アイツが何らかの能力を使って、わたしの『マスタースパーク』を防いだって可能性もあるけど、生半可な能力じゃあれは防ぎきれない。

勝敗をはっきりさせる為にも、リュウがどうなってるのか確認した

いんだが……土煙が邪魔でよく見ないな。

「あゝもう！ 土煙が邪魔だな！」

視界の悪さに苛立ちを募らせていると、徐々に土煙が晴れていく。少しづつ煙が晴れていく中、わたしは煙の中に白髪の人様な何かを見つけた。

別に白髪が珍しい訳じゃない。ただ、ソイツの背中に赤い羽の様なモノが付いていたんだ。

普通の人間には羽なんて付いてないし、居るとしたらソイツはきっと妖怪に違いない。

わたしは何かの見間違いかと思い、眼を擦り再度確認をすると……其処にはリュウの奴がいた。

「あれ？ リュウ？」

「そうだけど……どうかしたか？」

「えっ？ あゝ……いや、なんでもない」

「……？」

……そうだよな。よく考えてみれば、今この神社に居るのはわたしとリュウだけなんだし、新種の妖怪があつた土煙の中に居るわけないよな。

それにしても、『マスタースパーク』を直撃した筈なのに無傷って如何言う事だ？

本当に直撃したのなら、もっと服がボロボロになっても良いと思うんだけど……。

「…なあ、リュウ」

「今度はなんだ？」

「お前、アレを回避出来たのか？」

「いや、直撃したよ。あの速度で放たれるレーザーの回避なんて出来ないうて」

「そう…だよな……」

リュウは直撃したって言うけど、イマイチ腑に落ちないな。

と言うか、直撃していてもリュウがピンピンしてるから、この勝負わたしの負けか？

……初心者に負けたって、物凄く腹が立つな。

「それにしても、あのレーザーとんでもない威力だな。まさかオラが倒されるなんて思わなかった」

「ん？ リュウ、オーラって何の事だ？」

「あ……俺の力とでも思ってくれ。説明すると長いし、今は境内の掃除が先だしな」

「掃除？」

「………周りを見れば分かるよ」

リュウに言われて境内を見渡してみると、割れたビンの破片が辺りに散らばっていたり、爆風の影響か木の枝が散乱していて境内が滅

茶苦茶になっていた。

スペカを使ったのはわたしだけど、此処まで滅茶苦茶になるとは思わなかったな。

いや、自分の魔法の威力に驚かされるぜ。

「このままにしてたら霊夢に怒られるし、さっさと掃除を始めるか」

「それって、わたしもしないと駄目なのか？」

「当然だろ。元凶なんだし」

「……あ、わたし急用を思い出したから帰るな」

「へっ？」

「じゃあなリュウ！ 掃除頑張れよ！」

「ちよっ?! 魔理沙!？」

わたしは箒に跨り、リュウを置いて急ぎの用を片付けに向かうのだった。

決して掃除が面倒だから逃げ出した訳じゃないぜ。勘違いしないようにな。

魔理沙 Side out

## 第四話 普通の魔法使い（後書き）

### 次回予告

夏のある日、幻想郷に突如紅い霧が発生した。

紅い霧は太陽の光を遮り、幻想郷に寒い夏が訪れる。

この異変にリユウと霊夢が立ち上がり、二人は湖に浮ぶ紅い屋敷へと向かった。

竜が辿り着いた幻想郷、第五話『紅霧異変』。

紅い霧の中を巫女と竜が駆け抜ける…。



**第五話 紅霧異変（前書き）**

約一週間ぶりの更新。

今回は霊夢視点です。

## 第五話 紅霧異変

私は紅い月が照らす中、紅を基調にした屋敷の庭で空を見上げていた。

地面には、何かの爆撃を受けた様なクレーターが無数に出来ていた。そのクレーターの中には、蝙蝠の翼を生やした少女と銀髪のメイドも居るが、彼女達はクレーターから出ようとはせず、私と同じ様に空を見上げている。

私達の視線の先には何もいないけど、はっきりと強大な力を持った何かが居るのを感じる。

巫女として今まで何度も妖怪には会って来たけど、これ程までに強大な力を感じたのは数える程度しかない。

そのまま空を見上げていると、上空から腕に空色に光る四対の羽を持つ琥珀色の鱗の竜が降りて来た。

降りてきた竜は、攻撃する訳でも喋る訳でもなく、ただ静かに私達を見ている。

あの竜が何故居るのか分からないけど、紅い月を背景に空に浮ぶ竜の姿は凄く幻想的に見えた……。

……

……

……

「　　って言う夢を見たのよ」

「……………それを聞いて、俺は如何反応すれと？」

「別に如何とでも」

季節が変わり、春から夏となり半月ほどが経った頃。

私とリュウは神社まいちのじゅうかの仕事を終え、何時もの様に母屋の縁側でお茶を飲んでいた。

夏に入ったと言うのに、幻想郷の空を紅い霧に空を覆われている所為で、今年は薄暗く寒い夏と為っていた。

「ところで霊夢。いい加減、この霧なんとかしない？」

「なんとかねえ」

「異変を解決するのが巫女の仕事だろ？　そろそろ動かないと里の人間の信用を失くすと思うんだ」

「……………只でさえ、参拝客が居ないのに信用を失うのは困るわね」

「だろ？　俺も手伝うから異変解決に行こう」

「それは良いけど……………なんでそんなに積極的なのよ」

「…俺、寒いのが苦手なんだ」

「そんな格好してるからでしょ」

「似た様な格好をしている霊夢に言われたくない!!」

「アンタのよりは暖かいわよ」

リユウの文句を聞き流しつつ、手元に置いてあったお茶を飲み干し、異変解決の為の準備を始めた。

このまま放置して外の世界の人里に妖霧が届いても困るから、そろそろ動かないと駄目かな〜って思ってたんだけどね。

……それにしてもあの夢、実際の光景の様な現実味があったわね。

それにあの竜……まさかとは思うけど、変身したリユウじゃないでしょうね？

「……………」

「ん？ どうかしたか霊夢」

「いや、アンタはどうやって私について来る気なのかなって」

「風の力を使って飛んでいくから大丈夫だよ」

「あっそ。…それなら、自分の身は自分で守りなさいよ」

「分かった」

……こう言うやり取りをしていると、あの夢に出て来た竜とは思えないわね。

と言うか、夢に出て来た竜がこいつだとしたら、アレは予知夢って事になるじゃない。

私にそんな能力は無かったはずだし、アレが予知夢の線は薄いのよね。

「…………ま、いつか」

アレが如何言う意味を持つのか分からないけど、今は妖怪退治に専念しよう。

今回は久々の妖怪退治なんだし、派手に暴れようっと。

……………

……………

…

準備を終えた私とリュウは、神社から飛び立ち『霧の湖』を目指していた。

あの湖を目指している理由は特に無い。強いて言えばなんとなく。ただの勘でしかないけど、私の勘は良く当たるから今回の犯人も湖に居る筈……………なんだけど、霧の湖に妖怪なんて住んでたかな？

あそこは年中霧に包まれてるから、暮らしていくには適してないと思っただけど。

「ところで霊夢。妖怪退治って何をするんだ？」

「そのまんまの事をするだけよ。異変を起している輩を倒す、ただそれだけ」

「……………本当にそのまんまなんだな」

「昔は完全に退治してたみたいだけど、今はスペルカードがあるし多少痛い目を見てもらうだけよ」

「スペカなら相手を殺さないと？」

「基本的にはね」

妖怪は兎も角。人間が相手の場合、当たり所が悪いと死ぬ可能性もあるけど……まあ、リユウなら大丈夫でしょ。根本的に人じゃないし。

……そう言えば、妖怪は精神的な生き物だけど、竜はどうなるのかしら？

コイツは私達の理とは違う生物だし、弾幕ごっこじゃ倒せないかも。今はルールに乗っ取って戦うだろうけど、暴走したらそんな事言っ  
てられないか。

「そう考えると結構厄介ね」

「なにがだ？」

「アンタの存在がよ」

「なんで俺?!」

「自分の胸に手を当てて、よく考えなさい」

「うーむ……」

私の言った事を真に受けて、リュウは手を胸に当てて考え始めた。  
考えるのは良いけど、考えすぎて木にブツかっても知らない、

ゴンッ！

「あいだッ！」

少し遅かったみたいね。

でも、考え始めて直ぐに木にブツかるって言うのも、ある意味凄いわね。

それだけ集中していたのか、只単にドジなだけか。

……リュウの場合、両方の可能性があるからなんとも言えないわね。

「いたた……。なんでこんな所に木があるんだ？」

「前方の注意を怠ったアンタが悪い」

「そうは言うけど、こつ暗いと前が見えないだろ」

「……まあ確かに」

昼間に出発すると悪霊が少ないから、今回は夜に出てみたんだけど……こつ暗いとドツチに進んでるのかも分からないわ。

まあ、飛び回っていれば、その内元凶の元に着けると思うから良いけど。

そんな調子で空を飛んでいると、

「ねえ、貴方たちは食べてもいい人間？」

黒い服を着た、黄色い髪に赤いリボンを巻いた少女と出くわ

した。

いきなりこんな事を聞いてくる辺り、目の前に居るのは間違いなく妖怪ね。

見た目は幼いし、大した力は感じないんだけど……髪に巻いているのは、もしかしてお札？

私はあんな妖怪に会った事ないから、恐らくは先代以前の巫女が封じたんでしょう。

「ねえ、貴方たちは食べてもいい？」

「いや、俺たちを食べたら腹を壊すぞ」

「そーなのかー」

「……なに真面目に返事してるのよ」

「なんとなく？」

「やれやれ……」

「食べれないなら別にいいや。他の所に行こう」

それだけ言うと、黄色い髪の妖怪はそのまま何処かへフヨフヨと飛んでいった。

どうやら今回の件とは関係ないみたいだけど、なんか物足りないわね。

普段は出会った妖怪は片っ端から退治してるから、今回みたいに戦わずに済むのはイマイチね。

「それにしても、あんな小さい子が人を食べるなんて想像出来ない



な  
」

「あんなんでも妖怪よ。驚いたりする事じゃないでしょ」

「でも、あの子が人を食べてるとは思えなくて」

「幻想郷じゃ珍しくないわよ」

「すごいな」

「アンタは早く慣れなさいよ」

「努力するよ」

そんな事を話しつつ、私とリュウは霧の湖に向かって暗い夜道を飛んでいった。

道中で妖精や毛玉に出会うけど、大した力もないし適当に撃ち落とす。

はあ。こんな雑魚じゃなくて、ちゃんとした勝負になる妖怪と戦いたいわ。

## 第六話 湖上の氷精（前書き）

今回はリュウ視点ですが、次回からは出来る限り視点変更はせずに行きたいです。

……とか言いつつ、直ぐに霊夢視点とかになりそう。

## 第六話 湖上の氷精

幻想郷を覆う紅い霧を打ち払うべく、博麗神社を飛び出した俺と霊夢。

霊夢の直感を頼りに霧の湖に辿り着いたんだが

「…………迷った」

霊夢とはぐれ、道に迷ってしまった。

この湖は名前の通り霧で覆われているから、周囲の確認が出来ないのが難点だな。

俺はちゃんと飛んでいた積もりだったんだけど、気がつくと霊夢の姿はないし、俺は何処を飛んでいるのかわからなくなってしまった。

…………別に俺が方向音痴って訳じゃないぞ。本当だぞ。

「しかし、如何したもんかな？」

このまま立ち往生していても仕方が無いんだが、何処に行けば良いのかわからない。

霊夢と合流出来れば一番良いんだけど、彼女が俺の事を捜していると思えないな。

となると、俺の方が霊夢を見つけないといけないのか。

「霊夢の事だから、既に元凶の元に辿り着いてそうだな」

それはそれで問題ないけど、折角ついて来たんだから解決する様子を見ておきたい。

…………その為には霊夢を捜すしかないか。

「俺にも優れた直感が有れば良かったんだけど、無い物強請りしても仕方が無いか」

そう言い捨てた俺は、霧の中で霊夢を捜す為に動き始めた。動き始めたのは良いが、周りは相変わらず霧ばかりで何が有るのかすら把握出来ない。

下が湖だから、目の前にいきなり巨木が出現したりはしないだろうけど、やっぱり不安になるな。

この霧を一気に晴らす事が出来れば色々助かるんだけどな。

「……『メタ''ストライク』で、この霧を切り裂いてみようかな？」

あの技は風属性だし、アレだけ巨大な剣なら剣風だけでも霧を吹き飛ばせそうだ。

序でに、この紅い霧の元凶も切り飛ばせたらかなり楽んだけど……それは霊夢に怒らそうだな。

……異変を解決したのに怒られるってなんだよ。

でも、霊夢を怒らせると食事抜きとかありえるから、あんまり怒らせたくないな。

「……うん。『メタ''ストライク』は止めて、牙流風<sup>ガルフ</sup>辺りにしておこう」

俺は早速魔法を発動させようとしたが、今の姿では使えない事を思い出した。

スペルカードを作っている時に分かった事だけど、どうやら今の姿でもランク2の魔法は使えるみたいだ。

でも、牙流風<sup>ガルフ</sup>みたいなランク3の魔法は無理だった。

ランク3に付いては、今まで通り竜変身<sup>トランス</sup>しないと発動出来ないらしい。

……正直な話し、今の姿で魔法が発動するだけでも凄い事なんだが。今までは、竜変身トランスしてないと魔法が使えなかったからな。この辺りは力が一つになった恩恵って事なのかな？

「まあなんでも良いか。さっさとこの霧を吹き飛ばそう」

俺は牙流風ガルフを使うのを諦め、ランクが一つ下の羅風ラフを使う事にした。右手に風の力を溜め、程よく溜まったところで腕を振り上げ

「羅風ラフ！」

溜めた力を解き放った。

解き放たれた力は旋風となり、俺の周囲の霧を吹き飛ばし視界が利く様になった。

でも、吹き飛んだのが俺の周りだけだから、この湖の全容を把握出来た訳じゃない。

それでも、さっきよりは大分マシになったのは確かだ。

「キヤアアアアッ?!」

「……『キヤア』?」

俺の耳に聞き慣れない悲鳴が届き、辺りを確認すると……緑の髪を左側だけ黄色いリボンで結び、白のインナーと青い服に青いスカートをはいた、背中に二枚の羽を持つ少女が風に吹き飛ばされていた。……周りの状態を考えると、俺の魔法に巻き込まれて吹き飛ばされたんだろうな。

でも、妖精ならこの程度の風なんともないと思うんだが、少し加減を間違えたのかな？

ドボーンッ！

「あ、湖に落ちた」

このまま無視して先に行くのも後味悪いし、今回は助けに行くことにしよう。

そう考えた俺は、湖に落ちた少女を救出しに自ら湖に入ってしまった。

……

……

…

「た、助かりました……」

「気にするなって」

湖に落ちた少女を助けた俺は、彼女を近くの岸にまで運んだ。

多少グツタリしているものの、水を大量に飲み込む前に救出出来たので意識ははっきりしていた。

「ところで、君はあんなところで何をしていたんだ？」

「友達を捜していたんです」

「友達？」

「はい。青を基調にしたワンピースを着て、氷の羽に髪に青いリボンをしているんですけど……見かけませんでしたか？」

「いや、俺は会って無いけど」

「そうですか……」

この子の友達に会っていない事を告げると、彼女はがっかりした様子で肩を落とした。

視界が利かない霧の中に入ってまで捜していたとなると、よほど友達が心配なんだな。

「…もし良かったら、俺がその子を探そうか？」

「え、良いんですか?!」

「まあ、罪滅ぼしも兼ねて」

「はい?」

「あ、コツチの話だから気にしないで。それで、その子の名前は?」

「チルノちゃんって言います。もし会えたら『何時ものところで待ってる』と伝えて下さい。大ちゃんからの伝言と言えば伝わりますから」

「了解。それじゃ待っててね」

「はい」

俺は彼女と別れ、再び霧の中へと飛び込んでいった。  
それにしても氷の羽の妖精か……。どうやって飛んでいるのか謎だ  
な。

案外、羽は只の飾りなのかもしれないな。

……

……

…

さっきの妖精と別れ、霊夢探しとチルノちゃん探しを始めた俺だが  
……探索は結構難航していた。

魔法を使って霧を吹き飛ばしても、視界が良くなる範囲はそんなに  
広い訳じゃない。

何もしないよりはマシだけど、ドツチに進んでいるのか分からない  
事にはわりは無い。

「…霊夢の奴、もう元凶の元に辿り着いたかな？」

そう呟くものの、辺りに争っているような物音は聞こえない。

こつも音が聞こえないとなると、本気で霊夢の身が心配に為って  
くるな。

俺は幻想郷こゝろに来てまだ日が浅いから、霊夢の実力がイマイチ分  
からないけど……やっぱり心配だな。



「早いとこ霊夢を見つけないとな」

「その変なの止まれ！」

「ん？ 俺の事か？」

突然呼び止められた俺は、声が聞こえて来た方に振り向いた。

其処には、妖精から聞いた衣服を着て背中に氷の羽を持つ少女が、自分の腰に手を当てて浮んでいた。

あの妖精の話聞く限りだと、あの子が『チルノちゃん』で間違い無さそうだな。

霊夢より先に見つけられたのは、運が良かった……と言って良いのかな？

「おい、お前！ ここはあたいのなわばりよ！ 直ぐにどっか他所に行け！」

「そんな事言われてもな……。俺は君を捜してたんだし」

「あたいを探してた？ ……………はっ?! もしかして、あたいを倒して最強の座を手にようって訳ね?!」

「…………君は何を言っているんだ？」

「そんな事はさせない！ 喰らえ、氷符『アイシクルフォール』！」

「いきなりかよ?!」

何を如何勘違いしたのか知らないが、妖精は左右から氷の塊を俺に

向かって放って来た。

放って来たんだけど、如何言う訳か正面には弾幕が張られていなかった。

一瞬畏か何かと警戒したけど、あの子の様子を見る限りだとそれは無さそうだ。

俺は左右から来る弾を避けつつ、氷の妖精との間合いを詰め、力を弾に見立て連続で叩き込んだ。

「んぎゃッ!?!」

「……少しは落ち着いたか?」

「……この程度じゃあたいはやられたりしない!」

「いや、それより俺の話を」

「次はこれよ! 凍符『パーフェクトフリーズ』!」

「頼むから聞いてくれよ!」

俺の叫びも空しく、氷の妖精は次のスペルカードを発動させた。

今度のカードはさっきのと違い、様々な色の弾をばら撒いて来た。

なんの法則も無くばら撒かれたけど、この程度なら慌てる必要は無いな。

今度は間合いを詰めないで、離れたところから弾を放っていれば大丈夫だろう。

「ふふん、甘いわね」

「……?」

「今だ、凍れ!!」

あの子がそう言うと、さっきまでバラバラに飛んでいた弾幕が凍り付いた様に一斉に止まった。

お陰で俺の周囲は動きの止まった弾だらけになっている。

動きを止めたのは凄いと思うけど、止まっている弾なら避けるのは簡単だな。

一応あの子も別の弾幕を放ってはいるけど、距離をとっているから回避は難しくない。

「なんで当たらないのよ!」

「だって避けやすいし」

「むう。それならこれは如何だ!」

「今度はなんだ?」

「動け!」

氷の妖精がそう言うと、止まっていた弾が不規則に動き始めた。

動き始めたけど……弾の速度はかなり遅いから、落ち着いていれば回避は楽なものだ。

早いとこさっきの子の伝言を伝えたいし、霊夢を捜さないと行けないからこれで決めるか。

俺はポケットに入っていたスペカを適当に取り出す。

一度カード名を確認して

「旋撃『烈風撃』!」

取り出したスペカを宣言した。

このタイミングで宣言するとは思ってなかったのか、妖精は動きを止めて身構えた。

なんで止まったのか知らないが、俺からすると動きが止まってくれたのは好都合。

俺はあの子との間合いを詰め、右腕に風を纏わせる。

そして風を纏った掌で、彼女のおなかを軽く押し出した。

「ん？ なんともない……って、うわッ?!」

押し出された妖精は、突如発生した突風に煽られて吹き飛ばされた。見た目が幼い少女と言う事もあって、かなり手加減して叩き込んだけど……予想以上に風が強いな。

この技って、其処まで強い風を発生させたりしない筈なんだけどな……とりあえず、今後はもうちょっと加減して使うか。色々危ないし。

「なに今の?! 弾が飛んでこなかったわよ!？」

「だって弾幕じゃないし」

「そんなのヒキョーよ!」

「……そんな事言われてもな」

俺が作ったスペカは、元々俺が使える技や魔法を元にしてるから弾幕に為らない物が多いんだよな。

ちゃんとした弾幕に出来た奴もあるけど、威力が高い技が多いんだよ。

バル系の魔法なら、まだ弾幕っぽいんだけど……アレも微妙な線か。

「ヒキヨーな技を使ったから、今回はあたいの勝ちね」

「なんでそうなるの?!」

「アンタがヒキヨーな技を使ったからよ!」

「いやいや、霊夢は大丈夫だって言ってたけど?!」

「そんなの知らない!」

だ、駄目だこの子。話しが全然通じない。

別に勝ち負けを気にしてる訳じゃないんだけど、話しを聞いてくれないしな。

あの妖精の伝言を伝えるだけなのに、なんでこんな面倒な事になるんだ……。

「分かったら早く此処から」

「やっと見付けたわよ、リュウ。全く、何をやってるのよ」

「あ、霊夢」

あの妖精を如何しようか悩んでいると、霊夢がこっちにやって来た。正直な所、俺を置き去りにして先に進んでいると思ってたからちよつと驚いた。

「ほら、先を急ぐんだからさっさと行くわよ」

「それは分かってるんだけど……」

「分かってるなら早くする」

「　　　だあー！　あたいを無視するな！！」

「なによ。コツチは急いでるんだけど」

「その変なのを最初に見つけたのはあたいよ！　後から来てしゃしやり出ないでよね！」

「なに訳の分からない事を言ってるのよ」

「分からないってなによ！」

なんだかへんな事に為って来たぞ。

あの妖精は恐いもの知らずなのか、霊夢にイチャモン付けるし。

霊夢は霊夢で、手にお札を挿んで何時でも投げられる様にしてるし

……一触即発な空気に為りつつあるぞ。

此处で時間を食っている訳にもいかないし、まずはあの妖精をなんとかしてみるか。

「あゝちよつと良いかな？」

「…なによ」

「大ちゃんからの伝言で『何時もの所で待ってる』だって」

「それ本当？」

「うん。大ちゃんは君の事を捜してたみたいだから、早く行ってあげたら？」

「分かった、そうする」

落ち着いて話せば分かる子なのか、氷の妖精は急いで飛んでいきこの場を後にした。

これでいきなり襲い掛からなければ楽なんだけどな。あの性格じや無理そうかな？

「…なんなのアレ？」

「気にしたら負けなんじゃない？」

「まあ良いわ。さっさと行くわよ、リュウ」

「了解」

色々と遭ったけど、なんとか霊夢と合流出来た俺は、今後こそ元凶の元へと向かうのだった。

……それにしても、烈風撃なんかの体術は卑怯なのかな？

もしそうになると、通常時に使えるスペカがかなり制限されるんだよな。

一番マシなのは『散烈拳』くらいか。手元に剣があれば『せんぎり』も使えたんだけど…まあ、仕方が無いか。

## 第七話 華人小娘

霧の湖で迷子になった俺は、なんとか霊夢と合流することが出来た。その途中で出会った氷の妖精に、行き成りヒキョー者呼ばわりされたけど……風を纏って殴るのは卑怯なのか？ ……この騒動が終わったら、もう一度スペカの構成を考え直してみよう。

深い霧の中を霊夢と二人で飛んでいると、霧の向こうに紅を色調にした屋敷が見えてきた。

湖から立ち込める霧の所為でまだ輪郭しか見えないが、その建物が紅い事だけははっきりと分かる。

この霧の中でもはつきりと色が分かるなんて、あの屋敷を立てた人物はどれだけ紅が好きだったんだろ。

「アレが、今回の異変の犯人が居る屋敷ね」

「その根拠は？」

「『紅』繋がり」

「……無理矢理すぎると思っけど？」

「うっさいわね。私の直感を信じなさい」

「信じてない訳じゃないけど、根拠が余りにもずさんだから」

「根拠なんて如何でも良いのよ。間違ってたら別の犯人を捜すだけだし」



「……異変解決って、そんな感じで良いんだ」

「そうよ。分かったら、さっさと突撃するわよ」

そう言うと霊夢は、あの紅い屋敷目指して先へと進んでいった。

俺も彼女を見失わない様に慌てて後を追い掛けた。

……  
……  
……

屋敷に近づくに連れて、妖精や毛玉みたいなからの攻撃が激しくなってくる。

俺は放たれる弾幕の厚さに驚いているが、前に行く霊夢には大した事ではないみたいだ。

現に霊夢は、妖精達の弾幕の隙間を掻い潜って、逆に撃ち落として  
いる。

俺は避けるで精一杯で、彼女みたいに上手く撃ち落とす事が出来な  
いでいる。

言い訳みたいになるが、元々俺はこう言った撃ち合いの経験が殆ど  
無い。

あの世界では剣を使って戦っていたし、トランス竜変身した後は肘打ちやブ  
レス攻撃をしていた。

魔法も確かに存在しているけど、それ等は仲間達に任せてたな。

それに俺の知っている魔法も、魔理沙の様スペカみたいなのと違う

から、回避の参考には為らないんだよな。

「ちょっとリュウ。さっきから後ろでフラフラ飛んでるけど、そんな調子じゃ落とされるわよ」

「解ってるけど、まだ色々と慣れなくて」

「だったら今の内に慣れておきなさい。幻想郷で暮らす心算なら尚更ね」

「なんとか頑張ってみる」

「今すぐ慣れなさいよ」

「それは無理だって」

霊夢は無茶振りしてくるけど、流石にこの短いやり取りの間に慣れるのは無理だって。

幾ら俺が竜だからって、出来ない事も結構あるんだぞ。

空を飛ぶのはまだしも、弾幕の回避は身体が付いてこれないから結構キツイし。

眼で弾幕の軌道は把握出来てるんだけど、身体の方が間に合わないんだよな。

……この辺りは経験を重ねて、慣らしていかないと駄目か。

「其処の二人、止まれ！」

「ん？」

俺達を呼び止めたのは、何処かの民族風の衣装を着て、『龍』と言

う文字が彫られた星型のバッチの付いた帽子を被った、紅い長髪の少女だった。

少女なんだけど……こんな所に人間の少女が居るわけないよな。そうになると、彼女も妖怪って事に為るんだけど……見た目が普通の人間と大差ない。

この世界の妖怪って色々と変わってるよな。見た目的な意味で。

「貴方達、侵入者ね。大人しく立ち去るなら良し。立ち去らないと言うのなら……此処で排除します！」

「はいそうですね、こっちもやられる心算はないわよ」

霊夢がそう言うと、二人は弾幕を放ち戦い始めた。

俺は邪魔に為らない様に、少し離れたところで様子を見る事にした。

紅い髪の少女は、青い弾をばら撒く様に飛ばしたり、移動してから自分の周囲に赤い弾を飛ばしてくる。

霊夢は弾幕の隙間を掻い潜り、大量の札や針を飛ばし確実に命中させている。

彼女の弾幕は紅い髪の少女の様に周囲に広がらないが、射線に入ってしまうえば回避が難しい。

そんな弾幕を喰らい続けた少女は

「こうなったら……華符『芳華絢爛』！」

1枚目のスペカを取り出し宣言した。

宣言した少女は動きを止め、赤と黄色の弾幕を全方位に放ってきた。波状攻撃の様に放たれるソレは、少し離れたところに居る俺にも襲い掛かって来る。

弾幕の軌道を読んでなんとか避けているけれど、放たれる感覚が短

いから避けるのがかなり辛い。  
こう言うのを見ると、妖精が放ってきた弾幕が可愛く見えるから困る。

一方霊夢は、最低限の動きで弾幕を掻い潜り回避していた。  
弾の方も、相手が動かなくなったからさつきよりもスムーズに当たっている。

幾らごっこ遊びとは言え、アレだけの弾幕を眉一つ動かさずに回避出来るのは凄い事だと思う。

そのまま攻撃を続けていると、突然少女の弾幕が止んだ。

「くそ、こうなったら背水の陣だ！」

紅い髪の少女はそう言い捨てると、わき目も繰らず一目散に後退していった。

……それにしても『はいすいの陣』か。懐かしいな。  
頑張っただけなのに、結局使いこなせなかったけ。

「あんだ一人で『陣』なのか」

「いや、一人でも『はいすいの陣』は使えるぞ」

「あれ、そうだったけ？」

「うん。でも、アレを使うと防御力がゼロになるから使い所が難しくて」

「……それはリュウのスキルの話でしょ」

「違うの？ 俺はてつきり、彼女も同じスキルが使えるもんだと」

「そんな訳無いでしょ」

霊夢にツッコまれつつ、俺達はさっきの少女の後を追いかける事にした。

彼女が逃げた先に、あの紅い屋敷もあるし、倒すついでに屋敷に乗り込む心算の様だ。

……いや、乗り込むついでにあの子を倒すのか？ まあ、どっちでも良いか。

……

……

…

「追って来るなよ〜！」

「別にアンタを追いつけてた訳じゃないわ。私達は、あの紅い屋敷に用があるの」

「あの屋敷には何も無いって」

「……何もねえ」

少女の背後に聳え立つ紅い屋敷。

ただの紅い壁の屋敷である筈なのに、周りの雰囲気と相まって物凄い存在感がある。

……それに、この屋敷には何か潜んでいるみたいだ。  
俺は霊夢みたいに勘が良い訳じゃないけど、長い事戦い続けてたから何となく解る様になった。  
これだけの雰囲気醸し出しておいて、何も無いって言うのは流石に信じられないな。

「それはコツチで判断するわ。だから其処を退きなさい」

「そんな事したら、私がお嬢様に怒られるじゃない」

「知った事じゃないわね。如何しても退かないって言うなら、無理矢理にでも退かせるだけよ」

「……さつきと立場が逆になっているのは気のせいだろうか？」

「男が細かい事を気にすんじゃないの」

「お仕置き回避の為に、此処は絶対死守してみせる!!」

そう言うと紅い髪の少女は、霊夢に向かって波状型の弾幕を放つて来る。

波状型と言っても、さっきのスペカよりも弾幕は薄く、俺でも簡単に回避出来る様な品物だ。

この程度の弾幕、霊夢も当然の様にかわし、彼女に大量の針を放つて行く。

今のままでは不味いと判断したのか、彼女はポケットから一枚のカードを取り出した。

「虹符『彩虹の風鈴』!」

彼女が宣言したスペカは、様々な色の弾が渦を描きながら全方位に放つと言つものだ。

放たれる弾幕は、見る角度によつては虹にも見えるが……個人的にはさっきの方が脅威だったかな？

密度で言えば、この弾幕よりもさっきの方が厚かった様に思えるし、隙間もこつちの方が多い。

そんな事を考えていると、霊夢が彼女のスペカを破っていた。

「また破られた!？」

「この位余裕よ。さあ、次のカードを宣言しなさい。次も破つてあげるから」

「ぐぬぬ……」

「門番さ〜ん!」

「ッ?! み、皆さん。来てくれたんですか!？」

屋敷の方から声が聞こえて来たと思つたら、赤いメイド服を着た六人の妖精がやって来た。

なんでメイド服を着ているのか物凄く疑問だけど、これは援軍登場つて事だよな。

妖精くらいなら霊夢だけでも大丈夫だろうけど、俺も加勢した方が良いのか？

「霊夢。俺も手伝おうか？」

「別に良いわ。アンタは其処で見てなさい」





今度彼女が宣言してきたスペカは、様々な色の弾を全方位にばら撒くと言うものだった。

なんの法則性も無くばら撒かれる弾は、弾幕に大きな隙間を作るが弾の軌道が読みにくく厄介だな。

……まあ、そう感じているのは俺だけで、霊夢には何の問題も無いようだ。

現に今も霊夢は余裕で回避して、自分の弾を彼女に当てているし。霊夢の場合、弾の軌道が読めていると言っか、何が来ても動じないって感じだな。

只単に興味がないだけって気もするけど、此処まで冷静に動けるのも凄いな。

「これで終わり！」

「うわぁー！」

気がつくのと、霊夢は彼女のスペカを攻略し終わっていた。

どうやらさっきのが最後だったらしく、彼女は地面に大の字に為って倒れた。

結局霊夢は一枚もスペカを使わずに、門番と呼ばれた少女のスペカを攻略していた。

俺だったら何枚か使っただし、この辺りは俺と霊夢の実力の差かな。

「さて、通させてもらおうわね」

「済みません、お嬢様」

「……終わってみれば圧倒的だったな」

「当然でしょ。寧ろリュウが心配し過ぎなのよ」

「そりゃ、霊夢は大切な人だし。心配するのは当然だろ」

「……莫迦な事言つてないで、さっさと行くわよ」

「えっ？ 俺、今変な事言つた？」

「言つた言つた。だから早く行くわよ」

霊夢はそれだけ言つと、ドンドン先へと進んで行つた。

それにしても、俺そんなに変な事を言つたかな？ 居候とは言え一緒に暮らしているんだし、霊夢が怪我をしないか心配するのは当然だと思つんだけど。

……もしかして、言い方が変わったのか？ でもこの場合は、なんて言えば良いんだ？

「うゝむ……」

「ちよつとリュウ！ 先を急ぐんだから、早く来なさいよ！」

「あ、ごめん！」

……とりあえず、ここら辺の事も異変が片付いた後で考えれば良いか。

今は紅い霧をなんとかするかする方が先だしね。

## 第七話 華人小娘（後書き）

オマケ

全く。リュウの奴、いきなり何を言い出すのよ。

私の事を心配しだしたと思ったら、突然『大切な人』だなんて訳が分からないわ。

第一、私の心配をするよりも先に自分の心配をしなさいって。

あの門番の弾幕に何度か落とされかけてた癖に、如何して私の心配をする余裕があるのよ。

まあ、アイツは人じゃなくて竜な訳だし。多少落とされた程度なら大丈夫な気がするわ。そこらに居る妖怪だって、只のごっこ遊びじゃ死なないんだし。

……それにしても、あんな事言われたの初めてだったな。

リュウの事だから、何も考えないで適当に言っただけって可能性も強いけど。

……でもまあ、悪い気はしないかな。

「待ってくれよ霊夢」

「遅いアンタが悪い」

「酷いな」

コイツの真意は如何であれ、今は妖怪退治が先決。

こんな異変さつさと片付けて、布団に入って早く寝たいわ。



## 第八話 知識と日陰の少女

門番を撃退し、紅い屋敷に入った俺と霊夢。

屋敷の内装も外観と同じく紅を色調にしているが、灯りがロウソクだけだから全体的に暗い印象を受ける。

今の時刻が深夜だからかもしれないが、もう少し明るくても良いと思う。

「それじゃ、私は左側を調べるから、リュウは右側を調べてきて」

「へっ？ 二手に別れて調べるのか？」

「そっちの方が効率良いでしょ。それじゃ頼んだわよ」

霊夢はそれだけ言うと、さっさと左側を調べに行ってしまった。

何か一言かけようと思ったのだが、特に言葉も思いつかず、そのまま右側を調べに行く事にした。

よう。

仕えてる妖精でコレだから、主はもつと凄いだろっな。

……最悪の場合は、竜の力を使うしかないか。

霊夢も居るんだし、暴走しても多分止めてくれるだろう。

でも、暴走するような竜は使いたくないな。

出来る事なら『ジャブジブ』や『ナイト』辺りでケリを付けたいところだ。

「って、なんだこれ？」

屋敷の中を彼方此方調べていると、地下への階段を見つけた。

俺はこの屋敷に地下室は無いモノだと思っていたから、この階段の発見は予想外だった。

まだ探索していない部屋もあるけど、犯人が下に居る可能性もあるし、まずは地下の探索を済ませよう。

そう考えた俺は、階段を降りて一人地下の探索を開始した。

地下に降りてまず驚いたのは、その広さだった。

俺はてつきり部屋が一室あるだけだと思っていたんだけど、階段を降りた先にあつたのは長い廊下だった。

場所が地下だから当然窓はなく、廊下を照らすのは壁に備え付けてあるロウソクの灯りだけ。

その所為で、この廊下は一階よりも薄暗く不気味な感じがする。

とは言え、この程度の不気味さで恐れるほど生易しい経験はしていない。

あの世界での旅で、此処以上に暗い場所や不気味な場所を探索して来たんだ。この程度ならまだ優しい位だ。

……不気味なところは本当に不気味だからな。変な度胸はついた気

がするよ。

「ほんとあの場所はきつかったな……って、今は思い出に耽っている場合じゃなかった。早く探索を終わらせないと」

頭を切り替えた俺は、薄暗い地下の廊下の探索を開始した。

その道中でまたメイド妖精達に襲われるが、苦戦しつつなんとか撃退して行く。

次に団体で来たらスペカを使おうか考えていると、前方に大きな扉を発見した。

ただの地下室の扉にしては大きく、地下牢にしては扉のデザインが豪華な気がする。

他に地下に有りそうな部屋を考えるけど、特に思い浮かばず。

結局、何も考えずにその部屋に入る事にした。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

俺が扉を開けると、其処には大量の本とそれを納める大量の棚があった。

この見た感じからして、恐らく此処は屋敷の図書館と言った所なのだろうか。

……正直な話、此処まで大量の本を見た事が無いので軽く引いた。

本を納める棚の一つ一つがサイズが大きいし、其処に収まっている本の数もまた凄い。

この部屋がどれだけ広いのかわからないけど、よく此処まで集めたに関心するよ。

でもこの本って管理は如何してるんだろ？ これだけ多いと、一冊無くなっても分からないんじゃないのか？

「……一冊くらいなら持って行ってもバレナイかな？」

「持っていかないでー」

「うおッ?! 誰だ!?!」

突如上から声が聞こえ、慌てて上を見上げると紫のラインが入ったワンピースに、薄紫の帽子とカーデガンを来た紫色の髪の少女が浮んでいた。

見た目は完全に人なんだけど、門番の例もあるし、彼女も人間じゃないんだろうな。

なんでこうまで人型の妖怪が多いんだろ。何か意味でもあるのかな? ……いや、そんな事を言い出したら俺も人型の竜になるのか。

「今、私の本を持って行くとか聞こえたんだけど?」

「確かにそう言ったけど、俺の本来の目的はこの屋敷の主探しかな」

「あら、レミイに用事なの」

「(レミイ?) ……ちょっと霧を止めて欲しくて」

「そう。だったら貴方を会わせる訳には行かないわね」

「出来れば穏便に済ませたいんだけど……」

「無理に決まってるでしょ。あの子我が俣だもの」

「やいですが…」



「……ところで、貴方だね？」

「俺の名前はリュウ。ただのリュウだ」

「私はパチュリー・ノーレッジ。ただの魔法使いよ」

簡単な自己紹介を終えると、パチュリーは青白い光線を放って来た。俺は上に飛んでその光線を回避するけど、その後直ぐに移動して全方位に赤い弾幕を張って来る。

その弾幕も隙間を縫って避けるんだけど、また移動して次は光線と弾幕の合わせ技で攻めてきた。

弾幕の回避は出来るんだけど、彼女が彼方此方移動するもんだからコッチの攻撃がイマイチ当たらない。

なんとか頑張って弾を放つけど、やっぱりこう言う戦闘は苦手だ。

「……水符『プリンセスウンディネ』」

スペカを宣言すると、パチュリーは三本の水のレーザーと無数の水の弾丸を放って来た。

それ等をなんとか避けたと思ったら、その直後に大粒の水の弾丸が一斉に放たれた。

弾の速度事体は其処まで速くないけど、一度に放たれる弾の数が多い。

隙間を縫うように回避しても、直ぐにさっきと同じレーザーと小粒の弾丸が襲い掛かってくる。

お陰で避ける事に集中してないと不味い状況に……って

「これは無理だ」

気がつく俺は、壁際にまで追い詰められていて、目の前にはレ

ザーが迫っていた。

既に回避出来るスペースも無く、被弾する事は誰の眼にも明らかだからと言って、このまま喰らう心算もない。せめてお返しくらいはしないとな。

「散弾『散烈拳』！」

俺は当たる直前にスペカを取り出し、拳に力を込めて前に突き出した。

突き出した拳から放たれた力は、散弾の様に拡散しパチュリーの弾幕を掻き消して行った。

命中こそはしなかったが、これで彼女のスペカを破る事が出来た……等。

「……貴方、もしかしてうちの門番みたいに気でも使えるの？」

「いや、俺のはそう言うのとは違うものだけだ」

「そうなの。…随分と変わってるのね」

イマイチ自覚はないんだけど、俺ってそんなに変わってるのかな？ 霊夢にもさつき似た様な事言われたし、やっぱり変わり者なのかな。

「それじゃ次行くわよ。…木符『シルフィンホルン上級』」

パチュリーの二枚目のスペカは、水の弾幕ではなく木の葉の弾幕だった。

さっきの弾幕とは違い法則性はなく、舞い落ちる葉の様に辺りには撒かれる。

そこから中からばら撒かれるもんだから、どの弾に注意して避ければ

良いのか分からない。  
目の前だけに集中していると、突然横から弾が飛んでくるし、左右に集中すると前方不注意になる。  
全体的に把握しないと行けないんだけど、そんな余裕は今の俺にはない。

「だーッ！ 避け難い！！」

「簡単に避けられたら勝負にならないじゃない」

確かに彼女の言っている事は正論だけど、それでも文句の一つは言いたい！

魔理沙の星屑も面倒だったけど、この弾幕はそれよりも面倒だ！！あの弾幕はコレと大差ない速度だったけど、此処まで細かく散らばってなかったぞ！

……いや、これは弾の大きさによるところがデカイのか。

「考え事するのは勝手だけど、そんなんじゃないや当たるわよ」

「へっ？ ……あいだッ?!」

ぐお〜……。余計な事を考えすぎた。

お陰で迫って来ている弾に反応が遅れてしまい、ついに被弾してしまった。

まあ、この程度でやられる俺じゃないし、今はこの弾幕の攻略に集中しよう。

木の葉はまだ辺りに散らばっているけど、何度も同じ失敗を繰り返したりはしない。

辺りに舞い散る弾幕なら、風で全部吹き飛ばすだけだ！

「疾風『風』！」

「キヤアツ?!」

俺がスペカを発動させると、名前の通り風が巻き起こり、弾幕ごとパチユリーを吹き飛ばした。

今の風で彼女の弾幕を止める事が出来たけど、スペカってこう言う使い方であってるのか？

この調子で使っていくと後々困りそうだな……。

「うう……。まさか室内で突風に襲われるとは思わなかったわ」

「これでも一番ランクの低い風なんだけど……」

「…………アレでねえ」

俺が風のスペカを使った事で、室内は倒れた本棚で滅茶苦茶になってしまった。

もしコレで最上位の牙流風ガルフだったら、もっと酷い事になってそうだな。

最低ランクでこの威力だととなると、真重属魔法はどうなってるいるのやら……。

「まあ、本棚は後でこあやメイド達に直させるとして……………続きを始めるわよ」

「やっぱ、この程度で終わる訳ないか」

「当然でしょ。……………それじゃ三枚目。水&木符『ウォーターエルフ』」

「

彼女の三枚目のカードは、大粒の水弾と小さい木の弾を連続で放ってくる物だった。

放たれる割合で言えば木弾の方が多く、水弾の数は多くない。ばら撒く様に放つ木とは違い、水の方は何処と無く俺を狙って来ているみたいだ。

それでも、さっきの弾幕よりも弾の軌道は読める方だ。

……まあ、飽く迄も読めるだけであって、絶対に回避が出来るという訳でもないけどね。

とりあえずは、手持ちのスペカを消費しないで避けられているから良いか。

「……このスペカじゃ倒せそうに無いわね」

少しの間避け続けているとパチュリィはそう言い出し、放っていた弾幕を撃ち止めた。

その代わり懐から別のスペカを取り出し

「金&水符『マーキュリポイズン』」

そのカードを宣言した。

四枚目のスペカは水の弾と金属の弾の複合弾幕。

弾は左右から挟撃する形で放たれる為、弾の軌道が把握し辛い。

把握し辛いが左右から同時に教われないだけマシか。

それに放たれる弾のサイズもそこまで大きくないし、距離さえ離していれば隙間を縫う事が出来る。

後は動き回る彼女に、コツチの弾幕を放ち続ければ勝てそうだ。

「むう。中々当たらないわね」

「そう何度も被弾したくないんでね」

軽口を叩きつつパチュリーの弾幕を避け続ける。  
その隙をついてコツチの弾を放っているけど、向こうも中々当たってくれない。

このままだとジリ貧になりそうだし、此処はスペカを使って一気に決めるか。

俺はポケットから一枚のスペカを取り出した。

「蒼雷『ババル』！」

カードを宣言すると、四方から蒼い雷がパチュリーに襲い掛かった。パチュリーも急いで回避しようとするが、

「むきゅーッ！」

俺の雷の速度の方が速く、回避出来ずに地面に落ちていった。落とす事が出来たとは言え、まだ他にもカードを持っているかもしれない。

念のためにも、もう少し警戒しておくかな。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あれ？」

何が起こっても良い様に警戒していたんだけど、パチュリーが動く気配はなく地面に倒れたままだった。

一瞬何かの罫かと思っただけど、特にそんな様子は無さそうだったとすると、なんで倒れたままなんだ？ 一応とは言え、弾幕にしているから死んだりはしないと思うんだけど。

「おーい、大丈夫かー？」

「…しびれて、うごけない……」

「あ、あはは……」

どうやら彼女は、ババルを受けて身体が痺れたみたいだな。それじゃ、どれだけ警戒しても何もしてこない訳だ。

……でも、あの魔法にスタン効果なんて付いてたか？ あんまりこの魔法使わないから、よく覚えてないんだよな。

「とりあえず、この勝負は俺の勝ちで良い？」

「すきに、して」

「分かった。(……勝つたのにこれじゃ素直に喜べないな)」

「あと、ここにれみはいないわよ……」

「そうなのか？ ……だったら此処に用はないか」

「なら、ちっさといきなさい……」

「ああ。…それじゃあなパチュリー。ゆっくり休んでくれよ」

「いわれなくても……」

こうしてパチュリーとの戦いに勝った俺は、図書館から出て別の場所の探索に向かった。

今回の戦いで結構スペカを消費したから、今残っているカードを確認してみると……今の状態で使えるカードが殆ど残っていないかった。

竜変身<sup>トランス</sup>すれば少しは増えるんだけど、それでも不安は尽き無い。

……やっぱり攻守で一番バランスが良い『カイザー』を使うしかないかな。

出来る事なら使いたくないけど、俺の腕前じゃ無理そうだ……。

「ハア。憂鬱だ……」



## 第八話 知識と日陰の少女（後書き）

オマケ

リュウが図書館から出て行った後。

倒れているパチュリーの傍に一匹のコウモリが近付いて来た。

「……これで良かったのレミィ？」

《ええ。ありがとうパチエ》

パチュリーがコウモリに話しかけると、喋る筈の無いコウモリが少女の声で返事をした。

彼女はその事になんの疑問も持たず、そのまま話し始めた。

「彼に会いたいから負けてくれなんて、面倒な注文してくれたわね」

《あら。パチエも彼の力を見て良かったじゃない》

「……咲夜も居るんだし、別に私が戦う必要は無かったと思うけど」

《咲夜じゃ駄目よ。彼を本気にさせる前に倒しちゃうもの》

「私でも本気は出さなかったみたいだけどね」

《なら、私が彼を本気にさせてあげるわ》

「……お願いだから図書館に被害が出る様な事はしないでよ」

《それは竜次第ね》

そう言うとコウモリは何処かへと飛んで行き、パチユリーは何事も無かったかの様に起き上がった。  
そして辺りを確認すると、部屋の惨状を見て大きな溜息を吐いた。

第九話 紅魔館のメイド（前書き）

今回は霊夢視点の話です。

## 第九話 紅魔館のメイド

リュウと別れて紅い屋敷を探索しているんだけど、一向に犯人らしき人物が見付からないわね。

この屋敷、見た目以上に中が広いから彼方此方捜して回るのも面倒だわ。

私としては、早く犯人を取っちめたいんだけどな。

……もしかしてリュウが向かった方に居るのかも。それなら私が行けば良かった。

「あゝあ。いい加減妖精を倒すのも飽きて来たわね」

「だったら、倒さないでスルーすれば良いでしょ。掃除する身にもなりなさいよ」

「そんなの私の知った事じゃないわ」

私の前にいきなり現われたのは、銀の短髪のメイド。

それにしても、今まで気配も無かったのに急に現われたわね。

どんな手品を使ったのか知らないけど、そこら辺にいる妖精よりは手強そうね。

「それでなに？ お嬢様のお客様？」

「（倒しに来たと言っても、通してくれないわね）」

「通さないわよ」

「まだ何も言っていないんだけど」

「どんな目的でも関係ないわ。お嬢様には既に先約が入ってるのよ」

「こんな真夜中に尋ねるなんて、そいつは随分と物好きね」

「貴女だって、真夜中に侵入して来たじゃない」

「侵入するなら、真昼間よりも真夜中の方が雰囲気あるでしょ」

「そんなの知らないわよ」

そう言うとメイドは、四つの魔法陣を展開し全方位に弾幕を張って来た。

それと同時に、本人は隠し持っていた銀のナイフを私に向かって投げつけて来る。

全方位に弾幕を張るだけならまだしも、メイドが投げてるナイフが厄介ね。

数こそ少ないけど、偶に弾幕の影に隠れて発見が遅れるのよ。

全く。何処にナイフを隠しているのか知らないけど、馬鹿みたいに投げて来るんじゃないわよ。

「……流石に当たらないわね」

「この程度の弾幕に当たる訳無いでしょ」

「そう。ならこれは如何かしら？ 幻符『クロックコープス』」

メイドが一枚目のスペカを宣言すると、全方位に弾幕を張って来た。でも、ただそれだけの事。只単に辺りに弾を撒き散らすだけなら如

何と言う事は……って!?

「何時の間にナイフ投げたのよ!？」

「さあ？ 何時かしらね？」

今、私の周りには最初に放った弾幕以外にも、無数の銀のナイフが投げられていた。

しかも、ナイフの方は全て私に狙いを付けているみたい。

何時の間に投げたか分からないけど、面倒な事この上ないわね。

でも気をつけないといけないのは、先に放たれた弾幕の方。

今度は投げられたナイフの数が多いから、散らばっている弾幕がナイフの影に隠れちゃってるのよね。

だけど、ナイフが私狙いなら引き付けて避ければ大丈夫。

先に放ってきた弾幕の数は少ないし、ナイフを避けた後でも回避は間に合う筈。

「あら。思ったよりやるのね」

「当然でしょ。私を誰だと思ってるのよ」

「働かない事で有名な神社の巫女でしょ」

「失礼ね。ちゃんと働いてるわよ……ウチの居候が」

「貴女が動かないんじゃない」

「私の専門は、妖怪退治や異変解決だから良いのよ」

「……私は貴女の言う居候に同情するわ」

「それは如何言う意味よ」

「言葉の通りよ」

……一々余計な事を言うメイドね。

それにこれは私とリュウの問題であって、赤の他人であるメイドに同情される筋合いはないわよ。

コレ以上余計な事が言えない様に此処で徹底的に叩こうかしら？

「考え事とは余裕ね」

「実際の所、余裕だからね」

「ならこれは如何かしら？ 幻象『ルナクロック』」

メイドが宣言した二枚目のスペカ。

まずは全方位に弾幕を張るだけだけど、さっきの事を考えるとまたナイフが飛んでくるわね。

どんな風に飛んでくるのか分からないけど、何時でも後ろに下がれる様にしておこう。

案の定私の予想は的中し、また突然銀のナイフが投げられていた。

だけど今度は、私狙いのナイフ以外にもばら撒かれる様に投げられたナイフも存在する。

でも、ばら撒かれたナイフが追加された位で、さっきのスペカと大差ない。

その程度の差異しかない弾幕の攻略なんて、そう難しいものでもないわ。

「……これでも駄目か」

「唐突にナイフを出現させるのは良いけど、それだけじゃ私は落せないわよ」

「なら、搦め手で攻めさせて貰うわ」

そう言うとメイドは、無数のナイフを四方に投げ付け始めた。

でも私が居るのは彼女の正面。後ろや左右に投げても当たる訳が無い。

彼女の言う『搦め手』が何か知らないけど、正面以外のナイフにも気をつけた方がよさそうね。

私はナイフの軌道に注目していると、壁にぶつかったナイフが跳ね返りコツチに襲い掛かって来た。

これは所謂『跳弾』って奴かしら。手品以外にもこんな芸当が出来るなんて、意外と芸達者ね。

でも、種さえ解れば大した脅威じゃない。

何も無い空間から飛んでくるんじゃないかと、ただ壁に当たって跳ね返っただけ。

跳ね返ってくるナイフ同士の間隙は大きいから、落ち着いてさえいれば特に問題はない。

……まあ、問題があるとしたら私の弾幕が当たらない事か。

如何言う原理か知らないけど、あのメイドが瞬間移動するもんだから中々当たらないのよね。

私も似た様な事は出来るけど、此処まで精度は良くないわよ。



「これも当たらないなんて」

「それはお互い様よ。私としてはさっさとやられて欲しいんだけど」

「そんなのお断りよ」

「私はアンタと遊んでるほど暇じゃないの」

「私も暇じゃないけど、お嬢様の命令なのよ」

「あーそうですか」

「ええそうなのよ。だからコレで遊んでいて。…メイド秘儀『操りドール』」

メイドは三枚目のスペカを宣言した。

今までのカードを考えると、コレもナイフを出現させる手品みたいな奴なんですよ。

流石に同じネタを三回も見ると飽きるわ。

実際の所、メイドが最初にナイフを投げた後、ばら撒く様に別のナイフが出現する。

ばら撒く様に投げたナイフは、壁に跳ね返って来るけどさっきと同じ要領で避ければ大した事はない。

最初のナイフは、真っ直ぐ私を狙って来るけど跳ね返る訳じゃないから大きく避ければ良いだけ。

……正直な話、攻略法さえ分かれば避け続けるのは難しくないわ。

とは言え、このまま避け続けて相手のスペカが尽きるのを待つのも面倒ね。

通常の弾幕じゃまともに当たらないし、此処は手持ちのボムを使って一気に片付けますか。

私は懐から一枚のスペカを取り出し、メイドに狙いを付ける。メイドは彼方此方移動してるけど、このスペカは幾ら移動しようとも関係ないわ。

「夢符『封魔陣』！」

私がスペカを宣言すると周囲に結界が張られ、その結界範囲が一気に拡大していった。

その過程で周りに飛んでいるナイフは全て弾き落とされる。

メイドは拡大し続けた結界を避けようとしたが、四方に広がる結界の前には無意味だった。

「キヤアツ?!」

避ける事の出来なかったメイドは結界に捕まり、そのまま弾き落とされた。

本当は『夢想封印』でも良かったけど、此処の主の事を考えてコッチにしたんだけど……これ火力がイマイチなのよね。

でも、全体に攻撃出来るのが強いから重宝してるんだけど。

「いたた……。ちょっと油断したわ」

「あ、やっぱりまだ起き上がるのね」

「あの程度じゃ私は折れないわよ。それにスペカはまだ余ってるし」

「一体何枚持つて来たのよ」

「後七枚ほどあるわ」

「多いわね」

「当然でしょ？ お嬢様からは貴女の足止めを命じられてるのよ。むしろコレでも心許無い位よ」

「……私の足止めですって」

「ええ。…我が主はもう一人の侵入者との戦いを望んでいるの。その障害となるものを止めるのは従者として当然の事でしょ」

「もう一人の侵入者って……ッ?!」

メイドの話聞いた私は、急ぎリュウの元に行こうとした。ただ彼女は、今までにも見せたナイフの手品を使って私の行く手を遮って来た。

「何処に行こうと言うのかしら？ 貴女の相手は私よ」

「悪いけどアンタの相手をしてる暇が無くなったわ。……だから邪魔をするな」

「それは無理な相談ね。…だって、今の私の仕事は貴女の足止めだもの」

「……即行でケリをつけるわ」

「出来るかしら？ 貴女の時間は私の物よ」

「そんなの……知った事じゃないわよ!!」

私は少しだけ本気でメイドを倒す事に決めた。

こんな奴に時間を掛けた所為で、リュウに暴走されたら堪ったもんじゃない。

もしアイツに暴走でもされたら、今の私の手持ちじゃ倒し切れないわよ。

お願いだから絶対に暴走だけはしないでよリュウ。そんな事になったら、面倒な事この上ないのよ!!

## 第十話 永遠に紅い幼き月

俺は今、紅い屋敷の二階を探索してるんだけど……一向に犯人が見付からない。

まあ、別に見付からないなら見付からないで、特に問題ないんだけどな。

今は手持ちのスペカが心許無いし、この姿だと勝てる気がしないし。さつき屋敷の左側の方から戦闘音が聞こえて来たから、もしかしたら既に霊夢が戦っているのかも。……寧ろそうであって欲しい。

「それにしても、無意味に広い屋敷だよな。これだけ広いと迷いそうだが……って、なんの音だ？」

屋敷の一室を探索していると、直ぐ近くから鐘の音が聞こえて来た。でも、この部屋には鐘なんて置いていない。

それに鐘の音が聞こえて来たのは、この部屋の外の方からだった。鐘の音がなんとなく気になった俺は、廊下の窓から顔を出し周囲を見回してみる。

すると外には大きな時計台が在り、その傍に羽の様なものが生えた少女の姿があった。

どうやらさつきの鐘は、外の時計台が時刻を知らせる為のものらしい。

その傍に居る少女は……多分この屋敷の住人かな。

今まで見てきた妖精たちとはシルエツトが違うから、此処のメイドって事はないと思うけど。

「無視しちゃ……駄目なんだろうな。きっと」

本当なら無視して霊夢と合流したいけど、外に居る少女はさっきから俺の事を見る。

時計台まではそれなりに距離があるのに、彼女からの視線を物凄く感じる。

こんな事なら鐘の音なんて無視すれば良かった。

そんな事を思いつつ、俺は外に飛び出し時計台へと向かった。

……

……

…

時計台にまで辿り着くと、空を覆っていた紅い霧が一部だけ晴れ、紅い月が姿を現していた。

そしてその月をバックに、背中にコウモリのような翼が生え、フリルの付いた薄紅色のドレスを着た少女が浮んでいた。

翼の生えた種族は知っているけど、コウモリの翼が生えた種族は初めてみたな。

「こんばんは、何処かの誰かさん。私の名はレミア・スカーレット。この屋敷の主よ」

「こんばんは、レミア。俺の名前はリュウ。……それで君はこんな所で何をしているんだ？」

「月光浴ついでに人を待っていたの」

「そうなんだ」

「ええ。私はずっと此処で待っていたのに、中々来ないからヤキモキしたわ」

「その人にも色々都合があつたんだよ」

「そんなの私の知った事じゃないわよ。この夏の寒空の下で一人待っているのは退屈だったわ」

「寒いなら中で待っていれば良かったのに」

「私が外で待っていたい気分だったの」

「あ、あはは……それじゃ俺はこの辺で」

「あら。折角来たのだし、少し遊んで行きなさいよ」

「悪いけどそう言う気分じゃないんだ。ごめんね」

「私は遊びたい気分なの」

そう言うと少女は、抑えていた力を解き放った。

屋敷で探索している時には感じなかったけど、彼女が持っている力は相当なものだ。

「（……参ったな。これは逃げれそうに無いぞ）」

「こんなにも月が紅いから、本気で殺しに行くわ」

「……やれやれ。こんなにも月が紅いのに」

「大変な夜になりそうだ／楽しい夜になりそうね」

こうして俺と少女の戦いの火蓋は切って落とされた。

先に仕掛けて来たのは少女の方。全方位に紅い大弾と青い弾をばら撒き始める。

放たれる紅い弾の大きさと、隙間を埋める様に放たれる青い弾が中々に厄介だな。

早めに弾の軌道を読まないと一気に落とされそうだ。

俺は早めに弾の軌道を読み、掠りながらも彼女の弾幕を避け続けた。

「天罰『スターオブダビデ』」

弾幕を避け続けていると、少女は一枚目のスペカを宣言した。

宣言すると、彼女を周囲全てに紅い光球が出現する。

その光球は動いたりはしないが、彼女が放った力に連鎖して一斉にレーザーを照射し始める。

この程度ならまだ楽だったが、周囲にある基点から無数の青い弾が撃ち出された。

最初のレーザーの所為で逃げ場がかなり制限され、次に放たれる青い弾を避けるスペースが少ない。

僅かに空いたスペースを使い、なんとか弾を避けるけど……心の中心では何時当たるかと冷や冷やしてる。

それでもなんとか避け続け、彼女に俺の弾幕を叩き込む。

こんな弾幕を何時までも避け続けられる訳ないし、早く終わらせるにはこれは一番手っ取り早い。

そんな事していると、突如レミリアの弾幕が止んだ。

「一枚目は攻略されたか。…まあ、その位してくれないと楽しくな



いわ」

「こっちは必至だから楽しむ余裕なんてないんだけど……」

「だったら、貴方の力を解放すれば良いじゃない。そうすれば楽しめるわよ」

「……………」

あの子が何時俺の力を知ったのか分からないけど、出来る事ならそれは避けたい。

でも、パチュリーの話だと彼女は我が侷らしいから、何が何でも俺の力を使わせるだろうな。

彼女ほどの力の持ち主となると、『ジャバジブ』や『ナイト』じゃ力不足だろうし。

使うとしてもアレは論外だから、やっぱり此処は『カイザー』しかないな。

「二枚目。冥符『紅色の冥界』」

彼女の二枚目のスペカは、さっきのレーザーとは違い無数の小さな弾を飛ばしてくる物だった。

ただ、飛ばしてくる弾の数が多く、立て続けに全方位交差弾が飛んでくる。

飛んでくる弾の数は多いものの、一つ一つのサイズが小さいお陰で回避するだけのスペースはある。

落ち着いて、弾の軌道に注意していれば避ける事は差ほど難しくない。

弾の軌道を読み切った俺は、今度はさっきの弾幕よりも楽に攻略する事が出来た。

「……二枚目も突破されたか。それなりに頑張るのね」

「あんまり力は解放したくないからね」

「そう言われると、無理矢理にでも解放させたいのが人の性よ」

「……君は人じゃないだろ」

「貴方も人じゃないでしょ？」

確かに俺は人じゃなくて竜だけど、この場合俺は関係あるのか？

……いや、今はそんな事気にしている場合じゃないか。

彼女はまだまだやる気みたいだし、此処は気合を入れて掛からないとな。

「さてっと。三枚目は少し趣向を変えようかしら」

「お好きにどうぞ」

「ええそうさせて貰うわ。…獄符『千本の針の山』」

彼女が宣言した三枚目のスペカは、大量のナイフと小さな弾が同時に飛んでくるものだった。

ナイフは俺狙いで飛んで来るが、一緒に放たれた弾の方は壁やナイフに当たると跳ね返って軌道が読み辛くなる。

只でさえ弾の数が多いのに、小弾が跳ね返ってくるんじゃない何処から弾が来るのか分からなくなる。

ギリギリの所で回避しているけど、こんな調子じゃ何時まで持つか

……ッ?!

「しま……ッ!？」

跳ね返ってくる弾の軌道を読むのに集中していた所為で、ナイフの軌道を読み損ね被弾してしまった。

当たったナイフは、俺の脇腹に深く突き刺さった。

弾幕ごっこで被弾しても死なないって言ってたけど、流石にコレは不味いだろ。

刺さった箇所から血が流れ出てるし。……今このナイフを抜いたら余計に血が出そうだな。

「あらあら。血が出てるけど大丈夫？」

「大量にナイフを投げて来た奴が言う台詞か」

「でも、この位やられないと本気にならないでしょ？ 私は貴方の本気が見たいのよ竜さん？」

「……………」

さっきの趣向を変えるって言うのは、弾幕の難易度を上げるって事か。

一枚目、二枚目みたいな弾幕じゃ俺が本気にならないと判断のか…

…。

……正直な話し、こんなの使わなくても結構きつかったんだけどな。

「さあ、次で四枚目。その調子じゃ次で終わりかしら？」

余裕綽々と言った感じで、目の前に居る少女は次のスペカを見せびらかす。

実際の所、このままじゃ何も出来ずに終わるのは目に見えている。  
この場に霊夢が来てくれれば……なんて事を考えても、現実是非情  
なのは重々承知してる。

……だったら使うしかないよな。

手加減出来るのか分からないけど、このままやられる訳には行かない！

「……一つ良いか」

「何かしら？」

「頼むから死んだりしないでくれよ。遊びで殺してしまいましたってのは、流石に洒落にならないから」

「それは要らぬ心配よ。…私は夜の支配者たる吸血鬼。そう簡単に死んだりしない」

「そっか。だったら問題ないな」

俺はそう言っつて、ポケットから一枚のカードを取り出す。

このカードはスペカであつてスペカじゃないもの。俺が戦いの最中に変身する時に宣言する様のカード。

妖精や低級の妖怪ならまず使う事の無い物だけど……目の前に居る相手なら問題はない。

「……皇帝『カイザー』!!」

俺がカードを宣言すると、俺の周りに赤いオーラが立ち上る。

覚悟しろ吸血鬼。力を解き放った俺は今までの様には行かないぞ!!

## レミリアSide

……とうとう彼が本気になった。

今はまだ彼を包む赤いオーラで姿は見えないけど、それでもはつきりと強大な力を感じる。

これほどまでに強大な力を持つ妖怪は、古くから幻想郷に住む妖怪でも数える程度しか居ない。

……いや、純粹な力だけなら八雲 紫よりも上か？

あの妖怪の賢者よりも上の力……。そんな存在との弾幕ごっこ……  
……良いわね。

長い事刺激に飢えて、色々と暇潰しをしていたけれど彼以上の遊び相手は居ないわ。

「さあ！ 早く姿を現しなさいリュウ！ その力、私に魅せてみる  
！……」

すると、私の声に反応したのか立ち上っていたオーラは弾け、中から変身したリュウが現われた。

さっきまでの人の姿とは違い、上半身の服は無くなり、髪は白く背中には皮膜の無い赤い羽が生えている。

ズボンはそのままだが、尻の辺りからは赤い尾が生え、足は赤いかぎ爪となっていた。

これは人の竜の中間の様な姿と言えば良いのかしら？ …… 少なくとも

とも？人？とは言え無いわね。

「……………」

「何を呆けている吸血鬼。早く続きを始めるぞ」

「え、ええ。そうね」

なにコイツ。姿が変わっただけじゃなくて、態度まで変わったわ。最初に会った時は気分じゃないとか言っただけに、如何言っ心変わりをしたのよ。

……まあ、いいわ。私も久し振りに本気で遊ばせて貰うから。

「紅符『スカーレットマイスタ』」

私の四枚目は、彼に向かって連続で大弾を放った後、周囲にも大小様々な弾を発射するスペカ。

自分に向かうだけではなく、周囲にも弾幕を張るから中途半端な回避は意味を為さない。

さあ、この弾幕を如何攻略する？

「……………」

私の期待に反し、彼はただその場で佇んでいるだけだった。

私の予想を超える何かを期待してたのに、佇んでいるだけなんて……。

これだけの力を発しておいて、まさかこの程度だと言っのかしら？

「おい。どっちを見てるんだ、俺はこっちだ」

「…………えっ？」

彼の声が突然右の方から聞こえ、慌てて確認すると同時に彼が弾幕を放つて来た。

私は慌てて弾幕を回避するが、彼が放つて来た弾幕の速度が極端に上がっていた。

変身する前の彼の弾幕は、お世辞にも早いとは言えないもの。

でも、今放つて来た弾幕は風を思わせるくらいに速い弾幕だった。

流石に力を解放したくらいで、此処まで弾幕の速度が上がるとは思わなかった。

だけど、彼の弾幕は先程と変わらず真っ直ぐ飛ぶだけのもの。

彼の射線上から移動すれば避けるのは簡単……………だけど、本当に注意すべきは彼本人の移動速度だ。

さっきまで右側にいたのに、今度は正面に移動してるのがその証拠。私も周囲に弾幕を張っているけれど、彼が速過ぎて弾が掠りもしない。

集中していれば目で追えるけど、私の弾幕が遅くて話に為らない。

このスペカじゃ、どんなに頑張つて弾幕を張ったとしても彼を撃ち落とすのはまず不可能。

そう考えた私は、今のスペカを撃ち止める事にした。

「……………なんだ、もうこのスペカは終わりか」

「当たらない弾幕を使っても意味はないわ。だから今度は攻め方を変える」

「そうか」

「行くわよ。神槍『スピア・ザ・グングニル』」

私が宣言した五枚目のスペカは、速さだけならさっきのよりも上。ただ巨大な槍の形をした弾幕を相手に向かって投げけるもの。弾を彼方此方にはら撒くのは違い、真っ直ぐ相手に向かって行く弾幕。

今の彼みたいに素早く動き回られると当て難いんだけど、その動きを読み切れば当てられる。

私は牽制用の弾幕を張り、彼に弾を避けさせる。

彼は私の狙い通りに弾を避け、グングニルの射線に入る。

私は彼が射線に入った瞬間、手に持っていた槍を全力で投げ付けた。投げた槍は真っ直ぐ突き進み、彼に命中する……かと思ったら

「大爆発『ドギガ』」

彼は、手元に残していたスペカを宣言した。

彼がスペカを宣言すると、私達の間で突如大爆発が発生する。

その爆発に巻き込まれ、私はグングニルごと吹き飛ばされてしまった。

私は爆発の熱に焼かれながらも、なんとか体勢を立て直した。

そして周囲を確認すると、先程の爆発の被害を受けたのか時計台の一部が破損している。

……でも、破損したのが一部で運が良かった。

アレを時計台の中心で受けてたら、屋敷にまで被害が出ていたに違いない。

「やれやれ。グングニルが不発に終わるなんてね。こんな事ならも



っと早くに投げれば良かった」

「どのタイミングで投げようと、ドギガで吹き飛ばすだけだ」

「まあ、そうでしょうけどね」

手元にスペカが残っていたのは予想外だったわね。

アレが無ければグングニルで射抜く事が出来たかも知れないのに……。

まあ、既に過ぎた事を反省をしても仕方が無いわ。それより次のスペカは如何しましょう。

彼の速さを考えると、弾幕が厚いタイプのスペカが良いでしょうね。そうになると、アレを使うのが手っ取り早いかしら。

どの道残りのカードも少ないし、コレでラストにしましょう。

「ラストスペル『紅色の幻想郷』」

私が宣言したラストスペル。

このスペカは周囲に大弾を発射した後、その軌道に沿って無数の弾を出現させ四方にばら撒く物。

放たれる大弾の数が多ければ多いほど、出現する弾の数も増える。幾ら移動速度が速い彼でも、四方を弾幕に囲まれて身動きが取れない筈。

「……………」

私の目論見通り、彼の周囲は無数の弾で回避スペースが狭まっている。

今も周辺に散った弾が、彼に降り注いでいる。

回避スペースも極僅かしか残っていない。このまま行けば避け切れずに被弾する筈。

悪いわねリュウ。この勝負貰ったわ！

「……そう言えば、お前は俺の力が見たいんだったな。今からその一端を見せてやるよ」

「……？ 今更何を言っているの。力なら既に解放してるじゃない」

既に四方を私の弾幕で囲まれているにも関わらず、彼には危機感が無いのだろうか？

そんな事を思いつつ弾幕を張っていると

「ラストスペル『カイザーブレス』」

今度は彼がラストスペルを宣言した。

お互いに最後のスペカである以上、彼の弾幕に被弾したら私の負けになる。

それに先に私が宣言しているから、私の弾幕はこれで掻き消されてしまう。

……でも、彼のラストスペルを攻略出来れば私の勝ち。

私に逃げの選択はない。なら、必ず攻略してみせる！

「行くぞ、レミリア・スカーレット」

そう言うと、彼のスペカが消失し、魔法陣の様なものが描かれた黒い球体が現われ彼を包む込んだ。

そして、球体に描かれた魔法陣が光り輝いたと思ったら、球体が崩壊し始め、何かが飛び出して行った。

はつきりと姿を確認出来た訳じゃないけど、琥珀色の巨大な生物が

空に飛んで行くのが見えた。

「……………？ 何も来ない？」

球体が崩壊し、何かが空に飛んでいったにも関わらず、彼の弾幕は未だに張られていない。

それどころか、球体の中に居ると思っていた彼の姿が何処にもない。ラストスペルである以上、嘘を吐いて逃げ出したとは考え難い。流石にそんな腰抜けではないだろうし、逃げるのならもっと早くに逃げている筈。

私は幾つかの疑問を抱えながら、何時なにが来ても良い様に周囲を警戒していた。

すると、突然私の頭上が明るくなり始めた。

突然の光に驚きつつも、空が明るくなった事に疑問を持った。

今の時刻は深夜零時過ぎで、日の出にはまだ時間がある。

だと言うのに、昼間と同じかそれ以上の光が降り注ぐのは幾らなんでも可笑しい。

それに光に当たっているのに、身体が気化しないのも不自然過ぎる。

私は、この光の正体を知る為に空を見上げると

「なッ……………?!」

私の頭上には、幾つもの光の柱の様な物が降り注いでいた。

私は慌ててソレを避けようとしたが、光の柱が降り注ぐ方が早く…  
…そのまま光に飲み込まれた。



第十一話 霧の夏の終わり（前書き）

今回は霊夢視点です。

## 第十一話 霧の夏の終わり

紅い屋敷の二階。其処で私は、銀髪のメイドと弾幕ごっこで戦っている。

メイドの弾幕の所為で、廊下は銀のナイフだらけになっているけど……この程度なら如何と言う事はないわね。

「霊符『夢想封印』！」

「キヤアアアツ！」

私の周りに出現した七色の光玉は、手品を使って瞬間移動するメイドに命中し見事撃ち落とした。二枚目のスペカを使う事に為ったのは予想外だけど、まだ予備もあるしなんとかなるでしょ。

「悪いけど、負けてやる訳にいかないのよ」

「くっ。申し訳有りませんお嬢様……」

それにしてもメイドの足止めの所為で、思ったよりも時間を食ったわ。

屋敷の外では戦闘音が聞こえてるから、多分リュウが戦っているんでしょうね。

途轍もない力も感じたし、あの馬鹿が力を解放したに違いない。

……本当に暴走を始めていたら、此処の主にどう責任を取らせようかしら。

いや、それよりも私がアイツを討伐する方が先か。

「……？ 外が明るくなつて来た？」

アレコレ考え事をしていると、突然窓の外が明るくなり始めた。まだ夜だと言うのに明るくなるのは不自然と思い、窓の外を覗いて見ると、

「なにあれ……」

時計台付近に、大量の光の柱が降り注いでいた。

一つ一つに込められている力も凄いけど、アレだけの量を一度に放つ存在が居るのにも驚いた。

なんである物が降り注いでいるのか知らないけど、あの光から感じる力はリュウと同じ物。

つまり、あの光はリュウが放った物と言う事になるわね。

「あの馬鹿。幻想郷を崩壊させる気？」

アイツがそんな事しないのは分かってるけど、あの力を見るとそう思えてしまう。

前に紫が警戒していたのも、リュウが力を使いたがらないのも納得だわ。

常にあの力で戦われたら幻想郷が持ちそうに無いもの。

「お嬢様?!」

「…今度は何事よ」

光の柱が降り注ぐのを見ていたメイドが、驚いた様な声を挙げると忽然と姿を消した。

多分、さっきまで使っていた手品を使って移動したんでしょ。

それにしても、唐突に姿を消したけど一体何があったのかしら？

………そう言えば、今リュウと戦っているのは此処の主だったわね。

あの光を見て、自分の主が無事なのか心配になったってところかしら。

「まあ、あの力を見れば誰だって不安になるか」

メイドの行動は一先ず置いておくとして、私もあの場所に向かうとしますか。

……出来る事なら無事であって欲しいけど、万が一の場合は本気で行くしかないわね。

私は手持ちのスペカに不安を感じつつ、光が降り注いだ時計台の辺りまで行く事にした。

………

………

…

私が時計台に行くと、地面は大きく抉れ幾つものクレーターが出来ていた。

そのクレーターの一つには、さっきのメイドとコウモリの翼を持った子供が居る。

子供の方は服がボロボロになっているから、アイツと戦っていた屋敷の主はあの子ね。



屋敷の主の姿は見つけたけど、肝心のリュウの姿が見当たらない。クレーターの中には居ないし、戦っていたと思われる空中にもその姿はない。

一体何処に行ったのかと辺りを見回していると、空から強大な力を持った何かの気配を感じた。

何が居るのか気になり空を見上げると、上空から腕に空色に光る四対の羽を持つ琥珀色の鱗の巨大な竜が降りて来た。

紅い月を背景に空に浮ぶ竜の姿……。これは私が見た夢と全く同じ風景だった。

あの夢が予知夢だった事に驚きを感じつつも、この光景に心奪われる。

人にも妖怪にも興味は無かったけど、あの竜だけは目を離すことが出来なかった。

《……吸血鬼。この勝負、俺の勝ちで良いのか？》

「「ッ?!」」

空から私達の事を見ていた竜は、突然下に居る吸血鬼に話しかけた。どうやらさっきの光線を放ったのはこの竜らしく、勝負の勝ち負けをはっきりさせたいみたい。

……でも、あの竜の声が物凄く聞き覚えのある声なのよね。

いや、今の状況から考えれば、あの竜の正体なんて察しが付くんだけど……。

「……………ええ。コレ以上戦う気は無いわ」

《そっか》

竜は一言そう言うと、その巨体が一瞬にして消滅し……代わりに青い髪<sup>リュウ</sup>の少年が姿を表した。  
この状況をちよつと考えれば、あの竜がアイツだって事は直ぐに解るんだけど……なんか納得が行かない。  
人の時のアイツを知っているからか、あの姿のリュウに魅せられた自分が無性に腹が立つ。

「あゝ。暴走せずに終わって本当に良かった」

「ほんとにね。お陰でコッチは無駄な心配しちやったじゃないの」

「えっ？ 霊夢、俺の心配してくれたのか？」

「アンタの心配じゃなくて、アンタが暴走した時の処理を如何しようか心配したのよ」

「処理って……。せめて封印にしてくれ」

「どっちでも同じよ」

「酷い……」

確かに言葉は悪いかも知れないけど、あんな力を持つてる奴を封印だけでなんとか為る訳ないじゃない。

第一、リュウが暴走した時は私が止めるって約束でしょ。  
多少言葉が悪くても気にするんじゃない……って

「あんだ、お腹から血流してるじゃない?!」

「あ、これ。さっきの戦いで被弾した時にナイフが刺さって。その

時の傷だよ」

「いや、そんなに暢気に言える傷じゃないから。……それ大丈夫なの？」

「ん〜……こっつしてるのも結構辛いかな？」

「だったら早く治しなさいよ！ その位出来るでしょ！！」

「分かってるって」

そう言うとりユウは、空の上で傷の治療を始めた。

治療に関しては何も出来る事はないし、私は下に居る吸血鬼に話でもしましょう。

そう考えた私は、クレーターから出た吸血鬼とメイドの下へと向かう。

私が傍に近付くと、メイドがナイフを取り出そうとするが、吸血鬼がそれを止めた。

メイドは納得が行かない様だが、吸血鬼の睨み一つでナイフを仕舞いこんだ。

見た目は完全に子供なのに、睨みだけで黙らせるとかやるわね。

「……それで何か用かしら巫女さん」

「言わなくても分かっているとと思うけど、この霧を今夜中になんとかしなさい」

「あら？ 私に勝ったのは彼であって、貴女の言う事を聞く必要は無いわよ」

「アイツは私の神社の居候で、今回は来たのは霧を晴らす為なの。だから目的は一緒よ」

「そうなの。……だったら仕方が無いわね」

「手早くやりなさいよ」

私はそれだけを言うと、空で待っているリュウの元に行く。

傍によると、リュウの怪我はすっかり塞がっていて、服に血を流していた痕跡がある位だ。

如何やって傷を治したのかは知らないけど、あの短時間で治せるのは凄いわね。

……これを利用して神社に人を呼べないかな？

「……霊夢、今へんな事考えて無いか？」

「気のせいよ」

相変わらず妙なところで勘が良いわね。

まあ、コイツを利用して神社の信仰獲得しても有り難味も薄いだろ  
うし、気長に別の方法を考えましよう。

それに神社と言っても、博麗神社くらいしかないんだし、変に焦る  
必要も無いわね。

「それじゃ帰るわよ、リュウ」

「おっつ」

私はリュウを連れて吸血鬼の屋敷を後にした。

……  
……  
……

神社への帰り道。隣りで飛んでいるリュウの機嫌が妙に良いのが気になる。

あのやり取りの間に何かあった訳でもないし、コイツの機嫌が良くなる様な事は無かった筈。

……だとしたら、なんでコイツはこんなにも機嫌が良いんだろ？

「リュウ。妙に機嫌が良いけど如何したのよ」

「いや、霊夢が俺の心配してくれたのが嬉しくて」

「はあ？ 何時私がアンタの心配したのよ」

「俺の怪我を知った時」

……あゝ、あの時が。

アレは見ていて痛々しいから言ったただけなんだけど……。

「他人なんて如何でも良いと思っていた霊夢が、ちゃんと人の心配が出来るのが嬉しくて」

「……アンタ、そんなにご飯抜きにされたいの？」

「なんで?!」

全く、コイツは私の事をなんだと思っているのよ。

確かに他人に興味は無いけど、優しさの欠片も無いみたいな言い方は止めなさいよ。

私にだって優しさの一つや二つ………あるわよね？

あまりにも周りの事を気にしないでいたから、自分が優しいのかなんて気にした事も無かったわ。

「……まあ、別に良いか」

「えっ?! 本当に飯抜きなの!?!」

「そつちの話じゃないわよ」

妙なところで勘が良い癖に、変な思い違いをするわね。

さっきの優しいとかもそうだけど、誰も本気で食事抜きにするとは言っていないでしょ。

本当に変わった奴よね、リュウって。……でも、悪い奴じゃないか。

「飯抜きは辛いので勘弁して下さい!」

「ふふつ。そんなの分かってるよ」

コイツの慌てる様が可笑しかったのか、自然と笑みが零れた。

私はリュウにそう笑い掛けながら、コイツの隣りを飛んで我が家へと帰るのだった。

## 第十一話 霧の夏の終わり（後書き）

どうも、作者のベヘモスです。

こうして後書きを書くのも久し振りですが、今回の紅魔郷編は如何だったでしょうか？

多少急ぎ足で書きましたし、色々と言いたい事があるかと思いますが……コレが自分の実力なんです。申し訳ないです。

予想以上に弾幕ごっこを文章で表現するのがめんど……じゃなくて、大変で結構疲れました。

一応エクストラも書きますが、ちょっと息抜きを兼ねて日常話を書こうかと思ってます。

この小説をどれだけの方が楽しみしてるか解りませんが、日常話は基本ネタです。

だから過度な期待はしないで下さい。どんな話になるかは、書き始めないと分からない事が多いので。

まあ、息抜きで書くのでギャグっぽいものが多そうですね。

では、次回の更新をお楽しみに。

## 第十二話 道具収集(前書き)

今回からリュウ視点です。

……一体何話までリュウの視点で書けるかな？



## 第十二話 道具収集

吸血鬼『レミアア・スカーレット』が起した紅霧異変を解決してから一週間が経った。

紅い霧が晴れた空には太陽が戻り、幻想郷は何時もの暑い夏が戻って来た。

この一週間の間に特別事件もなく、俺達は平和な毎日を送っている。

……もつとも霊夢は、この暑さにやられてダウンしているけど。

本人は夏ばてだと言っているけど、普段と大差無いから本当に夏ばてなのか良く解らない。

前に魔理沙が霊夢の事を辛辣に言っていたの理由がよく解る。

あの状態の霊夢を見ると、働かない巫女と言われても仕方が無いな。

まあ、霊夢に関しては何時もの事だから置いておくとして。

俺は今、博麗神社と人里を結ぶ道の整備をしている。

普段から人の来ない神社だけど、流石に何時までも獣道のままにしておく訳にもいかない。

それに、この道をきちんと整備すれば参拝客も増えるかも知れないし。

……と言つのが建前で、本当は俺が歩きにくいからと言つのが最大の理由だったりする。

霊夢は人里に向かう時は空を飛んで行くけど、俺は徒歩で行く事が多い。

確かに空を飛んでいけば楽だけど、人の時の姿は出来るだけ歩きで移動したいからだ。

別に飛ぶのが嫌いって訳じゃないけど、のんびり歩くのも悪くない

し。

そう言った理由から、今は獣道をちゃんとした道と認識出来る様にしている。

まあ、やっている事と言えば、邪魔に為りそうな木や草を刈るだけなんだけどね。

木の方は流石に幹自体を切る事は出来ないから、邪魔になる枝を折っているだけ。

だから、今は重点的に草を刈り取っている所だ。

「とは言え、流石に中々終わらないな……」

朝早くから始めた作業だけど、昼が過ぎたのにまだ半分にも終わっていない。

……いや、昼までで半分終わらせた事を褒めるべきか？でも草刈りが終わった後も作業は残ってる上に、神社の仕事もほった置く訳にもいかない。

そう考えるとちょっと効率よく作業がしたいものだ。

「まあ、道を作るのは魔法使うから良いんだけどな」

土属性の『破土<sup>ハート</sup>』を使えば道らしいものは出来るだろう。

後はそれを整備すればいいんだし、この作業さえ終われば多少楽が出来る筈だ。

……いつその事、魔法で草を地面に埋めるか？ いや、また生えそうだから止めよう。

それに今は人里へのルート開拓だし、そう言うのは後でも良いか。

「……ん？ 何か落ちてる？」

道の草刈りをしていると、直ぐ傍の木の根元に一振りの剣が落ちていた。

なんでこんな所に剣が落ちてているんだ？ 誰かの落し物か？

……でも最近では神社に人も来てないし、妖怪が出るって言う道で武器を落とすのも考え難いか。

傍に人骨の一つでも有れば、此処で亡くなった人の遺留品って事になるけど……それも無いな。

「じゃあ、本当になんなんだ？」

剣の形としては、仲間の一人が使っていた『太刀』に近いかな。

俺には彼の戦い方が真似出来なかったから、旅をしている時は装備する事は無かったけ。

……でも、剣の基本的な型は一緒なんだし、今なら装備できるかな。流石に抜刀すると同時に斬るのは練習が必要だけど、普通に使う分には問題ないか。

「……何処の誰の物かは存じませんが、有り難く頂戴します」

念のため、一度手を合わせてから落ちている剣を頂戴した。

俺は刀身の状態を確認する為、一度剣を鞘から抜いてみる事に。

鞘から抜くと、其処にはサビ一つない完璧な状態の刀身が姿を現し、太陽の光に反射して銀色に輝いていた。

旅をしている中で色々な剣を見てきたけど、これ程の剣を見たのは久々だな。

……でも、『ドラゴンブレード』や『グミ王の剣』程じゃないか。寧ろ、あれ程の剣がそこら辺に転がっているほうが異常だな。

「まあ、この剣も十分に使えそうだし良しとするか」

俺は剣を鞘に仕舞い、再び草刈りを再開する事にした。

……

……

…

剣を拾ってから二時間ほどが経った。

時折、変な物を発見する以外は何の問題も無く作業をしていたんだけど、此処に来て問題が発生した。

「……すっかり囲まれたな」

俺は今、この山の周辺に住んでいると思われる妖怪たちに囲まれてしまった。

敵の数は大体……十人かそこ等って所か。

別に妖怪に囲まれたこと事体は大した問題じゃないけど、このままだと道の開通の妨げになる。

仮に開通出来たとしても、妖怪に襲われる可能性のある道なんて誰も通りたがらないな。

俺が通る分には問題ないけど、人里と神社の交流の為に整備してるんだし、コイツ等をなんとかしないと不味いか。

「仕方が無い。いっぺんコイツ等を締めるか」

そう呟くと、取り囲んでいた妖怪達が一斉に襲いかかって来た。俺は奴等の攻撃が届くよりも早く剣を抜き

「乱武『せん切り』」

周囲を取り囲んでいる妖怪たちに、無数の斬撃を叩き込んだ。叩き込んだといっても、この技自体は強くないし、ちゃんと手加減したから死んだ妖怪はいない。

全員生きている事を確認したら、軽く竜の力を解放した。

俺の力を理解した妖怪たちは、顔を青ざめたり、冷や汗を流している。

「……命が惜しいなら今すぐ失せろ」

力を解放しつつそう言うと、取り囲んでいた妖怪たちは蜘蛛の子を散らす様に一斉に逃げ出した。

この場に居た全員逃げたことを確認し、俺は力を再び封印し、握っていた剣を鞘に仕舞った。

今回は威嚇の為に使ったとは言え、本当はこう言う事はしたくないんだよな。

此処の妖怪たちを従えて勢力を作る気も無いし、やり過ぎて幻想郷のパワーバランスを崩すような真似もしたくない。

それにこんな事の為に力を解放するのも癪だしな。今後はこの剣一つで追い払う事にするか。

……でもそれだと、道の問題解決には為らないんだよな。

「やれやれ。本当に如何するかな？」

如何すれば良いのか分からず、溜息を一つ吐くと……近くの茂みが

少しだけ動いた。

俺はさっきの妖怪の誰かが戻って来たと思い、鞘から剣を抜き……  
一気に茂みを切り裂いた。

「うわあッ?! ……い、いきなり何をするんだ! 危ないじゃないか!」

「……人?」

茂みの中に居たのはさっきの妖怪ではなく、銀髪にメガネを付け、青を基調にした服を着た男性だった。

……

……

…

「本当にすいませんでした」

「いや、もう良いから」

剣を仕舞った俺は、間違っつて切り掛かってしまった人に頭を下げ謝罪していた。

男性はこう言っているけど、? 妖怪と間違えて斬り殺した? じゃ笑い話にもならない。

こんなのそこら辺の三流新聞にも使われないうて。

「…それで、君はこんな所で一体何をしているんだ？」

「えっと、俺は博麗神社と人里の間に在る道の整備をしています」

「神社と里を？」

「はい。俺、あの神社に居候してまして。少しでも道が良くなれば買出しが楽になるかな〜って」

「それじゃ、君が前に霊夢の言っていた居候が」

「……霊夢の知り合いの方ですか？」

あ、危なッ！ もう少しで霊夢の知り合いを斬り捨てるところだった！！

もし斬り捨てていたら……飯抜きどころか、神社から追い出される可能性もあつたな。

本当に茂みだけを切れて良かった。後一步踏み込んでいたら、確実に首を刎ねてたぞ。

「重ね重ね本当にすいませんでした。だから、この事は霊夢には黙って置いて下さい」

「あ、嗚呼。それは構わないよ」

「（おっしゅッ！）」

「その代わり、僕の頼みを聞いてくれるかい？」

「……頼みですか？」

「大丈夫。別に難しい事じゃないし、道の整備の片手間で作れる事だよ」

「はあ……」

道の整備の片手間で作れる事って、一体何をさせる気だろうか？

整備でやる事なんて言ったら、草を刈ったり歩き易い様に土を弄る程度なんだけど……。

その片手間で一体何が出来るって言うんだ？

「それで、俺にして欲しい事と言うのは？」

「実は僕、魔法の森入り口で古道具屋を営んでいてね。店に出す商品の集めるのを手伝って欲しいんだ」

「商品の仕入れって事ですか？ ……そう言うのはやった事がないんですけど」

「いや、そう言うことはしないよ。ただ、この辺りに落ちている物を持って来て欲しいだけだよ」

「……はい？」

イマイチ理解出来ない俺は、詳しい事を聞くことに為った。

この人が言うには、博麗神社は幻想郷と外の世界の境に位置するらしい。

二つの世界の境の為か、神社の周辺にはよく外の世界からの道具が流れ着くとか。



それでこの人は、そう言った道具を集めて店で売っているみたいだ。……要するに、道の整備の途中で見つけた道具を自分の店に持って来て欲しいんだと。

「勿論お礼もするけど……如何かな？」

「その位でしたら良いですよ。寧ろ、道具が落ちていて邪魔だと思つてた位ですし」

「なら交渉成立だね。……僕は森近 霖之助。君の名前は？」

「俺はリュウ。ただのリュウです」

「？龍？？ 随分と立派な名前なんだね」

「そんな大した名前じゃないですよ。なんせ、霊夢が適当に付けた名前ですから」

「……あの子は何を考えているんだ」

「あ、あはは……」

多分、何も考えてなかつと思えますよ。

なにせ名付けた理由が？俺の存在が竜だから？って理由ですし。

……いや、ある意味霊夢らしい名付け方なのか。

その後、簡単に打ち合わせをした俺達は、そろそろ日が暮れて来たと言つ事もあつて、今日は此処までにする事にした。

「それじゃリュウ。出来るだけ定期的に頼むよ」

「頑張ります」

森近さんと別れた俺は、帰り道に落ちている道具を拾いつつ博麗神社に帰る事にした。

……旅してた時の癖で落ちている物を大量に神社に拾ってしまい、その所為で霊夢にこっ酷く怒られたのは、また別のお話。

### 第十三話 妖怪退治・前編（前書き）

お陰様で、この小説の総アクセス数が一万を突破しました！

これも偏に読んで下さった皆様のお陰です。有り難う御座います  
！！

……えっ？　なんで一万アクセスで喜んでいるのかって？

それは、この小説の目標が【最終回までに十万アクセス突破】だからです。

### 第十三話 妖怪退治・前編

今日も元気に山道製作中のリュウです。

それと同時に茂みに落ちている道具も拾ってます。

……そしてふと考え込むと、俺は一体何をしているのかと考え込んでしまう。

いや、自分で言い出した事なんだし、最後まで責任持たないとな。

「でも、考え込んでしまうのも仕方が無いよな」

草刈りの方は終わったって、今度は道の制作に入ったんだけど……予想以上にめんどい。

当初の予定通り、魔法を使って地面を弄っているんだけど周りの木が物凄く邪魔。

根っこごと土を掘り返そうかと考えたけど、それをすると今度は掘り返した木を如何するかが問題に。

木の一本や二本程度なら燃やせば良いけど、此処は山の中で周りには木が沢山生えている。

そんな中で火を使おうものなら、山火事は確定だって。

こう言った事情から、木の根を掘り返さない様に魔法を使うハメになった。

この作業が中々に大変で、正直なところ草刈りよりも大変なんだよ。手加減して魔法を使わないといけないから、作業効率が中々上がらない。

……ほんと、俺は一体何をしているのやら。

こんな事ならずと獣道のままでも良かった気がする。

「……はあ」

「こんな山の中で溜息を吐いて如何した？」

「ふえ？」

誰も居ないと思って油断をしたいてから、掛けられて声に変な返事をしてしまった。

変なところを見せてしまったと思いつつ、突如現われた人物と向き合うことに。

其処に居たのは、青を基調にしたワンピース風の服を着た、青白い長髪の女性だった。

「それで、こんな所で如何したんだ？」

「いえ、ちょっとだけ自分のしている事を見つめ直してしまして……」

「……詳しい事情は聞かないが、自分のしている事の正しさを信じられなければ、何も出来ない思うぞ」

「（正しいとかそう言うレベルじゃないと思うけどな……）」

「まあ、それは兎も角。この山は妖怪が出るから襲われない内に帰った方が良い」

「そう言う貴女はどちらに？」

「わたしはちょっと神社に用があるんだ」

「博麗神社に？」

珍しい……と言つか、俺が居候してから初めての参拝客じゃないか？  
でも、魔理沙や日傘を差していた女性の例もあるし、この人も参拝  
客じゃない可能性もあるな。

まあ、どちらにせよ、博麗神社久々の客って訳だ。

「でしたら俺も一緒に行きますよ。妖怪に襲われるかもしれない  
し」

「いや、それには及ばない。わたし一人でも大丈夫だ」

「そうだとっても、俺はあの神社に居候してるので道は一緒なんで  
すよ」

「あの神社に居候って……よく無事だな」

「……その言い方はなんですか」

「あまり良い噂は聞かないと言っ事だ」

……一応、参拝客が来やすい様に道を整備してるけど、この人の言  
い方だと道があっても来るか分からないな。  
色々と頑張っているのにこれじゃ空しくなる一方だな……。

「……はあ」

「と、とりあえず、妖怪に襲われる前に向っとしよう」

「……そうですね」

空しさでテンションが下がっているのを自覚しつつ、俺はこの人と共に博麗神社へ向かう。

どうやら急ぎの用事らしく、神社へは空を飛んで行く事になった。

……この世界の住人って皆空を飛べるのかな？ だとしたら、道を作る必要って何処にあるんだろ。

そんな事を考えると、さっきよりも空しくなってきた。……とりあえず、深く考えないようにしよう。

……

……

…

空を飛んで、最短距離で神社へと辿り着いた俺達。

境内には霊夢の姿はなく、神社は物音せず静まり返っていた。

まあ、この時間なら縁側でお茶を飲んでいるか、昼寝しているかのどっちかだろう。

案の定、俺達が母屋の縁側に行くと、座布団を枕にして眠っている霊夢の姿があった。

「……一つ聞きたいのだが、博麗の巫女は何時もこうなのか？」

「大体こんな感じですね」

俺が来る以前の生活は知らないけど、少なくとも俺が来てからの霊夢はこんな感じだ。

まあ、霊夢は霊夢で神殿周りの掃除をしてるんだけど、それも直ぐ

に終わるから後はだらけている事が多いな。……あ、他にも炊事洗濯と言った事もやってるか。

「まったく。当代の巫女がこんなにもだらしないとは思わなかったぞ」

「あ、あははは……」

何か言つて否定すれば良いのかも知れないけど、だらしないのは事実だからな。

なんて言えば良いのか言葉が見つからないよ。

まあ、それは兎も角として、今は霊夢を起こすとするか。

「おゝい、霊夢。起きろ」

「……ZZZZZ」

「……駄目だ、起きる気配すらない」

「退いてくれ、わたしが起こす」

そう言われたので、彼女に代わって貰うと……徐に霊夢の肩を掴んで身体を起こした。

すると、彼女は仰け反るように首を逸らしたと思ったら……そのまま強烈な頭突きを霊夢の額に叩き込んだ。

額同士がぶつかった時の音が？ゴソツ？じゃなくて、？ガンツ！？って感じだな。

……なんて言うか、骨と骨がぶつかった音じゃない気がする。

「いっつったあゝッ！？！？！ 誰よ！ いきなり頭突きなんて叩



き込んだのは?!」

「漸く起きたか」

「……ちよつとリュウ。誰よコイツ」

「え〜つと……」

「わたしの名は上白沢 慧音。今日は、博麗の巫女殿に妖怪退治の依頼で参った」

「依頼ねえ」

彼女こと上白沢さんが持つて来た依頼と言つのはこう言つものだ。つい先日、人里の子供達が近くの川辺で変な人形を発見したとか。その人形は土や木ではない素材で出来ており、とても変な形をしていたそうだ。

妖怪かと思つた子供達は大人に知らせ、その人形を調べようとしたらしい。

調べる為に人形に触れた直後、突如人形は動き出し暴れ始めたとか。この騒動で、幸いにも死者は出てないが、調査に向つた数人が怪我をしたみたいだ。

「アレがなんなのかは解らないが、このままでは被害が出る一方。そうなる前に退治して貰いたい」

「……妖怪退治じゃなくて人形退治とは、また変な依頼ね」

「それは解っているが、里の者ではアレを退治する事は出来ない。だから頼む、博麗の巫女殿」

「報酬は？」

「里で取れた野菜と、米俵一俵で如何だ？」

「まあそんな所か。……それでソイツは今何処に居るの」

「里の者の話では、一頻り暴れた後『無名の丘』方面に逃げたとか」

「了解。それじゃちやつちやつと終わらせますか」

「霊夢、俺も手伝おうか？」

「必要ないわ。それよりも、アンタはあのガラクタを霖之助さんの店に売りに行きなさいよ」

上白沢さんからそれだけを聞いた霊夢は、立ち上がり自室に向かう。拾ってきた物に関しては置いておくとして、本当に霊夢の手伝いをしなくても良いのだろうか？

異変を解決したり、こう言う依頼が来るんだから実力があるのは確かだ。

……でも霊夢は人間だ。脆くて危うい人間なんだ。

そんな風に考えてしまうのは、俺が竜と言う存在だからだろうか？

「それじゃちょっと行って来るから、さっさと売りに行きなさいよ」

「……ああ」

「それじゃあね」

それだけ言つと霊夢は何時もの様に飛んでいった。

『無名の丘』と言つのが何処なのか知らないけど、恐らくそつち方面に向かつたんだろう。

あんまり良い予感はないけど、霊夢の実力ならきつと大丈夫だよな。

「……………」

「君は随分と心配性なのだな」

「……………そうでしょうか？」

「嗚呼。この幻想郷では確かに妖怪は人を襲うが、博麗の巫女を襲う妖怪など居やしない」

「……………」

「それに怠け者とは言え当代の巫女。ならば、その実力は確かなの  
だろう」

「そう…ですね」

確かに上白沢さんの言つ通り霊夢は強い。

どんな相手でも物怖じしない彼女なら、たかが人形に負けたりしない筈だ。

しない筈……だけど、それでも不安が拭い切れないのは、俺が心配性だからだなんだろうか？

第十三話 妖怪退治・前編（後書き）

長くなったので二つに分けてみました。

### 第十三話 妖怪退治・後編

霊夢 Side

上白沢とか言う人の依頼を受けて『無名の丘』にまで来たけど、相変わらず何も無い丘ね。

まあ、春になれば鈴蘭が咲き誇るけど今は夏の終わり頃。

鈴蘭の見ごろはとづくに過ぎてるし、そろそろ季節も変わるから余計にね。

「まあ、そんな事は兎も角。例の人形は何処に居るのやら」

今の時期のこの丘は、ただの広い草原だから直ぐ見付かると思ったんだけど……居ないわね。

彼女が嘘を付く理由もないし、こっち方面に逃げたんでしようけど何処に行ったのやら。

私は空から『無名の丘』に落ちている物を探し始める。

丘には時折風が吹き抜ける程度で、コレと言って目ぼしい物はない。此処で見つけられないと少々面倒になりそうと思っていると、何処からか戦闘音が聞こえて来た。

私は音が聞こえる場所を捜していると、今の地点から南の方に煙が上がっているのを発見する。

他に手掛かりもないから、念のため様子を見に行く事にした。

……

……

煙が上がっている場所に辿り着くと、其処では腹話術で使う人形とはにわ……土偶？

兎に角、変な形の人形が戦っている光景を見つけた。

戦っていると云っても、変な形の人形が周りなどお構い無しに暴れているだけなただけ。

「土でも木でもない材質の人形。多分、人里で暴れた人形つてのはアレの事ね」

もう一方の人形は知らないけど、あの暴れているのはなんとかしな  
いと。

このまま暴れさせてたら、人間だけじゃなく妖怪にも被害が出そう  
だし。

……いや、アイツ等なら多少被害が出てても問題ないか。

「ちょっと其処の暴走人形。コレ以上暴れるなら只じゃおかないわ  
よ」

「わ、私の事ですか?!」

「……アンタじゃない。アンタじゃ」

最後勧告として声を掛けたが、反応したのはもう一方の人形だった。  
例の人形は私の声など届いていないのか、今も暴れ続けている。  
元から交渉する気は無かいけど、此処まで無視されると腹が立つわ  
ね。

多少の苛立ちを感じつつ、私は持って来た針と札を飛ばし、暴走し

ている人形に叩き込んだ。

私の弾幕は確かに命中したけど、人形に大したダメージは無く、未だに暴れ続けている。

「まさか、効いてない？」

あの人形が何で出来ているのか知らないけど、針は突き刺さっても居ないし、札も風で吹き飛んでいった。

ただの妖怪だと思っていたけど、どうやら私の見当違いだったみたい。

アレはそこら辺に居る妖怪ではなく本物の人形。だから、弾幕ごっここのルールも適用されない。

なら今回は、相手を懲らしめるのではなく完全に駆除するだけね。

「……全く、こんな事ならもっと装備を整えれば良かった」

愚痴を言いつつも、私は持って来たスペカの一枚を取り出す。

そのスペカを発動させようとしたが、暴走人形は腕と思われる部分を私の方に向けて来た。

アイツの腕はどうも砲身の様な形になっていて、銃口から私に向かって何かを発射して来る。

咄嗟の判断で回避する事が出来たけど、人間の私があんなの喰らったら即お陀仏ね。

何処の誰が作ったのか知らないけど、面倒なものを作ってくれたわ。

「宝符『陰陽宝玉』！」

私はあの暴走人形に近付き、陰陽が描かれた宝玉を叩き込んだ。

宝玉を叩き込まれ奥へ吹き飛ばされた人形だが、顔の部分が少し凹んだ位でまだ立ち上がって来た。

『陰陽宝玉』であの程度なると、『封魔陣』も期待出来ないわね。此処はやっぱり『夢想封印』しかないけど……発動するタイミングあるかしら？

私はスペカを取り出し攻撃を仕掛けようとする、アイツはそれよりも早く射撃して来る。

アイツの弾は単発だけど、その速度が滅茶苦茶速い。

それを両手で交互に放たれば、コッチは避けるので精一杯。

『夢想封印』は発動までに少し時間が掛かる。其処をつかれると中途半端にしか発動しない。

アイツに隙が出来るのを待つしかないけど、それも何時に為るか分かったもんじゃない。

コッチの通常弾幕が効くならガリガリ削るんだけど、コイツにはその手が使えない。

それなのに、アイツは遠慮なく攻撃して来るなんて卑怯よ！

こんな事に為るなら、リュウの奴を連れて来れば良かった……って、私は何を考えてるのよ！

神社を出る時にはつきり必要ないって言ったのに、ピンチになって居てくれればって何よ！

私は誰かに頼る事無く戦ってきた。今までもそうだし、此れからだってそう。

だから、アイツの力に頼る気は毛頭ないわよ！！

「たく、何を考えてるのよ私は……って、しまッ？！」

余計な事を考えていた所為で、アイツの射線に入ってしまった。弾は既に発射されているし、此処は結界を張って弾を防ぐしかない。私は直ぐに目の前に結界を張るけど、アイツの弾は貫通して来た。



結果が破られるなんて思っていなかったから、次の手を考えていなかった。

アイツの弾は後30cmもしないで私のお腹を貫通する。今から回避なんて間に合う訳がない。

私は弾で貫かれることを覚悟し瞼を閉じたが……痛みは何時まで経っても感じなかった。

それどころか、誰かに抱き抱えられている様な感じがする。

私はゆっくりと瞼を開くと……其処には人と竜の中間の様な存在の姿があった。

「大丈夫か、霊夢」

「え……あ……」

突然の出来事で困惑してるけど、この存在から感じる力でコイツが一体誰なのか直ぐに解った。

見た目なんかは完全に別人だけど、コイツは間違いなくリュウだ。

なんでコイツが此処に居るのか解らないけど、一つだけはっきりと解る事がある。

それは……私はリュウに助けられたと言う事だ。

「あ、アンタ…如何して……」

「悪いが話しは後だ。それよりも来るぞ」

それだけを言うと、リュウの奴は私を上空に放り投げた。

私を放り投げた直後に、人形の弾丸がリュウを貫くが……アイツはこの程度で怯んだりしなかった。

それどころか、貫かれた事などお構い無しにリュウは人形に殴り飛

ばす。

殴られた人形の身体はその部分は凹むけど、この程度では止まりはしない。

殴り飛ばされた事で距離を取った人形は、その位置から私達に向かって弾を連射して来る。

だけど対象が私一人から二人に変わった事で、人形の弾幕にかなりの隙間が出来る。

そのお陰で回避が先程よりもずっと楽になった。

「霊夢、一気に決めるぞ！」

「私に命令するな！！」

私はつい悪態を付いてしまったが、リュウはそんな事は気にせず人形に突撃していった。

放たれる銃弾をかわし間合いを詰めると、人形を上空へ高々と殴り飛ばす。

飛ばされた衝撃で人形の動きが遅くなるけど、未だに停止する気配は無い。

けれど、私がコレを発動するには十分な隙が出来た。

「霊符『夢想封印』！」

私の周囲に出現した七色の光弾は、物理法則を無視し一斉に人形へと向かって行く。

人形は光弾を避けようとするが、空中では動けないのか、それともアイツの攻撃が効いたのか、まともに動く事が出来ず全ての光弾が直撃した。

被弾した人形は動きと止め、そのまま地面に激突し粉々に壊れた。

「ふう。…大丈夫か霊夢」

力を押さえ込んだのか、何時もの姿に戻ったリュウは何食わぬ顔で私の傍にやって来た。

それがなんだか気に入らなかった私は、リュウの顔を思いつきり引つ叩いた。

「いたツ?! なにすんだよ霊夢!!」

「……アンタ、一体何しに来たのよ」

「なにつて、霊夢を助けに……」

「私を助けに来た? そんなの大きなお世話よ!!」

「なツ?! 助けに来たのにそんな言い方は無いだろ!!」

「うっさいわね! 誰が何時助けに来てくれって言ったのよ!!」

「俺が来なかったら危なかったのは確かだろ!!」

「お腹が撃ち抜かれた程度じゃ死なないわよ!」

「そう言う問題じゃないだろ!!」

こうして私達は、お互いに見つとも無く怒鳴り声を挙げて口喧嘩を始め、今まで感じていた不平不満を思いつきりぶつけ合った。

「大体、なんで境内の掃除は何時も俺なんだよ! 偶には霊夢がや

れよー!!」

「アンタ居候でしょ！ なら、文句言わないで家主に従いなさい！」

「神社は霊夢の家だろ！ だったら少しは自分でやれー!!」

「私だって色々とやってるじゃないー!!」

「昼寝と茶を飲んでるだけだろー!!」

「うるさい！ アンタだって、山道整備とか無駄な事に時間を費やしてるじゃないー!!」

「無駄って言うなーッ!!」

自分でも驚く位に大声を出して、今まで溜めていた事をリュウにぶつけた。

最後にこんな風に喧嘩をしたのは一体何時だったか、そんな事も分からない位久し振りの大喧嘩。

ずっと大声を張り上げているからか、段々と喉が嘎れて声が出なくなり始めた。

それはリュウも一緒に、お互いに少しずつ声が小さくなっていった。

「大体、なんで助けに来たのよ…。必要ないって言ったじゃない」

「霊夢が心配だったから」

「それはさっきも聞いたわよ。なに？ アンタ 竜と違って脆い人間がそん

なに心配？」

「……確かにそれもある。だけど、俺に取って霊夢は大切な人だ。だから心配になるんだよ」

こ、コイツ。よくこんな状況でそんな台詞が言えるわね。

前にも同じ事言われたけど冗談……って事は無いでしょうね。

冗談なんかでこんな事が言えるとは思えないし、リュウはそんな事を言うタイプじゃない。

だとすると……コイツ、本気で言ってるの？！

あの時は異変解決を優先して適当に流したけど、改めて言われると結構困るわね。

「ちよつと、いきなり変な事言わないでよ」

「変な事ってなんだよ！俺は真剣なんだ！」

「だったら尚更困るんでしよう！！」

「困るってなんでだよ！……もしかして、霊夢は俺が居ると邪魔なのか？」

「それは……その……」

……如何、なんだろ。私、そんな事今まで考えた事なかった。

なんの前触れもなく突然現われた奴だけど、邪魔だとは思わなかったな。

今まで一人と思って生きてきたけど、気が付いたらリュウが隣りに居るのが当たり前になってた。

その事を邪魔だとか迷惑だとか感じなかったし、隣りに居る事をこ

く普通に受け入れていた。

……もしかして、コレってそう言う事なの？

いや、でも、私今までちゃんとした恋愛とかないから、そう言うのはイマイチ分からないし……。

「如何なんだ霊夢。もし、邪魔だつて言うならばっきり言って欲しい」

「いや、その……アンタが嫌いつて事はないんだけど、本当に好きなのか自分でも気持ちの整理が付かないと言うか……／＼／＼」

「……はい？」

「でもでも、リュウと一緒に居るのが当たり前だと思ってたから、今更何処かに行かれるのも困るって言うか……あくもう！ 何を言ってるのよ私は……！」

「いや、本当に何を言っているんだ？」

「兎に角！ まだ気持ちの整理が付かないから、少し私に考える時間を頂戴……！」

「え、あ、うん。分かった」

「ホント?! ありがとう、リュウ！」

イマイチ肅然としない返事だったけど、とりあえずコレで考える時間が出来たわね。

この間に自分の気持ちをはっきりさせないとね。……だけど、答え出すまでにどれ位掛かるかしら？

恋愛経験なんて皆無なんだし、誰かに興味を持ったのは今回が初めてだから、かなり時間が掛かりそうね。……でも、まあ、コイツとは一緒に暮らしてるんだし、変に焦る必要はないわよね。

「え〜っと、霊夢。俺は今まで通り博麗神社に居て良いのか？」

「何言ってるのよ。そんなの当たり前じゃない」

「そ、そっか」

「分かったんなら早く帰るわよ。人里で報告と報酬を貰わないといけないんだから」

「俺、荷物持ちですか？」

「当たり前でしょ」

リュウは私の返事が予想出来たのか、やれやれと言った様子で溜息を一つ吐いた。

その【分かってますよ】みたいな態度に少しムツとなるけど、此处は我慢して先を急ごう。

コイツがこう言う態度を取るのには予想出来ていたし、今回はお相子だ。

「それじゃ行くわよ、リュウ」

「嗚呼、分かった」

ついさっきまで怒鳴り合っていたのに、今では並んで空を飛んでいる。

お互いに単純だなと思いつつも、「こつこつ言つのも悪くないと思つ。  
……少なくとも私は嫌いじゃないかな。



第十三話 妖怪退治・後編（後書き）

勘違いから始める恋ってあると思うんだ。異論は認める。  
……それにしても、コレ二つに分ける必要があつたかな？

## 第十四話 吸血鬼の戯れ

人里で暴れた人形を破壊した俺達は、その残骸を回収し森近さんの店に持って行く事にした。

霊夢曰く、コレは外の世界で作られた物じゃないし、幻想郷の物でもないそうだ。

だから？未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力？を持つ森近さんに鑑定して貰う事になった。

用途については、あの暴走具合を見る限りだと戦闘用だと思うけどな。

まあ、回収した道具をあの人の所に持って行かないと行けなかったし、丁度良いと言えば丁度良いんだけど。

「それじゃ行くわよ、リュウ」

「おうっ」

大きな籠一杯の道具を持って、俺は霊夢の案内の元『香霖堂』へと向かった。

……霊夢と言えば、あの一件以来妙によそよそしくなったな。

普通に暮らしている分は大丈夫なんだけど、俺が近付くと？近いッ！？とか言って殴って来るんだよ。……俺、何か悪い事したかな？コレと言って思い当たる節は無いし、本人に聞いても？なんでもない？って返されるし。

ホント、幻想郷は謎に満ちているよな。……この場合、霊夢が謎なのか。

霊夢に案内されて歩く事、一時間弱。漸く森近さんの店に到着した。飛んで行けば30分も掛からないらしいけど、俺はこんな重い物を持ったまま空を飛ぶ事が出来ない。最初は飛んで行こうかと思っていたんだけど、荷物が重過ぎて上手くバランスが取れなかった。

そう言った事情から歩いて行く事になった訳だが……未完成だけど、頑張つてあの道を整備していた甲斐があったよ。獣道のままだったら、物凄く歩き辛かつたらうしな。

「こんにちわ。霖之助さん居る？」

「いらっしやい霊夢。今日はリュウも一緒か」

「どもです。頼まれていた通り、道具を集めて来ましたよ」

「有り難う」

「そのガラクタ買い取る序でに、変な人形の鑑定もしちゃつてよ」

「変な人形？」

俺は背負っていた大きな籠を店のカウンターに置いた。

籠の中には、古い本や黒い円盤状の何かに用途不明の箱なんかがある。

幾つも入っている中で、一番の存在感を放っているのが例の人形だ。そして、この中で一番重かつたのもこの人形だ。……本当、何十？ 在るんだツてくらいに重かつた。

「……た、確かに変な人形だね。これは如何したんだい？」

「この間『無名の丘』で暴れていたのを、私とリュウで倒したのよ」  
「それで、この人形が異変の前兆だと困るから森近さんに鑑定して貰おうって事に」

「僕の能力は飽く迄、その道具の名称と用途を知るだけなんだけど……」

「でも、何も知らないよりはマシでしょ？ だからお願いね」

「やれやれ。……君も苦勞してそうだね」

「あ、あははは……」

「……其処は否定しなさいよ」

否定しろとか言われても、苦勞してるのは事実だからね。  
別にあの神社に居たくなる程じゃないけど、即答で否定出来ないんだよ。

「とりあえず、さっさと鑑定するから暫く待つて居てくれ」

「手早くお願いね」

「……無茶を言わないでくれ」

森近さんはカウンターに置いた籠を抱えると、そのまま店の奥に引っ込んでいった。

俺達は鑑定が終わるまで暇なので、この店の売り物を覗く事にした。

鑑定が始まって既に一時間が経った。  
霊夢は暢気にお茶を飲みつつ、店に置いてあった本を読んでいる。  
一方俺は、この店の商品を片っ端から調べていた。

この店は外の世界の道具を取り扱っているから、色々面白い道具を置いてある。

……とは言え、俺には殆どの商品の用途が分からず、見ては直ぐに他の物を手に取っている状態だが。  
外の世界は、幻想郷とは違って科学技術が発展した世界だとか。  
その為だろうか、この店に置かれている物や俺が見つけた物の殆どが、この世界の雰囲気に合わない物ばかりだ。  
此処まで雰囲気に合わない物ばかりだと、外の世界とやらが如何なっているのか気になるな。

店の中を物色していると、突然店の扉が開いて誰かが入って来た。  
霊夢は興味ないみたいだけど、俺は興味が湧き扉の方を覗き込んだ。  
扉の前に居たのは、レミリア・スカーレット 紅い屋敷の幼い主と銀髪のメイドだった。

「あら？ 珍しい所で会ったわね、カイザー 皇帝さん」

「……その呼び方止めて欲しいんだけど」

「だってコレが貴方の名前なんじゃないの？」

「俺の名前はリュウだ。それ以外の無いモノでもないよ」

「そう。……ところで、貴方達は何をしているのかしら？」

「俺達は」

「霖之助さんを待つてるのよ。アンタ達も買い物なら暫く待った方が良いわよ」

俺が答えようとしたが、それよりも先に霊夢が彼女の質問に答えた。答えはしたけど、霊夢は相変わらず本を読んでいて、まともに彼女達の顔を見ていない。

流石にその態度にメイドは険しい表情になるけど、レミリアは特に気にしては居ない様子だった。

「そうなの。なら、私達も少し待ってようかしら」

「お嬢様、宜しいのですか？」

「構わないわ。…それよりも咲夜。何か面白い物が無いか捜して来なさい」

「畏まりました」

咲夜と呼ばれたメイドは、レミリアの無茶振りを二つで了承した。珍品ぞろいの香霖堂だけど、我が侂な彼女を満足させられる様な物があるのだろうか？

と言っか、あんな無茶振りを二つ返事で了承出来る彼女は凄いと思う。

「それで、貴方は何をしてるのかしら？」

「…俺も君と同じで暇潰しの物を探してるんだよ」

「貴方と同じなんて心外ね。それじゃ、私が暇人みたいじゃない」

「……………違うのか？」

「違うわよ」

うらむ。レミリアの私生活なんて知る訳ないし、はっきり否定されると何も言えなくなるな。

でも、この子が何か仕事をしてるとは思えないんだよな。

あの屋敷でも、偉そうな椅子に座ってふんぞり返っているだけな気がするし。

「……………貴方、今不愉快な事を考えなかった？」

「多分、気のせいだよ」

「そうかしら？」

「そうだよ」

「……………」

な、なんだこの妙な沈黙は。物凄く居心地が悪いぞ。

確かに不愉快にさせる様な事を考えたけど、それは心の中での事だし、聞かれたりしてない筈。

だと言つのに、この居心地の悪さ一体なんだ?! レミリアは心の中を読む事が出来るとも言つのか!?

……微妙にキャラが崩壊してるから、一旦落ち着け俺。

「お嬢様。面白い物を発見しました」

「あら、何かしら? ………………ねえリュウ。コレを食べてみる気は無い?」

「ん? どれだ?」

レミリアが俺に見せて来たのは『おじや』と書かれた箱だった。

……ただ、レミリアの持ち方が少し可笑的い。

幾らこの子が幼いとは言え、箱に書かれている文字を隠すように持つのは変だ。

と言うか、『おじや』と言う名前の方にあまり良い思い出が無いんだよな。

「……………とりあえずだ。その箱をコッチに渡してくれないか?」

「いやよ。貴方は? イエス? か? はい? で答えなさい」

「それ拒否権ないよな?!」

「そんな事ないわよ。だから答えなさい」

「……………なら? ノー? で」

「却下」



「……………」

コイツ、俺に何が何でもこの『おじや』を食べさせる気だ。そんな事無いとか言いつつ、即答で却下して来たのが良い証拠だ。……さて、如何する？ このまま言い合いしていても勝てる気がないぞ。

だからと言って、逃がしてくれる訳が無い……と言うか、既にメイドが『おじや』を用意してる。

マジで如何しよう……。何か上手く逃げられる手が思いつかないぞ。

「さあ、早く食べなさいリュウ。嫌だと言うなら、無理矢理食べさせるわよ」

「くッ」

ビリッ

……今、何かが破ける音がしたけど、そんな事を気にしてる場合じゃないか。

既にメイドはスプーンを持ってスタンバイしてるし、レミアは逃げられない様に臨戦態勢だし……万事休すか？

いや、案外アレは普通の『おじや』って可能性が……ある訳ないよな。

「全く、貴方も強情ね。……咲夜、やりなさい」

「承知しました、お嬢様」

「ちよっ、やめッ?!」

既に俺に逃げ場は無く、このまま嫌な予感しかしない『おじや』を食べる破目になるのかと思いきや

「……君達、僕の店で何をしているんだ？」

「森近さん!？」

救いの主が店の奥から現われてくれた。

……ヤバイ。森近さんに光が差し込んで輝いている様に見える。

「チツ。空気の読めない奴ね」

「…? 意味が分からないのだが……」

「そんな事より森近さん! 鑑定の結果は?!」

「あ、嗚呼。……あの人形の名前は『バーサーカー』。用途は敵を殲滅する事だ」

「見たまんまの用途って訳ね」

「そうらしい。……ところで霊夢。その破けた本は買い取ってくれるんだろうね?」

「嫌よ。それにこの本は最初から破けていたわ」

「……そんな事は無かったと思うけどな」

あ、さっきの破けた音は霊夢が本を破いた音なのか。

何を思っただけそんな事をしたのか知らないけど、流石に店の商品を破

くのは不味いだろ。

「まあ、それは兎も角して。リュウ、買い取った商品の決算をした  
いんだが」

「はいはい」

俺は二人から逃げ出し、店のカウンターに近寄った。

それなりの量を持っていったから、あの竹竿が買える位の値段に為  
っている筈。

もし無理だったら……自作するしかないか。釣り糸と針くらいは買  
えるだろ。

「例の人形も含めると、一万円って所だね」

「……予想以上に高い」

「あの人形に使われている材質も珍しいし、制作技術も独特だから  
ね。壊れていなかったらもつと高値で買い取りたい位だよ」

「それは止めておいた方が良いわよ。アレが暴走したら、霖之助さ  
んじゃ一撃で死ぬだろうし」

「……そんなに危ない物なのかい？」

「ええ。まあ」

準備不足だったとは言え、霊夢一人でも倒し切れなかった相手だ。

この狭い店で暴走でもされたら、森近さんじゃきつと避け切れない  
だろうな。

「ところで霖之助さん。アレが何処で作られた物か分かる？」

「……少なくとも幻想郷や外の世界の物じゃないね。一番可能性が高いのは『魔界』だと思うけど」

「成る程ね……」

俺は『魔界』とやらは初めて聞いたけど、霊夢には心辺りがある様だ。

彼女の顔を見るとそれは分かるけど、なんであんなにも嫌そうな顔をしているんだ？

その後俺は、森近さんから代金を受け取った。

あの人形を手元に残しておく気の無かったので、他の道具と一緒に買い取ってもらう事に。

お金を貰った後、また二人に捕まる前に霊夢を連れて急いで帰る事にした。

手を繋いだ時、霊夢の顔が赤かった様な気がするけど……きっと気のせいだろ。

## 第十四話 吸血鬼の戯れ（後書き）

オマケ

「……お嬢様、このおじやは如何いたしましょう？」

「店主さん。コレを食べてみる気は無い？」

「まだ死にたく無いから、遠慮しておくよ。」

「でも、『おじやデス』って名前だったら魅力的じゃない？」

「その名前は『おじやデス』じゃなくて、『デスおじや』だからね。…後で確りと代金は請求させて貰うよ。」

「あら、つれないわね。」

第十五話 紅魔館の図書館

夏も終わりに近付き、季節はそろそろ秋の装いと為り始めた。未だ残暑は続いているものの、木々の色づきや日暮れを見ると、もうすぐ秋なんだと思い知らされる。そんな中でも博麗神社は何時もと変わらず、俺と霊夢は母屋の縁側でお茶を啜っていた。

「……もうすぐ秋だな」

「そうね」

「秋って何かあったけ？」

「落ち葉が大量に出るから、掃除頑張ってるね」

「霊夢もやれよ」

「……最近のリユウって、私に対する言葉遣いが荒くない？」

「そんな事は無い。仮にそうだとしても、それは霊夢に心を許し始めた証だと思っ」

「……そう言う事しておくわ」

他愛の無い話をしつつ、俺達は手元にあるお茶を啜る。神社への山道も大体出来たし、今はコレと言ってする事が無い。

この間納品で、予想以上にお金も入ったし、釣竿でも買って何処かに釣りに行っても良いかもな。

頭の中ではそんな事を考えているんだけど、なんとなく神社でまつたりとしていた。

別に動きたくない訳じゃないんだが、此処最近は道具蒐集や山道整備で動いてたからな。

偶にはこうしてノンビリしても良いよな。

「よっ、ご両人。遊びに来てやったぜ」

「「帰れ」」

「……いきなりヒデエな、おい」

縁側でのほほんとしていたら、いきなり魔理沙がやって来た。

前に来た時も唐突だったけど、今回も唐突に来たな。……まあ、事前に連絡を取る手段がないんだし、来るのが唐突に為るのは仕方が無いのか。

でも、前みたいに『マスターパーク』を撃たれるのは嫌だなあ。

「で、今日は何しに来たのよ。魔理沙」

「いやな。この前の紅い霧異変の事を聞きたくて」

「……アレって随分前な気がするけど」

「まだ一月も経ってないぜ」

「そうだったけ？」

「そうみたいね」

ホントに最近色々動いていたからな、時間の感覚が少し可笑しくなってるみたいだ。

……それにしても、魔理沙も行き成りへんな事を聞いて来るな。あの異変の事を聞いたって、特に面白い事なんか無いと思うぞ。

「アンタも物好きね。アレは只の異変よ」

「話す位別に良いだろ。わたしは現場に立ち会えなかったんだし」

「まあ、別に良いけどね」

個人的には余り話したくないけど、霊夢が良いなら別に良いか。

……

……

…

多少ボカしつつ、霊夢はあの異変の事を魔理沙に教えた。

ボカした部分は、主に俺の力の事だ。

幻想郷で暮らしていれば、何れはバレると思うけど……別に話さなくても良い事か。

それに本物の神様も居る幻想郷だ。竜の一体が神社に住み着いても問題はないだろう。

「あの異変の事はこれで全部よ」



「吸血鬼の住む館かあ……。なんかお宝とかあるのかな？」

「知らないわよ、そんなの」

「……お宝か如何かは知らないけど、あの屋敷の地下に大量の本が在ったな」

「大量の本って……地下に図書館が在るって事？」

「そう言う事。なんの本かは知らないけど」

「地下の図書館か。……こりやお宝の匂いがするぜ！ リユウ、案内頼む！！」

「……へっ？」

突然の出来事で、何が起こったのか把握するのに時間が掛かった。とりあえず、俺は魔理沙に拉致された事だけは理解出来た。

……うん。如何してこうなった？ 別に俺を連れて行く必要なんて無いよね？

「ちよつと魔理沙?! 勝手にリユウを連れて行かないでよ!!」

「少し借りるだけだぜ!!」

「俺は物じゃねえええツ!!」

必至の叫びも空しく、俺は魔理沙に腕を引っ張られたまま空を飛ぶ羽目に為った。

しかし、俺を引っ張って空を飛べるなんて、魔理沙って意外と力が強いのかも。

……

……

…

魔理沙に引つ張られるまま、俺は再び紅魔館へとやって来た。

一応、逃げ出そうと抵抗はしたものの……脅されてあえなく屈服してしまった。

……ゼロ距離でマスパを放つとか、幾らなんでも酷いと思うんだ。

今回はトランスする暇がなかったから、既にボロボロです。……物凄く帰りた。

「此処が紅魔館かあ。思ったよりもデカイな」

「そうだな……」

「ん？ 如何したりユウ？」

「いや、門番なのに門を見張ってないって如何言う事なのかと」

「きつと昼寝の時間なんだろ」

「……それで良いのか紅魔館」

正直な話、前回みたいに門番が立ちはだかると思っていたんだけど、寝てるって如何言う事だよ。

個人的には、門番が俺達を撃退してくる事を期待してたのにな。  
……あ、魔理沙に迎撃されるに決まってるか。じゃあ、此処に居る  
門番の意味って一体……。

「それじゃ、図書館への道案内頼むな」

「……へい」

物凄くげんなりしながら、俺と魔理沙は紅魔館に侵入した。

屋敷の中は相変わらず紅いが、そんな事は気にしてられない。

あのメイドと主に出くわす前に、さっさと図書館に魔理沙を置いて  
こないと。

「へえ」。外だけじゃなくて、中も紅いとか悪趣味だな」

「確かに此処まで紅いと、他の色が欲しくなるな」

「例えば何色だ？」

「例えば………白とか？」

「それだったら目出度い感じになりそうだな」

「そうなのか？」

あの世界で紅白が目出度いって風習は無かったと思う。

……と言っか、ずっと戦い続けていたからそう言っものは良く分から  
ないな。

そう考えると、かなり寂しい人生を送ってたんだな俺。

「……はあ」

「如何したリュウ？ 恋わずらいか？」

「なんでそうなるのさ」

「其処は乗って来いよ。つまらないな」

「……じゃあ、俺が告白したら如何する心算だ？」

「ごめんなさい。わたし達、良いお友達で居ましょう」

「うん。そう来ると思ったよ」

「お、リュウもわたしの付き合い方が分かって来たな」

「……出来る事なら解りたくなかった」

「酷いなおい」

俺は魔理沙を適当にあしらいつつ、地下にある階段を目指した。

その道中で、この屋敷の妖精メイド達が襲って来るけど……特に気にはしない。

大抵は魔理沙が一人で蹴散らして行くから、俺が出る幕が無いんだよ。

……

…

メイド相手に暴れる魔理沙を引き攀れ、俺は地下の図書館までやって来た。  
図書館は相変わらず大量の本があつて、少々たじろいでしまう。  
コレだけの本を一体何年掛けて集めたのやら。あのパチュリーって奴は凄いな。

「おおッ！ こんな所にこんなにも本が有るなんて知らなかったぜ  
！！」

「満足したか魔理沙？ それじゃ俺はこの辺で」

「まあ、待てよりユウ。もう少しわたしに付き合えって」

「いや、霊夢も待つてるだろうし、早いとこ帰りたいたいんだけど」

「……知ってるかりユウ。門限つてのは破る為にあるんだぜ？」

「それ、絶対に違うから」

魔理沙は俺のツッコミを無視して、本棚にある本を物色し始めた。  
このまま帰ってしまおうかと思っただけど、地下に変な力が居るのを感じてる。

前に来た時は感じなかったのに、今になって如何して？

俺の持っている竜の力とも違うし、ただの妖怪……にしてはかなり異質だな。

「其処で何をしているんですか？」

「ん？」

何処からか感じる力に関して考えていると、右の方から女性に声を掛けられた。

この屋敷の住人とは大体会った心算だったけど、この声は初めて聞いたな。

初対面の相手だし、此処はちゃんと自己紹介をしておかないとな。そう思った俺は、彼女の方を振り向いた。

其処に居たのは、白い長袖のシャツに袖のない黒のブレザーに、黒のロングスカートを穿いた、頭と背中に黒い羽を持つ赤い髪の悪魔だった。

……いや、吸血鬼の屋敷だし悪魔が居ても可笑しくないよな。

「あの〜……」

「あつと、俺はリュウ。此処には………あれ？ 何しに来たんだ？ 魔理沙に案内してくれって頼まれただけだしな」

「魔理沙って、さっきから本を物色している魔法使いの事ですか？」

「そうそう。ホント、何をしに此処に来たのやら」

魔理沙に何をしに来たのか聞こうと思い、彼女の方を見てみると……既にその姿は無かった。

流石にもう帰ったって事は無いだろうけど、何処に言ったんだアイツ？

辺りと見てみるが、魔理沙の姿はない。あの悪魔も見ていたから、さっきまで居たのは間違いないんだが……。

「ちよつと其処の白黒。私の図書館で何をしているのよ」

「少し借りるだけだぜ」

「この図書館は貸し出し禁止よ」

「ちょっとだけなら良いじゃないか」

「駄目よ」

「そうか。……だったら、力付くで借りて行くぜ!」

「今日は喉の調子が良いから、全力で撃退してあげる」

……此処からじゃ姿は見えないが、如何やらパチュリーと戦う気の様だ。

魔理沙の魔法もそうだけど、パチュリーの魔法も結構派手だからな。

……此処に居たら確実に巻き込まれるな。

「あの、悪魔さん。何処か安全な場所はない？」

「では、こっちへどうぞ」

「お願いします」

俺は悪魔の少女に連れられて、この図書館から逃げ出した。

あの二人も弾幕ごっこに巻き込まれるなんて、堪ったもんじゃないからな。

レミリアや銀髪メイドと出くわす事になるかも知れないけど、図書館に残っているよりはマシだろ。

## 第十六話 悪魔の妹

魔理沙とパチユリーの弾幕ごっこから逃げ出した俺と子悪魔さん。図書館には今近づけないし丁度良い機会なので、この子に屋敷の案内をして貰っている。

この屋敷、見た目以上に中が広いと思ったら、あの銀髪メイドが空間を弄って広くしているとか。

……あの人、華奢な見た目以上にとんでもない能力を持つてるよな。小悪魔さんの話だと、空間を弄る以外にも時を止めたりも出来るそうだし。

能力だけなら、吸血鬼以上に強力な気がする……と言っか、俺より上だな。時を操作出来る竜なんて、俺の中には居ないっての。

「なんであのメイドがレミリアに付き従ってるのか謎だな」

「それはきつとアレですよ。お嬢様のカリスマが凄い証拠ですよ」

「カリスマ…ねえ」

そんな事言われても、あの見た目の所為でイマイチ迫力に欠けるんだよな。

確かに力を解放した時の威圧感は凄かったけど、抑えてる時は普通の子供にしか見えない。

子悪魔さんの話だと、アレで五百歳らしいが……成長が遅いってレベルじゃないぞ。



「……あ、そう言えば聞きたい事があったんだ」

「はい。なんででしょう?」

「この屋敷の地下に変な力があつたけど、アレはなに?」

「変な力と言うのが何か分かりませんが、紅魔館の地下にはパチュリー様と妹様しか居ませんよ」

「妹様?」

「レミリアお嬢様の実の妹である『フランドール・スカーレット』様の事です。普段から屋敷の地下で生活してるんですよ」

「へ」

あのレミリアの妹ねえ……。なんか、あの子以上の我が侷な気がする。

いや、実はあの姉を反面教師にした品行方正な良い子な可能性も……ないか。

寧ろ、この幻想郷でそんな子が居るのか如何かを物凄く聞きたい。俺の知り合いつて癖の強い子ばかりだからな。

「私の知る限りでは他に居ない筈ですので、リュウさんが仰っているのは多分、妹様の事だと思いますよ。……お会いになりますか?」

「いや、それは遠慮して」

俺が断ろうとした時、突然目の前の床が何かに破壊された。

余りにも突然の出来事に、俺達はその場に立ち止まり固まってしま

う。

一体何事だ？ まさか、二人の弾幕ごつこの被害が此処まで出た訳じゃないよな？

まだ状況が読めず、その場で呆然としていると……目の前の穴から七色に光クリスタルが付いた異形の翼を持つ、赤い服を着た薄い黄色い髪の少女が出て来た。

「い、妹様?! 如何して此処に!?!」

「妹様つて、あの子がレミリアの妹か……」

小悪魔さんの反応で、あの子が誰なのか理解出来たけど……なんでいきなり出て来たんだ？

態々挨拶の為に出来た……つて訳でもないだろうし。本当に何をしに来たんだ？

「……見つけた。お兄ちゃんがあいつが言っていたリュウね」

「(あいつ?)……確かに俺がリュウだけど、君とは初対面だよな?」

「うん。でも、貴方の事はあいつから聞いてた。なんでも、面白い能力を持つてるんだってね」

「別に面白くはないと思うぞ?」

「変身するんだし、十分に面白いよ。……折角だし、そのカフランにも見せてよ!」

それだけ言うと、フランドールは行き成り弾幕を放って来た。

あの子の狙いは俺らしく、弾幕を自分の周囲に放ちながらも確りとコツチを狙ってくる。

でも、この位の弾幕ならまだ避けられる。前に戦ったレミリアのスペカよりは楽だ。

俺は手元に剣を召喚し、斬撃の形をした弾幕で応戦する。

コツチの弾幕は連射出来ないが、速度・威力ともに十分にある。

……やっぱ、無手よりも剣で戦うほうが性に合ってるのかも知れないな。

「お兄ちゃん。今どうやって剣を出したの？」

「まあ、ちよっとした手品みたいなもんかな」

「へえ〜。なら、私も剣を出すからね！」

「好きにしてくれ。……小悪魔さん、貴女は早く逃げた方が良さぞ」

「そうさせて貰います」

彼女は一目散で来た道を引き返し始めた。

出来る事なら俺も逃げ出したいけど、多分見逃してくれないんだろ  
うな。

……と言うか、今この場を逃げ出したら癩癩起こしてもっと面倒に  
為りそうだ。

「それじゃ行くよ。…禁忌『レーヴァテイン』」

フランドールが一枚目のスペカを宣言すると、彼女の手に自分の身長以上に長い赤い剣が出現した。

アレはレミリアが使った『スピア・ザ・グングニル』と同じ系統の

スベカなのか？

それならまだ避け易くはあるけど、槍みたいに投げない分厄介そうだな。

「それじゃ行くよ！」

「ッ！ 覚悟を決めるしかないか！」

俺はフランドールの太刀筋を見切り、それを避けた後にコッチの弾幕を放つ。

彼女は俺の弾幕を避けた後、また赤い長剣で切り掛かってくる。

あの華奢な腕の何処にそんな力があるのか知らないが、今度振り落とされた剣はかなり速い。

今の身体じゃ避け切るのは難しいと判断した俺は、刀身の上を滑らせ、フランドールの剣を逸らす事にした。

剣を逸らす事は成功したけど、今で刀身がかなり削られた。後数回、同じ事をしたら確実に剣が折れるな。

「手に入ったばっかりだから、もっと大切にしたかったんだけど……仕方が無いか」

正直な所、剣を気遣って戦っていたら間違いなく落とされる。

出来る事ならそんな事はしたくないけど、この戦いで剣が折れるのも覚悟しないとな。

「まだまだ行くよ！」

「そうかい！」

フランドールは宣言通り、赤い長剣を振り回してくる。

俺はそれを掠りながらもなんとか回避していく。  
お陰で剣はボロボロ。あの輝きを放っていた剣は、見るも無残な姿  
になっていた。  
相手を直接斬る事は出来ないだろうけど、弾幕を放つ事は出来るだ  
けマシか。

「コレで如何だ！」

「なんの！」

俺はフランドールの一撃をかわし、お返しに弾幕を叩き込んだ。  
この一撃が効いたのか、あの赤い長剣は突如消滅した。  
……スペカー一つ攻略するのに随分と時間が掛かったな。他にもある  
のかと考えると気が滅入る。

「あゝあ、攻略されちゃったか。……それじゃ次のスペカね！」

「……切り替え早いな」

「二枚目！ 禁忌『フォーオブアカインド』！」

彼女が二枚目を宣言すると、突如フランドールが四人に分身した。  
……分身って、そんなスペカもアリなのか。  
いや、竜に変身する用のスペカを作った俺が言う事じゃないな。

「さあ」

「続きを」

「始めようよ」

「お兄ちゃん」

「……分かったから、喋るのは誰か一人にしてくれ」

四人一斉に喋られなかっただけマシだけど、一区切りづつ喋られるのも変な感じだな。

そんな俺の気持ちなど露知らず、フランドール達は一斉に弾幕を放って来た。

当然の様に全員が俺を狙ってきてるが、四人同時に放って来るから弾幕が厚く感じられるな。…実際に厚いんだが、それでも回避するスペースは残っているだけマシか。

俺は四人のフランドールの弾幕を回避しつつ、斬撃を飛ばし少しずつダメージを与えて行く。

途中で弾幕のパターンが変わりはしたが、それでもまだ余裕はある。俺は弾に掠りつつも、なんとか二枚目のスペカを攻略した。

「おお！ 二枚目もクリアされた！」

「…攻略された割りに楽しそうだな」

「うん！ 長い事地下で暮らしてたからこんなに楽しいのは初めて！ ……だから、そろそろ本気で行っても良いよネ？」

「ッ？！」

突然フランドールの雰囲気が変わった。

さっきまで無邪気な感じだったのに、今は狂気じみたモノを感じる。あの子の表情も口角が上げて、禍々しい笑みになっている。

……さっきまでは只の遊びで、こっからが本番って事か。

元を正せば、この弾幕ごっこも遊びなんだけどな。遊びの本番って一体なんだよ。

「三枚目。禁忌『カゴメカゴメ』」

フランドールが三枚目を宣言すると、俺の周囲を弾幕で囲まれてしまった。

ただ、周りを囲んだだけで動く気配がない。

随分と変わったスペカだと思っていると、フランドールが別の弾を放ち、この囲いを崩し始めた。

別の弾に当たり崩れた囲いは、只の弾になってバラけ周りに散らばった。

まだ崩れ切っていない箇所があるけど、それでもまだ避けられるか。正直な所、自分のスペカを使って回避とかしたいんだけど……大したもの持って来て無いから無駄遣い出来ないんだよ。

回避に集中するから弾を撃つ余裕はないけど、これはまだ気合で避けられるだけマシだな。

「…上手ク避ケルネ。ナラ、コレハ如何？ 禁弾『スターボウブレイク』」

三枚目を避け切れたのか、フランドールは四枚目を宣言した。

四枚目のスペカは、カラフルな弾を狙いも無くばら撒く感じのものだった。

ただ、一度に放つ弾の数が多く、弾速もバラバラだから回避するのが難しい。

極端に速い弾はないけど、極端に遅い弾がある。

速いのは目が慣れてるから良いけど、あまり遅い弾があると反応が変になる。

弾の数も多い上に、速度の緩急にも気を付けないと………って？！

「ぐあッ！」

「マズハ一回ダネ。オ兄ちゃん」

あ、頭では分かっていたのに、ちゃんと対応出来なかったか……。一回も被弾せずに勝てるとは思ってなかったけど、あの子の弾幕が予想以上に痛い。

この先もこんな弾幕だとすると、今の姿じゃコレ以上はキツイか。今、手元にあるのは『オーラ』しかないけど、仕方が無いな。

俺はポケットに入っているスペカを取り出し

「基礎『オーラ』！」

そのカードを宣言した。

スペカを宣言した俺は、足元から立ち上った赤い光に包まれ、人と竜の中間の姿になる。

この姿を見たフランドールは驚き顕わにしたが、直ぐに禍々しい笑みを浮かべた。

今まで色んな奴にこの姿を見せてきたが、あんな笑顔を浮かべた奴は初めてだな。

まあ、個人的には『オーラ』ではなく『カイザー』で戦いたかったが………仕方が無い。

「ソレガオ姉様ノ言ツテイタ姿力……。ウン、ソノ姿デ戦ツタラ物凄ク楽シソウ」

「………戦いを楽しむ感覚は俺には理解出来んのだが、まあ良い。さつさと続きを始めるぞ」



「分カツテルヨ。……禁弾『過去を刻む時計』」

フランドールが五枚目を宣言すると、二つの魔法陣が出現した。その魔法陣は四方向から光を出すと、回転しながら俺に向かって来る。

フランドールはと言うと、俺に向かって扇状に弾幕を張り始めた。回転している魔法陣は面倒だが、この程度ならさっきの弾幕の方が厄介だったな。

だが、能力は劣っているとは言え『オーラ』も竜の一体。これしきで落されはしない。

俺は回転する魔法陣に気を付けつつ、手刀から斬撃の形をした弾幕を叩き込む。

威力や速度は変わっていないが、竜に変身しているお陰で連射性は上がっている。

使えるスペカが無い以上、この弾幕で押し切らせてもらう。

「……秘弾『そして誰もいなくなるのか?』」

俺が弾幕を叩き込んでいると、フランドールが六枚目のスペカを宣言した。

スペカの宣言と同時にアイツの姿が消え、俺の目の前から弾が迫って来た。

それを回避するのは難しくないが、弾の軌道にそって大量の弾が放たれるのが厄介だな。

しかも、最初に出現した奴以外にも同じ様な弾も迫って来る。

こう面倒な弾幕は、フランドールを攻撃して黙らせた方が早いんだが、本人の姿が見えない以上この手は使えない。

姉もそうだったが、妹もかなり面倒なスペカを考え付くもんだ。俺は心の中で悪態を付きつつも、迫って来る弾と辺りに飛び散っている弾の回避に専念する。その弾を回避していると、今度は上下左右から別の弾が迫って来た。弾のパターンは何個があるが、どれも俺を囲い込むように迫って来る。

人のままだったら囲いに閉じ込められるが、今の姿なら僅かな隙間を縫って避ける事が出来る。

この弾幕が何時まで続くのか知らないが、弾の軌道させ読み間違えなければ問題ない。

俺は今までと同じ様に、弾幕を避ける事に専念する。

少しの間弾幕を避け続けていると、唐突に周囲の弾幕が消え去り、フレンドールが姿を現した。

「コレモ避け切ルナンテ、才兄チャンハ凄イネ」

「それはどうも」

「素ッ気無ナイネ。サツキト八大違イ」

「……あまり意識はしてないんだが、変身するところなるみたいだ」

「フーン……マイイヤ。ソレジャ、ラスト行クヨ！」

「嗚呼」

「Q.E.D.『495年の波紋』」

フレンドールのラストスペルは、彼方此方に弾の塊を出現させ、そ

れを波紋の様に広げる弾幕。

最初は少なかつたが、徐々に波紋の数が多くなり回避するスペースが少なくなつて来る。

今はまだいいが、このまま行けば避けれる場所がなくなり詰むか……。

フランドールの姿があるから弾幕を叩き込めるが、向こうの弾幕が厄介になる方が先だな。

そう判断した俺は、一枚のスペカを取り出し宣言した。

「光線『ドラゴンブレス』」

カードを宣言すると、黒い球体に包まれ……中で黒いトカゲにも似た竜になる。

球体から出た俺は、背中から空色の羽を伸ばし空中で静止する。

その状態で口に力を集中させ……その力をフランドールに向けて撃ち放った。

放たれた力は赤い光線となり真っ直ぐ突き進む。

フランドールはコレを回避しようとしたが、間に合わずそのまま飲み込まれていった。

あの子が光線に飲み込まれたのを見て、俺は力を押さえ込む……人の姿に戻りフランドールに近寄る。

服は焦げ付いてたが、フランドール自身には目立った外傷は無かつた。

ただ、空中に浮んだまま呆然としてるのが心配だな。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

「お〜い」

「ねえお兄ちゃん！ 今のもう一回やって!!」

「……………はい？」

声を掛けても返事が無かったと思ったら、突然元気になり『ドラゴンプレス』をもう一度見せてくれと言い出した。  
うん、なんでそうなるのか俺にも良く分からない。

竜に変身する事以外は、特別珍しい事でもないと思うんだけどな。

「ねえ〜もう一回やってよ〜」

「あ〜……………今日は疲れたから勘弁してくれ」

「ええ〜!」

「今度遊びに来た時に別の竜を見せるから、それで我慢してくれ」

「そんなの待ってられないよ」

「なら、フレンドールがウチに遊びに来ればいいだろ」

「……………行っても良いの？」

そう聞かれると、俺も良く分からないんだが……………まあ大丈夫だろ。  
弾幕ごっこをするにしても、神社と人里に迷惑が掛からない場所に移動すれば良いし。

霊夢には文句を言われそうだけど、気にしていても仕方が無いか。

「幾つか約束を守ってくればな」

「うん！ それで約束って？」

「それはだな」

「おゝい、リユウ！ 大丈夫かゝ！」

「この声は魔理沙か？」

声が聞こえた方を振り向くと、魔理沙と何故かボロボロに為っているパチュリーがやって来た。

多分、小悪魔さんがフランドールの事を二人に知らせてくれたんだろ。

……しかし、随分とボロボロにされたなパチュリー。至近距離でマスパでも受けたのか？

「ねえお兄ちゃん。約束ってなに？」

「あゝ……それは後で話すよ。今はあの二人と合流しよう」

「はゝい！」

俺はフランドールの手を取って、二人を合流した。

他の童を見せるなんて約束をしたけど……色んな意味で大丈夫かな？

## 第十六話 悪魔の妹（後書き）

オマケ

「そう言えば、フレンドールに一つ聞きたい事があるんだけど」

「ん？ なぁに？」

「なんで行き成り襲って来たんだ？」

「お姉様が「面白い相手が来たから、思いつきり遊んで来なさい」  
って」

「あゝそれで襲って来たと」

「うん！」

「（つまり、原因はレミリアか。……あいつ、何時か泣かす）」

## 第十七話 火竜飛翔

フランドールと知り合ってから二週間が経った。

壊れ掛けた剣の代わりは未だに見付かってないが、コレと言った厄介事もなく平和な日々を過ごしている。

早いところ別の剣を手に入れたいんだけど、中々いい武器が無くて困っていた。

一応、里の鍛冶屋に見せたけど……はつきりと買い換える事を進められたよ。

俺もそうしたんだけど、いい武器が見当たらない上にお金もなくて森近さんの所に道具を売りに行っているから、収入が無い訳じゃないけど……貰える金額が今一つで。

あの変な人形のように珍しい物が手に入ればいいんだけど、そう簡単に手に入らないから珍しいんだよな。

そんな愚痴を霊夢に零しつつ、何時もの様に二人でお茶を飲んでいたらある日、神社にフランドールと魔理沙が遊びに来た。

「やつほ、お兄ちゃん！ 遊びに来たよ！！」

「いらっしやい、フランドール。昼間なのによく来たな」

「今日は曇り空だから平気なんだよ」

「そうなのか。……それで魔理沙は何の用だ？」

「わたしも遊びに来ただけだぜ。フランと一緒になのはただの偶然だ」

「偶然か。なら、仕方が無いな」

「仕方が無いんだぜ」

「……あんた等、訳の分からない挨拶してんじゃないわよ」

「霊夢。そう言う細かい事を気にしたら負けだぞ？」

「細かい事のかしら……」

気にするほど細かいのかは知らないけど、魔理沙相手ならこんな挨拶でもいい気がする。

魔理沙はなんて言うか……フランクだからな。堅苦しい挨拶よりは良いだろ。

心の中でそんな事を考えていると、フランドールが自分の定位置と言わんばかりに俺の膝の上に座ってきた。

なんでなのか未だに分からないけど、あの戦いの後からフランドールには妙に懐かれてしまった。

別に困る様な事でもないけど、なんでこんなにも懐かれたのかが分からない。

「……ちょっと其処の吸血鬼。なんでリュウの膝の上に座ってるのよ」

「なんでって……フランクが座りたいから」

「はしたないから降りなさい」

「え〜やだ〜」

「やだって……アンタねえ」



「まあ、落ち着けよ霊夢。相手は子供だぜ？」

「あのね魔理沙。相手は吸血鬼よ？ 見た目は幼くても私達よりは年上に決まってるじゃない」

「実際のところは如何なんだフラン？」

「ん〜とねえ……確か495歳の筈だよ」

「……マジで？」

「うん」

なんで霊夢がこんなに突っかかって来るのか分からないが、フランドールって意外と長生きなんだな。

この子で495歳って事は、姉のレミリアはそれ以上の年齢って事か。

……でも、その程度の歳なら其処まで目くじらを立てる必要も無いと思うが。

「なあ、一つ聞きたいんだけど。495歳って年寄りなのか？」

「妖怪だから年寄りとは言わないけど、私達にんげんからすると十分過ぎるわね」

「そうか。なら、俺も霊夢からすると年寄りになるのか」

「はあ？ なんでそうなるのよ」

「だって、俺もフランドールと同じかそれ以上に生きてるからな」

「「「……えっ?」「」」

確か、俺があの世界に召喚されたのが数百年前だった筈。

その時の召喚事故で、俺は二つに別れたけど……召喚される以前から生きてる事になるよな。

まあ、もう一人の自分が目覚めるまで長い事眠ってはいたけど、少なくとも数百歳なのは間違いない。

召喚される以前の事は何も覚えてないが、下手するとフランドールよりも年上になるな。

「……もしかしたら数千年も生きてたりしてな」

「あ、アンタ。一体幾つなのよ」

「さあ? あんまり古い事は覚えてないけど、数百年以上生きてるのは間違いないよ」

「……そう言えばアンタ竜だったわね。普段が普段だけに、すっかり忘れたわ」

「あ〜っと、つまり如何言う事だ?」

「俺も見た目以上の爺だつて事」

「いや、意味が分からないって」

「説明すると長いぞ」

「なら遠慮しとくぜ」

「それよりもリュウ！ あの時の約束守ってよ！！」

約束って……今度は別の竜を見せるって奴の事かな？

別に今じゃなくてもいい気がするけど、このままフランドールを膝の上に座らせてたら、またさっきの話をぶり返すだけか。話を逸らすと言う意味でも、ここは約束通り変身するか。

「約束？ ……アンタ、今度は何をしたのよ」

「別に大した事じゃないよ。ちょっとフランドールに別の竜を見せるって約束しただけだ」

「……十分に大した事あるじゃないの」

「まあ、霊夢の言いたい事も分かるけど……今回は大目に見てよ」

「……仕方が無いわね」

「ありがとう、霊夢」

そう言っただけ俺はフランドールを退けてから立ち上がり、直ぐに変身しようとしたが、今俺達が居る裏庭では狭すぎる。

体格の小さい『パンク』や『オーラ』ならまだしも、今回変身しようと思っっている竜には合わない。

あの竜は体格的に『オーラ』よりも大きいからな、此処じゃ周りの物を壊しかねないか。

……仕方が無い、此処は一度境内に移動してから変身するか。

……  
……  
……

俺が事情を話すと三人はあっさり了承してくれた。

フランドールや魔理沙は兎も角、霊夢も二つ返事で承したのはちよつと意外だったな。

只単に神社を壊されなくなっただけか、それとも他の竜に興味があつたのか？ ……意外と両方の理由だったりしてな。

境内に移動した俺は境内の真ん中に立ち、意識を集中し俺の中に眠っている力を呼び覚ます。

「でえあああああああッ！！」

力を解放すると、足元から赤い光が立ち上り俺を包み込む。

……本当は此処で竜人とも言える姿になるけど、今回は面倒なんでその過程を飛ばす。

俺を包んでいる光を吹き飛ばすと、俺はアズキ色の飛竜へと変身した。

多分、俺が変身出来る竜の中でイメージが良いのはコレかな。……  
『ナイト』と『バンドスナッチ』はもはや別の存在って感じだしな。

《……コレが火竜『ジャブジブ』だ》

「……」

《如何した？ 何処か変か？》

「……スゲエなりユウ！ お前、本当に変身出来たんだな！！」

「前に見た黒いトカゲよりもカツコイイ!!」

「そう？ 私は前に見た『カイザー』の方が好きだけど」

《アレは危険だから当分は使う気は無い》

「……まあ、あの破壊力じゃあね」

《いや、アレは以前に暴走した前科があつてな》

「もう分かったから全部言わなくて良い」

確かに『カイザー』は一度暴走した事があるが、今の状態で一番危険なのは間違いなく『アンフィニ』だろうな。

あの力は、俺の中にある他の竜達よりも危険だからな。アレが俺本来の力だと思つと自分でもゾツとするぞ。……召喚事故で記憶を失う以前の俺は、一体何を思つて生きていたんだろうな。

「お兄ちゃん、一つお願いがあるんだけど良い？」

《面倒事であればな》

「フランね、リュウの背中に乗つて空を飛んでみたい!!」

《……はっ？》

「お、それ良いな。リュウ、わたしも乗せてくれ!」

《いや、お前ら普通に飛べるだろ》

「それとこれとは関係ないの！　ねえお兄ちゃん、良いでしょ？」

《……………》

さて、フランドールのこの頼みだが……如何したものか。

特に拒む理由はないが、あまり甘やかしても良いものなのだろうか？  
頼られるのが嫌な訳ではないが、だからと言って何でも頼みを聞く  
訳にもいかんだろ。

……………まあ、今回くらいは構わないか。どうせ飛ぶだけだしな。

《やれやれ、仕方が無いな》

「えっ?!　それじゃあ!?!」

《直ぐに飛ぶからさっさと乗れ》

「うん！」

「サンキューな」

《嗚呼。……………それで霊夢は如何する》

「わ、私は良いわよ。自分で飛べるし」

《遠慮する必要は無いぞ。二人も三人も大して変わらないからな》

「別に遠慮なんてしてないわよ」

「まあまあ、折角リュウがこう言ってるんだし、変な意地はらない  
で乗ろっぜ?」

「あ、ちよつと魔理沙?!」

多少渋っていた霊夢だが、結局は魔理沙に強引に乗せられた。結局は三人を乗せる事になったが、特に問題も無いだろう。俺は背中に居る三人を振り落とさない様に注意しながら、両翼をはためかせ空へと飛翔した。

……

……

…

今日が曇りだと言っても、あまり高度を上げ過ぎるとフランドールが灰になる。

そこら辺の事を考慮しつつ、出来るだけ高い所を飛ぶようにした。背中に居るフランドールと魔理沙は、竜オレに乗って見える景色が珍しいのか、さつきからはしゃぎっ放しで少々五月蠅い。

だが、一緒に居る筈の霊夢の声は全く聞こえてこない。途中で降りた感じはしなかったから、まだ背中に乗っている筈なんだが……。なんとなく気に為った俺は、後ろを振り向き霊夢の様子を窺った。

《如何した霊夢。具合でも悪いのか?》

「……別にそんな事ないわよ」

《なら如何した。元気が無いように見えるが》

「あのね、幻想郷では龍は最高神なのよ。……異世界のとは言え、そんな存在の背中に乗ってはしゃげる訳無いじゃない」

「んな細かい事気にするなって霊夢。こつ言つ時は楽しんだもの勝ちだろ？」

「私は巫女よ？ 気にするなって方が無理よ」

《神、か……》

あの世界を旅してきた所為か、俺は？神？と言つのが嫌いだ。

……いや、？神？と言つ存在が嫌いなんじゃなく、そう呼ばれるの嫌いなんだ。

これだけの力を持っていた所為で、自分自身の命も狙われ、無関係な人達を巻き込んでしまった。

だからあの時、俺は力アイツを捨て、神である事を止めたんだ。

力そのものである俺には、捨てる事なんて出来ないけど……神である必要は無い筈だ。

《…なあ霊夢。お前は俺の事を神様として見ていたのか？》

「えっ？ ……別にそんな事は無いわね。寧ろ、時々忘れそうになるし」

《だったら、そのまま忘れてくれないか？》

「はあ？ アンタ、いきなり何を言ってるのよ」

《俺は力を持ち過ぎてしまっただけの竜だ。決して神なんかじゃない》

「そんな事言われてもねえ」



《人間が言う？神？の定義は良く分からないが、俺は只この幻想郷に……霊夢の傍に居たいだけだ》

「ッ?! ……なら、アンタを一人の男として見て、もし龍神に何か言われたら如何するのよ」

《その時はお前を守る。何が遭っても霊夢だけは絶対に守り切ってみせる》

「~~~~~ッ!? / / /」

この位置からだとは良く見えないが、何故か霊夢が顔を真っ赤にしている。

風邪でも引いたのかと思ったが、今日一日の様子を見てそれは無いと思う。

それなら一体何が原因なんだ？ 寒くて顔が赤く為ってる訳じゃないだろうし……。

「……なあ、霊夢」

「なによ」

「お前ン家、今夜は赤飯か？」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ!! / / /」

「ねえ、折角だから咲夜に頼んでご馳走を作って貰おうよ」

「洋式でのお祝いか……。それも良いかもな」

「勝手に話を進めるんじゃないわよ!!」

二人の言い草が気に入らないのか、霊夢は俺の背中の上で暴れ始めた。

せめて降りてからにしてくれば良いが、どう言う訳か背中の上でなんだよ。

このまま暴れられるとちょっと……いや、マジでヤバイかもしれない。

《おい、霊夢！ 俺の上で暴れるな!! バランスが崩れる!!》

「元はと言えばアンタが悪いんじゃない!!」

《なんでそうなるんだ?!》

「ウツサイ、馬鹿!!!!」

俺は必至に霊夢を宥めようとするが、火に油の様で効果は無かった。フランドールと魔理沙にも協力して貰おうと思ったが、あの二人何時の間にか降りてやがった。

去り際に「痴話喧嘩は犬も食わない」とか言ってたが、それよりも霊夢を止めるのを手伝えと言いたい。

その後、なんとか霊夢を落ち着かせた俺は、ボロボロに為りながら博麗神社に帰ることにした。

第十七話 火竜飛翔（後書き）

……キーワードに『ツンデレイム』を追加しようかな？

## 第十八話 人形劇

秋らしく、朝晩は冷え込み始めた今日この頃。

本日の空模様は、澄み切った秋晴れだが、時折吹く風が寒さを感じさせる。

こんな日は、のんびり釣りでも出来たら最高だろうな。

そんな事を思いつつ、今日も俺は母屋の縁側でお茶を啜るのだった。

「……しまった。今晚のおかずが無い」

「え、そうなの？」

「別に全く無い訳じゃないけど、このままだと物凄く質素なものになるわね」

「ふむ……」

のんびりと午後の一時を満喫していた所に霊夢が言ってきた一言。

霊夢が嘘でこんな事言う訳ないし、おかずが無いのはホントなんだろう。

まあ、それなら今から買い出しに行けば良い話か。

「霊夢。今から買いに行くから必要な物をメモしてくれ」

「そう？ それじゃ、悪いけどお願いね」

「任せとけ」

俺は霊夢からお金と、必要な物が書かれたメモ紙を受け取り里に向かった。

はてさて、今回買うものはと……砂糖に塩、みりんに醤油に味噌か。

……あれ？ 食材は買わなくて良いのか？

……

……

…

里に着いた俺は、霊夢から渡されたメモ紙に書かれている物を買って行く。

初めて来た頃は、珍しい形の里だったからアチコチ見て回ったけど、今は慣れたもんだ。

何処に何の店があるのかも覚えだし、霊夢の付き添い無しで買い物も出来る様になったしな。

……最初の頃は、コレが何の店なのかも分からないのがあったからな。

妖怪専門の店とか、ぱっと見ただけじゃなんなのか分からないっての。

「まいどあり〜」

「ん〜。……さて、コレで頼まれたモノは全部かな？」

メモに書かれていたモノは全て買い終えたけど、霊夢はコレで何をやる気なんだ？

確かにこれ等が有れば、炒め物や煮物を作れるけど……一回の調理で全部使うのか？

それに霊夢の事だから、意表についてオムライスと言う可能性も……。

「……ま、なんでも良いか。さつさと帰ろう」

俺は重い荷物を背負いなおし、神社に帰る為に里の入り口を目指し歩き始めた。

入り口に向かって歩いて行くと、道の脇でちょっとした人盛りが出来ているのが眼に入る。

話し合いや喧嘩と言った雰囲気じゃないけど、アレはなんの集りだ？俺の位置からでは、何をしているのか見えないけど……集っているのは殆ど子供みたいだ。

20人以上の子供達が一箇所に固まって一体何をしているんだ？益々なんの集りか気に為り出すと、子供達の中にどこかで見た事のある青白い髪的女性がいた。

「アレは……上白沢さん？」

あの髪は多分そうだと思うけど……一体なにをしているんだ？それに、上白沢さんの他にもう一人別の女性がいるな。

魔理沙と同じ金髪だけど、長さは首にかかる程度でヘアバンドをしてる。

服装は良く分からないけど、両手の指全部に指輪をして、その指輪から……糸が出てくるのか？

「む？ 其処に居るのはリュウか。何をしているんだ？」

「俺は買い出しですけど……上白沢さんは何を？」

「私はただの引率だ」

「引率？」

「嗚呼。わたしは寺子屋で教師をしているからな」

上白沢さんに声を掛けられた俺は、子供達の邪魔に為らない様に彼女の近くによった。

子供達の視線の先には、小さな劇場とその中で動く人形達があった。一体なんの劇をしているのか分からないが、劇場で動き人形達は本当に生きているかの様だった。

「……アレ、彼女一人で操ってるんですか？」

「嗚呼」

「そりゃ凄いな」

俺は、一人で全ての人形を操っている彼女の技術力に関心した。

彼女の手には指輪しかなく、それだけ見ると殆ど何をしているのか分からない。

だけど、舞台の上で動いている人形達は人と同じ動作をしている。何を如何動かせばそんな事が出来るのか、俺には理解出来そうにない。

……ホント、どうやって動かしてるんだろうな。

「……はい、今回の劇はこれでおしまい」

「「「「ええッ!」「」」」」

「やだ〜！ もっと見たい！！」

「別のお話もしてよお姉ちゃん！」

「悪いけど、私にも予定があるのよ」

「そんな〜……」

「コラお前達！ あまりアリスに我が俣を言っな！！」

「……はい……」

「全く。…すまないな、アリス。無理を言ってしまった」

「別に構わないわ。……ところで、貴方だれ？」

「ん、俺？」

「貴方以外に誰が居るのよ」

確かに俺しか居ないだろうけど……正直、話し掛けられるとは思わなかった。

しかし、話を振っておいて如何でもいいような気がするの如何言う事だ？

寧ろ、彼女よりも周りにいる子供達の方が興味津々って感じだぞ。

……まあ、俺は普段から人里に来ないからな。余所者が珍しいんだろ。

大体は博麗神社に居るし、何処か出かけるとしても、神社の周辺か紅魔館くらいなもんだ。



……そう考えると、俺の交友関係って物凄く狭いよな。

「それで、一体誰なのよ」

「俺の名前はリュウ。上白沢さんの………知り合い？」

「まあ、知り合いと言えば知り合いだな」

「……慧音も変なのと知り合うわね」

「む。変なのとは如何言う意味だよ」

「そのまんまの意味よ」

んな事言われてもな……思い当たる節が多々あるんだぞ。  
只でさえ種族が竜になるんだ。変なのと呼ばれても否定は出来ない。  
それに、俺の変身出来る竜の中にも変種が居るからな。間違いでは  
ないんだよな。

「う〜む………」

「なんで考え込んでるのよ」

「いや、まあ……色々」

「…？」

「リュウ、そんな所で考え込んでいると周りに迷惑だぞ」

「確かに。それに買い出しの途中だった」

「なら早く行くと良い」

「そうさせて貰う。……それじゃまた」

俺は上白沢さん達に別れを告げて、急いで博麗神社に向かった。

別に急いで買ってきて来てくれとは言われて無いけど、あんまりノンビリしてる訳にも行かないし。

……にしても人形かあ。『オンクー』と『アーター』の二体を思い出すな。

彼女の使っていたのとは大分違うけど、アレも一種の人形だからな。人形と言うよりは機械に近い存在だけど、また創りたくなってくるな。

でも、アレってどうやって創るんだっただけか？ 最後に創ったのが数百年前の事だから覚えてねえや。

アリス Side

私の人形劇に行き成り現われたあの男…… 本当になんなのかしらね。慧音の知り合いだって話だけど、里の人間には見えなかったわ。それに気配も…… 人間と言うよりは妖怪みたいな感じだった。

「……ねえ、慧音。アレ、本当になんなの？」

「それは私も聞きたいが、別に悪い奴ではないと思うぞ」

「それは分かるんだけど……」

「別に気にする事はないだろう。それよりも、今回の礼だ。受け取ってくれ」

「……確かに頂いたわ」

私は慧音から謝礼を受け取って、気持ちを切り替えて帰り支度を始めた。

確かにちよつと気に為る所はあるけど、私が気にして居ても仕方が無い。

それに本当に害のある奴なら、博麗の巫女か妖怪の賢者辺りが動き出すわね。

下手に関わって火傷なんてしたくないし、アイツには関わらない様にしましょう。

アリス Side out

## 第十八話 人形劇（後書き）

……あれ？ 何時の間にか2万アクセス突破してる。ちょっと前に一万突破したばっかだと思ってたのに。

いやはや、こんな小説でも読んでくれて嬉しいです。

これからも『竜が辿り着いた幻想郷』……略して『竜幻』を宜しく  
お願いします！！

第十九話 とある日の午後（前書き）

少しだけ書き方を変えてみました。  
今回は霊夢視点です。

## 第十九話 とある日の午後

秋の昼下がりに、私とリュウはちやぶ台を囲んでお茶を飲んでいる。ちやぶ台にあるお茶請けには、里で評判の醤油煎餅。

私はそれを一枚手に取り、煎餅を食べながら、お茶を飲んで喉を潤す。

「今日も冷えるな。……もうすぐ冬かな？」

「雪が振り出すにはちょっと早いわよ」

「そうなのか？」

「例年道理ならね」

私はリュウにそう言いつつ、煎餅をもう一枚食べる。

リュウはそれに納得した様に一度頷いてから、手元に置いてある湯飲み取りお茶を飲む。

最近は寒さも厳しくなってきた、縁側に座って飲むよりも居間で飲む事が多くなった。

そろそろ絆纏はんてんや火鉢ひばち、それにコタツも出さないと駄目かも知れない。まだ使うほどではないにしろ、朝晩の冷え込みはキツイものがある。それに今年はリュウの分の絆纏はんてんを用意しないと。

そんな事を考えつつ、私はお茶を飲もうと湯飲み手に手を伸ばす。

でも、湯飲みの中は既に空っぽ。

急須きゅうすに手を伸ばし、中を覗いてみるけどお茶は残っていないかった。

私は溜息を一つ吐いてから立ち上がり、台所にあるやかんに水をい

れる。  
そして、かまどに薪を数本ほど入れて、居間に居るリュウに声を掛けた。

「リュウ。悪いんだけど、かまどの薪に火を付けてくれない？」

「了解。……火！」

リュウが台所を覗き込みながら魔法を唱えると、かまどの薪が独りでに燃え始めた。

「こんなんで良いか？」

「ええ、十分よ」

そうアイツに告げて、かまどの上にやかんを置いた。  
後はやかんの水がお湯になるの待っていけば良い。

私は台所から居間に戻ると、何故かリュウが私の事をジッと見てきた。

薪を取り出した時にゴミでも付いたのかと思い、衣服をチェックしてみるけど……特にそれらしいものは無い。

特に汚れがある訳でもないのに、リュウは私を見続けてくる。

「……なによ」

アイツの視線に耐えかねた私は、なんとも素っ気無い言葉を投げかけた。

もう少し言い方があったと思うけど、ジッと見られると言うのは辛いものがある。

……いや、辛いと言うよりも恥かしいんだ。

出来るだけ表に出さないようにしてるけど、あの告白の所為でこう言う時に如何しても気恥ずかしさが出てしまう。だからかな、偶に素っ気無い言葉や態度をしてしまうのは……。

「それでなんなのよ？」

「いやな。霊夢の髪も伸びたな〜って思ってた」

「私の髪が？」

リュウに言われて、なんとなく自分の髪に触れてみる。前髪は目に掛かりそうな位で、後ろ髪は肩に掛かるくらいの長さはある。

……確かに伸びたと言われれば、伸びたのかもしれない。ここ最近は散髪に言っていないから、リュウが来た時から見れば間違いなく伸びた。

私はあまり気にしてなかったけど、コイツには気になるみたい。

「なに？ 私の髪が気になるの？」

「少しな。……なあ、霊夢。ちょっとコツチに来てくれないか？」

「……？ 別に良いけど」

私は誘われるままにリュウの傍に寄って座り込む。すると、リュウは徐に手を伸ばし私の髪を触り始めた。

「ちょよ、ちょっと?!」



「……………うん。やっぱり綺麗な髪だな」

リュウは何処と無く嬉しそうに言って、私の髪から手を離そうとはしない。

私の髪感触を楽しむように、ただ撫で続けてくる。

掻き毟る様に荒っぽくする訳でもなく、腫れ物に触るみたい撫でる訳でもない。

ただ優しく私の髪を撫でてくれた。

私には何が嬉しいのかわからないけど、はつきり止めてとも言えなかった。

？止めなさいよ？と言えばリュウも手を離すだろうけど、如何してもその言葉が出て来ない。

何か特別な撫で方をしてる訳でもないのに、この手を離さないで欲しいと思ってしまう。

なんでそんな事を思うのか解らないけど、出来る事ならこのまま…。

「れい…」

「……………」

「れいむ」

「……………」

「霊夢！」

「ッ?! な、なによ。急に大きな声を出して」

「いや、やかんが沸騰してるぞ」

「……………えっ？」

そう言われると、確かにやかんの水が沸騰してヒューヒューと音を立てている。

私は慌ててリュウから離れ、かまどの火からやかんを退かした。

やかんの取っ手は、火に熱せられた事で熱くなっていたけど、なんとか我慢する事が出来た。

私は近くに置いていた急須のふたを取り、やかんのお湯を急須の中に注いだ。

急須にお湯を注ぎつつ、さっきまでの事を思い返してみる。

ただリュウに髪を撫でられていただけなのに、水が沸騰しているのに気付かないほど夢中になっていた。

本当にそれだけなのに、如何してあそこまで夢中になっていたんだろう。

他に特別な事なんて何も無かった。ただ優しく撫でてくれただけ。

「……………」

私はお湯を注ぐのをやめ、自分で自分の髪を撫でてみる。

リュウがしてくれたみたいに優しく撫でてみるけど、さっきみたいに夢中にはならなかった。

どんなに優しく触れてみても、ただ自分の髪を触っているだけではない。

なにが嬉しいのかも分からないし、なんで夢中になっていたのかも分からない。

髪に触れるだけなんて、特別珍しい事でもないのに如何して……………。

色々と考えてみるけど、答えらしい答えが思いつかない。

だから私は、自分の髪を弄るのを止め、かまどの後始末をしてから居間に戻る事にした。

居間に戻った私は、リュウの対面の場所に座る。

「……はあ。最近、変な事で悩む事が多い気がするわ」

「ん？ 変な事ってなんだ？」

「アンタには関係ない事よ」

「…?」

リュウは釈然としない顔をする。

私はそれを無視して、ちゃぶ台にある自分の湯飲みにお茶を注ぐ。自分のに注ぎ終わった後、空になっていたリュウの湯飲みにも注いであげた。

「ありがとう」

「ついでよ、ついで」

「それでもだ。ありがとうな、霊夢」

さっきまで釈然としていたリュウだけど、私がお茶を注ぐと嬉しそうに笑う。

「~~~~~ッ」

私はその顔を何故か直視出来ず、ちゃぶ台にある煎餅を手を伸ばし

食べ始める。

バリバリと音と立てながら齧っていると、リュウも同じ様に煎餅に手を伸ばした。

居間にはこれと言った会話もなく、煎餅を齧る音とお茶を啜る音だけが響いた。

第十九話 とある日の午後（後書き）

個人的に霊夢は髪の毛の長い方が好きです。

## 第二十話 湖での釣り（前書き）

BOFを語るなら釣りは欠かせないと思う。

## 第二十話 湖での釣り

木枯らしが吹き抜ける中、俺は神社の倉庫を漁っていた。

そろそろ冬も本番になると言うことで、霊夢から防寒具を持って来てくれと頼まれたからだ。

コタツと言う少し変わったテーブルと、火鉢ひはちと言う石で出来た器らしいんだが……どれがそうなのか分からん。

倉庫の中には色々な道具が置いてあって、探すのも一苦労だ。

毎年使う物だから、変な場所には入り込んでないと思うが……。

俺は違うと思うものを退かしながら、倉庫の中を捜していると……一本の釣竿を見つけた。

収納式のロッドに、糸が付いた丸いリール。

霊夢は釣りをしない筈なのに、なんでコレが倉庫に眠っていたんだろうか？

俺はそんな疑問を持ちつつも、その釣竿を手に取り観察してみる。

「……もしかしてコレって、とびまるの竿じゃないのか？」

手に取って見てみると、あの世界で金欠で困って売った竿にそっくりだった。

ロッドの長さといい、リールの大きさといい、何処を如何見てもあの竿としか思えない。

なんでこの釣竿が博麗神社の倉庫に眠っているのか謎だけど、使わないのなら俺が貰っても良いかな？

釣竿を手にしながらそんな都合の良い事を考えていると、誰かが倉庫に入ってきた。

俺は誰かと思いい入り口を見ると、其処には霊夢が立っていた。

「よう、霊夢。何か用か？」

「アンタが戻って来ないから様子を見に来たのよ」

霊夢は呆れ顔でそう言うと、俺の傍にやって来た。

「……その竿、如何したのよ？」

「如何って…この倉庫にあった奴だけど？」

「なんでウチの倉庫にそんなのがあるのよ」

「……俺が知る訳ないだろ」

俺が溜息交じりでそう言うと、霊夢はなにやら考え始めた。

俺は霊夢の邪魔をしては悪いと思い、防寒具の搜索を再開した。

辺りにある道具を退かしながら、それらしいものを探すが見付からない。

探す場所が違うのかと思い、今度は反対側を捜し始める。

反対側を捜し始めると、直ぐに変わったテーブルと石で出来た器を発見した。

「なんだ、こんな所にあつたのか」

俺はそう呟いてから、持ち運びの楽そうな火鉢からもって行く事に火鉢の中にさっきの釣竿を入れ、火鉢を持ち上げる。

石で出来ているからか見た目よりも重いが、けして運べない重さじゃない。

俺は霊夢を倉庫に残し、火鉢を持って居間へと向かった。



居間に火鉢を置いたら、今度はコタツを運ぶ為に倉庫に戻る事にした。だが倉庫に向かうと、そのコタツは既に霊夢が運び出そうとしている。

一人で運ばせる訳にも行かないし、霊夢の手伝いをしに直ぐに向かった。

「手伝うぞ、霊夢」

「お願い」

俺は霊夢の反対側を持ち、二人してコタツを居間に運び入れる。

居間にあつたちやぶ台は既に退かされていて、居間には霊夢は持つて来たと思われる布団が置いてあつた。

俺達はコタツの足を立たせて居間に置き、その上に布団を乗せ、最後に重石代わりの板を布団の上に乗せた。

「……よしつと。これで少しはマシになるわね」

「コレでか？」

霊夢は満足そうに言うが、俺は訝しげにそう尋ねた。

俺はコタツも火鉢も初体験だから、イマイチ信じられない。

幻想郷の防寒具としては一般的らしいのだが、俺が居た世界では見た事が無い。

特に火鉢なんかは、本当に温まるのか怪しいものだ。

「本格的に使うのはまだだけど、今はこれで十分よ」

「ふうん」

霊夢はこう言うが……やっぱり信じられない。

別に霊夢が信じられない訳じゃないが、火鉢がかなり胡散臭い。  
囲炉裏はまだ信じられるんだけど、この見た目がどうもな。

「……納得してないみたいね」

「そりゃな」

「まあ、別に良いけどね。……それよりもリュウ。あの釣竿の事だ  
けど」

「……？ アレが如何かしたのか？」

「わ、私はもう使わないから、アンタにあげるわ」

霊夢は少し顔を赤くしながら、そんな事を言ってきた。

なんで顔を赤くしてるのか分からないけど、俺にとっては願っても  
ない事だ。

今までも何度も釣りがしたいと思っては諦めていたからな。

「本当にアレを貰っても良いのか？」

「ええ。……それともなに？ アレじゃ不満だって言うの？」

「そんな事ない！ 物凄く嬉しいよ！ ありがとな、霊夢！」

「え？ あ、うん。どう致しまして」

「それじゃ俺、早速釣りに入って来る！ 夕食までには戻ってくるから！！」

俺は霊夢のそう告げると、火鉢に入れている釣竿を取り出し、外に飛び出した。

……

……

…

外に飛び出した俺が向かったのは『霧の湖』。

何時もの様に霧が立ち込めているが、里の噂でこの湖は大物がいると聞いていた。

それを確かめる意味も兼ねて、俺はこの湖にまでやって来た。

湖に着いた俺は、まず適当な地面を掘り返してミミズを探す。

釣竿が針はあるものの、肝心な餌を持っていない。

だから、地面を掘って餌に使えるものを捜す事から始めた。

ミミズを何匹か捕まえたら、ロッドを伸ばし、ミミズに針を刺す。

此処までの準備が出来たら、後は針を遠くまで投げ飛ばし魚を誘う。

「……………」

霧の所為で遠くの様子が分からないが、岩や木にぶつかった感触はしない。

後は底の岩や水草に絡まないように注意しつつ、一定のリズムでリールを巻いて行く。

数ヶ月ぶりの釣りと言う事もあって、いきなり難しいのではなく簡

単なもので慣らす。

一定のリズムで巻いて行くと、針が足元にまで戻って来てしまう。俺はもう一度針を投げ飛ばし、今度は違うリズムで針を巻いて行く。さつきとは違うリズムでリールを巻くものの、やはり当たりはなく針がまた戻って来る。

俺はもう一度針を遠くに投げようとするが、針が何かに引っ掛かってしまった。

周りに木々の少ない場所を選んだのに、一体何に引っ掛かったんだ？ そんな事を思いつつ後ろを振り返ると、針が引っ掛かってスカートが捲れ上がっている銀髪のメイドが居た。

「……………」

「何か言い残す事は？」

「えっと、そんなところに居たら危ないぞ？」

「死ネ」

メイドが無表情になると、俺の周囲に無数のナイフが出現した。

ナイフは俺の周りを取り囲む様に浮んでおり、既に逃げ場は残されていない。

そしてナイフ達は一斉に襲い掛かり、俺は全身串刺しの刑に処された…………。

…………

…  
…

「いって。咲夜、もう少し手加減してくれよ」

「殺されなかっただけマシだと思いなさい」

「うえ」

俺は咲夜にナイフを抜いて貰いながら、回復魔法を使って怪我を治して行く。

腕とかに刺さったモノは自分で抜けるが、背中に刺さったモノは如何する事も出来ない。

だからと言って、刺さったままでいると血が抜けて気分が悪くなる。出血多量で死ぬのか分からないが、血を流し続ける訳にもいかならぬ。

「それで、貴方は此処で何をしてるのよ」

「見ての通り釣りだ」

「……へえ。貴方の言う釣りってのは、女性のスカートを捲る事なの」

「だから、アレは事故なんだって」

咲夜は視線で責める様に俺を睨みつけて来る。

ナイフが刺さっている間に、さっきの事が事故だと説明したが信じて貰えなかった。

……でも、捲ったのも事実だから簡単に信じて貰えないも仕方がな

い。  
だけど、いきなり俺の真後ろに出現する咲夜も悪いと思う。

「何か言いたそうね？」

「……ベツニナニモ」

「そう」

俺は文句の一つでも言おうと思ったが、血の付いたナイフを向けてきたので止める事にした。

咲夜はナイフを仕舞うと、引き続きナイフを抜く作業に戻った。

ナイフを抜かれる度に痛みが走るが、刺さったままだと回復の邪魔になるので我慢するしかない。

……暫くの間痛みに耐えていると、漸く全てのナイフが取り除かれた。

「あゝ…痛かった」

「自業自得よ」

「だからアレは事故なんだって」

「関係ないわ」

「……さいですか」

咲夜の辛辣な一言に俺は肩を落とす。

それでも頭を切り替えて、俺は竿を取りもう一度釣りを始めた。

今度はさつきみたいなの失敗をしないように、咲夜から離れた位置に

移動してから針を投げる。

予想外のトラブルで時間を喰ったが、まだ釣りを楽しめる時間は残っている。

俺はまた一定のリズムを刻みながらリールを巻いて行く。

「貴方の釣竿、随分と変わってるけど……香霖堂で買ったの？」

「霊夢に貰った」

「……あの巫女が人にプレゼントをあげた？」

霊夢がプレゼントを贈ったのが予想外らしく、咲夜はかなり驚いた表情をする。

「いや、驚く事じゃないだろ」

「そう言うタイプには見えなかったのよ」

「ふ〜ん」

俺は適当な返事で返しつつ、足元に戻って来た針をもう一度遠くに投げる。

「……そう言えば咲夜って何しに来たんだ？ 買い物に行く途中か？」

「お嬢様から？ リユウが来たから様子を見てきて？」と言われたのよ

「なんだそりゃ？」

「それは私が聞きたいわよ」

レミリアの良く分からない指示を聞いて、俺と咲夜は首を傾げた。なんでそんな事を言ってきたのか気に為ったが、指示を受けた咲夜が分からないのに俺に分かる訳がない。

そう考えた俺は、また戻って来た針を遠くに投げ飛ばした。

何度も投げているが、一向に魚が掛かる様子がない。

これで駄目だったら別の場所に移動した方が良くもされないな。

そんな事を考えながらも、俺は一番難しいリズムを刻んでリールを巻き上げていく。

リールを巻いていると、針に仕掛けた餌に何か喰らい付いたのを感じた。

喰らい付いたのを感じた俺は、竿を立てその当たりに素早くアワセる。

アワせた瞬間、針が魚の口に引っ掛かったのか、魚が物凄い勢いで暴れ始めた。

「おっしや、HITツ!!」

「な、何事?!」

「魚が掛かったんだ! ……この手応え、かなりの大物だな。…おもしれえ、俺も全力で相手してやるよ!!」

「……貴方、ちょっと性格が変わってるわよ」

咲夜が若干引き気味に何か言ってくるが、今は気にしている余裕がない。



今回掛かった魚は引きがかなり強く、リールが中々巻けない。まだ距離があるにも関わらず、滅茶苦茶に暴れまわっている。あまりの強さに、コッチが湖に引き込まれそうだ。

足を踏ん張り、腰を入れるが……それでも引つ張られていく。

……このままだと不味いと思い、俺は近くにいる咲夜に声を掛けた

「咲夜！ 悪いけど手伝ってくれ！！」

「手伝うって……時を止めて魚を持って来れば良いのかしら？」

「違う！！ 俺の身体を支えてくれって言うてんだよ！！」

「支えるって言われてもねえ」

「俺に抱き付くとか色々あるだろ！ コッチは今にも持って行かれそうなんだ！ 早くしてくれ！！」

「……あゝもう。仕方が無いわね」

咲夜は文句を言いつつも、俺の腰に抱き付いて支えてくれた。

コレでさっきよりはマシになったが、魚の勢いは衰えるところを知らず、なんら変わらない勢いで暴れ続ける。

それでもなんとかリールを少しずつ巻いて行くと、霧の向こうで魚が飛び跳ねた。

跳ね上がった魚の全長は……凡そ200cm。

過去に釣り上げた勇魚いさなの250cmには及ばないが、それでもかなりの大物だ。

……あのサイズとなると『バラムンディ』か『スタージヨン』クラスか！！

「フハハハハハハッ！！ テンション上がって来たーッ！！」

「……キャラ変わり過ぎよ」

咲夜が何か言っただけで来てるが、そんな事は気にしない。  
俺はただリールを巻く事にだけ専念する。

……

……

…

…… 魚と格闘し始めてから、既に10分近くが経過した。  
本当に少しずつではあるけれど、徐々に魚との距離が近くなって来  
てる。

このまま行けばあの魚を釣り上げられるが、此処に来て最後の抵抗  
を始めた。

突如魚が糸を加えたまま沖に向かって泳ぎ始めたのだ。

コツチは二人掛りで踏ん張っているが、それ以上に魚の勢いの方が  
強い。

それでも俺は負けまいと必至になってリールを操る。

「ねえ、まだ釣れないの?！」

「あと……ちょっと!」

咲夜も頑張っているが、俺もそろそろリールを巻く手が疲れてきた。  
だが、向こうも疲れて来たのか、先程までの勢いが無くなって来て  
いる。

俺は魚が落ち着いたのを見計らって、一気にリールを巻き上げる。

漸くの思いで糸を巻き上げ、岸边に浮かび上がってきたのは、薄い黄色の鱗を持つ巨大魚。

俺も目算どおり、全長200cmは下らないだろう。

魚が近くまで来た所で、俺は竿を地面に置き、咲夜に頼み事をする。

「咲夜。コイツを岸に上げるのを手伝ってくれ」

「え、ええ」

返事をする、咲夜は俺の腰から離れ魚の尾の方を持つ。

俺は頭の方を持ち、力を合わせて魚を持ち上げ岸に上げた。

「おっしゃー！ 漸く釣れたーッ！！」

「っ、疲れた……」

ずっと俺を支えてくれた咲夜は、本当に疲れたのかその場に座り込んだ。

俺も久し振りのファイトで疲れたけど、今は喜びの方が大きかった。

「ありがとな、咲夜！ コイツを釣れたのもお前のお陰だよ！！」

「……それは良かったわね」

俺はお礼を言うが、咲夜は疲れた様子で適当な返事をする。

あの屋敷のメイド長をしてるから、もつと体力があるのかと思っただがそうでもないのか？

俺は一刻も早く霊夢のこの成果を見せたかったが、こんな状態の咲夜を置いて行く訳にもいかない。

そう考えた俺は、釣竿を手早く片付けると、咲夜を片腕で抱き抱え、反対の手で魚を持ち上げた。

「ちょっと何してるのよ」

「何って……このまま紅魔館に運ぼうかと」

「別にそんな事する必要はないわ。私は歩いて帰れるから」

「んな無理しなくても」

「無理はしてないから降ろしなさい」

「はい」

俺は首元にナイフを突き付けられ、大人しく咲夜を降ろす事にした。地面に降ろすと少しふら付いたが、直ぐに立て直した。

「それじゃ、私帰るから」

「今回のお礼に少し分けるけど？」

「要らないわ。……それじゃあね」

「おう、またな」

短い挨拶を交わすと、咲夜は忽然と姿を消した。

俺は魚を持ち直し、そのまま博麗神社へと帰る事にした……。

……  
……  
……

巨大魚を持って神社に帰ると、居間で霊夢と魔理沙がお茶を飲んでいた。

二人は俺が帰ったのを察知したのか、こっちを見ると眼を見開いて驚きを顕わにする。

「ちよつとリュウ！ そのバカデカイ魚はなによ?!」

「マジでデカイな……。一体何処で釣ってきたんだ？」

「霧の湖で釣って来た」

俺は魚を高々と持ち上げ、二人に今回の釣果を見せる。

「いや〜。釣りをするのは久しぶりだったけど、腕がさび付いてなくて良かったよ」

「それは良かったわね。(……こんなに喜んで貰えるなら、もっと早くあげれば良かった」

「……? 今何か言ったか？」

「な、なんでもないわよ!」

「……?」

霊夢は少しムキに為りながらそう言うが、一体如何したのだろうか？  
前々からそう言う事があったが、なんでムキになるのかが分からない。  
い。

魔理沙にそれとなく聞いたりもしたが、如何やら？乙女心？つても  
のらしい。

それが何なのか分からないが……男の俺には理解出来ないモノだと  
言う事は分かる。

魔理沙にそう言ったら、？霊夢の奴、苦労しそうだな……？って遠い  
目をされたっけか。

「ところで、その魚は如何するんだ？」

「そりゃ、食べるに決まってるだろ」

「……………食べれるの、それ？」

「うん」

「……………」

霊夢と魔理沙は怪しそうにジッと魚を見てくる。

二人が何を心配してるのか知らないが、大抵の物は確り火を通せば  
食べられるぞ。

あの世界でも色々な魚を釣っては、旅の食料にしてたから間違いな  
い……………等。

「……………霊夢、頼みがあるんだが」

「分かってるわよ、魔理沙の分の食事も用意するわ」

「流石霊夢。話が早いぜ！」

「はいはい。……それじゃリュウ。その魚を台所に運んで頂戴」

「了解つと」

霊夢に頼まれた俺は、台所へ向かい邪魔に為らない場所に魚を置いた。

……そして、この日の夕食が魚尽くしだったのは言うまでも無い。

## 第二十話 湖での釣り（後書き）

オマケ

「お嬢様、只今戻りました」

「ご苦労様、咲夜。……それで如何だった？」

「如何…と申されましたも……何時も通りとしか」

「そうじゃなくて、彼と戯れた感想よ」

「特になにも。…強いて言うなら、釣りをしている時のリュウには近寄らない方が宜しいかと」

「……それだけ？」

「はい」

「……つまらないわね。霊夢みたいな心境の変化があれば面白かったのに」

「私はお嬢様一筋ですので」

「そんな当たり前な事、今更聞きたくないわよ」

終わり



## 第二十一話 竜の力

秋も過ぎ去り、季節はすっかり冬。

肌寒い程度だった気温もぐっと下がり、吹きすさぶ風は凍えるような寒さだ。

気温が冷え込むのに合わせて、空からは雪が降るようになった。

お陰でこっちは、落ち葉集めの代わりに、雪掻きをしなければならなくなった。

霊夢が寒さ対策に長袖の服を用意してくれたが、それを着ていても雪掻きは寒いし辛い。

あまりの辛さに、火属性の魔法で雪を溶かそうと何度思った事か……。

でも、魔法を使うと溶けた水が凍り付いて、かなり危険な道が出来てしまう。

水も残らないほどの高火力で溶かせば良いけど、それには竜変身するしかない。

……流石にその為だけに変身する気には為れない。

「あゝ寒い……」

俺は白い息を吐きながら、スコップ片手に今日も境内の雪を掻く。深々と雪が降る中、せっせと雪を掻き出していると……上空に箒に乗った魔法使いの姿を見つけた。

魔法使いは、俺の姿を見つけると直ぐ目の前に降りてきた。

「よう、リュウ。雪掻き大変そうだな」

「……そう思うなら手伝ってくれよ、魔理沙」

箒を片手にそう言ってくる彼女に対して、俺はゲンナリした様子でそう返した。

俺が頼んだところで手伝ってくれる筈もないのだが、あまりの寒さについつい言葉が出てしまう。

「それはお断りだぜ。…ところで霊夢はいるか？」

「何時も通り、居間でお茶を飲んでるよ」

「そっか。んじゃ、お邪魔させてもらっぜ」

「はいはい」

俺が適当に返事を返すと、魔理沙は俺の横を通って母屋の方へと向かった。

それを確認した俺は、中断していた雪掻きを再開した。

……

……

…

雪掻きも大体終わり、俺は母屋に戻る事にした。

スコップを外に置き、玄関の戸を開けて入ると中は温かい空気で満ちていた。

俺は玄関先で服に積もった雪を払い、霊夢たちの入る居間へと向か

う。

居間では霊夢と魔理沙がコタツに入って、お茶と煎餅を堪能していた。

「お帰りなさい、リュウ。外は如何だった？」

「ただいま、霊夢。外は相変わらず雪が降り続けていたよ。この調子だと今日一日雪かもな」

「うげえ。それは止めて欲しいぜ」

魔理沙は俺の言葉を聞いて、物凄く嫌そうな顔をする。

俺はそれに苦笑いで答えつつ、コタツの空いている場所に座った。座るとほぼ同時に、霊夢が俺にお茶の入った湯飲みを差し出してくれた。

「ありがとな、霊夢」

「べ、別に気にしないで良いわよ。アンタには雪掻き頑張ってるんだし」

「それでも礼を言いたいんだ」

俺は笑い掛けながら霊夢そう言った。

「~~~~~ッ！」

すると霊夢は、何故か顔を赤らめた。

真っ赤って程じゃないけど、それでも顔を赤くしている。

霊夢は偶に顔を赤くするんだけど……赤面症か何かか？

「お〜お〜。相変わらずだなお前等」

「うっさいわね、ほっといてよ」

「へいへい」

魔理沙が霊夢を茶化すが、一体何を茶化しているのか分からない。俺は首を傾げ考えるも、分からないものは仕方が無いと頭を切り替えることにした。

「そっぴや、リュウに聞きたい事があるんだった」

「ん？ 一体なんだ？」

俺は適当な返事をしつつ、霊夢が出してくれたお茶を一杯飲む。

「リュウって、一体何種類の竜に変身出来るんだ？」

「あ、それ私も気に為る」

魔理沙の質問に霊夢のコツチを見て尋ねてくる。

俺は湯飲みを台の上に置き、腕を組んで少し考え始める。

別に答えられない質問じゃないけど、あんまり答えたくない質問でもあるな。

自分の手の内を相手に曝す……って程じゃないけど、コレを話すと言う事はアレにも触れるか。

……でも、何時かは話す事に為るだろうし、遅いか速いかの違いでしかないか。

そう考えた俺は、組んでいた腕を解き、二人に俺の力の事を話し始めた。

「……まず基本となるのが『オーラ』。見た目は透き通った空色の羽を持つ大きなトカゲって所だ」

「基本って？」

霊夢は不思議そうに尋ねてくる。

「言葉の通りの意味だ。どの属性にも偏らないもつとも基本的な竜だからな」

「じゃあ、前に乗せてくれたアズキ色の竜はなんなんだ？」

霊夢の質問に答えると、今度は魔理沙が質問してきた。

「アレは火の属性の竜『ジャブジブ』。……変身した時に名乗ったと思うけど？」

「いや、属性云々の話だ」

俺の返答を聞いて、魔理沙が更に質問してきた。

魔理沙の質問に霊夢も興味深々つと言った眼でコツチを見てくる。

「俺は四つの属性に特化した竜に変身出来るんだよ。その一つがあるの『ジャブジブ』って事」

「四つの属性って事は……もしかして地水火風の四つか？」

「嗚呼。水属性の『ジャバウオック』、風属性の『ナイト』、地属性の『バンドスナッチ』がそれぞれの属性竜で、どの属性に当て嵌まらないが『オーラ』なんだよ」

「それじゃ、お前は五つの竜に変身出来るのか」

「いや、変異種の『パンク』に覚醒種の『カイザー』……それに『アンフィニ』があるから全部で八つだ」

「変異に覚醒？」

魔理沙の質問に答えると、また霊夢から質問をされた。

霊夢には『カイザー』の姿を見せたけど、『パンク』と『アンフィニ』は知らないだったな。

そんな事を考えつつ、俺は喉を潤すためにお茶を一杯飲んでから、霊夢の質問に答えた。

「『カイザー』は基本となる『オーラ』が覚醒した竜だから、便宜上そう呼んだだけ。変異は……なんなんだろうな？」

「……？ なによそれ」

「いや、本当に分からないんだよ。『オーラ』や『カイザー』の様にどの属性にも偏らない竜なんだけど、その二体の様に力強さがある訳でもない。……強いて言うなら、状態異常を引き起こせるって所か」

「なら毒竜でも良いんじゃないのか？」

魔理沙がそう言うてくるが、俺は首を横に振って否定した。

「あの竜な、毒以外にも混乱や眠りも引き起こせるんだよ」

「……なんだよ、その竜」

「分からん。とりあえず、状態異常を引き起こすから俺は『変異』  
って呼んでる」

「「「……………」」」

俺がそう締め括ると、二人は押し黙ってしまった。

俺は何も言わずに湯飲みを持ち、お茶をもう一杯飲む。

話すのに時間を掛けすぎたのか、湯飲みに入っているお茶が温くな  
っていた。

俺はお茶を一気に飲み干し、コタツの上にあるお茶請けの饅頭を一  
つ食べ始める。

「あ、リュウ。もう一つ質問なんだけど」

「なんだ？」

「『アンフィニ』ってなに？」

霊夢の質問を聞いて、俺は饅頭を食べていた手を止めてしまった。  
さっきの話を流れたったら、多分『アンフィニ』の事は触れないと  
思ってたんだけど……流石に甘かったか。

正直な事を言えば、この事が一番話したくない。……でも、二人か  
らは？さつさと話せ？的な視線が注がれている。

出来る事なら有耶無耶にしたかったけど、それも無理そうだな。

あの名前を出さなければ良かったと、心の中で後悔しつつ、俺は重

い口を開いた。

「『アンフィニ』は変身出来る中で最強の存在で、竜としての俺の本当の姿だ」

「本当の姿？」

「嗚呼。『オーラ』も『カイザー』もこの竜の派生で、残りの五体は元々は別の竜だ。あれ等は、旅をしている時に『竜水晶』と呼ばれる物に触れて、変身出来る様になった奴だからな」

「あのカイザーが派生って……」

俺の説明を聞いた霊夢は、信じられないと言わんばかりに絶句する。霊夢は紅霧異変の時に『カイザー』の力を見せたから、これは当然の反応なのかもしれない。

『カイザー』はあの世界を旅をしていた頃は、間違いなく最強の竜だった。

でも、その最強を凌駕する力を持っているのが『アンフィニ』なんだ。

あの力を解放すると、一体どんな事になるのか想像も出来ない……と言っよりもしたくない。

……全く、俺はなんでそんな力を持って生まれたんだろうな。

「お願いだから、そんなの簡単に使わないでよ？」

「分かってるって。俺も出来る限り使いたくないしな」

「んじゃ、此処で話題を変えて……リユウ、お茶を入れてきてくれ」



「それは自分でやれ」

「わたしは客だぜ？」

魔理沙の催促を無視しつつ、俺はお茶請けの饅頭を食べきった。

さっきも言ったが、あの力は出来る限り使いたくない。

……でも、アレを使わざる負えない状況に追い込まれたら……俺は如何するんだらうな。

## 第二十一話 竜の力（後書き）

『アンフィニ』はフランス語で？無限？と言う意味らしいです。確証はありませんが、名前の由来はコレではないかと思えます。……自分はずっと？アンリミットド？と？インフィニティ？を組み合わせた造語だと思ってました。

### 次回予告

桜の季節も終わったのに、幻想郷の季節は今も冬のままだった。何時までも続く冬に異変を感じた巫女と竜は、ついに異変解決に向けて立ち上がる。終わらない冬を終わらせる為、未だ訪れない春を迎える為、二人は幻想郷中を駆け回る。

竜が辿り着いた幻想郷 第二十二話『春雪異変』

春を捜す二人の前に立ちはだかる者とは一体……。

## 第二十二話 春雪異変

新年が過ぎ、暦は五月になった。

時期としては桜の花が散り、そろそろ深緑の葉が生い茂る頃だ。

この辺りから夏に向けて気温も上がっていく筈……なのだが。

「……寒いな」

「そうね。幾らなんでもコレはありえないわ」

幻想郷は五月を迎えても、未だに冬が続いていた。

外は緑が生い茂るところか、雪が降り続いていて、新芽が出ているのかも怪しい。

寒さは冬の頃から変化はなく、相変わらず朝晩の冷え込みは厳しいもんがある。

余りにも厳しい寒さの余り、俺と霊夢は絆纏はんてんを着て、毎日の様にコタツで暖を取る生活をしている。

「なあ、霊夢。これって異変だよな」

「ええ。間違いなく異変ね」

向き合うようにコタツに入っている俺と霊夢は、この冬が異変である事を確認しあう。

「……………」

お互いに何も言わずに頷き合つと、それぞれの部屋に向かい道具を

取りに行く。

俺が取り出したのは、前もって作っておいたスペルカード数枚にボロボロの剣。

後は絆纏はんてんを脱いで、霊夢に貰った紺色の長袖の服を着込む。準備を終えたら、その足で玄関へと向かう。

玄関には既に霊夢が準備を終えて待っていた。

俺は愛用の靴を履き、霊夢と共に家を出て、幻想郷の空を翔けて行く。

……俺と霊夢の目的はただ一つ、奪われた幻想郷の春を取り戻す事だ。

……

……

…

「……とは言え、春を奪うってどうやったんだろっな？」

「そんなの知らないわよ。とりあえず、そこ等にいる妖怪を退治していくだけよ」

「またそれかい」

「うっさいわね。解決出来ればそれで良いのよ」

俺達はあても無く幻想郷の空を飛んでいた。

空からは深々と雪が降り、眼下に広がるのは一面の銀景色。

何処を見ても雪が降り積もっていて、今が本当に五月なのか疑問に

思えてくる。

「それにしても、いい加減この雪景色も見飽きたわね」

「だよな。そろそろ緑の葉が見たいものだ」

俺と霊夢は、他愛のない話しをしながら犯人探しをしていた。

とは言え、この寒い冬の中でも精力的に活動する妖怪も中々いない。犯人の眼星がある訳じゃないから、手掛かりから搜しているのと同じ状況だ。

そんな中、俺達の目の前に、青と白を基調にした服を着た白っぽい髪の女性が現われた。

「……誰よアンタ」

「ワタシ？　ワタシは『レティ・ホワイトロック』。ただの冬の妖怪よ」

「ふん」

目の前に現われた彼女は、自分の事を冬の妖怪と言った。

如何して？　冬の？　なのかわからないが、確かに彼女からは冷気のような冷たさを感じる。

それが彼女の能力か知らないが、少なくとも今回の異変に付いて何か知っていそうだ。

そう考えた俺は鞘から剣を抜き、霊夢も札を取り出し臨戦態勢を整えた。

「えーっと、如何して貴方達は武器を構えだしたのかしら？」

「冬の妖怪なら、この終わらない冬の事を知ってると思ったからよ」

「……貴方達、もしかしてこの冬を終わらせる心算なの？」

「寒いからな」

「そんなの駄目よ！ 折角この素晴らしい冬が長く続いているのに、終わらせるなんて勿体無い！！」

「「そんなの知った事じゃないって／わよ」」

俺と霊夢は同じ言葉を言っつて、彼女の意見を拒否した。

拒否されたのがショックなのか、顔を下に向け俯いてしまった。

「……そう。なら、ワタシが冬の幸せを教えてあげる！」

彼女は顔を上げて宣言すると、自分の前方に白い霧の様なものを出してきた。

俺は霊夢を守る様に前に立ち、剣を握り直し、何時でも弾を飛ばせるようにする。

あの白い霧そのものが弾幕と言う事はなさそうだが、無意味に出しているとも考えられない。

自分の弾を隠す為に出したとしたら、既に弾が放たれていても良いはず。

そんな事を考えていると、白い霧は晴れ、其処から無数の弾幕が放たれた。

放たれはしたが……弾幕の密度は其処まで厚くは無い。

俺は余り動かず、直撃コースの弾を斬撃に似せた弾で打ち消す。

俺が放った弾は真っ直ぐ飛び、コッチに向かって来ていた斬り裂き、

狙い通り打ち消した。

弾が消えたのと同時に、俺は前に出て彼女との間合いを詰める。彼女は俺の行動に驚くものの、直ぐに別の弾幕を張り迎撃しようとしてきた。

今度の弾は全て俺目掛けて飛んでくるが、この程度なら躲すのは容易い。

俺は少しだけ横に逸れる事で避け、弾を掠りながらも彼女との間合いを詰る。

間合いを十分に詰めたところで、俺は近距離から斬撃を叩き込み、後方に吹き飛ばした。

「キヤアツ?!」

俺は後方に飛ばされた彼女に、斬撃に似せた弾を放つ。

弾は真つ直ぐ飛んでいくが、弾の射線上から移動してしまい当たる事はなかった。

……分かっていた事だが、やはり距離があると速度があっても単発じゃ避けられるか。

竜変身すれば連射も出来るけど、彼女程度の実力なら使つまでも無い。

そう考えた俺は、剣を構え直し、再び間合いを詰める。

だが、俺が間合いを詰めるよりも先に、彼女はポケットから一枚のカードを取り出した。

「寒符『リングリングコールド』!」

彼女がスペカを宣言すると、周辺の冷気が増したような気がする。幾ら長袖を着ていても、寒さが増すのは勘弁してもらいたい。

もつとも、彼女にそんな事を言っても仕方が無いのは重々承知だが。

「さて、まずは一枚目の攻略と行くか」

俺はそう呟いてから前に出て、彼女との間合いを詰めて行く。

それに対して彼女は、一つの大きめ弾を中心に複数の弾を連ねた弾幕を放つて来た。

弾幕の速度自体は遅いものの、左右に連なった弾の少し特殊な動きをしている。

だが、言って仕舞えばただそれだけの弾幕だ。

前に戦ったレミアアやフランドールのスペカに比べれば、かなり楽な弾幕に入る。

俺は迫つて来る弾幕を掻い潜り、再び間合いを詰めて斬り掛かった。だが、今度は後ろに吹き飛ばしたりはしない。

彼女は俺が剣を振った後を付いて、至近距離で弾幕を放ってくる。俺はその弾幕を躲しつつ、また斬り掛かりつつ後ろに下がる。

後ろに下がったものの、すぐに斬撃に似せた弾を彼女に向かって飛ばす。

その弾が命中したのを目視したら、更にもう一撃叩き込んだ。四連撃を叩き込むと、辺り一帯に出ていた冷気が少しだけ和らいだ

気がした。

「いたた……。貴方の弾幕はなんなの？ 物凄く痛いんだけど……」

彼女は痛みで顔を顰めながらも、俺に尋ねてきた。

答えようか迷ったが、知られたからと言って困る様な事でもない。そう思った俺は口を開いた。

「……？今の？俺は、あの弾を連射するのが苦手だな。その分威力を高めたんだ」



「威力を高めたってレベルじゃないと思う……」

俺の返答に彼女は嫌そうな顔をする。

俺はそれに苦笑いで答えるしかなかった。

「……痛い思いをしたくないなら、此処で負けても良いんじゃないのか？」

「それも良いかもしれないけど、一枚攻略された程度じゃ引けないわ」

「そうかい」

俺の提案に、彼女はやんわりと断った。

彼女の返答はなんとなく予想が出来ていたから、特に落胆する事は無かった。

……とは言え、あまり長々と戦う気は無いし、次で決めさせて貰うか。

俺は心の中でそう決めていると、彼女は二枚目のカードを取り出した。

「冬符『フラワーウィザウェイ』」

彼女が二枚目を宣言すると、またこの一帯の寒さが増した。

俺はズボンのポケットから一枚のカードを取り出し、彼女との間合いを詰める。

二枚目のスペカは、大量の雪玉を出現させ、それを周囲に放って来るものだ。

弾幕の密度は厚いが……決して躲せない程の厚さじゃない。

俺は弾の軌道を読み、弾に掠りながらも少しずつ前に進んで行く。

彼女に近付けば近付くほど、弾幕は厚くなって行くが……臆せず前に進む。  
ある程度の距離まで近付くと、俺は取り出しておいたカードを宣言する。

「炎撃『烈火拳』！」

カードを宣言すると、剣の刀身に炎が燈り、近くにある弾幕を溶かした。

剣に炎が燈るのを見た彼女は、慌てて避けようとするが……間合いは既に十分に詰めている。  
俺は周りに残っている弾幕を溶かしつつ、彼女の喉元に剣を突き立てた。

「……………それでまだやるか？」

刀身が燃え盛る中、俺は彼女を問い質す。

炎の熱にやられたのか、彼女は大量の汗を掻きながらも口を開いた。

「ま、まいりました……………」

……………

……………

……………

戦いの決着が着いた後、俺は霊夢と共に彼女にこの異変の事を尋ねた。

「この冬が終わらないのはワタシの所為じゃないわ」

「じゃあ、誰だって言うのよ」

「それは知らないわよ……」

冬の妖怪の彼女だが、この異変を起した犯人ではないそうだ。

幾ら冬の間しか活動出来ないとは言え、季節が変わるのは自然の摂理と割り切っているとか。

だから、幻想郷から春を奪うような真似はしていないとの事だ。

「ワタシは、ただ冬が長続きして喜んでいただけなのよ」

「それはさっきも聞いたわ。……全く、誰がこんな異変を引き起こしたのよ」

「俺としては、如何やって春を奪ったのかが気になる」

「それは多分、誰かがあの子を誘拐したんじゃないかしら？」

「……あの子？」

俺と霊夢は、同時に彼女の言うあの子とは誰か尋ねた。

「『リリーホワイト』。春を告げる妖精で、あの子が居ないと幻想郷に春がやって来ないわ」

「じゃあ、誰かがその妖精を攫ったから、今も冬が続いているって事？」

「ええ」

彼女は霊夢の質問に頷いて答えた。

春を告げる妖精がどんな子が知らないけど、少なくとも犯人が春を独占しているは分かった。

しかし、何故そんな事を仕出かしたのかが分からないな。……ずっと花見をしていたくなったのか？

## 第二十三話 凶兆の黒猫

幻想郷の春を捜しに出た俺と霊夢。

道中で出会った雪の妖怪の話聞いて、春を告げる妖精を探しているのだけど、何処に居るのか見当も付かない。

空から幻想郷を見ているけど、何処もかしこも雪景色になっていた。本当に、この何処かに春を独り占めしている奴が居るのだろうか？ 辺りを見る限りだと、そんな風には見えないがな。

「何か見付かったリュウ？」

「いや何も……って、アレは何だ？」

俺が見つけたのは一本の大きな木。

その木も他と同様に雪が積もっているのだが、上の方だけ何故か雪が積もっていないかった。

風で飛ばされたのか、雪の重みに耐えかねてずり落ちたのかも知れないけど、何故かその木の事が気になった。

俺は雪が積もっていない箇所付近に近付き、何か無いかと捜してみる。……すると、木の枝の間に桜の花びらの様なモノが挟まっていた。

俺はそれを拾い上げ、マジマジと観察してみる。

「桜の花びら……って訳でも無さそうだな」

「ちょっとリュウ。一体何を見つけたのよ」

俺が花びらを観察していると、霊夢が傍にやって来た。

「いや、こんなもん見つけてさ」

「ん？ ちょっと貸して」

「はいはい」

俺は手に持っていた花びらを霊夢に渡した。

霊夢もそれを観察し始める。

色々な角度から花びらを観察するけど、どの角度から見ても花びらは花びらだと思う。

霊夢は、少しの間花びらを観察していたが、十分に見たのかソレを俺に返してきた。

「はい、ありがとね」

「それは良いけど……コレが何か分かったのか？」

「うーん……イマイチ確証が無いから、なんとも言えないのよね」

「珍しくはつきりしない返事だな」

「もうちょっと集れば何か分かると思うけど、それだけじゃね」

「なら、これをもっと集めてみるか。何かの手掛かりになるかもしれないし」

「そうね」

俺達は頷き合って、桜の花びらを捜す事に決めた。

同じ様なものが無いかと辺りを見回していると、突如突風が吹いた。

突風は積もっていた雪を吹き飛ばすが、それと同時に桜の花びらも運んできた。

俺はそれを逃さず掴み取ると、風が吹いた方角を見る。

「……今のは、アッチの方から飛んで来たのか？」

「そうみたいね。……よし、行くわよりユウ！」

「決断はやッ!？」

即決した霊夢は、風が吹いた方角にドンドン進んで行く。

俺は彼女を見失う前に、花びらをポケットに入れて急いで後を追いかけた。

……

……

…

何時もの様に、悪戯で弾幕を放ってくる妖精を撃退していると、俺達は何時の間にか村に辿り着いていた。

最初はこんな所にも村があるのかと思っただが、よく観察してみると家には人の気配はなく静まり返っている。

これと言って人が生活している様子もない事から、恐らくは廃村だと判断した。

「こんな所に廃村なんて在ったんだな」

「私も初めて知ったわ」

どうやら霊夢も此処に来るのは初めてらしく、少し驚いた様子だった。

俺達は地面に降り立って、村の様子を改めて観察してみる。家々は使われていないからか、所々朽ち掛けているが原型は留めている。

この村から人が居なくなってから、さほど時間が経っていないのか、それともまだ誰かが使っているのか？

「其処の二人！ この村でなにをしているのよ！！」

「ん？」

突然、誰かに声を掛けられた俺達が後ろを振り向くと、其処には赤い服に緑の帽子を被った、茶色い髪の猫耳の少女がいた。幻想郷に来て一年が経とうとしてるけど、久々に獣人を見た気がするな。

あの子は猫みただし、仲間の『クレイ』みたいに虎人フイレンの一族か？  
……あれ？ 虎に猫って含まれてたっけ？

「アレは……猫又かしら」

「猫又？ 獣人じゃないのか？」

「違うわよ。あんなんでも妖怪の一種よ」

「へえ」

霊夢が言うにはあの子は妖怪らしいが、あの世界の住人の大半が妖怪になるのか？



妖怪と獣人の境界をはつきりさせないと、なんとも言えないか……。

「ここは私達の里よ。人間は出て行って」

「はい、質問。人間じゃない奴は如何すれば良いんだ？」

「えっとそれは……」

俺が意地の悪い質問をすると、猫又の少女は悩みだした。随分と頭を悩ませていると、突然吹っ切れたように怒り出した。

「と、兎に角！ さっさとマヨヒガから出て行け！！」

それだけ言うと、猫又の少女は俺達に向かって弾幕を放って来る。俺は剣を抜いて迎撃しようとしたが、それよりも先に霊夢が前に出た。

「今回は私がやるから、リュウは下がってて」

「……怪我するなよ」

「大丈夫よ」

霊夢の返事を聞いた俺は、言われた通りに後方に下がった。本当は前に出て戦いたかったが、俺ばかり前に出てると霊夢に文句を言われるな。

俺が後ろに下がると、霊夢は猫又の少女の弾幕を躲し、自分の弾幕を叩き込んで行く。

今回の霊夢の弾幕は、自動で相手を追尾するモノのようだ。だから、相手が自分の射線上に居なくても攻撃していく事が出来る。

猫又の少女は、霊夢の弾幕を躰そうとアチコチ動くが、追尾弾を避け切る事は出来ずにいる。次々に迫る追尾弾を避け切れず、霊夢の弾幕はドンドン命中していった。

次第に追い詰められていった少女は、服のポケットから一枚のカードを取り出す。

「仙符『鳳凰展駆』！」

猫又の少女は一枚目のスペカを宣言した。

スペカを宣言すると、少女は目にも止まらぬ速さでアチコチ動き始めた。

その途中で赤とオレンジの大量の弾幕を放ってくる。

少女の動きが素早い上に、弾幕自体もそれなりの厚さがある。

あるのだが……霊夢の追尾弾の前には大して意味が無かった。

どれだけ動いて、弾幕の射線から外れても追尾弾を回避出来ない以上、霊夢の弾は命中し続ける。

少女は自身の移動速度を上げてるものの、霊夢の弾を回避する事は出来なかった。

そのまま霊夢の弾幕を受けた少女は、何時の間にか一枚目のスペカを攻略されていた。

「くっ…まだまだ!!」

「霊符『夢想封印 集』」

「……えっ？」

霊夢は何時の間にかスペカを取り出して、それをこのタイミングで宣言した。

スベカを宣言すると、霊夢の周りに複数の光弾が出現し、全ての弾が少女に向かって放たれた。猫又の少女は慌てて回避しようとするが、追尾してくる光弾になす術が無かった。

そのまま少女は、有無言わず封印されてしまい、その場で気絶した……。

「よっし、終わりー！」

「うわ〜……」

霊夢は晴れやかな顔だけど、俺は……なんて言うか言葉が無かった。あの少女にもっと頑張れと言えば良いのか、それとも霊夢にやり過ぎだと言えば良いのか……。

確かに先を急いでいる身としては、手早くケリを着けた方が良くのかもしれないが、これはちょっとな……。

「ん？ 如何したのよりユウ。変な顔をしちゃって」

「……いや、なんでもない」

「……？」

何も言わない俺に対して、霊夢は不思議そうな顔をした。

俺もはつきり言えば良かったのかもしれないが、如何言えば良いのか分からなかった。

「まあ良いわ。それよりもリュウ、ちょっと手伝って欲しいんだけど」

「手伝わってなにを？」

「家捜しよ家捜し。そうね……とりあえず、持ち運びの出来る日用品が欲しいわね」

「……はい？」

霊夢は楽しげに頼んでくるけど、俺にはイマイチ理解出来なかった。確かに博麗神社は参拝客が居ないから金がない。

それでも、妖怪退治の報酬で生活は出来ているし、俺が拾った道具を売って多少は収入がある。

だと言うのに、なんで今そんな事をしないといけないんだ？

「ちよつとリュウ。早く手伝わってよ」

「いや、その前に……なんで家捜しするのか説明してくれ」

「だって此処『マヨヒガ』でしょ？ 此処の道具を持って帰ると幸福になるって噂があるから、それを実践してみようと思ったのよ」

「それでか……」

俺は霊夢の説明を聞いて、漸く納得する事が出来た。

しかし、廃村とは言え家捜しをするのは………今更だったな。よくよく思い返してみると、俺も街や村の家に勝手に入って家の中を漁ってたな。

それに比べればこの程度……と言っか、俺の方が酷い事してるか。

「ほらリュウ！ ボサつとしてないでさっさと捜す！」

「はいはい」と

霊夢に急かされた俺は、近くの家に入り中を物色する事にした。  
家の中には何故か猫が大量に居たが……気にしないでおくか。

## 第二十三話 凶兆の黒猫（後書き）

？あれ？ 何時も以上に適当じゃね？？と思っただ方。それは勘違いじゃないです。

正直、橙単体での使い道が思い付かなくて……。ストーリーの本筋から見ても、この子の出番を省略しても問題がない様な気が

ピーンポーン

おや、誰かが来たようだ。はいはい、どちら様で（スキマ送り

## 第二十四話 七色の人形使い（前書き）

注意。今回の話しは弾幕ごっこの描写はありません。

ネタバレだと思っでしようが、この程度なら特に問題はないです。

あと、今回は霊夢視点です。

## 第二十四話 七色の人形使い

マヨヒガでお宝をゲットした私たちは、また桜の花びらを追って飛びまわっていた。

雪が舞い散る中、妖精が落ちたり空から舞い落ちてくる謎の欠片。本来の桜は雪が降り積もる中では咲く筈の無い花で、逆を言えば、この花が咲いていれる場所は春になっていると言う事になる。

だから、この花びらを追っていけば何時かは春の大本に、この異変の犯人の下に辿り着ける筈。

……とは言え、この幻想郷中が雪に包まれていると為ると、地上部分に住んでいる妖怪の仕業とは考え難いわね。

もし犯人が他の地域に住んでいる奴だとすると、天界や龍神の住む世界。後は……冥界？

龍神がこんな事するはずもないし、天界の連中は……良く分からないから放置。

残りは冥界に住んでいる連中だけになるわね。私の勘通りなら、犯人は空の彼方に居るわけか。

「はあ、めんどいわね」

私は溜息を一つ吐いて、そう呟いた。

冥界は本来死者が行く場所で、私たちの様な生きている者が足を踏み入れて良い場所じゃない。

生者の行くべき領域じゃないとしても、この異変解決の為には如何しても冥界に行く必要が出て来た。

……そう頭では分かっているのだけど、やっぱり面倒な事には変わりはない。



「なにが面倒なんだ？」

私が一人、頭を悩ませていると、隣を飛んでいるリュウが不思議そうに尋ねてきた。

「別に大した事じゃないわ。ただ犯人の居場所の目星が付いただけよ」

「いや、十分大した事だろ」

「面倒なのは其処じゃないの」

「…？」

私は適当にはぐらかすと、リュウは不思議そうな顔をする。

だからと言って、リュウは深く追求してくることは無く、何も言わずに私の横を飛び続ける。

私の中で纏まったことを全部説明しても良いのだけど、このまま付いて来れば分かるでしょう。

そう考えた私は、リュウにコレ以上何も言わず先を急ぐ事にした。

………

………

…

暫く二人で飛んでいると、前方にエプロンドレスを着た数体の人形を連れている奴を見つけた。

この幻想郷に人形を連れてある奴なんて、私は一人しか知らない。

普段はインドア派で家に籠もってる事が多いくせに、こんな寒空の下で一体何をしているのやら。  
なんとなく目に付いた私は、前方で人形と共に飛んでいるアリスに声を掛ける事にした。

「ちょっとアリス。そんなところで何をしてるのよ」

「ん？ 霊夢？」

私が声を掛けると、アリスは今私たちの存在に気付いたような反応をする。

アリスが私たちの方を見ると、それに釣られて周りに居る人形たちも一斉にコツチを見てくる。

数体とは言え同時にコツチを向いてくると、一人なのか大勢なのか良く分からないわね。

心の中でそんな事を思っていると、アリスは人形達を連れて私たちの方に近付いてきた。

「久し振りね、霊夢。こんな所で何をしてるかしら？」

「それはコツチの台詞。アンタこそ何をしてるのよ」

「私は只の散歩よ。そう言う貴女は……異変解決って所かしらね」

「分かってるなら聞くんじゃないわよ」

私とアリスは他愛の無い話をしていると、リュウが物珍しそうな目付きをしているのに気がついた。

一体何が珍しいのかと思ひ、彼の視線を追ってみると……アリスの人形の一体に辿り着く。

リュウの行動範囲を考えると、アリスと出会う事なんて無いだろうし、彼女の人形が珍しいのかもしれない。そう心の中で結論付けた私は、なんとなくリュウの頭を小突きついた。

「ちょっとリュウ。なに人形を凝視してるのよ」

「いや、人形の割には随分と変わってるな〜っと思って」

リュウは、私に小突かれたところをさすりながら、不思議そうに人形を見ている。

私の予想通り、リュウにはアリスの人形が珍しいみたい。

……でも、私からすると何か如何変わっているのかさっぱり分からないわね。

「あら？ 貴方は私の上海の違いが分かるのね」

「違いつて言うか、俺の知ってる人形とは随分違うと思ったただけだ」

「貴方の知ってる人形？」

リュウの良く分からない発言に、意外にもアリスが食いついて来た。私も表面上は普段通りの顔をしてるつもりだけど、リュウの言う人形にはちょっとだけ興味がある。

リュウの昔話は何度か聞いたけど、人形の話は一度も出てきた事が無い。

何か面白いネタかもしれないし、私の知らないリュウの話には興味をそそられる。

「普通の人形じゃないのは分かるんだが、俺の知っている『オンク

「『や』アーター』とも違うから変わってるな〜って思ったんだよ」

「その『オンクー』と『アーター』って言うのは？」

「俺が昔創った犬の人形……と言うか使い魔だな。人の言葉を話せて、自立行動が出来るんだ」

「ちょっと待って。その二体は完全に自立しているの？」

「そう……だったと思うぞ。それが何か？」

「……何かじゃないわよ！ それじゃなに、貴方は私の目標を当の昔に到達したっていうの？！」

一体なにが気に入らないのか知らないけど、アリスが突然リュウに怒り出した。

でも、憤怒してると言うよりかは、信じられなくて怒っている様にも見える。

本当になんで怒ってるのか知らないけど、とりあえずもう少し傍観することにしましよう。

今のアリスを下手に突っついて私にも飛び火するのは嫌だしね。

「え〜っと、何を怒ってるのか分からないけど、此処は一旦落ち着こい」

「…そうね。此処で怒っても仕方がないわ。……でも、色々と聞かせて貰うわよ」

「お、お手柔らかに……」

アリスを宥めるのに成功したりユウは、彼女に自分の知っている事を話し始めた。

リユウの説明では、その二体は数百年前に自分の身边警護の為に創った使い魔だとか。

姿は両方とも大型の犬で、白いほうが『オンクー』で青い方が『アーティスト』と言うらしい。

自分の力を使い生み出した、生物の機械の中間の存在で、正確には人形とは別の存在になるとか。

でも、アリスからすれば人形でなくとも聞いておきたい話みたい。

「……貴方の話を聞くと、製法としてはゴーレムのソレに近いけど、完成度は段違いね」

「褒めてくれるのは嬉しいけど、創ったのが数百年前からもう一度創るのは無理だぞ」

「私としてはソッチの方が嬉しいわ。……そうでなかったら、私が頑張る意味が無いもの」

アリスは、明後日の方を見ながら、自分に言い聞かせる様に呟いた。私は努力が実を結ぶなんて信じて無いから、頑張る意味が本当にあるのか聞きたいわね。

努力しようがしまいが、出される結果が同じならする意味なんて無いじゃない。

私は心の中でそう呟き、アリスの事を皮肉った。

「そっぴや、アリスの目標って？」

「人形の完全自立化。今の状態では、私が命令すれば自立してるように動くけど……完成には程遠いわね」

「でも、このまま頑張れば何時か辿り着けるだろ？　なら頑張れよ、俺は応援するぞ」

「……既に辿り着いてる貴方に応援されるとイラっとくるわね」

「あ、アハハハ……」

アリスの辛辣な発言を聞いて、リュウは少し焦った様な表情になる。でも、こう言う時のリュウは本当に焦っていない事を私は知っている。

もう一年近く一緒に暮らしているんだ、その位は分かるようになって不思議じゃない。

「俺も聞きたい事があるんだけど、良いか？」

「色々と聞かせて貰ってるし、へんな事で無ければ良いわよ」

「アリスって複数の人形を同時に操ってるけど、アレって如何やってるんだ？　やっぱり糸か？」

「基本的にはそうよ」

「なんで指一本であそこまで動かせるんだ？」

「それは企業秘密」

「むう……。そう言われると余計に気になる」

リュウは困った様な表情をしながらも、聞こえて来る声音は何処か

楽しそうだった。

アリスもアリスで顔が綻び、本当に珍しく楽しそうにリュウと喋っている。

……でも、私はそんな二人を見てみると、堪らなく嫌な気持ちに為ってくる。

別に二人の会話に入れないのが嫌と言う訳じゃない。

ただ、リュウがアリスと親しげに話しているのを見ると、如何してかイライラしてくる。

なんでこんな気持ちになるのか知らないけど、二人が楽しげにしているのが気に入らない。

「……………」

さっきのリュウのアリスへの励みだったそう。

一緒に暮らしている私を心配はしてくれても、励ましてくれた事なんて今まで殆ど無い。

殆ど初対面のアリスは励ますのに、如何して私にはそう言う言葉を掛けてくれないの？

直接言葉には出さず、心の中で思っていると、私の中でドンドン苛立ちが募って行くのが分かる。

この気持ちの正体がなんなのか分からないけど、この苛立ちを止める事は出来そうになかった。

「…ん？ 如何した霊夢、なんか機嫌悪いみたいだけど？」

「なんでもないから気にしないで」

漸くリュウが話し掛けてきたのに、私の口から出たのは素っ気無い言葉と態度。

別に彼が悪い訳じゃないって分かってるのに、この苛立ちの所為で如何してもそんな言葉遣いになってしまう。もっと他の態度を取れば良いのに、頭で考えるよりも先に口が動いてしまっている。

「本当に如何したのよ、いきなり機嫌が悪くなって」

「アンタには関係ない」

「……あつそ。まあ、私も聞きたい訳じゃないから良いけど」

「……………」

アリスが気に掛けているのに、やっぱり私は素っ気無い態度で返事をした。

流石にこの態度はないと頭では分かっていても、如何しても口の方が先に動いてしまう。

なんでこんな態度しか出来ないのかと、答えが出ないと分かっていも心の中で自問自答を繰り返す。

本当に今の私は如何かしている。アリスと出会うまではこんな気持ちには為らなかったのに……。

私の苛立ちを他所に、アリスはまたリュウと話し始めようとする。

「それでリュウ、さっきの話の続きだけど……」

「……あゝ悪いアリス。俺達、異変解決の為に先を急ぐから今回はこの辺で」

だけど、リュウは先を急ぐからと断って、私の手をそっと握って来た。



「ちよ、ちよつとリュウ?!」

私はあまりにも突然の出来事に慌てふためくけど、リュウは私の手を離そうとはしなかった。

力付くで手を離すことは可能だけど、如何してもそうしようとは思えない。

私は段々と顔を赤くしていくのと自覚しながら、リュウの手をそつと握り返した。

「……異変解決くらい霊夢一人でなんとかなると思っけど?」

「それでも手伝いたいんだ」

「はあ、仕方が無いわね。なら、続きは今度会った時にでも」

「ああ。それじゃまたな、アリス」

アリスに別れを告げたリュウは、私の手を引つ張つて何処かへと飛び始める。

私はされるがままの状態で、リュウの手を握つたまま彼の後ろを飛ぶ。

後ろを振り返ると、アリスの姿が段々と小さくなっているのが見える。

今の私たちは、彼女から見ると一体どんな風に見えるんだろう、そんな事を考えると何故か顔が更に熱くなつて来た。

私は考えを払うように頭を振るけど、熱くなつた顔はそう簡単には元に戻りそうにもなかった。

「ん? 如何した霊夢? 顔、真つ赤だぞ」

突然、後ろを振り向いてきたリュウが、不思議そうに聞いてきた。今の真つ赤な顔を見られた私は、恥かしさや何かで頭の中が一杯に為ってしまった。

偶に狙ってるんじゃないのかと思うけど、今は恥かしさの余りに考えが上手く纏まらない。

私は、後先を考えずに感情の赴くままに言葉を発した。

「……うっさいバカ！ 大体って言うか、殆ど全部アンタの所為よ！！」

「なんで?!」

「そのくらい察しなさいよ、バカ!!」

「無茶を言うな!」

私は無茶苦茶な事を言って、ついついリュウを困らせてしまう。

自分でも随分と無茶な事を言っている自覚はあるけど、如何しても止めれそうにない。

何時の間にか、私たちは何時かの口喧嘩の様な言い合いをしていたけど、気が付くとさっきまでの苛立ちは無く、繋いだこの手を離す事もなかった……。

第二十四話 七色の人形使い（後書き）

オマケ

私は、少しずつ遠く離れて行く二人の後ろ姿を眺めていた。ただの思いつきで始めた今回の散歩。何か面白いモノでも有ればと思っていたけれど……予想外のモノに出会えた気がするわ。

「まさか、あの霊夢があんな態度を取るなんてね」

私の知っている博麗 霊夢は、誰に対しても平等に接する事の出来る人間。

厳しくも無く優しくも無いから、変なのに好かれ易いのは知っていた。恐らくリュウもその類だと思っていたんだけど……実際の所は逆だったわけか。

「……あの二人の様子を見ると、この先が進展があるのか怪しいものね」

私は、此処からでも聞こえて来る声量で喧嘩をする二人を見て、ついそんな感想を持ってしまった。

終わり

## 第二十五話 騷靈三姉妹（前書き）

今回の話しとは関係ありませんが、前回の第二十四話の文を少しだけ手直ししました。

大まかな部分は変わってませんが、興味のある方は是非どうぞ。

## 第二十五話 騒霊三姉妹

幻想郷の奪われた春を捜して、彼方此方を飛びまわっている俺と霊夢。

今までは桜の花びらを追い求めて飛んでいたが、今は空の彼方を目指して飛んでいる。

霊夢が言うには、博麗神社の風上に位置する孔を越えて、その先にある結界の向こうに、今回の犯人が居る可能性が高いとの事だ。

其処に行くためには、空を飛び、黒い孔を越え、二つを分ける結界を超える必要がある。

霊夢が面倒だとぼやいていたのは、どうもそこら辺に関係しているみたいだ。

「……にしても、こんな場所に結界なんてあるのかね？」

「なによ、私の言う事が信じられないって言うの」

俺が訝しげに呟くと、隣りを飛んでいる霊夢は、若干怒った風なそう口調で言ってきた。

「だって、空を眺めていても結界なんて見た事無いぞ」

「それはアンタの見方が悪いのよ」

俺は思ったことを素直に言ったが、あっさりと切り捨てられた。

見方が悪いと言われてしまうと、それまでなんだが……空の上の結界と言うのが今一つ理解出来ない。

俺の中にあるイメージでの結界と言うのが、札を四方に張って発動させるタイプのものばかりだ。

札を貼る枚数や、それを補助する術式なんかでより強固なモノに為る……そう言うイメージ。

何も無い空中に札を貼るとは思えないし、どうやって空の上に結界を張ってるんだ？

そんな疑問を抱えながら空を飛んでいると、漸く薄暗い孔を抜け出す事が出来た。

抜けた先には広大な雲の海が広がっていて、不思議な事に地上部分よりも空の上の方が暖かった。

普通この位の高度なら、もっと気温が低くても良いはずなんだが、此処は春を思わせる位に穏やかだった。

俺は徐々に雲海の上に出たと言う事もあって、周りをキョロキョロ見渡していると、白を基調にした長袖のワンピース状の服を着た、金の長髪の妖精と思われる少女が飛んでいた。

その妖精は何かを大声で訴えながら、雲海の上を飛び回っている様だ。

なんとなく彼女が何を言っているのか気になった俺は、霊夢の手を引いてあの妖精に近付いてみる事にした

「春ですよー。春なんですよー」

「「……………」」

妖精が何を訴えているのかと思えば、誰に言う訳でもなく春が来た事を訴えていた。

俺も色々な妖精を見てきたけど、こんな事を言う妖精は初めてみるな。

……こんな事言うのもアレだけど、彼女自身の頭が春な様な気がする

るぞ。

「あれー？ こんな所に人なんて珍しいー」

「こんにちは」

「……アンタ、なに？」

「わたしは『リリーホワイト』。春を告げる妖精ですよー」

「リリーホワイト？」

俺は自己紹介してくれた彼女の名前を、前にどこかで聞いたような気がする。

彼女の名前を聞いたのは、確か………レティとか言う雪の妖怪と戦った後だったか。

なんでも、彼女が居ないと幻想郷に春がやって来ないとかなんとか……。

「……それじゃ、君が春の大本なのか？」

「大本かは知りませんが、春を告げる役割を持つ妖精ですよー」

俺が確認の為に聞くと、彼女は肯定はしなかったが春に関わる事を否定もしなかった。

「春を告げるって、具体的には何をするのよ」

「そこら辺を飛んでー、春が来た事を告げるんですよー」

「「…はあ」」

俺と霊夢は、彼女の独特の間合いを今一つ掴みきれないでいる。彼女は独特のテンポと満面の笑みで喋るから、少し会話がし辛い感じがするな。

「まあ、なんでも良いわ。それよりも、早く幻想郷に戻って春を告げてきてよ」

「幻想郷は春じゃないんすかー？」

「今、雪が降ってるぞ」

「そうなんですかー！？ それは急がないとー！」

今まで笑顔で話していたリリーホワイトは、俺の言葉を聞いて驚きを隠けにし、急いで何処かへと飛んでいった。

……急いで飛んでいったのだが、彼女が向かった方角は俺達が通つて来た孔とは、全く関係の無い方角だった。

彼女に出入り口を教えようと思ったのだが、声を掛ける前に彼女の姿を見失ってしまう。

俺と霊夢は、彼女が飛んでいった方角をただ呆然と見ている事しか出来なかった……。

「……如何する霊夢？」

「とりあえず、あの妖精を捕まえた犯人をまだ取っちめて無いから、そいつを退治しに行くわよ」

「了解。それじゃ、此処に在る結界を探せば良いんだな」



「そう言う事」

今後の方針を決めた俺達は、リリーホワイトが飛んでいったのとは反対の方に向かった。

この雲海の中に、どんな結界があるのか知らないが、捜していれば見付かるだろう。

そんな事を思いながら、俺は霊夢の手を引いて雲の海を飛んで行く事にした。

……

……

…

暫くの間、何も無い雲海を飛んでいると、俺達は何時の間にか巨大な門の様なモノに辿り着いた。

門の扉は魔法陣の様なモノで封印されていて、とてもじゃないが開けられそうにない。

俺が竜に変身して力付くで抉じ開けるのも考えたが、後々の事を考えると流石にそれはやらない方が良さそう。

残った方法は、霊夢にこの封印を解いてもらう方法だが……そんな面倒な事を彼女がやるとは思えない。

「さて、如何したもんか」

「さあね」

俺と霊夢は、コレを突破する良い方法が思い付かず、門の前で立ち

往生するしかなかった。

何か良い方法はないかと考えていると、後方からなにやら騒がしい音が聞こえて来る。

なんの音かと耳を済ませてみると……後ろから聞こえてきたのは、何らかの楽器の演奏だった。

違う音が三つほど聞こえて来たから、少なくとも三人ほどコツチに向かってきているのが分かる。

俺達は後ろを振り向き、誰が来るのか見てみる事にした。

「おや、こんな所に人とは珍しいね」

「そうね。……もしかして、デートかしら？」

「え〜。こんな辺鄙な場所でそれは無いでしょ」

俺の予想通り、コツチにやって来たのは三人の少女だった。

一人は金髪に黒服を着ていて、もう一人は銀髪に白い服を着て、最後の一人は栗色の髪に赤い服を着ている。

そして三人の周りには、何故か弦楽器と官金楽器と鍵盤が浮んでいる。

なんで楽器が浮んでいるのか知らないが、こんな所に来る以上人じゃないのは確定しているな。

「ちょっとアンタ達！　あまり変な事言わないでよ！　リュウが勘違いするじゃないの！」

「……勘違いってなにが？」

「コイツは……ッ」

理由は良く分からないが、俺の発言を聞いて、霊夢が自分の拳を力いっぱい握り締め始めた。

握り締め過ぎて、拳から血が出るんじゃないのかって心配になるほど力強く握ってる。

なんでこんなに怒っているのか分からないけど、そんなに握り締めて痛くないのか？

「確かにデートじゃないみたいだけど、色々と苦勞してそうね」

「彼は強敵っぽいね」

「……まあ、頑張って」

「つつさい!!」

なにやら良く分からないが、霊夢はあの三人に励まされてた。

励まされたのだが、霊夢にはそれが気に入らないのか、三人に向かって声を荒げる

今の会話の何処に励ます要素があるのか分からないけど、とりあえず俺も励ませば良いのか？

……いや、そんな事したら火に油を放り込むだけな気がするから止めよう。

「それで、アンタ等は一体なんなの？」

「私たちは只の騒霊音楽団。冥界で行われる花見で演奏する為にきたの」

「……冥界って、この門を越えた先にあるのか？」

「ああ」

「どつやって門を越えるんだ？ 封印されていて開きそうにもないぞ」

「開けるんじゃないくて、門の上を飛び越せば良い。そうすれば冥界にいける」

「ちよつと姉さん！」

「ふ〜ん……」

黒い服の子が喋ってくれたお陰で、この門の先に進み方法が漸く分かった。

如何やら、この門の上部分には、侵入を防ぐタイプの結界は張れていないらしく、門を飛び越えていくことが可能の様だ。

恐らく幻想郷から春を奪った犯人も、門の上を飛び越えてコツチにやって来たのだろう。

……それにしても、冥界ってあんまり良い響きの名前じゃないな。空の上にあるなら天界になるんじゃないのか？

「ところでさあ。貴女達は何しに此処に来たの？」

赤い服の子は、俺達が此処に居るのが不思議なのか、首を傾げながら質問してきた。

「俺達は幻想郷の春を取り戻しに来ただけだ」

「そう言う訳だから、アンタ等の言う花見は中止よ中止。怪我する前にさっさと帰りなさい」

俺は赤い服の子の質問に答え、霊夢は一応は彼女達に忠告をする。忠告したとは言え、彼女達がこのまま大人しく帰るとは俺も霊夢も思っては居ない。

案の定、彼女達は自分の楽器を傍に引き寄せて、この場で演奏の準備を始めた。

「……やっぱり、帰る気はないか」

「怪我はしたくないけど、今回の相手は上客のお得様。流石にこのまま帰るのもちょっとね」

「そう言う訳だから、雑音は排除させてもらおうよ」

「お姉ちゃん達頑張れ〜」

「リリカも手伝って」

彼女達の意味は強いらしく、どう遭っても引かない構えのようだ。俺は無言で剣を取り出し、霊夢は懐から札を指に挟んで取り出した。

コツチの準備が終わると同時に、黒服の子の弦楽器が一人で音を奏で始める。

弦楽器から出た音は、無数の弾幕へと変わり、辺りに一斉に散らばった。

放たれた弾幕は、俺達を直接狙ってくる事は無いが、放ってくる数が多い。

俺は霊夢の前に出て、迫ってくる弾を斬り裂き、霊夢はホームイングする札を放って、黒服の子に攻撃していく。

俺達が黒服の子に攻撃していると、残りの白服の子と赤服の子も攻撃に参加してきた。

白服の子は官金楽器の演奏を、赤服の子は鍵盤楽器の演奏を弾幕の変えて攻撃してくる。

弾幕の数は単純に三倍になるが、俺はただ霊夢に迫る弾幕を斬り裂き、打ち消して行く。

その間に霊夢がドンドン札を放って、弦楽器を操る黒服の子を攻撃し続ける。

暫くの間、三対二の攻防が続いていると、黒服の子がポケットから一枚のカードを取り出した。

「大合葬『霊車コンチェルトグロツソ改』」

黒服の子がカードを宣言すると、残りの二人も演奏を中断し、彼女の傍に寄った。

そして、それぞれ自分の楽器を手に持ち……一曲演奏をし始める。

さっきまでバラバラに奏でられていた音が纏まり、一つの楽曲として完成した。

それと同時に、彼女達の演奏で奏でられた旋律が弾幕に為り、俺達に一齐に襲い掛かってくる。

「あゝうつとしい！ リユウ、何とか出来ない！？」

霊夢は、この演奏で出現する弾幕が嫌なのか、俺に無茶な頼みをしてきた。

まあ、俺としても聞いていて気分が暗くなって来るから、あんまり長い事聞いていたくはない。

「……別に手が無い事も無いけど」

「何でも良いから、やっちゃって！」

「成功するかは知らんぞ」

俺は霊夢に一言告げてから、ポケットに入っているカードを取り出す。

「…暴風『羅風』!」

俺がカードを宣言すると、彼女達の周りに突如発生した旋風に包まれる。

轟音を立てて吹き荒れる風は、彼女達の演奏を掻き消し、音で発生した弾幕を消滅させる。

そして、発生した旋風の中ではカマイタチが起こり、包み込んだ彼女達を切り刻んで行く。

……少しして風が収まると、旋風の中から衣服がポロポロになった彼女達が出て来た。

俺も霊夢もまだやるのかと思い、自分の得物を構えるが……意外な事に黒服の子が両手を挙げて、降参の意を示してきた。

「……如何言つつもり？」

「如何もこうも、この勝負は私達の負けだ。……さっきの風で、ヴァイオリンの弦が切れてしまったからね」

黒服の子は、そう言って弦の切れたと言う楽器を俺達に見える様に掲げて来る。

糸が細くて少々見辛いものの、彼女の言う通り楽器の弦が切れているようだ。

「妹達の楽器はまだ無事だが、コレ以上戦うと二人のも駄目になりそうだな。だから降参するよ」

「……あつそ。なら、私たちは先に行かせて貰うわよ」

「どうぞ自由に」

疲れた様に吐き捨てた黒服の子を尻目に、俺は霊夢と一緒に門の上へと向かう。

門の上へと辿り着くと、その向こうに広大な薄暗い空間があるのが分かる。

俺と霊夢は、お互いの顔を一度見て頷きあい……意を決し、その空間へと飛び込んだ。



## 第二十五話 騒靈三姉妹（後書き）

弾幕ごっこの描写は、次回から本気を出す。

……でも次回は辻斬りだし、どちらかと言つとチャンバラになりそ  
うな気がする。

## 第二十六話 幽人の庭師（前書き）

今回は頑張った……けど、やっぱりチャンバラになつたな。  
でも、今まで書いた戦闘回で一番書き易かつた気がする。

## 第二十六話 幽人の庭師

結界を越え、冥界へと足を踏み入れた俺と霊夢。

辿り着いたその場所は、名前の印象とは違い暖かく、周囲には満開の桜が咲き誇り、風の乗って花びらが舞い踊っている。

そんな中、俺達の目の前には、遙か上に続いている階段が存在している。

一体上に何が待っているのか分からないが、俺達は自然と階段の先を目指し飛び立った。

ただ上を目指し飛んでいると、階段の先に長刀と左肩から右腰に背負い、短刀と左腰に備え、緑の服を着た、霊魂を連れた白いおっぱは頭の少女の姿が眼に入った。

俺達以外にも人が居るのかと驚いていると、少女は一瞬にして階段の上から姿を消し、背負っていた長刀を抜いて霊夢に斬り掛かろうとしている。

ギリギリの所で反応出来た俺は、ボロボロの刀を抜き、霊夢を後ろに追いやり、少女の斬撃を刀で受け止めた。

辺りにはガキーンと言う甲高い金属音が響き渡り、少女の刀と俺の刀が接触する部分では火花が上がる。

受け止める事は出来たが……俺の刀は既にボロボロ、コレ以上酷使すれば確実に折れる。

そう判断した俺は、刀を逸らし、少女の刀を滑らせるようにして、罅迫り合いを終わらせた。

「ちよつと！ 行き成り何するのよー！！」

後ろに下がらせた霊夢は、行き成り襲ってきた少女を指差し、声を

荒げて問い質す。  
問われた少女は、一旦俺との間合いを離し、刀を構え直し、姿勢を整えた。

「何と言われても、侵入者を排除しようとしただけですけど？」

「だからって、行き成り斬り掛かるのは如何かと思うぞ」

少女は、当たり前の事をしたただけだと言いたげに言うが、俺はそれにツッコミを入れた。

だが、少女は考えを改める気は無いらしく、平然とした態度を貫く。

「侵入者と語らう舌は持ち合わせていない」

「少しは人の言葉に耳を傾けた方が良いで」

「……侵入者ぶぜいが偉そうに」

少女はコレ以上語り合う気は無いらしく、呼吸を整え、間合いを詰めるタイミングを計り始める。

俺は深い溜息を一つ吐いてから、刀を構え、彼女の攻撃に備える。

「…霊夢、あの子は俺が抑えるから、先に行ってくれ」

俺は少女を見据えたまま、霊夢に先に行くように頼む。

「………そんな奴さつさと倒して、早く後を追って来なさいよ」

「善処するよ」

背中越しで言われた言葉に、俺は顔を見る事無く答える。  
霊夢は俺の返事を聞くと、そのまま横を通りすぎ、階段の上を指  
して飛んでいく。

「ッ！ コレ以上先には行かせない！」

少女は当然の様に斬り掛かり、霊夢の行く手を遮ろうとするが、俺  
が二人の間に割り込み、少女の攻撃を阻止する。

再度、刀同士がぶつかり合い、再び鏢迫り合いが始まった。

その間に霊夢は、俺達の事を見る事なく突き進み、階段の先へと消  
えていった。

「悪いな、アイツをやらせる訳にはいかないんだ」

「ならば、貴方を斬ってから彼女を斬りに行くだけです」

「それもさせる訳にはいかないな！」

俺は彼女の刀を弾き、刃を返して左胸を薙ぎに行く。

刀は吸い込まれるように彼女の胸へと向かうが、少女は左腰に備え  
てあった短刀を抜き、俺の刀を受け止める。

少女は短刀で俺の刀で受け止めた後、刃の上を滑られて俺の刀をい  
なし、短刀で俺の首を取りに来た。

俺は直ぐ後ろに跳び、短刀からの斬撃を躲した後、刀から斬撃型の  
弾丸を飛ばす。

少女は右手に持った長刀で、俺と似た様な弾丸を飛ばし、俺の攻撃  
を相殺した。

戦いは俺が間合いを離れたと言う事で、一旦仕切りなおしに。

少女は両手に持つ二刀を構え直し、俺も刀を構え直しつつ、刀の状

態を確認する。

刀身には細かい疵が多く、場所によっては小さな亀裂が見付かる。フランドールとの戦いでボロボロになって、新しいのが見付かるまではと思い使い続けて来たが……コレ以上は無理の様だな。

前から刀の耐久度は風前の灯の様なもので、彼女の刀とぶつけ合っていたれば早々に限界が来る。……まともなぶつけ合えるのは、良くて後数合と言ったところか。

もうちょい持てばと思っていたが、この戦いの中で確実に折れるだろうな。

「……どうせ折れるのなら、最後まで頑張って貰うか」

俺は誰に言う訳でもなく呟き、刀を握る手に力を込めた。

すると少女は、俺の気概を感じ取ったのか、服のポケットから一枚のカードを取り出した。

「人符『現世斬』」

カードを宣言すると、両方の刀を鞘に仕舞い、長刀で居合いの構えを取った。

その状態から少女は一気に跳び掛かり、刀を抜いて斬り掛かって来たが、俺は一瞬早く上に飛ぶ事で今の攻撃を躲す。

しかし、少女は直ぐに同じ居合いの構えを取り、飛んでいる俺に斬り込んでくる。

だが、この斬撃はあくまでも直線的なもの。

跳び掛かって来るタイミングを見失わなければ、彼女の攻撃を回避する事は出来る。

俺は、彼女が踏み込んでくるタイミングに合わせて横に移動し、刀を振り抜いて隙が出来ているところに斬撃の弾を叩き込んだ。

斬撃を叩き込まれた少女は、そのまま前の方に吹き飛ばされるが直ぐに体勢を立て直した。

「くっ……。やりますね」

少女は躲されたのが悔しいのか、歯を噛み締め、怨めしそうに見てくる。

だが、俺はそんな事は気にせずに刀を構え直す。

「アイツとの約束もあるからな、そう簡単に落とされたりしないさ」

「……なら、コレは防ぎきれますか!」

少女はポケットから新しいカードを取り出した。

「魂符『冥明の苦輪』」

少女がカードを宣言すると、連れていた魂魄の姿が変わり、少女と瓜二つになる。

俺はその姿と、魂が姿を変えろと言う事に驚き、呆気に取られてしまふ。

「驚きましたか? この魂はもう一人の私。故に私と同じ姿を取る事も出来るんです」

「……呆気に取られて言葉も出ないな」

「そうですね。……では、もっと驚いて貰います!」

そう言うと、二人の少女は微妙にタイミングをずらして斬り掛かっ

て来た。

先に斬り掛かって来た実体の少女の攻撃を避けても、次に斬り掛かって来る少女の攻撃までは避けきれそうにない。

俺は仕方が無く刀で攻撃を受け止めるが、刀身からはピキツと言う嫌な音が聞こえ、刀の亀裂が広がって行く。

それでもなんとかして、彼女の攻撃を躲し続ける。

だが、攻撃のタイミングが微妙に違うと言うのはかなり厄介だ。

最初のが凌げて、次ぎの攻撃を凌ぐタイミングが、かなりギリギリに為ってくる。

完全に回避出来ないと言う訳じゃないけど、この距離で……しかも、刀で受け止める訳にはいかないとすると、コツチは避けるのも一苦労だ。

一度間合いを離して、仕切りなおしをしたいところではあるが……彼女がぴったり張り付いていて、中々引き剥がす事が出来ない。

出来るだけ刀身は使わずに、柄と鍔で受けていたが……それも限界が来た。

「貰ったツ!!」

「ツ?!」

一瞬の読み間違いで、彼女の攻撃を躲し損ねて仕舞い、受け止めようとした刀身は根元から折られ、左腕と腹部を斬られてしまった。俺は直ぐに彼女との間合いを離し、今の自分の状態を確認する。

刀は根元から折られている以上、コレ以上使い物には為りそうにない。

腕の傷はさほど深くはないし、腹の方は刃先で少しなぞられた程度。武器が無いから戦うのは少々キツイが、この程度なら戦うには何の問題はない。



「さあ、貴方の武器は折れました。コレ以上戦うのであれば、今度は命を貰います」

俺が刀や怪我の状態を確認していると、少女は勝ち誇ったように言ってくる。

少女は最後勧告の心算なのか、霊体を元に戻し魂魄に戻し、刀を俺に向けて告げた。

「……言ってくれるじゃねえか」

「事実、貴方にコレ以上戦う術は無い。……私は無益な殺生と弱い者いじめは好まない」

「弱い……だと……」

生意気にもそう言って来た少女の一言に、俺の中で何かが切れた。俺は痛む左腕を使い、無言でポケットに入っている一枚のカードを取り出した。

「まだ戦う気ですか」

「……………」

「仕方が有りませんね……。ならば、貴方の命頂戴します！」

「…風竜『ナイト』」

俺は少女の言葉に耳を傾けず、手にしたカードを宣言する。

カードを宣言すると、俺は赤いオーラに包まれ……。その中で竜人形

態へと変身した。

そして、包み込んでいるオーラを吹き飛ばした俺は、少女との間合いを一瞬にして詰め、拳で彼女を殴り飛ばした。

「カハ……ッ」

殴り飛ばされた少女は、後ろに吹き飛び階段と激突する。

俺は追撃として、手刀から無数の斬撃を飛ばし、少女に叩き込んで行く。

少女は階段と激突したが、直ぐに体勢を立て直し、二つの剣を使い必至になって俺の攻撃を防ぐが、手数では今の俺の方が上。

大量に放たれる斬撃の前に、少女は徐々に押され始め……仕舞いには防ぎ切れず、大量の斬撃をまともに浴びる事になった。

階段と斬撃が激突し、巻き上げた砂煙で視界が悪くなるが、今の俺にはそんな事関係ない。

煙の中で微かに動く少女の動きを読み、彼女の動きを先読みして、特大の手刀斬撃弾を撃ち放つ。

少女は、咄嗟の判断で両方の刀を交差させて防ごうとするが、俺が放った斬撃は、その防御ごと彼女を押し潰した。

俺は、斬撃に押し潰され、倒れている少女を見下ろし、明確な怒りを込めて口を開いた。

「……俺の中にある力を理解出来ない半人前が、偉そうな口を叩くな」

「ッ?! 断迷剣『迷津慈航斬』!」

少女は恐怖に駆られたのか、半ば自棄になってスペルカードを宣言した。

カードを宣言すると、少女の長刀に何らかの力が集り、数mはある青い刀身の刀に変貌した。

少女はその刀を握り締めて、俺との間合いを詰めて一気に斬り掛かって来る。

刀身が伸びたと言う事もあって、少女の間合いはかなり広くなった……が、その分一撃の反しが先程よりも遅くなる。

俺は彼女の攻撃を避けてから、手刀で空を斬り、斬撃型の弾を無数に飛ばす。

少女は、疾く真つ直ぐに飛ぶ弾を切り裂こうと刀を振るうが、最初の数発は防ぎ切れず、まともに喰らい体勢を崩した。

俺はその隙に新たなカードを取り出し、それを宣言する。

「烈風『ガルフ牙流風』！！」

カードを宣言すると、少女の足元から巨大な竜巻が発生し、彼女を飲み込んだ。

飲み込まれた少女は逃げ出そうとするが、全方位からカマイタチが発生し、彼女を切り刻んで行く。

少女は抵抗するが、竜巻の中で切り刻まれ、上空へと吹き飛ばされていく。

吹き飛ばされた後は、重力に従って地面へと落下していきただけだが、ポロポロに為った少女の右手には一枚のカードが握られていた。

「人…鬼『未来永劫斬』！」

少女は声も絶え絶えの状態で、気力だけでカードを宣言する。

そして、今まで見た最速の速度で斬り込まれ、俺は宙に斬り飛ばされてしまう。

宙にいる状態の俺に、四方から連続で追撃を繰り出し、宙に縫い付ける。

俺は連続で切り刻まれ、今変身している『ナイト』の体力をこっそり持って行かれてしまう。

……そのまま空中で斬られ続け、最後には下から上へと吹き飛ばされてしまった。

地面に落下している中、微かに見えた少女の顔は、やり切ったと言わんばかりの安堵の表情が浮んでいた。

恐らく彼女は、今の一撃で決着が着いたと思っっているようだが……まだ『ナイト』の体力は尽きていない。

俺は空中で体勢を立て直し、一枚のカードを取り出し、少女に聞こえる様に宣言する。

「起死回生『逆転撃』」

「ッ?!」

俺がカードを宣言する声が届いたのか、少女は慌てた様子で此方を振り向いた。

その僅かな隙に、俺は少女との間合いを詰め、手刀で彼女を切り裂いた。

回避する事も、受け切る事も出来なかった少女は、声を出す事無く気絶し、そのまま地面へと落下して行く。

俺は彼女が地面に激突する前に抱きとめ、無事な階段の上にそっと寝かせてやった。

「……半人前と言ったのを訂正する気は無いが、最後の攻撃は見事だった。あと数手、攻撃を喰らっていたら、倒れていたのは恐らく俺だろうな」

気を失い、俺の言葉は聞こえていないと思うが、その事だけはちや

んと伝えておきたかった。

防御力が低いとは言え、竜の一体である『ナイト』の体力を殆ど削り切ったのだ。聞こえていなくても、相手を称えるべきだろう。

それに、あの斬撃の結界とも言える剣技。アレは余程の修練を積んで体得したのだろうな。

他者の剣技が羨ましく思えたのは、サイアス以外では初めてだな。

「少々詰めが甘かったり、性格に難がありそうだが……また何時か剣で勝負をしたいものだ」

最後に彼女にそう言い残し、俺は霊夢が待つ階段の先へと急ぎ向かう。

その階段の先からは、嫌な感じのする色とりどりの蝶たちが空を飛び交っているのが見えた……。

第二十七話 幽冥楼閣の亡霊少女（前書き）

久々にちゃんとした弾幕ごっこを書いたら、何故か何時も以上に長くなった。

……マジで如何してこうなった？ 此処まで長くする心算は無かったのに。

あ、今回は全編霊夢視点です。

## 第二十七話 幽冥楼閣の亡霊少女

突如現われた剣士をリュウに任せ、私はただ階段の上へと突き進んだ。

階段を上りきった先には、大きな門を構えた屋敷が建っており、門を潜った先には数えるのもバカらしくなる位の満開の桜が咲き誇っていた。

コレだけの桜が咲き誇っているのなら、さぞや此処でする花見は楽しいでしょうね。

私は直接口には出さず、心の中でそんな事を思いながら、門を潜り、屋敷の中と入って行く。

桜の花びらが舞い散る中、ただ前に進んで行くと……樹齢数百年はありそうな巨大な木と、桃色の髪にフリルの付いた和装を来た亡霊を見つけた。

巨木の枝には、桜の花が八分咲きと言った感じで咲いていて、亡霊はその木を儂げな表情で見つめている。

私のもう少し近付いてみると、亡霊はゆっくりと私のほうを向いてきた。

「あら、貴女は誰かしら？ 此処に招いた覚えはないのだけど？」

「こつちも招かれた覚えはないけど、ちょっとした野暮用で来たのよ」

「野暮用？」

私がそう言つと、亡霊は不思議そうに首をかしげた。

「単刀直入に言うわよ。…アンタ達が奪った春を返して」

私は少し高圧的な態度で、目の前に居る亡霊に詰め寄る。

だけど、亡霊は何食わぬ顔で首を横に振って、返却を拒否してきた。

「それは出来ないわ。もう少しでこの西行妖さいぎょうあやかしが満開になるもの」

「西行妖ってなによ」

「私の家にある妖怪桜の事よ。…私は、あの木を満開にして封印を解きたいのよ」

亡霊は首を後ろに向け、背後にある巨大な桜の木を見詰める。

私もそれに釣られて木を見てみると、確かに亡霊の言う通り、あの木には何らかの封印が施されていた。

一体なんの封印かは分からないけど、恐らく大昔に施された封印だ  
と思う。

…そんなものを解いて、この亡霊は一体何がしたいのよ。

「その木の封印を解いたら、一体何が起こるのよ」

「この木が満開になるわ」

「……………それだけ？」

「後は、木の下で眠るモノが眼を覚ますんじゃないかしら？」

「そんな事の為だけに、幻想郷から春を奪うんじゃないわよ！」



亡霊のあまりな理由に、私は声を荒げてはつきりと文句を言う。  
しかし、亡霊はそんな事知ったことではないと言わんばかりに無視を決め込む。

「もう少しでこの木は満開に為る。……貴女が持つなけなしの春でも、少しは足しになるかしら？」

「只でさえ幻想郷から春が消えてるのに、コレ以上奪われたら堪ったもんじゃないわ！」

私は持つて来た大量の札を空中に展開して、戦闘の準備を始める。  
向こうも、私が準備を始めたのに合わせて、手に持っていた扇子を広げ、何処からとも無く様々な色の蝶を呼び集める。

「私はいい加減、アイツと一緒に花見がしたいのよ！」

「頑張ってくれたあの子の為にも、此処で負ける訳には行かないの」

「だから……花の下に還る／で眠るがいいわ、春の亡霊／紅白の蝶！」

お互いに言い終わると同時に、私は展開した札を亡霊に向かって放ち、亡霊は集めた蝶を解き放った。

放たれた札と、解き放たれた蝶はぶつかり合い、お互いの弾幕を相殺しあう。

私は彼方此方移動しながら札を放つが、蝶の壁が厚く中々相手にコツチの弾幕が届かない。

向こうの蝶は、数こそ多いものの、飛んでくる速度はそれほど速くはない。

だから、あの蝶の群れに囲まれさえしなければ、そう簡単に落とさ

れたる事はないはず。

私は札を放つ間に、ホーミングアミュレットを大量に取り出し、それを一斉に投げ付ける。

投げたアミュレットは、大量に居る蝶の群れの中を縫うように進み、次々と亡霊に命中していく。

でも、このアミュレットを投げるの集中し過ぎると、飛び回っている蝶に周囲を取り囲まれるなんて事に為りかねないから、定期的に近くに居る蝶を迎撃している必要がある。

周りの蝶に注意しつつ、アミュレットで攻撃していくと、亡霊は服の袖から一枚のカードを取り出した。

「亡舞『生者必滅の理 毒蝶 』」

亡霊がスペカを宣言すると、周りに飛んでいる蝶たちの動きが変わった。

今までは無秩序に周囲を飛んでいるだけだったけど、スペカを宣言したら円を描く様に飛び回り始めた。

それと同時に、亡霊も大型の弾を何発も私に向かって放ってくる。周りの蝶の動きは、相変わらず遅いけど大型の弾を躲すのに障害に為ってる。

大型の弾は蝶たちを無視して飛んでくるから、躲し続けていると徐々に大型の弾に追い詰められてしまう。

それでもなんとか躲して、札で蝶を打ち消したり、アミュレットで亡霊に攻撃し続けた。

……しかし、それにも限界がある。

どれだけ蝶の間を縫い、大玉を躲そうとも、全ての蝶を打ち消せない以上、何時かは周りを囲まれてしまう。

私の周囲には既に大量の蝶が取り囲み、大玉が今にも命中しそうな

程に接近している。

今から弾幕を放つても、この数を一掃出来るだけの弾を準備する事は出来ない。

このままでは落とされる……そう判断した私は、懐からスペルカードを取り出した。

「霊符『夢想封印・集』！」

私がスペカを宣言すると、複数の光弾が私の周囲にいる蝶と大玉を打ち消し、そのまま亡霊へと向かって行った。

亡霊は蝶たちを壁に使って、私の夢想封印を防ごうとするが……光弾はその壁も打ち消した。

守りを失った亡霊は、そのままなす術も無く複数の光弾に飲み込まれる。

光弾をまともに受けた事で、周りに飛んでいた蝶たちが消滅し、辺りには静寂が戻った。

「痛いわね。もう少し手加減出来ないの？」

光弾が消え去り、再び姿を現した亡霊の第一声は、なんとも暢気なものだった。

私はその口調に若干の苛立ちを感じつつ、再び札を周りに展開する。

「うっさいわね、コッチもそれなりに必至なのよ」

「……階段の所に居る彼に、良い所を見せたいからかしら？」

「なッ?!」

亡霊が放ったとんでもない一言に驚いて、周囲に展開していた札を

解除しそうになった。

私は慌てて気を引き締め、崩れかかっている札をもう一度展開し直した。

「あらあら、慌てちゃって。…もしかして、凶星だったかしら」

亡霊は持っていた扇子を口元に当てて、クスクスと優雅に笑い出す。笑われたのが恥かしいのか、私は顔が熱くなっていくのを感じた。

「あ、アンタには関係ないでしょ!!」

「……顔が真っ赤よ?」

「う、五月蠅い! 兎に角、アンタは此処で潰す!!」

私はコレ以上からかわれる前に札を放ち、あの亡霊を黙らせる事にした。

亡霊は扇子を口元から離し、再び蝶を操り、私の札を相殺していく。次々に札と蝶が相殺しあう中、私はホーミングアミュレットを放ち、亡霊にダメージを狙いに行く。

だけど、流石にそう何度も喰らってくれる筈も無く、亡霊は優雅に回避した後、蝶を放ちアミュレットを相殺した。

アミュレットを壊されたのを見て、私は悔しさのあまり奥歯を噛み締めた。

その後も何度かアミュレットを放つものの、さっきと同じ方法で回避され、次々と相殺されて行く。

けど、向こう操る蝶も私の札に相殺され、撃ち零した奴は難なく回避していった。

お互いに決定打を欠いた状態で弾幕を撃ち合っていると、亡霊が力

ードを取り出し先に動いた。

「幽曲『リポジトリ・オブ・ヒロカワ 幻霊』」

亡霊がスペカを宣言すると、またしても蝶たちの動きが変わった。周囲に飛び交うと言う点では同じだけど、今度は無数の蝶が列を成して私に襲い掛かってくる。

襲って来る蝶に札を放ち、なんとか相殺しようとするが、列で襲い掛かってくる蝶の群れは、なにも一つや二つではない。

私に襲い掛かってくる蝶の群れは、凡そ十はあり、周囲にはコツチの動きを封じるかのように、別の群れが飛び交っている。

これでは、幾ら札を放って蝶を相殺しようとも、相手の勢いに飲み込まれる恐れが出てくる。

このスペカを終わらせる為にも、アミュレットを放って攻撃するしかないけど、ちょこまか動かれて掠らせる事しか出来ない。

残った手は、私のスペカで相殺する事。……でも、相殺し切れずに残っていたら、後々厄介な事になる。

弾幕を放ちつつ、次の手を如何するのか考えていると、突然私の頭上に影が出来た。

「乱舞『せんぎり』！」

頭上から耳に馴染んだ声が聞こえてくると、私と亡霊の間に飛び交っていた蝶たちに、無数の斬撃が浴びせられた。

目の前には斬撃の壁が出来上がり、その壁が消え去ると……私たちの間に居た蝶の姿は何処にもなかった。

突然の出来事に、何が起こったのか分からず呆然としてみると、竜人の姿になったリュウが、私を守る様に姿を現した。

「すまない霊夢、少し遅れた」

リユウは私の方を見ては来なかったけど、さっきした約束を守れなかった事を詫びた。

私はそんな事気にしてないって言おうとしたけど、リユウの身体に付いている無数の傷が眼に入った。

もう塞がっているのか、傷跡から血は流していなかったけど、彼の全身には痛々しい傷が幾つも出来ている。

その傷を見た私は、何を言おうとしていたのかも忘れ、リユウの傷に心配をした。

「ちょっと、その怪我如何したのよ?!」

「ん？ これか？ あの半人前の最後の攻撃をまともに受けたただだ」

「……大丈夫なの？」

「出血は大した事無いが、体力は殆ど残っていない。あと数撃喰らったら『ナイト』が解けるな」

リユウは何でもない様に言ってくるが、傷を見ているとやはり心配に為ってくる。

私が出ようとも考えたけど、彼の弾幕の性質と私の今の装備を考慮すると、此処は私が後ろに居たほうが何かと都合が良い。

今になって別の装備にすれば良かったと後悔するが、今更言い出しでも始まらない。

私は悔しさをグツと堪えて、リユウの近くに札を展開させた。

「……霊夢？」

「アンタは後ろを振り向かないで、前だけを見てなさい。……アンタの後ろは私が守るから」

「……それは心強いな」

リュウは確りと前を向いてそう呟くけど、私は嬉しそうに笑う彼の横顔を見た。

一度深呼吸をしたりリュウは、両手に力を集め、斬撃を飛ばすための準備をする。

私の方も既に準備は出来ているけど、亡霊の方はリュウを凝視しているだけだった。

「ん？ 俺の顔に何か付いているか亡霊」

「……ええ。赤い線のような模様が頬に」

「コレは前からだ、一々気にするな」

リュウは如何でも良さそうにそう切り捨てた。

けれども、亡霊はそんな事お構い無しにリュウを凝視し続ける。

「…一つ聞きたいのだけど、貴方、一体何？」

「何と言われても、この幻想郷に迷い込んだ竜としか言い様が無いな」

「御免なさい、質問を変えるわ。……貴方、本当に死ぬ事が出来るの？」

リュウの事を凝視してきた亡霊は、なんとも不思議な質問をしてきた。

コイツが何者なのか聞くなりまだ分かるけど、死ぬ事が出来るのかなんて質問してくるとは思わなかった。

私は何を聞いてくるのかと呆れ、リュウは腕を組み、如何返答するか悩みだした。

「……この身体になって死んだ事がないんだ。そんな事分かるわけがない」

「そうね、確かにその通りだわ。……なら、私が試してあげる」

そう言つて亡霊は服の袖から一枚のスペルカードを取り出す。

さっきの発言を考えると、今度のカードは今までよりも強力な物のはず。

此処は気を引き締めて掛からないと、あの亡霊に本当に殺されかねない。

「桜符『完全なる黒染の桜 開花』」

スペカを宣言すると、亡霊の背後には扇の形をした絵が出現し、それと同時に大量の大玉を周囲に放ってきた。

リュウは手刀から飛ばした斬撃で、目の前に迫って来た大玉を斬り裂き、消滅させていく。

私はリュウが創った隙間から亡霊目掛けて札を飛ばすが、弾がなくなつた後に出現した蝶たちとぶつかり相殺し合う。

蝶だけではなく、桜の花びらの様な小さな弾が大量に出現し、コツチの攻撃とぶつかり合う。

大量の桜の花びらと蝶が舞い踊る中、私とリュウは札と斬撃を放ち、亡霊に攻撃を試み続ける。



周りに展開されている蝶や花びらは、リュウの斬撃で掻き消してくれるけど、中々亡霊に当てる事が出来ない。

代わりに、私のホーミングアミュレットは命中するものの、威力が低く、倒しきるには時間が掛かりそうだ。

その間にも、亡霊の弾幕はその厚さを徐々に増し続けている。

私は撃ち洩らした弾を避けながらも、この弾幕の攻略の糸口を捜していた。

確かにアミュレットを当て続ければ、何時かは勝つことが出来る。

でも、何時まで続くのかも分からない弾幕を回避し続けるのは、中々辛いものがあるのも確かだ。

スペカで乗り切ろうにも、集じゃ弾を全て掻き消す事は出来ないし、散だと亡霊を倒しきれぬのか分からない。

残る手は……リュウが持って来たスペカくらいか。

変身しているのが『カイザー』じゃないから、一体どんな攻撃になるのか分からないけど……この状況を打開するにはリュウに賭けるしかない。

そう判断した私は、目の前で蝶と花びらを斬り裂いているリュウに声を掛けた。

「リュウ！ いける！？」

「嗚呼！」

「なら、私に構わずやっちゃって！」

「了解ッ！」

たったそれだけのやり取りにも関わらず、リュウは私の意図を理解してくれた。

リュウはすぐさま一枚のカードを取り出し、声高々に宣言した。

「ラストスペル『メタ''ストライク』!!」

カードを宣言すると、リュウは私の目の前で黒い球体に包まれてしまふ。

目の前に現われたそれは、舞い散る花びらも飛び交う蝶も物ともせず、空中に鎮座し続ける。

そして、球体の上部に何らかの魔法陣が描かれると、球体が縦に割れ、中から右手に両刃の大剣を、左手には身体と一体に為っている盾を持つ、竜を模した金色の甲冑を着た巨大な騎士が出現した。

球体から姿を現した騎士を見た亡霊は、その姿に驚きを顕わにし、弾幕の密度上げ始めた。

弾幕の勢いが増す中、騎士はそんな事は構わず、右手に持つ大剣を肩に担ぐように構える。

密度を上げた弾幕に襲れるけど、騎士は恐れる事無く右手の大剣を、亡霊目掛けて真っ直ぐ振り下ろした。

「ッ!？」

亡霊は間一髪の所で剣を回避したけど、騎士の攻撃はまだ終わりじやなかった。

大剣を振り下ろした事で衝撃波……と言うよりも、風の津波が発生し、周囲に在る物をなぎ倒し始めた。

風の津波に飲み込まれたモノは、その勢いの前に薙ぎ倒され、強風で発生したカマイタチで微塵に切り刻まれていく。

ギリギリの所で回避した亡霊も風に飲み込まれ、カマイタチに切り

刻まれ、何処かに吹き飛んで行った。

……暫くして風が収まると、残っていたのは無残に切り刻まれた桜の木々と、西行妖とか言う妖怪桜。それと金色の竜騎士と、彼の後ろにいて難を逃れた私だけだった。

《……少々やり過ぎたか？》

「まあ良いんじゃない？ 別に私たちに家でもないし、亡霊なら家が無くて平気でしょ」

《そう言うものか？》

「そう言うもんよ。それよりも、さっさと元の姿に戻りなさいよ。話し辛いじゃない」

《嗚呼》

騎士は頷くと、一瞬にして消滅し……何時ものリュウが表れた。

あの姿のままだと、ずっと上を見上げて話さないといけないから首が痛くなる。

そんな事を心の中で思いつつ、リュウの事を見ると、腕から若干血の流していた。

「ちょっと、如何したのよその怪我？！」

私が驚いた声を出して怪我の事を聞くと、リュウも腕を見て眼を丸くする。

「……なんで出来たんだ、この怪我？」

「私を知るわけ無いでしょ！ …… 血は大して流れてないけど、大丈夫なの？」

「平気平気。この程度なら回復魔法で直ぐに治るって」

リュウは私に笑い掛けながら、直ぐに回復魔法を掛け始めた。魔法を掛けると、直ぐに血は止まっていくのが分かる。

私はその様子にホッと胸を撫で下ろし、安堵の溜息を吐いた。リュウの怪我が治ったら、直ぐに神社に帰ろうと考え始めていると、突如目の前にある巨木がざわめき始めた。

身のうさを思ひしらでややみなまし、そむくならひのなき世なりせば

何処からとも無くそんな言葉が聞こえたと思ったら、突如として亡霊の蝶たちが襲い掛かって来る。

余りにも突然の出来事に、私もリュウも反応するのが遅れてしまった。

私は咄嗟の判断で、懐からスペカを取り出し、それを宣言する。

「夢符『夢想封印・散』！」

スペカを宣言すると、私たちの周りに光弾が出現したけど……ただそれだけだった。

近付いてくる蝶たちは打ち消せるけど、光弾はその場から動こうとはしない。

私はコレを放っている奴が居る筈だと思い、辺りを見渡すけど……さっきの亡霊の姿は何処にも見当たらなかった。

「霊夢、なんなんだよコレ?!」

「多分耐久型のスペルよ。……このタイミングで使われるとは、思ってもみなかったけどね」

慌てふためくりゅうに、私は冷静な口調で自分の考えを告げた。でも、冷静なのは表面だけで、私も胸中ではかなり慌てていた。

確かにあの亡霊は、あのスペカがラストなんて一言も言っていないなかつた。

だけど、このタイミングで発動してくるなんて、幾らなんでも予想できる訳が無いじゃない！

私の『夢想封印』もあと少しで効果が切れる。そうになったら、この弾幕を生き残れるか怪しくなってくる。

「リゅう、剣はまだ無事?!」

「悪い壊れた!」

「あゝもう! 間が悪い!!」

私は思いつきり悪態を付くけど、そんな事しても状況が変わるわけじゃない。

徐々に薄くなつて行く光弾を余所目に、なんとか為らないかと考えるけど……何も浮んでこない。

そのまま時間だけが過ぎていって、とうとう夢想封印の効力が切れた。

それと同時に、今まで打ち消されていた蝶たちが一斉に私たちに襲い掛かってくる。

私もリゅうも、なんとか蝶たちを躲し続けるけど、向こうの勢いに

押されてしまう。

飛び交う蝶の群れを躲し、放たれた大玉の間を縫い、照射されたレーザーも避けるけど、それでも厳しいものがある。

このままだと、蝶の群れに飲み込まれ、本当に命が危ない……そう思い始めたときだった。

リュウが大量の蝶に周りに囲まれて、孤立無援の状態に陥ってしまった。

私はなんとか助けようと、残っている札を放ってみたものの、私の方に飛んでくる蝶たちが邪魔をして札がリュウの所にまで届かない。それでも、なんとかしようとして札を放つけど……やっぱり届く事はなかった。

リュウはそのまま蝶たちに取り囲まれ、私の位置からじゃ姿を確認する事が出来なくなってしまう。

私は自分に迫って来る蝶を躲し、なんとかして助けようと思いいリュウの元に向かう。

あと少してアイツの元に辿り着けると思ったその時

「うおおおおおおおおおッ！！」

蝶の中からリュウの雄叫びが聞こえ、中から赤いオーラが立ち上った。

そのオーラに私は蝶と一緒に吹き飛ばされ、地面に頭をぶつけてしまう。

この時に打ち所が悪かったのか、視界が少しずつ暗くなり、意識も徐々に薄れていく。

それでもリュウの無事を確認しようとする、霞みかかった私の眼に巨大な白い竜の姿が移る。

その姿を最後に、私は意識が途切れ……そのまま意識を失った……。



第二十八話 冬の終わり（前書き）

今回は前回に比べてかゝなり短いです。

むしろ、前回は長すぎたと言った方が正しいのかも。



## 第二十八話 冬の終わり

……長い冬が過ぎ、幻想郷にも漸く春が戻って来た。

幻想郷の彼方此方で、桜の花が舞い踊り、時折吹き抜ける風も暖かさが戻ってきた。

博麗神社にも満開の桜が見事に咲き誇り、境内では沢山の妖怪が集り花見を楽しんでいる。

「……漸く冬が終わったと思ったら、今度は妖怪で頭を悩ませる事になるなんて……」

「あの冬よりはマシだと思っぞ」

「私が言いたいのはそう言う事じゃないの」

花見に参加している俺と霊夢は、大きな集団とは少し離れ、本殿にある賽銭箱の近くでお酒を飲んだり、料理を食べたりしている。

妖怪たちが勝手に騒いでいる中、俺達はただの傍観者に徹していた。そんな中、俺はなんとなく空を見上げ、あの冥界での戦いを思い返す事にした。

……冥界で亡霊のラストスペルに飲み込まれた俺は、群がる蝶の群れの中で気を失っていた。

気絶している間に何が遭ったの、次ぎに目を覚ますと桜が倒れている庭園は、俺が気絶する前よりも荒涼とした風景に変わっていた。

そこかしこに倒れていた木は、軒並み消滅し、地面には幾つモノクレーターが出来ていた。

何故こんな事になったのか分からないけど、漠然とこの景色を作り上げた俺だと理解出来た。

……その事は、俺達と戦っていた亡霊の怯えた眼を見れば、一目瞭然だった。

俺は亡霊に春を返すように言った後、後ろで気絶していた霊夢を抱き抱えて、神社へと帰る事にした。

それから数日後には、約束通り幻想郷には春が戻り、更に数日が経って今日の花見に至る訳だ。

いきなり魔理沙がやって来て、？花見するから準備しておけ？と言い出した時は何事かと思ったよ。

最初は三人で花見をするのかと思ったら、何処から聞き付けたのか、妖怪たちがぞろぞろとやって来て驚いたもんだ。

魔理沙が彼方此方で誘ってきたと言う可能性もあるけど、この人数はちょっと多い気がする。

「……はあ」

「如何したんだ二人とも？ 宴の席に溜息は似合わないぜ」

「ほつといってくれよ」

「……？」

魔理沙には悪いけど、今は花見をしたい気分じゃないんだよな。

霊夢はなんで溜息を吐いたのか知らないけど、冥界で起こった事を考えるとちよつとな……。

「何を悩んでるのか知らないけど、今は楽しんだ者勝ちだろ」

「そう言う気分じゃないから溜息吐いてんだろ」

「そうよ、少しは察しなさいよ」

「ちえー、なんだよ二人して。そんなに悩みたいなら好きなだけ悩んでろってんだ」

魔理沙は不貞腐れたように言い捨てると、また宴会の席に戻っていった。

気を使ってくれているのは有り難いんだが、今だけはそつとしておいて欲しい。

コツチはコツチで色々と遭ったから、素直に楽しめる余裕もないんだよ。

……とは言え、宴会の席で面白く無さそうな顔をしているのもアレか。そう考えた俺は席を立ち、本殿を通過して自室で考え事をする事にした……。

### 霊夢 Side

私の隣にいたりリュウは、突然立ち上がり本殿の奥へと引つ込んでしまった。

本当だったら私も母屋の方に行きたいけど、リュウとは入れ替わりで厄介なのが来たみたい。

「はーい、霊夢。ちよつと良いかしら？」

「……何の用よ紫。あんまり下らない用事だったら怒るわよ」

「酷い言い様ね、ただ聞きたい事があるだけなのに」

聞きたいだけとは言うけど、一体なんのようで声を掛けてきたのやら。

正直、コイツとはあんまり関わりたくないのよね。色々とめんどくさいし。

……まあ、私が無視をしても、紫が一方的に話し掛けて来るのは目に見えてるんだし、出来るだけ長引かないようにしよう。

「…それで？ 用事ってなんなの？」

「あの異世界の竜の事よ。……彼、冥界で何をしたの？」

「はあ？」

何を聞いてくるのかと思えば、冥界でリュウがした事？ そんな事を聞いて何をしよってのよ。

冗談半分で聞いてきたのかと思ったら、紫は何時に無く真剣な表情をしている。

普段は飄々としてるくせに、一体如何したというのやら……。

「霊夢、答えて頂戴」

「……別に何もしてないと思うわよ。確かにアイツからは、あの屋敷の庭を崩壊させたって聞いたけど……リュウの力を考えれば、その程度なら問題ないじゃない」

「確かにその程度ならね。……でも、問題なのは其処じゃないわ」

「…？ 悪いけど、私はその位の事しか聞いてないわよ」

「……そう。だったら、直接本人に聞くしかないわね」

紫はそう言い残すと、そのままスキマの中へと消えていった。

相変わらず良く分からない奴だと思っ反面、紫の珍しく真剣な表情も気に為った。

普段から何を考えてるのか分からない奴だけど、あんな表情の紫は今まで見た事が無い。

「……………」

なんとなく嫌な予感がした私は、リュウを追いかけて私も母屋に向かった。

本殿を抜けて、母屋からアイツの部屋に行くと……リュウは一人部屋の天井を見ていた。

私が部屋に気が付いたリュウは、上体を起こしコツチに顔を向けてくる。

「如何した霊夢？ なんか慌ててる様に見えるけど？」

「……はあ……」

普段と変わらないリュウの姿に、私は安心したのか疲れたのか良く分からない溜息を吐き、その場に座り込んだ。

「ん？ 本当に如何したんだ？」

「…なんでもない、気にしないで」

「…？」

その場に座っていった言葉に、リュウは不思議そうな顔をする。  
私はどんな顔をすれば良いのか分からず、とりあえず笑って誤魔化す事に。

……だけど、私の中には変な不安だけが何時までも拭えないでいた。

## 第二十八話 冬の終わり（後書き）

原作的なことを言えば、此処で春雪異変は終わりなのですが……もうちょっとだけ続きます。

まあ、異変とはあまり関係ないEX的なものですけどね。

## 第二十九話 境界の妖怪

夜桜が見ごろになった頃、俺は一人部屋に寝転がりボーっとしていた。部屋の外からは、境内で宴会をしている妖怪たちの騒ぎ声が聞こえてくる。

その声に喧しさを覚えつつ、何をする訳でもなく一人呆けていた。

「リュウ、そろそろご飯を食べない？」

「ん〜」

「……………」

霊夢の言葉にも適当な返事を返し、その場から動こうとは思わなかった。

俺のそんな態度に呆れたのか、霊夢は溜息を一つ吐いて、そのまま何処かに行ってしまった。

彼女が居なくなっても、俺は其処から動かず、寝転がったまま天井を見て呆け続けた。

……………

……………

…

……………次第に天井を見詰めるのにも飽き、このまま寝てしまおうと瞼を閉じた。



瞼を閉じていると、次第に宴会の喧騒が聞こえなくなってくる。このまま静かに寝てしまえば良い……そんな事を考えていると、誰かに見られている様な気配を感じる。

俺は、霊夢か誰かが俺の寝顔でも見ているのかと思い、そつと瞼を開くと……俺はさっきまでの部屋ではなく、この世の元は思えない異様な空間に居た。

なんでこんな所に居るのか、そもそも此処が何処なのかも分からない。

俺は突然の出来事に、ただ呆然とする事しか出来なかった。

「漸く眼が覚めたみたいね。おはよう、それともこんばんは？ まあ、どちらでも構わないわ。とりあえずお久し振りね、異世界の竜さん」

そう言つて俺に声を掛けてきたのは、幻想郷に来たばかりの頃に出会った紫の服を着た女性。

彼女を見たとき、最初は俺と同じ様に此処に迷い込んだのかと思つたが、女性の落ち着きを見るとそうじゃない気がする。

……正直、あまり関わりたくない人ではあるが、此処で頼れるのは彼女しか居ないみたいだし、仕方が無いか。そう判断した俺は、意を決して口を開いた。

「…単刀直入に聞くけど、此処はいつたい何処なんだ？」

「いきなりね。…まあ、当然でしょうけど」

「こっちは行き成りこんな所に放り込まれて、色々と混乱してるんだが」

「なら、その混乱を一発で解消してあげるわ。……此処はスキマ空

間、境界の狭間に存在する私の領域」

「境界の狭間？ てか、私の領域って……」

俺が意味を聞く前に、彼女が一方的に喋り始めた。

「万物には例外なく境界があるわ。私はそれを操り、色々な事を引き起こす事が出来る……この空間もその一つ。幻想郷と外の世界の境界にあり、博麗大結界にも影響を及ぼさない場所。いわば、現実と幻の狭間にある空間よ」

「は、はあ……」

…俺の頭が悪いのか、彼女が何を言っているのかイマイチ理解出来ない。

未だに理解の追いつかない俺を他所に、彼女の語りはまだ続いた。

「そして貴方が此処に放り込まれた理由は、冥界で見せた白い竜の事が聞きたいからよ」

「…白い竜？」

「幽々子との戦いで見せた竜。アレの出現で白玉楼にいた幽霊の大半が消失し、あの子自慢の庭が崩壊……屋敷もほぼ全壊したわ」

「……………」

彼女の話聞いて、なんとなく俺が冥界でした事を確信する事が出来た。

恐らく、白い竜の姿になってあの屋敷で暴れ回ったんだろ。

何をしたのかまでは分からないけど、それだけの事が分ければ十分だ。

「それで本題に戻るけど……アレは一体なに？」

「なにつて聞かれてもな」

「あの力は？竜？と言う括りで見るとは強大すぎる。…下手をすれば神々をも滅ぼせる程の力よ。それ程の力を持っているのに、何も知らないじゃ済まさないわ」

彼女は殺意にも似たものを発しつつ、睨みを利かせ、直接口には出さずに？話せ？と強要してくる。

俺にだって、この状況で話さないのが自殺行為だって位は分かる。

……分かってはいるのだけど、俺にもあの力の事は詳しく知らないんだ。

「あの力が何かなんて、そんなの俺が聞きたいくらいだよ」

「……そう。だったら身体に直接聞くしかないわね」

彼女がそう言うと、この空間全体が突如としてざわつき始めた。

一体何が始まるのかと驚いていると、周りの音が消えて、自分の心臓の鼓動が大きく脈打つ音を聞いた。

鼓動は段々と早くなっていき、それと同時に目の前が徐々に真っ白になっていった。

「な……にを……した……」

俺はこの身体の変調の原因と思われる彼女を問い質した。

「別に大したことはしてないわ。ただ、貴方の中にある？竜の境界？を弄っただけよ」

「…？」

「本当なら、直接あの竜を出せば良いのだけど……下手に弄ると私の身も危ないのよ。だから、貴方の境界を弄ってあの竜が前に出や易い状況を作った。今の変調は、貴方の中に居る他の竜達が暴れる証拠ね」

彼女はしれつと言うが、実際にはトンでもない事をしれくれた訳か。竜の境界ってのは良く分からないけど、中で眠っている竜たちが暴れているってのは、なんとなく理解出来た。

要するに、俺の中に居る竜たちが外に出たがっているって事だろ。  
『火』・『水』・『風』・『地』・『変異』の五つは、元々俺とは別の竜たちだ。

今までは俺に取り込まれていたけど、その部分を弄られれば中で暴れだすのは当然って訳か……。

「さあ、早くその力を抑え付ける力を出さないと……本当に如何なるか分からないわよ？」

「く……そ………」

彼女の掌で踊らされている様で癩だけど、此処は変身するしかない。そう判断した俺は力を解き放ち、あの五体の竜よりも上位種の『カイザー』に変身した。

赤いオーラに包まれ、何時もの竜人形態になっただが……身体の変調は治らなかつた。

それどころか、身体が俺の意思に反して勝手に動き出した。

「ぐおおおおおおおおおおおッ!!!」

「……あらあら。すっかり化物になっちゃったわね」

『カイザー』は明確な敵意を持つ彼女を敵と認識し、予備動作なしに彼女の元へと向かった。

狙いはあの人の頭部と首と心臓部。人外とは言え、急所と言えるこの三点を拳で砕きに行く。

彼女の元に辿り着き、拳が急所の三点に叩き込まれようとしたその時。

「ッ?!」

彼女は俺の目の前で何処かに潜って行くかのようにして、忽然と姿を消していった。

眼にも止まらぬ速さで移動した……と言いつても無さそうだ。

やり方は分からないが、恐らくは転移か何かの類を移動したんだろ。術式を展開した形跡は無かったから、前もって用意しておいたと考えるのが妥当か。

「結界『夢と現の呪』」

背後で声が聞こえ急ぎ振り向くと、二種類の弾幕が別々の所から放たれていた。

彼女は二種類の弾幕の先に居るが……今の俺は遊びをしている余裕はない。

向こうも殺す気で来ているだろうが、この程度の攻撃じゃ『カイザー』は殺せない。

「ガアアアアアアッ!!」

『カイザー』は弾幕のルールを無視して、彼女の元に向かい、また命を取りに行く。

弾幕を躲すなんて事をしないから、周りに飛び交う弾に当たるものの、大したダメージにはならない。

再び間合いを詰めた『カイザー』は、拳ではなく手刀で首を跳ね飛ばしに行く。

最短コースで叩き込まれる筈だが、彼女はまた空間に潜るようにして忽然と姿を消した。

移動方法は全く検討も付かないが、俺に用があるのなら彼女はまた此処に戻って来る。

何時もなら、それを逆手に取って攻撃を当てる方法を考えるけど…  
…今の状態だと無理だろうな。

今の『カイザー』は暴走状態に陥っていて、力任せに暴れているだけだ。

そんな奴が何か作戦を考えて戦えるわけが無い。…このままだと、討たれるもの時間の問題か。

「考え事してる暇なんてないわよ。…結界『光と闇の網目』」

姿を消していた彼女は、今度は遠く離れた前方に姿を現し、二枚目のスペカを宣言した。

だけど『カイザー』は、宣言したスペカに警戒もせず、ただ真っ直ぐに彼女に向かって行く。

猪みたいに真っ直ぐ突撃すると、俺の身体を青と赤の光線が貫いた。

光線に貫かれた所から出血し、全身に痛みが走るが、『カイザー』

が止まる事は無かった。

色んな角度から光線が照射され、自分の身体が二種類の光に貫かれようとも、そんな事を物ともせず真つ直ぐ突き進んで行く。

あと少して彼女に手が届くと言う所で、突如横から何者かに突き飛ばされてしまう。

何に突き飛ばされたのか確認しようとしたが、それよりも先に二種類の光線に次々と射貫かれた。

「……助かったわ、藍。今は少し危なかったわ」

「いえ、私は紫様の式ですので」

俺の耳に届いた第三者の声。

それが一体誰なのか確認しようとしたが、やはり身体の方が動きそうにない。

身体の彼方此方を光線で貫かれているのだから、当然と言えば当然ではあるのだが……。

「さて、聞こえているからしら。もう分かったと思うけど、その力では私には届かない。死にたくないのなら、早くあの力を使って頂戴。……私だって、何時までもこんな危険な戦いはしたくないの」

「……………」

「如何しても使いたくないって言うのなら……このスキマに永遠に封印するしかないわね。まあ、ソッチの方があの子の為になりそうだし、私としてはどちらでも構わないわ」

全身に走る痛みに苦しみながらも、俺の耳に彼女の言葉が届いた。今の彼女がどんな顔をしてるのか分からないけど、その言葉が俺の

耳に届いた時に感じたのは……明確な怒りだった。

此処に封印される？ 勝手に呼び出しておいて、随分と自分勝手だな。

確かにあの力を軽視出来ないのは、俺が一番良く知っている。

……でも、だからって、そんな勝手な言い分を許せるわけ無いだろ。身体から解き放たれ、虚空を彷徨っていた俺にとっては、あの神社が……霊夢の傍が唯一の居場所なんだ。それを勝手な言い分で追い出されて堪るかッ!!

「…………グオオオオオオオ

ーッ!!」

俺の怒りに『カイザー』が呼応したのか、身体が自由が利き、俺は声にならない雄叫びを挙げた。

雄叫びを挙げると俺は黒い球体に包まれ、内部で竜人から『カイザー』へと変貌する。

琥珀色の鱗を持つ竜に姿を変えた俺は、包まれていた球体を突き破り、遙か上を目指して飛んでいく。

あの二人の姿が見えなくなったところで、俺は両腕から四対の空色の羽を展開して、姿勢を制御し、下に居る二人に狙いを付ける。

「……………」

下に居る彼女達に狙いをつけた俺は空を見上げ、口から青い強力な光線を幾つも放つ。

放たれた光は向きを変え、下に居る二人に降り注いで行く………筈だった。

「境符『四重結界』」



此処に居ないはずの者の声が聞こえたと思ったら、俺の足元に四重の結界が張られていた。

その結界が光だすと、突然途方も無い痛みが俺の全身を駆け巡る。俺はその結界から抜け出そうともがくが、既に『カイザー』の体力は限界に来ていた。

結界が放つ光に『カイザー』の体力は全て削られ、変身が解けてしまい何時もの人の姿に戻った。

俺が人の姿に戻っても結界の光は消えず、駆け巡る痛みと身体の変調は今も変わらず続いている。

段々と意識も遠のき始めていく中、俺は大きく脈打つ心臓の音を聞いた……。

紫Side

「……さて、漸く大人しくなったわね」

私は四重の結界の中で気を失っている、異世界から来た竜を見下ろしている。

ついさっきまで暴走していた彼を漸く大人しくさせる事が出来た。

少々無茶をしたけれど……これで次ぎの工程に移れそうね。

「紫様」

「あ、藍。無事だったのね」

「はい。…一瞬、死を覚悟しましたがなんとか」

私の式は、物凄く疲れた顔をしながらそう呟いた。  
私はスキマを使って、遙か上に行った彼の元に直接向かったけど、  
藍は彼の攻撃を堪えて此処までやって来た。  
そのお陰でウチの子の服はボロボロ。……これは後で衣装代を請求  
しないと駄目ね。

「それで紫様、この後は如何する御積りで？」

「予定通り彼の力を封印するわ。生半可な術式では無理だから、少  
々大掛かりなモノになるわよ」

「了解しました」

私がそう言うと、藍は直ぐに封印の為の準備を始めた。  
結界の中で気を失っている彼に近付き、彼の上着を脱がそうとした  
瞬間、彼を飲み込みかのように赤いオーラが立ち上った。  
直ぐ傍にいた藍は、立ち上るオーラに吹き飛ばされ結界の外へと弾  
き飛ばされる。

「藍、大丈夫?!」

「な、なんとか……」

吹き飛ばされた藍は、直ぐに体勢を立て直し無事なことを告げる。  
それとは逆に、彼を封印する為に張った私の結界に幾つモノ輝が走  
り、少しずつ崩壊を始めた。  
私は直ぐに結界を張りなおすけど、新しく張ったのも崩壊を始める。

「……ううううあああああああああああッ!」

オーラの中から彼の叫び声の様なものが聞こえてくると、オーラは弾け飛び、私の結界を完璧に崩壊させた。

結界が崩壊した事でエネルギーが逆流し、私の体に鋭い痛みが走った。

……でも、今はそんな事を気にしている余裕がない。

今、私の目の前に居るのは白い巨大な竜が存在している。

体格としては、さっきのカイザーと同等の大きさを誇るけど、アレに比べると此方の方が若干スマートな感じがする。

顔付きはさっきの竜と同じだけど、角は頭の後ろにある奴以外にも横に二本ほど生えている。

腕と一体に為っていた羽は消え去り、腕は五つの爪を持つ腕と為っていた。

代わりに、背中には突起の様なものが存在しており、其処から空色の光が翼の様に発している。

足はさっきの竜と大差ないものの、尻尾の先は二つに分かれていた。

「……紫様、もしかしてコレが」

「ええ、この竜が『冥明結界』を崩壊一步手前にまで追い詰めたのよ」

直接目にするのは初めてだけど、あの竜から感じ取れる力はその時のモノと全く同じ。

現世と冥界を別つ『冥明結界』を、どうやってあそこまで追い込んだのか分からないけど、この竜と一戦交えるにはソレ相応の覚悟をしないと。

……出来る事なら、彼に自発的に変身して貰いたかったけど……そう上手くいかないのが世の常ね。

「…覚悟は良い、藍」

「はい。……ですが、万が一の時は紫様だけでも逃げて下さい。貴女が居なくなれば、幻想郷は大変な事に為るのですから」

「逃げるときは貴女も一緒に連れて行くわ。……もつとも、彼が逃がしてくれるか分からないけど」

「

ッ！！！」

眠るように静かだった彼は、私たちの会話で眼を覚ましたのか、耳を塞ぎたくなるほどの雄叫びを挙げる。

その雄叫びを合図に、私と藍は弾幕を展開し、かの竜との戦いを始めた。

この空間で戦って、外にどれ程の影響を及ぼすのか分からないけど、彼は此処で止めてみせる。

彼に、私の大切な幻想郷を崩壊させやしないわ！！

紫Side out

第二十九話 境界の妖怪（後書き）

紫の弾幕、文章で表現するの滅茶苦茶シンドイ……orz  
如何表現すれば良いのか全然思いつかんかった。

### 第三十話 人と竜の絆（前書き）

今回は過去最長の回で、全編霊夢視点です。  
それと、まだ最終回ではないので、勘違いしないで下さいね？

### 第三十話 人と竜の絆

「ちょっと魔理沙、リュウを見かけなかった？」

「あん？ わたしは見えてないぜ」

「……そう」

部屋で呆けていた筈のリュウが忽然と姿を消した。

もしかしたら、境内の花見に参加したのかと思って魔理沙に聞いてみたけど、如何やら此処も外れみたい。

既に家の中は隈なく探したし、此処に居ないと為ると……もう当てがないわね。

「なんだ、あの歳で迷子にでもなったのか？」

「それならまだ良いんだけどね」

魔理沙は私を茶化すように言うけど、本当に迷子になっただけならまだ良い。

けど、昼間の紫の言動を考えると、リュウの姿が見えないと如何しても不安になって来る。

アイツの姿が見えなくなつて、私は直ぐに紫を疑つたけど……普段から何処に居るのか分からない奴を捜せる訳がない。

だから私は、リュウが一人で何処かに行ったと信じて捜していたのに……。

「リュウ……。本当に何処行つたのよ」

「……そんなに心配なら、わたしも捜すの手伝おうか？」

「……お願い」

「おう、任せとけ」

魔理沙に宴会場での聞きこみを頼み、私はまだ捜していない森周辺を捜す事にした。

……

……

…

夜の森は昼間と違い、フクロウの声と夜の暗さが相まって、なんとも不気味な雰囲気になっていた。

月の光が薄暗い森を薄っすらと照らしてくれるが、やはり人影は何処にも見当たらない。

森の中を捜して見付かるのは、幻想入りしたよく分からない物と、そこら辺をうろついている妖怪くらいだ。

リュウが妖怪にやられるとは思えないし、此処も外れなのかと思い始めたその時。

私の目の前に、頭に鹿の角が生えた深緑色の髪の少女が突然現われた。

「……アンタ誰？ 人間……じゃないわよね」

突然現われた少女に、私は警戒をしつつも声を掛けた。

見た目からして人じゃない事は確定しているけど、気配は妖怪のそれとは何かが違う。



今の所は敵意は感じないけど、何者なのか分からない以上警戒するしかない。

私が警戒を強めていると角が生えた少女は、私の事を品定めするように見てきた。

なんの心算か分からないけど、そんな風に見られるのは結構気分が悪くなってくる。

……一頻り私の事を見た後、少女は漸く納得がいったのか一つ頷いてから口を開いた。

「お主、あの竜に会いたくないか？」

「ッ?! アンタ、リュウの事知ってるの!？」

「本当に会いたくばついて来るが良い」

「あ、ちょっと!？」

言いたい事だけ言った少女は、私の質問を無視して森の奥へと消えていった。

私はリュウに会いたい一心で、あの少女の後を追いかけて森の奥へと進む。

森の中が暗くて、少女が何処に行ったのかわからなくなるけど、私は持ち前に勘を頼りに奥へと突き進んだ。

途中で妖怪に喧嘩を売られたりするけど、今はそんな事に構っていない暇は無い。

私は道を塞ぐ妖怪を軽く蹴り飛ばし、怯んだところで少女を追いかけて更に奥へと進んだ。

……暫くの間暗い森の中を進んでいると、目の前が急に明るくなり、開けた場所に辿り着いた。

其処は森の一角の筈なのに、大きな燈籠が二つも置いてあり、その燈籠の間には何故か扉が存在していた。さっきの少女は、目の前の扉の脇に立ち、私が来るのを待っていた様だった。

「来たか。……では、この扉を潜るが良い」

少女がそう言うと、目の前の扉は私を誘うように独りでに開いた。扉の奥に続いていたのは森ではなく、形容し難い異様な空間が広がっている。

その空間の雰囲気に飲み込まれそうになったけど、私は意を決してその扉を潜っていった。

「アヤツの事、頼んだぞ……博麗 霊夢」

……

……

…

扉を潜り抜けた先で私が眼にしたのは、紫と金毛九尾を持つ女性がカイザーに似た白い竜と戦っている光景だった。

……いや、戦っていると言うよりも、二人が白い竜に鬨りものにさられていると言った方が正しい。

二人が放つ弾幕は白い竜に通用していないのか、無傷の状態で暴れまわっている。

白い竜も、紫のスキマ移動で攻撃を躲かされている様に見えるけど、あの竜はその回避を読み切り、紫達が現われた所に別の攻撃を叩き込んでいる。

まさに一方的な戦い。二人がどれだけ白い竜に攻撃しても、あの竜の身体に傷一つ付けられないでいる。

その所為か、紫と金毛九尾の女性の服がボロボロで、身体の所々から出血している様だ。

「ーッ！！！！！」

天に向かって発した耳を劈くような白い竜の咆哮。

私は思わず耳を塞ぐと、上の方から何かが降ってくる様な気配を感じた。

何事かと上を見上げてみると、空間を割って巨大な隕石が二人に向かって落ちようとしていた。

「紫、上ー！！！」

「霊夢……………ッ?！」

思わず叫んだ私の声に反応した紫は、直ぐに自分達の周りに結界を張り、あの隕石を防ぐ。

白い竜は、隕石を止められたのを見て、何を思ったのか一旦距離を離れた。

その間に私は、空間の引き裂いて伸びてきた紫の腕に引っ張られ、空間の裂け目を抜けて二人の下に辿り着いていた。

「ちよつと霊夢、如何して貴女が此処に居るのよ」

「そんな事は如何でも良いでしょ。それよりも、紫！ アンタ等、アイツに何をしたのよー！！」

「……………別に大したことはしてないわ。ただ、彼の力を封印しよう」と

「封印って……………何勝手な事してるのよ！ リュウは何もしてない

じゃない!!」

「そうだとしても、彼の力は幻想郷を滅ぼしかねない! なら、そうなる前に封印しようとするのは管理者として当然の判断よ!!」

「だからって、私に断りも無く勝手なことするんじゃないわよ!!」

「貴女に説明しても了承するわけ無いじゃない!!」

「そんなの当たり前よ!!」

私と紫は結界の中で状況も考えずに、二人して見つとも無く大声を出して口論し始める。

紫の判断を理解出来ないわけじゃないけど、こんなの余りにも勝手が過ぎる。

確かにあの白い竜の力は強大だけど、その力を使って如何にかしようとする奴じゃない。

リユウとは一年近く一緒に暮らしてきたんだ、アイツがそんな事する様な奴じゃないって私が誰よりも知ってる。

だからこそ、今回の紫の決断には怒りしか感じる事が出来ない。

「アイツの事を何も知らないくせに、勝手に封印なんてしようとしてないで!!」

「……貴女、幻想郷のバランサーである博麗の巫女でしょ? それなのに彼を庇うの?」

「巫女だから何。私は巫女で在る前に一人の人間よ」

「……その言葉、先代たちが聞いたらなんて言うか」

「そんな事知ったことじゃないわ」

「紫様！ 何か来ます！」

九尾の女がそう叫ぶと、竜が消えた方から光の波動が放たれた。

波動は一度だけではなく、間を於かず立て続けで何度もコツチに迫って来る。

放たれる波動は、紫が張った結界に阻まれるけど……少しずつ結界が壊されていく。

あの光が強いのか、紫が弱っているのか、或いはその両方が分からないけど、どの道長くは持ちそうに無い。

「夢符『二重結界』！」

私は万が一の為に持ってきたスペカを使い、紫の結界の上に重ね掛けする。

壊れかけていた結界は、私の結界で更に強固に為るもの……光の波動の威力は抑える事は出来ない。

結局、先に張っていた紫の結界は壊れてしまい、私の結界も一枚目は壊され、二枚目も崩壊寸前にまで追い詰められる。

あと一撃でも喰らえば壊れると思った矢先、光の波動は勢いを無くし、漸く収まってくれた。

「見たでしょ霊夢、これがあの竜の力。……それでも貴女は彼の事が好きなの？」

「……………」

紫にリュウの事が好きかと言われて、私は言葉を失った。

去年の夏の終わりにアイツに告白されてから、ずっとリュウにその返事を返せないでいる。

リュウもその事に何も言っただけでなかったし、私自身も答えが出せずにいたから、今までずっと保留にしていた。

アイツと出会う前の私は、他人の事なんて如何でも良いと思って生きていた。

周りからは誰にでも平等な奴って思われてたけど、本当はただ他人に興味を持たなかっただけ。

私からすれば人も妖怪も同じで、誰が何をしていようと感心なんて持てなかった。

でも、私の前に現われたアイツは他とは少し違っていた。

今までの連中は、私の事を？博麗の巫女？としてみていたけど、リュウだけは霊夢わたしと言う一個人を見ていてくれた。

その事が煩わしく思うときもあつたけど、霊夢わたしの事を見てくれて嬉しかったのを覚えてる。

少々心配しすぎたりもするけど、あんなに心配してくれたのも嬉しかった。

私の料理を美味しいって言ってくれたのも嬉しかったし、私に見せてくれる何気ない笑顔も嬉しかった。

だから私は、アイツの前では巫女じゃない霊夢わたしで居られる様にした気がする。

……誰かを好きに為るってこう言う事なのかな？

もしそうなら、きっと私はリュウの事が……好き……なんだと思う。今までずっと答えが出せなかったけど、この想いは嘘なんかじゃない、私の中にある確かな気持ちなんだ。

「……………霊夢？」

「紫、私はアイツが……リュウが好き。この気持ちに嘘偽りはないわ」

「相手は竜。人ではない……それでも？」

「人が如何かなんて関係ない、私はアイツが好き。この気持ちに氣付いた以上、私は自分を偽る氣は無い」

「そう。……だったら後は好きにきなさい」

紫はどこか諦めた様に肩の力を抜いて、私にそう言った。その言葉に誰よりも驚いていたのは、彼女の式の九尾の女だった。

「宜しいのですか、紫様?!」

「良いも何も、今のこの子に何を言っても無駄よ無駄」

「ですが……」

納得がいかないのか九尾の女は紫に食い下がる。

紫は彼女を適当にあしらうけど、私にはそんなの如何でも良い事だ。私は発動していた結界を解除して、白い竜の捕縛の為の準備を始める。

準備と言っても、今の手持ちを確認する程度の事。

紫に攫われたと考えると戦える準備はしていたけど……この手持ちじゃ、あの竜を捕縛するには力不足も良い所だ。

白い竜に弾幕ごっこなんて通じる訳ないし、捕縛を前提にするなら使えるのは結界系のスペルのみ。

『封魔陣』なんて聞く訳が無いだろうし、使うとしたら『八方鬼縛

陣』クラス。

多少傷付けるかも知れないけど、無傷のまま捕らえられる訳ないし、そこら辺は大目に見てよね。

「……それじゃ、私行くから邪魔すんじゃないわよ」

「分かってるわよ。……頑張りなさいね」

「アンタに励まされたくない」

「これは手厳しい」

私は紫達をこの場所に置き去りにして、リュウを追いかけた。

アイツは、あの光の波動の先に白い竜の姿のまま何をする訳でもなく佇んでいる。

私はリュウに声を掛けようとしたけど、その前にアイツは眼を覚まし、臨戦態勢を整えた。

「リュウ！」

「ーッ！！！」

私の声が届いていないのか、リュウは耳を劈くような雄叫びを挙げる。

その声に呼応する様に、辺りには幾つもの竜巻が発生し始めた。

私は咄嗟に能力を使って無敵状態になり、周りに発生した竜巻を突っ切りリュウの元へと向かう。

竜巻を越えると、今度は何も無いところから劫火が発生した。

今は無敵状態だから大したことないけど、地上でこんなモノを使わ



れたら幻想郷が焼け野原になるわね。

心の中でそう判断していると、今度は空中から巨岩が幾つも出現し、コツチに迫って来る。

更にそれを超えると、次は視界を覆い隠すような吹雪が発生し、飲み込まれた物を問答無用で氷付けにしてくる。

どれもコレも、無敵が無かったら突破出来ないような猛攻。

今回ほど自分の能力が『空を飛ぶ程度の能力』で良かったと思った事はないわ。

私は能力を駆使して、リュウの猛攻を突破し、漸くアイツの元に辿り着く事が出来た。

「ちよつと痛いかもしれないけど、我慢してよね。……神技『八方鬼縛陣』！」

私はリュウの足元にスペカを投げ、鬼を縛る八角形の結界を展開する。

あとは、結界に閉じ込めたリュウを正気に戻せば良い……そう思っていたけど、如何やら簡単にはいかないらしい。

「……ッ！！」

リュウを結界の中に閉じ込めるのは成功したけど、展開した結界を雄叫びを挙げて発した力だけで、あの鬼縛陣を破壊されてしまった。あの結界に閉じ込めている間にリュウにダメージが入った様子もない。

アイツを傷付けなかったのが嬉しい反面、力だけであの結界を破壊された事にシヨックを隠せない。

「……ッ！！」

「うわっど?!」

結界を破壊したりリュウは、そのまま私に殴り掛かって来た。

私は何時もの癖で回避したけど、今の私は殴られて怪我をする心配は無い。

それよりも問題なのは、アイツを大人しくさせる手段を如何するかと言う事だ。

鬼縛陣で駄目だったとなると、残りは『八方龍殺陣』か『二重大結界』くらいしか手持ちに持って来ていない。

龍殺陣は名前からして使いたくないし、あとは大結界に賭けるしかない!

「お願いだから大人しくして! 夢境『二重大結界』!!」

私はリュウの足元にスペカを投げ、今度は二重に構成された結界を発動させた。

結界に閉じ込められたリュウは、直ぐに結界に殴り掛かり壊そうとするけど、今度の結界はさっきよりも強固な仕上がりになっている。リュウは何度も結界を殴るけど、輝の入った箇所から私が霊力を注いで修復していく。

何度殴っても壊れないと悟ったのか、リュウは漸く結界の中で大人しくなってくれた。

「よし。後はなんとかして、リュウを正気に戻す方法を考えないと」

私は結果を持続させつつ、如何するか考え始めると……結界の中に居るリュウが不可思議な行動を取り始めた。

突如、背中の突起から出る空色の光を広げ、両手の間に黒い何かを集束させ始めた。

リュウの両手の間に集る黒い光。それが1mくらいの球体になると、リュウはそれを徐に上に向かって放った。

放たれた球体は更に小さく圧縮されて行くと、今度は黒い光となつて突然大きく拡大し始めた。

一度拡大を始めたソレは、一枚目の結界を簡単に押し潰し、二枚目も同様に破壊する。

結界を破壊しても拡大は収まる事を知らず、黒い光はこの辺り一体を飲み込んでいった。

最初私は、能力を使っているから大丈夫だと高を括っていたけど、黒い光に飲み込まれた途端、身体に異変が起こった。

能力を使って無敵状態にも関わらず、私の身体が強力な何かに押し潰されていく。

……いや、押し潰されるといふよりも無理矢理に小さく圧縮されていく感じだ。

何らかの力を使い、この黒い光に飲み込んだ存在を小さく圧縮する……多分これはそう言う力が働いているんだと思う。

現に、私と一緒に飲み込まれた氷付けの岩は既に圧縮されて消滅している。

このまま手を拱いていると、私もあの岩と同じ末路を辿る事に……。

「圧……縮されて……消滅なんて、そんなの……ごめんよ！ 夢境……  
二重大結界」！」

私は無理矢理体を動かして、自分の周りに二重の結界を張り圧縮に耐える。

黒い光は問答無用で結界を押し潰してくるけど、私は完全に押し潰されるよりも先に結界を修復し続ける。

結界を修復していても、リュウの力の方が強く……徐々に結界が崩

壊していく。

結局、一枚目は壊され、二枚目も崩壊ギリギリまで押し潰されたけど、それでもなんとか黒い光を耐え切る事が出来た。

「ハア…ハア…」

なんとか耐えられたのは良いけど、コツチもそろそろヤバイかもしれない。

少しの間とは言え、あの黒い光で身体を圧縮されたし、あの中で無理矢理身体を動かしたから、全身に痛みが走ってる。

それに、大結界を二回連続で使ったから霊力の回復が追いついてこない。

こんな事に為るなら『夢想転生』を持って来れば良かった、そんな事を考えてしまう。

「  
ーッ!!!」

リュウがまた大きく吼えると、張った結界を突破し、その大きな手で私を握り潰そうとしてくる。

無敵状態に為っているにも関わらず、リュウはそんな事関係ないと言わんばかりに掴んで離さない。

ギリギリと私の身体を締め上げる握力が強く為り、身体の内側から何かが折れるような嫌な音が聞こえた。

私はまだ無敵状態を持続出来ていたから助かったけど、このままじゃ不味い。

霊力は回復しない上に、全身から痛みが走ってて、コレ以上はまともな戦う事が出来ない。

なんとしてもリュウを止めたいけど、結界がまともな効かない以上、もう打つ手が思いつかない。

集中力もそろそろ切れ始め、私は無敵を持続させる事が出来なくなつて来た。

「…ゴメンね、リュウ」

私が戦うのを諦めたの同時に、集中力も途切れ、無敵状態が途切れしてしまう。

このままリュウに握り潰されるのかと思つたその時だった

「……………あ、あれ？」

突如としてリュウは私を解放して、いきなり臨戦体勢を解除していった。

白い竜は何をする訳でもなく、その場に佇み、眠っているかのように大人しくしている。

最初はなんで攻撃をやめたのか分からなかったけど、リュウが大人しくしているのを見て、なんとなく察しが付いた。

恐らく今のリュウは、周りの敵意とか戦意みたいなのに反応して襲つて来るんだと思う。

私が此処に辿り着いた時は、紫たちと戦っていたのに、私が紫と喧嘩を始めたら何もして来なくなった。

今のだって私が戦うのを諦めたら、リュウが攻撃を止めて大人しくなった。

「……………なんだ。竜を大人しくさせるなんて、結構簡単じゃない」

私はそう呟き、痛む身体を引き摺って白い竜の傍に近付いた。

リュウは私が近付いても襲つて来る事はなく、本当に眠っているんじゃないかと言う位に大人しくしている。

私はそんなリュウにもっと近付き、そつと彼の頭を優しく撫でてあげる。

「全く、無茶ばかりするんだから。私がどれだけ心配したと思ってるのよ」

私は出来るだけ優しい声音で大人しくしているリュウに話しかける。当然返事なんて無いけど、私はそれでも構わなかった。

「でも、もう大丈夫。リュウの敵はもう何処にも居ないわ。……だから、もう戦わなくて良いの」

「……………」

私が掛けた言葉にリュウは小さく唸ると、何時もの様に一度消滅して、普段の姿に戻った。

元の姿に戻ったリュウは、気を失っているのか力なく下へと落下していく。

それを見て私は慌てて彼を抱き抱え、なんとか落下しないように支えてあげる。

リュウを支えた時に、身体に痛みが走ったけど……今はそんな事は気にしてられない。

今は只、リュウが元に戻ってくれた事を素直に喜んでいたい……。私はそう思い彼を優しく抱き締めていると、リュウの身体がピクリと反応した。

「……………れい……む」

「ッ?! リュウ、気がついたの!?!」

私は気がついたリュウの顔を見てみると、リュウは涙を流し泣いていた。  
一年近く一緒に暮らしていたけど、コイツが泣いているを見るのはこれが始めて。  
だからこそ、私には如何してリュウが泣いているのか分からなかった。

「ちょ、ちょっと。なんで泣いてるのよ」

「……ゴメン霊夢。俺、お前を殺そうとしてた」

「アレは只暴走してたから……」

「それでも力を振るっていたのは俺だ。……謝って許される事じゃないのは分かってるけど、ホントにゴメン……」

「……………」

珍しく泣いているから如何したのかと思ったら、別に大したことじゃないみたい。

ただ私を殺そうとしていたのが辛かっただけ。ただそれだけの事でリュウは泣いているんだ。

確かに何度か死に目に遭ったけど、こうして生きているから気にしてない……って言っても、きっとリュウは謝り続けるでしょうね。全く、変なところを気にするんだから。アンタがその心算なら、私にも考えがあるわよ。

「……確かに、アンタの攻撃で何度か危ない目にあっただわ」

「……………」

「だから、私の条件を聞いてくれるなら許してあげる」

「…条件？」

「ええ。…？これからもずっと私の傍に居る？…それが条件よ」

「……………」

私が条件を提示すると、リュウは眼を丸くして驚きを顕わにした。

「そ、そんなんで良いのか？」

「ええ」

「もっと違う条件じゃないのか？ 私の傍に近寄るなどが、幻想郷から出て行けとか」

「はあ？ なんでそんな事を言わなくちゃいけないのよ」

「いや、だって…！」

「だってもなにもない！ 兎に角、アンタはこれからも私の傍に居る！ 良いわね！？」

私は少し強めに言うと、リュウは何かを言おうと口をパクパク動かす。

それでも言葉が見付からなかったのか、リュウは次第に大人しくなり俯いてしまった。

そのまま暫く考え込んでたリュウは、漸く口を開いて返事を聞かせ



てくれる。

「…居ても良いのか？ コレからも霊夢の傍に居て、本当に良いのか？」

「ええ。私がそれを望んでいるんだから……」

「……なら、その条件を呑むよ。俺はコレからも霊夢の傍に居続ける」

「うん」

私は条件を呑んでくれたリュウにもう一度抱き付こうとすると、足元の空間が裂けて、誰かに足を無理矢理引っ張られた。

突然の出来事に私もリュウも反応出来る筈も無く、引っ張られるままに私たちはスキマ空間から抜け出した。

……

……

…

抜け出た先は、博麗神社の境内……と言いか宴会場の上空。

私たちの足元では、魔理沙たちが誰かを探して奔走しているのが見えた。

「おーい、霊夢。リュウ。何処に行った」

「魔理沙、コッチには居なかったわよ」

「むむ、アリスの人形を使った人海戦術でも見付からないか」

「咲夜。ソツチは見付かったかしら？」

「いえ、神社の中を隈なく捜しましたが何処にも」

「……そう」

珍しくレミリアが搜索に協力していると思っていると、私たちは地面に向かつて落下し始めていた。

私は直ぐに能力を使って浮き上がろうとしたけど、如何言うわけか能力が上手く発動出来ない。

只でさえ、リュウの攻撃を喰らって身体がボロボロなのに、このまま地面に激突したら確実に身体中の骨が折れる。

そんな心配をしていると、リュウが私の体を両腕で抱きかかえ……その状態のまま地面に着地してくれた。

「ツ~~~~！ あしがしびれる……」

「ちょっと大丈夫?!」

「な、なんとか……」

私は痛そうにするリュウの心配を見ると、何故か周りから生暖かい視線を感じる。

なんとなく周囲を見てみると、宴会に来ていた連中が私たちの事を見ていた。

上から降ってきて驚いたのなら分かるけど、なんでそんな視線を送られなくちゃいけないのよ。

「……ちょっと魔理沙。その変な眼を止めなさいよ」

「いや、だって……なあ？」

「そうね…とりあえずオメデトウと言っておくわ」

「霊夢、挙式の形式はやっぱ和風かしら？ その体勢なら洋風の方が合ってると思うけど？」

「洋風ですのなら、紅魔館の広場を貸すわ。……宜しいですね、お嬢様」

「ええ。何の問題も無いわ」

如何言う訳か知らないけど、魔理沙たちからは祝辞みたいな言葉を送られた。

…確かにあの空間でリュウに告白したけど、コイツ等には聞かれない筈だから、こんな事言われる筋合いはない。

だと言うのに、周りからは次々と私たちに向かってお祝いの言葉を送って来る。

「……アンタ等、何話を飛躍させてるのよ!!」

「そう言うのは自分の姿を見てから言おうぜ？」

「…?」

魔理沙に指摘されて、私はちゃんと自分の姿を確認してみる。

服に関しては特に問題はないし、髪型だって乱れていない。

他に気にするところと言ったらリュウに抱えられてるって事…くらい……。

私は一度眼を擦ってから、もう一度ちゃんと自分の姿を再確認する。服や髪型には特に問題はない、それに関してはなんの疑いようもない。

それで今の私の体勢は、リュウに両腕で抱き上げられる……つまりはお姫様だっこの体勢。

「……………」

「ん？ 如何した霊夢？ 急に黙り込んで」

「降ろして」

「…はい？」

「今すぐ降ろして！ て言うか、なんでコレで抱きかかえたのよ！ 別の方法もあったでしょ?!」

「いや、あの状況ならコレが一番楽だから」

「だからってコレはないでしょ?! そしてさっさと降ろして!!」

「降ろしてって、霊夢は怪我人なんだし無理しない方が」

「そんな気遣いは良いから、さっさと降ろせーッ!!」

私は顔を真っ赤にしながらリュウの腕の中で恥じも外聞もなく暴れる。

怪我して上手く力が入らないから、中々リュウから離れる事が出来ない。

リュウはリュウで、私の怪我の事を知っているから一向に降ろしてくれる気配がない。

そのお陰で、今の私たちの関係が駄々っ子を抱きかかえる父親みたいになってる。

リュウは恥かしくないのか知らないけど、私は物凄く恥かしかった。

「早く離してよリュウ！　そしてアンタ等はニヤニヤ笑うな！！」

「「「ニヤニヤニヤ」」」

「口で言うな！ッ！！」

「少し落ち着けて霊夢！」

私が大声で叫ぶと、周りに居る連中は一気に笑い出した。

お陰で境内に私の叫ぶ声と、それを見て笑う妖怪たちの声が響き渡った……。

### 第三十話 人と竜の絆（後書き）

オマケ

境内に霊夢の叫び声と妖怪たちの笑い声が響く中、神社の屋根に深緑色の髪の少女が座っていた。

「……久しいな、八雲」

少女は誰も居ないにも関わらず、懐かしむように誰かに声を掛けた。すると、空間に裂け目が出来、其処からボロボロに為った紫色の服をきた女性が姿を現した。

「本当にお久し振りです。……霊夢を私のスキマ空間に招いたのは、貴女でしたか」

「なに、妾はアヤツを止めたかっただけじゃよ」

「……そうですか」

八雲紫はそう呟くと、境内の騒ぎに眼を向ける。

境内では漸く降ろしてもらえた霊夢が、リュウに色々と文句を言っていた。

「……一つ聞いても宜しいかしら？」

「なんじゃ？」

「私がしようとした事は間違いだっただけなの？」

「……それはあの二人を見ていれば分かるじやろ」

深緑色の少女がそう言うと、八雲紫は境内の真ん中で喧嘩している二人に眼を向けた。

「だ〜から！ アンタはもうちょっと女心を理解しなさいよ！」

「男の俺にそれは無理だ！」

「それをなんとか理解するのが男でしょうが！！」

二人は周りの眼など気にせず、お互いに思っている事ぶつけあっている。

確かに喧嘩をしている筈なのに、あの二人を見ていると何故か微笑ましく思えてしまう。

少しの間二人を見ていた紫は、小さく笑うと後ろを振り向き空間の裂け目を創った。

「なんじゃ？ もう行くのか？」

「ええ。やられた傷も痛みますし、私の心配も無意味だったと知る事が出来ましたから」

「そうか。では、達者での」

「ご機嫌よう」

少女が紫に別れを告げると、紫は空間の裂け目を通り何処かへと姿を消した。

そして少女は、一人神社の屋根から二人の事を楽しそうに見続ける  
のだった……。

終わり



第三十一話 幻想郷の最高神（前書き）

なんとなく章を付けてみた。

うん、深い意味は無いです。ただの気紛れなんで。

### 第三十一話 幻想郷の最高神

あの花見から一夜明けた朝。神社の境内は呑み潰れた妖怪たちで溢れていた。

神を祭るこの場所に、こんなにも妖怪が居て良いのかと真剣に考えてしまうが、コイツ等全員を追い出すのも骨が折れるし、とりあえずは放置の方向で。

「ふ、ふああ〜……。あ〜ねみい〜」

俺は大きな欠伸を一つ掻いて、この眠気を覚ます為に水汲み場の水で顔を洗う事にした。

そこら辺に転がっている妖怪を踏まない様に気をつけつつ、俺はなんとか水汲み場に辿り着く事が出来た。

暦は既に五月がって言うのに、水汲み場から湧き出す水は三月を思わせるほどに冷たかった。

眠気を覚ますのには丁度良いが、何時までも冷たいままと言つのも困る。

……まあ、こんなに水が冷たいのは、長く続いたあの冬の所為だろうけどな。

「……………さっさと顔を洗うか」

俺は水汲み場の水に両手を入れて、水を掬い上げて顔を洗う。

顔に当たる水の冷たさで眼は覚めたが、やっぱり冷え過ぎているのも考えものだな。

そんな事を思いつつ、顔を洗っているとタオルを持ってくるのを忘

れている事に気がつく。

服で顔を拭こうかとも思ったが、昨日は一日中着ていた上に、夜に戦闘をしていた。

流石にそんな服で顔を拭くのは気が引ける。そう思った俺は、神社に戻り拭く物を取りに行く事にした。

俺は濡れた顔のまま玄関を開けようとする、中から物音が聞こえてくる。

最初は泥棒かとも思ったが、聞こえて来る音をよく聴いてみると、誰かが調理をしているみたいだ。

この神社でそんな事をするのは一人しかいない。

俺は安堵の溜息を一つ吐いてから、玄関の戸を開けて中に入った。

「ん？ ああ、お早うリュウ」

「お早う、霊夢」

玄関に入って直ぐの台所では、霊夢が何時もの様に朝早くから朝食を作っている。

昨日は無茶をしたんだし、今日くらいは休めば良いものを……。

お節介かも知れないが、昨夜の戦いを思い返すと如何してもそんな事を思ってしまう。

「……ちよつとリュウ。アンタ、顔が濡れてるわよ」

「ああ。さつき眠気覚ましに顔を洗ったんだが、拭くものを持って行くのを忘れてな。それでだ」

「全く、変なところで抜けてるんだから。…ほら、拭いてあげるからジツとして」

そう言って霊夢は俺に近付き、持っていた手拭いで俺の濡れた顔を拭いてくれる。

この状況にちよっとしたデジャブを感じつつ、霊夢の動きに若干の違和感を感じた。

なんて言うか……動きが硬いと言うか、何処か無理をしているような気がする。

「……はい、コレで終わりっ」と

「ん、ありがとう」

「どう致しまして」

はにかみながら霊夢はそう言い、また調理を再開しようとした。普段と変わりなく調理しているが、その後姿はやっぱり無理しているように見える。

なんとなく無理しているのが気になった俺は、霊夢に近付き肩を軽く触れてみた。

「……ッ」

俺が肩を軽く触れただけなのに、霊夢は痛そうに顔を歪める。

「霊夢、やっぱり昨日の無茶で何処かを痛めたのか」

「べ、別にこの程度大した事無いわよ」

「大した無いって、お前なあ……」

「本当に大した事ないわ。それよりも、さっさと朝食を作っちゃわね」

そう言つて霊夢は、俺の手を振り払い、また朝食を作り始めた。

本当なら俺が代わりに朝食を作つてやりたいが、こうしている頑張つている霊夢に無理矢理代わつて貰うのは本意じゃない。

だからと言つて、無理をさせて霊夢の具合を悪化させては本末転倒も良い所だ。

色々と考えた結果、俺は霊夢の隣りに立つて調理を手伝うことにした。

「……なにしてるの」

「霊夢の手伝い」

「別にそんな事しなくても良いわよ。アンタは何時もの様に待つて」

「身体の調子が悪いって分かつてるのに、一人で待つてるなんて出来ないって。それに二人で作つた方が早いだろ」

「……アンタ、何が作れるのよ」

「霊夢みたいに料理らしいものは無理だが、食材を切るのは得意だぞ」

「あのねえ……」

身も蓋も無い言葉に霊夢は呆れ果てるが、俺は隣りから動く気はなかった。

此処であっさりと引くくらいなら、最初から一緒に作るとは思わない。

霊夢は呆れた様な少し困った様な顔をするけど、俺はそんな霊夢に構わず手伝いを続ける。

「言つとくけど、俺は下がる気はないぞ。此処で口喧嘩をするくらいなら、さっさと作っちゃまおう」

「……好きにきなさい」

「ああ、そうさせて貰つた」

やっと折れた霊夢は、素っ気無くそう言ってから調理を再開した。

……だけど、素っ気無く言う割りには、嬉しそうに顔が綻んでいるのを俺は見逃さなかった。

……

……

…

昨日宴会でお酒を飲んだと言う事もあって、今日の朝食はキノコの梅和えと落とし卵の野菜雑炊。

お酒を飲んで荒れた胃を気遣ってか、なんとも胃に優しくそうな献立となった。

出来た雑炊と和え物を器に盛り、朝食を食べようと居間に行くと、何故か頭に鹿の角が生えた深緑色の髪の少女が座っていた。

「お、漸く飯が出来たのか」

「アンタは昨日の……」

「……誰？」

霊夢はあの少女の事を知っているみたいだが、俺は完全に初対面……のはずだ。

少なくとも、俺の記憶の中では初めて会った筈なんだが……どうも初めてな気がしない。

前にも何処かで会った……そんな気がするんだが、全然思い出せないんだよ……。

「昨日はリュウを助けるのに協力してくれてありがとう。……それで、アンタどっから入ったのよ」

「まあ待て。そう言うのは朝食を食べてからでも遅くなくろう」

「それは……確かにそうだけど」

「分かっておるのならまずは食事じゃ。妾の分はあるかの？」

「食べる気かよ」

「当然じゃろ」

「……ハア」

俺と霊夢は顔を見合わせて、同時に溜息を吐いた。

確かに少し余分に作っておいたから、この子に食事を出すのは問題はない。

問題ないんだけど……何故か釈然としなかった。

朝食も食べ終わり、食器を下げた俺達は、早速この少女に色々と尋ねることにした。

突然ウチの居間に現われたと言うのも気に為るが、俺もこの子が何者なのか気になっていたしな。

「さて…まずは自己紹介からかの。妾は『龍神』。知っての通り幻想郷の最高神じゃ」

「……冗談でしょ」

「当代の巫女は疑り深いのお……」

「そんな子供の姿で龍神だなんて言われても、信じろって方が無理よ」

「むむ……。竜、お主なら信じてくれるじゃろ？」

「うむ……」

自称龍神に言われて、俺はこの子の気配をよく観察してみる事にした。

……確かに感じられる気配は竜のそれと似てるけど、人の姿をしているのがイマイチ分からない。

そんな事を言ったら、基本的な姿が人の俺も良く分からない存在に



なるんだが……。

「どつじゃ竜。信じてくれたか？」

「……もしかして君は、龍神の化身か？」

「おお！ 流石は同胞じゃ！ 良く分かってくれた！！」

「化身って？」

イマイチ話について来れてない霊夢は、俺が言った？化身？がなんなのか尋ねてくる。

「前に居た世界の竜たちが人と話すときになる姿の事だ。……まさか、コッチの龍も出来るとは思わなかったけど」

「それじゃ、この子本物？」

「多分」

「……なんかイメージ湧かないわね」

「まあ、化身の姿から本来の姿を想像するのは難しいけどな。……アイツ等も色々な姿になってたし」

俺はそう言っつて視線を遠くに向けて、あの世界で出会った竜たちの事を思い返してみる。

あの世界を見守っていた七人の古竜たち。どれもコレも奇抜……じやなくて、個性的な姿をしてたっけか。

人間みたいな姿をする奴もいれば、竜の姿を意識した姿の奴もいた

つけ。

アイツ等の事を思い返すと、この龍神の化身は中々の出来だよな。頭に角がある以外、殆ど人間と同じ姿をしてるし。

確か『草竜』も人に近い姿をしてたけど、ここまで出来はよくなかった気がする。

「……そう考えると『風竜』と『砂竜』は酷かったな」

「ん？ なんの話？」

「ちよつと昔を思い返してただけ。……それで龍神はなんの用で来たんだ？」

「別に大した用ではない。お主の様子を見に來ただけじゃよ」

「リュウの様子って……私たちの仲に文句があつて來た訳じゃないの？」

「なんで妾がそんな事を言いに來なければ為らんのじゃ。妾も暇ではないぞ」

「あつそう。……良かった」

靈夢は心配事が解消されたのか、一言呟きホッと胸を撫で下ろした。俺としては、龍神が何を言つてこよつとも靈夢の傍から離れる心算はなかつたから、特に気にしてはなかつたけど……文句を言われずに済んだのは良かったかな。

一方、龍神は様子を見に來たと言つとおり、俺の事をジツと探るよつに見てくる。

その視線がどうにも気に為るが……此処はグツと我慢するとしよう。

「……ふむ、どうやら力は落ち着いておるな」

「見ただけで分かるのか？」

「当然じゃろ」

龍神は当たり前前の事を聞くなつと言った顔をするが、俺は見ただけで相手の力が安定してるかなんて分からん。

自分の事なら察しは付くが、流石に相手の力が安定してるのかは無理だ。

其処まで調べられない……と言うか、只単に調べる気が無いだけなんだけどな。

「……龍神。一つ聞きたい事があるんだけど」

「なんじゃ霊夢？」

「あの白い竜って一体なんなの？ 如何見ても普通の竜じゃないわよね」

「……………」

霊夢の直球な質問に龍神は顔を顰め口を閉ざした。

俺としてもあの力の事は知っておきたいが、そんなにも言い辛い事なのだろうか？

「妾も聞いた程度じゃが……それでも構わぬか？」

「問題ないわ」

「俺もだ」

俺と霊夢は頷き、俺達は龍神にあの力の説明を求めた。

「……アレは神殺しの力を持った竜。妾はそう聞いておる」

「神殺し……」

「正確には、とある邪神を滅ぼす為に生まれたそうじゃがな」

「……………」

今の龍神の話を聞いて、俺は思わず言葉を失ってしまった。

アレが強大な力を持つ竜だって事は自覚していたけど、まさか神殺しなんて言われるとは思いもしなかった。

……これなら八雲 紫に封印されるか、幻想郷に辿り着かないほうが良かったのかもな。

「……ちよつとリュウ。今変な事考えたでしょ」

「別にそんな事は……」

「嘘言わない。アンタは顔に出易いんだから、直ぐに分かるわよ」

誤魔化そうとした俺を、霊夢は若干怒った様な顔で追及してきた。

霊夢に顔に出易いって言われて、俺は自分でも物凄く納得してしま  
う。

もう一人の自分は表情を崩す事は殆ど無かったけど、俺は普通だっ  
たからな。

あんまり嘘も付いた事無いし、きっと俺は隠し事が出来ないタイプだろうな。

「どうせアンの事だから、紫に封印されるか此処に来なければ良かったとかって所ね」

「……正解」

「はあ。そんなの今更気にしても仕方が無いじゃない」

「仕方が無いって……」

「リュウが何度暴走しても私がちゃんと止めてあげる。だから、アンはそんな事気にしないの」

「……ありがとな、霊夢」

「ば、バカ。礼を言う様な事じゃないわよ」

俺がお礼を言うと、霊夢は顔を赤くしてそっぽ向いてしまった。それが照れ隠しなんだと分かっているから、霊夢のこの仕草が可愛いと思ってしまう。

……多分、魔理沙辺りが聞いたら“惚気るな！”って怒り出しそうな気がするな。

「……この様子ならば、アヤツ等に教えても問題ないか」

「アヤツ等って誰のことよ」

「それはコッチの事じゃから気にせんでよい。……では、妾はそろ

そろお暇するでしょう」

そう言うと、龍神の身体が座った状態のまま少しずつ薄れていった。その様子に霊夢は眼を丸くして驚くが、俺はあの世界で古竜たちが消えるのを見ているから驚く事は無い。

それに化身は本体とは別に存在するものだから、今此処に居る龍神が消えても何の影響も無いしな。

「あ、最後に一つ言わねば為らぬ事があった」

「なんだ？」

「子供を作るのは結婚してからじゃぞ？ 怠けているとは言え、霊夢は巫女。そこら辺の貞操観念は確りせんとな」

「あ、アホかーッ！！！」

霊夢は顔を真っ赤にして、自分が座っていた座布団を龍神に投げ付けた。

とは言え、龍神は既に消えかかっていたから、投げられた座布団はそのまま素通りするだけだった。

「あっはっはっは！ では、さらばじゃ〜」

「二度と来るな！！」

消えていく龍神に霊夢は声を荒げるが、幻想郷の最高神にそんな口の聞き方で良いのか？ ……いや、物凄く今更な事か。

### 第三十一話 幻想郷の最高神（後書き）

後書き……と言つか、ちょっとした説明です。

本当は前回の後書きにするべきだったのですが、オマケに使ったので此処で説明しておきます。

リュウが変身した白い竜。アレが前に本文で少しだけ記述した『アンフィニ』です。

はつきり言えば、ブレスオブファイア公式チート竜です。

何が如何チートなのかと言いますと、あの竜に変身すると全耐性が大幅強化され、即死・バステ無効は勿論の事、HP自動回復が追加されます。ちなみに回復量は9,999。

その上HPも最大値になり、敵からの攻撃を殆ど受け付けません。どんなにダメージを重ねても直ぐに回復するので、ある意味無敵状態になります。……まあ、自殺は出来るんですけどね。

当然、火力も可笑しな事になってるので大抵の敵はブレス攻撃一発で死にます。

こんなチートな竜ですが、使えるのは終盤のイベント限定なので本編では中々お目に掛かれませんし、この作品でもまず使う事の無い竜です。

使ったら勝負自体が成立しなくなるので、使いたくても使えないんですよね。

あと説明するとしたら……『アンフィニ』のデザインが原作とは違うと言う事です。

原作でも白を基調にしたカラーリングですが、見た目が全く違いま

す。

何故デザインを変えたのかと言うと、俺が嫌いだったからです。…

…やっぱ、アイツは黒じゃなきゃ駄目だろ。

そんな個人的な我が侂を通した結果、あの白いカイザーが誕生しました。

随分と長い後書きになりましたが、今回はこの辺で失礼させていただきます。

では、次回の更新をお楽しみに。

……そろそろレギュラーメンバーを真面目に考えないとな。

とりあえず、リユウと霊夢と魔理沙は確定として……後はどうしよ？



## 第三十二話 薬で変身（前書き）

今回からまた日常編に戻ります。

……漸くネタが書ける。シリアスは色々大変だから長々と続けたくない。

## 第三十二話 薬で変身

桜の花は既に散り行き、植物たちが春の装いから夏へと向けて葉を伸ばし始めた頃。

澄み切った空の中、俺と霊夢は何時ものように、母屋の縁側に座りお茶を飲んでいた。

そろそろ夏が近付いてきたからか、時折り吹き抜ける風は暖かくなりつつある。

今はまだ大丈夫だが、夏が本格的に始まる前に暑さ対策を考えておくか。……いや、俺は暑いのが平気だから大丈夫か。

「よう、二人共。遊びに来たぜ」

「つ……つかれた……」

俺達が縁側でノンビリしていると、何時のも様に魔理沙と…珍しい事にパチュリーがやって来た。

普段は紅魔館の図書室から動かないくせに、今回は如何言う風の吹き回しだ？

……あと、なんでパチュリーはそんなに疲れ果てているんだ？  
紅魔館から神社まで歩いて来た訳じゃないだろ。

「いらつしゃい二人共。魔理沙は兎も角、パチュリーは珍しいな」

「ちよつとした野暮用よ……」

「どうせ魔理沙に？本を返して欲しかったら協力しろ？とか言われ  
たんでしょ」

「あ、酷いぜ霊夢！ お前はわたしの事をなんだと思ってるんだ！」

「ただの本泥棒」

「……確かに間違ってるわね」

「お前等な……」

俺達の発言に軽く凹む魔理沙だが、本当に本を盗んで行くのだから  
そう言われても仕方が無い。

凹んでいる魔理沙を余所目に、俺は二人の分のお茶を入れに急須を  
持って台所に向かった。

釜戸に火をくべてお湯を沸かし、四人分と言う事で多少多めにお湯  
を急須に注ぐ。

後は来客用の湯飲みと、茶菓子で食べていた煎餅の追加分を出して、  
縁側に居る三人の下に戻る。

「はい、二人共お茶」

「さんきゅー」

「……紅茶はないの？」

「私は緑茶派よ。紅茶なんて有る訳無いわ」

「そう。なら仕方が無いわね」

二人にお茶の入った湯飲みを渡し、霊夢の隣りに煎餅を置いて、俺  
はその反対側に座る。

魔理沙は煎餅を挟んだ形で霊夢の隣りに座り、パチユリーは魔理沙の隣りに座る。  
全員にお茶が行き届いたのを見て、俺は自分の湯飲みに入ったお茶を飲み始めた。

「それで、今日は何の用で来たのよ」

「ちょっとリュウに試して貰いたい物があったな」

「……俺に試して貰いたい物？」

「そうだけ」

そう言つて魔理沙が渡して来たのは、エメラルドグリーン色の液体の入ったビン。

液体の色からして何らかの薬だと思うが、一体なんの薬なんだ？  
前の世界でもこんな色の薬は見た事が無いぞ。

とりあえず渡された俺は、この怪しさ満点の薬を色んな角度から見て見る事にした。

「おいおい、そんなに見回さなくても只の薬だって」

「アンタ等魔法使いが作る薬が只の薬な訳ないでしょ。リュウ、そんな薬さっさと捨てなさいよ」

「……もっともな意見ね」

確かに霊夢の意見も分かるんだが……こう言つ怪しさ満点の物つて興味がそそられるんだよな。

前に居た世界でも、興味本位で『アケロン』を使った事もあるし。

……後で皆に滅茶苦茶怒られたけど。

「……………」

色んな角度から薬を見た俺は、ビンの蓋を開けて薬を一気飲みする事にした。

エメラルドグリーンの薬の味は……美味くも無く不味くもない中途半端な味。

この手の薬は、極端に不味いか味が無いかの二択だと思ってんだが……違うみたいだな。

薬を飲み干した俺は、ビンを口から離し、自分の身体に異常が無いを確認する。

「ちよつとリュウ!? そんなの飲んで大丈夫なの?!」

「今の所は……………ッ?!」

身体に異常はないと思った瞬間、自分の心臓が大きく脈打ち始めた。最初は前に境界を弄られたみたいに、中に居る竜が暴れだしたのかと思ったが、どうやら少しばかり違うようだ。

心臓が大きく脈打つものの、前みたいな鼓動が早くなったり、視界が白く霞みもしない。

これは……中で暴れていると言うよりも、何かが強制的に表に出てこようとしてる感じだ。

「リュウ!?」

霊夢が俺を呼ぶ声が聞こえたのと同時に、俺の身体を赤いオーラが包み込んだ。

俺は表に出てこようとする奴を抑え込もうとしたが、下手に我慢す

ると頭痛がしてきて押さえ込むのも難しくなる。

このまま我慢するのも無理だし、此処は出て来ようとしてる奴を表に出すしかない。

そう判断した俺は、押さえ込むのを止め、竜人形態を飛ばし何かの竜へと変身をした。

竜に変身すると、何時もの様に赤いオーラが弾け飛び、視界が元に戻って来る。

俺は隣りを見てみると、オーラが弾けた時の衝撃の所為でか、霊夢が二人を押し潰していた。

《おい、大丈夫か？》

「え、ええ。私は平…気…」

「おい霊夢、早く退け…って…」

「如何したのよ魔理…沙…」

起き上がった三人は、俺の方を見るや否や、珍妙な生物を見る様に眼を丸くして見下ろしてきた。

なんでそんな眼でコツチを見てくるか分からないが、それ以上に気に為るのが…如何して俺は三人に見下ろされなければ為らないんだ？

身長で言えば、この四人の中で俺が一番高い筈なんだが…ま、まさか…。

物凄く嫌な予感がした俺は、急いで鏡のある霊夢の部屋に向かい、今の自分の姿を見てみた。

霊夢の部屋にある鏡に映し出されたのは、頭に薄紫色の小さな角を生やし、腕の部分にこれまた小さな白い翼を持つ、お腹に浅緑色と飴色のラインが入った、薄紅色の足のない小さな竜の姿だった。

……よりもよって、変身したのが『パンク』かよ。いや、家を壊さなかっただけマシか。

《ハア……》

……

……

…

鏡で確認をしてきた俺は、あの二人に話を聞くために縁側に戻って来た。

あの二人がなんの心算でこんな事をしたのか知らないが、場合によってはこの姿のままアイツ等をボコる。……勝てるかは知らないけど。

《それで？ アレはなんの薬だ？》

「んな恐い顔するなよ。折角可愛くなっただから」

《……霊夢、人間が喰えるってホントか？》

「美味しいかは知らないけど、食べられるらしいわよ」

「……二人して恐い事言っなよ」

《「ならさっさと話せしなさい」》

「へいへい」

魔理沙が言うには、アレは飲んだ相手を何らかの状態にすると  
言う、物凄くアバウトな魔法薬との事。

そもそも何故そんな薬を俺に渡したのかと言うと、竜である俺に  
魔法薬が効くのか試してみたくなっただけらしい。

でも魔理沙は、ソツチ方面の薬を精製するのは苦手らしい。

其処でパチュリーに相談を持ちかけたところ、意外にもこの話に乗  
って来て、今回の薬が完成したとの事だ。

パチュリーがついて来たのは、薬を飲んだ後にどんな反応が起きる  
のかこの眼で見たかったからだ。

「いや、まさかこんな事になるとは思わなかったぜ」

「リュウ、実験協力ありがとう。それと、貴方の羽を一枚くれない  
？ 何かの魔法薬に使えそうだし」

「あ、ズリイ！ リュウ、わたしにも一枚くれ！」

《「……………」》

厚かましく羽を強請る二人に、俺と霊夢は言葉を失ってしまっ

た。霊夢なんか頭痛がするのか、片手で頭を押さえ項垂れてしまっ  
ている。

流石の俺も、この二人の態度にはいい加減怒りを覚え始めた。

《…とりあえずお前等。ちょっと表に出ろ》

「お、やる気か？ そんなヘンテコな姿のリュウに負けるわたし  
じゃないぜ」



「……竜の特性を知る良い機会ね」

《人を実験動物にするんじゃないやねえ！！》

パチュリーの一言を聞いて遂に切れた俺は、彼女のお腹目掛けて突進していった。

突然の出来事にパチュリーは動く事が出来ず、俺の突進をまともに受けるが……大した威力は出せなかった。

この攻撃では駄目だと思い、今度は腕に思いつきり噛み付いてみる。歯を立て、力いっぱい噛み付いてみるものの……パチュリーが痛がつている様子は無い。

「……痛くない？」

「そんなまさか」

魔理沙に首根っこを無造作に掴み上げられた俺は、彼女の手を振り解こうと必至になって暴れる。

……だが、どんなに暴れても魔理沙の手を振り解く事は出来ず、俺は彼女に首根っこをで掴み上げられたままだった。

この状況になつて俺は『パンク』に付いてのある事を思い出した。

それは……この竜に変身すると、体力と力が通常時の半分にまで下がると言う事だ。

だから、大事な局面ではまず使う事が無い上に、使える技も大したものがないから、戦闘ではまずこの竜に変身しない。

しないものだから、普通にこの竜の特性を忘れていた。……マジで如何しよう。

「なんかよく分からないけど、これってチャンスだよな」

「そうだけど……先に後ろ振り向いた方が良いわよ」

「……へっ？」

パチュリーに言われた魔理沙が後ろを振り返ると、其処には怒り心頭気味の霊夢が立っていた。

此処まで怒っている霊夢を見るのは……初めてだな。前に喧嘩した時だって、此処まで怒ってなかったし。

「え〜つと霊夢…さん？」

「……………」

「お〜い」

「あんた等、私のリュウに……なにしてんのよ!!!」

「ぬがッ!？」

魔理沙は切れた霊夢のサマーソルトを顎に叩き込まれ、そのまま気絶し、俺は霊夢に回収された。

それを見ていたパチュリーは、気絶した魔理沙を肩に担ぎ、そのまま帰る為に空を飛んで行くこととするが……直ぐに落下した。

この場合、単純に魔理沙が重いのか、パチュリーが体力不足なのか分からないな。

地面に激突したパチュリーは、地面に伏したまま懇願する様な眼で霊夢の方を見て来る。

「れ、霊夢。少しだけ休ませて欲しいんだけど……」

「さっさと帰れ」

「……はい」

霊夢にあっさり断られたパチュリーは、再び魔理沙の肩を担いで空を飛んでいった。

……その途中で、何度も落下しそうになったのは言うまでも無い。

「全く。冗談にしても性質が悪いわ」

《ありがとな霊夢。助かったよ》

「アンタはもっと反省しなさい」

《……はい》

流石に今回は自分でも軽率すぎたと思うし、此処は素直に反省する事にする。

とは言え、何時までもこの姿で居るわけにも行かないので、さっさと変身を解除する事にした。

俺は瞼を閉じて、何時もの様に力を押さえ込んで、変身を解除しようとしたが……どうも調子が可笑しい。

どれだけ力を押さえ込んで、何故か変身が解ける気配が無い。

何度も試してみたが……結果は全て同じで解除出来ずに終わった。

《……マジかよ》

「……？ 如何したの」

《パンクの変身が解けない……》

「……嘘でしょ？」

霊夢は信じられないと言った顔をするけど、信じたくないのは俺も一緒だよ。

なにが悲しくて『パンク』の姿のままに居ないといけないんだよ。

……なんだか泣けて来た。

《俺が何をしたってんだよ……》

「だ、大丈夫よりユウ！ きつと明日には治るから！」

《……そうだよな。こんなのが何日も続くわけ無いよな》

「きつとそうよ。だから、そんなに落ち込まないの」

霊夢はこんな珍妙な姿になった俺を慰めてくれた。

此処最近は不幸続きだったから、霊夢の優しさが心に沁みってくるな……。

### 第三十二話 薬で変身（後書き）

パンクのデザインが分かり難かった方は、とりあえずデフォルメして可愛くしたツチノコに、白い翼が生えた感じのキャラを脳内に描いて下さい。……大体そんな感じです。

あとはカラーリングを本文に書いた様にすれば完成です。

**第三十三話 人形遣いの来訪（前書き）**

ネタバレ。今回はアリス回、以上。

### 第三十三話 人形遣いの来訪

魔女二人の薬を飲んで『パンク』に変身してから、今日で三日が経った。

俺も霊夢も、翌日には治ると思っていたが……結果はこの通りで未だに変身が解けないでいる。

なんで変身が解けない原因は不明だが、今はあの二人に解毒薬を作らせている最中だ。

その解毒薬が出来るまでの間は、ずっとこの姿のままな訳だが……何時に為った完成するんだらうか？

正直、この姿のまま一日過ごすのはかなり不便なんだよな。

何が不便かと言うと、まず人型じゃないから今まで通りの生活が出来ない。

境内の掃除や道具拾いは愚か、毎日の食事だってままならなくなつた。

手なんかないから、そこ等の動物みたいにご飯にガツツクしかない訳だが、そんな食べ方をしたら口回りが汚れる。

今までだったら、口が汚れても紙か何かで拭けば済むのに、この姿だとそんな事も出来ない。

お陰で今じゃ、霊夢に食事の後に幼子みたいに口を拭いてもらう破目に……。

他にも、霊夢に身体を洗ってもらったり、寢床の準備をしてもらっている始末。

湯に浸かるぐらいなら問題ないけど、自分で洗うとなると中々出来なくて。背中とかかまず無理。

布団を出そうとしたら、まともに取り出すことも出来ないし、無理

に出そうとしたら布団の重さで潰されるんだよ。

……ホントに此处最近は泣きたくなくなるような毎日だよ。て言うか、実際に泣いた。

何も出来ない自分と、霊夢に頼りっぱなしなのが、情けないやら申し訳ないやら……。

出来るだけ早く薬が完成して欲しいけど、余り急かすと薬が失敗しそうで恐いんだよな。

……こんな生活、あと何日続くんだろうか……。

《……ハア。憂鬱だ》

俺は誰も居ない縁側で一人深い溜息を吐いた。

霊夢は香霖堂に買い物に行ったり、魔理沙はパチュリーと一緒に薬の精製中。

この身体じゃ、神社の掃除なんて出来ないから、縁側で一人暇を持って余すしかない。

暇潰しに釣りに行く事も出来ないし、里に遊びに行こうにもこの姿じゃ色々和不味い。

やる事を失った俺は、縁側で昼寝をすることにした。

……何もすることが無くなったから昼寝だなんて、なんか霊夢みたいな生活だな。

……  
……  
……



アリスSide

今日私は、自動人形オートマトンの制作でリュウに尋ねたい事があり、博麗神社へとやって来た。

境内に人気はなかったけど、それは何時もの事なので余り気にしないでおこう。

此処に二人の姿は見当たらないとなると、きっと縁側でお茶を飲んでいるのんじよ。

なんだか二人の邪魔をするようで気が引けるけど、此方も切羽詰まっているから深く考えないようにしよう。

そう考えた私は、神社の境内を横切り、縁側へと向かった。

「……………」

《くきゆう…くきゆう…》

「……………なにかしらアレ？」

母屋の縁側に二人の姿は無かったけど、代わりに白い小さな翼が生えた薄紅色の珍妙な生物が気持ち良さそうに眠っていた。

最初に見たときは、珍種の蛇かと思ったけど……………蛇にしては寸胴な上、サイズが小さすぎるわね。

大きさ的には私の上海と同じか、それよりも小さい位からしら。

色々変わった妖怪が住んでいるこの幻想郷だけど、あの生物以上に変わった妖怪は見た事がない。

「……………」

《くきゆう…くきゆう…》

リュウも居ないし、他にすることの無くなった私は、あの生物の測定をする事にした。

流石に定規なんて持って来てないし、神社から勝手に拝借する訳にも行かないので、今回は手持ちの糸を代用して長さを計測する事に糸なら常に持ち歩いているし、年がら年中使ってるから大体の長さを測定出来る。

私は寝ている生物を起こさない様にそっと糸を使って、この生物の色々な箇所を調べて、分かった事を持って来たメモ帳に書き記していく。

《う、うう〜ん……》

「ッ?!」

頭から尾までの長さを測り、今度は胴回りを調べようとした所、この生物が急に動き出した。

私は眼が覚めたのかと思って一瞬硬直したけど、どうやら只の寝返りをしただけみたい。

起きる気配も無く、スヤスヤと眠っているのを確認した私は、ホッと胸を撫で下ろす。

……あ、お腹には浅緑色と飴色のラインが入ってるのね。コレはメモしておかないと。

私は測定した記録を書いたページの脇に、重要項目としてお腹のラインの事を書き記した。

必要な事は大体書き記したし、後はこの生物の肌触りは感触を知っておきたい所ね。

「……………」

《くきゅう…くきゅう……》

「……少しくらいなら良いわね？」

探究心と言う名の欲望に負けた私は、呼吸で小さく上下するお腹を優しく触れて見る事にした。

この生物の体温は人肌と同じく位に温かく、お腹の感触はぷにぷに  
していて少し弾力がある。

白い翼の方は鳥の羽に似ていて、見た目通りフサフサしていた。  
あとは背中の感触と、この生物の眼の色なんかも知っておきたいわ  
ね。

こんなにも気持ち良さそうに眠っているのに、ムリヤリ瞼を抉じ開  
けて調べるのは流石に可哀相。

背中の感触はもう一度寝返りをうった時に調べるとして、どうやっ  
て眼の色を調べようかしら？

「……何か良い方法はないからしら？」

眼の色を調べる良い方法がないかと考えていると、今まで眠ってい  
た生物が突然起き出した。

私は余りにも突然の出来事に驚くと、謎の生物は大きな欠伸を掻い  
た後、私の方を見てきた。

《ふあ……。なんだアリスか。何か用か？》

「……貴方、如何して私の事を知ってるの？」

《そっぴや変身したままだったけか。……信じられないと思うが、  
俺はリュウだ》

「……えっ？」

…  
…  
…

私は眼を覚ました珍妙な生物……もとい、リュウに三日前の話を聞いた。

下らない事考える魔理沙も魔理沙だけど、ろくに疑いもせずに薬を飲んだリュウもリュウね。

話を聞いた私は、二人に心底あきれ返るしかなかった。

「それで未だに変身が解けずに、そんな珍妙な姿のままな訳ね」

《……珍妙って言うなよ》

私が本当の事を言うと、今の姿を気にしているのかリュウは頭を垂れて凹んでしまった。

普段の姿なら大して気にはしないけど、今の姿で凹まれるとコツチが悪い事をした様な気分になってくる。

……如何してだろう、ただ本当の事を言っただけなのに物凄く罪悪感が湧いてくる。

「げ、解毒薬がもう直ぐ出来るんでしょ？　なら、その姿も直ぐに解ける様になるわよ」

《……本当にそうだと良いな》

リュウは顔を上げるけども、何処か遠い目をしていた。

あの二人の事が信用出来ないのか、只単に諦め始めているのか……

一体ドツチなんだろう。

リュウの真意は分からないけど、何時までもこの話題を続けるのは止めた方が良いわね。

そう判断した私は、この雰囲気を変えるために違う話題の話をする事にした。

「あ、あのさりゅう。貴方にちょっと相談があるのだけど」

《ん？ こんな姿の俺に相談？》

「この間の人形に付いてよ。あの話を聞いて私なりに色々試したけど、如何も上手くいかなくて」

《ああ、その相談か。別に良いが……ちょっと長くなりそうだし、お茶でも入れるか》

「別に気を使わなくても良いわよ」

《気にするな》

そう言うとリュウは、翼を動かす事無く浮き上がり、台所の方へと飛んでいった。

なんとなく気に為った私は、彼が行った方を振り向き、様子を観察する事にした。

リュウはあの小さな体を使って、なんとか引き出しを開けて茶葉が入った缶を取り出そうとする。

引き出しを開ける事は出来たけど、取り出した缶の蓋が開けられずに苦労している。

なんとか口を使って蓋を開けられたけど、その拍子に缶そのものをひっくり返してしまっ。

中蓋のお陰で、茶葉が飛び散る事はなかったものの、リュウからは悲壮感が漂っている。

「……………で、手伝いましょうか？」

《いや、大丈夫……………のはず》

私は手伝いを申し出たが、リュウに自信なさ気に断られてしまった。出来るのか不安なら素直に言えば良いのに。そう思うのだけど、彼の頑張りを見てると口に出して言えそうにない。

缶の中蓋を取ったリュウは、次に棚においてある急須を取り出そうとする。

棚から取り出すだけなら大丈夫だと思っていたけど、今のリュウには手が存在していない。

だから、棚に置いてある急須を口でくわえて取り出すしかなく、見ているほうが不安に為ってくる。

なんとも不安定に急須を運ぶリュウを見て、私は居ても立っても居られず、縁側から立ち上がり、リュウから急須を取り上げてしまった。

《あ！ 何すんだよ！》

「お茶の用意は私がするから、貴方は座っていて」

《けど、アリスはお客だし……………》

「お願いだから座ってて」

《……………分かった》

私の説得に応じたりリュウは、シヨンポリ肩……と言うか、翼を落とし縁側に戻っていった。彼には悪い事をしたと思うけど、コレ以上黙って見ているのは耐えられそうにない。

普段のリュウを知っているのに、あの姿のリュウに普段通りの事をさせてみると、なんだか幼子に無茶をさせているような気分になってきて、見ているコツチが落ち着かない。

如何して変身が解除されないのか知らないけど、魔理沙とパチュリーには出来るだけ早く薬を開発してもらいましょう。……そうでないといと色々危険だわ。

私は帰りに紅魔館に寄る事を心に決めつつ、お茶の準備を進めていった。

……  
……  
……

お茶を出し終わった私は、早速リュウに色々と質問しようとした。だけど、今のリュウに持って来た資料を手渡しても、上手く読むことが出来ない。

何せ手が使えない以上、次のページを捲ると言う動作が出来るはずも無い。

其処で私は、不本意だけどリュウを膝の上に座らせて、代わりに資料を捲ってあげる事にした。

「それで此処の術式なんだけど」

《ん〜っと……これは術式に使う呪文を変えたら如何だ?》

「それは既に試したわ」

《そうなるよ……うむ》

リュウは私の資料とにらめっこしながら、何かを考えるように唸りだす。

その姿を見た私は、何故か小さな子供が背伸びするような微笑みさを覚えた。

霊夢に見付かったら間違いなく怒られるでしょうけど、今のリュウを見てみると不思議と心が和むのよね。

「ただいま……って、其処で何してんのよりユウ?!」

私が今のリュウの姿に和んでいると、丁度霊夢が神社に帰ってきた。神社は霊夢の家なんだから、帰ってくるのは不思議じゃないけど……やっぱり怒りだしたわね。

《なにして……アリスの手伝い?》

「だからって、何で膝の上に座ってるのよ!?!」

《この方が資料を見るときに楽なんだよ》

「資料を見るだけなら他の方法もあったでしょ!?!」

《そう言うけどよ……。てか、なんでそんなに怒ってるんだ?》

「怒ってないわよ!?!」



誰が如何見ても怒ってる様にしか見えないわ。

……それにしても困ったな。リュウにはまだ他にも相談したい事が残ってるのに、この調子じゃ出来そうにないわね。

なんとかして霊夢の怒りを静めたいけど、下手な事をするのは火に油を注ぐ様なものね。

何か手はないかと考えた私は、あまり使いたくないけど一つのアイディアを思いついた。

恐らくコレならば霊夢の怒りを静められると思うけど、こう言うのはあんまりしたくないわね。

心の中で溜息を吐きつつ、私はリュウを自分の膝の上から降ろし、メモ帳を持って霊夢の傍に向かった。

「ちょっと良いかしら？」

「…なによ」

「少しだけこのページを見て欲しいんだけど」

「…？ 何かの測定記録？」

「この数値は、今のリュウを測定した出た数値よ。……これと資料になる絵が有れば、あの姿の人形が作れるわ」

「なっ?!」

私の話を聞いた霊夢は、眼を大きく見開いて驚きを顕わにした。

その後、疑うような眼差しでコツチを見てくるけど……そんな視線に臆する事無く、私は強気に出る。

「コレと使って貴女の分の人形を作ってあげても良いわ。その代わ

り……」

「リュウを少し貸してって言うんでしょ」

「その通りよ」

私が出した交換条件を聞いて、霊夢は胸の辺りで腕を組み悩み始めた。

少しの間悩んでいた霊夢は、組んでいた腕を解き、渋るような声で返事をしてきた。

「お、お願いだから膝に座らせるのは止めて。私もまだ座らせた事無いの」

「それは構わないけど……なんか意外ね。貴女ならとっくに座らせてると思ったのに」

「……それが出来なかったから、あんなに声を荒げたんじゃない」

そう言っつて気を落とした霊夢は、私の肩に手を置いて深い溜息を吐いた。

この様子からすると、この三日の間に何度か自分の膝に座らせようとして失敗したみたい。

リュウにやんわりと断られたのか、彼女の羞恥心が前に出た所為で、空回りしたのか……微妙なところね。

「とりあえず、彼を膝に座らせなければ良いのね」

「ええ。ソレを守ってくれればとやかく言っ心算はないわ」

「了解したわ。あと序でに、今のリュウのスケッチも描いたんだけど良い？」

「なんでそんな事するのよ」

「人形を作るための資料よ。データが有っても姿が分からなければ作れないわ」

「……仕方が無いわね。今回だけよ」

「それで十分よ」

私は霊夢と固い握手を交わし、早速リュウをスケッチする為の準備を始めた。

正直、此処まで霊夢が乗り気に成るとは思わなかったけど、コレはこれで色々と作業がし易くなるし、良いのかも知れないわね

アリスSide out

### 第三十三話 人形遣いの来訪（後書き）

オマケ

アリスが遊びに来た翌日、漸く薬が完成したらしく、魔理沙とパチユリーがウチにやって来た。

ウチに来た二人は何故か疲れ果てた様子だったけど、深く気にしないでおこう。

霊夢に解毒薬の蓋を開けてもらい、俺は中の液体を一気に飲み干す。すると、身体が一瞬だけ消滅し、次の瞬間には元の姿に戻る事が出来た。

「……………」

「ん？ 如何したのリュウ？」

「いや、何処か異常はないかとな」

「大丈夫よ、何時ものアンタに戻ってるわよ」

「そっか。……やれやれ、やっと元に戻れたのか」

俺は霊夢の言葉を聞いて、漸く元に戻れた実感が湧いてきた。

元に戻るまでに、何度か余りの不甲斐無さに死にたくなっていたからな。これでへんな事を気にせず生活が出来そうだな。

「ちゃんと効いてくれたみたいだな、良かったよかった」

「……………ねえ、もう眠っても良い？」

「その前に少しだけ手伝ってくれ」

俺は自分の指をバキバキ鳴らしながら、極上の笑顔で疲れている二人に手伝いを頼む。

「……………手伝いつてなんだよ」

「なに只の肩慣らしだ」

「「全力で遠慮させて貰います」」

「問答無用。……………覚悟しろよお前等!!」

「逃げるぞパチュリー!!」

「言われなくても分かってるわ!!」

「逃がすか!!」

俺は全速力に逃げ出す二人に対して、『カイザー』の力を解放した状態の竜人になって、あの二人を追い掛け始めた。

とりあえず、変な薬を作ってくれた礼と、今までの鬱憤をまとめてあいつ等にぶつけてやる!!

終わり。

### 第三十四話 刀剣選び（前書き）

今回は全編霊夢からの視点です。

……前はほぼアリス視点で、今回は霊夢視点か。ちょっとキャラの視点を移動させ過ぎかな？

### 第三十四話 刀剣選び

そろそろ梅雨入りしそうな五月の終わり頃、私はちよつとした野暮用で香霖堂にまで一人でやって来た。

野暮用と言うのは、リュウがフランと全力で遊んでも大丈夫な作りの剣捜し。

剣を買うだけなら里の鍛冶屋に頼めば良いんだけど、結構値段も張る上に、形状が前のと似たような奴だから耐久面で不安が残る。

あの形状は日本独自の物だから、打てる形状が似てるのは仕方ない事だけど……フランと遊ぶには脆すぎるのよね。

もつと頑丈な作りの剣を打って貰えば良いんだけど、そう言う特注品は値段が倍近くするから金銭的に無理。

「　　と言う訳で、頑丈な剣を数本見繕って頂戴」

「……話は分かったが、またツケかい？」

「当然でしょ」

「……やれやれ。まあ、彼には道具調達で世話に為ってるから構わないがね。でも売るのは一本までだよ」

「ケチ」

霖之助さんは、私の文句を聞き流してカウンター席から立ち上がり、店の中に置いてある剣を何本か集めて並べてくれた。

私の前に並べられた剣は、70cmくらいの長さをした幅広の刀身をした両刃の剣に、ゆらゆらと波状に震える刀身の長剣。

後は刀身に木目状の模様を持つ両刃の長剣に、広めの鍔の両端に環飾りが付いた両刃の大剣の四本。

剣の種類なんてどれも似た様なものだと思っていたけど、こうして見ると結構色んな種類があるのね。

「僕の店にある丈夫剣はこれで全部だ」

「……………それが如何言う剣なのかさっぱり分からないわね」

私は並べられた剣を見詰めながらぼやいた。

此処にリュウが居れば剣の良し悪しを見極めてくれるけど、今回はアイツへのプレゼントとして捜しに来たから出来るだけ内緒にした  
い。

そろそろアイツがウチに来て一年が経つから、そのお祝いも兼ねて  
と思っただけ……………さっぱり分からないわね。

「霖之助さん。悪いんだけど、剣の説明をしてくれない？」

「ああ、構わないよ。……………それじゃ、最初はこの剣からだ」

そう言っ  
て霖之助さんが手にしたのは、四本の中で一番短い剣。

刀身の長さが70cmもあれば、剣としては十分に長いような気も  
するけど……………残りの剣が長すぎて、この剣だけ貧相な感じがするの  
よね。

「この剣は『ブロードソード』と言ってね。見ての通り、幅の広さが特徴の片手剣だ」

「……………それだけ？」



「そうだよ。それじゃ次ぎの剣だ。……これは『フランベルジュ』。少し変わった刀身をしているが、この形状にはちゃんと意味がある」

「この変わった形状に？」

「ああ」

今、霖之助さんが説明してくれているのは、ゆらゆらと波状に震える刀身をした剣。

彼が言うには、この形状がデザイン重視で作られたのではなく、ちゃんと意味を持たせて作られたそうだけど……ただの見掛け倒しにしか見えない。

こんな形状だと、ちゃんと相手を切れるのか分かったもんじゃないわね。

「……駄目、全然分からないわ。この形にどんな意味があるの？」

「この特殊の形状が相手の肉を引き裂き、治りづらい裂傷を負わせるんだ」

「……エグいわね」

「ああ。しかも、この幻想郷の衛生環境を考えると、この剣で斬られたら破風傷に掛かって命を落とすだろう」

霖之助さんの説明を聞いて、私は少しだけこの剣にゾツとした。

見た目だけなら変わった刀身の剣で済ませられるけど、実際に戦って斬られたら堪ったもんじゃないわね。

基本的に戦うのは妖怪相手だけど、魔理沙や咲夜みたいな奴もこの幻想郷には居るんだし、この剣をプレゼントするのは止めておこう。

それに……この剣、見た目が細いから直ぐに折られそうなのがするのよね。

「それじゃ次ぎだ。…この剣は『ダマスカスソード』。鉄の所為か製法が特殊なのか分からないが、刀身に現われた木目が特徴の剣だ」

霖之助さんが三本目に説明してくれたのは、さっきの剣に負けず劣らず変わった見た目をしている剣。

他の剣の刀身は綺麗な鉄の色をしているのに、この剣だけ錆びたように黒っぽくなっている。

商品として出した以上は何の問題もないと思うけど、本当に錆びていないのか気に為るわね。

「…霖之助さん、この刀身の色はサビじゃないの？」

「其処までは分からないけど、刀剣としては何の問題なく扱える筈だよ」

「ふん……」

分からないのならコレ以上聞いても仕方が無いわね。

先の二本に比べれば、この剣は十分に耐えられそうだけど……見た目がアレよね。

「それじゃ最後の剣の説明だ。…この剣は『クレイモア』と言って、この大きな見た目とは異なり、剣の切れ味で勝負する剣なんだ」

「へえ」

一番最後に説明してくれたのは、四本の中で一番大きな剣。全長は

……恐らく200cm位は有るんじゃないかしら？  
紹介してくれた四本の中で一番ガツシリとした作りだし、私の中では最有力候補ね。

「ところで霖之助さん。この中で一番頑丈な剣ってどれ？」

「さあ？ 僕は古道具屋であって武器屋じゃないからね。どの剣が一番良いかなんて分からないね」

「……最後の最後でそれなの」

「僕の能力は名前と用途を知るだけであって、剣の丈夫さまでは知る事は出来ないよ」

「あっそう」

私は素っ気無い態度で言ったけど、内心では物凄く困っていた。

さっきの説明と剣の見た目で、『ダマスカスソード』か『クレイモア』の二択にまで絞れたけど……最も重要な頑丈さが分からないんじゃない意味がない。

剣の見た目だけを言うなら、この『クレイモア』が良さそうなんだけど……コツチの『ダマスカスソード』と言う剣も捨て難い。

面倒だから二本ともツケ払いで持って帰りたいけど、リュウにバレたらどちらかの料金を支払いに行くわね。

そんな事になったら、来月の食費が儘ならなくなっちゃうじゃない！ なんとしてもコツチかに絞らないと……。

「むむむ……」

私はコツチの剣にしようか二つの剣を見比べていると、店の扉が開

き誰かが香霖堂に来店してきた。

「おっす香霖。今日は変な物を持ってきた……って、何してんだ  
霊夢？」

「ほつといて」

店にやって来たのはどうやら魔理沙のようだ。

魔理沙も私と同じか、それ以上にこの店に遊びに来るから別に来て  
も不思議じゃない。

それよりも今問題なのは、この二本の内ドツチの剣を買うかと言う  
事。

ただ見てるだけじゃ剣の良し悪しなんて分からないし、此処はもう  
勘で買うしか無い訳だけど……イマイチその勘が働いてくれない。  
異変解決の時は不気味なくらいに働くのに、こう言う時に働いてく  
れないのは物凄く困るわね。

「うぬぬ……」

「……なあ香霖。霊夢の奴は何をしてるんだ？」

「リュウの為の剣選びだそうだ」

「なんだ、何時も通りで安心したぜ。……それよりもだ香霖！ 今  
日はコレを買い取れ！！」

「相変わらずだね君は」

妙なハイテンションのまま、魔理沙が霖之助さんに渡したのは、古  
びた鞘に収まった一本の剣だった。

鞘に収まってるからはつきりとした長さは分からないけど、大よそ150cmと言った所かしら。

長さは『クレイモア』程じゃないけど、『ダマスカスソード』よりは長いわね。

「今回はなんと！ 何故か鞘から抜く事の出来ない剣だぜ！..」

「ガラクタね」

「間違いなくガラクタだろうね」

「ところがどっこい！ この剣には何らかの封印が施されていて、その所為で鞘から抜けないんだぜ」

「封印された剣か。確かにそれは珍品だね」

「だろ？」

魔理沙から剣を受け取った霖之助さんは、その剣を色々調べ始めた。

剣を色々な角度から見てみたり、鞘から抜いてみたりしてるけど...  
... 魔理沙の話通り本当に抜けないみたい。

「うーん...これは封印されていると言うよりも、抜く相手を選んでいるみたいに見えるね」

「相手を選ぶ剣？ そんなものがあるのか？」

「剣じゃないけど霊夢が使う陰陽玉。アレは博麗の血を引く者でなければ使えないよ。...多分だけど、この剣にも似たような仕掛け

が施されているんだと思う」

「へえ〜。……よし、霊夢。お前この剣を抜いてみる」

「何で私が」

「良いからいいから。もし剣が抜けたらお前に売ってやるよ」

「そこはタダで譲りなさいよ」

「それは断るぜ」

「ったく」

私は剣選びを一度中断して、霖之助さんから剣を貸してもらった。私は柄を握り、剣を鞘から引き抜こうとしたけど……予想通り剣を抜くことは出来なかった。

……だけど、握った柄からなんらかの気配みたいなものを感じた。物である筈の剣から気配なんて可笑しな話だけど、この剣からは何時も傍に居てくれる奴に似た感じがする。

これは感覚的なものだから、口で上手く説明する事が出来そうにないけど、私は確かにアイツと似た気配を感じとった。

「……………」

「霊夢でも抜けないとなると、この剣は妖怪用の剣なのか。…んじや香霖、買取よろしく」

魔理沙は私から剣を奪い取り、そのまま霖之助さんに渡した。

「中身が分からないから千円で良いね」

「もう一声頼む！」

「駄目だ」

金欠なのか切羽詰ったような声で魔理沙は懇願するけど、霖之助さんはそれを突っ撥ねる。

霖之助さんは、何事も無かったかのようにカウンターに置いてあるレジから千円札を取り出し、そのお金を魔理沙に手渡した。

膨れっ面の魔理沙がお金を受け取るのを見た私は、霖之助さんの手元にある剣を手にとった。

「霖之助さん、この剣頂くわね」

「ん？ それで良いのかい？ 武器として使うなら他の剣の方が…

…」

「良いのよコレで。それじゃまたね二人共」

謎の剣を買い取った私は、二人に別れを告げそそくさと店を後にする。

確か今日は……神社周辺の森で、幻想入りした道具を拾うとか言ってたわね。

この時間帯ならアイツも帰って来てる筈だし、さっさとこの剣を渡しに行こう。

そう考えた私は、飛ぶ速度上げ急いで神社へ帰る事にした。

………

…  
…

私が神社に着くと、リュウは裏庭で今回集めたとされる道具の山の整理をしていた。

一体何時間掛けたのか分からないけど、今回もかなりの量のガラクタが集っている。

本や食器は兎も角、どうやって使うのか分からない様な物も沢山ある。

相変わらずリュウは、目に付いたものを片っ端から拾い集めているみたいね。

私は心の中で呆れながら、リュウの邪魔にならない場所に降り立った。

「リュウ、今帰ったわよ」

「お帰り霊夢……って、その剣どうしたんだ？ 拾ったのか？」

「拾ったんじゃないくて、香霖堂で買ったのよ」

「へえ〜」

リュウは私が剣を持っているのが珍しいのか、ジロジロと私の手の中にある剣を見てくる。

その視線に耐えかねた私は、持っていた剣をリュウの目の前に突き出した。

「この剣、アンタにあげるわ」

「良いのか？ 結構な業物みたいだけど……」



「良いも何も、この剣はアンタの為に買って来たの。感謝しなさいよね」

自分でも、もう少し言い方があったとは思っただけど、気恥ずかしさが前に出るのか、どうしてもこんな口調になってしまっ

その辺りは直しておきたいと思うけど、性格を変えるのって結構難しいのよね。

そんな私の気持ちとは裏腹に、リュウは私が差し出した剣を受け取ってくれた。

「ありがとな、霊夢。この剣、大切にさせてもらっよ」

リュウはそう言って本当に嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

喜んでくれたのは嬉しいけど、彼の笑顔が眩しくてつい顔が赤くなってしまう。

「え、ええ！ 前の剣みたいに簡単に壊したら承知しないわよ！」

「分かってるって。……それじゃ早速拝見させてもらっかな」

そう言ってリュウは剣の柄に手を掛け、鞘から剣を抜いてみせた。

最初はコイツでも抜けないんじゃないかと心配してたけど、如何やらその心配は杞憂だったみたい。

リュウの手で鞘から抜かれた刀身は、香霖堂で見た『ダマスカスソード』の様に木目状の模様が刻まれていた。

だけど、刀身は両刃ではなく片刃になっていて、刀とは違いガツシリとした作りになっている。

あと特徴があるとしたら、柄と刀身の間に丸い物体があって、その中心には丸い鍔が付いているのと、刃の部分が鍔を越えて柄の先ま

で伸びている。  
一体どんな剣か疑問に思っていたけど、これならそれなりに使えそうね。

「如何リュウ？ この剣ならフランと全力で遊べそう？」

「……………」

私はこの剣の具合をリュウに聞いてみたけど、彼は呆然と剣を眺めているだけだった。

その様子には私は、何処か不味いところでもあるんじゃないかと不安に為ってくる。

折角プレゼントするんだから、ちゃんとリュウに喜んでもらえる物を買いたい……そう思って香霖堂に足を運んだのに。

「ドラゴンブレード……じゃないよな。あの剣は向こうに置いてきたし、なにより形状が違う。それじゃこの剣は一体……」

呆然と剣を見ていたリュウは、何処か信じられない物を見たような口調で小さく呟いた。

「…リュウ？」

なんとなく気に為った私は、リュウにもう一度声を掛けてみた。すると、リュウは漸く私の声に気が付いてくれたのか、ハッと驚いてコツチを見てくれた。

「如何した霊夢？」

「それはコツチの台詞よ。如何したのよ、その剣を見ていきなり呆

然としちゃって。…何か気になる事でもあったの？」

「……ちよつとな。そんなに大した事じゃないから気にしなくて良いよ」

「そう？　なら良いんだけど……」

イマイチ釈然としない私を他所に、リュウは剣を鞘に仕舞い、またガラクタの整理をし始めた。

リュウがあつた剣に何を感じたのか分からないけど、あの剣がコイツにしか抜けなかった事を考えると、きつと竜に関する何かつて事ね。何を気にしてるのか知らないけど、一人で悩むようなら私に相談してくれたって良いじゃない。

一人で何かを抱え込むリュウに、私は少しだけ寂しさを覚えた……。

### 第三十四話 刀剣選び（後書き）

『ブロードソード』・『クレイモア』・『ダマスカスソード』の三つはブレス？に実際にある剣です。

威力としては『ブロードソード』が一番弱く、『ダマスカスソード』が一番強いです。

まあ、『ダマスカスソード』を買うくらいならラスダンにある『ドラゴンブレード』を手に入れた方が安上がりですけどね。

BOFはシリーズ通して金欠に陥り易いゲームですし。……武器の値段が高いのに、敵が落とす金額が少なくて少なくて。

初代ならゴールデンキング狩りしてれば貯まるのに、？以降は色々修正されていますから。

金のたまごに『リッチマード』とかある意味夢ですよ。？のカナクイとか泣くしかないって……。

シリーズをやった事のある人にしか分からないネタですね、すみません。

第三十五話 妖精の依頼（前書き）

今回はまた書き方を変えてみました。  
もし前の方が良いと言う方は教えてください。

### 第三十五話 妖精の依頼

幻想郷が梅雨入りしたとかで、此処最近は連日連夜の様に雨が降り続けている。

こんなにも雨が降り続けているのを見るのは初めてだが、それ以上にこんなにも暇を持て余しているのは初めてだ。

外は雨が降ってるから境内の掃除をする必要はないし、道具拾いにも行く気にはなれない。

最初は長々と続く雨を面白いと思っていただけ、こつこつ毎日降り続くと流石に飽きてくる。

何か良い暇潰しはないかと考えるものの、そう簡単に暇潰しの方法が思いつくわけがない。

そう言った状況がずっと続いているものだから、此処最近の俺は暇すぎて死にそうに成っていた。

「……霊夢、暇」

「そんな事私に言われてもどうしようもないわよ」  
「だよな……」

やる事のない俺は、霊夢とお茶を飲みながら居間でだらけていた。

こんなにもする事がないなら、雨の中釣りにでも行けば良いんだけど……霊夢に？風邪を引くから駄目？って言われて、釣竿を取り上げられてるんだよな。

竜である俺が風邪を引くのか知らないけど、霊夢に釣竿を取り上げられてた以上、釣りに行くことも出来ない。

……本当にする事も無いし、少し早い気もするけど昼寝でもしようかな？

そんな事を考え始めた矢先、何かが母屋の雨戸を叩くような音が聞こえてきた。

「ん？ 誰かが遊びに来たのか？」

「この雨の中来るわけないでしょ。どうせ風の音よ」

霊夢はそう言ってお茶を飲むけど、雨戸は誰かの存在を主張するよ  
うに何度も叩かれた。

本当に風の音とするには、雨戸は規則的に叩かれている。

霊夢は完全に無視を決め込んでるが、俺は如何してもその音が気にな  
ってしょうがなかった。

如何しても我慢する出来なくなった俺は、席を立ち上がり、何度も  
叩かれる雨戸を開ける事にした。

「きゃッ?!」

雨戸を開けた先に居たのは一年くらい前に出会った、髪をサイドテ  
ールにした何時かの妖精。

なんで神社に来たのか分からないけど、傘を差さずに少し慌てた様  
子に見えた。

「……君は確か大ちゃんだったけ？」

俺はその場にしゃがみ込み、彼女が話しやすい様に試みる。

すると妖精は、必至の形相で俺にすがり付いてきた。

「お願いします！ 私たちを助けてください!!」

「いや、ちよっと…?」

「このままじゃ私たちが住む場所が無くなっちゃうんです！ だから、  
お願いします!!」

「……話が見えねえ」

妖精は必至になつて俺に訴えかけてくるが、何が如何なつてゐるのかイマイチ分からず、彼女の勢いにおいてかれてしまった。このままだと埒が明かないと判断し、俺はこの妖精を家の中に招き入れる事にした。

……

……

…

「はい、お茶」

「あ、ありがとうございます……」

家の中に招き入れた俺は、彼女を落ち着かせるためにお茶を一杯出してあげた。

霊夢は彼女を家の中に入れてたときに、物凄く嫌そうな顔をしてたけど……今回は我慢して貰おう。

「それで？ 妖精のアンタが神社に何の用よ？ 只の悪戯なら今すぐ追い出すわよ」

「脅すなつて」

俺は妖精を脅す霊夢にツッコミを入れつつ、彼女の対面の場所に座る。

妖精はお茶を飲んで少しは落ち着いたので、一息ついて漸く何が遭つたのか俺達に話してくれた。

「あの……ですね……。私が住んでいる『霧の湖』周辺の森に大きなナメクジが現われて、それを退治して欲しいんです」

「大きなナメクジ？ んなもん、この時期なら何処にでも居るじゃ



ない」

「普通のじゃないんですよ！！ 眼が四つもあって、何故か足も沢  
山生えてて、物凄く大きいんです！！」

妖精は身振り手振りで俺達にナメクジの事を伝えようとするけど、  
彼女の説明がイマイチピンツと来ない。

とりあえず分かっている事は、眼と足があってサイズが物凄く大き  
いって事だけだ。

……あれ？ ナメクジに眼と足なんて生えてるっけ？

「……なあ霊夢。俺の記憶違いでなかったら、ナメクジに眼も足もな  
いよな」

「ええ。それに大きいと言っても、どうせ数cmとかでしょ」

「違います！ この神社と同じ位に大きなナメクジです！！」

「……流石にそれはないでしょ」

「本当なんですって！！」

妖精は必至になって俺達に訴えてくるけど、流石にそのサイズのナ  
メクジは信じられない。

確かに人と同じ位のサイズのゴキブリなら見た事あるけど、この神  
社と同じサイズのナメクジは見た事が無いな。

……でも、彼女の必至さを見ると、この子が言っている事全てが嘘  
だとは思えない。

それに、態々そんな事を言う為にこの神社に足を運ぶって言うのも  
可笑しな話だ。

「まあ、そのナメクジが居るにしろ居ないにしろ、暇潰しにはなる  
かな」

俺はそう言って席を立ち上がり、自分の部屋から色々と道具を取り

に行く事にした。

「ちよつとリュウ、何処に行くのよ」

「ナメクジ退治の準備をしに部屋へ」

「……アンタも物好きね」

「暇だったからね。家の中でジツとしてるよりは良いさ」

「はあく。仕方が無いから、私も付き合っわよ」

霊夢は俺の言動に呆れたのか、大きな溜息を吐いてから席を立ち上がった。

「霊夢も物好きだな」

「うっさい」

俺が嫌味を言うと、霊夢は軽く頭を小突いてきた。

別に小突く必要はないと思うけど、もはや何時もの事だから気にしないでおこう。

「あ、あの……」

「ちよつと準備をしてくるから、其処で大人しく待っててくれ」

「あまり変なところ弄るんじゃないわよ」

妖精を居間に置き去りにして、俺と霊夢は自分の部屋に戻って準備を始めた。

この前貰った剣も当然持つて行くんだが……この剣の初陣がナメクジ退治つてのも泣ける話だな。

……

……

…  
準備を終えた俺と霊夢は、妖精の案内の元『霧の湖』周辺の森へとやって来た。

この辺りも雨が降り続いていて、森の中は湿度が高いのか物凄くジメジメとしている。

暇潰しで来たものの、あまりこつこつ場所には長時間居たく無いものだな。

「それで、アンタが言っていたナメクジって何処よ？」

「えっと……………あ、居ました！ あそこです！！！」

妖精が指差したほうを見ると、其処には確かに神社で聞いた通りのナメクジが森の植物を食い漁っていた。

……………いや、本当に聞いた通りの見た目とサイズをしていて、予想以上に気持ち悪い。

何を如何成長すればあんなにデカくなるのか、誰かに説明してもらいたいくらいだ。

「そ、それじゃ後はお願いしますね！」

妖精はそれだけ言うと、一目散にこの場から離れ何処かへと行ってしまった。

戦いの邪魔に為らないだけマシだけど、あのナメクジの見た目は如何にかならないもんかね？

俺も色んなモンスターと戦ってきたが、あんなに気色悪いモンスターは見た事が無いぞ。

「……………やるか霊夢」

「そうね。あんなのが里の畑に入ったら大変な事になるし、此処で

「駆除しちゃいましょう」

そう言うと霊夢は懐から針を取り出し、それ等をナメクジに向かって投げ付けた。

針は木々の間を縫う様に通りぬけ、なんの問題もなく当たったかに見えたが……針が直接ナメクジの身体に触れた途端、針は奴の身体を滑り周りの木々に突き刺さった。

その光景を見た俺は、直ぐに鞘から剣を抜き、直接ナメクジに斬り掛かる。

だが、さっきの針と同様に俺の剣も奴の身体に触れた途端、粘液が何かに滑り直接斬り捨てる事は出来なかった。

俺は一旦ナメクジから距離を取り、体勢を立て直す事にした。

「リュウ、何か分かった？」

剣を構え直し、体勢を整えていると、霊夢が俺の後ろにやって来た。俺は後ろを振り返る事無く前だけを見据え、さっきの攻撃で分かった事を簡単に伝える。

「アイツの身体の表面に粘液が何かで覆われているようだ。その所為でコッチの攻撃が効いてない」

「粘液？」

「多分な。そう言う相手なら炎を当たれば良いんだが、この雨じゃ完全に焼き尽くすのは無理だろ」

「……確かにこの雨じゃ、アレに塩を掛けても意味がないでしょうね」

「その程度で倒せるなら俺達に頼んだりしないだろうしな」

「それもそうね」

俺は霊夢と軽口を叩きつつも、目の前にいる化物ナメクジを倒す方

法を考えていた。

物理系の技が効かないと為ると、俺の魔法や霊夢の術を主軸に戦った方が良いだろうな。

問題があるとすれば、あのナメクジがどんな攻撃をしてくるのかって所か。

普通のナメクジなら只の害虫駆除で済むんだが、見た目通りの化物なら何もしてこない訳がない。

仮定の事を幾ら考えても仕方が無いが、何も考えないで突っ込むよりはマシか。

「…霊夢、俺が先に仕掛けるから支援を頼む」

「分かったわ。……気をつけてね」

霊夢の言葉に小さく頷いた俺は、剣に炎を纏わせてナメクジとの間合いを一気に詰める。

雨にも負けないように強い炎を纏わせ、ナメクジの背後から斬り掛かった。

剣に纏った炎が、ナメクジの粘液ごと奴の身体を焼き斬る。

「  
ーッ！」

身体を斬られた事で、激痛からかナメクジが言語にならない雄叫びを挙げる。

だが、踏み込みが浅かったのか、今の一刀でナメクジの身体を両断する事は出来なかった。

もう少し踏み込めば良かったと後悔していると、ナメクジが此方を振り向き、口から粘液の様なものを吐き出してきた。

口から粘液が出てくるのを見た俺は、すぐさま後ろに跳び、奴から吐き出された粘液を躲す。

俺が後ろに後退すると同時に、背後から複数の光弾がナメクジへ

と放たれる。

「霊符『夢想妙珠』」

霊夢から放たれた光弾は、ナメクジの粘液など物ともせず全弾命中した。

光弾がナメクジに命中した事で、雨が降り薄暗い森の中が光で満たされる。

森を満たしていた光が収まると、ナメクジは大分弱っているがまだ健在だった。

俺は剣を握り直し、ナメクジにトドメを差そうと駆け出したその時。

「どっせーいッ!」

上空から物凄く場違いな子供の声が聞こえ、その直後に謎の氷塊がナメクジを押し潰した。

余りにも突然の出来事に呆気に取られていると、上から氷の羽を持つ青い髪の妖精が降りてきた。

「へっへ〜ん! あたいに掛かれば、こんな奴イチコロよ!」

氷精は潰されたナメクジを見て勝ち誇ったように胸を張る。

俺としては見せ場を持っていかれた形だから、今一つ面白くない展開ではある。

「ち、チルノちゃん。危ないから早く戻ってきてよ」

「何言ってるの大ちゃん。アイツはあたいがやっつけたからもう大丈夫よ」

俺達に依頼をしてきた妖精は、心配そうに木陰から氷精に声を掛け

る。

だが氷精は、あの子の心配など一切気にもせず、自分の勝利を確信していた。

確かに普通のナメクジなら、氷塊に潰されれば一貫の終わりだろうが……この程度で終わるとは思えない。

俺は何があっても良いように辺りを警戒していると、氷塊が何かに滑るようにずれ落ち、下からほぼ無傷のナメクジが姿を現した。

「う、うそ?!」

ナメクジはさっきの攻撃が頭に來たのか、かなり眼を強張らせて氷精を睨んでいる。

その眼に臆したのか、氷精が少しだけ後ずさりをした瞬間、ナメクジはその巨体を地面に叩きつけ大きな地震を発生させた。

あの巨体から発生した地震は、一気に周囲に広がり地面に幾つもの亀裂を入れていく。

俺は咄嗟に剣を握っていないほうの手に力を込めて、その拳で地面を思いつきり殴り力を解放する。

「<sup>ジハート</sup>地破土ツ!!!」

解放した力で地面を操り、ナメクジが起こした地震をムリヤリ鎮静化させていく。

だが、コレは本来の使い方とは違う上に、ナメクジが起こした地震が大きすぎるのか、完全に沈静化させる事は出来なかった。

結果としては最小限の被害で押し止めれたが、周りの木々は傾き、地面には地割れの様なものが出来てしまった。

ナメクジはもう一度巨体を地面にぶつけようとしますが、ソレよりも先に靈夢が奴の近くに札を投げ付ける。

「夢符『封魔陣』！」

札から発生した光に閉じ込められたナメクジは、まとも動く事が出来ずに中でもがき出す。

結界から出ようと暴れだすが、アレはナメクジ程度が壊せるような生半可な結界じゃない。

「リュウ！」

「嗚呼！」

俺は霊夢の呼びかけに応え、結界の中でもがいているナメクジへと向かって駆け出す。

頭に描くのはあの半人前が使っていた突撃して斬り抜けるあの技。

あの時に彼女の動きを見切る事が出来たんだ……なら俺にも出来る筈だ。

俺の握る手に自然と力を籠めると、剣が籠めた力に共鳴するように刀身から鈍い光を放つ。

その光に気を取られる事なく結界の中にいるナメクジへと近付き

「……ッ！」

ナメクジを包み込んでいる結界ごと十字に斬り抜けた。

結界は俺に斬られた事で消滅し、ナメクジの身体は四つに両断され……絶命した。

俺は剣に付いたナメクジの体液を振り払い、刀身の具合を確かめる。刀身にはコレと言った刃毀れは歪みは見付からないが、さっきの鈍い光も消え去っている。

今更になってあの光が気になるが……何か害に為る訳でもなさそうだし、今は気にしないでおこう。



あの光の事をそう結論付けた俺は、剣を鞘に仕舞い、霊夢の元に向かった。

「お疲れ様、リュウ。怪我は……特に無さそうね」

「霊夢もお疲れ。あと、毎回怪我なんかしないっての」

「……それもそうね」

俺と霊夢はお互いの労をねぎらっていると、二人の妖精が俺達の傍にやって来た。

……だけど、氷精の方はなんだが不機嫌なようにも見えるな。一体如何したんだ？

「えっと……ナメクジを倒してくれて、ありがとうございます」

「礼なんて良いわよ。……それよりも報酬は？」

「あ、はい」

俺達に依頼を出した妖精が今回の報酬を出そうとした時、氷精が彼女の手を掴んで何処かへと向かって飛び始めた。

突然の出来事に俺と霊夢だけではなく、あの妖精も目を丸くして驚いた。

「行こう、大ちゃん」

「え、チルノちゃん?!」

「ちよつと待ちなさい！ 行くならせめて報酬を払ってからにしないよ!」

「ベーツだ」

氷精は霊夢を無視して、そのまま何処かへと飛び去ってしまった。

森には報酬を貰いそびれた俺と霊夢だけが残り、その場で呆然と立ち尽くすしかなかった。

「やれやれ、今回はタダ働き確定か」

「……妖精の分際で舐めた事してくるじゃない」

「あゝ霊夢？」

俺が何処か様子の可笑しい霊夢に声を掛けると、霊夢は全身で怒りを顕わにして怒り出した。

「アイツ等、今度会ったら只じゃ置かないわ！ 覚悟しなさいよ！

」！

「……せめて大ちゃんは見逃してやれよ」

怒りの対象が二人である事にツツコミを入れるも、霊夢の耳には届いていないようだった。

雨に打たれ続けていることも忘れて怒る霊夢に呆れつつ、俺は彼女を連れて風邪を引かないうちに神社に帰ることにした。

### 第三十五話 妖精の依頼（後書き）

リユウがナメクジを倒すのに使った技は、？の『クロスバイパー』  
と言う技です。

？では覚えられない技なので、本作では妖夢の『現世斬』を元に作った  
と言う設定でいきます。

あと余談ですが、？はただの斬撃が一番強かったりします。  
竜の力はちよつと制限があつて気軽には使えないんですよ。

第三十六話 梅雨の一日（前書き）

今回の話は何時も以上に期待しないで下さい。  
何故かこうなった、本当にそれだけなので。

## 第三十六話 梅雨の一日

未だに梅雨が明けない六月の中ごろ、幻想郷はずっと雨が降り続けている。

こうも雨が続くと、湿気でじめじめするは、洗濯物が溜まるわであり良い事が無い。

俺としては、そろそろ晴れてもらわないと気楽に釣りに行く事も出来ない。

「全く、この雨は何時まで続くのやら」

そんな事をボヤキながら、俺はお粥の入った土鍋と茶碗とレンゲに、里で貰った薬に水をお盆に乗せて、霊夢の部屋へと向かった。

なんでこんな物を持って霊夢の部屋に向かうのかと言うと、アイツの身にちよつと面倒な事が起こってな。

「入るぞ霊夢」

「ど〜ぞ〜……」

俺が襖を開けて部屋に入ると、頬を赤らめ気だるそうにしている霊夢が、額の上に濡れたタオルを当てて、布団の中で寝込んでいる。

この状況を見れば分かると思うが……霊夢は風邪を引いてしまったんだ。

恐らく原因はこの間のナメクジ退治の時に、長々と雨に打たれていたからだと思う。

神社に帰って直ぐに風呂にでも入れれば良かったんだろうけど、風呂一つ沸かすのにもそれなりに時間が掛かる。

だから、風呂が沸くまでに濡れた服を着替えたり、温かいものを飲

んだりしたんだが……それでも引いてしまったみたいだ。

「お粥を作ってきたが、食欲はあるか？」

「あんまり……」

「まあ、そうだろうけど……ちゃんと食べておかないと治らないぞ？」

「そのくらい分かってるわよ……」

そう言つて霊夢は、布団から上半身を起こし、俺はその傍に座つた。持つて来たお盆を隣りに置いて、土鍋の蓋を開け、中に入っているお粥を茶碗によそい、霊夢に手渡したが……何故か受け取るうとし、てくれなかつた。

「ん？ 如何した霊夢？」

「……リュウ、私いま風邪を引いてるんだけど」

「嗚呼、そうだな」

「………はあ。もう良いわよ」

「……？」

何故か溜息を吐いて落胆した霊夢は、やっと茶碗を受け取つてお粥を食べ始めた。

俺としては、なんで溜息を吐かれたのかよく分からないのだが……。その後霊夢は、半ばやけ食い気味に俺が作ったお粥を全て食べて、持つて来た薬を飲んでまた眠ってしまった。

俺は彼女の額のタオルを水で冷やし、もう一度額の上に乗せた後、お盆を持つて霊夢の部屋を後にした。

………

………

…  
台所で使った食器などを洗いつつ、俺は今晚の献立を考え始める。  
霊夢の食事は、やっぱり消化の良い物にした方が良さそうだろっけど…  
…ずっとお粥なのも飽きるよな。

だからと言って、俺の料理のレパートリーもそんなに多い訳じゃないから、如何しても同じ料理に為ってしまうんだよ。  
理想としては、同じお粥だけど違う味を楽しめる……そんな感じのお粥か。

今神社にある備蓄でそんな事が出来る食材なんて残ってたかな？  
そんな事を考えながら、傍に置いてある食材とにらめっこしていると、誰かが玄関の戸を叩いてきた。

「ん？ 誰だ？」

こんな雨の中、一体誰が来たんだと思いながら、俺は玄関の戸を開けた。

扉の向こうに居たのは、この間ナメクジ退治を依頼してきた妖精。  
この子以外の人影はなく、どうやらまた一人でこの神社にやって来たみたいだ。

「こ、こんにちわ」

「こんにちわ。……それで何か用か？ またナメクジが出たとか」  
「いえ、今回来たのはこの間のお礼を渡しに来ただけです」

そうやって渡して来たのは、翡翠色の石がはめ込まれた指輪だった。  
見た感じ、さほど高価なものには見えないが……妖精がくれる道具  
って偶にとんでもない物が紛れ込んでるから、見た目だけで判断は  
出来ないんだよな。

「あ、あの！　こんな事を言うのは勝手かも知れませんが、チルノちゃんの事を許してはくれませんか！？」

「…………許す？」

指輪を渡されて色々と見ていると、妖精が大きな声を出して許しを請うてきた。

「ただ俺からしたら、なんでそんな事を頼んでくるのかイマイチ良く分からない。

妖精は真剣な眼差しでコツチを見てくるが、理由が分からないのにどんな反応をすれば良いんだ？」

「駄目…ですか？」

「…………駄目と言うか、なんでこんな事を頼まれるのかも分からないんだが」

「え、だってこの間、チルノちゃんが邪魔しちゃったから…………」

「…………ああ、報酬が貰えなかった件か。アレだったら気にしてないぞ」

彼女の話しを聞いて、漸く何を謝っているのか理解出来た。

確かに邪魔をされたが、俺は元々怒ってなかったし、こうして報酬さえ貰えれば霊夢も文句は言わないだろ。

そもそも霊夢は、妖精のする事を一々気にする様な奴でもないしな。

「ほ、本当に気にしてないんですか？」

「嗚呼。元々気にしてなかったし、こうして報酬も貰えたからな。

霊夢には俺から言っておくよ」

「あ、ありがとう御座います！…………それじゃ、私はこれで失礼させて貰いますね」

「おう、気をつけてな」

「はい！」



許してもらえたのが嬉しかったのか、あの妖精は満面の笑みで神社を後にする。

その様子を見届けた俺は、渡された指輪をポケットに仕舞い、人間の里へ向かう事にした。

今ある備蓄を考えると、さっきのお粥と大差ないものしか作れそうにないし、買い物を兼ねて色々と聞いてみるか。

俺は玄関の傍に置いてある傘を手に取り、玄関の戸を閉めて、眠っている霊夢に何も告げずに里へ向かった。

……

……

…

霊夢 Side

薬を飲んで眠っていた私は、急にトイレに行きたくなり目を覚ました。

風邪の影響で気だるい身体を起こし、自分の部屋から出ると……家中には物音一つ無く、外で降っている雨の音だけが響いていた。

家の静けさが少し気に為ったけど、今は先にトイレを済ませることにした。

トイレで用を済ませた後、私は部屋に戻らずそのまま居間へと向かった。

「……リュウ、居ないの？」

居間の襖を開けて尋ねてみたけど、返事は返ってこず、アイツの姿も何処にもなかった。

ちやぶ台に置手紙もないし、台所には洗い終わった後の食器がキッチンと置かれている。食器にはまだ水気が残っているから、リュウが居なくなってからそんなに経っていない気がする。私が風邪を引いたって言うのに、置手紙も残さないで何処に行ったのやら。

「……………帰ってきたら文句を言ってやる」

私がそう声に出して決めた後、戸棚のコップを取り出し、水を一杯入れて喉を潤す。使ったコップを洗い場に置いて、私が自室に戻ろうと縁側に出たとき、ふと家の中が広いように感じた。

長年この神社に住んでいるけど、家の中がこんなにも広いなんて感じたのは初めて。

一年くらい前まではこの広さが当たり前だったのに、アイツがウチで暮らすようになってからは、少しだけ家の中が手狭になっていた気がする。

ただ他の誰かが居る……………本当にそれだけの違いで、こんなにも自分の家の広さが変わってみえる。

「……………」

私はこの広さに寂しさを感じながら、若干急ぎ足で自分の部屋に戻る事にした。

……………  
……………  
……………

部屋に戻り、布団を被った私はもう一眠りするにした。

布団に入り瞼を閉じると、聞こえてくるのは地面や家を打つ雨の音だけ。

今は梅雨で家の中に誰も居ないのだから、雨の音しか聞こえてこないのは当然の事だ。

私は聞こえてくる音に耳を傾けながら眠ろうとするが、何故だか心の其処から寂しさがこみ上げてきた。

病気は人を気弱にするのか、家に一人しかいないと言う状況に心細くなってしまふ。

独りで暮らしている期間の方が長かったのに、二人で暮らす事に慣れた途端コレか……。

自分自身に呆れてしまふけど、今更独りで暮らすことなんて考えられそうにない。

「早く帰ってきて、リュウ……」

私は自分でも知らないうちにそう呟く。

眼から何かが流れるのを感じつつ、私は静かに眠りについていた……。

……  
……  
……

……私は自分でもどのくらい眠っていたのかは覚えていない。  
ただ、気がつくとき私の額の所に冷たい何かがある感じがして、  
がしていた。

その感触と冷たさに導かれるように目を覚ますと、何時の間にかリ  
ユウが私の布団の脇に座って何かを読んでいた。

「……リユウ？」

「ん？ 起きたのか霊夢。まだ飯の時間じゃないから、もうちょっと寝ても良いぞ」

そう言うとリユウは、私の額にあるタオルを取って、自分の近くに置いてある水の入った桶に浸し、タオルをキツメに絞ってまた私の額に乗せた。

新しく絞ったタオルの冷たさが気持ちよくて、私は目を細めてその感触を甘受した。

「ねえリユウ。さっき家に居なかったみたいだけど、何処に行っていたの？」

「ちょっと食材の調達に人里まで行ってた。……もしかして何か用があったのか？」

「用って言うか……」

「……？」

歯切れの悪い私の言葉に、リュウは不思議そうな顔でコツチを見てくる。

そんなリュウの視線に気恥ずかしさを覚えて、顔半分を布団で隠しながらも言葉を紡いだ。

「…………寂しかった」

「はい？」

「だから、リュウが居なくて寂しかったの」

言い終わった後で、風邪を引いて熱くなった顔が更に熱くなるのを感じた。

最初は文句を言ってやる心算だったのに、私は一体何を言っているんだろう…………。

こんな事になるなら言わなければ良かったか思っていると、リュウが私の髪をそつと撫でてくれた。

「悪いな、何も言わないで出掛けちまって」

「…………ホントよ」

「でも、俺は霊夢を独りにさせたりしない。コレからもちゃんと傍に居るから安心してくれ」

「…………うん」

リュウはそう言って私に微笑んでくれた。

その笑顔を見ていると、眠る前にあった寂しさが何処かに行ってしまう様な気がする。

リュウが傍に居てくれる…………ただそれだけの事で、こんなにも心から安らげるとは思わなかった。

でも、彼が傍に居てくれるだけじゃ物足りなくて、私はそつと彼に手を伸ばした。

「……ねえ、手を繋いでくれない？」

「温かくしてないと治るものも治らんぞ」

「この位平気よ。……だからお願い」

「ったく、仕方が無いな」

少し困った顔をするけれど、リュウは私の手を確りと握ってくれた。

私はその手を握り返して、もう一眠りする事にした。

最近、リュウへの依存度が高くなってる気がするけど……特に困らないし、別に良いかな。

霊夢 Side out

### 第三十六話 梅雨の一日（後書き）

調べもの序でに東方wikiの『幻想郷年表』を見てきたんですけど、何気に『花映塚』から『風神録』までの間って一年以上も空いてるんですね。

……その間のネタを尽きないで書けるか凄く不安だ。

それはそうと、皆様に一つ聞きたい事があります。『儚月抄』の話って書いた方が良いでしょうかね？

この作品は『星蓮船』までの異変を起こそうと思っているのですが、あの話もやるべきなのか凄く悩んでいて。

あの作品は風神録の後なので、まだ先と言えば先のことなんですけど……近くになって決めるよりも、今の内に決めておこうと思います。

感想の制限は外してるので気軽にどうぞ。

### 第三十七話 剣戟

漸く長かった梅雨が明けた今日この頃。

俺は、梅雨の所為で鈍った勘を取り戻す為に、独り『無名の丘』で剣の鍛練をしていた。

鍛練と言っても、やっている事は素振りをしたり、仮想敵を想定しての戦闘だったりだけだな。

あの世界では旅をしていたから、敵に事欠かなかったけど、幻想郷だと如何しても弾幕ごっこになるんだよ。

それがこの世界の決闘のルールだし、仕方が無いと言えばそれまでなんだけど……偶には普通の戦いをしないと腕が鈍る。

……とは言え、こうして独りで剣を振り回していても、あんまり効果は期待出来ないんだよな。

相手になってくれそうな奴を知ってるけど、ちょっと顔を合わせ辛いんだよ……。

「……………ん？　なんだありゃ？」

丘の平原で剣を振っていると、人魂を追いかけている半人前の剣士の姿を見つけた。

幻想郷に人魂がいるのは別に珍しい事じゃないが、それを追いかける奴を見るのは初めてだ。

こんな誰も来ない様な丘の上で、あの半人前は一体なにをしているんだ？

あまりの珍しさに観察していると、半人前が持っている灯籠に人魂が吸い込まれていく光景が見れた。

……人魂を追いかけるのも変な話だが、灯籠の中に吸い込むってのも変な話だな。



「コレでよし……って、貴方はあの時の!？」  
「……よう」

俺の存在に気がついた彼女は、こっちを向いて驚きを顕わにする。  
個人的にあまり関わりたくなかったし、前の異変の事もあるからスルー出来れば一番だったんだけどな。

「……………」

「…なんだよ、何か用か」

「いえ、別に」

半人前は敵意むき出して俺の事を睨みつけてくる。

こうなる事は予想できてたけど、此処まで分かりやすいのも流石に如何かと思うがな。

正直者と言えばそれまでなんだが、もうちょい隠すようにした方が  
良いんじゃないのか？

「……………」

「あゝ用がないならどっかに行ってくれないか？ 正直気が散る」

「では、一つお聞きします。…貴方はこの様な場所で何をしている  
のですか」

「何って……見ての通り鍛練してただけだが？」

「そうですか。……では、私が稽古を付けてあげましようか？」

「あん？」

半人前はそう言うと、手に持っていた灯籠を地面に置いて、左肩に  
差している長刀を抜いた。

別に敵意むき出しなのも、刀を抜くのも文句は言わないが……稽古  
をつけてあげるなんて上から目線なのが気にイラねえ。

確かにコイツの使う剣術は凄いと思うが、それでも上から目線で物を言われる筋合いはない。

「この間、俺にボコボコにされたくせに随分な言い様だな」

「アレは貴方の能力に驚いただけです。純粹に剣の勝負でなら貴方に負ける心算はありません」

「……上等。なら変身しないでアンタの勝つてやるよ」

「良いですよ。私もこの間の仮を返させて貰いますから」

半人前の言葉にいい加減頭に来た俺は、手に持っている剣を握り締め、何時でも戦える様に構える。

向こうも俺が剣を構えたのを見て、剣を握り締めて何時でも踏み込めるように体勢を整えた。

お互いに剣を構えたまま呼吸を整え、気を十分に練り……ほぼ同時に駆け出した。

「ハアッ！」

踏み込んでくる速度では彼女の方が上らしく、いち早く自分の間合いに詰めて斬り掛かって来た。

刻一刻と彼女の剣が迫ってくるが、俺は強引に間合いを一步詰めて、剣を振り上げる。

剣と剣がぶつかり合うが、力では男の俺の方が上らしく、剣を振り抜いて彼女を後ろへと吹き飛ばした。

吹き飛ばされた半人前は空中で体勢を整えるが、俺は彼女の着地点に向かって駆け出す。

このまま行けば斬り抜けられるが、彼女は俺を飛び越えるように空を飛び、俺の攻撃を回避した。

俺は直ぐに反転し、彼女に向かって斬撃形の弾を飛ばす。

地面に降りた彼女は、俺と同じ様な弾を飛ばし、コツチの弾を相殺してきた。

弾が相殺され距離が開けたことで、此処で仕切りなおしとなった。俺は剣を握り直しつつ、あの半人前の力を分析する。

速さでは向こうの方が上みたいだが、純粹に力比べなら俺の方に分があるか。

多分、一撃必殺の戦法よりも手数が多い技で相手を押し切るタイプなんだろう。

「……………さっきの踏み込みからの斬り抜けは…まさか『現世斬』？  
貴方、何時の間にあの技を」

彼女の戦い方を分析していると、半人前が驚いた口調でさっきの技の事を尋ねてきた。

「何時も何も、前の戦いの時に覚えたただけだ」

俺としては特に隠す様な事でもないし、あっさりと白状する事にした。

俺が正直に話すと、彼女は信じられないと言わんばかりに驚いた顔をする。

「戦いの最中に覚えたって……………アレはそう簡単に覚えられる技では」  
「別にそんな事もなかったぞ。はつきり言って仕舞えば、アレはただの踏み込み斬だからな。タイミングやら間合いの取り方なんかさえ分かれば、後は簡単だった」

「……………私がああ技を覚えるのにどれだけ苦労したと」

俺がああ技を簡単に覚えれたのが相当腹が立つのか、彼女は剣を握

り締めて怒りを顕わにした。

自分の技術を盗まれて怒るなどと言える立場じゃないが、俺からすれば相手の技をラーニングするのは普通の事だったからな。

出来る事なら、今回も何らかの技を盗ませてもらいたいものだが……。

「コレ以上技を盗まれる前に、早々にケリを付けさせて貰います！」  
そう言った半人前は、長刀を鞘に仕舞い『現世斬』と同じ構えを取る。

同じ構えのままコツチに突っ込んでくるが、さつき自分でもやった通り、あの技は相手の頭上に入れば当たらない。

その事に気が付いてない訳ないだろうが……何か別の事を狙っているのか？

彼女の行動を不審に思いつつ、俺は念のために半人前の頭上を飛び越えた。

上から見てみると、アイツの剣は俺に向かって放ったと言うよりも、地面に向かって放ったように見える。

一体何が目的なのか分からないまま地面に降りると、アイツの軌道に沿って下から桜色の剣閃が走った。

俺は咄嗟に剣で防ごうとするが、剣閃に飲み込まれ服のアチコチに切れ込みが入る。

「まだまだ！」

半人前は俺が体勢を立て直す前に近付き、手に持っている長刀で下から掬い上げる様に何度も斬りかかって来る。

下から円を描く要領で何度も斬られ、最後のシメに勢いを利用しての横薙ぎで払い抜かれた。

ずっと防御したままだったから、大したダメージは入っていないものの、こつも一方的にやられるのは気分が悪い。其処で俺は、空中で剣を握り直しながら一回転し、その勢いに乗って彼女の頭部に剣を叩き込んだ。

剣は勢いに乗って頭部へと振り下ろされたが、半人前は自分の剣で俺の一撃を受け止めて様とする。

……だが、単純な力比べなら俺の方に分があり、剣の硬さもコツチの方だ上の様だ。

俺の剣を受け止めようとした時に、剣がぶつかった箇所が欠けるのが見えた。

このまま力押しで行けば、半人前の剣を破壊する事が出来るが……それじゃちと面白くない。

そう思った俺は、攻撃をわざと外して地面に着地し、その勢いのまま刃を反し……彼女を十字に斬り抜いた。

「グッ」

彼女を十字に斬り抜く事が出来たが、この技は後の攻撃が続かない。何せ相手を高速で十字に斬り抜く技だから、斬り抜いた後は如何しても距離が離れ、致命的な隙が出来てしまう。

これは技の性質上、仕方がない事なのかもしれないが……あまり多用出来る技じゃないな。

「その隙……貰ったッ!!」

「チッ!」

彼女の声に反応して、俺が体勢を整えると……目の前に巨大な青い刀が迫って来ている。

俺は直ぐに剣を振るい、直ぐ其処にまで迫っている青い刀を受け止

めた。

刀の込められている力と、今の俺の体勢が悪いのもあって、少しずつ青い刀に押され始める。

徐々に青い刀が俺を斬ろうと迫ってくるが、足腰に力を入れてなんとか受け止め続けた。

なんとか踏ん張り耐え続けていると、急に青い刀が消滅し、身動きが取れるようになった。

俺は直ぐに体勢を立て直し、半人前に向かって踏み込んで行く。

そのまま真っ直ぐに突き進むと、彼女はもう一本の短刀を抜いて、腕を交差させる様に構えていた。

俺はそれに構う事無く間合いを詰めていくと、半人前は二本の剣を振り抜き、上空への剣気の柱を作り出した。

その柱とぶつかり、後ろに吹き飛ばされそうになるが……俺は強引に間合いを詰める。

そして、剣を持つ手に力を込めて……目の前にある柱ごと、彼女を薙ぎ払った。

「カハ……」

俺の剣に薙ぎ払われた半人前は、後方に吹き飛ばされて仰向けに倒れた。

だが、まだ戦う気力が残っているのか、痛む身体を奮い立たせて立ち上がるようにする。

半人前は、自分の剣を支えにして立ち上がったが、俺は彼女の喉元に剣を突き立てた。

「まだやるか？」

「……………参りました」

俺の降伏勧告に彼女は、悔しそうな顔で言葉を搾り出し負けを認めた。

それを聞いた俺は、彼女の喉元から剣を退かし、後ろに振り返ってから剣を鞘に納めた。

一方半人前は、俺に負けたのが相当悔しいのか、奥歯を噛み締めたまま動こうとはしなかった。

俺は何か言葉を掛けようかと思っただが、今の彼女に何を言っても怒らせるだけだ。

そう判断した俺は、彼女の方を振り向く事無くこの場を後にすることにした。

「……次ぎは」

「ん？」

「次ぎは絶対に負けない。必ず貴方を倒してみせる！」

半人前は自分に言い聞かせるように、声を張り上げて俺を倒すと宣言した。

俺はそれを聞いても振り返らず、前を見たまま彼女に言葉を掛けた。

「だったら何時でも掛かって来いよ。何度でも受けてやる」

「……その言葉、忘れないで下さい」

「俺は忘れっぽくねえよ」

それだけ言い残した俺は、最後まで振り返る事無くこの場を後にした。

……

……

…

半人前と戦った翌日の早朝。  
今日も梅雨が明けて、良い天気になったのだが……朝早くから神社に嫌な客が来た。

「お早う御座います。今日は勝たせて貰いますよ」

朝食を食べ終えて、コレから掃除をしようと境内に向かったら……何故か半人前が出待ちしていた。

確かに昨日の帰りに？何時でも掛かって来い？とは言ったが、負かされた翌日に来るか普通。

「何をしてるんですか、早く剣を構えてください」

「……いや、これから境内の掃除しないといけないから、戦うのは後にしてくれ」

「それは駄目です！ 私にだって色々仕事があるんですから、体力が十分ある時に戦って貰わないと！」

彼女の一方的な言い分に、俺は怒れば良いのか呆れば良いのか分からなくなつた。

向こうの言い分が分からない訳じゃないけど、それなら休日に勝負しにくければ良いだろう。

年中無休で働いている訳でもないだろうに、なんでこんなにもせつかちなんだ？

「俺にだって仕事があるんだけどなあ」

「何時でも来いといったのは貴方じゃないですか」

「誰もこんな事に為るなんて思わねえよ」

俺はなんとかして彼女を説得しようとするが、中々聞き入れてくれ



ない。

自分でもなんてことうなったのか聞きたいけど、なんだか物凄く面倒な事になった気がする。

## 第三十七話 剣戟（後書き）

ブレス？と？には、相手のスキルをラーニングするシステムがあります。

それを使えば妖夢の技も覚えられますが、流石に『幽明の苦輪』なんかは無理です。

アレは、自分でも出来そうな技だから覚えられるのであって、キラの能力や種族に依存する様な技は幾らリユウでも無理です。だから、霊夢の『夢想封印』や紫のスペル全般は覚えられません。

### 次回予告

三日おきに始める神社での宴会、その度に高まる謎の妖気。

お祭りが好きな少女たちも、こつも頻繁に起こる宴会に頭を抱える。

そんな中でも竜は、何時もと変わらない毎日を送るのだった。

竜が辿り着いた幻想郷、第三十八話『終わらない宴』

少女達が宴会を終わらせようと奔走するなか、竜は独り暇を持て余す。

### 第三十八話 終わらない宴

梅雨が明け、夏が本格的に始まった七月の始めごろ。  
此処最近の博麗神社は、三日おきに境内で宴会が開かれるようになっていた。

「さあ、今宵も騒ぐぜー!!」

「「「「おおーッ!!」」」」

「……テンション高いな」

この宴会の幹事である魔理沙を筆頭に、皆がお酒の入ったコップを  
高々と掲げる。

俺もその礼に習って手持ちのコップを掲げるが、周りのテンション  
に圧倒されてしまう。

別に騒ぐのが嫌いと言う訳じゃないけど、流石にこつても回数が多い  
と嫌気が差してくる。

それに……宴会が終わった後の片付けの事を考えると、素直に楽し  
む気もおきやしない。

「……はあ。なんでこんなにも宴会が多いんだよ」

「それは誰かが皆を集めておるからに決まってるじゃろ」

「そりゃそうだろうけど……って、龍神?!!」

何時の間に来たのか知らないが、龍神が俺の隣りで酒を飲んでいた。  
気配を全く感じなかったから、彼女が隣りに居ることに驚かされる。

「ええい! 此処でその名を呼ぶな!」

「アイダツ!?!」

俺が本名……か如何か知らないが、名前を呼んだら何故か怒られ、頭を小突かれてしまう。

その名で呼ぶなって言うけど、それ以外の呼び方を知らないんだからしょうがないだろ。

幾ら初対面じゃないとは言え、幻想郷の最高神に向かつて？お前？なんて呼ぶ訳にも行かないっての。

「それじゃ、なんて呼べば良いんだよ」

俺は小突かれた部分をさすりながら、彼女の呼び名を尋ねる事にした。

「本来の姿ならその呼び名でも問題はないが、この姿の時は親しみを込めて『たつちゃん』と呼ぶが良い」

「……何故にたつちゃん？」

「？龍？は“たつ”とも読むからな。それに……こっちの方が可愛らしいじゃろ？」

「アーソウダネー」

「その棒読みはなんじゃーッ！！」

龍神……もといたつちゃんは、俺の棒読みの返事が気に入らないのか、胸倉を掴み、物凄い勢いで前後に揺らしてくる。

一方俺は、彼女に反論も胸倉から引き剥がす気も起きず、そのまま放置する事にした。

しかしたつちゃんは、遠慮や加減と言うものを一切せずに揺らしてくるもんだから、俺は段々と気分が悪くなって来る。

「ちよ……そろそろやめ……」

「お主が認めるまで、揺らすのを止めん！！」



一体どの位寝ていたのか分からないけど、どうやらまだ体調は完全には治っていないらしい。

俺は頭痛に頭を悩ませながらも、ゆっくりと眼を覚ます事にした。

「あ、やっと起きた。まったく、寝すぎよりユウ」

「……………れい…む？」

眼を覚ますと、宴会特有の騒がしい声と、すぐ目の前に心配そう見ってくる霊夢の姿があった。

なんで霊夢の顔が直ぐ近くにあるのかと思いを周りをしてみると、どうやら俺は彼女の膝を枕にして眠っていたようだ。

「随分寝てたけど、もう大丈夫なの？」

霊夢は不安そうな顔をしながら、目覚めたばかりの俺の体調を気遣ってくれる。

口調は何時もと大して変わらないが、霊夢の表情を見る限りだと、結構心配させたみたいだ。

「わりい、心配かけた……………」

俺はコレ以上心配を掛けまいと、酷い頭痛が続くなか、無理して体を起そうとする。

体は中々言う事を聞いてくれないが、それでも起きようとする……  
… 霊夢に肩を掴まれ、そのまま元の体勢に戻されてしまう。

「……………れいむ？」

「まだ顔色が悪いわ。もう少し横になってなさい」

「……………」

「……………」

「……………分かったよ」

霊夢の言う通りまだ体調は戻ってないし、此処は彼女の言葉に甘えさせてもらおう事にしよう。

そう考えた俺は、全身の力を抜いて、霊夢の膝を枕にもうちよつとだけ横にしてる事にした。

霊夢の膝を枕にして、宴会の喧騒に耳を傾けていると、誰かが俺達の方に近付いてくる気配がする。

一体誰が来たのかと気配の方に眼を向けると、気配がした方には一升瓶を手に持った龍神の姿があった。

「いや、先ほどはスマンかった。許せ」

「……………別に怒っちゃいけないけど、少しは加減してくれ」

「善処する」

俺の言葉に頷いた龍神は、俺と霊夢の傍に座り込み、持って来た一升瓶をラツパ飲みし始めた。

少女が一升瓶を片手にラツパ飲みつてのも、かなりシユールな光景だな。

……………まあ、少女なのは見た目だけだし、この幻想郷でそんな事を気にして居ても仕方が無いか。

「ところで龍神……………じゃなくてたつちゃん。アンタ、何しに神社に来たのよ。まさか、宴会に招待された訳じゃないでしょ？」

「なに、ちよつと竜に尋ねたい事があってな」

「……………俺に？」

龍神は霊夢の質問に答え、此処に来た目的を打ち明けた。

なんでも俺に用があって来たらしいが、一体何をしに来たのか皆目見当も付かない。

彼女の雰囲気からして、何か文句があつて来た訳じゃないだろうし、何か重要な話があつて来たつて訳でも無さそうだ。そうなるか………本当に何をしに来たんだ？

「竜よ、此処最近になつて妾の使いを名乗る者に出会わなかつたか？」

「たつちゃんの使い？ ……いや、そんな奴には会つた覚えは無いな」

「そうか。……だとすると、何処で油を売つておるんじゃ？」

「……？ 本当に何の話だよ？」

「いや、少し前にお主にある物を渡す為に使ひを出したのじゃが……未だに渡したとの報告を受けて無くてな」

龍神は俺に渡したい物があるらしいが、此処一月の間に龍神の使ひになんて会つた覚えはない。彼女が何を渡したかつたのか知らないけど、余りにも変な物だったら送り返そうかな。

「まあ、来ておらんなら後でアヤツ等に問つてみるか」

「そうしてくれ」

「うむ。……それにしても、ここ最近の神社は何時にも増して騒がしいのお」

龍神は輪を作つて騒いでいる連中を見ながら一言呟く。

輪を作つてはいるけど、それぞれが勝手に酒を飲んだり料理を食べたりしていて、何かとまとまりがない。

宴会と言つのはそう言つものだとするなら、あのまとまりの無さが正常なのかもしれないな。

「まあ、こつちも宴会が続けば騒がしくも為るわよ」



「……だからってコレは騒ぎすぎだろ」

霊夢は龍神の言葉に同意し、俺はあの騒がしい連中に呆れ果てる。正直な所、騒ぐのなら何処か別の場所で騒いで欲しい。俺は参加しないで神社でノンビリしてるから。

「なんじゃ竜？ お主は宴会が嫌いなのか？」

「嫌いじゃないが、こつも回数が多いと嫌にもなる」

俺は龍神の質問に隠す事無く、素直に自分の気持ちを打ち明けた。

「まあ、リュウの気持ちも分からなくは無いわね。流石にこの回数は異常よ」

「だろ？ 全く、この人数を集めてる奴は一体何を考えているのやら？」

「あつはつはつは！ 恐らくアレは何も考えておらんよ。ただ騒ぎたいから集めてるだけじゃ」

「……余計に性質がわりいな」

龍神はこの騒ぎの犯人に心当たりがあるのか、大笑いしながら物凄く性質の悪い事を言う。

俺はその一言に頭を抱えなくなつたが、珍しい事に霊夢がキョトンとした顔をしている。

「え、なに？ アンタ等はこの騒ぎが異変だつて言うの？」

「其処まで大事とは言わぬが、アヤツの仕業である事は間違いないな」

「俺には犯人の心当たりはないけど、特に悪意や害意は感じないから放置してた」

「……この宴会が異変だつて気が付いてたなら教えなさいよ」

霊夢は、幻想郷を包んでいる者に気が付いてなかったのか、若干怒ったような口調でそう呟いた。

俺としては、霊夢がああ霧みたいなのに気が付いてないのに驚いたけどな。

正体がなんなのか知らないけど、霧は結構分かりやすいと思ったんだが……そうでもないのか？

「まあなんにせよ、コレが異変だと分かれば私達の出番ね。早速明日から調査するわよ」

「あ、悪い。今回はパスするわ」

「……………はあ?! なんでよ!？」

俺が今回の異変解決を辞退すると、霊夢はありえないと言いたげな顔で驚きを隠わにした。

どうも霊夢の中では、俺と一緒に行動するのが当たり前になってるみたいだけど、流石に毎回は無理があると思うぞ。

「……………二人して出かけたなら、この宴会の片付けは如何するんだよ」

「……………あ」

「アイツ等、騒ぐだけ騒いで帰るから、二人して神社を空ける訳にはいかないだろ」

「ぐぬぬ……………」

俺は霊夢に不参加の訳を説明したが、眉を顰めイマイチ納得がいかないと言った顔をする

だけど、頭では宴会の後片付けをしないとイケないって分かっているんだろ。

分かっているからこそ、霊夢は顔を顰めるだけで何も言っていないんだと思う。

まあ、一緒に行つて暴れるのも悪くないんだけど……今回は諦めてもらつしかないかな。

「……仕方が無いわね。その代わり、ちゃんと綺麗に片付けるのよ」  
「何時も片付けてるのは俺だけだな」  
「うつさいわね」

俺が本当の事を言つただけなのに、霊夢が俺の頬を思いつきり引っ張ってくる。

「ひゃめろいひゃい」  
「ふふん。生意気な事を言う口はこつしてやる」  
「ひゃからひゃめろつふえ」  
「ん？ 何を言つてるのか分からないな？」

霊夢は俺の言葉を見殺して、俺の頬を好きなように弄ってくる。なんとかして彼女の手を退けようとするが……自分の頬を余計に引っ張るだけに終わった。  
その所為で益々調子に乗つた霊夢は、さっきよりも遠慮無しに俺の頬で遊び始めた。  
このままだと不味いと思つた俺は、霊夢の脇腹に手を当てて、思いつきりくすぐる事にした。

「ちょ、まつ……あははははははッ！ ごめん、私かわるか  
つた。だからそれは止めて」  
「しよれふあら、ふえをはなふえ」  
「離す！ 離すから……あははははははははッ！」

俺のくすぐりに参つた霊夢は、やっと頬から手を離してくれた。  
もう一度弄られても堪つたもんじゃないので、俺が体を起そうとし

た瞬間。

「宴会でイチャついてんじゃねえ！ このバカツプルが！！」  
「ぬがッ?!」

何処からか投げられた酒瓶が顔面に命中し、俺の意識がまた遠のき始めた。

視界が暗くなっていく中、俺が最後に聞いた言葉が

「今のはお主らが悪い」

龍神の余りにも冷やかな一言だった。

俺が一体何をしたってんだよ、誰か説明してくれ……。

第三十八話 終わらない宴（後書き）

……なんか最後は霊夢っぽくない気もするけど、まあ良いか。

### 第三十九話 宴会二日前

「それじゃ、私は聞き込みに行ってくるから後片付け宜しくね」  
「あいよ」

昨日の宴会から一夜明け、霊夢は昨晚言っていた通り一人で異変解決に出かけた。  
霊夢が出掛けるの見送った後、俺は後ろを振り返り今の境内の状態を確認する。  
境内は、宴会に集った妖怪たちが飲んだ酒の空瓶や、勝手に食べ物の残りなどが辺りに散乱していた。

「……………はあ」

昨日の宴会は、殆ど気絶していたからあんまり記憶にないけど……  
酷い荒れようだな。  
幻想郷は酒飲みが多いから、食べ物の残りよりも空瓶の方が多いよ  
うな気がする。  
これを一人で片付けると為ると……………二・三時間は掛かりそうだな。

何時もの掃除も一緒にやるから、時間はもうちょっと掛かるかもしれないか。

「まあ、頭でゴチャゴチャ考えていても仕方が無い。さっさと取り掛かるか」

独りそう呟いた俺は、まずは辺りに転がっている空瓶の回収から始める事にした。

空瓶の回収が終わったら残り物の処分でもするか。……………でも、こう

いう残り物の処分って何時も如何するかで頭を悩ませるんだよな。そこら辺の地面に埋めると為ると、山にいる野犬なんか掘り返したりするだろうし、なんかの方法で肥料にしようにもウチには畑がない。となると………やっぱり滅却処分にするのが一番良いのかな？正直な所、こんな事に能力を使いたくないんだが………仕方が無いか。頭の中で色々と思痴りながらも、テキパキを境内の片付けを進めていった。

………  
………  
………

境内があらかた片付いた頃には、日も大分高くなっていた。

霊夢が、朝食を食べ終わった後に出かけた事を考えると、やっぱり三時間くらいは掛かってるか。

独りで効率よくつてのにも結構限界があるし、今回は何時もよりも荒れ方が酷かったからな。

全く、どれだけ騒げばこんなにも汚く出来るんだか………。

「これで終わりっつと」

俺は照明として出していた灯籠を倉庫に片付け、境内の掃除をやつと終わらせる事が出来た。

あらされ放題だった境内も、漸く何時もの綺麗な状態に戻り、いつ参拝客が来ても問題ない様な状態になる。

……まあ、参拝客なんて殆ど来ないから多少汚くても問題ない気がするけどな。

でも、そう言っただけで掃除に手を抜くと、どっかのバカが汚しても良いと勘違いするからな、掃除の手を抜くわけにも行かないんだよ。

「さて、この後は何をしようかな？」

境内の掃除を終えた途端、今日の仕事がなくなってしまった。

何時もならこの後、霊夢と昼食を取って、食休みを挿んでから二人でお茶を飲んだりするんだけど……今日は無理だな。

香霖堂に卸すための道具を拾いに行くつても良いけど、常に道具が落ちてる訳じゃないし、ほんの二日前にも拾いに行ったから今行っても良いのではないか。

「……となると、本当にすることが無いな」

俺は神社の縁側に腰を下ろし、空を見上げて小さくぼやいた。

見上げた空は快晴で、時期的にはもう夏に為るから段々と気温が高くなり始めた気がする。

そろそろ本格的に暑くなってくるから、何か熱さ対策を考えたほうがいいのか？

……対策と言っても魔法で作った氷を小さく砕いて、口に含むぐらいの事しか思い付かないけどな。

「あーそーいや、去年の夏はレミリアの所為で涼しかったんだよね」

夏と言う単語から、去年の異変の事を思い出し、誰に言う訳でもなくそつ口に出した。

去年はあの霧の所為で涼しかったから、ある意味では初めて幻想郷



の夏を過ごす事に為るのか。

……まあ、だから如何したって話に為るんだけどな。

話す相手が居ないからか、どんなに話題を思い浮かんでも直ぐに自己完結してしまう。

あーだこーだ考えても、独りだと浮んできた話題を広げていく事なんて出来るわけがない。

何時もなら霊夢が話を聞いてくれたから、こんなにも暇を持て余す事なんてなかったのに……。

「……………」

独り言を言うのも飽きた俺は、青い空を見上げて暇を持て余していた。

何かする事はないかと考えるものの、境内の掃除は既に終わらせているし、今から洗濯をするってのもなんか気が引ける。

……てか、洗濯は霊夢がする事になってるから、俺が勝手にするとアイツに怒られるか。

神社本殿の掃除は……前にしたから今はまだしなくても良いか。

母屋の方も目立ったゴミはないし、今日しなくても明日すれば問題はないだろう。

そうなると……本当に今日はすることが無いな。

誰かが遊びに来てくれれば良いんだけど、知り合いは軒並み昨日の宴会に参加してたから今日来ることは無いかな。

「……………あゝ暇だ〜」

こんなにも暇になるのなら、やっぱり霊夢と一緒に行動すれば良かった。

物凄く今更な後悔が頭を過ぎるが、そんな事を考えてもこの暇が解消される訳じゃない。

そんなを考えるよりも、午後を如何過ごすか考えたほうが良いだろ。

「……………することも無いし、境内で剣の鍛練でもしてるかな」

神社に居ながら暇を潰せる方法を思いついた俺は、先に昼食を取る事にした。

霊夢は弁当を持って出かけたから、お昼を食べに神社に帰ってくることはない。

そうになると、自分で飯を作らないといけないのか……。まあ、残っている材料で適当に作るから良いかな。

確か、夏野菜や昨日の宴会で使わなかった食材が幾つか残ってたよな。

傷む前に使わないと勿体無いし、今日の昼食と晩飯の時に使い切ってしまうか。

そんな事を考えつつ、俺は母屋にある台所へと向かった。

……………  
……………  
……………

昼食を食べ終わり、使った食器も洗い片付けた俺は、自室に置いてある剣を取り出し、神社の境内で鍛練を始めた。

人の来ない事で有名な神社だが、敷地の面積はそれなりに広いほうだろう。

コレだけの広さが有れば、魔法の試し撃ちは無理だが、剣を思いっきり振り回すには十分だ。

普段から此処で鍛練できれば良いんだけど、あんまり派手な事をすると掃除が大変な事に為るし、霊夢にもどやされるんだよな。

流石に怒られるのは好きじゃないし、片付けをするのは間違いない。俺だから、あまり境内で鍛練をする事は無い。

……まあ、妖夢が来た時は確実に境内が滅茶苦茶になる上に、霊夢にも怒られるんだけどな。

「さつて……始めるかな」

手を上に伸ばし軽く背伸びした俺は、まず始めに素振り千本からはじめる事にした。

朝早くから始めるのなら二千本くらいは行けたが、既に昼を過ぎているし、ついさつき食事を取ったからまずはこの位から。

「……………」

剣を振り上げた時に一歩下がり、振り下ろすと同時に一歩前に出る。ただそれだけの動作を、俺は夏の暑さなど気にも掛けず、無心になつてこなしていく。

剣を振り下ろした時の風を切る音が耳に残るが、回数が30を越えたあたりからは気に為らなくなる。

時折り生ぬるい風が吹き抜ける中、俺は時間を忘れて、黙々と剣を振るい続けていた。

素振りの回数が大体500を越えたあたりから、突然誰かの視線を感じた。

別に視線なんて無視でも良かったんだけど、万が一にも客だったら、このまま素振りをする訳にもいかない。

そう考えた俺は、素振りの途中ではあるけれど、手を止めて視線の方を振り向く事にした。

「あら、もう止めるの？ あと何回続けられるのか興味あったのに」  
俺が振り向いた先に居たのは、紅魔館のメイド長こと『十六夜 咲夜』その人だった。  
何の用で来たのか知らないけど、とりあえず客じゃない事だけは分かる。

「……なんだ、咲夜か」  
「なんだとは随分なご挨拶ね」

俺の明らかに落胆した返事に、咲夜は笑いながら青筋を浮かべる。  
流石に言い方が悪い様な気もするけど、相手が咲夜なら態々素振りの手を止めなくても良かった気がするな。

「まあ良いわ。ところで、霊夢の姿が見えないけど外出してるのかしら？」

「嗚呼。アイツは異変の聞き込みに行ってるから、今日は帰って来ないと思うぞ」

「……貴方達が一緒に行動しないなんて、珍しい事もあるのね」  
「俺達だって常に一緒に居る訳でもないぞ」

咲夜が言って来た一言に、俺は眼を細めながら反論する。

彼女の中で俺達のことを如何思ってるのか知らないけど、少なくとも四六時中一緒に居ると思われてるみたいだな。

確かに一緒にいる時間の方が長い気もするが、俺にも霊夢にもプライベートな時間はあるぞ。

……まあ俺の場合は、釣りをするか、剣の鍛練をするか、道具を集めるかぐらいだけだな。

「そんな事より、さつき異変の聞き込みに言ったって言ったわね」  
「嗚呼」

「それってもしかして、此処最近の宴会の事を言ってるの？」

「そうだけど……気が付いてたのか？」

「いいえ。ただ回数が多いな〜って思っていただけよ」

「……随分と暢気だな」

咲夜の一言を聞いて、俺は苦笑いしか出てこなかった。

「あの宴会が異変だったなんて、全然気が付かなかったわ」

「まあ、特に害がある訳でも無いからな。気が付かないのも仕方が無いか」

「でも、霊夢が動いたと為ると今度の宴会は中止かしら」

「……まだやる気だったのかよ」

「もう習慣にみたいになってるからね。魔理沙がまた声を掛けそうな気がするけど」

「いや、魔理沙じゃなくて別の奴に言ってるんだよ」

「……？」

俺の言っている事が理解出来ないのか、咲夜は不思議そうに小首を傾げた。

まあ、あの宴会が異変だと理解出来なかったみたいだし、俺の言っている事が理解出来ないのも無理ないな。

多分レミリアとかなら気が付いてると思うけど、動く気配もないし霊夢に頑張ってもらおうか。

「ところで、咲夜は何の用で此処に来たんだ？」

「お嬢様から霊夢に言伝を預かってたのよ。でも居ないんじゃない、日を改めるしかないわね」

「ちなみになんて内容だ？」

「？何時までも彼に甘えてないで、早く何とかしなさい？」

「……あゝつまり、早く宴会を止めるって言いたいのか」

「貴方の話を聞く限りだと、そうなるのかしらね」

レミリアのなんとも分かり辛い伝言に、もう少し言い方があっただとツツコミを入れたくなった。

妖怪退治は確かに霊夢の仕事だけど、その言い方はないだろ……。

「霊夢も此処に居ないし、私はもう帰るわね」

「もう帰るのか？ お茶くらい出さずぞ」

「私も暇じゃないの。それじゃあね」

「またな」

言いたい事を言った咲夜は、ノンビリする暇もなくそそくさと帰って行った。

彼女が帰ったのを見届けた俺は、中途半端のままに止めていた素振り再開する。

500から数え始めるのもアレだし、此処は0から始める事にするかな。

第三十九話 宴会二日前（後書き）

萃夢想は他の異変と比べて短くなりそうです。  
なにせ起こっているのが只の宴会ですからね。

## 第四十話 宴会前日 その一

夏らしい青空が広がる今朝。

今日も霊夢は、長々と続く宴会を終わらせる為に朝早くから出かけて行った。

俺は何時もの様に神社の境内を掃除しつつ、この後の予定なんかを考えている。

昨日は剣の鍛練をしていたけど、今日は天気が良いし、何処かに釣りをしに出かけるかな。

俺が居ない間に客が来たら困るし、賽銭箱の所に紙でも張っておくか。

……まあ、客が来るとは思えないけどな。人が来ない事で有名な神社だし。

居候の身分で随分と酷い事を思いつつ、境内の掃除をしていると、朝早くから妖夢が神社にやって来た。

「お早う御座います、リュウさん。では、早速始めましょう」

妖夢は挨拶をするなり、いきなり背中の中長刀を抜いて構えてきた。何も知らない者からみたら、朝早くから物騒な光景だと思っつかもしれないが、俺からしたら既に見慣れた光景だったりする。

「やれやれ、またか……」

昨日はやって来なかったから、恐らく今日は来ると思っていたが……まさか本当に来るとはな。

俺は溜息を一つ吐いて、神社の本殿前に行き、賽銭箱の上に置いて



おいた剣を手取る。  
掃除に使っていた箒を邪魔に為らない所に置き、境内に戻り、妖夢の正面に立ち鞘を抜いた。

「今日こそ貴方に勝ってみせる」

「……毎度の事だけど、よく飽きないよな」

「剣の道に飽きるなどと言う事はありません」

「……あっそう」

妖夢は真剣そのものではあるものの、俺は今一つやる気が出てこないでいた。

別に戦うのが嫌いと言う訳じゃないが、戦闘狂と言う訳でもない。

戦えば彼女の技を盗めるんだけど、流石に週に4・5回も戦っていたら嫌気だつて差してくる。

せめて週一のペースで挑みに来て欲しいんだが、向こうは俺の都合などお構い無しに来るんだよな。

「はあ……」

「なんですか？ そのやる気のない態度は。もっとシャキツとして下さい」

俺のやる気のない態度に、彼女はしかめっ面になり不快感を顕わにする。

確かにこれから戦おうというのに、相手がやる気なしでは不快になつても仕方が無い。

……でも、少しはこっちの身にもなつて欲しいものだ。

「まあ、口で言つて分かる相手なら苦労しないか」

俺は小声で愚痴を零すものの、一旦瞼を閉じ、深呼吸をして気持ち

を入れ替える。

深呼吸をすると、さっきまで影も形もなかったやる気が少しずつ湧き上がってきた。

やる気が十分に漲ったところで、俺は瞼を開け、剣を握り締める。

「……行くぞ、妖夢」

「はいッ！」

俺達は同時に体勢を整え、何時でも相手に向かって駆け出せるように構える。

お互いに相手の出方を窺いつつ、攻め込むタイミングを見計らう。境内には小鳥の囀りすらも消え去り、静寂だけがこの場を包み込んだ。

「……………」

「おっす、遊びに来たぜ」

突如聞こえてきた、割りと感じ覚えのある暢気な第三者の声。

「……ッ！」

その声を合図に、俺と妖夢は相手に目掛けて同時に駆け出した。

俺達は同時に駆け出した筈なのに、間合いを詰めるのは妖夢の方が速かった。

相変わらず速さでは彼女の方が上だが、こつ何度も剣を交えていれば振り下ろすタイミングを覚えてくる。

「ハアッ！」

「オラアッ！」

俺は妖夢が剣を振り下ろすのに合わせて、剣で彼女の胸を薙ぐように振り払った。

同時に振られた剣は、お互いが交差する地点でぶつかり合うが、一撃の威力では俺の方が上。

元々妖夢の体重が軽めなのか、こう言っぶつかり合いで彼女に競り負けた事は一度もない。

案の定、今回も力負けした妖夢が剣の勢いに押されて、後ろの方に吹き飛ばされる。

彼女が後ろに吹き飛ばされたのに合わせて、俺は直ぐに剣を脇腹の辺りで構え、一気に間合いを詰める。

俺が攻め込むのを見て、妖夢も直ぐに体勢を整えて、俺の上を飛び越えるようにして回避しようとする。

だが、吹き飛ばされるのとはほぼ同時に動いた俺の方が速く、妖夢に完全に回避される前に斬り上げ、走り抜ける事が出来た。

「……」

俺が斬り抜けると、妖夢は今後は上へと吹き飛ばされる。

俺は素早く後ろに振り返り、彼女が地面に落ちてきたところに合わせて、背後から突き刺しに行く。

タイミング的に、今から回避するのはまず無理だと思っていたが、妖夢は腰に差している短刀を抜いて、無理やり体を一回転し、短刀で俺の突きを弾いた。

突きを弾かれ、体勢が崩れたところを狙って、空中で立て直し地面に降りた妖夢が、二つの剣を交差させて至近距離で十字の斬撃を飛ばしてきた。

飛んでくる斬撃を防御しようとも思ったが、今の状況から防御するにはタイミングが悪すぎる。

そう判断した俺は、多少のダメージを覚悟しながら後方に跳び、距

離を取る事にした。

後ろに跳んで直撃は避けたものの、放たれた距離が近かったから多少のダメージを受けてしまった。

ダメージを受けたとは言え、直撃はしていないからこの程度なら許容範囲だろう。

自己分析を終えた俺は、剣を握り直し再び彼女と対峙する。

向こうも同じ様に剣を握り直し、何時でも攻め込めるように体勢を整えていた。

妖夢は攻め込むタイミングを見計らっているようだが、俺は彼女に向かつて真っ直ぐに突っ込んで行く。

俺のこの動きは予想していなかったのか、妖夢の反応は若干遅れるものの、直ぐに持ち直して迎撃できる様に構える。

ある程度距離を詰めた俺は、自分の間合いの一步手前でわざと上段から剣を振り下ろす。

妖夢は今の攻撃が当たると思い、長刀で防御しようとするが……間合いの外からの攻撃が当たる事はなかった。

剣を下まで振り下ろした俺は、間合いを更に一步踏み込んで、上段を防御してがら空きに為っている妖夢の腹を下から突き上げた。

「グ……ッ」

下から搦り上げるように突き上げられた妖夢は、体をくの字に曲げながら後ろに吹き飛んだ。

俺は直ぐにでも追撃を掛けようとしたが、妖夢は空中で立て直し、長刀を鞘に仕舞いコツチに突っ込んできた。

俺が知る限りだと、あの状態から繰り出されるのは『現世斬』・『桜花閃々』・『未来永劫斬』の三つだけ。

出来る事なら『未来永劫斬』をラーニングしたいが、あの技は難しい上に、あの三つの初動が似てるから見極めがメンドイ。

弾幕ごっこなら、発動させる前に技の名前を言うから見極めが楽なんだが、今俺達がしているのは弾幕ごっこと言うよりもチャンバラだからな、初動だけで相手の技を見切るのも楽じゃない。

色々考えた結果、俺は技のラーニングも兼ねて避けることはせず防御する事にした。

コツチに突っ込んできた妖夢は、直接斬り掛かることはせず、俺の横を通り過ぎる。

その直ぐ後、妖夢が通りぬけた軌跡の上から桜色の剣閃が立ち上った。

今回は防御していたし、立ち上った剣閃は直ぐに収まったが……妖夢の攻撃はこれで終わりではなかった。

剣閃が収まり俺は直ぐに後ろを振り返ると、妖夢はもう一度長刀を鞘に仕舞い斬り込んで来る。

俺は直ぐに防御しようとしたが、妖夢はそれよりも速く俺を上空へと斬り上げた。

空へと飛ばされた俺は、空中で彼方此方から連続追撃を受けて、その場に縫い付けられたみたいに分けなくなる。

幾度もなく斬り付けられ、全身から痛みが走る中、シメの一撃として真下から斬り上げられ、俺は更に上空へと吹き飛ばされた。

天高くまで吹き飛ばされた俺は、体勢を立て直せないまま自由落下で地面に向かって落ちて行く。

俺は痛む身体に無理をさせ、地面に激突する前になんとか体勢を整える事が出来た。

無事に地面に辿り着けた俺は、先に下りていた妖夢と距離を取り、彼女に向かって無数の斬撃を一気に叩き込んだ。

無数の斬撃を同時に喰らった妖夢は、その場に倒れ伏せるが直ぐに起き上がり剣を構え直した。

「……チツ。やっぱり『せんぎり』じゃ火力不足か」

俺は妖夢がすぐに起き上がったのを見て、舌打ちをし、悪態を付いた。

前々から分かっていた事だが、あの技は広範囲に攻撃ができる代わりに威力が低いと言う欠点がある。

複数の敵を同時に相手するなら良いんだが、一対一の戦闘じゃイマイチ決定力に欠けるな。

「アレだけの斬撃を同時に繰り出せながら、そんなにも不満ですか」  
「不満かって聞かれれば……不満なんだろうな」

妖夢がなにやら不機嫌そうに聞いてくるが、俺はあの技の感じた通りの感想を述べる。

「私からすれば、其処まで自由自在に剣を操れる貴方が羨ましいですよ」

「そこは年季の違いだ」

「……リュウさんって一体お幾つなんですか？」

「さあ？ 俺も知らん」

俺はからかい半分でそう言いつつ、ちゃんとケリをつける為に剣を構える。

こっちの動作に反応して、妖夢も剣を構え何時でも踏み出せるように体勢を整えた。

タイミングを計っていた俺達は、ほぼ同時に駆け出し、最初の時みに同時に同時に剣を繰り出す。

結果も同じ様に妖夢が吹き飛ばされたが、直ぐに体勢を立て直し、今度は向こうから踏み込んでくる。

妖夢は胴を薙ぐように剣を振りぬこうとするが、俺は渾身の力を込めて上段から剣を振り下ろす。

力では俺の方が上なのは既に分かっているから、妖夢もこのタイミングで剣を振り抜くことはせず、俺の横を通りすぎるだけに止まった。

俺としては、あのまま振り抜いてくれれば剣を破壊出来たんだが……惜しいな。

内心そんな事を思っていると、妖夢は後ろを振り返りながら長刀で胴を薙ぎにくる。

俺も同じ様に後ろを振り向きながら剣を振り上げ、迫って来る妖夢の長刀を弾く。

剣を振り上げた俺と、剣を弾かれた妖夢は、ほぼ同時に剣を両手で握り締め、一気に振り下ろした。

お互いの剣がぶつかり、鏝迫り合いの状態になるが、妖夢は力負けするまえに自ら後ろに跳んで距離を取った。

後ろに跳び距離を取った妖夢は、長刀を鞘に仕舞い、再び俺に向かって突撃して来る。

一方俺は躲すことも、防御することもせず、彼女と同じ様な構えを取り、逃げる事無く真正面からぶつかりに行く。

お互いに速度を上げて相手に向かっていくが、俺は走り抜ける事はせず、妖夢との間合い数歩手前で止まり、地面を力強く踏みしめる。妖夢は俺が止まった事など気にせず斬り抜けようとするが、それよりも速く俺の剣が彼女の胴を薙ぎ払った。

「かは……」

渾身の力を込めて繰り出した一撃が見事に決まり、妖夢は剣を握り締めたまま気を失い、地面に倒れこんだ。  
俺は全身の力を抜くように息を吐き出し、剣を鞘に仕舞い、臨戦態勢を解除した。

「お、おい！ 大丈夫か妖夢？！」

いきなり聞こえてきた第三者の声に驚き、声がする方を見ると、其処には倒れている妖夢を心配する魔理沙の姿があった。

……  
……  
……

気絶した妖夢を母屋に運んだ俺と魔理沙は、何時もの様に縁側でお茶を飲む事にした。

「ほれ、何時もの茶だ」  
「ども」

魔理沙の淹れたてお茶を渡した俺は、湯のみに入っているお茶を飲んで、乾いた喉を潤した。  
ついさっきまで本気で戦っていたから、知らず知らずの内に喉が力



ラカラに渴いていたみたいだ。  
何時もと変わらないお茶なのに、物凄く美味しく感じる。

「それにしても、お前等って毎日あんな事してるのか？」

「毎日じゃない。ほぼ毎日だ」

「大して変わらねえよ」

隣りでお茶を飲んでいる魔理沙から、もっともらしいツッコミが入る。

まあ、確かにそうなんだけど……其処を認めたらいけない気がする。

「それで？ 魔理沙は朝早くから何しに来たんだ？」

「遊びに来た序でに、ちよっとした連絡だ」

「連絡？」

「明日の夕方からまた宴会をするから、準備宜しく！」

「今すぐ帰れ」

魔理沙は物凄く良い笑顔で、俺にとって物凄く嫌な連絡をしてきた。もう宴会に参加したくない俺は、つい面と向かって帰るようになんて言ってしまった。

「来たばっかなのに、帰れはないだろ」

「それは悪かったな。でも、宴会は嫌だ」

「聞く耳持たないぜ」

「……このヤロウ」

「わたしは女だ！」

「そう言う事じゃねえだろ……！」

俺と魔理沙は、宴会をするしないで口論になるが……最終的には、俺不参加と言う形で宴会をする事になった。

それで気を良くした魔理沙は、お茶を飲み終わったと同時に、他の連中に声を掛けに何処かへと飛び去って行く。

俺はその様子を遠めで見ながら、その内お酒の飲みすぎで死ぬんじゃないのかと、そんな事を考えてしまっていた……。

第四十話 宴会前日 その一（後書き）

リュウが妖夢の名前を知ったのは、彼女が博麗神社に来るようになった直後です。

彼女からしたら、何時までも？半人前？だなんて呼ばれたくないでしょうしね。

## 第四十一話 宴会前日 その二

俺との戦いで気を失った妖夢は、正午近くになってからようやく目を覚ました。

トドメの一撃は確かに強力だったかもしれないが、幾らなんでもコレは寝すぎだと思う。

博麗神社に来たのが八時ごろだから、最低でも三時間くらい寝ていた事になる。

なんでこんなな寝ていたのか気に為った俺は、妖夢に前日に何をしていたのか尋ねてみた。

「別に大したことはしてませんよ。……強いて言うなら、此処最近の宴会の疲れが出たのかもかもしれませんね」

「……そんな妖夢に嫌なお知らせだ。明日の夕方にも宴会やるってさ」

「またですか?!」

「文句は俺じゃなくて集めてる奴に言ってくれ」

俺の知らせを聞いた妖夢は、心の底から出て来たような盛大な溜息を吐いた。

此処最近の宴会に嫌気が差していたのが、俺以外にも居たのに喜びながら、彼女に心の底から同情した。

まあ、霊夢が動いているから、この宴会騒ぎも明日で最後に為るだろう。

妖夢にその事を話しつつ、もうお昼時なので彼女の昼食をご馳走する事にした。

「……で、焼き魚定食ですか」

「魚は焼くだけで良いし、汁物は朝のが残っているからな」

「晩御飯は如何するんです？」

「妖夢が帰ったら釣りに行く心算だから、それで適当に作るさ」

「……昼と夜で魚ですか」

「何を言う、朝昼晩の三食だ！」

「威張る事じゃないですよ、ソレ?!」

威張る心算はないが、食事は基本的に霊夢が作ってるし、俺もそんなにレパートリーがある訳じゃないから、如何しても簡単なモノになりがちなんだよ。

今回みたいに霊夢がいない事を考えて、もうちょっとレパートリーを増やしたほうが良いのかな？

そんな事を考えつつ、俺達は漫才の様なやりとりをしながら、少々賑やかに二人で昼食を食べた。

……

……

…

昼食を食べ終えた後、妖夢はお腹を落ち着かせて直ぐに帰って行った。

コレ以上居ると、お昼の仕事に差し支えるとか言っていたが……そんな事を言うくらいなら、毎日のように神社に来なければ良いと思っただがな。

妖夢は宴会の疲れが出たと言っていたけど、疲れの原因はこの剣術勝負なんじゃないのか？

本人に直接言っても否定されそうだが、俺の考えは概ね当たっているような気がする。

妖夢が帰ったのを見送った俺は、使った食器を片付けた後、予定し

ていた通り釣りに出かける事にした。

今回の釣りポイントは、『霧の湖』と『妖怪の山』の間に流れる川湖だと中々魚がかからない上に、釣れる魚が大型魚ばかりだから二人で食べるには少々多すぎる。

山の方で釣りをしたいけど、あまり近付きすぎると山の妖怪たちに襲撃される恐れがある。

妖怪に負ける気はないんだが、無闇に山の連中に喧嘩を売りに行く心算もない。

これ等の理由から、今回は二つの中間に存在する川で釣りをする事にした。

「さうって、今回は何が釣れるのやら」

川に着いた俺は、釣竿の準備を整えさっそく釣り針を川に投げ入れた。

二人で食べる分の魚が居れば十分だし、必要以上に釣れたら川に還す事にしよう。

…  
…

アレから時間が流れて、空の色は鮮やかな茜色に染まっている。

そろそろ良い頃合だし、今日はこら辺で神社に帰ろうかと思いつけを始めたその時、紅魔館の方から？ドッカーンッ！？と言った感じに何か炸裂する音が聞こえてきた。

物音を聞いた最初は、フランドールが癩癩を起こして暴れ始めたのかと思つたが、聞こえてきたのが屋敷の外からだった為、直ぐに違つと判断した。

もしかしたら、魔理沙が門に『マスタースパーク』でも叩き込んだのかもしれない。

一番正解に近いと思う予想が頭に浮んだけど、あの魔法にしてはなんとなく炸裂音が違う様な気がする。

「……ま、行つてみれば分かるか」

何となく気に為つた俺は、大きな音がした紅魔館の門へと向かう事にした。

距離は此処からそれほど離れていないから、十分くらいで門に辿り着く事が出来る。

好奇心の赴くままに門に近付くと……誰かにやられてたのか、門の前で倒れている門番を発見した。

倒れているのは彼女だけで、紅魔館の門が無事なところを見ると、どうやら魔理沙のマスパを受けたわけじゃないみたいだ。

他に大きな損傷もないし、侵入者は見事なまでに門番だけを倒して行つたらしい。

「……何か面白い事でもあるかと思つたが、この程度かツマラン」

「いきなりやつて来て、それはないんじゃないですか?!」

「あ、生きてた」

「最初から生きてますよ！！」

俺の辛辣な一言が耳に入った門番は、いきなり身体を起こしてツッコミを入れて来た。

こうしてツッコミを入れる気力があるところを見ると、見た目よりも丈夫に出来ているみたいだ。

「それで如何したんだ門番？ また魔理沙にやられたのか？」

「今回は魔理沙じゃなくて、霊夢にやられました。……あと、私の名前は紅 美鈴です」

「はいはい。……それにしても、霊夢が紅魔館を襲撃なんて珍しい事もあるもんだな」

「そんな暢気に言っただけで彼女を止めてくださいよ。霊夢を止められるのは、リュウだけなんですから」

門番から変な頼み事をされるが……門の番人としてそれで良いのだろうか？

あと、？霊夢を止められるのが俺だけ？ なんじゃなくて、？俺を止められるのが霊夢だけ？ が正しい。まあ、そんな事を門番が知る訳ないか。

「……そろそろ晩飯の時間だし、様子見がてらお邪魔するか」

「では、中へどうぞ〜」

霊夢にやられてやる気がなくなったのか、門番は何の警戒もせず俺を通してくれた。

門番としてそれで良いのかと思いつつ、俺は門を潜り、紅魔館の庭に入る。



庭は何時もの様にキチンと手入れされているが、時折り札や銀のナイフが上から降ってきて、少々物騒な環境になっている。

振ってくるナイフを避けつつ、屋敷の上部分を見上げてみると、大きな時計台の所で霊夢と咲夜が弾幕ごっこをしている光景が眼に入った。

如何やら飛んでくる札とナイフは、二人が放った弾幕が弾かれたときに出来た流れ弾のようだ。

流れ弾の札は力なく舞うだけだからマシだけど、ナイフの方は結構な速度で飛んでくるから、かなり危ないな。

……いや、妖怪や妖精からしたら霊夢の札の方が危ないのか？ 別にどっちでも良いんだけど。

「さつさとあの二人を止めるか」

俺は鞘から剣を抜き、時計台のところで戦っている二人の元へと飛んでいく。

二人は俺が傍に来たのに気が付かないほど熱中していて、俺の事などお構い無しに弾幕を放っている。

「幻葬『夜霧の幻影殺人鬼』」

「神霊『夢想封印』！」

二人は相手にトドメを差すべく、ほぼ同時にスペカを宣言した。

このままケリが付くのを見ているも良いんだけど、ただ見てるだけじゃ俺が此処に来た意味がない。

二人の邪魔をするようでかなり気が引けるが、此処は喧嘩両成敗って事で納得してもらおう。

「剣技『桜花閃々』」

スペカはないけど一応を宣言した俺は、戦っている二人の間をすり抜け、床に斬撃を叩き込みつつ一気に走り抜ける。

俺が二人の間を走り抜けた直後、斬撃を叩き込んだ地面から桜色の剣気が立ち上り、二人が放った弾幕を吹き飛ばした。

「ちよつと今邪魔したの誰……ってリュウ？ アンタ、何してんのよ？」

「それはコツチの台詞だって」

俺の存在にやつと気が付いた霊夢は、札を取り出したまま小さく首を傾げて尋ねてくる。

咲夜は普段と変わらない様子だったが、何時でも戦闘を再開出来る様に、ナイフを手放そうとはしなかった。

とりあえず、警戒を続ける咲夜は置いておいて、霊夢を説得するのが先かな。

「霊夢、そろそろ晩飯の時間だから帰るぞ」

「確かにそんな時間ね。でも、私はレミリアに用があるから先に帰って良いわよ」

「いや、レミリアは犯人じゃないから」

「なんでそんな事が言えるのよ」

霊夢は俺の言葉が信じられないのか、怪しむような視線でコツチを見てくる。

確かに宴会に来る連中なら、怪しいのはレミリアかあの亡霊姫くらいだ。

霊夢がああの吸血鬼を怪しむのも分かるけど、ちよつとそれだと考えが足りないかな。

「本当にレミリアが犯人なら、とっく俺が文句を言ってるに決まっ

てるだろ」

「……………それもそうね」

「それに俺は、あの時？犯人に心当たりはない？って言ったんだぞ？俺の知り合いが犯人つてのは考えにくいだろ」

「むう。其処まで言われると説得力があるわね」

俺の説明に納得してくれた霊夢は、一度頷いて漸く札を懐にしまっ  
てくれた。

それを見た咲夜も、完全ではないにしろ警戒を緩めてくれた。

俺も剣を鞘に仕舞って、何時でも帰れるように準備をしておく。

「それじゃ咲夜。私たちもう帰るわ」

「いきなり押し掛けて来たくせに、随分な言いようね」

「ソレに付いて悪かったわね。……………それじゃ行くわよりユウ」

「……………霊夢、実は謝る気ないでしょ」

「ええ」

どう見ても喧嘩を売っている様にしか見えない発言に、咲夜は霊夢  
に向かって幾つものナイフを投げつけてくる。

俺は慌てて霊夢の手を取り、咲夜から逃げるように急いで飛び去っ  
ていく。

飛んでいる最中も、後ろから銀のナイフがコツチに飛んできて、何  
時当たるのかと内心ではビクビクしていた。

「なんであのタイミングで喧嘩を売るんだよ」

「いや、なんとなく？」

「……………そんな理由で喧嘩を売らないでくれ。友達なくすぞ」

「私はアンタがいればそれで十分よ」

「でも、仲間が居たほうがなにかと楽しいだろ」

「……………そうじゃないでしょ、このニブチン」

「…？」

なにやら良く分からない理由で、霊夢に呆れられた気がするけど…  
…今は気にしないでおう。

今は一刻もはやくこの場から逃げないと、咲夜にまた串刺しにされかねない。

俺はその思いから、霊夢の手を話さないようにして、一心不乱に紅魔館を後にした。

第四十一話 宴会前日 その二（後書き）

気が付いたら総合評価が1000になってました。

こんな趣味全開の小説の評価が1000になって嬉しい反面、最近のイマイチな出来に申し訳ない気持ちで一杯です。

元々大した出来じゃないのに、リュウが裏方に回ってから更にイマイチに為った気がする。……小さな百鬼夜行との戦いは気合入れて頑張ろう。

第四十二話・前編 宴会当日（前書き）

書いていたら話が長くなりそうだったので、今回は前後編に分ける事にしました。

なので今回はただの前フリです、期待しないで下さい。

## 第四十二話・前編 宴会当日

宴会当日の今日は、俺も霊夢も朝から宴会の為の準備で追われていた。

二日前に片付けた灯籠を引っ張り出したり、地面に引く敷物を捜したり、今回集る連中の食事を買い出しに行ったりと様々だ。

魔理沙の奴が一体何人に声を掛けたのかしらないけど、今までの規模を考えるとそれなりに多いんだろうな。

その事を考えると気が滅入ってくるが、今回は参加しないんだし、多少は気楽ではあるか。

今夜も騒がしくなりそうだなと思いつつ、境内の方に顔を出してみると……何故か夕方と夜が同時に存在している不思議な空間になっていた。

「……なんだこりゃ？」

「あら、来ちゃったの」

この不可思議な状況に驚いていると、何時もの服とは別の服を着た八雲紫に声を掛けれる。

正直、何時の間に神社にきたのか問い詰めたかったが、霊夢曰く神出鬼没らしいからここはグッと我慢しよう。

「今、へんな事を考えなかった？」

「気のせいだ。……それより、この状況は如何なってるんだ？」

「如何って、私が境界を弄っただけよ」

「そんな事は分かってる」

夕方と夜が同じ時間に存在するなんて事、境界を操る事が出来るコイツ位しかないだろう。

「俺が聞きたいのは、なんで境内がこんな状況になっているのかって事だ」

「ちょっとした演出よ。折角の宴会だもの、この位の遊び心があっても良いでしょ？」

「演出って……相変わらず良く分からない奴だな」

「この世には明確な答えが存在しない問もあるわ。中には全ての問に答えがあると言う者もいるでしょうが、私としては混沌としていた方が好きよ」

「俺が言いたいのはアンタの事だ」

「あら、そうなの」

俺がいぶかしむ様に彼女を見るが、向こうがそんな視線に構う事無く楽しげに微笑むだけ。

彼女のそんな様子を見ると、本当に意味もなく腹が立つてくる。五月の一件以来、俺の中では、彼女の事を幻想郷最大の敵って認識があるから、出来る事ならこうして話をしていたくもない。

正直なところ、今すぐにも帰って貰いたいんだが……なんとかして追い出せないか？

「……そんな親の仇を見るような目で、私を見ないで欲しいんだけど？」

「俺に親なんていないぞ」

「そう言う事じゃないわよ」

手元に鏡がないから、今どんな目付きなのか分からないが、相当厳しい眼になっている様だ。

親の仇を見る眼がどんなのか知らないけど、俺からしたら彼女は敵



そのものだから、多少は厳しくなっても仕方が無いと思う。  
もしかしたら、無意識の内に殺気を出してるのかも知れないが……  
別に問題はないか。

むしろ、今の内に叩きのめして、此処に顔出しできないようにした  
方が良いのかも知れないな。

本格的に倒す算段を考え始めたその時、何もない空間にスキマが  
出来、其処から服がポロポロになった霊夢が放り出された。

「いった〜。あのちびっ子、何時か痛い目に遭わせてやる!!」  
「……なにしてんだ霊夢？」

突然の霊夢の出現に、さっきまで考えていたことが一気に消し飛ん  
だ俺は、驚き半分呆れ半分と言った感じで彼女に声を掛けた。

すると、霊夢は俺が此処に居るのは思ってた居なかつたのか、コッ  
チを見ると眼を丸くして驚き、ポロポロになった服の露出を隠すよ  
うに身体を小さくした。

「り、リュウ?! アンタ、なんで此処に居るのよ!？」

「なんでって、此処は博麗神社だし、俺が居ても不思議じゃないだ  
ろ?」

「いや、まあそうなんだけど……って、頼んでた事は終わったの?  
!」

「嗚呼。買い物も済ませたし、食器も出した。後は料理を作って、  
灯籠に火を燈すくらいだ」

「そ、そう。なら、直ぐに着替えて料理を作るわね!」

顔を若干赤くした霊夢は、手で服の破れた部分を隠しながら、慌て  
た様子で神社へと駆け込んでいく。

俺は、何を慌てているのか分からないまま、その様子を見ている事  
しか出来なかつた。

「……あいつ、何をそんなに慌てるんだ？」

「乙女心よ、察しなさいな」

「……分らん」

「あらあら。あの子も本当に面倒なのに惚れたのね」

「五月蠅い」

八雲紫が何を言いたいのか理解出来なかったが、なんとなくバカにされている事は分かった。

俺は彼女を睨みつけた後、叩きのめして追い出そうとも考えたが……

……何となく気がそがれてしまう。

気が付いたら境内の境界も元に戻っていたので、今回は彼女を見逃す事にした。

……  
……  
……

夕方から大分時間が経ち、神社の境内は魔理沙が集めた妖怪たちで賑わっていた。

集った連中は、各々が持ち寄った酒を飲み交わしたり、作っておいた料理に舌鼓を打ちつつ、それぞれが好き勝手に宴会を楽しんでいる。

俺はそんな連中とは別に、宴会に参加せず、独り自室でだらけてい

た。  
境内から宴会の賑やかな喧騒が聞こえてくるが、俺に取っては如何でも良い事だ。  
むしろ、良くこんなペースで騒げるなど呆れつつも感心するくらいだ。

「おい竜、居るか」

「ん？ その声は龍神か？」

「だから、たっちゃんと呼ばんか！」

いきなり部屋にやって来た龍神は、呼び方一つ間違えたくらいで、持って来た酒瓶を俺に向かって投げつけてきた。

今度は、前みたいに顔面に喰らう事はなかったが……瓶の中には酒が結構な量が入っていて、それなりの重さがある。

正直、こんなのを顔面で受けていたら、きっと鼻の骨が折れていたと思う……。

「危ねえな、少しは考えて投げろよ」

「喧しい。……それよりも、霊夢が自棄酒しておったぞ」

「自棄酒って……」

龍神の話聞いて、なんとなく霊夢が独り荒々しく酒を飲んでいる姿を幻視した。

夕方に誰かと戦って負けたのが原因だと思うが、珍しく無茶な飲み方をしてるなアイツ。

どの位のペースで飲んでるのか分からないけど、きっと明日は二日酔いで倒れてそうだな。

「全く、お主が宴会に参加しておれば、あの様な飲み方はせんだろ  
うに」

「えっ？ 霊夢の自棄酒は俺の所為なのか？」  
「七割方はな」

全く持つて身に覚えが無いが、龍神が言う以上は嘘と言う事はないと思う。

だとすると…… 霊夢はなんで自棄酒をしてるんだ？ 理由が分からないんだが？

「……その様子だと理解出来ておらんな」

「嗚呼」

「はあ。……まあ、お主らしいと言えばらしいか」

「なんで其処で呆れられないといけないんだよ」

「自分の胸に手を当てて、良く考えてみるんじゃな」

「……？」

俺は首を傾げつつ、龍神に言われた通り自分の胸に手を当てて、彼女に呆れられる理由を考えてみる。

幾つか考えが浮んでくるものの、呆れられる理由としてはイマイチなものばかり……と言つか、根本的に的外れな気がして為らない。もっと別の見た方をするべきなんだろうけど、幾ら考えても答えらしい答えが思い浮かばない。

「うゝむ……」

「お主の頭で幾ら考えても答えは浮かんでこんよ。それよりも頼みがある」

「何か酷い事を言われた気がするが……一体なんだ？」

「ちよつと呼んで来て欲しい奴がおつてな、お主に呼びに行ってもらいたいんじゃ」

「別に構わないが……何処に居るんだ？」

「なに、直ぐに其処に居るわ。……では、頼んだぞ八雲の」

「分かりました」

あまり聞きたくない奴の声が聞こえたと思うと、俺の足元にスキマが出来、そのまま下へと落とされてしまう。

咄嗟に上に飛んで逃げようとしたが、真上から俺の愛剣が落ちてきて、それを顔面で受け止めてしまう。

その時の衝撃で力のコントロールが乱れ、俺は真っ逆さまに下に向かって落ちていくのだった……。

「……行つたな」

「ええ、間違いなく行きましたわ」

「よっし！ 今の内に霊夢をからかっておくか!!」

「彼が帰って来た時に、あの子がどんな反応をするのか楽しみですわね」

「全くじゃな」

## 第四十二話・後編 小さな百鬼夜行

顔面の痛みを堪えながらスキマを抜けると、眼下には今まで見た事無い空間が広がっていた。

いやにデカイ月に、夜の闇に包まれた山脈、地面は鏡面のように俺の姿を映し出している。

恐らく幻想郷の何処かだとは思うんだが、こんな場所があるなんて霊夢から聞いた覚えは無い。

あのスキマ妖怪が作った空間って訳でも無さそうだし、俺は一体何処に落とされたんだ？

「あつれ〜？　なんでこんな所に人がいるのよ？」

「ん？　誰か居るのか？」

この空間で声が聞こえた方を見てみると、白いノースリーブの服と青いスカートを穿き、頭の二本の角の生え、後頭部に大きな赤いリボンを着けた、金の長髪の少女が居た。

アクセサリーの心算なのか、少女の両腕と髪には【・】【・】【・】の分銅が付いていて、何かの液体が入った紫色の瓢箪を持っている。

あの角からしてあの子が妖怪なのは、理解出来るんだけど一体なんの妖怪だ？

角なら龍神の化身にも生えてるから、あの子も何かの化身……って訳でも無さそうだな。

「それで如何かしたの？　もう宴会は始まっているわよ？」

「俺は宴会に参加してないよ。此処にきたのは只のお使い……で良いのか？」

「ええ〜ッ！　なんで参加してないのよ！　リュウが居たほうが絶対に面白くなるのに！！」

「なんでって、面倒だからに決まってるだろ……って、俺、君に名乗ったっけ？」

「うんにゃ、私が一方的に知ってるだけ。なにしろ、幻想郷中を眺めてたからね」

「幻想郷中を？」

「そだよ〜」

俺の目の前に居る少女は、小さな胸を張ってなんとも不可思議な事を言ってきた。

最初は千里眼かなにかでも持つてるのかと思ったが、それだと見る事は出来ても聞くことは出来ない筈。

飽く迄もアレは、遠くまで見る事の出来る眼であって、遠くに居る相手の声までは無理な筈だ。

読唇術でも身に付けているのなら、唇の動きから言葉を読み取れるだろうが、そんな感じでも無い様な気がする。

あーだこーだと考えていたら、何時の間にか宴会の時に出る妖霧が綺麗に消え去っている事に気が付いた。

「……霧が消えてる？」

「そりゃそうだよ。だって、あの霧は私だからね」

「如何言う事だ？」

「私の能力は『密と疎を操る程度の能力』なんだ。だから、自分自身の密度を操り、霧状に変化して幻想郷中に霧散してたって訳」

「……それで幻想郷中を眺めてたって訳か。なら、此処最近の宴会騒ぎも君の仕業か」

「正解。私が皆を集めるように仕向けたのよ」

自分の密度を操って霧になったり、無意識の内に人を集めて宴会を

開かせたのは凄いと思うが……正直傍迷惑だ。どうせ宴会を開くのなら、神社以外の場所にして欲しかったもんだな。

妖怪たちが神社に集るもんだから、人里の方で『妖怪神社』とか呼ばれ始めてるつてのに……。

「ったく、なんでそんな事をしたんだ？ 何か考えがあつて……つてわけでも無さそうだな」

「酷いな。私にだつてちゃんと考えくらいあるよ」

「へえ、どんな考えだ？」

「今年の冬が長かった所為で花見の期間が短かつただろ？ 毎年楽しみにしてるのに、あんな少ししか出来なかつたのが寂しくて寂しくて……。だから、私の能力を使って皆を集めて宴会をしようと思つたわけ」

「……やっぱり何も考えてねえだろ」

「ちゃんと考えてたじゃんか」

「宴会したいだけなんて、考えて無いのと大して変わらねえよ」

とりあえず、この少女の理由は置いておくとしてだ。

結局の所、今回の宴会騒ぎの最大の原因は、あの亡霊姫が幻想郷中の春を集めたからつて事だよな。

あの異変を解決してから数ヶ月くらい経つけど、今頃になってそのツケが回ってくるとは思わなかつた。

「ところでさ、リュウは何をしに此処にきたの？」

「あつと確か、龍神の頼みで誰かを宴会に連れて来いつて頼まれたんだつたか」

「誰かつて……誰の事？」

「さあな。俺が了承した途端、スキマで此処に放り込まれたからな」

「此処には私くらいしか居ない筈だけど？」



「なら、君を連れて来いって事なんだろ」  
「……回りくどい事するねえ」

少女は龍神のやり方に呆れたのか、俺に同情したのか分からないが、吐き捨てるように一言呟いた。

妙なところで同情された気もするが、少女の意見には大いに同意する。

何も考えずに了承した俺も俺なんだが、この程度なら自分で言いに行けば良いと素直に思う。

……放り込まれてから思っても、既に後の祭りではあるんだがな。

「俺もさっさと帰りたいから、一緒に来てくれると助かるんだが？」

「うーん……折角の誘いだけど断らせてもらおうかな」

「如何してだ？ 独りで居るよりも皆で騒いだ方が楽しいだろ」

「その意見には同意するけど、此処で大人しくついて行ったら面白くないし、鬼は勝負事が大好きなんだよ」

そう言うと少女は、持っていた瓢箪を仕舞いこみ、急に戦意を漲らせ始める。

彼女の戦意に反応してか、無意識の内に剣を抜こうと柄に手を掛けている事に気が付く。

流石に抜き切ると言う事はなかったが、今の戦意と一緒に殺気も出されてたら間違いなく剣を抜いていた。

「ん〜？ 臆せずに剣を抜いても良いんだよ」

「臆した心算はないが、此処で戦う理由もない」

「そんな面倒なもの必要ないさ。言っただろ、私ら鬼は勝負事が大好きだってね」

「……持って来た酒をやるから今日は止めない？」

「お酒は貰うけど、勝負は止めない」

「……はあ、仕方が無いな」

俺は彼女に言っても無駄だと言う事を悟り、鞘から剣を抜き、頭を切り替える。

本音を言えば、面倒だから戦いたくないが……向こうがやる気な以上、コツチも全力で迎え撃つしかない。

少女は、俺が戦う氣に為ってくれたのが嬉しいのか、心底嬉しそうな表情をする。

「鬼がこの地から居なくなつて久しいけど、またリュウみたいな強者ものに出逢えるは思わなかつた。……だけど、幻想郷最強の種族は我ら鬼だつて事を教えてやるよ!!」

「最強の座とかには興味が無いな。…俺は俺の信じた道を行くだけだ」

お互いに言いたい事を言い、俺は剣を握り締め、少女は徒手空拳のまま身構える。

少女の腕は、見た目通りかなり細く、大した力はないように見えるが……最強と謳つ以上は、あの体格の見た目はあてに為らないか。

世界を旅して色んなモンスターと戦ってきたが、鬼と名乗る相手と戦うのはコレが初めて……だと思う。

記憶を失う前はどうだったか知らないけど、俺が記憶している内だとコレが初めての筈。

だからこそ手は抜かない、真正面から斬り捨てるだけだ!

「そういえば、まだちゃんと名乗ってなかつたね。…私の名前は【伊吹 萃香】。かつて【妖怪の山】を支配していた鬼たちの四天王の一人さ」

「(名乗られたら返すのが礼儀か…)知っていると思うが、俺の名前はリュウ。博麗神社の居候だ」

「……ちよつとツツコミたい所があるけど、些細な事だから別に良  
いか」

「そうしろ。一タツツコンでたら身が持たないぞ」

「なはははッ、確かにそうかもね。……それじゃ、行くよりユウ  
！」

「嗚呼、全力で来い！」

俺達はほぼ同時に駆け出し、お互いの拳と剣をぶつけ合い始める。  
萃香の拳は、コツチの予想以上に強く、俺の剣はぶつかっただけで  
簡単に弾かれてしまう。

弾かれて出来た隙を付いて、萃香は左拳で俺の腹めがけて殴りかか  
つて来る。

俺はその場で一回転する要領で拳を避け、回転の勢いを利用して彼  
女の首を斬りかかろうとする。

吸い込まれるように彼女の首へと剣が走るが、直撃する前に萃香の  
腕に阻まれ、そのまま剣ごと吹き飛ばされてしまった。

空中で体勢を立て直し、直ぐに彼女の元へと向かおうとすると、萃  
香は俺目掛けて一つの黒い球体を投げつけて来た。

それが何なのか分からない以上、真正面から突っ込むのはやめ、斬  
撃をあの黒い球体に向けて飛ばし、相殺を試みることに。

飛ばした俺の斬撃が火球に当たる直前、目の前の火球が花火の様に  
破裂し、複数の小さな火球に分裂する。

破裂した事には驚いたが、分裂した火球の飛距離は大したことはな  
く、俺の斬撃を止めるほどの物ではなかった。

飛び散った火球を切り裂き、真っ直ぐ萃香へと飛んでいくが、斬撃  
は彼女の拳一つで呆気なく壊されてしまった。

避けられるのは今までにも何度かあったが、拳だけで壊されるのは  
初めての経験だ。

斬撃に込める力の練り具合が悪かったのか、それとも只単に萃香の攻撃力が高いのか……。どちらにせよ、飛び道具に頼った戦い方じゃ少々分が悪そうだな。此処は多少の怪我を覚悟で、無理にでも接近して彼女を斬り伏せるだけだ！

そう決断した俺は、ポケットから一枚のカードを取り出し、前に掲げて宣言する。

「人符『現世斬』！」

スベカを宣言した俺は、脇腹の辺りで剣を構え、萃香との間合いを一気に詰める。

そのまま彼女の横を通り過ぎるように斬り抜けた後、俺は直ぐに体勢を整え、更に追撃していく。

左肩から袈裟斬りを叩き込み、右胸から斬り払い、彼女の胸部を剣で突き刺す。

更に右肩を切り裂き、頭から股下まで真っ直ぐに斬り付け、渾身の力を込めて胸を薙ぎ払う。

防がれる事なく叩き込んだ七連撃だったが、萃香は多少よろける程度で、膝を付かせるまでには至らなかった。

「ツウ〜。でも、まだまだアツ！」

俺の蓮撃に耐えた萃香は、お返しと言わんばかりに殴り掛かってくる。

動作自体は遅いものの、彼女が繰り出す一撃はとてつもなく重いものばかり。

剣を盾にして初撃を防ぐ事が出来たが、剣を伝ってきた衝撃で握っていた手が痺れてしまう。

その時に出来た若干の隙をつかれ、腹に強烈な一撃を貰ってしまう。

一撃を貰っただけで視界が霞んだが、なんとか意識を飛ばさずに耐える事が出来た。

俺は直ぐに反撃しようとしたが、それよりも早く萃香は持っていた瓢箪を投げつけて来た。

投げてきた瓢箪を避けようと後ろに跳ぶと、萃香はすぐさま瓢箪を手元に引き寄せ、中身を一口飲んだと思いきや、俺に向かって口から炎を噴き掛けて来る。

あまりにも突然の出来事に驚くものの、俺はその炎を切り払い、再度間合いを詰め寄り、今度は十字に斬り抜けようと試みた。

剣が萃香に当たろうとした瞬間、彼女は自分の身体を霧状に変化させ、俺の攻撃を回避してみせる。

俺は直ぐに体勢を立て直し、間合いが開く前に追撃しようとしたが

「萃符『戸陰山投げ』〜!」

萃香は能力を使って石や岩で集め、大きな岩を自分の掌の上に作り上げた。

その巨石を遠慮なく振り回し、思いつきり勢いを付けて俺に投げ付けてくる。

今から回避しても間に合わないと判断した俺は、剣で迫り来る巨石を斬り裂くことにした。

「ハアアツ!!」

裂帛の気合を込めて剣を振り下ろすが、投げ込まれた巨石は見た目以上に硬く、中々斬り裂く事が出来ない。

巨石の重さと、投げられた勢いに押されて、徐々に後ろへと押され始める。

俺は剣を両手で握り締め、足腰に力を入れて踏ん張るものの、巨石を斬り裂くどころか、勢いを止める事すら出来ないでいる。

スペカの性質だけを見れば、コレは弾幕と言うよりも単純な力押しだ。

俺のスペカも似たような奴が幾つかあるが、此処まで単純なのは数える程度しかない。

だからこそ、純粹に力押しで負けているのが悔しくて、半ば意地になってこの巨石を斬り裂こうとしている。

「……………ダアアアアアアアアツ!!!」

一呼吸おいて気合を入れた俺は、柄を力一杯握り締め、渾身の力で巨石に斬り掛かる。

俺が込めた力に共鳴したのが、以前の時みたいに刀身から鈍い光を放つ。

剣が突然輝きだすと、刀身の刃が少しずつではあるが巨石に食い込み始めた。

俺はこの気を逃すまいと、全身の力を振り絞り……………目の前から迫る巨石を真っ二つに斬り裂いた。

二つに割れた巨石は、投げられた勢いそのまま俺の横を通り過ぎ、後ろの地面とぶつかり、大きな物音を立てて崩れ去った。

「ゼエ…ゼエ…。どんなもんだ!!!」

「うへえ〜。かなりの密度で投げたのに、人の姿のまま斬られるとは思わなかったなあ」

「……………まあ、この剣じゃなかったら無理だったろうけどな」

俺は荒い呼吸を整えつつ、剣を握り直して萃香との間合いを目算で計る。

霧状に変化して離された距離は、今いる地点から大よそ10mと言

った所だろうか。

この程度の距離なら簡単に詰める事が出来るけど、さっきみたいに霧になって回避されるのはちょっと面倒だな。

確実に霧になって逃げるってなら、元の状態に戻るところを狙えば問題はないんだが……絶対に霧になって逃げる訳じゃ無いから、一度の読み間違いでまた後手に回る事になるか。

「それじゃ、続きいつくよ」

その掛け声と共に、萃香が足元の地面を思いっきり殴ると、殴られた地点からコツチに向かって地面が割れ、飛び出した岩が波の様になり襲いかかって来た。

岩は次々と向かって来るが、左右に岩が広がるわけでもなく、ひび割れに沿って飛び出してくるだけ。

俺はひび割れの射線上からずれ、飛び出している岩の横を通り、萃香に向かって一気に駆け出す。

岩を避けて間合いを詰めた俺は、彼女の首を取る心算で迷う事無く剣を振るう。

「デリヤアッ!!」

「どっせ〜い!!」

俺が剣を振るうと同時に、萃香も拳を繰り出し、また剣と拳がぶつかり合う。

結果としてはまた負けてしまったが、そんな事は気にも留めず、直ぐに次ぎの一刀を放つ。

萃香も繰り出したのとは反対の拳を出し、再度お互いの剣と拳をぶつけ合った。

「うおおおおッ!!」

「まだまだだ〜ッ!」

俺は拳に何度弾かれても、諦める事無く萃香に向かって剣を振る続ける。

そんな俺に付き合ってくれるのか、萃香も剣の刃に臆する事無く拳を繰り出す。

一撃でもまともに喰らえば只では済まない様な攻撃だが、怪我をするリスクなど顧みずにお互いの攻撃を相殺し合う。

戦いの方は弾幕ごっこの筈なのに、俺も萃香もそんな事忘れたかのように攻撃し続ける。

こうして戦っていると、あの世界で皆と必至になってモンスターと戦っていた事を思い出す。

萃香も萃香で思うところがあるのか、まともに喰らえば死にかねない攻撃を繰り出しのに、その表情はどこか楽しそうに見えた。

「萃鬼『天手力男投げ』〜!」

萃香の楽しげな表情に見ていた俺は、彼女がスペカを宣言した事に反応が若干遅れてしまう。

何が来るのか分からず、一旦距離を離そうとしたその瞬間、萃香に胸倉を掴まれて一緒に上に跳びあがった。

そのまま片手でグルグルと振り回されながら、周辺から集って来た岩や石に押し固められる。

集った岩や石の所為で身動きが取れないまま、俺は萃香に地面に向かって力いっぱい投げられた。

地面に激突した瞬間、身の周りを固めていた岩が飛散したが、ぶつかった時の衝撃と砕けた破片で大分ダメージを負ってしまった。

俺は痛む身体に無理をさせて、剣を杖代わりにしてなんとか立ち上がり、萃香を見据える。



「どつたの？ 大分ふらふらだけど、まだ戦える？」

「……さつきからフラフラのお前に心配されたくないな」

「なははははッ。私は数百年間ずっと酒飲みしてるからね、そこらの奴とは年季が違うのだよ」

「そんなお前にはこの言葉を送る。……禁酒しろ禁酒」

「なら、お返しに私も送るよ。……酒は百薬の長つてね」

色々ツツコミどころがあるが、そう言うのは一先ず置いておくことにする。

今の状況としては、さっきのスペカをまともに喰らった俺が不利つてところだな。

最初に叩き込んだ七連撃で、多少ダメージも入っているだろうが……それ以上に俺のダメージの方が多い。

コレ以上人の姿で戦うのも不利になるし、此処は変身して一気に攻勢に出るか。

そう決断した俺は、ポケットから茶色いカードを取り出し、迷う事無く宣言する。

「……地竜『バンドスナッチ』！」

カードを宣言すると、俺は足元から立ち上った赤いオーラに包まれ、中で竜人形態に変身する。

包み込んでいたオーラを吹き飛ばし、竜人の姿になった俺を見た萃香は、嬉しそうに顔を綻ばせて身震いをした。

「なんだ？ 俺がこの姿になったのがそんなに嬉しいのか？」

「ああ！ 今まで色んな妖怪や人間と戦ったけど、アンタみたいなのと戦うのはコレが初めてだからね！ これを喜ばないで、何を喜べってんだ！」

「……酒を飲んだり、宴会で大騒ぎする時だろ」

「まあ、その通りなんだけどね」

最初から隠す気がないのか、萃香は屈託のない笑顔で言い切った。

その様子に呆れて溜息を吐くが、変な駆け引きがない分かなり気楽ではある。

俺は一旦眼を閉じて気持ちを切り替え、深呼吸して何時でも突撃出来る様に身構えた。

向こうも何時でも迎え撃てるように、体勢を整えるが……顔だけは嬉しそうに笑っていた。

「…どれだけ俺と戦えるのが嬉しいんだよ」

「こんなに嬉しいのが何時ぶりか分からないくらいかな」

「そうか。……だったら、その笑顔を直ぐに引っ込めてやる」

「上等。なら、鬼と竜の喧嘩・第二幕を始めようじゃないか！」

「第二幕じゃなくて、終幕の間違いだろ」

萃香に向かってそう言った俺は、何も考えず無策のまま彼女に向かって突撃する。

今変身している竜の特性上、速度は人の時の半分にまで落ちるが…

…そんな事はどうだって良い。

相手がどんなに硬かろうとも、どんなスペカを持っていようとも、真正面からぶっ飛ばすだけだ。

真っ直ぐ突き進み、萃香との間合いを詰めたところで、力いっぱい踏み込み拳を繰り出す。

萃香もそれに答えるように拳を繰り出し、お互いの拳を思いつきりぶつけ合う。

今度のぶつかり合いは弾かれる事なく、拳を繰り出したまま俺も萃香も其処から動けなくなる。

このまま拳で力比べに発展しそうになったが、俺は繰り出した拳を無理矢理に逸らし、その勢いのまま後ろ回し蹴りを放つ。

萃香は、身体を後ろに仰け反る事で蹴りを躲すが、そんな事に構わず今度は回し蹴りを叩き込む。

今度の蹴りは、仰け反って躲す事が出来ないと判断したのか、萃香は自分の身体を霧に変えて俺の蹴りを避けた。

霧になった萃香は、少し離れたところで元に戻るが、俺は直ぐに間合いを詰めて殴りに行く。

実体に戻ってから直ぐに霧に変化出来ないのか、萃香は迫る拳を避ける様子もない。

このまま顔を殴れると思った矢先、萃香は避けずに頭突きをするように額で俺の拳を受けた。

攻撃を止められたのは俺の筈なのに、萃香の額とぶつかった拳からは鈍い痛みが走る。

「お前、どんだけ石頭なんだよ……」

「別に無茶苦茶硬いわけじゃないよ。ほら、ちょっとだけ涙が出て来た」

萃香の言う通り、彼女の眼には少しだけ涙が溢れていた。

確かに効いていない訳じゃないみたいだが、これはこれで堪えるものがある。

俺は奥歯を噛み締め、繰り出した拳を引きながら膝を彼女の顔に叩き込もうとした。

だが萃香は、俺の蹴りが当たる前に自分の懐から新たなスペカを取り出して、すぐにそれを宣言する。

「鬼符『ミッシングパワー』！」

カードを宣言した瞬間、萃香の身体は突如巨大化し、俺を含めて周囲にあるものを吹き飛ばした。吹き飛ばした後、直ぐに萃香はもとのサイズに戻るが、今ので距離を離されてしまう。俺は空中で体勢を立て直し、直ぐにでも攻め込もうとしたが……別の事を思いついた。萃香とは離れた地点で着地した俺は、何処からともなく新しいスペルを取り出し、直ぐに宣言する。

「地壊『ハドハ波土破』！！」

スペルを宣言すると、萃香の足元に大きな地割れが発生し、彼女を飲み込もうとする。突然の出来事に回避が遅れた萃香は、重力に従って割れた地面の奥深くへと沈んでいく。萃香を飲み込んだ地割れは直ぐに直り、何事も無かったかのように元の大地に戻っていた。これで終わりの訳がないと身構えていると、萃香を飲み込んだ地面から声が聞こえてくる。

「どりゃあ〜ッ！」

気の抜ける掛け声と共に、萃香を飲み込んだ箇所が吹き飛び、地面から萃香が這い出してきた。地面を吹き飛ばして出てくるのは予想外だったが、萃香の姿を確認した俺は、飛んでくる岩を腕で弾き飛ばしながら彼女の元へと向かう。

間合いを詰められた萃香は、這い出てきて直ぐの所為か反応が若干遅れている。

それを好機と見た俺は、渾身の力を込めて迷う事無く萃香を殴り飛

ばす。

防御する事も、霧に変化する事も出来ず、このまま殴り飛ばされる  
と思ったが……意外にも萃香は俺の拳を掴み、そのまま反撃してき  
た。

萃香が繰り出してきた拳は、綺麗に俺の腹に命中するが、そんなも  
のは無視してこっちも殴り返す。

元々『バンドスナッチ』は、防御力と体力の高さが特徴の竜。

多少のダメージなど気にする事無く、全力で目の前の戦いに挑む事  
が出来る。

「オラアッ！」

「なんの！」

俺が萃香に殴りかかると、彼女は掴んでいた腕を放し、そのまま距  
離を取ろうとする。

俺は逃がすまいと体勢を無理矢理に変えて、萃香に跳び蹴りを叩き  
込もうとしたが、彼女に今度は足を掴まれ、そのまま投げ飛ばされ  
てしまった。

空中で体勢を立て直し、直ぐにでも突撃しようとしたが、萃香の手  
には既に新しいカードが握られていた。

新たなスペカを取り出してきた事で、俺は一旦突撃する事を止め、  
萃香の出方を窺う。

「いや、楽しいねリユウ。こんなに楽しいのは久々だよ」

「俺は戦いを楽しむ趣味はない」

「そうなの？ その割りには随分と楽しそうに戦ってたけど」

「………知らん」

「自覚なしかい」

突然話しかけてきた萃香は、俺の返答に呆れた様で何処か楽しそう  
顔で笑いかけてくる。

今までの攻防で楽しいと感じた覚えは無いが、彼女からしたら俺も  
楽しそうに戦っていたのか。

そんな趣味を持った心算はないんだが、この幻想郷に来て変わった  
のかな？

「…リュウとこうして喧嘩してるのも良いけど、ちゃんとケリは着  
けておかないとね」

「そうだな。何時までも此処で喧嘩していると、いい加減アイツが  
心配し始める」

「帰りを待ってる人がいると、何かと大変なんだねえ」

「そんな風を感じた事はないがな」

「そつか。……さてと、いい加減終わらせますか！」

「嗚呼！」

「ラストスペル『百万鬼夜行』！」

声高々にカードを宣言すると、萃香はその場で跳び上がり、自分を  
中心にして黒い渦を作り、周囲の物を吸い寄せ始めた。

黒い渦が物を集める傍ら、円を描くように渦から弾幕が周囲に向か  
って展開され始める。

俺はあの渦に近付き過ぎないようにしながら、俺達が戦っていたる  
のが弾幕ごっこなんだと今頃になって思い出す。

二人してずっと殴り合いばかりしてたから、何時の間にか戦いのル  
ールなどすっかり忘れていた。

……もつとも、俺は美しさを競うと言うのは苦手だからな、何時も  
通り力押しで叩き潰すだけだ！

俺は萃香の弾幕を回避しつつ、掌の中に新しいカードを何処からと  
も無く取り出す。

カードを手にした俺は、黒い渦の吸い込みに逆らって、萃香との距離を離す。

ある程度距離をあけたら、吸い込みを堪えつつ、取り出したカードを宣言した。

「ラストスペル『メテオ』ダイブ』！」

カードを宣言すると、俺を包み込むように周りを黒い壁に覆われる。その中で俺は、赤い鱗に四つの黄色い角が特徴の小山の様な巨体を持つ四足の竜へと変身した。

包み込んでいた黒い壁を破壊し、外に出た俺は、四つの角の間に大地の力を溜め込んだ球体を作り上げる。

その球体を空高く打ち上げると、遙か上空に巨大な岩の塊がコツチに向かって落ちてきた。

俺はその岩に向かって跳び上がり、落ちてくる岩を幾つかの大きな破片にして、その破片と共に萃香へと向かって落ちて行く。

落下して行く破片と俺は、彼女自らが作り出した渦に吸い込まれ、砕かれた破片は全て命中し、最後に『バンドスナッチ』の巨体で萃香を押し潰した。

「そ、そのスペルは酷すぎると思う……」

《周りの物を吸い込み始めたお前が悪い》

「……い、言い返せない」

腹の下でそう言った萃香は、押し潰されたまま気を失ってしまった。俺は戦いで荒れた地面を直してから、普段の姿に戻り、萃香を連れて博麗神社に戻る事にした。

気絶した萃香を抱えたまま神社に戻ると、鳥居の下で八雲紫が出迎えてきた。

「お帰りなさい。随分と遅かったわね」  
「うるせえ。んな事言うくらいなら、帰りの道を作れ」  
「それは嫌よ。……ほら、その子を預かるからコツチに渡して」  
「ったく」

俺は気絶したままの萃香を渡すと、紫の顔を見る事無く境内に入っていく。

境内の中は宴会で盛り上がっているが、萃香を倒した事で連日の宴会も今日で最後の筈だ。

そう考えると若干の寂しさの様なものを感じるな……。

「リュウツ！ やっと見つけた！！」  
「ん？ 霊夢？」

柄にもなく感傷に浸っていると、酒を飲んで酔っ払っている霊夢に呼ばれる。



大分飲んでいたのか、珍しい事に霊夢の顔は真っ赤になっていた。正直な所、今日は疲れたから飯食ってもう寝たかったんだけど……仕方が無いか。

心の中で溜息を吐きつつ、俺は霊夢の傍へと向かった。

「全く、いままで何処にいたのよ！」

「あ……龍神の使いでちよつと遠出を」

「まあ良いわ。とりあえず、そこに座りなさい」

下手に逆らつて癩癩を起こされなくなかったので、俺は大人しく霊夢に指差された場所に座る。

すると、霊夢は何を考えているのか突如として俺の膝の上に座り、徐に抱きついてきた。

「何してんだ霊夢？」

「独りで居なくなつたお仕置き」

「（…お仕置きじゃねえよなコレ）」

「あと皆が、私たち付き合っているのに全然恋人らしいくないって言つて来たから」

「ちよつと待て、その理由は可笑しいだろ」

「だから、今日は見せびらかすのよ！ 私たちがいかにイチヤイチヤでラブラブな関係なのかを！！」

「ウチの霊夢に変な事吹き込んだ奴、ちよつと表に出ろ！！」

俺は大声で周りの連中に呼びかけると、殆どの連中が蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

その状況を見て、俺は呆れ果てるどころか頭痛と目眩が同時に襲つて来た。

なんでほぼ全員が霊夢をからかってんだよ、幾らなんでもコレは酷すぎるだろ。

「ちよつとリュウ。よそ見しないで私をみてよ」

「……あゝもう！　なんで鬼退治から帰ってきたら、こんな事になるんだよ！！」

俺は半分ちかく泣きそうになりながら、満点の星が輝く夜空に向かって大きく吼えた。

疲れて帰ってきたんだから、家に居るときくらいはノンビリさせてくれよ……。

## 第四十二話・後編 小さな百鬼夜行（後書き）

……と言う訳で、萃夢想編はこれにて終了です。

この回で終わらせたかったから、最後のシメはグダった気がします。でも、萃香との戦いはかなり頑張りました。

前の妖夢戦は消化不良に終わってたから、今回の出来には満足します。

……ただ、頑張り過ぎて文字数がヤバイ事に。

普段は5000字くらいを目標に書いてるのに、今回は何文字いったのかなんて考えたくも無いです。

何はともあれ、萃夢想編が終わったと言う事で、次回からはまた日常ネタになります。

日常ネタは戦う事もないので、文字数的には大分楽が出来そうですね。

では、次回の更新をお楽しみに。

今回の萃夢想編を書いていて分かったのは、リュウを裏方に回すとネタに困るって事ですな。

今後はリュウを裏方に回す事はしません。……本当に書くことに困るんです。

## 第四十三話 素直に伝えると言つ事

宴会から一夜明け、私は何時の様に眼を覚まし、布団から身体を起こした。

何時の間に布団に入ったのか覚えてないけど、多分飲みすぎて倒れたところを、リュウが部屋まで運んでくれたんだと思う。

その証拠に酷い二日酔いになっていて、さつきから頭痛と吐き気に襲われている。

なんでこんなになるまで飲んだのかと思い、頭痛を堪えながらも昨日の事を思い返す事にした。

「たしか……あの鬼にまけて、その後に始まった宴会でひとりやケ酒をしていたら、いきなりやって来た紫とたちちゃんにからかわれて……どうなったんだっけ？」

自棄酒を飲んでいる時から、相当量のお酒を飲んでいたのか記憶が酷く曖昧だ。

二日酔いの所為で頭痛もするけど、少しづつではあるけどなんとか昨日の事を思い出せそう。

「あの二人に？私とリュウが恋人らしくない？とか言われて、それに便乗して魔理沙もからかってきて……私がムキになったのよね」

口に出して昨日の事を思い出していくと、その時の様子がぼんやりと浮かび上がってくる。

あの時の時点で出来上がっていたのか、普段なら聞き流す様な事にも過剰に反応していたような気がする。

「それで気がついたら、レミリアや幽々子にもからかわれていて…  
それに腹が立った私は、皆に私たちの関係を見せびらかせよう…  
と……」

其処まで口にした途端、私は気を失う前の事を全て思い出してしま  
った。

……どうせなら全て忘れてしまえば良かったと、本気で思ってし  
まう様な事だけだね。

と言うか、イチヤイチャでラブラブな関係ってなに？ リユウの膝  
に座って抱き付くなんて、何をしてるのよ私！？

いくら酔っていたとはいえ、幾らなんでもアレは無いわよ。……本  
当にその場のノリって恐いわ。

「……そういえば、私が覚えている限りだとアイツ、殆ど酔ってな  
かったわよね。と言う事は、昨日の醜態を全部知られてるって事？  
！」

とてつもなく嫌な予感がして、寝起きにも関わらず大きな声を出し  
てしまった。

二日酔いになっていると言うのも忘れて大声を出した所為で、自分  
の声が頭に響いて痛みがさつきよりも酷くなってしまう。

自業自得とはこの事かと反省していると、いきなり部屋の障子が開  
いて、リユウが顔を覗かせる。

「なんか馬鹿でかい声が聞こえたけど、何か遭ったのか？」

リユウは普段となんら変わらない様子だけど、私はアイツの顔を見  
た途端、頭の中が真っ白になった。

昨日の事を聞きたいけど考えが上手く纏まらず、どんどん顔が真っ  
赤になっていくのが分かる。

普段と様子が違う事に気がついたのか、リュウは私の事を見ながら不思議そうに首を傾げる。

私は、段々とリュウの顔を直視する事が出来ず、何処に眼を向ければ良いのか分からず、わたわたと視線をアチコチに彷徨わせてしまふ。

「…落ち着きがないが、本当に大丈夫か？」

私の様子を不審に思ったのか、リュウは部屋の中に入りコッチに近付いてきた。

コッチに近付いてくるにつれて、周りの状況も分からなくなり、パニックに陥りそうになる。

自分で鏡を見なくても、今の私は顔から湯気が出そうなくらいに真っ赤になっている自覚がある。

何もかも分からなくなった私は、近くにある枕を鷲掴みにし

「……い、いきなり部屋に入ってくるな!!!」

なんと外的外れな事を言って、リュウに枕を全力で投げ付けた。

「ぬがあ?!」

けして軟らかいとは言えない枕を顔で受けたリュウは、鼻の辺りを押さえてその場で蹲る。

そんなリュウを余所目に、私は布団から起き上がり、彼から逃げるように部屋から出て行った。

少し遅めの朝食を取った私は、部屋に戻って床に寝そべり、さっきの事を猛省している。

幾ら混乱していたとは言え、心配してくれたリユウに枕を投げつけるのは流石にやりすぎた。

……でも、あのまま顔を近付けられてたら、思いつきり彼の顔を殴ってそうだったし、それに比べればまだマシ……よね？

「あゝもう、なにやってんだろ私」

十数年生きてきたけど、此处まで自己嫌悪に陥ったのは生まれて初めてかもしれない。

昨日の醜態の含めて一体何をしているのかと、自分自身に子一時間くらい問い詰めたくなる。

それにご飯を食べてるときだって、結局リユウにさっきの事を謝れなかったし……。

でも、謝ろうと彼を見ようとすると、顔が真っ赤になって考えが纏まらなくなるのよ。

お陰でちゃんと誤る事も出来ず、こつして部屋で自己嫌悪に陥ってるなんて……ホントに悪循環ね。

「はあ……。どうせなら昨日の記憶が飛んでくれてたら良かったのに……」

物凄く都合の良い事を言ってるけど、本当にそう思ってしまうのだ

から仕方が無い。

……でも、普段はリュウに抱き付く機会なんてないんだし、アレはアレでおいしかったわね。

そんな風に考えるなら、リュウに枕なんて投げてるんじゃないわよ、私。

「自分で自分にツツコムのって空しいわね……」

さつきから考えが二転三転して、上手く考えが纏まりそうにない。

部屋でうだうだと悩むくらいなら、このまま不貞寝してしまった方が良いのかも。

そんな事を考えていたら、リュウが部屋の障子を叩いて顔を覗かせてきた。

「霊夢、いま大丈夫か？」

「……なによ」

私は未だにリュウの顔を直視する事が出来ず、不機嫌な声を出しながらそっぽを向いてしまう。

本当は全部自分の所為なのに、なんでこんな態度しか出来ないんだろう。

これじゃ、何もしていないリュウを責めているみたいじゃない。

「えーっとな、そろそろ調味料がヤバそうだから買い物に行ってくるな」

「そう、いつてらっしやい」

「……………」

私の素っ気無い態度と言葉に、リュウは如何したものかと困ったような顔をする。



本当はこんな事を言いたい訳じゃないのに、口を開くと出てくるのは全然的外れな言葉ばかり。  
ちやんと昨日の事や今朝の件を謝っておきたいのに、どうして？ゴメン？の一言が出てこないんだろう……。

「それじゃ行ってくるけど……何か欲しいモノはあるか？」

「お茶」

「相変わらずお茶が好きだな」

「うっさいわね、さっさと買いに行きなさいよ」

「はいはい」と

本心とは全く違う態度しか出来ないまま、リュウは苦笑いを浮かべて部屋を出て行く。

私は手を伸ばして彼を引きとめようとしたけど、やっぱり掛ける言葉が出て来てくれなかった。

たった一言？待って？と言う事の出来ない自分が本当に嫌に為ってくる。

本当に言わないといけない事があるのに、なんで私はリュウにお茶なんか頼んでるのよ……。

「……あ、霊夢」

「なによ、まだ何かあるの」

「今朝は勝手に部屋に入って悪かったな。今後からは気をつけるよ」

「……ッ」

「それじゃ買い出しに行ってくるな」

最後のそう言ってきたリュウは、そのまま私の部屋から離れていこうとする。

私は勢いよく立ち上がり、後を追いかけて、リュウを引きとめようと手を握り締めていた。

「……？　どうかしたのか？」

「あ……その……」

「……？」

「……お茶請けも無いから、一緒に買ってきて……」

「了解しても、そんなに金も無いから、高いモノは無理だぞ」

「分かってる……」

「んじゃ、留守番よろしくな」

そう言っただけ私の頭を撫でたリュウは、私の手を振り解き、そのまま  
買い出しに出かけて行った。

彼が居なくなつてから私は、素直になれない自分に嫌気が差して、  
自己嫌悪から泣きそうになる。

リュウは何も悪くても謝つたのに、どうして私はちゃんと謝る事が  
出来ないんだろう……。

……こんなにも惨めな気持ちになつたのも、自分が嫌になつたのも  
生まれて初めてよ。

私は誰も居なくなつた母屋で立ち尽くすことしか出来なかった。

……

……

……

リュウが買い物に出掛けてから既に数時間は経っていた。

私は何もする気力が湧かず、縁側で独りぼーつと裏庭を眺めている。

……今の私の姿を見たら、リュウは一体なんて言うんだろう。

何もしていない私を呆れるのかな？ それとも普段とは違う何かを感じて心配するのかな？

朝からずっと自己嫌悪に苛まれていたからか、何時もの私らしくない事ばかり考えてしまう。

一言謝るだけで全てが解決するのに、素直に為れない所為でさつきからこんな調子だ。

リュウが帰ってきたら謝ろうとは思っただけど、ちゃんと言葉に出来る自信が全然湧いてこない。

……本当に今日の私はらしくないな。何時もならこんな事考えないのに……。

そんな事を思いながらぼーつとしていると、玄関の戸が開く音が聞こえてきた。

「ただいま。霊夢、買ってきたぞ」

玄関の方からはリュウの暢気な声が聞こえてくる。

その声を聞くと、さっきまでの考えが何処かに飛んで行ってしまっそう。

いつその事、何処かに吹き飛んでしまえば何時もの私に戻る気がするわね。

「お〜い……って、そんな所で何してんだ？」

「別に何もしてないわよ」

「ふ〜ん」

リュウは私の事を呆れたりしななければ、心配をしてはくれなかった。

出かける前と何も変わらない様子で、居間の方で買ってきた物の整理をしている。

そんなリュウの様子を残念に思いながら、そっと彼の方を覗いてみると……ちやぶ台の上には珍しい事に饅頭が幾つも置かれていた。

「ちよつとリュウ、その饅頭は如何したのよ」

「里で安売りしてた」

「安売りって……その量は買いすぎでしょ」

「そうかもな。でも、好きだる饅頭」

「それは……そうだけど……」

リュウは安売りしてたって言うけど、饅頭の安売りなんてあるとは思えない。

多分リュウが店の人に無理を言っ買ってきたんだと思う。

そんな事するくらいなら煎餅にすればよかったのに、如何してこんなに買ってきたんだか……。

……そんなの考えるまでもなく、普段とは違う私に気を使っだからに決まってるじゃない。

普段通りに生活してるかと思っただけど、ちゃんと気にしてくれていたんだ。

そんな風を感じた私は、縁側からそつと立ち上がり、何も言わずにリュウの背中に抱き付いた。

「霊夢？」

「……お願いだからコツチを見ないで。今アンタに見られたら、きつと何も言えなくなる」

「……………」

リュウにそうお願いすると、彼は作業していた手を止めて、何も言わず受け止めてくれた。

私は抱き付いているだけでも顔が赤くなって、胸の鼓動がドンドン速くなって行くのを感じる。ずっとこうして行きたいけど、何時までも抱き付いてないでちゃんとを伝えないと……。

「リュウ、昨日の夜と今朝はゴメン。なんか迷惑を掛けちゃったね」「別に気にしてないけど……もしかして、ずっとソレを考えてたのか?」

「そうよ、悪い」

「悪くはないが……昨日のは、アレはアレで可愛かったぞ」

「かわッ?!」

突拍子も無いリュウの言葉に軽く混乱した私は、思わず彼の背中に頭突きを叩き込んでしまふ。

「イダッ?! 何するんだよ霊夢!」

「うっさい! いきなり変な事を言うアンタが悪い!」

「なんだそりゃ?!」

リュウはまだ何か言いたそうだけど、私は彼の背中に顔を埋めて動かなくなる。

直視されたまま言われなかったから良いけど、それでも今朝の時よりも顔を真っ赤にしているに違いない。

私は素直に謝るだけでも気恥ずかしいのに、どうしてコイツは平然と恥かしい事が言えるのよ。

これじゃ、上手く素直に為れない私がバカみたいじゃないの。

「なんでアンタは、そんな事を平気に言えるのよ」

「相手が霊夢だからだろ。他の奴にはこんな事を言う心算はないし」

「……ッ! ……アンタ、もう一回頭突きするわよ」

「なんでだよ」

「うっさい、バカ！ 自分の胸に聞け！！」

やっぱり私は、リュウが言ってくれた言葉に声を荒げる事しか出来なかった。

本音を言えば物凄く嬉しいのだけど、どうしても恥かしさが前に出てきて素直になれない。

昨日くらいに酔っていたら、もっと素直に受け止められる筈なのに…… 如何して素の私はこうなんだろ。

普段は素直になれないのなら、せめて今くらいは自分の気持ちを正直に打ち明けたい……。

「ところで、霊夢。そろそろ動きたいんだけど、良いか？」

「……なら、最後に一つ言わせて」

「ん？ なんだ？」

「……ありがとう」

私は顔を背中に埋めたまま、本当に小さな声でリュウにお礼を言った。

リュウに今の言葉が聞こえたか解らないけど、これが今の私の精一杯の言葉だった。

「へっ？」

「はい言ったわよ！ それじゃ私は部屋に居るから、後は宜しく！」

「あ、おい！？」

私はリュウの背中から離れ、彼と顔を合わせる事無く逃げるように居間を後にした。

今の？ありがとう？が一体何に対してなのか解らないけど、今の私にはリュウに告げる言葉としては一番良い様な気がする。

……今はこれで精一杯だったけど、何時かはリュウに？好き？と伝えたい……。

#### 第四十三話 素直に伝えると言つ事（後書き）

最近、竜×霊成分が不足してる気がしたので、補完する為に書いてみました。

反省も後悔もしてません。……そつだ、後悔なんてあるわけがない。



## 第四十四話 使いの落し物

幻想郷は夏真っ盛りと言うに相応しく、連日のように猛暑日が続いている。

蝉の音が五月蠅いほどの鳴り響き、太陽からは憎らしくなるくらい燦々と光が降り注ぐ。

暑いのは平気な俺だが、こう毎日の様に猛暑日が続くと流石に嫌気が差してくる。

それに魚も暑さにやられて直ぐに痛むから、釣ったやつを持ち運びがかなり不便になった。

魚を凍らせて持ち運んでも良いんだが、それをすると今度は解凍に手間取るからあまりやりたく無いと言うのが本音だ。

「あゝあ。何か持ち運びに便利は入れ物があれば良いんだけどな」

俺は木陰の下で川に釣り糸を垂らしながら、空を見上げながらぼやいた。

木陰から見える太陽は、葉っぱに大半の光を遮られているが、隙間から見える光はキラキラと輝いているように見える。

そのまま空を見上げていると、何者かの影が木の上を通りすぎ、一瞬だけ光が完全に遮られる。

一体何が通り過ぎたのかと気になり、視線を元に戻すと……川を挟んだ反対側に、薄ピンク色の服に黒のロングスカート、大きな赤いリボンの付いた黒い帽子に緋色の羽衣を身に纏う、青紫色の髪の女性立っていた。

地面に降りた女性は、俺になど目もくれず茂みの中を掻き分け、キョロキョロと何かを探し始める。

落し物か何かを探しているのは明白だが、その様子があまりにも必

至だったから、俺はなんとなく彼女に声を掛けて見る事にした。

「あゝ、そこで何してるんですか？」

「……えっ？」

俺が声を掛けると、女性は驚いたようにコツチを振り向いてきた。どうやら捜す事に集中していたのか、声を掛けるまで俺の存在に気が付いていなかった様だ。

俺も息を潜めて静かに釣りをしていたから、彼女が気が付かなくても仕方が無いか。

「えっと……貴方は？」

「俺はリュウ。博麗神社に住んでいる居候だ」

「貴方様がリュウ様でしたか。まさかこの様な所でお会い出来るとは……」

「リュウ…様？」

「はい」

女性は上品な笑顔でコツチに笑い掛けてくるが、俺としてはちょっとだけ困惑していた。

彼女が今までに居ないタイプの人だっけ言うのもあるけど、初対面に奴にいきなり？様？で呼ばれるとは思ってもみなかった。

礼儀正しいと言えはそうなのかもしれないけど、物凄く背中がむず痒くなるな……。

「ちょっと聞きたい事があるんだけど、え〜と……」

「これは申し送れました。わたくしの名前は『永江 衣玖』と申します」

「それじゃ、永江さん」

「衣玖で構いませんよ、リュウ様」

「……なら衣玖さんで」

「わたくしは呼び捨てでも構いませんが？」

「これで良いです」

「そうですか？」

彼女はイマイチ納得がいつてないのか、不思議そうに小首を傾げてくる。

衣玖さんは呼び捨てでも構わないと言うが、彼女の雰囲気的に？さん？付けの方がしっくり来ると思うんだが……。

まあ、そんな事は兎も角、ちゃんと聞きたい事を聞いておかないとな。

「それで衣玖さんに質問なんだけど、なんで俺の事を？リユウ様？なんて呼ぶんだ？」

「それは、わたくしが？竜宮の使い？と言う種族だからです」

「つまり？」

「簡単に言ってしまうと、わたくしは龍神様のお世話役などをしております。ですので、異世界の竜神である貴方様にも敬意を表すのは当然の事かと」

「……………」

彼女の言いたい事は理解出来たが、俺を神様あつかいするのは止めて貰いたいな。

衣玖さんの種族柄なのか、それとも龍神にそう言われたのか知らないが、元々この世界の住人じゃない俺に敬意を表す必要はないだろ。

「……………一つ頼みがあるんだが」

「はい、なんでしよう」

「俺の事を様付けで呼ぶのを止めてくれないか？ 神様扱いされるの嫌いなんだよ」

「そうでしたか。……では、なんてお呼びすれば宜しいですか？」  
「様付けじゃなかったら好きに呼んでくれて良いけど」  
「でしたら……リュウさんと呼ばせて頂きます」  
「出来る事なら喋り方も変えて欲しいんだが」  
「元々こう言う口調ですので、それは無理かと……」

むう、そう言われてしまうとコツチからは何も言えなくなるな。  
喋り方なんて人それぞれなんだし、この位は俺が我慢すれば良いだけの事か。

それにしても、龍神の世話役をしている彼女がこんな辺鄙な場所に何の用だ？ さっきは何かを探しているようだったけど……。

「ところで衣玖さん。茂みで何かを探していたけど、何を探していたんだ？」

「それはその……」  
「……？」

俺がちよつと質問してみると、衣玖さんは視線を逸らし眼を泳がせ始めた。

何か聞いてはいけない事なのかと思ったが、彼女の雰囲気からしてそういった感じではない。

どちらかと言うと、何か隠し事をしていると言った感じだ。

他人に言えない様な事となると、龍神から極秘に何かを頼まれたと言った所だろうか。

もしそうだとしたら、あまり踏み込んで聞くわけにも行かないか。

「言えない様な事なら無理に言わなくて良いけど？」

「いえ、そう言う訳でもないのですが……」

「……??？」

そうでないと言う割には、彼女の返事はどうにもはつきりしない。他人には言える様な事だが、俺には言い辛い様なモノを探しているのだろうか？

でも、そんな物なんてこの幻想郷に……幾つもあるか。男の俺には言えない物なんて、探せば幾らでも出てくるし。

「すまない、衣玖さん。何か野暮な質問をしてたみたいだな」

「……はい？」

「俺がもうちょっと気が利けば、こんな事を尋ねなくて済んだのに……。本当にすまない」

「あの……さつきから何を言っているんです？」

「無理に恍けなくても良いよ。……それじゃ俺はもう帰るから、後は心行くまで探してくれ」

俺は衣玖さんに謝罪をして、荷物を簡単に纏めたら直ぐにこの場を後にする。

今回は大して釣れなかったが、また別の場所で釣れば良いだろうと考えていると……いきなり首に羽衣の様なものが巻き付いてきた。

「変な勘違いをして、勝手に帰ろうとしないで下さい！」

「ぐえッ」

首に巻きついたものの正体は、衣玖さんが身に着けていた緋色の羽衣のようだ。

引き止めるために使ったのか知らないが、既に歩き出していたと言う事もあってか、俺の首は巻きついた羽衣に思いつきり締め付けられた。

「全く、わたくしが探してるのはですね……」

衣玖さんが何かを言っているような気もするが、首に巻きついた羽衣が中々緩まない所為で、酸欠に陥り徐々に意識が遠のいていく。説明をしてくれるのは良いが、ちよっとは加減をしてくれ。これは本当にキツイって……。  
心の中でそう呟いたのを最後に、目の前が真っ暗になり俺は意識を失った……。

……  
……  
……

「ま、マジで死ぬかと思った」

「本当に申し訳御座いません……」

気絶から漸く目を覚ました俺は、近くにある木を背にして休んでいた。

直ぐ隣りには衣玖さんが申し訳無さそうに座っているが、今回の件はちゃんと反省してもらいたい。

幾ら俺が死ぬのか分からないとは言え、首を絞められるのは本当に辛いんだよ……。

「頼むから、相手の首を絞めて引き止めるのは止めてくれ。相手によつては死ぬからアレ」

「はい……」

俺に釘を刺された衣玖さんは、本当に申し訳無さそうに縮こまって

しまつ。

……流石にやり過ぎたと反省しているみたいだし、コレ以上グチグチ言うのは止めておこう。なんだか可哀相になって来た。

「それで、衣玖さんは何を探しているって？」

「龍神様より貴方様へ剣を渡すように頼まれていたのですが……」

「ですが？」

「お届けする前に、ちょっとした事情で落としてしまいました」

「落としたって……もしかして、無くしてからずっと探してるのか？」

「……お恥ずかしながら」

剣を俺に届ける前に落とした事を恥じているのか、衣玖さんはさつきよりも更に小さく縮こまってしまった。

俺としてはその事を責める心算はないけど、彼女からしたら今回の事は相当の失態と捉えているらしい。

別に剣の一つや二つ、失くしたとしても大した影響はないと思うんだけどな。

……とは言え、このまま見付かるまでずっと搜索させるのも可哀相だし、ちよつと手を貸してあげるか。

「衣玖さん、俺もその剣探し手伝おうよ」

「いえ！ リユウさんに手を貸して貰うほどの事ではー！」

「その剣は俺に届けられる物なんだろ？ なら俺が探しても問題ないだろ」

「それは……そうですが……」

「なら決まりだ。日が暮れないうちに捜しに行こう」

「……有り難う御座います、リユウさん」

さつきまで申し訳無さそうにしていた衣玖さんだが、今は嬉しそう

に微笑んでくれた。

俺は照れ隠しに地面から立ち上がって、大きく背伸びをして体を解した。

「それで？ 剣はどこら辺で落としたんだ？」

「いえ、落とした地点は既に隈なく探しました。今は別の場所を探し回っているところです」

「となると、搜索範囲は幻想郷全土か……。一日二日じゃ終わらないぞ」

「わたくしなんて、もう一月以上家に帰れてませんよ……」

「そ、それは大変だな」

衣玖さんは今までの苦勞と疲勞からか、物凄く悲壯感溢れる溜息を付いた。

俺はその様子に苦笑いを零すしかなかったが、それ以上に一月探しても見付からない現状に疑問を持った。

幾ら何処に在るのか分からないとは言え、手掛かりすら無いと言うのは流石に変だ。

衣玖さんが誰にも尋ねないで探していた可能性もあるが、剣の落し物なんてかなり眼を引く筈だぞ。

それでも見付からないとなると……既に誰かの手元に渡っている可能性が高いな。

香霖堂に新しく剣が入荷したなんて聞いてないし、人里には落ちている物を売り物にしている店は存在してないから、どっかの物好きに拾われてコレクションの一つになってそうだな。

もし誰かの手元に渡っているとしたら、ソイツから取り返すのはかなり面倒だぞ。

あまり事を荒立てたくないし、もっと簡単に物を探せれないものだろうか……？



「……………あ、そうだ。アイツの力を借りれば良いんだ」  
「なにか良い方法が思いついたのですか？」  
「ちよつとした賭けみたいなものだけどね。それに来てくれるのかも分からないし」  
「このさい方法は構いません。早速試してみてください」  
「それじゃ、ちよつと耳を塞いでいてくれ」  
「…?」

衣玖さんは不思議そうに首を傾げながらも、ちゃんと自分の耳を塞いでくれた。

それを確認した俺は、一度深呼吸してから大きく空気を吸い込んで、  
「萃香ッッ！！ 出てこいッ！！！！」

雄叫びにも似た大声を出して、最近知り合った鬼に呼びかけ  
てみた。

今の声に驚いた野鳥たちは、一斉にこの場から逃げ出していくが、  
お目当ての鬼は姿を現しそうにない。

もう数分待つてみたが、やはり気配はなく、萃香の妖霧も何処にも  
見受けられない。

コレ以上待つても進展はないと判断した俺は、今度は呼び出し方を  
変えてみる事にした。

「……………あ、此処に最高級の日本酒がある。誰も飲まないなら、こん  
なもん川に捨てるか」

俺が聞こえない位に小さく呟くと、目の前の茂みから二本角の鬼が  
いきなり飛び出してきた。

「そんな勿体無い事をするなら、私はその酒を飲む!!」  
「こんな簡単な嘘に釣られてんじゃねえよ」

案の定出て来た萃香に冷淡なツツコミを入れつつ、彼女が逃げ出す前に首根っこを掴んでおく。

萃香はバツの悪そうな顔をするが、そんな事は気にせずさっさと頼み事をすることにした。

「それで私に何の用？」

「お前の力で？龍の力を持った剣？を此処に集めて欲しいんだ」

「そんな物集めて如何するの？」

「ちよつとした探し物だよ」

「……タダじゃ嫌だよ」

「博麗神社に奉納された日本酒でどうだ」

「乗った!!」

俺が条件を提示すると、萃香は直ぐに了承して意気揚々と能力を發動させる。

萃香が能力を發動させて五分くらいが経っただろうか、空の彼方から何かがコツチに向かって飛んでくるのが見えた。

鞘に収まっているが、形状からして鍔も柄もない相当古いタイプの直刀の様に見える。

他にも飛んでくる剣は無いものと辺りの空を見渡すが、コツチに向かって飛んできているのはアレだけのようだ。

「ほい、集めたよ」

「ありがとな」

「こ、こんな方法があつたなんて……」

「まあ、裏技みたいなモノだから深く考えない方が良さぞ」

俺は信じられないと言った表情の衣玖さんに、萃香が集めてくれた剣を手渡す。

剣を受け取った衣玖さんは、繁々とその剣を見てみるが……直ぐに首を横に振って俺に返してきた。

「……この剣じゃないです。龍神様からお預かりした剣は、もっと長かったですし」

「萃香、本当にこれ以外は集らなかつたんだな？」

「そうだよ。……もしかして、疑ってるの？」

「何かを集める事において、お前の右に出る者はないと信じてるからこそ聞いてるんだよ」

「褒めても何も出ないけど、本当にそれ以外は萃らなかつたよ」

「……そっか」

萃香の能力に疑いようが無い以上、この幻想郷に衣玖さんが探している剣は存在していない事に為る。

流石にそんな事があるとは思えないが、こうして集らなかつた以上、そう結論付けるしかない。

衣玖さんも同じ考えに至ったのか、顔を青くして今にも泣きそうな表情をしている。

手伝ってやるなんて言っておきながら、大したことも出来ないとは……なんとも情けないな。

「……」

「あのさ〜リュウ。ちゃんと仕事したんだから、お酒頂戴？」

「……この空気ですれを言うか？」

「空気を読んで黙ってても、お酒は手に入らないからね」

「ったく」

俺は悪態を付きながらも、心の中ではちょっとだけ萃香に感謝して

いた。

萃香の言い分は兎も角、何時までも此処にいても仕方が無いのも確かだ。

あの空気のままだと切り出し難いけど、お陰で衣玖さんに声を掛けやすくなった気がする。

「衣玖さん、俺達と一緒に神社に行かないか？ 此処に居ても仕方が無いんだし」

「ですがわたくしは……」

「剣が届かなかつた事に付いて文句を言う心算はないし、龍神には俺からもちゃんと言っておくからさ」

「そうそう。何時までもこんな所で立ってないで、神社で一緒に騒ごうじゃないか」

「騒ぐのは禁止だ」

「ええ〜」

「ええ〜じゃない。ええ〜っじゃ」

酒が飲めると聞いて、騒ぐ気満々だった萃香に諫めつつ、衣玖さんの様子を窺う。

こんな俺達のやり取りに呆れてるかと思っただが、衣玖さんは意外にも優しく微笑んでくれた。

「……そうですね。お二人の言う通り、何時までも此処に居ても仕方が有りませんし、御一緒させて頂きます」

「そうこなくっちゃ！ よ〜し、人数が少ないけど今日は騒ぐぞ〜！」

「だから騒ぐなっつての」

どう足掻いても騒ぐ心算の萃香を、如何やって抑えようか考えつつ、俺は衣玖さんと萃香を連れて博麗神社に帰ることになった。

…  
…  
…

神社の境内に下りた俺達は、その足で裏庭の方へと向かって歩き始めた。

本殿の横を通りすぎ、裏庭に辿り着くと、霊夢が縁側で独りお茶を飲んでいた。

「霊夢、ただいま」

「お帰りなさいリュウ。…今回は見慣れない奴を連れてきたわね」

「色々とあってな」

「初めまして、わたくしは『永江 衣玖』と申します。以後お見知りおきを…」

「あ、これはごく丁寧にどうも」

礼儀正しく挨拶してきた衣玖さんに呆気にとられたのか、珍しく霊夢が人に頭を下げているところを見た。

やっぱり霊夢も、衣玖さんみたいな礼儀正しい相手は苦手なのかと思っっていると、萃香が俺の袖を引っ張り何かを訴えてくる。

最初は一体何事かと不思議に思ったけど、直ぐに何を訴えているのか理解出来た。

「霊夢、この間奉納されていた酒って何処に仕舞ってたっけ？」

「……？ 前の奴で良いなら台所にあるけど？」

「悪いけど、その酒を萃香に渡してくれないか？」

「なんでよ」

「ちよつと借りがあるんだよ、頼む」

「……ったく、仕方が無いわね」

突然のお願いだったが、霊夢は溜息を一つ吐いて了承してくれた。

それを見ていた萃香は満面喜悅になり、喜び勇んでお酒がある台所へと突撃していった。

「やつほー！ お酒だーッ！」

「あ、こら！ 勝手に上がるな！！」

霊夢は勝手に上がった萃香を止めに行くが、酒を前にしたアイツが止まる訳が無い。

俺は二人の様子に苦笑いをしつつ、縁側で靴を脱いで家の中に入った。

「ほら、衣玖さんも突っ立ってないで上がってくれ」

「では、お邪魔させて頂きますね」

俺に促された衣玖さんは、縁側に腰かけて上品に靴を脱ぎ始めた。

……もしかして、俺が声を掛けるまでずっと外で立っている積もりだっただろうか？

彼女ならなんかありえそうな事を考えつつ、さっき拾った剣と釣竿と護身用に持ち歩いている剣を取り出し、居間の片隅に置こうとした。

すると、衣玖さんがなにやら変な視線を俺の剣に注がれているよう

に感じた。

一体何事かと彼女の方を見てみると、まるで信じられない物を見る様な眼で俺の剣を見詰めていた。

「えっと……この剣が如何かしたか」

「その剣、一体何処で手に入れたんですか？」

「コレか？ コレは前に霊夢がプレゼントしてくれたんだよ」

俺がこの剣を手にした経緯を簡単に教えたと、衣玖さんは血相を変えて台所へと向かう。

「れ、霊夢さん！ リュウさんの剣を何処で手に入れたんですか？  
！」

「な、なによ。いきなり」

「良いから答えて下さい！！」

「…前に魔理沙が香霖堂に売り付けて来たのを、私が買い取ったのよ。アイツも何処かで拾ったとか行ってたから、詳しくは知らないと思うわよ」

霊夢から話を聞いた衣玖さんは、何故かその場に崩れ落ちて頂垂れてしまった。

俺も霊夢も一体何事なのかと首を傾げると

「こ、こんな所に在っただなんて……」

衣玖さんが搾り出すように一言呟いた。

霊夢はソレが何の事なのか分からない様だが、俺にはその一言で大体の事が把握できた。

詰まるどころ、衣玖さんが落とした剣を魔理沙が偶然にも拾って、それを霊夢が香霖堂で購入し、俺にプレゼントしてきたんだろう。

それを知るよしもない衣玖さんは、ずっと俺の手元に在る剣を探し続けていた訳か。

……あれ、如何してだろう？　なんでか知らないけど、物凄く申し訳ない事をした様な気持ちになってくるぞ。

「灯台下暗しとはこの事かね〜」

「……なあ、萃香。なんであの時に俺の剣が集らなかつたんだ？」

「あの時私が集めたのは？　遠く離れた所にある龍の剣？　だけ。最初から傍にあつた剣が集る訳ないじゃない」

「うわあ〜……」

今の萃香の説明に物凄く納得がいった俺は、申し訳なさから胸が締め付けられそうになる。

ただの不幸な巡り合わせと言って仕舞えばそれまでなんだけど、一月にも及ぶ彼女の頑張りを考えると……何故だか謝りたくなってくるな。

「わたくしの一月の努力は一体なんだつたんでしょ……」

「アンタも大変だったんだね〜。とりあえず、飲んで騒いで嫌な事は忘れよう〜！」

「……そうですね、今はそれが一番な気がします」

「ちよつと前に宴会騒ぎが終わつたのに、また騒ぐって言うの?!」

「すまん、霊夢。今日だけは騒がせてやってくれ」

「リュウまで何を言ってるのよ?!」

「さあ！　今日は飲むぞ〜!!」

なんとか霊夢を丸め込み、五人だけの宴会が博麗神社の母屋で行われる事になった。

霊夢は嫌そうな顔をしてるけど、今日だけは本当に我慢してもらおう……。





## 第四十四話 使いの落し物（後書き）

オマケ

？衣玖さんを励ます会？と言う宴会から数日が経ったある日。

何時もの様に霊夢と二人、縁側でお茶を飲んでいたら……何故か衣玖さんが空から舞い降りてきた。

何か忘れ物でもしたかと思ったが、憂鬱とした表情から察して、そう言う事ではないような気がする。

「ちょっと如何したのよ、衣玖。ものすんごく暗い顔をしてるわよ」

「……実はですね。この間の剣紛失騒ぎが龍神様にバレまして、本日より当分の間リュウさんと龍神様の橋渡し役を仰せ付けられました

……」

「あゝつまり、アイツの伝言を俺に伝えに来る係りって事か？」

「はい。あと、神社の雑用も手伝ってやれと……」

「あ、それは助かるわ」

「……其処は心の中で言おうよ」

「わたくし、こう見えても色々と仕事を抱えてるんです。それなのに更に仕事の追加とか……龍神様は鬼ですか」

今抱えている仕事も相当辛いのか、衣玖さんが本格的に愚痴り始めてきた。

龍神には龍神なりの考えがあるとは思いつけど、タダ単に面白がってるだけな気がするのが恐いな。

「と、とりあえず、こう考えるんだ衣玖さん。神社に来れば幾らでも骨休めが出来るんだと」

「…骨休めですか？」

「そうそう。この神社の雑用なんて俺が午前以内に終わらせてるから、午後にくれば結構暇になるぞ」

「そうなんですか？」

「まあね。リュウが来てから私の仕事も減って、かなり楽をさせてもらってるわ」

「だから霊夢も、俺が来た頃に比べてお腹周りがぷにぷにできて……ハッ?!」

調子に乗って物凄い失言を言った事に気が付き、そつと隣りを見てみると……其処には笑顔の霊夢がいた。

ただし、額には青筋を浮かべて、眼は全く笑っていない笑顔の霊夢だな。

「リュウ? 今回の発言について、ちょっと説明して貰いたいんだけど?」

「……サラバツ!!」

「逃げるなーッ!!」

霊夢の笑顔に気をされた俺は、一目散に神社から脱走した。

当然の様に、後ろからは霊夢が弾幕を放ちながら追って来ている正直な所、弾幕ごっこで霊夢に勝てる気がないので、今回は全力で逃げさせて貰う。

「待ちなさいリュウ!!」

「止まったら、殺されるから絶対にいやだーッ!!」

終わり

二人が出て行った博麗神社では、衣玖が独り残されていた。弾幕を放ちながら追いかけている二人を見て

「お二人は仲が良いですね」

そう呟き、心の底から天界よりも仕事を楽しそうだと思うのだ  
った。

本当に終わり

第四十五話 上海人形（前書き）

文字数が安定しないのは、この小説のデフォ。 （約：今回は短い  
す）

## 第四十五話 上海人形

只今夏真つ盛りの幻想郷。

今日も朝から気温が高く、何もしてなくても汗が噴き出してくる。

俺と霊夢は室内の日陰に寝そべり、何もせず、涼しくなるのを待っていた。

「あつ……」

「リュウ、氷おかわり」

「はいよ。……氷」

俺は竜言語魔法を使い、掌の上に小さな氷の塊を作り、霊夢に投げ渡した。

霊夢はそれを見事キャッチし、そのまま自分の口に含んだ。

俺も自分用の氷を作り、口の中に放り込んで、氷の冷たさを堪能する。

「あゝ、氷美味いわ」

「だな。幾ら俺でも、この暑さは辛いし」

俺達は氷を口に含んだまま、その冷たさを甘受しながら全身の力を抜いてダラける。

一応、暑さ対策として大きめの桶に氷塊を置いて、部屋の四方の隅に置いておく。

氷の放つ冷気が、多少なりに暑さを和らげてくれるものの、完全に溶けたらまた氷塊を作らないといけないのが結構手間だったりする。それでも何もしいよりはマシだから、手間でも溶けきる度に作り直しておかないと。

「お邪魔するわよ……って、随分とダラけてるわね」

家の裏庭に誰か来たらしく、身体を起こしてソツチの方を見てみると、其処には大きな袋を抱えたアリスが立っていた。

袋の大きさは大体30cmくらいって所か？ 何を持って来たのかわからないけど、アリスの事だから人形か何かでも持って来たんだろう。

「いらつしゃいアリス。今日は如何したんだ？」

「霊夢に渡したい物が有って持って来たのと、貴方たちに紹介したい子がいるから連れて来たのよ」

「俺達に紹介したい子？」

アリスはそう言うのだけど、彼女のほかに人影らしきものは全然見えない。

独りで居る事の多いアリスだから、遂に他の人には見えないお友達でも召喚してしまったのかと、本気で心配になってしまう。

俺と霊夢は、通常では視覚出来ない存在を見る事は出来るけど、流石に自分の心が生み出した存在を見る事は出来ないって。

「そこはかたなくバカにされた気がするのよ、私の気のせいで良いのよね？」

「ウン、気ノセイダヨ」

「……まあいいわ。それじゃ、上がらせて貰うわね」

「ど〜ぞ〜」

霊夢がダルそうに返事をすると、アリスは呆れた様な溜息を一つ吐いた。

アリスは縁側に腰掛けて靴を脱ぎ始めると、彼女の傍に一体の人形

が浮んでいるのに気が付く。

その人形は前に見たのと同じく、金髪でシックなエプロンドレスを着ているのだが、何処となく他の人形達とは違う様な気がした。なんて説明すれば良いのか分からないけど、他の人形よりも眼に力があるような感じがする。

「なあ、アリス。その人形は如何したんだ？」

「ん？ この子の事？」

「今回はそれ以外の人形を連れてきてないだろ」

「それもそうね」

靴を脱ぎ終わったアリスは、居間に上がり、ちゃぶ台の前に座り込んだ。

アリスが連れて来た人形も、自分の主人に習うように彼女の隣りに座り込む。

だが、全長が30cmくらいしかない人形では、ちゃぶ台の影に隠れてしまつてその姿が見えなくなる。

「其処に居たら二人に見えないから、私の膝に座りなさい」

アリスが人形にそう言うと、人形は何も言わずに頷いてから、彼女の膝の上に移動した。

普段ならそんな事をせずとも自分で糸を操るのに、今回は一体如何したつて言うんだ？

不思議に思った俺は、首を傾げて悩み、ダラけていた霊夢も身体を起こして、ちゃぶ台の前に座る。

霊夢がちゃんと座つたのを見て、アリスが一度咳払いをしてから、膝に座っている人形を俺達に見える様に持ち上げて紹介をしてくれた。



「この子は『上海人形』。前にリュウに聞いたのを、更に自己流にアレンジして誕生した思考する人形よ」

「へえ〜」

俺と霊夢は物珍しさから上海人形を見回していると、人形は恥かしいのか、アリスの手を離れて彼女の背中に隠れてしまう。

上海人形は、アリスの肩からコツチの様子を窺ってくるので、俺は何となく人形に笑い掛けてみた。

「ツ！？」

俺の笑顔を見た上海人形は、表情に変化は無いものの、驚いたのかまた直ぐにアリスの背中に隠れてしまう。

その様子にどんな反応を返せば良いのか分からず、とりあえず苦笑いを零すくらいしか出来なかった。

「…思考するって言うよりも、人見知りするって感じね」

「この子を外に出したのは今日が初めてなのよ。だから、私以外の人に会って驚いてるんですよ」

「それならもつと外に出したりして、経験を積ませたら如何だ？」

「それは分かってるんだけどね。……此処と人里以外に連れて行ったら、どうなるのか分かったもんじゃないわ」

「あゝ納得」

アリスのとんでもない一言に、俺と霊夢は思わず納得してしまった。人と妖怪が暮らす幻想郷だが、全ての妖怪がアリスみたいに友好的な訳じゃない。

この幻想郷には、問答無用で襲って来る危険な妖怪だって存在している。

そんな中、生まれたばかりの上海人形をアチコチ連れ回すのは、そ

れなりのリスクがあるな。

「やっと出来たこの子を壊されたくないし、強い刺激を与えてどんな反応をするのか分からないから、まだアチコチ連れ回すのは早いよ」

「それで比較的人の少ない此処に連れて来たよ」

「あと、霊夢に頼まれていた物を渡しにね」

「……私、何頼んでたっけ？」

「頼んでおいてそれはないでしょ……」

アリスは小さな溜息を吐いた後、隣りに置いておいた袋を開け、中から何かを取り出そうとする。

一体何を頼んだのか知らないけど、アリスに頼むって事は恐らく人形かなにかだろう。

霊夢もそう言うのを欲しがるんだな〜っと思いつつ、アリスが何を取り出すのか見ていると

「あーッ！！」

「ゲッ」

中から取り出されたのは、小さな白い羽を持った薄紅色の竜の人形だった。

竜の人形を作るのは別に良いんだけど、問題なのはその見た目の方だ。

アリスが取り出した人形の見た目が、そのまんま『パンク』の姿をしているんだよ。

確かに前にスケッチされた記憶はあるけど、それだけで人形を作る事なんて出来るのかよ。

……人形遣いアリス・マーガトロイド、恐るべしだな。

「そういえば、アンタに制作依頼だしてたわね。すっかり忘れたわ」  
「……作るの結構苦労したのよ、コレ」  
「そんな不貞腐れないでよ、一応は感謝してるんだから」  
「その言い方に物凄く文句を言いたい」  
「俺はお前ら二人に文句を言いたいんだが……」  
「「なんでよ？」」

二人は俺がなんで怒っているのか検討がつかないらしく、すっ呆けた顔で首を傾げてくる。

そんな二人の様子に、怒りを通り越して呆れ果ててしまい、俺は深い溜息を吐くしかなかった。

……  
……  
……

アリスが人形を渡してから時間は流れて今はお昼時。

この前買い物に行った時に、大量の素麺を買ったので、アリスにも食べるのに協力して貰う事に。

俺は台所で大量のお湯を沸かし、独り寂しく素麺を茹で上げていた。霊夢は貰った人形を膝の上に乗せて、上機嫌にアリスと談笑している。

時折り『パンク』の人形を嬉しそうに撫で回すが、正直なところソレはマジでやめて欲しい。

幾ら人形とは言え、あの竜も俺の一部だから、間接的に霊夢に撫でられている気するんだよ。

……まあ、それを本人に幾ら言った所で、霊夢が聞いてくれる訳がないんだけどな。

「……つと、素麺が茹で上がったか。箸は何処に置いてたっけか？」  
麺を盛り付ける箸を出し忘れていた俺は、鍋を火から離して箸を探し始める。

のびる前にお湯から上げたいんだが、肝心の箸が何処にも見当たらない。

俺が焦ってアチコチを見回していると、上海人形が何処からか見つけた箸を手渡してくれた。

「お、有った有った。ありがとな、上海」

「……………」

俺がお礼を言つて箸を受け取ると、上海人形は何も言わず主人の元へ帰って行った。

アリスの話だと、糸が無くても自由に動ける上に、物事を考える事が出来るそうだが、まだ話すことは出来ないらしい。

それに付いては感情の発露と一緒に、時間を掛けて学習させていくと本人は言っていたか。

感情もそうだが、ちゃんと喋れるのが何時になるのか分からないそうだし、随分と気の長い話だよな……。

「……………って考えてる暇はなかった。早く素麺を上げないと」

俺は若干慌てつつ、鍋に入っただまの素麺を引き上げ、手早く箸に盛り付けた。

## 第四十六話 雲を呼ぶ剣

七月も終わり、そろそろ八月に入ろうかと言う今日この頃、俺は古めの直刀を手に、境内のど真ん中で独り立ち尽くしていた。

これは前に萃香が集めた龍の力を持っている剣で、今日はこの剣の力を見ようかと思っている。

最初はこんな事をせず元の場所に返そうと思ったのだが、剣の持ち主が誰なのか分からないし、下手な輩に渡すわけにもいけないので、博麗神社で管理する事になった。

「……さて、始めるか」

俺は鞘に沢山張られているお札を剥がし、この剣に施されている封印を少しずつ解いていく。

封印が解除されていくに連れて、剣からは圧力に似た何かを感じ取れるようになる。

イメージとしては、巨大な蛇から品定めをする様に無言の圧力を掛けられているような感じだ。

封印されている時点で普通の剣じゃないと分かっていたが、流石にこの圧力は予想していなかったな。

……だが、俺はこれでも竜の端くれだ。この程度の圧力に屈したりはしない。

俺は剣の圧力に負けない為に、心の奥底に眠っている竜の力を全身に張り巡らせ、剣の圧力に対抗し始める。

その影響で俺の身体から赤いオーラが漏れるが、この程度の事は大した問題にはならない。

剣から放たれる圧力に抗いながら札を剥がしていくと、今度は鞘の

隙間から雲の様なオーラが漏れ始めた。

雲の様なオーラからは害意は感じないものの、このオーラが出てから俺の頭上に何故か雲が掛かる。

その現象を不思議に思いつつ、鞘に張られている札を全て剥がし、剣を引き抜こうとしたその時。

「リュウ、其処で何をしている」

「ッ!？」

突然鳥居の方から声を掛けられ、驚いた俺は咄嗟に剣を鞘に納めてしまう。

剣を納刀した瞬間、俺の頭上にあつた雲は綺麗に消え去り、空は何時もと変わらない晴天が広がっていた。

「……今の雲はなんだったんだ？」

「それは此方の台詞だ。お前は一体何をしている」

「あ、上白沢さん」

先ほど俺に声を掛けてきたのは、寺子屋で教師をしている上白沢さんだった。

人里に住んでいて、ウチの神社に来る事なんて滅多にないのに今日は如何したんだろ？

「何やらおかしな剣を持っているが、それはお前の剣か？」

「まあ、一応。変な封印が施されていたので、ちよつと解除してたところです」

「……お前独りで出来る様な事か？」

「暴れても力付くで抑えますから、なんとかなりますよ」

俺が気楽そうに笑いながら言うと、上白沢さんは呆れたように溜息

を吐いた。

多分俺の発言に呆れてるんだろうけど、何時もの事なので諦めてくれるとありがたいかな。

「…まあいい。それよりもリュウ、霊夢の奴はいるか？」

「霊夢なら、今頃は部屋でバテてると思いますよ」

「暑いのは分かるが、些かダラけ過ぎではないか？」

「何時もの事です」

「……頭の痛い話だな」

霊夢の生活態度を聞いた上白沢さんは、頭痛を抑えるように頭を抱える。

俺からしたら本当に何時もの事なので、あまり気にした事はないんだけど……そんなに酷いのか？

他の巫女の生活がどんなのか知らないけど、霊夢はアレで良い様な気がするけどな。

「それは兎も角、今日は何の用ですか？」

「……今日は仕事の依頼をしにな」

「仕事ですか？」

「嗚呼。詳しくは本人に直接話ささ」

そう言うと上白沢さんは、真っ直ぐに母屋の玄関の方へと歩いていった。

一緒に着いて行っても良かったのだが、このまま行けば確実に霊夢は彼女の頭突きを喰らう破目になるな。

流石にそれはちょっと可哀相だし、此処は先回りして霊夢に上白沢さんが来たことを教えに行くか。

そう考えた俺は、上白沢さんとは別に方向に歩いていき、縁側から

母屋の中に入る。

急いで靴を脱ぎ捨て、早足で霊夢の部屋に向かい、ノックもせず彼女の部屋の障子を開け放つ。

「霊夢、上白沢さんが来たぞ」

障子を開けた俺の眼に飛び込んで来たのは、衣服をはだけさせて眠っている霊夢の姿だった。

衣服がはだけているのは、今日の気温も高いからだと思うが……これはちよつと眼のやり場に困る。

それ以前に、この状況で霊夢を起こそうものなら確実に『夢想封印』を叩き込まれる。

「……………」

色々と考えた結果、俺は霊夢の部屋に入っていないし、中を見てもいない事にした。

俺だって命は惜しいし、悪いことに今は上白沢さんも来ているんだ。もし、霊夢の柔肌を見たなんてあの人に知られたら……俺も確実に頭突きを喰らうな。

「俺は何も見ていない俺は何も見ていない俺は何も見ていない……よしッ！」

自分にそう言い聞かせ、今見た事を記憶から消し去った俺は、上白沢さんを出迎える為に玄関に向かう。

霊夢の部屋の障子を閉め、そのまま右を振り向くと……其処には極上の笑みを浮かべる上白沢さんの姿があった。

「リュウ、何か言う事はあるか？」



「えっと……ごめんなさい」  
「フンッ！」

上白沢さんに両肩を掴まれた俺は、そのまま彼女から頭突きをもらってしまつた。

里の人達から？彼女の頭突きは見た目以上に痛い？と聞いてけど、これは予想以上に痛い……。あまりの痛みからその場で蹲っていると、上白沢さんは俺の横を通りすぎ霊夢の部屋に入る。

「何時までも寝てないでいい加減起きろ！！」

部屋の中からは、怒鳴る上白沢さんの声と硬い何かを力いっぱいぶつける音が聞こえて来る。

俺は頭の痛む箇所をさすりながら、心の中で霊夢に向かって合掌するのだった……。

……  
……  
……

アレから少しだけ時間が経って、俺は眼を覚ました霊夢と共に、上白沢さんから今回の依頼の内容を聞く事になった。まだ頭突きされた箇所が痛むものの、話を聞く分には大した影響はないだろう。

俺は用意した氷入りの水を一口飲んで、二人の会話の邪魔に為らない様に黙っている事にする。

「それで今回の依頼だが……」

「また妖怪でも出たんでしょ。今度はどんな妖怪よ」

「いや、今回は雨乞いを頼みたい」

「……面倒な依頼してくるわね」

依頼の内容を聞いた霊夢は、心の底からめんどくさそうな顔をして呟く。

上白沢さんにも聞こえているはずだが、彼女は眉一つ動かさず話を続ける。

「此処最近の猛暑日の影響か、人里の作物が萎れてきていてな。このままでは今年の作物は凶作になってしまう」

「別に川の水が干上がった訳でもないでしょ？ それで間に合わせられないの？」

「間に合わないからこそ、こうして依頼しに来ているんだ」

「……まあ、そうでしょうね」

一言呟いた霊夢は、そのまま黙り込んで何かを考え始めた。

里の事を想うのであれば、此処は引き受けるしかないと思うんだが……何かあるのか？

霊夢が何を考えているのか分からないまま、無常にも時間だけが刻々と過ぎ去っていく。

彼女が考え込み始めて大体十分くらいが経過した時、漸く考えが纏まったのか、霊夢は大きな溜息を一つ吐いた。

「どの位の効果があるか分からないけど、やれるだけの事はやってみるわ」

「頼む」

「それじゃ、ちやつちやと準備するから少し待ってて」

「俺も何か手伝おうか？」

席を立ち上がり、そのまま何処かに行こうとする霊夢に声を掛ける。何をするのか分からないけど、俺に手伝える事なら少しだけでも手伝ってやりたい。

そんな思いで霊夢に尋ねてみたが、彼女は顎に手を当てて難しい顔をする。

「有り難いけど……今回は手伝える事なんて無いわよ」

「そうなのか？」

「ええ。私がやろうとしてる雨乞いは、神仏に祈りを捧げるやつだから、祭壇を整えたら直ぐにでも始めるわ」

「あゝ確かにそれだと俺に出来る事はないな」

「そう言う事。分かったら今回は大人しくしてて」

「了解っと」

俺が返事をする、と、霊夢は一つ頷いてから居間を出て何処かへと向かっていく。

さっきの台詞を考えれば、恐らく神社本殿にある祭壇を整えに行っただろう。

何時もの妖怪退治なら俺も手伝えるのだが、こついった神事だともする事が無いな。

俺が一つ溜息を吐くと、上白沢さんが不思議そうにこつちを見ているのに気が付いた。

「えっと……なにか？」

「いや、前々から気に為っていたのだが、お前達は一体どう言う関係なんだ？」

「如何言つて……居候と家主ですかね」

「そんな風には見えなかったがな」

「そうですか？」

「嗚呼」

上白沢さんはそう頷いてから、出しておいた氷入りの水を飲み干す。俺は？変な事を言う人だな？と思いつつ、コップの中に残っていた水を飲み干した。

……  
……  
……

雨乞いの準備を終えた霊夢は、本殿の祭壇前で祝詞の様なものを呟き、神に祈祷をし始める。

上白沢さんも霊夢と一緒に祈祷しているが、俺は離れたところでその様子を眺めていた。

俺も二人と一緒に祈りを捧げた方が良さんだろうけど、どうも神様に祈りを捧げる気には為れない。

あの世界での経験がそうさせるのか、俺が神殺しの力を持っているからか分からないが、二人みたいに祈りを捧げれそうになかった。

霊夢は少しの間こうして祈祷していたら、近くに置いていた沢山の鈴が付いている道具と扇子を手に取り、突如その場で立ち上がる。

二つの道具を手に取った霊夢は、手に持った鈴で音楽を奏で始め、その場で踊り始めた。

霊夢は両手を大きく動かしたり、二つの道具を細かく動かしたりして、無心になって舞い続ける。

俺には踊りの素晴しさなんてのは良く分からないが、ああして音に

合わせて舞う霊夢は凄く綺麗だと思った……。

神に捧ぐ舞いは大体五分間くらいは続いたのだろうか。

一曲踊り終えた霊夢は、また祭壇の前に座り込み、二つの道具を置いて祈る様に祝詞を呟く。

その祝詞も呟き終わると、霊夢は祭壇の方に一礼してから立ち上がり、コツチを振り向いて来た。

「はい、これで雨乞いは終了。もう楽にして良いわよ」

霊夢が気楽そうに言うと、一緒になって祈っていた上白沢さんも立ち上がる。

「済まないな霊夢。……後はちゃんと雨が降ってくれば良いんだが」

「それは如何かしらね。一人祈ってないのがいるし」

「……そうだな」

溜息を吐くように呟いた上白沢さんは、俺の事を責める様な眼差してコツチを睨んでくる。

その視線にたじろいでしまうが、此処で逃げ出しても仕方が無い。

上白沢さんの眼力に負けないように、俺も彼女を睨み返すことにした。

「なんですか」

「いや、神社に住んでるのに、こつ言う事には不真面目なのだなと思っただけ」

「……………」

「ちよつとアンタ等、こんな所で喧嘩なんかしないでよね」

俺と上白沢さんの間にあった不穏な空気は、霊夢の一言で消え去る。だけど、何となく此処に居づらくなつた俺は、本殿を出て境内の真ん中に向かう。

境内から空を見上げてみると、雲一つ無い見事な晴天が広がっている。

今さつき雨乞いを終えたばかりで、直ぐに雨が降ったりはしないだろうと思っていたが、此処まで見事な晴天だと本当に雨が降るのか不安になる。

「あら、リュウさん。この様なところで如何かしたのですか？」

「衣玖さん」

俺が呆然と空を眺めていると、空の向こうから衣玖さんが境内にやって来た。

この間の一件以来、彼女は偶に神社に遊びに来る事があるから、突然やって来ても不思議じゃない。

……そう言えば、衣玖さんは『空気を読む程度の能力』で天候の氣質が分かるんだつたな。

彼女の能力を使えば、コレからの天気が如何なるか分かるんじゃないのか？

天気に不安を感じた俺は、思い切つて衣玖さんに質問して見る事にした。

「……なあ、衣玖さん。今日これから雨が降つたりするの？」

「今日ですか？ ……恐らく今日一日は晴れだと思えます」

「急に変わつたりしないのか？」

「ないと思いますよ」

「……そっか」

衣玖さんの回答を聞いた俺は、表情を変えないまま心の中で落胆と軽い後悔をする。

こんな事なら、ちゃんと祈りを捧げておけば良かったと思うのだが、やっぱり神に祈りを捧げる気には為れそうにない。

もし今回の雨乞いに失敗したら、博麗神社の信仰が更に減りそうだが……如何しても駄目みたいだ。

このまま黙って失敗するのを待っている訳にも行かないし、なんとかして雨を降らせないとな。

一番手っ取り早いのは、俺が魔法を使って雨を降らせる方法だが……

…あの魔法だと嵐になるか。

ランクが一番低い魔法でも、暴風雨になるから作物が吹き飛びかねない。

魔法を使うのなら雨だけを降らせるような魔法だが、そんな都合の良い魔法は俺のスキルにはない。

「さて、如何したもんかな？」

「何に悩んでいるのか存じませんが、龍神様からの伝言をお伝えしても宜しいでしょうか？」

「龍神の伝言？」

「？叢雲は貴様に預ける、大切に保管しろ？との事です」

「……なんの事言っているんだ？」

「前に鬼が集めた剣の事です。わたくしも龍神様から聞かされたときは驚きました」

「ん？ あの剣ってそんなに凄い剣なのか？」

「はい。正式名は『天叢雲剣』あめのみくもりのしんけんと言い、龍王『ヤマタノオロチ』より出土した太刀にして、三種の神器の一つに数えられる神剣です。龍から出土したと言う事もあり、かの剣には天を操り雨を降らす力を持っていると……」

「天を操る………それだ!!」

「キヤアツ?!」

衣玖さんの話を聞いた俺は、彼女を境内に残し、急いで部屋から叢雲を取りに向かう。

縁側で靴を適当に脱ぎ散らかし、自室に無造作に置いていた剣を手取る。

急いで境内に戻ろうとすると、不機嫌そうに眉をよせた霊夢が居間から顔を出す。

「ちよつとりユウ。家の中でドタバタ走らないでよ」

「悪い、今急いでるから後で」

霊夢からの説教も軽く無視し、靴の踵を踏みながらも俺は急いで境内に戻る事にした。

後ろから霊夢の変な視線を感じるが、今はそんな事を気にしている場合じゃない。

この剣の力を使えるのか分からないけど、安全に雨を降らせるにはコイツの頼るしかないな。

俺は霊夢の視線を無視し、境内でこの剣を解放する事にした。

………

………

…

駆け足で境内に戻った俺は、驚いて呆然としている衣玖さんを余所目に、封印を解いておいた叢雲を鞘から抜く。



鞘から抜かれ、頭わになった天叢雲剣の刀身には一切のサビは見受けられず、表面は揺らめいているように見える。剣の刀身からは、封印を解除したいた時に出た雲のオーラが出現し、刀身に纏わり付いた。

ソレと同時に、俺の目の前には八つの頭と尾を持つ大蛇の幻影が姿を現す。

恐らくコイツが、さっき衣玖さんの言っていた『ヤマタノオロチ』とか言う龍の姿なんだろう。

今見えている幻影は、この剣の中にある残留思念の様なものが同じ竜である俺に見えているのかもしれない。

オロチの幻影は何も言わず、ただジツと八つの頭で俺の事を見詰めてくる。

コイツが何を訴えているのか分からないが、俺がこの龍に言っている言葉はたった一つだけだ。

「まだ暴れたりしないのなら俺がお前を振るってやる。だから俺に力を貸してくれ」

俺がオロチの幻影に呼びかけると、八つの頭は何も喋る事無く俺に頭を垂れる。

頭を垂れると、オロチの幻影は空気に溶けるように消えてなくなり、刀身に纏わり付いているオーラの量が増加した。

ソレを見た俺は、誰に言われる訳までも無く、自然と叢雲の刀身を指でなぞり、剣全体にそのオーラを纏わせた。

その状態のまま剣を天に向かって突き上げると、晴天だった空は一転し、どす黒い曇り空に変わる。

突き上げた剣を軽く振り下ろした瞬間、どす黒い雲から雨が降り出し始めた。

俺は突然の雨に打たれながら、天叢雲剣が力を貸してくれたことに

喜び、全身の力を抜くように息を吐き出した。

「リュウさん、貴方は一体何をしたのですか？」

「別に大したことはしてないよ。ただ、この剣の力で雨を呼んだだけだ」

衣玖さんにそう言いながら、俺は雨に濡れる剣を一振りして鞘に仕舞う。

もう少しだけ雨に打たれていようかと考えていると、後ろから誰かが立ち俺を傘の中に入れる。

一体誰だと思い、後ろを振り向くと……其処には俺と一緒に傘に入りながらも、不機嫌そうにしている霊夢の姿があった。

「何してんだ霊夢？」

「それはコツチの台詞よ。全く、人が雨乞いをしたってのになんでアンタが雨を降らせてるのよ」

「……衣玖さんの話だと天気は変わらないそうだからな」

「雨乞いってのはやって直ぐに振るもんじゃないの。暫くは様子を見ておかないと」

「それでも振らなかつたら如何するんだ？」

「その時は……その時よ」

俺と霊夢は、口論と言うには些か静か過ぎる言い合いをし始める。

別に霊夢の力を信じてない訳じゃないけど、あのまま黙っていても天気は変わらない気がした。

だからこうして叢雲の力を使って、雨を降らせただが……それが気に入らなかつたのかな？

でも、アレだけ綺麗な舞いを披露してくれたのに、ただの徒勞に終わるなんて悲しいだろ。

だから俺は、霊夢が見せてくれた舞いに応えたくて、この剣の力を

使ったんだがな……。

「大体アンタは」

「あの…一つ宜しいでしょうか？」

「なによ」

「霊夢さんは今日雨乞いを行ったのですか？」

「そうよ。…もつとも、成果をコイツに掻っ攫われて、失敗したけどね」

「……トゲのある言い方だな」

「事実じゃないの」

衣玖さんがしてきた質問に、霊夢は不機嫌そうな声で答える。

……やっぱり勝手に雨を降らせたのが気に入らないのか。

この調子だと、今日一日はこの事で文句を言われそうだな。

「霊夢さん、別に今回の雨乞いは失敗してないと思いますよ」

「はあ？ 何処を如何見たらそうなるのよ？」

「巫女の祈りに応えて水神レイムさんが雨を降らせた。龍が水神であるのなら、今回の雨乞いは間違いなく成功してます」

「……………」

衣玖さんの言い分を聞いた霊夢は、何も言えなくなり呆然と立ち尽くす。

俺としては神様扱いされる事に異を唱えたいが、霊夢の舞いに応えなかったのは本当の事だ。

何時もなら反論してるけど、今回は衣玖さんの言い分の方が正しいのかもしれない。

「さて、コレ以上雨に打たれると風邪を引いてしまいますので、わたくしは神社で雨宿りさせて頂きますね」

そう言うと衣玖さんは、俺達の返事を聞く前に母屋の方へと向かっていく。  
残された俺と霊夢は、雨を防いでくれる傘の中でなんとも言えない空気に為る。

傘の下で微妙な沈黙が続く中、先に口を開いたのは俺の方だった。

「霊夢」

「…なによ」

「さっきの舞い、綺麗だったぞ」

「ッ!? …………… あ、ありがとう」

「…ん」

霊夢は消えるように小さな声で返事をし、俺は一つ頷いてソレに答える。

止む事無く雨が降り続く中、俺と霊夢は一つ傘の下でその様子をジッと見詰めるのだった……。

第四十六話 雲を呼ぶ剣（後書き）

知っている方もいると思いますが、天叢雲剣の幻想入りは公式の設定です。

詳しくは『東方香霖堂』 Curiosities of Lost Asia. を読んでください。

第四十七話 色鮮やかな門番（前書き）

ネタが尽きs……じゃなくて、気分転換の戦闘回です。

## 第四十七話 色鮮やかな門番

残暑厳しい八月の終わりごろ、今日はフランドールと遊ぶために紅魔館にやってきた。

夏場は晴れの日が多かったから、向こうが神社に遊びに来る事は殆どなく、俺が遊びに行く事の方が多かった気がする。

フランドールは吸血鬼だし、真夜中にやって来ても不思議じゃないんだが……確実に寝れないので止めてもらってる。

深夜遅くにアイツと弾幕ごっことか、出来ない訳じゃないけど可能な限りやりたくない。

そんな事を考えながら紅魔館の門の前に辿り着くと、門番がなにやら奇妙な踊りをしていた。

踊りと言うよりも、穏やかでゆったりと流れる拳法のようにも見えなくもない。

前に見た霊夢の舞いの様な流麗さはないけど、アレも何らかの舞踏の一種なのかもしれないな。……でも、奇妙な動きだ。

「門番、そんなところで何をしてるんだ？」

「あ、リュウ。こんにちわ」

俺が声を掛けると門番は動きを止めて、礼儀正しく挨拶をしてくる。さっきまで奇妙な踊りをしていた割には、門番の額に汗一つ無く、呼吸も全く乱れていない。

それほど長い時間動いていないのかと思ったが、彼女の足元の草は何度も踏み締められた様に力なく倒れていた。

少し踏んだ程度で此処までなるとも思えないし、少なくとも二・三時間はさっきの動きをしていたと思う。

「……？ 私の足元に何か在るんですか？」

「踏み締められて倒れてる草が」

「三時間近く眠気覚ましの太極拳をしてましたからね。この位は仕方が無いですよ」

「太極拳って、さっきの変な踊りの事か？」

俺が何の気なしに尋ねてみると、何故か知らないけどいきなり門番が怒り出した。

「変な踊りってなんですか！ アレでも立派な武術の一つなんですよ……！」

「んな事言われても知らないし」

「知らないってなんですか！ あなたは中国武術を舐めてるんですか？！」

「……お前の怒りのポイントが分からない」

なんで思ったことを口にしたただけなのに、此処まで怒られないといけないんだ？

太極拳なんて見るのも聞くのも初めてだと言うのに、一目見ただけでアレが武術の一つなんて理解出来る訳無いだろ。

この事を門番に伝えたとしても、彼女の怒りは収まりはしないんだろうな。

「良いでしょう。リュウがその様な態度を取るのなら、中国武術の力を思う存分に思い知らせてあげます……！」

「なんでそうなるんだよ？！」

「問答無用……いざッ……！」

言いたい事だけ言うと、門番は素早く構え拳を突き出してきた。



俺は咄嗟に愛刀を抜き、剣を盾代わりにして彼女の拳を防ぎつつ、後ろに跳んで距離を取る。

物凄く今更な事なんだけど、幻想郷の住人って人の話を聞かない奴が多いよな。

何時も良く分からない理由で襲い掛かってきたりするし、もう少し人の話を聞いてくれても良いだろ。特に妖夢とか妖夢とか妖夢とか。なんど倒しても立ち向かってくる根性は凄いなと思うが、もうちょっと来る回数を減らしてくれても良いだろ。

「……って、今はそんな事を考えてる暇は無かった」

俺が急いで剣を構え直すと、門番はダツシユでコツチに向かって来た。

門番の動きに合わせるように剣を振るい、彼女を俺の懐に潜り込ませない様にする。

リーチで言えば剣を使う俺の方に分があるものの、完全に密着されてしまうと一気に俺の方が不利になってしまう。

これは得物の特性と云うか、懐に潜られると思うように剣を振れない上に、俺が振り下ろすよりも彼女が繰り出す拳の方が速い。

門番の攻撃力がどの程度か分からないが、密着されると一気に体力を削られる可能性がある以上、彼女を懐に潜り込ませる訳には行かない。

そう思いながら、俺は剣を縦横無尽に振るい、門番の接近を拒み続ける。

俺は肩を斬り捨てるように袈裟斬りを放ち、其処から胴を薙ぐように剣を横に振るう。

門番に袈裟斬りと胴薙ぎは躲かれ、間合いの侵入を許してしまうが、俺は直ぐに刃を反し、彼女の脇腹から肩に向かって一気に切り上げる。

その斬撃も後ろに跳ばれて避けられるが、俺は間合いを更に詰めて彼女の頭上から股下にかけて真っ直ぐ振り下ろし、追撃として胸部に向かつて鋭い突きを叩き込む。

門番は最後の1撃をギリギリの所で防いだものの、突きの勢いに負けて後ろに押し飛ばされる。

「むう、流石に妹様の遊び相手を務めるだけの事はありますね」

「そらどうも」

俺は剣を構え直しつつ、褒められてるのか怪しい言葉を軽く聞き流す。

ふと空を見上げると、箒に乗った黒い影が屋敷の方に突撃して行く姿が眼に入った。

箒に乗って空を飛ぶやつなんて俺は一人しかいないが、門番としてアイツを止めなくて良いか？

「中々接近できませんし、此処は戦い方と変えましょう」

「おい、中国武術は如何した」

「そんな細かい事を気にしてはいけない!!」

「細かく無いからな!」

突拍子も無い言葉についてツッコミをいれてしまいが、門番はそんな事お構い無しに虹色に光る針の様な弾幕を飛ばしてくる。

俺は剣でその弾幕を切り裂いていると、いきなり門番が自身の地面を力一杯蹴り上げた。

彼女が蹴り上げた地面から虹色の渦が発生し、真っ直ぐ俺に向かつて襲いかかって来る……がそれ自体は大した脅威にはならない。

向かってきた渦も難なく切り払い、次は何が飛んでくるのかと警戒している

「虹符『烈虹真拳』！」

門番はスペカを宣言し、俺に向かって虹色の光を放つ突きを扇状に乱打してくる。

俺は力を込めた斬撃の弾を飛ばし、彼女の突きを相殺しようとしたが、放った斬撃は無数に繰り出される突きの前に掻き消されてしまった。

斬撃を掻き消してなお止まる事無い突きを前に、俺は自分に当たりそうな突きだけを捌いていき、それ以外の突きは最小限の動きで回避していく。

一見狙いを付けて拳を繰り出してるように見えるが、実際に受けてみると全くのデタラメに繰り出している拳が多い。

恐らくは扇状に繰り出す事で、低い命中力を補っているんだろ。

だから自分に当たる奴だけを捌いていければ、それ以外の拳は無視しても直接当たる事はほぼ無くなる。

そうやって突き出してくる拳を捌いていると、門番は拳を繰り出すのをやめた。

この隙に一気に攻め込もうと剣を振り下ろそうとしたが

「気符『星脈弾』！」

門番は直ぐさま二枚目のスペカを宣言し、俺に向かって青白く光る大型の弾を放って来た。

彼女に向かって振り下ろす筈の剣だったが、目の前に現われた弾に邪魔をされて直撃させることは出来ず、代わりに放たれた弾を斬り裂いた。

剣で弾を斬り捨て、直ぐにでも彼女に追撃をしようとしたが、ソレよりも早く門番に間合いを詰められ、鳩尾の辺りに肘を叩き込まれてしまう。

「かはっ」

鳩尾に肘を喰らい、肺に貯まっていた酸素を吐き出してしまい体勢が崩れる。

其処に追撃として掌底を叩き込まれ、更に身体を回転させて勢いの乗った裏拳を顔で受け、オマケに腹に膝を叩き込まれた。

これだけで今朝食べた物を戻しそうに為るが、彼女の攻撃はコレだけでは終わらないようだ。

「気符『地龍天龍脚』！」

スペカを宣言した門番は、力強く踏み込み無理矢理俺の身体を宙に浮かせ、其処に力を込めた跳び蹴りを叩き込んでくる。

宙に浮んでいた俺は、その跳び蹴りで身体ごと更に上へと運ばれ、そのまま蹴り飛ばされてしまう。

口の中に胃酸か何かが上つて来たが、それを無理矢理飲み込んで空中で体勢を立て直し、なんとか地面に着地した。

門番も今地面に降りて来た所で、今すぐ追撃をしてくると言う事は無いだろう。

俺はポケットからスペカを取り出し、門番に聞こえるように宣言する。

「人符『現世斬』！」

俺の声に反応して門番が距離を取ろうとするが、俺はソレよりも速く彼女に斬り込んだ。

目視出来ないほどの速度で剣を叩き込まれた門番は、今の一撃の威力に押されて上へと吹き飛ばされていく。

吹き飛んで地面に戻ってきた所を、俺は追撃として上段から剣を振り下ろし、彼女の身体を穿つ位の勢いで突き刺し、肩口から脇腹に

掛けて斬り裂く。

更に剣を脇腹の辺りで構えて、さっきの『現世斬』の要領で彼女の身体を今度は十字に斬り裂いた。

此処で相手からの反撃を警戒した俺は、一度距離を取り門番の出方を窺う。

本当ならもうちょっと追撃を叩き込みたいところだが、あの技は如何しても後が続かない。

やっぱり、一瞬にして十字に斬り裂くのが無茶なんだろうか？ でも、あの技は結構気に入ってるんだよな。

「うぐぐ……。まさか、此処まで反撃を食らうとは思ひもしなかった」

「そう言うアンタは、見た目以上に丈夫だな」

「この位でないと此処の門番は務まりませんか」

「（……ちゃんと門番の役目を果たせてるのか物凄く疑問だけどな）」

俺は彼女の普段の勤務態度を思い返し、つい心の中でツッコミを入れる。

だが、何度も魔理沙に屋敷へ侵入されているところを考えると、如何してもそうツッコンでしまふ。

そんな事とは露知らず、門番は拳を握り締めて戦闘続行の意思を示してくる。

この後フレンドールと遊ぶ事を考えると、こちら辺で終わりにしたいが……此処でそんな事を言い出したらきつと怒るだろうな。

俺は疲れた様な溜息を吐きながら、剣を構え直し彼女の意思に応える為に新たなスペカを取り出す。

「剣技『桜花閃々』」

スベカを宣言した俺は、先ほどの技と同じ様に脇腹で剣を構え、地面に斬撃を叩き込みながら目視出来ない速度で彼女に向かっていく。門番には直接攻撃しないものの、俺が駆け抜けた道の上から桜色の剣気が立ち上り、その一部が彼女に襲い掛かる。

桜色の剣気は彼女の気に防がれてしまいが、その背後には致命的な隙が生じた。

俺は直ぐに反転し、門番の背中に向かって剣を振り払い、更に下段から斬り上げる。

背後から攻撃を受けた彼女は直ぐに振り返るが、それよりも先に俺が肩口に向かって剣を振り下ろす。

剣は門番の右肩に入ろうとしたが、彼女は剣の動きに合わせるように動き、俺の背後へと周りこんだ。

その状態から背中に強烈な一撃を貰い、勢いのあまり前方へと押し出されてしまう。

痛む背中を無視して俺は直ぐに振り返り、そのまま斬撃の形をした弾を門番に向けて飛ばす。

阻むモノもなく、斬撃は真っ直ぐ門番へと向かっていくが、彼女はこともあろうに拳一つで俺の斬撃を叩き壊した。

あまりにも突然の出来事に驚いていると、門番がコツチに向かって跳ね上がり、踵落としみたいいな蹴りを叩き込んでくる。

俺は咄嗟に剣を振り上げ、今の一撃を捌くものの、彼女の接近を許してしまう。

間合いを詰めた彼女は、俺に素早く掌底を叩き込み、その場で回転しながら自身の肩を叩き付け、オマケに脚払いをして俺の体勢を崩してきた。

俺は仰け反るように後ろに倒れそうになるが、ムリヤリ空中で回転

して倒れこむのを回避しながら、なんとか彼女との距離を取る。  
此処から反撃しようとする早く体勢を立て直したその時

「華符『彩光蓮華掌』！」

彼女が懐から取り出した新たなスベカを宣言し、真っ直ぐ俺に向かつて突撃して来る。

咄嗟にこの技はヤバイと判断し、なんとか回避しようとしたが……間に合わず、彼女の掌底を叩き込まれた。

その一撃自体は大した事ないのだが、俺の体内に何らかの力を流し込まれたらしく、その力が段々と虹色に輝き出す。

光は俺の視界を覆うくらいにまで膨れ上がり、限界にまで膨れ上がったところで一気に弾け、体内から途轍もない衝撃が全身を駆け巡った。

「グアッ!!」

駆け抜けた衝撃に意識を失いそうになるが、なんとか歯を食いしぱり踏み止まる。

直ぐに門番の方を振り向くと、彼女の拳が俺の直ぐ目の前に迫り、当たる直前で止まった。

口には出さないものの、門番の眼は？降伏して下さい？と訴えているようにも見える。

確かに今の俺は、後もう一撃でも喰らえば倒れる程に弱っているが……自分から降参する心算は微塵も無い。

俺は戦い続ける意思表示に彼女を睨み返し、握り締めている剣にありったけの力を込め、刀身は今までに見た事のない位に鈍く輝く。その様子を見た門番は、眼を瞑り一呼吸置いてから……寸前で止めていた拳を突き出してきた。

普通なら回避出来ない様な攻撃だが、俺は頬をざっくりと切られな

がらもなんとか回避する。

そして握っている剣を逆手に持ち直して地面に突き刺し、溜めていた力を一気に解放して……巨大な剣気を門番の足元に発生させ、彼女の身体を天高く吹き飛ばした！

「…………ツ!?」

カウンター気味に繰り出した一撃がトドメとなり、門番は空中で気を失いそのまま地面に落下して来た。

なんとか立ち上がった俺は、彼女が地面に激突する前に受け止めた後、無造作に放り投げる。

彼女を放り投げた時点で限界に来ていた俺は、そのまま地面に仰向けで倒れ込み、大の字になって意識を失った……。

……………  
……………  
……………

戦いで気を失っていた俺は、誰かに頬を突かれる感覚で眼を覚ました。

眼を覚まして最初に飛び込んできたのは、暇そうに俺の頬を突くフランドールの顔と、何故か一緒に居る魔理沙の姿だった。



「……何してんだ、フランドール」

「あ、眼を覚ました」

「おそようだぜ、リュウ」

「其処は？こんにちわ？で良くないか？」

魔理沙にツツコミを入れつつ、俺は身体を起こして軽く腕を伸ばす。結構寝ていたのか軽く頭がボーっとするが、この位なら大したことはないだろう。

俺は状況を確認する為に今居る場所を軽く見渡してみた。

壁は紅魔館特有の紅で統一されているが、この部屋には窓がなくランプの灯りだけが部屋を照らしている。

部屋のアチコチに壊れた人形が散乱している所からみて、恐らく此処は地下にあるフランドールの部屋だろ。

前に何度かお邪魔した事があるが、なんで俺はこんな所で寝ているんだ？

「……？ 如何したのリュウ？」

「いや、なんで俺は此処で寝てるのかな？って」

「それなら咲夜の奴が此処まで運んできてたぞ。なんでも？門の所で倒れてた？とか言ってたな」

「……そっか」

咲夜の手を煩わせたみたいで申し訳なく思いつつ、態々運んでくれた事に心の中で感謝する。

門番はどうなったのか分からないけど、彼女の扱いを考えるにきつと外で放置されるんだろうな。

「リュウも起きたし、早速遊ぼう！」

「寝起きなんで弾幕ごっこは勘弁な」

「ええ〜!!」

「何して遊ぶのか分からないが、折角なんでわたしも混ぜろ!!」

「……なら序でにパチュリーと小悪魔も巻き込むか」

「それは面白そうだな。早速アイツ等の所に行くぜ!!」

俺の提案に乗ってきた魔理沙が、独り先走って部屋から物凄い勢いで出て行った。

魔理沙の行動力に呆れつつも、寝起きであのテンションについていけないか物凄く不安だ。

「あの二人と遊ぶのって初めてかも……」

「二人共顔見知りなんだから、変に緊張する必要も無いって。……」

ほら、行くぞ」

「うん!」

俺はフランドールの手を引いて、この子の歩調に合わせてながら魔理沙の後を追いかける。

戦った後だからか、それとも寝起きだから分からないけど、まだ身体も気だるいし、あんまりテンションの上がる遊びはしたくないな。

## 第四十七話 色鮮やかな門番（後書き）

何気に美鈴は格闘戦ならレミアと互角に戦えるとか。でも弾幕ごっこは……言うまでも無いって感じですね。

ちなみに、リュウが最後に使った技はブレス？の『絶命剣』と言う技です。

序盤から使えて終盤まで使える技です。

命中したら100%の確立で必殺クリティカルが発生するから、結構強いんですよ。

## 第四十八話 人形のお使い

アリスSide

今年は暑かった八月も過ぎ、少しずつ季節が移り始めた九月のある日。

今日はお母さんと夢子が私の家に遊びに来る事になってる。

本当なら上海が出来た時に呼んでいたのだけど、お母さんが？暑いからいや？とか言って、あの子のお披露目が今日までずれてしまった。

お母さんの暮らしている魔界に比べれば、確かにコッチは暑いけど……その位我慢しても良いじゃない。

私は二人を迎えるための準備をしながら、心の中で思いつきり愚痴を言い続けた。

本人に直接文句を言っても良いんだけど……あの人の事だから軽く無視しそつなのよね。

「まあ、それは何時もの事だから良いとして……随分と遅いわね」

私は壁に立てかけてある時計を見ながら、お使いから未だに戻らない上海を心配する。

お使いと言っても香霖堂まで買い物頼んだ程度だし、距離もそんなに離れている訳でもないから直ぐに帰ってくると思っただけ……何か遭ったのかしら？

この森は、大量に生えている化け物茸の影響で人妖問わず生き物があまり寄り付かない環境だし、あの子が妖怪に襲われたとは考えにくい。

渡したお金を落としたとしても、そうなった場合は直ぐに戻るよう

に言い聞かせてるし……。あの子の事が心配になり、森の中を捜しに行こうかと考え始めていたら

コンコン。

「アリスちゃん、遊びに来たわよ」

タイミング悪く、お母さん達が家に到着してしまった。

二人と一緒に帰って来てくれれば良いけど、もしそうでなかったら如何しよう……。

お母さん達を家に残したまま探しに行く訳にもいかないし、なんとか無事に帰って来て欲しいわね。

……でもあの子が心配だし、やっぱり二人を残して探しに行った方が良いのかしら。

コンコン

「アリスちゃん、居ないの？」

「神崎様、お嬢様にも色々と準備があるのですよ」

「む……。それなら勝手に入るわよ」

「だあーッ！ 人の家に勝手に入ろうとしないで！！」

上海を捜しに行こうとか考えていたのに、つい何時ものノリで返事をしてしまった。

こうなったら居留守を使うわけにも行かないし、なんとかあの子が無事に戻ってくる事を願うしかないわね。

Aris Side out

……  
……  
……

未だに残暑が続く今日この頃、俺は溜まっていた道具を香霖堂に売りに来ていた。

一回の売却でどの程度の収入になるかによって、食料がどの位買えるのか変わって来るからある程度は道具を集めてから売りに来てい

る。  
だからと言って、あまり溜め過ぎると霊夢に邪魔だつて怒られるし、最近では衣玖さんがゴミと勘違いして捨てようとするから苦労が耐えないんだよ。

……まあ、実際にゴミも混じってるから衣玖さんが勘違いするのも当然なんだけどな。

「さて、今日はどの位稼げるかな」と

俺が何時もの様に香霖堂の前に着くと、扉の前で上海人形が呆然と突っ立っていた。

単独で行動しているところを見ると、この子は前にアリスが作った自動人形の方の上海のようだ。

なんでこんな所に居るのかしらないけど、そんなところで立ってられても邪魔になるんだが……退いて貰うにしても無理矢理は不味いか。

そう考えた俺は、扉の前にいる上海に声を掛けて見る事にした。

「上海、そんな所で何をしてるんだ？」  
「ッ?!」

後ろから声を掛けたのが不味かったのか、俺が声を掛けると上海は直ぐ近くの物影に隠れてしまう。

初めて会った時もそうだったが、滅茶苦茶人見知りする子に仕上がってるな……。

いきなり後ろから声を掛けた俺も悪いが、直ぐに物陰に隠れるのは直した方が良いぞ。

「それで、店の前に立って如何したんだ？」  
「……………」

俺は物陰に隠れたままの上海に声を掛けると、彼女は店の方を見ながら扉を指差す。

香霖堂に用があるのは分かるんだが、なんで店に入ろうとしなかったんだ？

……もしかして、店の扉が重くて中に入れなかったとか？  
なんとなくそう思えた俺は、店の扉の取っ手に手を掛けて上海の為に開けたやった。

扉が開くと上の方についている鈴がカランコロンと音をたてる。

「いらっしやい。今日は独りかい？」

店の奥のカウンターから霖之助さんが声を掛けてくれるが、俺はそれよりも上海の様子が気に為った。

上海は店に入らない俺を不思議そうにしながら、中に入りたそうにチラチラを店内を見ている。

扉を開けたのに何時までも入ろうとしない上海に業を煮やした俺は、彼女の襟首を掴んで一緒に店の中に入ることにした。

普段と様子の違う俺を不審に思ったのか、店に入ると直ぐに霖之助さんが声を掛けてきた。

「何時もの君らしくないが、如何したんだい？」

「いや、この子が店に入ろうとしなかったので」

「……その人形は？」

「アリスが作った上海人形です」

「ほう……」

俺が霖之助さんにこの子を紹介すると、彼は品定めをするように上海の事をジロジロと見てくる。

彼の能力と商売を考えたら仕方が無いけど、そう言う眼で見られるのはいい気がしないな。

俺は上海の襟首を離してやり、カウンターの前に持って来た大量のガラクタをドカッと置いた。

「それじゃ、今回の鑑定をお願いします」

「ん？ ああ、了解」

ガラクタの鑑定をお願いすると、霖之助さんはカウンターの荷物を持って奥へと引っ込んでいく。

鑑定が終わるまで暇だから、何か暇潰しはないかと店の中を見渡してみると……上海が何かを探すように店の中を物色している。

何を探しているのか分からないけど、あの子の様子がなんとなく気になり、このまま見守る事にした。

店の中をアチコチ飛び回る上海は、食器類が置かれている棚を見つけると其処で止まった。

そして棚に置かれている道具を一段ずつ見ていたが、最後までみて欲しいものが無かったのか直ぐに別の所を探しに行く。



今度はやかんなんかが置かれている棚を見始め、その一段にある縦長のやかんの様なモノを取り出そうとする。

アレは確か……ティーポットとか言う道具で、咲夜の奴が紅茶を入れるのに良く使ってる奴だな。

どうも上海の目当てはアレらしく、小さい身体を使って邪魔に為るほかの道具をせっせと退かす。

なんとか他の道具を退かし終わり、お目当てのポットを棚から取り出したが……上海には重すぎたのか、ポットごと落下しそうになる。

「よつと」

俺は上海が落ちる前に襟首を掴んで助けてやり、なんとか大事にはならず済んだ。

そのまま安全なところで離れた俺は、出しっぱなしに為っている他の道具を片付ける。

幾つかの道具を片付けると、上海も出した道具と一緒に片付け始めた。

何を考えているのかイマイチ分からないが、少なくとも嫌われたりはしていないようだ。

棚から出した道具を片付け終わった頃、霖之助さんが丁度良いタイミングでカウンターに戻って来た。

「リュウ、鑑定終わったよ」

「今回は幾らになりますか？」

「大体5000円って所かな」

「……籠いっぱいに持ってきて5000円は高いとみるか安いとみるか、微妙なところですね」

「常に掘り出し物が見付かる訳じゃないから、そんなもんだと思う

」

「それもそうですね」

霖之助さんとそんな話をしていると、上海が申し訳無さそうに俺のズボンを引っ張る。

最初は何事かと思っただけど、直ぐ傍に置いてあるティーポットを見て察しが付いた。

俺は上海の代わりに棚から取り出したポットを霖之助さんの前に置いてあげる。

「リュウ、これは君が買うのかい？」

「いえ、上海が買いたいそうです」

「なら人形君はお金を持っているのか？ お代は500円になるけど」

霖之助さんが値段を言うと、上海は服にある小さなポケットから、これまた小さなガマ口の財布を取り出し、中から500円硬貨をカウスターに置いた。

「…確かに。それじゃ、今から包むから少し待っていてくれ」

そう言うと霖之助さんは置かれたポットを手に取り、下に置いてあった箱の中に入れる。

箱の口には透明なテープが張られ、その状態で少し大きめの紙袋の中に入れられた。

「はい。壊れ易いから気をつけて」

ティーポットの入った紙袋を差し出すと、上海はそれを掴んで浮び上がるうとしたが……やはり力が足りないのか上がる事が出来なかった。

袋の持ち手を持って何度も挑戦するけど、幾ら試してみても結果は同じ。

流石に見るに見かねた俺は、上海を掴んで肩に乗せ、箱の入った紙袋を代わりに持つ事にした。

「その子と一緒に送り届けてあげるのかい？」

「ええ。……霖之助さんは動く心算はないんでしょ？」

「僕には店番があるからね」

「さいですか」

俺は代金の5000円をポケットに仕舞い、上海を肩に乗せたまま香霖堂を後にする。

乗せたときは嫌がるかと思っただが、上海は俺の肩にチョココンと座って大人しくしてくれてる。

下手に暴れられても困るし、こうして大人しくしてくれるのはありがたいな。

……それにしても、上海ってこんなにも力が弱かったけか？

アリスSide

上海をお使いに出してから早一時間。

いい加減帰って来ても良い頃合なんだけど、あの子の帰宅を知らせるノックはまだない。

お母さん達から落ち着きが無いって言われるけど、上海の身に何か遭ったと考えると落ち着くなんて出来そうにないわ。

……二人には悪いけど、此処はあの子を探しに言った方が良いんじゃないかしら。

そんな事を考え始めていると、誰かが玄関のドアをノックして来た。

「あら？ お客さんかしら？」

「わたしが見て来ます」

「私が行くから、夢子は大人しくしてて」

席を立とうとした夢子を止めて、私は若干駆け足になって玄関に向かう。

もしかしたら上海が帰ってきたのかもしれない……そんな期待を込めて扉を開けると

「よう、お届けモノを持って来たぞ」

何故か知らないけどリュウが玄関の前に立っていた。

如何してリュウがウチに来たのか知らないけど、コイツの顔を見た途端、急に肩が重くなつた気がした。

私は肩をがっくりを落として深い溜息を吐くと、誰かにケープの裾を引っ張られる。

リュウなら普通に声を掛けるし、一体誰だと思って顔をあげると……直ぐ目の前に上海の姿が眼に入る。

「じゃ、上海?! 貴女、今まで何をしてたの!？」

まさかりユウと一緒に居ると思わなかった私は、この子の姿を見た

瞬間、お母さん達が居るのも忘れて大声を出してしまった。

「上海なら香霖堂に入れずに困ってたぞ」

「店に入れなかつたって……この子の力は剣や槍を持てるのよ？  
扉くらい簡単に開けられるわ」

「そう言われてもな。ティーポットも落としそうになってたぞ」

「まさか……」

彼の言っている事がイマイチ信じられず、私は疑うように一言呟く。  
リュウが嘘を吐くような奴じゃないのは知ってるけど、私の作った  
上海がポット一つ持てないなんて信じられない。

でも、彼の言っている事を信じるなら、この子の帰りが遅かったの  
も頷ける。

……だとしたら、一体何が原因で力不足に陥ったのかしら？

幾つか思い当たる要因はあるけど、どれもこれも決定的な確証がな  
いからなんとも言えないわね。

「……まあ、何にしても上海が無事に帰って来てよかった」

「そっか。……それじゃ、はいコレ」

リュウは手に持っていた紙袋を無造作に渡して来た。

「ん？ 何かしら？」

「何って……上海に頼んでたポットだけだ」

「……この子の事が気掛かりで、すっかり忘れてたわ」

「おいおい」

私はリュウから袋を受け取って、中に入っている箱の中身を確認す  
る。

中に入っていたポットは、厳密に言っていると私が欲しかったモノじゃな

いんだけど……これはコレで使えるし、よしとしましょう。

「ありがとね、リュウ。今回は色々と助かったわ」

「気にするなって。…それじゃ、俺はもう帰るから」

「ええ、気をつけてね」

「……サヨウ…ナラ……」

「またな」

そう言つてリュウは来た道を帰っていくけど……最後の？サヨナラ？つて一体誰が言ったの？

此処に居たのは私とリュウと上海だけの筈なのに、本当に誰が言ったのかしら？

「……もしかして上海？」

「……？」

私はなんとなくこの子を見てみるが、普段と何ら変わらず無表情のまま。

この上海を作ってから一月近く経ったけど、この子が喋った事なんて一度もない。

今のタイミングで言葉が喋れるように為るとは思えないし、きっと幻聴か何かよね。

そう思う事にした私は、帰つて来たこの子連れてお母さん達の下に戻る事にした。

アリス Side out

## 第四十八話 人形のお使い（後書き）

此処で皆さんにお知らせがあります。

この『竜が辿り着いた幻想郷』前回の更新で……………なんと！目標にしていた10万アクセスを達成する事が出来ました！！ やったねッ！！

コレもひとえに、この小説を飽きずに読み続けてくれた皆さんや、新規に読んでくれた皆さんのお陰です。本当に有り難う御座います！！！！

次ぎの目標としては50万を目指したいですが……………今のペースを考えると、後200話も書かないといけないので流石に厳しいかな。

目標を達成した記念回は考えてませんが、今後とも『竜が辿り着いた幻想郷』を宜しくお願いします！！……………では、久々の次回予告をどうぞ。

### 次回予告

暑かった夏が過ぎ、虫達の音色が夜の静寂に響き始めたある日。

突然、夜の闇を優しく照らしていた月に異変が生じた。

人間には影響はないものの、妖怪にとって一大事である異変に妖怪の賢者は、巫女と竜に本来の月を取り戻すように依頼する。

竜が辿り着いた幻想郷 第四十九話『永夜異変』

この異変で二人が出会うのは、月からやって来た異邦人。



## 第四十九話 永夜異変

紫Side

木々が紅葉を始め虫たちが合唱を奏でて、季節の移り変わりを知らせる九月の下旬。

今宵は一月ぶりの満月だと言うのに、幻想郷の空がどうにも可笑しい。

もう満月が天高く昇っても良い頃だと言うのに、何時まで待っても満月ではない欠けた月が空に昇る。

この程度の事は人間達には何の影響も無いが、妖怪たちに取っては夜が明けても太陽が昇らないのに等しい。

恐らくは、誰かが偽の夜空をとすり替えてあの偽の月を昇らせているのでしょね。

妖怪たちはこんな莫迦な事はしないし、人間達にこんな事をする意味がない。

なら犯人は……竹林に隠れ住んでいる異邦人たちって所かしら。

「……紫様」

「何かしら、藍。……まあ、言わなくても分かるけど」

「でしたら紫様自ら赴かれますか？」

「何を言ってるのよ、幻想郷の異変を解決するのは巫女の仕事……そうでしょ？」

「それはそうなのですが……」

「貴女の心配も分かるけど大丈夫よ。今回は喧嘩を売りに行く訳でもないのだし、彼もいきなり斬りかかったりしないわ」

「……紫様が其処まで仰られるのでしたら」

「良い子ね。……それじゃ、留守番は任せたわよ」

私は目の前の空間に指でなぞり、此処と博麗神社を繋ぐ隙間を作り  
中に入る。

あの子達に会うのは二月ぶりだけど、今回はしっかりと働いて貰うわ  
よ霊夢……そして、異世界の竜神さん。

紫Side out

……  
……  
……

風呂も上がり、そろそろ寝ようかと考え始めた夜更け頃。

最近はお虫たちの音も五月蠅くなってきた、本格的に秋が始まったん  
だなぁっと思うようになった。

鈴虫たちの音色を聞きながら、眠る前にお月見でもするのも良いか  
もしれない。

そんな事を考えつつ空を見上げてみると、夜空にはいびつに歪んだ  
月が空に昇っていた。

「……なんだありゃ？」

「ん？ 如何したのよりユウ」

「あ、霊夢。…ちよっと月の様子がおかしくてな」

「月が？」

何時もの白い寝巻きに着替えていた霊夢は、俺の隣りにやってきて一緒に月を見上げる。

「ホントだ。なんか妙に歪んでるわね」

「この世界の月はあんな風に歪むものなのか？」

「そんな訳無いでしょ。……アレが何を意味してるのか知らないけど、別にほっといても大丈夫よ。月が歪んで見えるだけなんだし」  
「それもそうだな」

俺と霊夢はあの月をほっておく事に決めて、それぞれの部屋に戻り今日はもう休む事にした。

明日は一体何をしようかと考えていると、俺の背後に突然誰かの気配を感じとる。

誰にも察知されずに突然背後に出現できる奴なんて、幻想郷と云えど神出鬼没なアイツくらいしか居ない。

俺は迷わず愛刀を手の中に呼び出し、後ろに居る奴に向けて後先考えず剣を振るった。

「お久し振り……って危ない?!」

「…チツ。外したか」

振るった剣は当たる前にスキマに潜られてしまい、首を刎ねる事が出来なかった。

実際に殺すと人妖のバランスが崩れるそうだし、本当に当てる心算もなかったんだけどな。

運が良ければ喉を痛めるくらいの事にはなっただろうけど………実に惜しい。

「全く、久し振りに会った相手の首を刎ねに行く普通？」

「アンタには会いたくなかった。今すぐ帰れ」

「……酷い嫌われようね」

「アレだけの事をされて好きに為るわけねえだろ」

「それもそうね」

スキマ妖怪は可笑しそうにクスクスと笑いながら、潜っていたスキマ空間から抜け出てくる。

空間から抜け出た妖怪は、何時もの紫色のドレスではなく、白を基調にした別の服を着て長い髪をまとめていた。

何時もと服装が違うだけで大分印象が変わってくるが、俺に取ってコイツは敵である事に代わりは無い。

一体どう言う用件でウチに来たのか知らないけど、時間帯も考えずにやって来るなんて良い度胸してるな。

「……ちよつと竜神さん、その殺気を納めて欲しいのだけど？」

「お前が帰れば直ぐに納める」

「ちよつと霊夢、私の事を如何言う風に説明したのよ」

「そんな事するわけ無いじゃない。それよりも一体何しにきたのよ、コツチはもう寝る心算だったのよ」

「寝るつて……二人同じ布団に入って、あんな事やこんな事を

」

「するかーッ!」

妖怪の一言に顔を真っ赤にさせた霊夢が、アイツを全力でぶん殴ろうと拳を繰り出す。

だが、拳が当たる前にスキマ空間に潜られてしまい、霊夢の拳は空しくも空を切った。

「うわっ?!」

殴りかかった時の勢いが良すぎた所為か、拳を避けられた霊夢はバ  
ランスを崩して転びそうになる。

俺は霊夢が本当に転ぶ前に、彼女の身体を抱き締めるように受け止  
めてあげた。

「大丈夫か？」

「……………うん」

「あらあら、本当に仲が良いわね」

「う、うっさい！ さっさと用件だけ言え！！」

「はいはい、分かったわよ」

再びスキマから顔を出した妖怪が、漸く此処に来た用件を語り始め  
る。

「貴女達、あの歪んだ月は見たでしょ？」

「ええ見たわよ。それが如何かした？」

「実はあの月を元に戻して欲しいのよ」

「……………随分と無茶な事を言う妖怪だな」

俺は妖怪の言葉を聞いて、呆れて思わず一言吐き捨てるように呟い  
た。

真夜中に突然何を言い出すかと思えば、歪んだ月を元に戻してくれ  
なんて……………そう言うのは万物の境界を操るどっかの誰かさんの方が  
適任だと思うがな。

「元に戻すと言うのは少し語弊があるわね」

「じゃあ如何言う事よ」

「実は、今見えている月は本物ではなく偽物の月なの。だから、あ  
の偽の月を如何にかしてもらいたいのよ」

「偽物の月って……………そんなのが空に浮んでも、何の影響も無いん

じゃないの？」

「何を言ってるの霊夢。月の光は妖怪にとってかなり重要なモノよ、それが偽物にすり替えられたとあっては、妖怪たちにどんな影響を及ぼすか分かったもんじゃないわ」

「そうはいつでもねえ」

「……仕方が無いわね。それなら貴女が喜ぶようなとびっきりの報酬を用意してあげる」

「どんな報酬よ」

「ちよつと待ちなさい」

スキマ妖怪は新たに別のスキマ空間を作り出し、その中に自分の手をつ込んで何かを探し始めた。

アレでもないコレでもないと言いながら探していると、何かを掴んだらしく急に動きを止める。

俺と霊夢は一体何が出てくるのかと思いつつ様子を見ていると

「コレが今回の貴女の報酬よ。受け取りなさい！」

妖怪がスキマから取り出して来たのは、純白の女性用の着物だった。

所々細かな意匠が施されていて、素人の俺が見ても相当の値段がするのは容易に想像が出来る。

……にしても、なんで白い着物が報酬になるんだ？ それを香霖堂に売れというのか？

「それってもしかして……」

「ええ、白無垢よ」

「要らないわよそんなの……」

「なによ」。折角龍神が貴女の為に創ってくれたのよ、快く受け取

るのが筋つてものでしょ」

「そう言う問題じゃないわよ!!」

「…霊夢、白無垢つてなんだ?」

「アンタは知らなくて良い!!」

「…???」

霊夢が何に怒ってるのか分からないが、あの?白無垢?とやらについて俺は知らなく良いそうだ。

たかが着物一つで其処まで怒る必要もないと思うが、そんなに気に入らなかつたのか?

白い着物を着た霊夢って言うのも、結構似合うと思うんだけどな…  
…勿体無い。

「白無垢が駄目なら、純白のウェディングドレスを用意するしかないわね」

「そう言う服は要らないから、もっとマシな報酬を出しなさいよ!!」

「なら、貴女達が異変を解決するまでに用意するから頑張りなさい。空は私が止めるからソレまでに解決するのよ」

そう言うときミマ妖怪は、取り出した白い着物と一緒にスキマ空間に消えて行った。

「紫に言われなくなつて分かつてるわよ!!」

すっかり頭に血が上っている霊夢は、誰も居ない空間に向かって声を荒げた後、そのまま自室へと向かつて行く。

俺は怒り心頭気味の霊夢に呆れて溜息を一つ吐き、自分の部屋に戻つて色々と準備をする事にした。

完全にあの妖怪に寄せられた形になつたけど、月夜の散歩も案外良

いのかもしれないな。

……  
……  
……

着替えやら装備を整えた俺と霊夢は、直ぐに神社を飛び出し夜の幻想郷の空を駆け抜ける。

幻想郷の空に昇る月は、神社で見たモノとは違い少し欠けているモノだったが、あの月は偽物とのことだったな。

確かに良く見てみると普段の月と違って欠けている上に、紅く輝いているようにも見える。

紅い月って言えばレミリアを思い出すけど、アイツは今回の異変とは何の関係も無いんだよな？

「全く、紫の奴は一体何を考えてるのよ。報酬が白無垢とか聞いた事も無いわ」

「俺は着物一つであそこまで怒る奴を初めてみたぞ」

「あんな物を出されて怒らない方が如何かしてるわよ」

「……そんな事もないと思うけどな」

「あゝムシャクシャする。……そしてさっきから五月蠅いのもアムンター……」



さつきから俺達の近くで歌を歌っている妖怪に一喝し、霊夢は懐から一枚のスペカを行き成り取り出した。

「ちよつと待て霊夢!？」

「神霊『夢想封印』!！」

俺が止める間もなく霊夢はスペカを宣言し、近くで歌いながら飛んでいた鳥っぽい妖怪に『夢想封印』と叩き込んだ。

避ける間もなく全ての光弾が命中した妖怪は、そのまま力なく地面に向かって墜落していく。

その様子を眼にした俺は、心の中で名も知らぬ彼女に手を合わせるくらいしか出来なかった。

「…………この程度じゃ全然すつきりしないわね。こうなったら片っ端からぶつ飛ばすわよ!！」

「お、おう…………」

俺は霊夢の気迫に負け、今の事に注意する事も出来ずに彼女の後を付いて行く。

…………彼女の後を追う中で、これから出会う妖怪たちを哀れむ事しか出来なかった。

何らかの方法で、周りに居る妖怪たちに注意を呼び掛けたほうが良いんじゃないのかコレ。

## 第四十九話 永夜異変（後書き）

話の都合で戦闘を丸々カットされた妖怪に合掌……。  
ミステイアエ……。

登場の順番が違つとかそんな事を気にしたらいけない。

## 第五十話 知識と歴史の半獣

スキマ妖怪に月を元に戻せと言われて夜の神社を飛び出した俺と霊夢。

夜空に浮んでいる偽の月を出現させた奴が、この幻想郷の何処かに居るらしいが……一体何処に居るのか皆目見当もつかない。

まあ、何時も通り霊夢の勘を頼りに適当に進んでいれば、その内見付かるだろうし、気楽に夜の散歩でも楽しもうかな。

「コレで50匹目つと。……やっぱり妖精ごときじゃ齒ごたえが無いわね」

「霊夢、暴れすぎ」

気楽に夜空を飛んでいる隣で、霊夢は俺達に襲いかかってくる妖精達を一匹残らず退治している。

無謀にも俺達を襲って来る妖精も妖精だが、それを律儀に全部薙ぎ払っている霊夢も霊夢だ。

……やっぱり、神社でのあのやり取りを相当根に持っているのか。ずっとストレスを堪めたままってのよりもマシだけど、羽虫の様に落とされる妖精達がちよつと哀れだ。

「暴れすぎって、妖精は自然が消えない限り死ぬ事はないから、この程度は如何ってことないわよ」

「確かにそうなんだけどな」

「大体、殺気立ってる私に喧嘩を売りに来るほうが悪いのよ」

「……それを言われると何も言い返せないんだが」

「なら良いじゃないの」

「そうか？」

「そうよ」

なんだが上手く丸め込まれた気もするけど、とりあえず今は気にしないでおこつ。

頭を切り替えて散歩の続きを楽しもうかと前を見てみると、暗がりの中に白い上着に黒の半ズボンを着いて、黒いマントを付けた、頭に虫の触覚がある緑の髪の？男の子？が飛んでいた。

触覚が生えている時点で妖怪なのは間違いないが、女性の妖怪ではなく男性の妖怪をこの眼で見るのは初めてだ。

出会う妖怪みんな女性だから、男の妖怪は存在していないと思っただけなんだが……探せば居るモノなんだな。

「見ろよ霊夢。あそこに男の子の妖怪が居るぞ」

「あらホント、私も初めてみたわ」

「霊夢でも初めてなのか？」

「元々妖怪に興味も無いし、知り合う奴みんな女だったしね」

「へえ」

幻想郷に長く住んでいる霊夢でも、あの男の子の妖怪は本当に初めて見たみたいだ。

他人に興味がないと断言している霊夢が、物珍しいものを見たような視線であの子の事を観察してるのがその証拠。

妖怪も一応種族として確立しているんだし、男の妖怪がいても不思議じゃないんだが……なんで出会う妖怪みんな女性ばかりなんだ？何かしらの思惑でも働いているんじゃないのかって、考えたくなくなる位に女性率が異様に高いんだよな。

「やっぱり妖怪も結婚とかして子供を産んだりするよな？」

「紫みたいな単一の妖怪は知らないけど、河童や天狗辺りはそんなんじゃないの？」

「それにしても女性ばかり出会うな」

「只単に私たちが出会っていないだけって可能性もあるけどね」

「あゝなるほど」

俺と霊夢が男の子を無視してそんな会話をしていると

「……さつきから好き放題言ってくれちゃって。僕はコレでも女だ！  
ッ！！」

突然声を大きく張り上げて、俺達に向かっていきなりとび蹴りを叩き込もうと飛び掛ってきた。

彼の突然の行動を見た俺は咄嗟に霊夢の前に立ち、飛んでくる彼の脚を徐に驚掴みする。

俺は脚を掴んだまま、彼を振り回すように何度も大きく回転して

「でりゃあッ！」

「うわあああああああああああッ?!」

幻想郷の彼方へ飛ばすぐらいの勢いで、彼を明後日の方向に向かって思いっきり投げ飛ばす。

彼は悲鳴を挙げながら物凄い勢いで飛んで行き、直ぐに夜の闇の中に消えていき姿が見えなくなる。

ちよつとばかり勢いを付け過ぎたと反省しながら、妖怪だしアレくらい平気だと勝手にそう思う事にした。

「大丈夫か霊夢」

「ええ、私は平気だけど……随分と遠くにまで飛んで行ったわね」

「……やっぱり不味かったか？」

「あんなんでも妖怪みたいだし、きつと大丈夫よ。それよりも先を

急ぐわよ」

「…そうだな、さつさと解決して寝たいし」

「それに付いては同感ね」

俺達はあの妖怪の事を放置したまま、本当の月を取り戻すために先を急ぐことにした。

その道中で襲って来る妖精達は、霊夢のストレス発散がてらドンドン倒されて行く。

悪戯に命を賭けられる辺り、妖精つてのも意外と侮れない様なそうでもない様な…微妙なところだな。

…

…

…

霊夢の勘を頼りに夜の幻想郷を飛んでいた俺達は、気が付くと人里付近にまでやって来ていた。

時刻は既に深夜遅くだから、里にある家々の明かりは消えて暗くなっているかと思いきや、如何やら何時もとは様子が違うみたいだ。

「里が何処にも見当たらないわね」

「……… 集団失踪か」

「そんな訳ないでしょ」

本当なら里がある筈の場所に辿り着いたが、何故か最初から存在していた無かったように里は影も形もなくなっていった。

流石に集団失踪はただのボケだけど、人どころか建物も姿を消しているのは如何考えても異常だ。

ただでさえ異変が起こっているのに、如何してこうも立て続けてに別の異変が起こるんだよ。

「如何する霊夢。あの妖怪の依頼を無視して、消えた人達を探すか？」

「うーん……如何しようかしらね」

俺達が妖怪の依頼を続行するか、人々の行方を探すかで悩んでいると、消えた里の方から誰かがコツチにやって来る。

消えた里の生き残りかと考えていると、俺達の方にやって来たのは何処か難しい顔をしている上白沢さんだった。

「あ、慧音。丁度良かった、アンタに色々と聞きたい事があるんだけど」

「……それは此方の台詞だ。まさかとは思うが、この異変はお前達の仕業ではないだろうな」

「はあ？ いきなり何を言ってるのよ」

「恍けるな。満月にも関わらず欠けたままの月と、止まったままの夜空……この二つはお前達の仕業ではないかと聞いている」

「そんな訳ないでしょ。どっちも私たちは無関係だし、空に浮んでる偽の月をなんとかする為に動いているのよ。犯人扱いされたら堪ったもんじゃないわ」

如何やら上白沢さんは、俺達が偽物の月を浮かべたと思っているらしいが、霊夢が言った通り俺達は無関係だ。

あくでも、夜空がずっと止まったままなのはあのスキマ妖怪の所為だし、完全に無関係とも言いがたいのかもな。

確かあの妖怪が？空は私が止めておく？とか何とか言っていたような気がするし。

「……もしかしたら、止まったままの夜空は俺達にも責任あるかもな」

「なんでそうなるのよ。私たちにそんな事出来るわけないじゃない」

「あのスキマ妖怪が一枚噛んでるとしたら、俺達も無関係とは言いがたいぞ」

「むう……」

「つまり如何言う事だ？ 分かりやすく簡略的に説明してくれ」

「分かり易く言うそうですね、欠けた月を元にも戻せと依頼してきた妖怪が夜空を止めてるんです」

「ならば、お前達を倒したとしても空は」

「元には戻らないと思います。多分、月はそのままですし、明日にはまた止められるかと」

「そうか」

俺の説明を聞いて納得してくれたのか、難しい顔をしていた上白沢さんは肩の力を抜いた。

あんな適当な説明で理解してくれたのは有り難いけど、よく今の説明で納得してくれたな。

今までにあった妖怪とかだと、人の話を聞かないで襲ってきたりする奴が多かったから新鮮な感じがする。

「ところで、お前達はコレから如何する心算だ？」

「……今は月を取り戻しに行くか、消えた人々を探すかで迷ってます」

「消えた人間達の事なら問題ない。それは私が仕出かした事だから



な

「へっ？」

「夜空に異変が起こっているのを察してな、万が一に備えて里を隠したんだ」

「だったら、アンタをやっつければ元に戻るわけね」

「ちよっ、霊夢落ち着けて」

妙に好戦的な霊夢を宥めつつ、俺は上白沢さんが如何出るのか窺う事にした。

あの人の事だからずっとこのままって事はないだろうけど、もしも里を隠したままで居るようなら……俺は迷わず剣を抜く覚悟だ。

俺は出来る限り彼女への敵意を押さえ込みながら、向こうの出方を窺っていると……上白沢さんは呆れた様な溜息を一つ吐いた。

「お前達なあ……。私は里の人間たちを愛しているんだぞ？ 里が襲われないと分かれば直ぐに元に戻す」

「……まあ、上白沢さんならそうしますよね」

「分かっているなら、敵意を込めた眼で睨むな。心臓に悪い」

「上白沢さんの事睨んでましたか？」

「嗚呼、思いつきりな」

意識していた心算はないんだが、上白沢さんから言わせると思いつきり睨んでいたらしい。

俺は自分の眉間に人差し指を軽く当てて、シワが寄ってないかちよっつと調べてみる。

グニグニと軽く動かしてみるものの、もう目付きが直っているのかシワが寄っている様な感じはしなかった。

「里は私がキチンと元に戻すから、お前達は『迷いの竹林』に行く  
と良い」

「なんでよ」

「あの竹林には、昔に月からやって来たとか言う連中が隠れ住んでいる。もしかしたら、今回の異変に関係しているのかもしれないぞ」

「……もしかしたら何も、ほぼ犯人確定したじゃないの」

「私もそう思うが……違うという可能性も否定出来んだろ？」

「まあ良いわ。とりあえず、その『迷いの竹林』とやらに行ってみるかしらね。…行くわよ、リュウ」

「ん？ 分かった」

霊夢に呼ばれた俺は、彼女の後を追うように『迷いの竹林』とやらに向かう。

竹自体は何度か見た事が在るのだが、竹林の中に入るのはコレが初めてかもしれないな。

なんで？ 迷いの？ なんて呼ばれてるのか分からないけど、用心の為に霊夢の手を握って離さないようにするか。

## 慧音 Side

竹林へと向かった二人を見送った私は、先刻言った通り消した里を元に戻す事にした。

発動していた能力を解除すると、広大な更地となっていた場所に無数の建物が出現する。

人々は既に眠りにについているし、今回の異変を察知する者は誰も居ないだろう。

そう思い、私もいい加減眠ろうかと考えていると、何かが風を切る

音を立てながら此方に近付いてくる。

私はもう一度能力を使い里を隠し、此方に近付いてくる輩を何時でも向かい討てる様に構える。

夜の暗闇の中、風を切つて人里に近付いてきたのは、箒に跨った白黒の魔法使いだった。

「おつす、慧音先生。こんな夜中に何をしてるんだ？」

「……なんだ、霧雨か」

風を切る音から察して、私は鴉天狗あたりが近付いてきているのかと思つたが違つた様だ。

私は気が抜けて肩の力を抜き、取り出しておいたスペカを服のポケットに仕舞いこむ。

「ところで先生、この夜空の異変に付いて何か知らないか？」

「それに付いては霊夢とリュウが動いているから放つておけ。そんなことよりもだ、いい加減親父さんと仲直りを」

「あの二人が動いているのか……こうしちゃ居られないぜ。またな、慧音先生！」

「あ、霧雨?!」

私の話しを聞く気が無いのか、霧雨の奴はかなりの速度を出して竹林の方へと飛んでいった。

随分と落ち着きの無い奴に育つたもんだと思いつつ、今回も説得出来なかつたと肩を落とす。

「やれやれ、どうしようもないな」

私は一言呟いてから、能力で隠していた里を元に戻した。

今度アイツに会つた時こそ説得しようと思いつながら、今日はもう眠

いので自宅に戻る事にする。

今月は仕事が出来なかったから、来月は二月分の仕事をしなければ  
ならないのか。……そう考えると物凄く憂鬱だ。

慧音Side out

## 第五十話 知識と歴史の半獣（後書き）

ネタが思いつかないと言う現実の前に虫の妖怪も即刻退場してもらった。

哀れなGに合掌……。ナム……。

えっ？ 慧音先生？ 彼女はEXの話や人里関連で今後も出すので良いんです。

今回はかなりのテンポで進めている様に見えますが、実は薬師と姫様に一話ずつ使う心算なので、あと四話ほど残っていたりします。永夜抄のエピローグも考えると、あと五話も残ってるのか。

第五十一話 普通の黒魔術少女（前書き）

此処最近の戦闘回は格闘戦が多かったので、今回の弾幕ごっこはちよつとした練習も兼ねて書いてます。

多少変なところもあるかも知れませんが、ご了承ください。

## 第五十一話 普通の黒魔術少女

此処は人間の里から見て『妖怪の山』とは正反対に位置する『迷いの竹林』。

深い霧と成長の早い竹の影響で目印もなく、妖精ですらこの竹林では迷うといわれている。

私はそんな竹林の中をリュウと一緒に駆け抜けていた。

慧音の話だと、この場所の何処かに今回の異変の犯人らしき人物が居るみたいだけど……こんな迷いやすい場所を当ても無く探すのも大変なのよね。

「見ろよ霊夢！ 物凄く長い竹が生えてるぞ！ ……一体何mあるんだこれ？」

「さあね。竹なんてのは、普通の植物よりも成長が速いって聞くし、今現在の長さを計っても明日には変わってるわよ」

「へえ……。凄いなだな竹って」

「て言うか、前に居た世界で見た事無いの？」

「多分在ったと思うけど、あんまり記憶に無いな」

「……過去の大半を失ってる奴が言っても説得力に欠けるわね」

「ごもつとも」

隣を飛んでいるリュウは、私の言葉に聞いて面白おかしそうに笑いながら返事をした。

その様子を見て、なんだか子供みたいと呆れつつも、ちょっとだけ可愛いと思ってしまう。

こんな事を思ってしまう時点で相当重症なんだろうけど、治したいって思わないから相当性質が悪い。

「にしても、竹の葉は見るのに花は全然見かけないな。夜には咲かないのか？」

「竹の開花は60年周期と120年周期があるわ。此処の竹の周期は分からないけど、人間からしたら一生に一度見られるか如何かよ」「一生に一度か……。なら、俺は何回見られるんだろうな」

「アンタが見たいと思うなら、何回だって見られるんじゃないの」「……それもそうだな」

「……………」

ついさっきまで私の隣りで笑っていたリュウだけど、今は何かを思い詰めているように暗い顔をしている。

沈んでいるリュウはあまり見たくないけど、彼が何を考えているのかは何となく分かった。

だけど、その事を考えたくはないし、こうして二人で居られる事を満喫していたい。

何時かその日が来るのだとしても、最後の最後で悔やむだなんてそんなの絶対にいや。

叶う事なら最後まで二人笑顔のまま同じ道を行きたい……。そんな私の想いなど露知らず、リュウは暗がりの中で何かを発見したらしく、私の服を引っ張ってきた。

「霊夢、あそこに筍が生えてるぞ。持って帰って明日は筍料理でも作るか？」

「それも良いかもしれないけど、それは異変が解決した後ね。……筍を抱えたまま戦うなんて見っとも無いじゃない」

「確かにそうだな」

思い詰めて暗い顔をしていたリュウだけど、今は少しだけ明るくなった。

表情がコロコロ変わると言うか、喜怒哀楽の感情が激しいと言うか



……本当に良く表情が変わるわね。  
見ていて飽きないんだけど、あの『アンフィニ』の事を考えると？  
本当のリユウ？は一体どれなのか分からなくなる。  
前に見たときの『アンフィニ』は、何処か感情のない人形か敵を滅ぼすだけの機械の様な印象を受けた。  
あの竜が彼の本質なんだとしたら、今私の目の前で笑っているのは  
本当のリユウなのか疑問を覚えてしまう。

「……何を考えているんだか。どの顔のリユウが本当だとしても、私をコイツと居るって決めたんだ。なら迷う事なんて無いじゃない」  
「ん？いきなり何恥かしい事を言ってるんだ？」

「普段から私に向かって言っているアンタに言われたくない」  
「そんな事言った覚えはないんだが」

「この……天然ッ！！」  
「なんで怒鳴られなきゃいけないんだ？！」

自覚症状のないコイツに呆れを通り越して怒りを感じ、私は真夜中  
だと言うのに声を荒げてしまう。

此処には私とリユウしか居ないから、別に聞かれても問題はない  
んだけど……コイツの天然はどうにか為らないのかしら。

そりゃ、計算されて言うてくるよりはまだマシだけど、此処まで自  
覚がないと本当に如何して良いのか分からないわね。

誰彼構わず言うような女誑しとは違うから良いけど、突発的に言っ  
てくるのもそれはそれで困りものよ。

「大体アンタは」

「ちよっと待った。……誰かがコッチに来るな」

「えっ？」

突如周囲の警戒を始めたリユウに釣られて、私も周辺を警戒し始

めた。

霧が濃くて視界が利かないから、耳を澄ませて周りの音を聞いてみると……確かに何か風を切る音が聞こえてくる。

風を切る程の速度で移動する物体となると、鴉天狗か魔理沙辺りかしらね。……ん？ 魔理沙？

なんだか嫌な予感が脳裏を過ぎると、風を切っていたモノが私たちの所にまでやって来た。

「よう、ご両人！ やつと見つけたぜ！」

「……なんだ、魔理沙か」

「なんだとはなんだ！！」

「魔理沙、今のは駄洒落か？」

「んな訳あるかーッ！！」

天狗でもやって来たのかと思ったら、私たちの元にやって来たのは魔理沙だった。

一体何しにこんな竹林の奥深くにまで来たのか知らないけど、今までの経験から言って絶対碌な事に為らないでしょうね。

「全く、この夫婦はホントに友人の扱いがずさんだよな」

「だ、誰が夫婦なのよ！ 誰が！！」

「魔理沙は悪友だと思ってるから、こんな扱いで良いだろ」

「アンタは反応するところが可笑しい！！」

「て言うか、悪友って思われたのかよ……ちょっと泣きそう」

リュウの一言を聞いて本当に泣きそうになるけど、魔理沙の場合自業自得な気がする。

いきなりウチに来たと思ったら、変なトラブルを持って来たりするんだし、本気で嫌われて無いただけまだマシじゃない。

「それで何しにきたのよ魔理沙」

「いや、今回の異変を解決しに夜遅くにも関わらず出張ってきたんだぜ」

「……只単に面白がってるだけじゃないのか？」

「それは否定しない」

「アンタねえ……」

少しくらいは否定して貰いたいけど、魔理沙は気楽そうに笑いながら肯定してきた。

私はそんな魔理沙を見て軽く頭痛を覚えるが、コレが彼女の性分なんだと思うと妙に納得出来る。

まあ、幻想郷で暮らしていくのなら、この程度の事を楽しめないとやっていけないわね。

「にしても驚いたぜ。まさか、博麗の巫女である霊夢が異変を起こしてるなんてな」

「……何言ってるのよアンタ」

「誤魔化そうとしても無駄だぜ。何時までも夜が明けない異変の中、お前達だけが何らかの目的を持って行動してるんだからな」

「読みは間違ってるけど、コツチにも色々と事情があっただな」

「言い訳なら倒された後で聞かせてもらおう。……それじゃ、楽しい弾幕ごっこを始めようぜ！」

それだけ言うと魔理沙は、私たちに向かって青白い光の光弾を幾つも放ってくる。

リユウは直ぐに私の前に立って、コツチに向かって来る弾を何時もの剣で全て斬り裂いていく。

魔理沙の弾幕が一通り消えたところで、私は周辺に大量の札を展開し、それ等を魔理沙に向けて一斉に撃ち放つ。

「おっと」

魔理沙は乗っていた筈で素早く移動し、私の弾幕を回避して、追尾していた奴を自分の弾幕を撃ち落とすとした。

その後、魔理沙は、四色の丸い宝玉の様な物を出して、高出力のレーザーを放ってくる。

私はリュウを立ち位置を交換して、彼が前衛となり魔理沙のレーザーを回避しながら、彼女との間合いを詰めていく。

魔理沙は、レーザーの間を抜けてくるリュウに向かって幾つもの弾幕を放つけど、彼は剣一本で迫り来る弾幕を斬り裂いて前へと突き進む。

間合いを十分に詰めたリュウは、そのまま斬り掛かろうと剣を振るう。

魔理沙は剣が当たる直前に上半身を逸らし、リュウの一撃を躲しただけではなく、至近距離で大きめの光弾を発射して来た。

あの距離で回避は無理だと判断した私は、札を使って彼の前に壁を作ってそのまま立ち位置を交代する。

壁が魔理沙の光弾を防いでいる間に、一旦アイツとの距離を離し、懐から一枚のスペカを取り出す。

「霊符『夢想妙珠』！」

私がスペカを宣言すると、周囲に複数の光弾が出現し、一斉に魔理沙へと向かって放たれる。

一つは壁に阻まれていた彼女の光弾を打ち消し、残りは阻まれるモノもなく真っ直ぐに突き進んでいくけど、このタイミングで魔理沙もスペカを宣言してきた。

「星符『メテオニックシャワー』！」

魔理沙がスペカを宣言すると、私の『夢想妙珠』に向かって星型の弾幕を幾つも放ち相殺する。

星型の弾幕は私の相殺もまだ残っているけど、追尾性は皆無らしく、射線からずれるだけで簡単に回避することが出来た。

「一対一でも面倒な相手なのに、二対一ともなると更に面倒だぜ」

「リュウの斬撃と私のスペカを防いでおいてよく言うわ」

「あの位の事も出来ないでお前達に喧嘩を売ったりしないって」

「まあ、そうでしょうけどね」

私は軽口を叩きつつ、次に備えて周囲に新たに札を展開しながら、一部は周辺に生えている竹に貼り付けてく。

魔理沙に気取られないように広い範囲に札を貼っていると、彼女はコツチに向かつて再び幾つモノ光弾を放ってくる。

札の貼り付けはまだ完了してないし、戦いながら準備させてくれるほどアイツも優しくはないっか。

「リュウ、ちょっと間任せた！」

「了解！」

私はリュウに前衛を任せて、その間に周辺の竹に札を貼って準備を進める。

前に出たリュウは、迫り来る光弾を邪魔になるモノだけを斬り裂き、魔理沙との間合いを詰めていく。

距離を詰められたくない魔理沙は、リュウから逃げ回りながら弾幕を放ち続けていた。

リュウは、逃げ回る魔理沙を追い詰めようと斬撃の形の弾を飛ばし、間合いを詰めるタイミングを見計らっている。

幾ら接近戦が得意と言っても、無闇に突っ込んで自滅するような戦い方をする筈が無い。

魔理沙もその事を分かっているのか、リュウに直接当てようとしたので、彼の移動を制限するように弾幕を放っている。

でも、リュウが弾幕を掻き消していくから、移動を阻害出来ても攻撃を当てるまでには至っていない。

まさにイタチゴッコの様な攻防を二人が続けている間に、私は周辺の竹に札を貼り終えて準備を完了させた。

「リュウー！」

私の声に反応して彼が少しだけ動きを止めるのを見て、魔理沙は服のポケットからスペカと八卦炉を取り出した。

魔理沙はこの一撃でトドメを差す気らしく、なんの躊躇も無くスペカを宣言する。

「恋符『マスタースパーク』！！」

彼女の手握り締められた八卦炉から放たれる特大の光線。

真夜中だと言うのに昼間と勘違いさせる位に輝きながらリュウに迫るが、彼は防ぐとも避けようともせず真っ直ぐに魔理沙へと向かっていく。

特大の光線にあと少しで飲み込まれそうになると、リュウは光線が当たる直前で上に飛び、そのまま突き進んでいった。

魔理沙は慌ててスペカを撃つのを止めて逃げようとするけど、ソレよりも早くリュウが彼女との間合いを詰める。

「気符『地龍天龍脚』！」

スペカを宣言したリュウは、逃げようとする魔理沙に膝蹴りを叩き

込み体勢を崩した後、すぐさま飛び蹴りを叩き込んで彼女の身体を蹴り抜いた。

リュウに強力な蹴りを叩き込まれた魔理沙は、そのまま地面に落下しそうになるけど持ち直して体勢を整えてきた。

私は直ぐに周辺に貼った札を起動させて、簡易結界をこの場所に展開して魔法の力を無効化する。

結界で魔法を無効化された魔理沙は、空を飛ぶ事も出来なくなり重力に従って地面に落下していった。

「ぬがッ?! イッテ……おい霊夢! 何すんだよ!」

「うっさいわね、私たちはアンタに構ってるほど暇じゃないのよ」

「んだと!」

「その結界は日の出には解除される筈だから、それまでは其処で大人しくしてる事ね」

それだけ言い残して先を急ごうとしたけど、何故かリュウが私のところに来てくれない。

一体何故だろうと不思議に思い、後ろを振り返ってみると……魔理沙と一緒に結界に閉じ込められているリュウの姿があった。

「……なにしてるの?」

「霊夢の結界に閉じ込められた」

「そんなの見れば分かるわよ! なんで一緒になって閉じ込められてるのよ!」

「あゝ結界の効果範囲外に出るのが遅れちゃって」

「……アンタねえ」

「とりあえず外に出るから、この結界ぶっ壊して良いか?」

「お、それなら第二ランドを洒落込むか?」

リュウは結界を指差しながらいきなりとんでもない事を言い出して

きた。

普通の相手なら破壊出来る訳ないけど、前に通常時のリュウに『封魔陣』を十字に両断された事があるから、この結界も簡単に破壊出来そうね。

「はぁ……コッチで結界の範囲を狭めるから、リュウは何も弄らないで」

「了解っと」

「うがーッ！ わたしを此処から出せーッ！！」

魔理沙の訴えを軽く聞き流しつつ、私はリュウを救出する為に結界の設定を弄り始める。

アイツに気取られないように広範囲に札を貼ったのが、こんな形で災いするなんて思いもしなかったわ。

次にこう言った結界を使う時は、もっと効果範囲とリュウの動きを考えて発動させるようにしよう。



## 第五十二話 狂気の月の兎

魔理沙の襲撃をなんなく退けた俺と霊夢は、この竹林に隠れ住んでいる連中を探して奔走していた。

竹林に入ってからそれなりの時間は経っているし、そろそろ目的地に着いても良いと思うのだが……名前の通りかなり迷い易くて、本当に前に進んでいるのかも怪しいものだ。

「全く、時間も無いってのにまだ着かないのかしら」

「俺達と同じところをグルグル回ってるって可能性もあるけどな」

「そんな訳ないでしょ。ちゃんと前に進んでるわよ」

「その根拠は？」

「私の勘！」

「……………」

自信あり気に言う霊夢を見て、俺は思わず言葉を失ってしまふ。実際に霊夢の勘は良く当たるから、彼女の勘を信じて進んでいればその内辿り着けるだろうけど、此処まではつきりと言われたらなんて返せば良いのか分からなくなるぞ。

適当に返事をするべきだったか、それとも流石と言って褒めるべきだったか悩んでいると、薄暗い竹林の奥の方から何かの灯りが見えてくる。

俺達は一目散でその灯りの方へと飛んでいくと、急に開けた場所に辿り着き、目の前に大きな日本家屋が姿を現した。

「でっけー家だな。此処までデカイのは人里でも見た事無いぞ」

「隠れ住んでいると言う割りには、随分と立派な武家屋敷ね」

「………… 武家屋敷ってなんだ？」

「かなり昔の貴族の屋敷とでも覚えておけば良いわ。一から説明するにはちよつと長いし、私も其処まで詳しくは無いのよ」  
「分かった」

俺は一つ頷いて、霊夢の簡単な説明で納得することにした。

詳しくないのなら無理に聞くわけにも行かないし、日の出までそんなに時間も無いのに此処で長々と語って貰う訳にもいかない。

「それじゃ、早速なかに入って犯人をとつちめるわよ」  
「おう」

俺達は固く閉ざされている門は無視して、高い塀を飛び越えて屋敷の中に侵入した。

屋敷の庭はかなり手入れが行き届いているらしく、綺麗な庭園が広がっているが……何故か大量のうさぎが放し飼いの状態で暮らしている。

あまりにも大量のうさぎ達を前に呆気に取られてしまつが、此処の主人がうさぎ好きなんだろうと考えてムリヤリ納得する事にした。

……それにしても数が多いな、これだけ大量のうさぎが居れば当分はうさぎ肉で食べていけるな。

「ん？ 如何したのよりユウ。なんか眼がギラついてるけど？」

「いや、これだけのうさぎが居れば当分は肉に困らないなと思って」

「……うさぎって食べられるの？」

「うん。牛と違うから、美味さは味付け次第」

「へえ……」

俺の話聞いた霊夢は、無言で札を取り出し結界を張ろうと準備をし始める。

かく言う俺も、既に剣を抜いていて、何時でもうさぎ狩りが出来る様に構えていた。

「うさぎは俺が狩るから、霊夢は逃げられないように結界を頼む」

「分かっているわ。……その代わり、ちゃんと仕留めなさいよ」

「狩りは前の世界でもやってるから大丈夫だ」

霊夢にそう言っただけで早速うさぎ狩りを始めようとした時

「人の屋敷に侵入して何をしようとしているの」

頭に小さなウサギ耳が生えた、ピンク色の服を着た小さな女の子に呼び止められた。

侵入した時にあの子の姿は見えなかったから、俺達が這入った後に此処に来たって事はこの子はこの屋敷の住人か。

……本当にうさぎを狩る前に見付るとはな、どうせなら狩った後に来てくれれば良かったのに。

「それで此処に何の用で来たのさ？」

「……そう言えば何しに来たんだっけ？」

「確か本物の月を取り戻せとか言われてなかった様な気がするわ」

「月の事ならお師匠様にでも尋ねてよ。全く、真夜中に起こされたから眠くて仕方が無い」

「なら、月を取り戻してさっさと帰るから、その？お師匠様？とやらの場所を教えなさいよ」

「あのお方なら屋敷の奥に居る筈だよ。……あ、入るときは玄関からね」

「急ぐなら何処から入っても同じよ。行くわよりユウ」

「嗚呼」

俺と霊夢は、ウサ耳少女が教えてくれた玄関ではなく、直ぐ傍の縁側から屋敷に上がりこんだ。

少女が俺達を止めたりはしなかったのがちょっと気になるが……此処で気にしていても仕方が無い。

頭を切り替えて、この広い屋敷の奥に居ると言う？お師匠様？の元へ向かう事にした。

……それにしても、あのうさぎ肉はちょっと惜しかったな。

……

……

…

屋敷の中は日本家屋らしく木で作られていて、長い廊下を歩くとギシギシと音が鳴る。

古くから作られているから老朽化してるのかと思っただが、霊夢の話だと昔の屋敷と言うのはこう言う作りをしていたらしい。

紅魔館との違いに内心驚きつつ進んでいたら、霊夢が踏んだ床がスイッチの様に下に沈んだ。

今の仕掛けも昔の屋敷特有の物かと考えていると、背後から何かが迫ってくるような感じがする。

「霊夢！」

「えっ？ ……キヤアツ?!」

俺は咄嗟に霊夢を抱き寄せ、そのまま廊下に倒れ込むと……木槌の様なもの物が物凄い勢いで頭上を通り過ぎた。あと少し反応が遅れていたら、間違いなく後頭部を強打していただろうな……。

「あつぶねえ……。大丈夫か霊夢」

「うん……平気……」

「そりゃ良かった。…にしても、今のも屋敷の作りか何かか？」

「多分違う。きっと侵入者対策の一つね」

「侵入者対策にしてもやりすぎな気もするけどな」

「……ところでさ、リュウ」

「ん？」

「いい加減離して欲しいんだけど……」

「あ、悪い」

俺は抱き寄せていた霊夢を離して、彼女の手を取って一緒に立ち上がり周りの安全を確認する。

さつきみたいなトラップが他にもあるのかと考えると、ノンビリ廊下を歩いている余裕は無いだろうな。

前に居た世界に村中にトラップが仕掛けてある村が在ったけど、流石に家の中にまでこんなのは設置していなかったぞ。

「全く、このトラップを設置した奴、かなり性格悪いだろ」

「性格が悪くなかったらこんな事しないわよ」

霊夢はそう言いながら先に進もうとして前を歩いていると、またスイッチを踏んでしまい、今度は下から竹やりが飛び出てきた。

「だ、大丈夫か？」

「な、なんとか……」

槍は運よく霊夢の手前で飛び出してきたが、あと少し前に進んでいたら突き刺さっていたかもしれないな。

俺は床に注意しながら霊夢の傍に近寄ろうとすると、今度は俺がスイッチを踏み抜いてしまった。

一体何が来るのかと辺りを警戒すると、左右の襖を突き破って太めの丸太が同時に迫ってくる。

「冗談だろツ?!」

俺は慌てて前転して丸太を回避すると、更に別のトラップのスイッチを押してしまった。

トラップが稼動すると、真下の床が開いて深い穴に落とされそうになったが、それは淵を掴んでギリギリの所で難を逃れる。

なんとか落とし穴から脱出して一息吐こうとしたら、誰かが廊下を歩く音が聞こえてきた。

音は段々と近付いてくるが、時折りトラップに引っ掛かり物音を立てている。

「……自分の家のトラップに引っ掛かるなんて、随分とマヌケな奴もいるのね」

「て言うか、どれだけ仕掛けて在るんだよこの家」

俺達はそんな事を言いながら誰が来るのかと警戒していると、廊下の曲がり角から現われたのは紺の上着とスカートを穿いた、紅い眼のウサ耳少女二号だった。

屋敷の庭にも大量のウサギが居たけど、ウサ耳が生えているなんて……此処は野馳のせり族が住んでいるのか? ……いや、幾ら幻想郷でもそれは無いか。

「貴方達ね！ 真夜中にも関わらず屋敷で騒いでいるのは！！」

「こんなにトラップが仕掛けてあったら、騒ぎたくなっても騒ぐわよ」

「言い訳無用！ 貴方達は侵入者みたいだし、此処で倒させてもらわ！」

「……まあそうなるか」

「短視『エックスウェイブ超短脳波』！」

ウサ耳少女はスペカを宣言したが、コレと言って弾幕は飛んでくることは無かった。

不思議に思いながら、俺は斬撃を飛ばそうと剣を振り下ろそうとするが、彼女の紅い眼が視界に入った途端、目の前の空間が歪んで見え始めた。

いや、目の前の空間だけじゃなく、あの少女が何人にも増えているように見えてしまう。

俺は自分の眼を擦り、もう一度確認するが……やっぱり空間は歪んでいるし、彼女も増えているように見える。

どれが本体なのか見当もつかないが、俺は感覚だけを頼りに目の前の少女に向かって斬撃を飛ばす。

飛んでいく斬撃も歪んで見えるが、変な方向に飛んでいく事も無く真っ直ぐ飛んで行き……数人のウサ耳少女を掻き消した。

……だが、俺が掻き消したのは偽物らしく、空間の歪みは今も続いているし、少女も健在のままだった。

「無駄よ、この狂気の眼で狂わされた貴方じゃ、私の攻撃を当てる事は出来ない」

「……それはやってみないと分からないだろ」

強がってみるものの、彼女の言う通り今のままだと攻撃を当てられる気がしないな。

本当にこの屋敷が歪んでいるとは思えないし、彼女も本当に分身してるとは思わないが……どれが本体かわからないと攻撃のしようがない。

当てずっぽうで斬撃を飛ばそうにも、今の姿だと連射が出来ないからかなり効率が悪いだろうな。

そんな事を考えていると、霊夢が行き成り俺の耳を引っ張ってきた。

「ちよつ、痛いって霊夢」

「少しは我慢なさい。…私に考えがあるから耳を貸して」

「…？」

俺は大人しく霊夢の作戦に耳を貸すが……彼女の作戦は物凄く単純なものだった。

こんな作戦で本当に上手く行くのか不安になるくらいにだ。

「それで大丈夫なのか？」

「平気よ。アイツの能力はなんとなく理解出来たし、あの程度の能力なら如何とでもなるわ」

「なにコソコソを話してるのか知らないけど、私の能力を甘く見ないでよね！」

そう言うとうサ耳少女は、俺達に指を向けて其処から大量の弾を放ってくる。

数えるのも馬鹿らしくなる位の数が迫ってくるが、俺は懐から一枚のスペカを取り出して宣言した。

「暴風『ラフ羅風』！」

カードを宣言すると、屋敷の廊下内で強烈な風が発生し、ウサ耳少女が放った弾幕を掻き消す。



風はそのまま少女へと進んで行き、目の前にいた沢山の分身を一蹴して、本体に攻撃を当てる事が出来た。

「キヤアツ?!」

俺の風に飲み込まれた少女は、吹き抜ける風の勢いに負けて壁にまで吹き飛ばされた。

「おお、本当に当たった」

「だから言ったでしょ、大丈夫だって」

俺が成功するのか疑っていたからか、霊夢は胸を張ってドヤ顔をしてくる。

確かに疑ったのは悪いと思うが、あんな作戦を聞いたら本当に成功するのか疑うと思うぞ。

……ちなみに、霊夢が俺に言ってきた作戦と言うのがこうだ。

? 広域に作用するスペカで纏めて吹き飛ばしちやえ?

確かにどれが本体なのか分からないなら、この方法が一番効果的なのかもしれないけど……本体があの中に居ないって可能性を考えなかったのかな?

まあ、ちゃんと成功したんだしコレ以上とやかく言う心算はないけど。

「いたた……。なんで私に攻撃を当てられたのよ……」

「アンタの能力はその眼を使って幻覚を見せるだけなんでしょ?

なら、纏めて吹き飛ばせば必ず当たるわよ」

「そんな力押しで攻略されるなんて……」

「私からしたらこんなの見戯に等しいわ」

「……だったら、私も力押しで行くわよ！ 幻爆『マインド・スター・マイン近眼花火』！」

霊夢の一言にキレた少女は、スペカを宣言して幾つもの弾丸を俺達に向けて放つ。

速度自体はそれほど早くは無いが、放たれた弾自体はかなり大きく数も多い。

……だけど、本体がどれかはつきりしているのならこの程度の弾幕恐れるほどじゃない。

「乱舞『せんぎり』！」

スペカを宣言した俺は、一瞬にして無数の斬撃を少女に向けて放つ。放たれた斬撃は彼女の弾幕をぶつかると、威力は俺の方が高いのか次々と彼女の弾を斬り捨て行った。

行く手を阻むものが無くなった斬撃は、少女へと襲い掛かり何発かは叩き込まれ、余りは彼女の後ろの壁を微塵に斬り裂く。

壁が斬り刻まれ小さな木片となって崩れる中、少女は立ち上がり戦いを続けようとするが……完全に立ち上がる前に気を失い前のめりに倒れた。

「……思ったよりも根性ないな」

「アンタの一撃が強烈だったんじゃないの？」

「魔理沙が受けても平然としてられる位の力加減で放った心算だぞ」

「只単にアイツが丈夫なだけよ。…ほら、先を急ぐわよ」

「今度は罾を踏まないようにな」

「それはリユウもでしょ」

戦闘後にも関わらず、俺達は軽口を叩き合いながらも一緒に飛んで先へと進む。

あの少女が倒れた後は眼の調子も元に戻り、歪んだ廊下ではなく普

通の廊下が前に広がっている。

霊夢の読みが当たっていたかと思いつながら、あの景色は気分が悪くなるからあまり見たくないな〜っと思う俺であった。

第五十二話 狂気の月の兎（後書き）

オマケ

「鈴仙、何時まで寝てる心算？」

「う……うん……」

「あ、やっと起きた」

「てる？ 私、なんでこんな所で寝てるんだっけ？」

眼が覚めると直ぐ傍にはてゐが居て、何故か私はボロボロになった廊下で眠っていた。

なんで此処で眠っていたのか覚えてないけど、それよりも全身のアチコチから来る痛みの方が不思議でしようがない。

「鈴仙は、侵入者二人にボロ負けして廊下で気絶してたんだよ」

「……そっか」

てゐがそう言ってくれた事で、私はさっきまでの事を思い出すことが出来た。

油断していた心算はなかったけど、あの二人が予想以上に強くて驚いたな。

でも、あのくらいなら師匠には敵わないだろうし、直ぐに撃退される筈よね。

「……あの二人は師匠に任せておこう」と

「お師匠様でも勝てるかねえ……」

「勝てるわよ絶対。それよりもてる！ 貴女、廊下にもトラップ仕掛けないでっていつてるじゃない……！」

侵入者二人の事は一先ず置いておいて、私は悪戯好きのてめに文句を言う事にした。

今までにも何度か仕掛けられたけど、なんで屋敷の中にトラップなんて仕掛けるのよ！ 危うく死にそうになったじゃないの！！

「トラップ？ 一体なんのこと？」

「恍けないの！ ちゃんと証拠は拳がつてるんだから！！」

「なら、その証拠とやらを見せてよ」

「良いわよ、ちよつとコツチに来なさい」

私がてめの手を引っ張ってトラップの元に行こうとしたら

カチッ

「…………えっ？ キャーーーーーッ!??!?」

間違えてトラップのスイッチを踏んでしまい、そのまま落とし穴の中に落ちてしまった。

「てゝゐ！ 後で覚えてなさいよー！！」

「…………勝手に落ちたのは鈴仙の方じゃないか」

終わり

## 第五十三話 月の頭脳

屋敷の母屋にあたる部分を粗方探し終えた俺と霊夢。

今は長い渡り廊下を通過して離れと思われる建物へと向かって進んでいた。

探してる途中で幾つかトラップに引っかけたけど、二人共大した怪我也無く今の所は順調に進んでいる。

それにしても、この屋敷は色々と不思議な感じのする場所だな。これが築何年なのか知らないけど、全くと言って良いほど建物に古めかしさを感じさせない。

つい最近建て終えたばかりかと思えるほどに建物全体が真新しく感じる。

そう言う作りの建て方なのかもしれないけど、この屋敷の刻が止まっている様な感じだ。

移ろい変わる事の無い永遠の建物……そんな物を作る事が本当に可能なのか？

この屋敷に違和感を覚えながら渡り廊下を進んでいると、目の前から矢の様な物が五本ほどコツチに向かって飛んで来た。

矢の存在に気が付いた俺は、直ぐに愛刀を抜き去り、コツチに飛んでくる五本の矢全て叩き斬った。

「……誰だ」

剣を構えたまま渡り廊下の先を睨みつけると、廊下の先に縦に赤と青の二色に分かれた上着とスカートを穿き、紅い十字が入った帽子

を被った銀髪の女性が立っていた。

手には弓と矢が握られている所から、さっきの矢を撃ったのは彼女なのは間違いないな。

五本の矢をほぼ同時に放ってくるなんて、一体何者だあの人。

「悪いけれど、此処から先には進ませないわ」

「なら、その先に居るのが今回の黒幕って訳ね」

「黒幕？」

「空にある月が偽物に変わった件のだ。……アンタも関係者なのか？」

「その件なら私が犯人よ」

「……………」

女性の突然の自白に、俺も霊夢も思わず言葉を失って呆気に取られてしまう。

今までの経験だと、こう言う異変の犯人は一番最後に見付かるものだったんだが、まさかこんな形で犯人と出会う思いもしなかったなでも、あの人が犯人だとすると……彼女は一体何を守ろうとしているんだ？

「……………まさかこんな所に犯人が居るなんてね。それじゃなに？ アンタを倒せば月は元に戻るの？」

「今はまだ元に戻す心算もないわ」

「そう。……………だったら、無理矢理にでも元に戻させてやる！！」

「今はまだ時期じゃない……………。悪いけど此処でお引き取り願うわ」

その会話を火蓋に霊夢は大量の札を女性に向けて一斉に放ち、女性  
は札を迎撃するためか何本もの矢を連続で撃ち放つ。

霊力が込められた札は女性に向けて真っ直ぐ飛んでいくが、彼女の  
矢は飛んでくる札を撃ち落とし俺達に襲いかかってくる。

俺は霊夢の前に立ち、飛んでくる矢を叩き落して斬撃の形をした弾を彼女に放つが、呆気なく躲かれてしまい反撃に更に矢を放たれた。その矢も俺が斬り捨て、霊夢が次々に札を放っていくものの、彼女には掠り傷一つ付ける事が出来ないでいた。

女性の矢も俺達に当たりはしないものの、コッチの攻撃が当たる気配も無い。

このまま時間だけが無為に流れるかと思いきや、女性がスカートポケットから一枚のカードを取り出した。

「天丸『壺中の天地』」

彼女がスペカを宣言すると、複数の発光物体が出現しソレが俺達を中心に円を描くように展開する。

その数瞬後には、外側は大量の弾幕が、内側にも少々の弾が放たれ始めた。

俺達は内側に居るから外側の弾幕を気にしなくても良いが、発光物体が作った円は二人で逃げ続けるには少々狭い。

外側に出れば動くには十分なスペースがあるものの、あの弾幕を避け続けるのは至難の業だ。

安全に避けるのなら内側に居るのが一番良いんだが、この狭いスペースで二人して避けるのは事故になる確率が上げるだけ。

避けるには厄介なこの状況を抜け出すには……周囲にある発光物体を叩き斬るのが一番か。

そう判断した俺は、左側のポケットのスペカを取り出し右手に持たせ

「いい、叢雲！」

この間手に入れた天叢雲剣あまのむすぶのつるぎを左手の中に呼び出し、それを逆手に持って剣を構える。



「霊夢、俺が宣言したら直ぐに上に飛んでくれ！」

「分かったわ！」

「行くぞ……真円『円舞陣』！」

俺がスペカを宣言すると、霊夢は直ぐに真上に飛び上がる。

その隙に俺は両手に剣を構えたまま一回転し、円形の斬撃を周囲に飛ばし発光物体と弾幕を薙ぎ払った。

円形の斬撃は発光物体を薙ぎ払っただけでは飽き足らず、渡り廊下の屋根を支える柱も斬り、更に斬撃の一部が女性にも襲い掛かる。

一部は女性の所にまで届いたものの、霊夢と同じ様に上に飛んで斬撃を躲されてしまうが、周囲に展開されていた物体は全て斬り捨てる事が出来た。

これで状況は仕切りなおしとなったけど、まだ戦いは始まったばかりだ。この後で如何とでも転ぶさ。

そう考えて両手の剣を握り直し、体勢を整えていると……女性が物珍しい物を見る様な眼で俺の事を見てきた。

……いや、正確に言えば俺の叢雲の事を見ているって言えば良いのか。

「刀身の独特な特徴……もしかしてソレは天叢雲剣？」

「ん？ この剣のこと知ってるのか？」

「ええ、随分と前に一度だけ見た事があるわ。……まさかこの時代に使える者が現われるなんて思いもしなかったけど」

「……………」

女性は何処か懐かしむような物言いで話すけど、何処かその言い方に引つ掛かりを覚える。

見た事があるって言うのはまだ良いが？この時代に使える者が？って如何言う事だ？

その言い方だと、この剣を見たのが遙か昔の出来事みたいに聞こえるぞ。

「ちょっと待って、叢雲を見たってなんの冗談」

「……霊夢？」

「この剣が出現したのは神代の頃よ。確かに幾神、幾人の手に渡り歩いたって聞くけど……それは遙か昔の事。なのに、この剣を見て生きて此処に居るなんて不自然すぎる」

「……」

「アンタ、本当に何者なのよ」

霊夢は女性をいぶかしむ様な眼差しを向けて問い詰めて行く。

彼女は口を閉ざしたまま沈黙を貫くのかと思ったが、肩の力を抜くように大きく息を吐いてコツチを向き直してきた。

「貴女、中々に良い勘してるのね」

「普通の奴ならさっきの言葉に引っ掛かりを覚える程度でしょうが、私はそうはいかないわよ」

「……」

その理由だと俺が普通の奴みたいになるんだけど……コツチの歴史を知らないんだし、仕方が無いよな。……てか、そう思っておこう。

「さて、私が何者かって話だけど……そうね。貴女達からみたら宇宙人って所かしら」

「……はっ？」

俺と霊夢は彼女のあまりにも突拍子も無い言葉に、驚きのあまり二人して口を開けて同じ言葉を発した。

しかし女性は、呆気を取られている俺達など気にも留めずに話を続

ける。

「夜空に浮ぶ月に隠れ住む月人……それが私の正体」

「……つまり妖怪でも人間でもないって事？」

「失礼ね、これでも一応は人間よ」

「それなら如何して自分の故郷とも言える月を隠すのよ」

「……月人が此処に来られたら困るから……とでも言っておこうかしら」

「はつきりしない物言いね」

「貴女達に言う事でもないし、関係のない事だからね」

言いたい事を言い終えたのか、女性は弓矢を俺達に向け、何時でも放てるように構える。

彼女の表情から？コレ以上話すことはない？と言う意志が伝わり、俺は何も言わずに両手の剣を構え、霊夢も空中に大量の札を展開した。

俺達の居る渡り廊下には静寂と張り詰めた空気に包まれ、ソレを打ち破るように彼女が幾つもの矢をコツチに向けて放った。

俺は二つの剣を使い迫り来る矢を斬り裂き、矢が無くなったところで霊夢が展開していた札を一齐に放つ。

放たれた札はさっきと同じく打ち落とされていくが、俺は矢を放つて動けないで居るところを狙って、二つの剣を振るい八つの斬撃を彼女に向けて放った。

斬撃は何者にも阻まれる事なく突き進むが、彼女はすり抜ける様にして斬撃同士の隙間を潜り抜け、床を滑りながら更に矢を放ってくる。

俺は飛んでくる矢を躲して彼女との間合いをここぞとばかりに詰める。

女性が後ろに下がるよりも早く間合いを詰め、左の叢雲で彼女の胸を切り払い、右の愛刀で袈裟斬りを叩き込む。

その流れを使つてその場で一回転して、叢雲で脇腹から肩口に掛けて切り上げて、愛刀で彼女の胸を穿つように剣を突き刺す。

彼女は、剣を突き刺したときの勢いを使って後ろに跳び、そのまま俺に向かって幾つもの矢を放ってくる。

飛んでくる矢を悉く斬り捨て、お返しに叢雲に力を集中させて特大の斬撃を放ってやった。

今までにない位巨大な斬撃だが、何度も躲されて来たようにこの一撃も簡単に避けられてしまう。

彼女は避けながらも俺に向けて矢を放ち、俺が間合いを詰められないように牽制してくる。

俺は矢を斬り捨てていくが、飛んでくる矢の対応に追われて彼女との間合いを詰められなくなった。

だがしかし、彼女も俺に矢を放ち続けているためか、着地した地点から一歩も動けずに居る。

その間に霊夢が懐からスペカを取り出し、声高々にカードを宣言した。

「霊符『夢想妙珠』!!!」

霊夢から放たれた複数の光弾は、彼女の放つ矢など物ともせず突き進み、全弾命中する。

光弾が炸裂した時に起こった光で視界が利かなくなるが、女性がまだ健在なのがなんとなく理解出来た。

俺がもう一度間合いを詰めようと駆け出した瞬間

「神符『天人の系譜』」

静かに囁くような声でカードを宣言され、渡り廊下に幾つもの光弾が出現した。

廊下のアチコチに展開した光弾は、それぞれの点を繋ぐように線が一斉に走り、俺達の動きを制限してくる。

咄嗟の判断で光弾と光線を回避できたが、点と線は直ぐに消えてなくなり、今度は別のパターンで出現して襲い掛かってきた。

一つ一つの点を消していけば、出来上がる線を消す事が出来るんだが……二つが消える速度が速くて、イチイチ消していても仕方が無い。

そんな事を考えていると、光弾と光線の間を掻い潜って霊夢が俺の傍にまでやってきた。

「私のスペカでこのスペカを撃ち破るから、アンタは二つが消えたら直ぐに突っ込んで！」

「嗚呼、任せとけ！」

「行くわよ。……神技『八方鬼縛陣』!!」

霊夢は自分の足元に宣言したスペカを設置し、其処を基点に発動したオレンジ色の結界を広い範囲に拡大させていく。

結界とぶつかった光弾と光線は、次々に消滅して行き……霊夢の結界が消える頃には、周囲にあった全ての光弾が消滅していた。

俺は叢雲を一旦仕舞い、ポケットから一枚のスペカを取り出し宣言する。

「人符『現世斬』！」

スペカを宣言した俺は、愛刀を脇腹の辺りに構えて女性へと斬り込んで行く。

女性は直ぐに矢を放とうとするが、ソレよりも速く間合いを詰めた俺が彼女の横を斬り抜ける。

斬り込まれて体勢が崩れた所で、俺はもう一度手の中に叢雲を出現させ、振り向き様に斬り付けて更に愛刀でもう一撃叩き込む。俺は直ぐに愛刀の刃を返してもう一度斬り払い、叢雲で袈裟斬りを叩き込み……コンボのシメに今度は十字に斬り抜けた。

斬り抜けたまま硬直していると、背後から殺気のようなものを感じ、慌てて前に転げるようにその場から移動すると、さっきまで俺の頭があつた所を一発の矢が通過した。あと少し逃げ遅れていたなら不味かつたなと思いつながら、俺は直ぐに体勢を立て直し二つの剣を振るって斬撃を彼女に向けと飛ばす。飛んでいく斬撃は相変わらず当たらないが、仕切りなおすだけの距離を稼ぐ事はできた。霊夢の所にまで戻った俺は、また攻め込むタイミングを見計らおうとすると、女性はスカートのポケットから一枚のカードを取り出した。

「秘術『天文密葬法』」

彼女がスペカを宣言すると、俺達を取り囲む様に半透明の物体が大量に出現した。

その物体は取り囲むだけで何もしてこないが、彼女が矢を放ち周りの物体を刺激すると、矢と接触した物体から大量の弾がばら撒かれ始める。

俺は二つの剣を振るい、ばら撒かれた弾を次々に斬り裂いて行くが……一度に出現する弾の数が多過ぎる。

斬り裂いている間にも彼女は周囲の物体を刺激して、新しい弾を次から次へとばら撒いてくる。

コレもさつきみたいに周りの物体を掻き消せば良いんだけど、正直な話そんな事をしている余裕は今の俺には無い。

霊夢には何か手があるのか、今は精神統一をしていて回避している

余裕はなさそうだ。

なら、今の俺に出来る事は霊夢の集中を乱さないように、アチコチにばら撒かれている弾を斬り裂いていく事だ！

「……………でりやあああああッ！！」

覚悟を決めた俺は二つの剣を振るい続け、霊夢に向かって行くこととする弾を次々に斬り裂いて行く。

正面から大量の弾が迫って来る事もあるが、前から来る弾は大きく剣を振って一気に薙ぎ払う。

左右から来るのはギリギリまで引き付けてから、最も近い弾から順に斬り裂いて行く。

偶に予想外の方向から飛んでくる弾があるが、そう言うときは身体を無理矢理にでも捻ってその弾を斬り捨てる。

そうやって掠りながらも次々に斬り裂いていると、後ろに居る霊夢の準備が完了したのか声高々にスペカ名を宣言した。

「神霊『夢想封印』！！」

霊夢がカードを宣言すると、俺達の周囲にさつきよりも強大な光弾が複数出現し、周りにばら撒かれた弾を掻き消して行く。

ばら撒かれた弾を残さず掻き消した光弾は、不透明な物体を無視して真っ直ぐ彼女の元へと向かう。

女性は『夢想妙珠』の反省を活かして、霊夢の『夢想封印』を撃ち落とそうとはせず、なんとか回避しようとする。

一度は全ての光弾を回避する事は出来たが、その程度でこのスペカを攻略する事は出来ない。

霊夢の光弾は回避されて直ぐに向きを変えて、今度は女性の周りを取り囲み……………一斉に襲い掛かり炸裂し、この渡り廊下には眩い光で満たされた。

「……ッ!」

悲鳴を上げる間もなく光弾に飲み込まれた彼女は、満ちていた光が収まるとそのまま前のめりに倒れた。

俺達を取り囲んでいた物体は残らず消滅し、この渡り廊下にはさっきまでの戦闘の爪跡が残された。

彼女に動く気配がないと分かった俺は、大きく息を吐いて全身の力を抜いて霊夢の方を振り向く。

「お疲れ、霊夢」

「リュウこそお疲れさま。……それとありがとね、守ってくれて」「気にすんなって」

俺は霊夢に笑いかけた後、なんとなく外を覗いてみると……外は丸い満月が地平線の向こうに沈み始めていた。

神社を飛び出してから結構な時間が経ってるのは分かってたけど、まさかもう直ぐ夜が明ける位までアチコチ動き回っているとは思わなかったな。

これは今から神社に帰ったとしても、布団に入るのは完全に夜が明けした後だな。

そんな時間に帰りでもしたら、妖夢がウチにやってきて?リュウ、勝負です!?とか言い出しそうだ。

本当にそんな事になったら、今日は貫徹確定だなっとゲンナリしながら考えていると

「ちよつと其処の二人、わたしの永琳に何をしてるのよ」

「ん?」

薄ピンクの上着に紅いロングスカートを穿いた黒髪の少女に



声を掛けられた。

第五十三話 月の頭脳（後書き）

## 第五十四話 永遠と須臾の罪人

突如として俺達の前に現われた黒髪の少女。

身に着けている衣服は、この屋敷であつた奴よりも上質な生地を使っているように見えるが、目の前に居る彼女は何処にでもいる少女と大差ないように見える。

……だつて言うのに、なんなんだこの感じは？ さっきの女性からも似たような印象を受けたが、もしかしてコイツも宇宙人なのか？

「それで貴方たちは一体何者？ わたしの屋敷で何をしてるのよ」

「……………」

「私たちは空に上つた月を取り戻しに來ただけよ。もう用事は済んだから帰ろうかと思つてたところ」

「月？ ……あゝホントだ、何時の間にか元に戻つてる」

少女は地平線に沈もうとしている月を見て、今気が付いたような声を出す。

彼女の様子を見る限りだと、今回の異変に付いて知っていたけど特に感心が無かつたのか？

この状況で俺達を騙す意味なんてないし、本当に感心がなかつたのか、よほどの大物なのかのどつちかだろうな。

「コッチの用は済んでるからもう帰らせて貰うわ。…行くわよりユウ」

「ん？ ああ」

俺は二つの剣を仕舞い、屋敷から出て行こうとする霊夢の後に続く。彼女達への妙な違和感を抱えたまま、俺は霊夢と一緒に屋敷の外に

出て飛んで行こうとすると

「ちょっと待ちなさい」

黒髪の少女も外に飛び出し、俺達を引き止めてきた。

呼び止められた俺達は、面倒だなど思いつつも彼女の方を振り向く事にした。

「なによ、私たちは眠いんだから手短かにしてよね」

「……あのね、ウチの従者を倒しておいて只で帰れる訳ないでしょ」

少女は呆れて溜息を吐くように俺達に言ってくる。

「俺達に如何しろと？」

「罰として貴方達に五つの難題を出すわ。それをクリア出来たら見逃してあげるけど、もし出来なかったら……もう一度月を隠すわ」

「……拒否権は？」

「そんなものはないし、逃げて月も隠させてもらっわ」

「それじゃ受けるしかないじゃないの……」

確かに彼女の従者を倒したとは言え、向こうの言い分を聞いて思わず溜息が出てしまう。

俺は呆れ果てながらも二つの剣を取り出し、霊夢の前に立って何が来ても良いように構える。

後ろに居る霊夢も札を取り出し、コッチの準備が完了すると……少女は五色の珠と一枚のスペカを取り出した。

「それじゃ最初の難題……神宝『ブブリアントドラゴンバレッタ』」

彼女がスペカを宣言すると、五色の珠は少女の手を離れ空中に浮か

び上がる。

そして少女の周囲を飛び回りながら、俺達に向けて五色の光線と珠を無数にばら撒いてきた。

俺と霊夢は、襲い来る光線と珠を避けながらも、少女に向けて札と斬撃を叩き込んでいく。

少女は俺達の弾幕を左右に移動しながら躲し、周りに飛んでいる五色の珠の弾幕を貼り続ける。

ばら撒かれる珠はまだ掻き消せるからマシだけど、コツチに飛んでくる光線は少々厄介だ。

あの手の弾幕は俺の斬撃じゃ中々消せないし、一度に飛んでくる数が多いからイチイチ消していたらキリが無い。

こう言う時は元を断つのが一番なんだが、展開している弾幕が中々に厚いから前に出るのはちょっと危険だな。

俺はそんな事を考えながら、飛んでくる光線を避け、ばら撒かれる珠を斬り裂いていく。

有効な打開案が思いつかないまま時間だけが過ぎていくと、痺れを切らした霊夢が懐から一枚のスペカを取り出した。

「夢符『夢想妙珠』！」

スペカを宣言すると、霊夢の周りに複数の光弾が出現し、少女の周りを飛んでいる五色の珠へと向かって行く。

光弾は飛び交う光線と珠など物ともせず、五色の珠と激突し……五つ全てを封印した。

封印された珠は、空中に浮ぶ事も出来なくなりそのまま地面へと落下していった。

「あらら、そんな力を押しで突破されるなんて思いもしなかったわ」

「コツチは徹夜で疲れてるのよ。こんな事さっさと終わらせて帰り

たいの」

「そうなの。…だったら、次の問題行くわよ」

「お好きにどうぞ」

「二つ目……神宝『ブディストダイヤモンド』」

少女がスペカを宣言すると、今度は幾つもの光る物体が出現し、彼女を中心にして扇状に展開する。

展開した物体一つ一つから光線が照射され、コッチの逃げ場を狭めて行く。

俺は分が悪くなる前に叩き斬ろうとしたが、展開されている物体は思ったよりも硬く、光線を避けながら叩き斬るのは少々骨が折れそうだ。

霊夢のスペカでもう一度封印すると言う手もあるが、周りにある数を考えると一度に全てを封印するのは無理がある。

それ以前に、此処に来るまでに幾つかスペカを使ってるから、霊夢の手持ちも残り少ない筈だ。

少女はさつき？五つの難題？って言っていたから、先の事を考えると此処で霊夢のスペカばかり使うわけにも行かないか。

そう考えた俺は、霊夢が痺れを切らす前にズボンのポケットから一枚のスペカを取り出す。

「……何をやる心算か知らないけど、この神宝は斬る事も封印する事もそう簡単には出来ないわよ」

「そうかもしれないが、纏めて吹き飛ばす事はできるだろ」

「……？」

「暴風『ラフ羅風』！」

俺がスペカを宣言すると、俺達と少女の間に旋風が巻き起こり、展開していた光る物体を纏めて何処かへと吹き飛ばした。

自分でやっていて卑怯な気もするけど、さつき霊夢も言っていた通

りもう眠いし、此処はさつさと残りの難題を攻略する事にしよう。  
夜明けまでに戻れるか分からないが、何時までも遊んでいられないし、次も強行突破させて貰うか。

「あゝあ、わたしのお宝がどっかに飛んでいつちゃった」

「ソレに付いては悪いと思うが、後で自力で探してくれ」

「そこは？後で俺が手伝ってやる？位の事を言って欲しいわね」

「なんでリュウがアンタの手伝いをしてやらないといけないのよ」

「だって吹き飛ばしたのは彼だし」

「……この竹林の中を探し回るのは勘弁して欲しいな」

「仕方が無いわね、後でウサギ達に探させましょう。……それじゃ

三つ目、神宝『サラマンダーシールド』」

少女が三つ目のスペカを宣言すると、今度は紅い布の様なものが彼女の周りを飛び始めた。

すると今度は、無数の炎の珠が少女の周囲に展開し、それが俺達に襲いかかってくる。

一度に全部の珠が襲い掛かってくる訳じゃないが、今度のも展開している珠の数は中々に多い。

……とは言え、さつきみたいな光線ではなく、只の珠なら俺の剣で十分に掻き消すことが出来る。

俺は左右の剣を振るい、コツチに飛んでくる火の珠を次々に掻き消して行く。

時折り斬撃を飛ばして紅い布を斬ろうと試みるが、少女の周囲を飛んでいて中々斬撃が当たらない。

それでも諦めずに何度も斬撃を飛ばし、布から放たれる炎を切り払い続けた。

何度も攻撃していると、布の軌道が段々と読めてくるようになり、少しずつ精度が上がり始める。

タイミングを調整しながら斬撃を飛ばしていたら、遂にベストのタイミングで斬撃を飛ばすことが出来た。

それを見た少女は、慌てた様子で紅い布を掴んで懐に仕舞うが、回避までは間に合わずに俺の斬撃をまともに受けてしまう。

両腕で一応のガードはしているものの、俺の斬撃を受けた袖は切り裂かれ、腕からは切り傷が出来てしまい、血が流れ始める。

彼女が血を流しているのを見て俺は、加減を間違えたと苦々しく奥歯を噛み締めるが、それ以上に驚きの光景を目の当たりにした。

俺の斬撃を受けて出来た切り傷が、少女は何もしていないのに綺麗に完治してしまった。

その様子に俺と霊夢は呆気に取られるが、彼女は何事も無かったかのように大きく背伸びをした。

「貴方達ね、さっきから私の神宝を壊そうとしすぎよ」

「そんな事よりも今のはなんだ？ 自動で傷が塞がった様に見えたけど……」

「ああアレ？ 見ての通りだけど？」

見ての通りって事は、やっぱり今のは勝手に傷が塞がったって事で良いのか。

今まで色んな魔物を見てきたけど、人の姿でそんな事をする奴なんて初めてみたぞ。

「……だったら、アンタの能力は『自己修復する程度の能力』かしら」

「残念外れ。今のはある薬の効力でこうなってるのよ」

「ある薬？」

「そうよ。アレを飲んで以来、わたしは？死？と言う終わりがなくなり、故郷から追放されたわ」



少女は月を眺めながら、昔を懐かしむように静かな声で呟いた。その横顔からは望郷の念の様なものが窺えるが、彼女の表情からはそれ以外の感情があるようにも見える。

相手の顔を見ただけでその人の全てを知る事は出来ないが、彼女の望郷の念にはちよつとだけ共感するところがあるな。

……今になって考えてみれば、俺も随分と遠くにまでやってきたものだな。

「故郷から追放されたって如何言う事よ」

「……その辺りは機会があれば話すわ。それじゃ四つ目の難題、神宝『ライフスプリングインフィニティ』」

話を打ち切った少女は、四つ目のスペカを宣言して俺達を試してきた。

カードを宣言すると、白く光る小さな珠が放たれるけど……直接俺達を狙う様なものじゃなかった。

その代わり、その珠は放たれてからある程度進むと、突如として自分の周囲に細長い光線を大量に展開してくる。

光線くらいならまだ余裕はあったけど、展開した後には小さな珠も撒き散らされるから中々に避け辛い。

「これまた面倒なスペカだな」

「そうでなかったら難題にならないじゃない」

「正論だけど、はつきり言われると腹ただしいわね」

少女は余裕綽々って感じだが、既に霊夢がこれを如何にかする為に動き出している。

霊夢は彼女に気が付かれない様に四方に札を設置し、あの光る物体を結界で包み込もうとしている。

前に魔理沙にやったのと似たような事だけど、今回はあの時よりも簡略式で行う心算のようだ。

「夢符『封魔陣』」

札を四方に設置した霊夢は、光線で基点を貫かれる前に結界を発動させ、光る物体を結界の中に包み込んだ。

物体は結界の中で光線を放つが、霊夢の結界を突破する事は出来ず、そのまま中で大人しくなった。

これで四つのスペカを無力化した訳だが、今回は何時も以上にゴリ押しな気がするな。

まあ、何時もの事と言って仕舞えばそれまでなんだが、流石に此処まですると申し訳ない気持ちに為ってくる。

「……こんな方法で四つも突破されるとは思いもしなかった」

「うっさい。…それに私からすれば、アンタの従者の方が強かったわよ」

「そりゃ永琳はわたしよりも強いから当然ね」

「あっさりと認めるんだな」

どこぞの吸血鬼ならムキになって否定しそうな事を、目の前の少女は気分を害する事無くアツサリと認めた。

アイツなら絶対に無理だろうな〜って思うが、今は関係ない事だし、心の奥底に仕舞いこんでおこう。

「否定しても仕方が無いからね。…それじゃ最後の難題いくわよ」

「やっと家に帰れるのね……」

「それは貴方達の頑張り次第よ。……コレが五つ目の難題、神宝」

蓬莱の玉の枝―夢色の郷―」

少女が宣言すると、今度は玉が付いた枝から七つの魔法陣の様なものが出て、その陣から七色の弾幕が展開された。

七つの弾幕が一つに並ぶとちょっとした虹の様にも見えるが、彼女からも弾が飛んでくるから、数では五つの中で一番多いのかもしれない。

一つ一つの弾はそれほど大きくないけど、こつこつと数が多いと弾の大ききなんて殆ど関係ないような気がする。

光線が飛んでこないのなら、俺の剣で掻き消していけるが……ずっと掻き消すのは流石にシンドイな。

そんな事を思いつつも、俺は飛んでくる弾を次々と剣で斬り裂いて掻き消して行く。

「……ちよつと数が多いわね。リュウ、なんとか出来ない？」

「なんとか……って言われてもな」

正直な話、なんらかの竜に変身すればこの位如何とでも出来るけど、此処まで来たら変身しないで勝ちたい。

……だからと言って、弾幕が尽きるまで剣を振るい続けるのも辛し、何か良い案は無いだろうか？

俺は剣を振るいながら、今の手元に残っているスペカを思い返してみよう。

竜言語魔法のカードはまだ残ってるけど、今の姿で使えるやつで彼女のスペカを攻略できるとは思えない。

間合いを詰めて体術系のカードで決めるにしても、あの弾幕の中を突っ込むのは流石に自殺行為か。

……結論としては、今の位置から動く事無く、彼女に攻撃を叩き込めるカードってところだな。

手持ちのカードで何が良いか考えた結果、習得してから一度も使った事のないあのスペカに決めた。

「霊夢、ちよつと時間を稼いでくれ」

「……何秒」

「10…いや5秒も有れば事足りるか」

「5秒ね、分かったわ」

そう言うと霊夢は、俺の前に立って正面に結界を展開して少女の弾幕を防いでくれる。

霊夢が防いでる間に、俺は愛刀を仕舞って叢雲にありつたけの力を注ぎこみ準備を始めた。

力を注ぎ込まれた叢雲は、普段の雲の様なオーラではなく、赤いオーラを刀身に纏った。

その状態のまま、ポケットに入れているスペカの中から一枚取り出し、少女に聞こえるように宣言する。

「断迷剣『迷津慈航斬』！」

カードを宣言した俺は、結界を張っている霊夢の前に飛び出し、叢雲に注ぎ込んでいた力で巨大な赤い刀身を作り出す。

その刀身を維持したまま剣を脇腹の辺りで構え、展開されている弾幕ごと少女を一気に薙ぎ払う！

……俺が剣を振り払った後、若干の静寂がこの場を包み込むが、それは少女の一言で打ち破られた。

「う、うそ……」

信じられないモノを見たように少女は小さく呟くが、それも仕方が無いのかもしれない。

俺が叢雲を振り払った後に残っていたのは、屋敷の上空に飛んでいる俺達三人だけ。

さつきまで大量にあつた弾幕と展開していた魔法陣は、叢雲の一刀に斬り裂かれて全て消滅した。

……正直な所、俺も此処までの威力があるなんて予想していなかった。

元々威力の高い技だとは知ってたけど、まさかこれ程の威力があるなんて夢にも思わなかったぞ。

「さ、流石は？草薙の剣？。恐ろしい破壊力ね」

「草薙の剣？」

「天叢雲剣の別称よ。…その昔、ヤマトタケルが敵の火刑に遭い窮地に追い込まれたとき、その剣で草を薙ぎ払い逆に敵に向かって火を走らせ、窮地を脱した事から付いた名と聞いてるわ。……まさか弾幕ごっこでその再現を見るなんてね」

「……………」

霊夢の話聞いて、俺は思わず絶句して手に握っている叢雲をマジマジと見詰める。

俺が作った刀身を未だに纏っているが、久々に暴れられて喜んでいいのか、本来の刀身が何時もより輝いているように見える。

これで満足してなかったら如何しようかと思つたが、この調子なら特に問題はなさそうだな。

……それにしても、龍から出土した剣だからって切れ味が良すぎじゃないか？

「ところで、五つ全て攻略したからもう帰っても良いわよね？」

「良いけど……草薙の剣は卑怯よ。あんな風に弾を斬られたら、誰も貴方に勝てないじゃない」

「あ、あははは……次からは自重する」

「むしろ封印しないさいよ」

「そんな事したら叢雲が怒るから勘弁してくれ」

「なによそれ」

「アンタは気にしなくて良い事よ。…それじゃ帰ろっか、リュウ」  
「だな」

「それじゃあねえ」

少女の気の抜けた別れの言葉を背に受けつつ、俺と霊夢は博麗神社へと急いで帰ることにした。

夜明けが近いのか空は大分白んできて、神社に着くのは太陽が昇り始めた頃になりそうだ。

…その時間に着いたら、寝る間もなく妖夢と戦う羽目に為りそうだが、大丈夫だよな？

第五十四話 永遠と須臾の罪人（後書き）

今回の輝夜戦は色々大変でした……。

書く前は？永琳より楽だろ？とか思ってたのに、書き始めたらこの様ですよ。

キャラは優曇華より扱い易いのに、如何して戦闘はこつなつたのやら。

## 第五十五話 十六夜の月見

霊夢 Side

竹林の奥に建っていた屋敷に乗り込んで、其処の住人が隠していた月を取り戻した私とリュウ。

一晩中戦って疲れて眠っていた私たちだったが、その日の夕方に突然紫がウチにやって来て、いきなり月見を開くと言い出してきた。徹夜明けでそんな体力も気力も無いとはつきり告げたにも関わらず、紫の奴は人を集めて月見を強行。

妖怪が私たちの話しを聞くとは思ってなかったけど、もうちょっと日程とか考えても良いじゃない。

「ふあ〜……ねむい」

「本当に眠そうな顔をしてるわね。この月見は報酬の代わりなんだから、しっかり楽しんで貰いたいのだけど」

「だったら、日にちをズラしなさいよね。徹夜明けで眠いのよ」

「私だつて暇じゃないの。今日を逃したら次ぎは何時に為るのか分からないもの」

「それなら別の報酬を用意しなさいよ」

「霊夢が白無垢を受け取らないのが悪いのよ」

「……あんなの受け取れる訳無いでしょうが」

私は心の底から呆れ果てて、肩をがっくりと落として一言呟いた。対する紫は、何処が面白いのか分からないけど可笑しそうに上品に微笑む。

その表情を見て紫の掌の上で踊らされてる気がして、なんとなく負けた様な気がしてくる。



何に負けたのか自分でも分からないけど、今回の異変はコイツに焚き付けられた所があるから、強ち間違いでもない気がするわ。

「其処のお二人さん、隣り空いてるかしら？」

私たちの所にやって来たのは、あの屋敷にいた銀髪の女……永琳とか言ってたわね。

なんで彼女が居るのかと言うと、紫が何をトチ狂ったのか今回の月見招待したから。

永琳以外の屋敷の主だった面子は呼んでいて、魔理沙たちに絡まれている二人の妖怪ウサギの姿が在る。

……なんで魔理沙が居るのかって言うと、これも紫が勝手に呼んできたからよ。

「何かしら月の賢者さん、用件なら手短かにね」

「なら単刀直入に聞くけど、なんでこの宴の席に私達を呼んだのかしら」

「普段と同じ面子もツマラナイからよ」

「……普通それだけの理由で、月を隠した張本人たちをこの場に呼ぶ？」

「他人と同じ事をして面白くないわ。どうせ何かをするのなら混沌としている方が良いに決まってるじゃない」

「貴女の考えを他者にまで押し付けるのは感心しないわね」

「別にそんな心算はないわ。ただ、私はこういう考え方をしているだけよ」

「……そう」

二人の会話に入っていけない私は、彼女達の話しを聞き流しつつ酒を飲むしかなかった。

正直、こう言う堅苦しい会話を直ぐ傍でしないで貰いたいわね。聞

いてるだけなのに肩はこりそうだし、頭も痛くなりそうよ。

「ところで巫女さん。ウチの姫様は何処にいるか知らないかしら？」

「……知らないわよあんな奴」

永琳があまり触れて欲しくない話題を振ってきて、私はつい素っ気無い返事を返す。

私の返事に彼女は首をかしげ、傍に居る紫は可笑しそうに含み笑いをしてくれる。

「ねえ、霊夢。今のは彼を取られた嫉妬かしら？」

「うっさいわね。……て言うか、まだ取られてないわよ！」

「分からないわよ」。もしかしたら、彼の好みってああ言うタイプかもしれないし」

「ぐっ……」

紫がからかって来ているだけなのは分かってるけど、リュウの好みの話を出されると何も言えなくなる。

あまりその手の話をしないし、周りにもそう言うのはしてないみたいだから、イマイチあいつの好みって言うのが分からないのよね。だから、リュウの好みが彼女みたいなのって言う可能性も捨てきれないわね。

「……あれ？もしかして、本当にリュウをアイツに取られちゃうかも知れないの？」

「それは駄目！絶対に駄目！！」

「うわっ?! ……如何したのよこの子？」

「さあ？ 霊夢の考えは私にもよく分からないわ」

一旦落ち着くのを博麗霊夢、本当にリュウの好みが彼女みたいな子

なのか分からないじゃない。

それにリュウは黒髪の子が良いのよ、前に私の黒髪を触って楽しんでた……って、彼女も黒髪じゃないの。

「向こうの髪は結構長かったし、いつその事私も髪を伸ばそうかな  
いやでも……」

もしかしたら髪の毛じゃないかもしれないけど、巫女として服装を  
変えるわけにもいかないし、体格なんて変えられるものでもない。  
紫の式くらいとは言わないけど、せめて衣玖くらいの胸が有ればリ  
ュウを押し倒して……って、それは恥かしいから却下!!

「……ねえ、月の賢者」

「何かしら妖怪の賢者」

「鈍感を直す薬って作れないかしら？」

「惚れ薬は作った事あるけど、それは作った事無いから何とも言え  
ないわね」

「そうなの」

「……（鈍感って本当に罪ね）」

霊夢 Side out

…  
…  
…

「へつくしッ！」

「あら、風邪かしら？」

「いや、そんなんじゃないと思う」

「それなら、誰かが貴方の噂をしてるのよ」

「……噂をされてクシヤミが出るって如何言う事だよ」

「さあ？ そんな事わたしが知るわけ無いじゃない」

此処は博麗神社の母屋の屋根の上。

俺はこの場所に竹林にあつた屋敷『永遠亭』の主である『蓬莱山輝夜』と二人、月を眺めながら静かに酒を飲んでいる。

この屋根以上に高い建物が鳥居くらいしかないから、この場所からだと月の様子が良く見えて、俺は結構気に入っていたりする。

「ところで、いい加減わたしを此処に連れてきた訳を聞きたいのだから？」

「ちよつと君と話がしたくてね」

「あら？ わたしに求婚でも申し込む心算かしら？」

「いや、普通に話がしたいただけだよ？」

「……二人つきりでこんな場所にいるのに、普通の話がしたいって貴方ってヘタレなの？」

「なんでそうなるんだよ」

よく分からん解釈をする輝夜に対して、俺は深い溜息を吐いて呆れ果てる。

あまり他の奴に聞かれたくない話だし、此処からなら月が良く見えるから、月見には持って来いの場所だと思っただがな。

「まあ、良いけど。…それでわたしに話って？」

「初めて会った時に言ってたよな、？わたしには死と言う終わりが無い？って。それって如何言う事なんだ」

「……いきなり踏み入った事を聞いてくるのね」

「すまん」

「別に謝る必要は無いわ」

輝夜はそう言って、手に持っていたぐい飲みに入っている酒を飲み干した。

俺も酒を飲み干して、彼女が口を開いてくれるのを黙って待つことに。

如何しても話したくないのなら無理に聞かないけど、出来る事なら教えて欲しいとも思っている。

俺は空に為ったぐい飲みに新たに酒を注いで、今さっき入れた分も一気に飲み干す。

そうして待っていると、俺達の間にあつた沈黙を破って輝夜が口を開いた。

「あの発言はそのままの意味で、わたしは？蓬莱の薬？を飲んだ不老不死者よ」

「蓬莱の薬？」

「随分昔に永琳が作った薬の事。その薬を飲んだ者は魂が本体になり、身体は只の入れ物に過ぎなくなる。だから老いる事も無ければ、肉体が消滅しても新たな肉体を創れるのよ」

「……魂を滅ぼさない限り死ぬ事の出来ない者か」

「ええ。でも魂を滅ぼすなんて出来ないから、薬を飲んだ者は不老不死になるって訳」

「なら、輝夜にとって？永遠に生きる？って如何言う事だ」

「……ホントに変な事を聞いてくるのね。もしかして、不老不死に興味がある？」

「興味あると言うか、俺も似たような境遇だからな」

「如何言う事？」

輝夜は俺の言葉が理解出来なかったのか、今の言葉の真意を尋ねてくる。

俺は自分の秘密を伝えてくれた輝夜に、返答とお返しを兼ねて今度は俺の秘密を話すことにした。

俺が人ではなく竜だと言う事、見た目以上に永く生きていると言う事、そして？死？を操る亡霊姫に死ぬ事出来るのかと問われた事を話を聞いていると、輝夜は少しづつ重苦しい雰囲気醸し出してくるが、俺はそんな事など気にも留めず話せる事を話した。

「俺も輝夜と同じ不死者らしい。ただ、薬を飲んでそうだったのか、元からそうなのか位の違いでしかない」

「……元からそうなら、なんであんな質問をするの」

「俺には過去の大半の記憶がない。何百年も生きるのが如何言う事なのか、よく分からないんだ」

「それだけじゃないでしょ」

輝夜は俺の心を見透かすような眼で、コッチを見ながらそう言った。出逢って一日しか経ってないのに見透かされるなんて思ってなかったな……。

心の中でそう思い、苦笑いを浮かべながら、俺は自分の中にある本音を彼女に話した。

「……霊夢と出逢って人の寿命の短さを思い知らされた。彼女は百年も経たずに死を迎えるのに、俺は今と変わらず何百年も生き続け

る。……そんな事を考えたら？永遠に生きる？って何なんだろうなって」

叶う事ならアイツと同じ長さの寿命で歩いて行きたい。……でも、そんなのは無理な願いだって理解してる。

力を捨てて人になる事の出来ない俺には、如何したって途方の無い時間を歩き続けるしか道がない。

中途半端な記憶しかない俺には、永遠に生き続ける事を当たり前の様に受け入れる覚悟なんて、出来てる訳が無い。

……だからこそ聞いてみたくなった。？永遠？を受け入れた者にとつて、永遠に生きる事が何なのかを。

「……貴方の言いたい事はなんとなく分かった。その上で言わせて貰うのなら」

「貰うのなら？」

「そんな先の事を気にして如何するのよ」

「……はい？」

輝夜の意外な返答を聞いて、俺は思わず目を丸くし素っ頓狂な声を出してしまった。

正直尤もらしい事を言ってくるのだと思っていたから、この輝夜の言葉には本当に驚かされるが、なんでそんな事を言うんだ？

俺が輝夜の真意を尋ねるよりも先に、彼女の方から今の話を続けてきた。

「これはわたしの考え方だけど、過去が無限にやってくるのなら、千年や万年よりも今の一瞬を大切にされた方が良いじゃない」

「今の一瞬を大切に……」

「ええ。何年も先の心配をする暇があるのなら、彼女と一緒に居られる？今？を大切にしさないよ」

「……………」

輝夜の真意を理解した途端、俺は言葉を失ってしまふ。

………だけど、彼女の考えが俺の聞きたかった答えなのかもしれないな。

「未来を見据えるのは良いけど、見過ぎて前に進めなくなったら意味がないじゃない」

「…ああ、確かにその通りだな」

輝夜の言っていた言葉の真意を聞いて、今まで胸にあったトゲが取れた様な気がした。

彼女の言う通り、俺は？未来？ばかり見ていて？今？を見ていなかったのかもしれない。

俺も輝夜に習って、何時の日か来る別れを気にするよりも、今在るこの瞬間を大切にして行こう。

心の中でそう誓った俺は、取り戻したばかりの本当の月を眺める。

月は満月から見るとほんの少しだけ欠けているが、それでも優しい月光で地上を照らしていた。

俺は自分のぐい飲みに酒を注いだ後、丁度空になっていた輝夜のぐい飲みにも注いだ。

「あら、気が利くのね」

「さっきの礼も兼ねてだ」

「お礼をされる様な事を言った心算はないのだけど」

「じゃあ、俺の気紛れだ」

「そう言う事にしておくわ」

輝夜にも酒を注いだ俺は、もう一度空に浮ぶ月を眺めつつ、彼女と



ほぼ同時にぐい飲みに注いだ酒を一気に飲む。

其処から俺達の間にて話らしい会話もなく、十六夜の月が照らす中で静かに酒を飲み続けた……。

## 第五十五話 十六夜の月見（後書き）

……と言う訳で、永夜抄編はコレにて完結となります。

個人的に今回の話は、紅魔郷編に次ぐ書き辛さがありました。（紅魔郷は始めたばかりで書き方が分からなかったって言うのもある

）

本編は適当に書いている様な感じになりましたが、今回のリュウと輝夜の会話を書けたので良かったと思ってます。

ウィキにある東方永夜抄の輝夜欄を見て、ぜひとも二人を会話を書きたいと思っていたので。

輝夜が意外にも書き易かったため、今後の展開次第ではリュウの友人Cポジを手に入れて、出番が増える可能性もあります。

ちなみに友人Aはアリスで、魔理沙は前に書いた通り悪友。フランは妹分で、たっちゃんは友人Bだったりします。

衣玖さんは……お姉さんポジかな？ 何故かそんなイメージがあるんですよね。

霊夢は言わなくても、此処まで読んでくれた皆さんなら分かりますよね？

では、次回から日常ネタになります。更新をお楽しみに。

さて、永夜抄が終わったから原作の話は四つも書いたのか。  
残りの原作は：『花映塚』・『風神録』・『儂月抄』・『緋想天』・  
『地霊殿』・『星蓮船』か。……あと六つも有るだど？

## 第五十六話 二人の竜の過去（前書き）

今回の話は何時も以上に独自設定が多い上に、会話シーンが多数あります。

携帯でこの小説を読んでいる方には読み辛いモノになってますが、ご了承ください。

## 第五十六話 二人の竜の過去

月見から数日が経ったある日の昼下がりに。

霊夢は衣玖と共に人里に買い出しに行つて、俺は母屋の縁側に腰掛けながら、愛刀に刃毀れや歪みがないかチェックしていた。

「この剣を使い始めてそこそこ経つが……刃毀れどころか、傷一つ無いって如何言う事だ？」

太陽の光を受けてキラリと光る刀身を見ながら、俺は独り愚痴る。  
この剣で練習用に作った岩を切り裂いたり、妖夢の楼観剣と何度も剣戟を興じた。

この前だつて輝夜の異様に硬い神宝ともぶつけたつて言うのに、刃毀れなんて何処にも見たらない。

本当に今更だが、この剣が一体何で出来ているのか物凄く疑問に為ってくるな。

「うゝむ……」

「おゝい、遊びに来たぞ……って、何をしておるんじゃ？」

「あ、龍神」

「だから『たつちゃん』と呼べー！」

「あゝはいはい」

「なんじゃその返事はーッ！ー！」

俺が縁側で剣と睨めっこしていたら、久々に龍神の奴が神社に遊びに来た。

相変わらずあだ名で呼ばなかっただけで怒るが、個人的には『龍神』って呼んだしっくり来るんだよな。

それに、ずっと昔からこう呼んでいた様な気もするし……なんでだ？

「全く、本当にしようのない奴じゃな。……それで、今は何をしておる」

「べつになにも。……強いて言うなら、この剣の刃毀れのチェックだ」

「その様な事調べなくとも、？ 妾の創った？ その剣に刃毀れなど生じる筈がなかるう」

「……妾が創った？」

「うむ」

龍神は驚いたかと言わんばかりに胸を張ってふんぞり返る。

相変わらず偉そうなやつだが、実際にこの幻想郷の最高神なんだし、一応偉いんだよな。

……でも、背丈が小さいから如何しても小生意気な子供にしか見えない。

本人に言ったら何されるか分かったもんじゃないし、俺の心の奥底に仕舞いこんでおくけどな。

「……今、変な事考えたじゃろ」

「気のせいだ。それより、この剣はお前が作ったのは本当か？」

「さっきそう言ったじゃろ」

「なら、如何してこの剣は俺の力に共鳴するんだ？」

「如何と言われても、その様に創ったからとしか良い様がないぞ」

「なんでそんな機能を付けたんだよ」

「うむ……順序を追って説明すると少々長い話になるが、構わぬか？」

「嗚呼。今日は特に予定も無いしな」

「そっか」

返事に受け取った龍神は、一つ頷いた後、俺の隣の場所に座り込んだ。隣りに座ったまま、龍神は何処か遠くを見詰めながら、昔を懐かしむように語り始めた。

「今から一体何年前じゃったかな。竜は覚えておらんじやろうが、お主は前にもこの世界に来ておる」

「マジか？」

「嗚呼。……あの頃はまだ幻想郷の基礎も出来ておらず、人間に妖怪……それに神々が好き勝手に暮らしておった」

遠くを見詰めながら語る龍神の顔は、昔を懐かしみながらも何処か儂げな表情をしていた。

その表情が何を意味するのか分からないけど、普段とは違う龍神の様子に内心戸惑い隠せないでいる。

けれども龍神は、そんな事など露も知らずに語り続ける。

「当時の妾も？ 幻想郷の最高神？ ではなく、一介の龍として自由に空を飛びまわっておったある日、空を飛んでいた妾の近くで、天を割って見た事の無い白い竜が現われ？ 神は何処に居る？ と尋ねてきた。

妾は？ 神々なら高天原に居る？ と答えると、その竜は？ そうか？ と頷いた後、何処かへと飛んで行きおった」

話し始めたばかりで少々気が引けるが、如何しても気に為る事が出来たから質問させて貰おう。

「……あゝ二つ質問があるんだが良いか」

「ん？ なんじゃ？」

「その白い竜ってのが俺なのか？ あと剣の話は如何した」

「最初の質問はその通りじゃ。二つ目に関しては、もう少し待っておれ。いきなり剣の事を説明すると、何故コレが必要なのかと言う話になってくるじゃろ」

「……それもそうだな。悪い、続けてくれ」

「うむ」

話の腰を折ってしまったが、龍神は特に気にする様子も無く、一度咳払いをしてから話を続けた。

「…何処かへと飛んでいく竜の姿を見て、妾はなんとなくあやつのが気がになり、後をつけることにした。

下手に勘付かれない様に距離を取り後をつけておると、白い竜は高天原にまで辿り着き、神々に向かつて？俺の敵は何処だ？と言った。突然現われた白い竜に神々は戸惑いながらも？そなたの敵とは誰の事だ？と聞くと、アヤツは？俺の敵は神だ？と言い放った。

その言葉に神々は驚き、白い竜を高天原から追い出そうとしたが…それが悪かった。

白い竜は追い出そうとする神々を敵と認識したのか、自分に向かつて来る神々を逆に返り討ちにしてしまっておった。

其処から先は只の蹂躪じゃったな……。白い竜は逃げる神に追撃はせんものの、向かって来る者には一切の容赦もなく撃退し続けた。

何人もの神が敗れ去り、遂には武神と呼ばれておる建御雷神をも討ち破ってしまった」

「……………」

龍神の話の聞いていている内に、昔の俺は一体何をしていたのかと自分で問い詰めたくなってくる。

前に俺の本質は『神殺し』だと聞いていたが、まさか本当に神々に喧嘩を売っているとは思ひもなかった。

若気の至り……って歳だったのか知らないけど、今の俺なら考えら



れない暴拳だな。

「建御雷神をも破り、徐々に追い詰められていく神々じゃったが……突如として白い竜が？違う、コイツ等じゃない？と呟き、攻撃の手を止めて高天原から出て行きおった。

神々は白い竜が立ち去り、安堵の表情を浮かべておったが、妾は直ぐに後追いかけてあやつに今回の暴拳の訳を尋ねた。

するとあやつは？俺は神を殺す為に生まれた竜だ？と言い、次ぎに言ってきたのが？他に神は居ないのか？と妾に尋ねてきおった。

尋ねられた妾は心底困り果てた。確かに神々なら日の本へ行けばまだ居るが、案内などしてまた暴拳を引き起こされては我等龍族の立場が危うくなる。

何とかしてコヤツを言い包められないかと考えて居ると、妾たちの傍に天照大神がやってきた」  
アマテラスオホミカミ

龍神が語る中で出て来た『天照大神』と言う名前。

その名を聞いたとき、どんな奴だったか覚えていないのに……懐かしさの様なものを感じた。

昔の俺は随分と無茶な事をしていた様だが、神の名前を聞いて懐かしむ位この土地に居たのか。

「妾は最初アレだけ暴れた竜を咎めにきたのかと思っただが、天照は？他の神々なら日の本に居る？と白い竜に教えてしまっ。

一体何を考えておるのかと尋ねるよりも先に、天照の奴は？しかし、その姿のまま赴く事はまかり為りませぬ。如何しても行くというのなら、姿を変え、力を抑えて行かれよ？と告げてくる。

白い竜は？何故か？と聞くと、天照は？そなたの力は強大であるが故に、今のまま行けば関係のない者達が命を落とす事に為る。……それと良しとするのですか？？と逆に問い返した。

白い竜は暫し考えた後、自らの姿を人の形へと変え？コレで良いか

？と天照に問い掛けた。

天照はソレを見て頷くと、今度は妾の傍に近付き？暫く間、かの者の様子を見ていて貰いたい？と頼のみ頭を下げてきた」

「何だつてそんな事を頼んだんだ？」

「お主が危険人物だからに決まっておるじゃるが」

「……それで納得出来る自分が嫌になる」

俺は肩を落として凹んでいると、龍神はその様子を見て可笑しそうに笑う。

笑う龍神に文句でも言つてやろうかとも思ったが、彼女の笑顔を見ていると何故かそんな気も失せてくる。

俺は大きく溜息を吐き、龍神は中断していた昔話を続けてくれた。

「天照の頼み事は最初は断ろうとも思ったが、あやつが下げた頭を無碍にする事もできず、結局？遠くから見ていただけで良いのなら？と言う条件で引き受けてしまった。

此方が提示した条件を天照も了承し、妾も白い竜に倣って人の姿へと変えて竜と共に地上へと降りた。

其処からがまた大変でな。竜は神々だけではなく野党や妖怪など、自分に敵対する者全てを潰していきおる。一切の手加減も無い上に、竜言語魔法も惜しみなく使うもんじゃから、一時日の本に住まう者全てから化物扱いされてたわ」

「……ソレを見かねた龍神が、力を抑えるために俺に剣を創つて渡したと？」

「見かねたと言うよりも、天照を哀れんだと言うのが正しいじゃるうな。

竜と共に日の本を歩き渡つておつたある日、天照の奴が妾たちの前に現われ？お願いだから、もう少し穏便に戦つて？と涙ながらに頼み込んできたからな。

日の本の太陽神が涙ながらに頼んで居るのに、竜は？コレ以上抑え

ようが無い？とあっさり言い捨ておった。  
その一言に天照は卒倒しそうになってな、ソレを見かねた妾が力を  
使い竜の為の剣を創り始めたと言う訳じゃ」

長い話だったが、漸く本命の剣に関する話にまで辿り着く事ができ  
た。

それと同時に、昔の俺は随分と酷いやつだったと言う事が分かった  
気がする。

「剣を創り、竜に手渡したのは良いが……力を込めただけで、あっ  
さり灰にしてしまつてな。

本人に何故その様な事をしたかと追求すれば、あやつは？俺は軽く  
力を込めただけだ？と言いきりおつた。

手加減を知らぬのは分かつておつたが、まさか此処まで手加減知ら  
ずとは思ひもしなかつたわ」

「ん？でも、前に使つてた刀は燃え尽きたりしなかつたぞ」

「それはちゃんと手加減しておつたからじゃろ。当時の竜は本当に  
酷かつたからの」

「……………」

自覚はしていたが、はつきり言われると悲しいものがあるな……。

「まあ、当時の妾も創つた剣あつさり灰にされたのが悔しくて、  
竜が使える剣を創り出そうと躍起になつてたわ。

何本も剣を創り、それを竜に渡しては壊される毎日……。望む物を  
創れない悲しさと悔しさから、夜中に独りで泣いておつた事もある。  
それでもめげずに剣を創つておると、一本だけ壊れ方が他の剣とは  
違つのが出来てな。詳しく調べてみると、その剣だけが竜の力を受  
け入れる様な作りをしておつた」

「力を受け入れる？」

「うむ。竜の力を水と例えるなら、その壊れた剣は水を注がれる杯のようなものじゃった。

杯に水を注いでも許容量までは持ち堪えられるが、量を超えれば水が溢れて決壊してまう。それと同じ様に、剣も受け入れる力が限界を超えると崩壊しておった。

その事を知った妾は、幾ら注がれても壊れない器を作ろうとしたが……竜が注ぐ力の方が圧倒的で、何度壊れない剣を創ろうとも、竜はいとも簡単に限界を超えてしまう。

そこでまた妾は考えた。無限に注がれる力ならば、それに共鳴し、余分な力を別のモノに変換する仕組みを作ればよいと」

「それが、俺の力に反応する理由と刀身が光る理由か」

「その通りじゃ。材料には金剛石よりも硬い緋ヒイロカネ々色金で使い、妾の力で必要な仕組みを組み込んで一つの剣とした。硬度は叢雲と同等で切れ味も申し分ない一品に為った訳じゃ」

龍神は出来上がった時の事を思い出しているのか、本当に嬉しそうに笑いながらそう話す。

一方で俺は、知り合った当時から迷惑や苦勞を掛けていたと知り、申し訳ない気持ちで一杯に為ってくる。

多分だけど、昔の俺は龍神に感謝の言葉も言わないで？……まあまあだな？とか言ってるんだろっしな。

「なんつうか……苦勞を掛けたみたいだな」

「気にするでない。妾が好きでやった事なんじゃし」

「そうは言ってもな……」

「当時の竜からもちゃんとお礼を言われておるから、お主が気にする事ではない」

「言ってたのかよ?!」

龍神の何気ない一言に俺は眼を丸くし、大声を出して驚きを顕わに

した。

「そんなに驚く事もなからう。……確かに当時の竜は、鉄仮面でも被っているのかと言う位無表情で、口数も少なかったがちゃんと礼は言う奴じゃったぞ。……まあ、謝罪は滅多にせん奴じゃったがな」

「……今の俺と全然違うんだな」

「そうじゃな。妾も今のお主を見たときは別人かと疑ったくらいじゃし」

「俺も龍神の立場だったら、間違いなく疑うだろうな」

今までの話を聞いていると、本当に今の俺とは別人と言っても良いくらいに違いだ。

もう一人の俺だったフォウルも、別人と言っても過言じゃない位に性格が違っていたっけ。

その事を思い返してみると、もしかしたらフォウルの方が昔の俺に近かったのかもな。

「と言う訳で、お主が剣を手にするまでの経緯はざっとこんな感じじゃ」

「長い話をありがとな龍神」

「それは構わぬのじゃが……そう呼ぶのを止めると言うておるじゃろ」

「別に良いだろ。龍神は龍神なんだし」

「……その呼び名はな、自分と妾を区別する為にお主が呼び始めたのじゃぞ」

「そうなのか？」

「そうじゃ！ それに初めの頃は？神？ではなく？人？で『龍人』となっておったのに、お主と一緒に旅をしていたら何時の間にか『龍神』と言う破壊の神として畏れられておったのじゃぞ……！」

「あ……それは災難だったな」

口ではそう言うものの、霊夢から？龍神は破壊と創造の神？と聞いていたから、別に問題ないだろと思ってしまっ。

まあ、暴れまわっていたのは当時の俺なんだし、本当なら俺がそう呼ばれていても不思議じゃないんだが……世の中分らんもんだな。

「世に広まる前にお主が別の呼び名で呼んでおれば、今も自由に空を飛んでおれたものを……」

「そうは言うが、別の呼び名って例えばどんなのだよ」

「無論『たつちゃん』に決まっておるじゃろ。今からでも遅くはない、さあ呼ぶがいい！」

「その名前は断る」

「なんじゃとーッ!!」

怒り掴み掛かろうとする龍神を片手で押さえ付け、前みたいに首を揺すられない様にする。

そうして暴れる龍神を押さええていると

「ただいま。リュウ、今帰ったわよ」

「おじゃまします」

買い物に行っていた霊夢と衣玖が神社に帰ってきた。

その声を聞きつけた龍神は、素早く俺の手から離れて二人の方に向かって走り出す。

「ん？ 何する心算だ？」

「知れた事……。お主の知らない過去をあの二人に喋るだけじゃ！」

「あ、お前！」

「話されたくなければ、今度は妾の事を『たつちゃん』と」

「それは断るって言っただろ」

「　　靈夢ー！　衣玖ー！　面白い話があるから聞かぬかー！！」  
「ちよつと待ってーッ！！」

俺は大声を出しながら、二人の元へ行こうとする龍神の後を追いかけた。

龍神が一体何を言うのか知らないけど、さっきの話しを聞く限りだと絶対に碌な過去じゃない。

本当に止められるのか分からないが、靈夢に変な事を吹き込むのだけは絶対に止めさせてやる！！

## 第五十六話 二人の竜の過去（後書き）

オマケ

この日の本から竜が姿を消したとき、妾は途方もない寂しさを覚えた。

あやつがこの世界に現われてから、何百年も共に行動していたのだ、寂しくなるのも当然なのかも知れぬ。

……じゃからこそ、この幻想郷に姿を現したときは本当に嬉しかった。

竜が消えてから数百年の間に色んな事があり、その間の事を全て話してやるうとも考えていた。

しかし、再び姿を現した竜には妾との記憶がなく……あやつは霊夢を選んだ。

その事が酷く悲しかったし、叶う事ならまた二人で世界を見て周リたかった。

……けれども、今は大丈夫じゃ。記憶を失っていても竜は竜だと分かったからな。

「で、その時の竜は何を考えたのか、天魔を全力でぶっ飛ばしおつてな。いや、アレは見事な吹っ飛び様じゃったぞ」

「今もそうだけど、昔から破天荒な事してるのね」

「ちよつと待て霊夢。？今も？つて如何言う事だよ？今も？つて！」

「そのまんまの意味よ」

「……もしかして、自覚がないのですか？」

「い、衣玖さんまで……」

「まあ、お主は昔からとんでもない奴じゃったと言う事じゃ」

「あれ？ 眼からしょっぱいものが……」



昔の様に共に世界を渡り歩けぬのは寂しいが、こうして皆が集り騒ぐと言うのも存外悪くはない。

じゃからこそ、独りでいた数百年分の時を帳消しに出来るくらい、思いっきり楽しませてもらうぞ。

……なあ、我が最良の友、竜よ……。

終わり

## 第五十七話 蟲の逆襲（前書き）

注意：今回の話は世間一般的に苦手な人の多いと思われる虫が登場します。

虫が本当に駄目と言う人は、虫が登場する場面ではあまりイメージを膨らませないで下さい。

## 第五十七話 蟲の逆襲

??? Side

……あの二人と出遭ったのは、つい二週間くらい前の事だ。

僕が気ままに夜空を飛んでいた所にやって来て、いきなり好き勝手な事を言っ て来たあの二人。

好き勝手に言う二人に腹を立て、懲らしめる為に必殺の蹴りを放つものの……青髪の男の前にアツサリと破られ、遠くへと投げ飛ばされてしまった。

……その時に僕は心に決めただ、あの二人に必ず復讐してみせるって！

だけど、知り合いの妖怪から聞いた話だと、あの二人に戦いを挑んで勝てた者はいないらしい。

特に青髪の男の方は、湖の畔に住む吸血鬼と戦って勝ったとか、幻想郷から姿を消した鬼にも勝てたとか……嘘か真かも分からない話がある。

その話を聞いて流石に恐怖に駆られそうになったけど、あの男に畏れて泣き寝入りする訳にも行かない。

何か手はないかと考えていた僕の元に、ある日一匹の妖怪ウサギが変な薬を売りに来た。

その名も『巨大化薬』。この薬を使えば、一定時間だけ服用した生物の身体を大きく出来るとか。

……ウサギがこの薬を売りに来た時に僕は思った。

きつと龍神様が、あの二人を倒そうとしている僕の為に、この妖怪ウサギを派遣してくれたんだって。

一瓶の値段は結構張るけど、僕は迷わずその薬を五本も購入した。  
お陰で今月は苦しい生活になりそうだけど、蟲の地位向上の為にあ  
の二人に舐められる訳にも行かない。

この薬を使つて必ずやあの二人に僕の恐ろしさを思い知らせてやる  
！！

??? Side out

「それじゃまたね、霖之助さん」

「またのご来店をお待ちしてます」

私は包んでもらつた本を大切に抱えながら、目の前の扉を開けて香  
霖堂を後にした。

リュウが来てから、前ほど店に遊びに行かなくなつたけど、今日は  
珍しく良い買い物が出来たわ。

あまりにも気分が良かったし、霖之助さんにしては結構安い値段で  
売ってくれたから、思わず買っちゃった。

先月は結構な高値で売れたのか、リュウがウチに多くお金を入れて  
くれたお陰ね。

神社には相変わらず客が滅多にこないけど、アイツが頑張ってくれてるから、こうして本を買つ余裕も出来てきた。

「ホント、リュウには感謝しなきゃね。……それじゃ、中身を拝見つと」

私は香霖堂から神社へと続く道を歩きながら、ついさつき買ったばかりの本を取り出し、歩きながら本を読み始める。

この場に慧音が居たら間違ひなく注意が飛んでくるでしょうけど、彼女がこんな所に来るなんて思えないし、特に気にする事もないですよ。

そんな事を考えながら本を読んでいると、何処からともなく虫の羽音が聞こえてくる。

幻想郷にだって虫の十匹や二十匹は居るんだし、特に気にする必要もないんだけど……聞こえてくる音がどうにも五月蠅すぎる。

私の耳に届く羽音は、夜中に聞こえてくる鈴虫の大合唱の方が静かと思えるくらいの音量。

一体何匹の虫が集まれば、こんな大音量の羽音が聞こえてくるのやら……。

いい加減喧しいと感じてきた私は、懐から札を取り出し、虫を追い払おうと振り返ると

「……………はい？」

私の後ろに居たのは、通常の十倍はある八工に人と同じ位のサイズのゴキ。更に人よりもデカイ蜂と蟻に、大ムカデに羽が生えた様な謎の虫と、赤ん坊くらいのサイズの芋虫の群れだった。

群れと言っても、ざっと数えた感じだと5〜60匹いるかどうかって所かしら。

……まあ、サイズが尋常じゃないから、その程度の数でもちよつと

圧倒されるわね。

「幾ら幻想郷と言っても、このサイズの虫がいたら普通は気が付くと思うけど……どこから来たのかしら？」

あまりにも突然な巨大な虫の出現に、軽く現実逃避していると……何処からともなく声が聞こえてきた。

「ふっふっふっ……人間よ、あの時の借りを返しにきたぞ」

「誰よアンタ、姿を現しなさい」

「そんな事して返り討ちになんて遭いたく無いからね。君の相手はこの蟲たちさ。……あ、青髪の彼の所にも蟲たちが行ってるから、救援には来ないよ。……それじゃ、蟲を舐めた事をたっぷりと後悔するが良い！！」

謎の音がそう告げると、巨大な虫たちは一斉に私に襲い掛かってくる。

私は咄嗟に空に飛び上がりながら札を投げるけど、巨大になったハエには上手く避けられてしまう。

他の虫には当たったのだけど、巨大になってもハエの機動性は全くと言って良いほど落ちていないらしい。

札を躲したハエは、その速さを落さないまま正面からコツチに向かって突撃してくる。

私は直ぐ目の前に障壁を展開して、正面から来たハエを防ぐけど……背後から他に飛べる虫が襲って来た。

背後にも障壁を張っても左右から襲われると思った私は、懐からスベカを取り出し迷わずそのカードを発動させる。

「夢符『封魔陣』！」

スベカを発動させると、私を中心にした四方に結界が張られ、直ぐ傍にいた虫たちを吹き飛ばした。

身体のサイズは巨大になっても虫は虫らしく、吹き飛ばされたのはあっさりと動かなくなる。

こつも簡単に倒せると分かったのなら、あとは命中率の問題だけ。直進するだけの札だと簡単に躲されるけど、狙った相手をホーミングする弾なら話は別。

私は買ったばかりの本を懐に押し込めるたら、服の袖の中からアミユレットを取り出し、それを虫たちに向かって投げ付けた。投げたアミユレットは、真っ直ぐに地面にいる虫たちへと向かって行くけど、ハエにはまたしても避けられてしまう。

だけどホーミング弾を投げているから、ハエに避けられたアミユレットは直ぐに旋回して、もう一度ハエへと向かって行く。

虫たちに私の弾を如何にかする術が無い以上、離れたところでホーミング弾を撃っていればその内ケリが着くでしょ。

そんな風に高を括っていたら、蟻はその強靱な顎で、蜂は持ち前の針で私のアミユレットを壊してしまう。

巨大な飛行ムカデにも、ダメージを受けながらもその巨体でアミユレットを薙ぎ払うし……やっぱ火力が足りないのね。

火力は何時の間にかリュウの役目になってたから、普段の異変解決なら特に気に為らないけど、今みたいに独りである時だと困るときは困るわ。

封魔針でも使えば問題ないけど、アレは札以上にかさばるから普段から持ち歩こうって気には為らないのよ。

「まあ、そんな事は兎も角。何時までも虫と遊んでる暇もないし、さっさと片付けよっと」

私は前準備として、地面にいる虫たちを取り囲む様に八箇所を札を設置する。

札を設置している間も牽制にアミュレットを投げてるから、多少は時間が掛かるけど……まあしょうがないわね。

スペカを持って来ていれば、こんな面倒な手順を踏まなくても良いんだけど、こんな大掛かりな結界を使わないといけないなんて思う訳がない。

私の勘も普段から利いてくれると助かるのになあ……って思っているのと、飛行ムカデの背に芋虫たちが乗って何かを準備し始める。

芋虫はムカデの背で丸くなると、直ぐ傍に居た蟻たちが丸くなった芋虫を私に向かって吹っ飛ばしてきた。

「そんな無茶苦茶なッ?!」

そう叫びながら飛んでくる芋虫を避けると、虫たちはそのまま勢いに乗って里の方へと飛んでいく。

今のは撃退すれば良かったと思い、アミュレットを投げようと慌てて後ろを振り向くと

「ぬがッ?! ……いつて、なんだこのデカイ芋虫?」

里の方から飛んで来たリュウと正面衝突していた。

でも、リュウとぶつかったのは一匹だけで、また三匹ほど里へと向かって飛んだまま。

「リュウ! そいつ等を里に入れないで!」

「了解。……暴風『羅風』!」

私が大声を出してリュウに頼むと、アイツは直ぐにスペカを発動させて旋風を巻き起こした。



巻き起こった風に飲み込まれた芋虫は、発生したカマイタチで全身を切り刻まれた。

里への侵入を防げたのは良いけど、あのサイズの虫が切り刻まれるのって結構アレよね……。

普段は小さいから特に気にしてなかったけど、大きさが変わるだけで感じ方も随分と変わるものね。

そんな感傷に浸っていると、何食わぬ顔でリュウが私の傍にまでやってきた。

「大丈夫か霊夢？」

「私は平気よ。下にいる連中も直ぐに片付けるからちょっと待って」

「分かった」

リュウが頷くのと見た私は、さっきからしていた結界の準備の仕上げに掛かった。

基点となる八箇所を札を設置した後、私はその中心点に飛び込み札を設置すると、八箇所を結ぶように霊力の壁が天高く展開し、巨大な結界が完成する。

結界の中に捕らわれた虫たちは、其処から抜け出そうと壁と接触するが、触れたモノ全て結界の中心部へと吹き飛ばされた。

飛べる虫は空を飛んで逃げ出そうとするけど、壁の高さは虫が飛べる高度を遥かに越えている。

残った手段として虫たちは私に襲いかかってくるけど、その行動はあまりにも遅すぎた。

「夢符『二重結界』」

私がそう呟くと、真下にある札から八角形の結界が私を取り囲む様に張られる。

結界が二重に張られた途端、一枚目と二枚目の間にいる虫たちは、立ち上った霊力の光に一匹残らず飲み込まれた。霊力の光は少しの間輝き続けていたが、それも収まり、結界を解除すると……光に飲み込まれた虫たちは全て動かなくなり絶命した。

「……スペカでもなく、順序も色々省略した割にはまあまあ威力ね」

「これだけやっておいて、まあまあってお前なあ……」  
「リュウに文句を言われる筋合いはないわよ」

結界を解除した私は、空の上で呆れた様な顔をしているリュウの傍へ向かう。

空に浮かび上がりながら、私はこの場所にリュウ以外の奴がいないか探していると、直ぐ傍の茂みで緑の髪の妖怪を見つけた。

前に何処かで会った様な気もするけど、妖怪の顔なんてイチイチ覚えてられないし、別に忘れたままでいいか。

そんな事を考えながら、この場から逃げようとしている妖怪に向かって四枚の札を投げ、即席の結界を作り、中に閉じ込める。

「け、結界?! 何時の間に張られたの!?!」

「そんなの今に決まってるでしょ。……それより、覚悟は出来てるわよね?」

「いや、ちよつと待って」

妖怪は何かを言おうとしているけど、私はそんなの無視して懐から一枚のスペカを取り出し、彼に向かって直ぐに宣言した。

「神霊『夢想封印』」

カードを宣言すると、私の周りに複数の光弾が現われ、全弾が結界

の中にいる妖怪へと飛んで行く。

妖怪は結界から逃げ出そうとするけど、私の光弾は結界をすり抜け……そのまま命中した。

「うわあああああッ！！」

結界の中が光弾の光に包み込まれると、妖怪の断末魔が聞こえてきた。

その断末魔も聞こえなくなり、光と結界が消え去ると……其処には、私のスペカを喰らって気絶している妖怪の姿があった。

……  
……  
……

「まったく、なんだったのかしら」

「妖怪の暇潰しだろ」

「……物凄く傍迷惑な話ね」

妖怪を撃退した私は、迎えに来てくれたリュウと一緒に、神社に向かってのんびりと歩いていた。

飛んで帰れば直ぐなんだけど……今日は気持ちの良い青空が広がっ

ているし、たまにはこうして歩いて帰るのも悪くないわね。

「そついや霊夢。懐に何を入れているんだ？」

「…？ 懐？」

リュウに言われて自分の懐を探してみると、私の手に本の様なものが触れた。

なんでこんなのが入っているんだろうと思いつつ、その本を取り出した瞬間……自分が何を入れていたのか思い出した。

虫に襲われてたからすっかり忘れていた……って言うのは言い訳ではないわね。

とりあえず、何事のなかったかのようにもう一度懐に仕舞いこんで

「……ちよつと借りるぞ」

「あ、返しなさいよバカ！！」

本を仕舞いこもうとしたとき、リュウにその本を奪い取られてしまった。

別に見られて困る様な本でもないんだけど、コイツに見られるのだけは困る……！！

「何々……『大切な人に食べさせたい料理集』？」

「声を出してタイトルを読むなーッ！！」

私は声を荒げてリュウから本を取り戻そうとするけど、コッチの手が届かないくらいに高く持ち上げられて奪い返せない。

背丈はリュウの方が上だから、高々と持ち上げられると触れる事もできないから物凄く困る。

私は背伸びをして手を限界まで伸ばして、リュウから本を取り戻そ

うとするけど……それ以上に高い位置にあるから掠る事も出来ない  
でいる。

「さっさと返しなさいよ！」

「……あ、霊夢。今日の晩飯はコレが食べてたい」

「そう言うフリクエストは後にしなさいよ！……て言つか、ちよつ  
と楽しんでるでしょ……！」

「ソナナコトナイヨー」

「私の眼を見て言いなさいって……！」

私は怒鳴りながらもリュウから本を取り戻そうと、躍起になって手  
を伸ばす。

リュウは楽しそうに笑いながら、私の手が届かない位置で料理本を  
パラパラと捲り、本の内容を読み続けた。

コイツには本の事を内緒にしようと思ってたのに、なんだってこつ  
なるのよーッ……！！

第五十七話 蟲の逆襲（後書き）

あんな注意書きを書いておいて、結局はこんなオチなんだ。  
いや……まあその………楽しければそれで良いですよね？

## 第五十八話 アリスの人形工房

十月に入り秋も深まってきた今日この頃、俺は家の縁側で二つの剣の手入れをしていた。

龍神の話だと、二つとも緋々ヒヒイロカネ色金とか言う、途轍もなく頑丈な鉾石で出来ているらしいが……それと手入れするのは話が違う。

幾ら刀身が頑丈でも、使っていけば土汚れや埃なんかで汚れてきたりもする。

……まあ、埃なんて滅多に付着する事はないんだが、折角の貰い物を汚したままにしておくのも気分が悪い。

「こんな所……かな」

刀身に塗った油のチェックし、薄くムラなく塗れたことを確認した俺は、分解していた刀身と柄を元通り組み合わせた。

組み上がった剣を太陽の光に翳してみると、鉄が光を反射してギリと輝いたように見える。

特別おかしな箇所も見付からないし、後は軽く素振りでもして感触でも確かめれば良いかな。

俺は刀身を見ながらそんな事を考えていると

「ちょっとリュウ。眩しいんだけど」

「あ、悪い」

刀身が反射した光が眩しいと、居間で読書をしている霊夢に怒られてしまった。

俺は直ぐに剣を鞘に仕舞うと、霊夢はまた本に眼を落とし、読書の続きを始める。

その間に俺は、手入れをした二つの剣を持って素振りでもしようとして立ち上がると、境内の方からアリスがやって来た。また上海に幻想郷を教える為に連れて来たのかと思ったら、意外にも今回は彼女一人のようだ。

「いらつしゃい、アリス。今日は一人か？」

「ええ。今日はリュウに相談したい事があって」

「別に良いけどなんの相談だ？」

「此処だと説明しづらいから、ウチに来て欲しいのだけど良いかしら？」

「アリスん家か……」

アリスの家に招待された俺は、何か予定が入ってないか思い返してみよう。

……思い返してみると、今日は特に予定もないし、彼女が来なかったら素振りでもして、その後に昼寝でもしようかと思ってたくらいだ。

特に用事も思い当たらないし、俺に相談があるってところを考えると十中八九あの自立型上海に関しての事だろう。

素振りくらいなら何時でも出来る事だし、昼寝をするならアリスの相談に乗った方が有意義かな。

そう考えた俺は、アリスに了承する前に霊夢に一言掛けておく事にした。

「霊夢、ちょっとアリスの家に行ってくるわ」

「別に良いけど、夕食前には帰ってきてきなさいよ」

「分かってる。……それじゃ、行くか」

「悪いわね」

「気にすんなって」



アリスにそう告げた俺は、彼女と一緒に『魔法の森』に向かって飛んでいくことにした。

此処から森の中にあるアリスの家まで……一時間もあれば辿り着けるか。

そんな事を考えながら神社を後にすると、隣りにいるアリスに声を掛けられた。

「ところで、リュウ。霊夢は一体なんの本を読んでいたの？」

「料理本。多分、夕食の献立でも考えてたんじゃないのか」

「……彼女がそう言う本を読むなんて、何か意外ね」

「最近はおよくちよく読んでるけどな」

……

……

…

アリスと他愛のない話しをしながら空を飛んでいると、漸く目的のアリスの家に辿り着いた。

森の中は茸の胞子で若干呼吸がし辛いけど、コレと言って身体に害はないみたいだし、気にしないでおう。

「それじゃ入って」

「お邪魔しま〜す」

俺はアリスに誘われるままに彼女の家の中に入る。

此処に来るのは二度目だが、実際に中に入るのは今回が初めてだ。普段暮らしている母屋とは家の作りが違うから、どんなモノかと思っっていたら……前の世界でも見た事のある作りだった。

確か……仲間の故郷の『ウインディア』にある民家がこんな感じの作りだったか。

家のアチコチに置かれている人形は別にしても、建物の作り自体はあの街で見た家々に本当に良く似ている。

そう考えると、一緒に旅をした皆の事を思い出して、つい感傷に浸ってしまう。

まだこの世界に来て二年も経ってないのに、こんな風に思い出してしまうなんて……それだけ、この幻想郷での生活が向こうよりも濃いつて事なのかな。

「……………」

「……？ リユウ、如何かしたの？」

「……………えっ？」

「えっ……じゃないわよ。私の家にかかるなり、何かを懐かしむ様在中を見てたでしょ」

「ああ……ちよつとな」

「別に良いけど、あまりジロジロと見ないで欲しいわね」

「すまん」

俺は彼女に一言謝罪した後、アリスの案内で家にくっ付いている塔の上に行く階段を上がる。

上にあがる途中で俺を呼んだ理由を聞いてみると、やっぱり自立型上海の事で相談があるようだ。

なんでもアリスの話だと、この間の上海のパワー不足の原因が分か

ったから、その相談に乗って欲しいとか。

只のパワー不足なら、素体に使っている人形を弄れば良いだけだと思っただが………如何やらそうする心算はないらしい。

「人形自体を弄ったほうが速いと思うぞ」

「そんな事をしたら上海に組み込んでる術式が崩壊するわ。……私のはあの子を壊す様な事はしたくないの」

「まあ、気持ちは分からなくも無いが……」

「分かってくれるならちゃんと考えて」

一番手っ取り早い方法だと思うんだが、アリスはお気に召さなかったらしい。

まあ、あの上海はアリスにとって、自分の夢を実現させる為の大切な人形だ。変なところを弄って壊したくないと思うのは当然だろうな。

そんな事を考えながら塔を昇り切ると、アリスの作業場と思われる部屋に辿り着いた。

部屋の本棚には魔導書か、或いは人形のレシピと思われる本がギッシリと仕舞われていて、中央にある作業台には人形を作るための小道具なんか置かれている。

そんな作業台の真ん中には、魔法陣が描かれた紙が置いてあり、その上に例の上海人形が眠っているように横たわっていた。

パツと見ただけじゃ何をしているのか分からないが、恐らくは上海を調整するための準備をしてたんだろうな。

「そっいや、結局は何が原因でパワー不足になったんだ？」

「大した問題じゃないわ。只の魔力不足だから」

「……アリスって意外と魔力が低いのか」

「違うわよ」

ちよつとしたポケの心算で言ってみたら、物凄い剣幕で怒られてしまった。

別にウケると思ってなかったけど、そんな恐い顔で睨まなくても良いじゃないか……。

「……如何やらこの子は、私からある程度離れてしまつと魔力が受給出来なくなつて、性能が落ちるらしいのよ」

「それって、魔力を送る側にも問題があるんじゃないのか？」

「私もそう思つて調べたわ。……でも、私自身にはコレと言つた問題は見付からなかった」

「と言つ事は……上海に組み込んだ術式に問題ありか。恐らく、魔力を受け取る仕組みのツメが甘かつたんだろ」

「話が早くて助かるわ」

俺が欠陥を指摘してもアリスは怒る事はなく、術式の欠陥を認めて小さな溜息を吐いた。

大概の術者はこういう指摘を否定するものだと思つてけど、全員がそう言う訳でもないんだな。

俺に仕えていた術者達を思い出したが、上海の問題とは全く関係のない事なので頭の片隅に追いやつておこう。

「上海の術式に問題があるとすると、やっぱり式を弄つたほうが速いと思つぞ」

「この子を構成している術式は絶妙なバランスで成り立っているのよ。それを弄つたりしたら、今いる上海が消滅してしまうわ」

「……まあそうだろうけどな。ようは俺に術式を弄らずに、魔力受給率を上げるアイディアの相談がしたいと？」

「ええ」

「……………」

あつさりど難題を突き付けてくるアリスに軽い頭痛を覚えつつ、俺は腕を組んで何か良い案はないかと思案することにした。

正直な話、術式を弄らずに魔力の受給率を上げるのは無理だと思う。上海がどんな仕組みで動いているのか大体は把握してるけど、その構成上どう考えても式を弄るしか方法は無い。

……とは言つても、アリスが言っているように下手に弄つたら術式が崩壊するし、如何したもんな。

「……………」

「やっぱり貴方でも難しい問題かしら？」

「……………全く弄らずってのはな。やっぱり術式に干渉する方向で考えたほうが良いぞ」

「そんな事したら上海が壊れるって貴方も認めたくないの」

「嗚呼。…だから、今在る術式は弄らずに新たな術式を書き上げる」

「……………如何言つ事？」

アリスは怪訝そうに聞いて来るが、俺も今思いついたから上手く説明出来るか不安だったりする。

まあ、ちゃんと説明出来なくてもソレを元に、アリスが別の方法を考えても思いつくかも知れないし、話すだけ話すとするか。

「つまりだ、今在る式の外側に別の魔法陣を描いて干渉させ、魔力受給率を上げれば良いんだ。術式を弄るのは新たに描いた奴を干渉させる時だけで済む」

「……………確かに後述詠唱で精度を上げる魔法もあるけど、それとこれとは話が違ってくるわ」

「うゝん……………其処の発想がちょっと違うかな」

「違う？」

「新たに書き加えるのは、飽く迄も今在る術式の延長。今の上海に必要なのは魔力受給の改善だから、其処の部分を補う魔法陣さえ描

ければそれで良い」

「……………」  
「それにこの方法が完成すれば、上海に新たな術式を描き加えて性能の強化も可能だ。……もつとも、人形って事を考えると複雑に描き過ぎたら身体がもたないと思うがな」

「……………」  
俺が彼女の返答を待っていると、アリスは自分の顎に手を当てて何かを考え込み始めた。

アリスも俺に相談する前に、今の術式に干渉させる方法は思い付いたと思うが……最初から魔法陣に組み込む事を前提とした魔法陣の発想は無かったのか。

霊夢の『二重結界』だって内側と外側で別の役割を持たせてるんだし、魔法陣にだって同じ様なことが可能だと思うんだが……。そんな事を考えながら彼女の返事を待っていると、アリスは顎から手を離して漸く返答をくれた。

「……………正直なところ、絵空事にしか聞こえないわ」

「確かにそうかもしれないが、絶対に不可能だって方法でもないと思うぞ」

「そうね。私も前に紅魔館の図書館で二重魔法陣に付いての記述を読んだし、不可能だとは思わないわ」

「それじゃあ」

「ええ、貴方のアイディアを使わせて貰うわ。……それに、私はもう手詰まりで困ってたからリュウに相談したんだしね」

「そっか……頑張れよ、アリス」  
「其処は？俺も手伝う？って言う所だる思うけど？」

「人形制作の口出しは出来るけど、魔法陣は専門外だから無理だぞ」  
「……………そう言えば、私と貴方じゃ使ってる術式が違い過ぎるんだっ  
たわね。すっかり忘れてたわ」

アリスが俺の魔法の事を思い出して独りで納得していると、玄関の方から誰かがドアをノックする音が聞こえてきた。一体誰だろうと近くにある窓から外を見てみると、玄関の所に箒を担いだ魔理沙が独りで立っているのが眼に入る。その姿を確認したアリスは、窓から顔を出して下にいる魔理沙に声を掛けた。

「何の用よ魔理沙」

「おうアリス！ 悪いんだけど紅茶の茶葉を分けてくれねえか？」

「紅茶なら紅魔館に行きなさいよ。私の家よりも種類が豊富よ」

「あそこがわたしに茶葉を分けてくれる訳ないだろ」

「……笑いながら言う事じゃないでしょう」

アリスは魔理沙の言い分に呆れて肩を落とすが、俺は心の中で？ 自業自得だろ？ って思ってしまう。

窓から顔を引っ込めたアリスは、溜息を吐きながら魔理沙の所に向かうために階段へと近付いていく。

「私は魔理沙に茶葉を渡してくるから、貴方は其処で大人しくしてて」

「分かった」

俺が返事をする、アリスはそのまま階段を降りて下へ向かった。少しすると下から二人の話し声が聞こえてくるが、魔理沙の事だから直ぐに帰る事はないだろう。

アリスが帰ってくる前に、俺は今狸寝入りしている子の話を聞いておくとしよう。

「……ところで上海は、何時まで其処で寝てる心算だ」

「気付イテイタノ？」  
「なんとなくだけどな」

俺がそう言つと、上海は眠っていた身体を起こし、此方を見てくる前に会つた時は少ししか喋れなかつたが、今は大分成長したのか片言だが話せる様になつたみたいだ。

最後にあつたのが一月前だから、それから考えると大した成長速度だな。……これも偏にアリスの頑張りの成果つてわけか。

「それで、さつきから俺達の様子を窺つてたけど……何か用か？」

「マスターハ、ワタシノ事ヲ如何スル心算ナノ？」

「……はい？」

上海は無機質な表情のまま、アリスが如何して自分を調べるのか尋ねてきた。

正直な話、いきなりそんな事を聞かれても俺も困るんだが……なんでこんな事を俺に聞くんだ？　もしかして、アリスの奴上海に事情を説明してないのか？

「最近ハズツトワタシノ事ヲ調べテイル。如何シテソナ事ヲスルノ？」

「……そりゃ上海の事が心配だからだろ」

「心配？」

「ああ。今のまま放置してたら上海の身に何か起こってしまうかも知れない。だからそうなる前に、原因を解明して改善しようとしてるんだよ」

「何デソナ事ヲスルノ？」

「それは勿論、上海が大切だからだ」

「大切……」

「嗚呼。……そうでなかつたら、こんなにも頑張らないだらうしな」



「……良く分カラナイ」

「分からないのならコレから分かれれば良さ」

「……………」

俺がそう言つと、上海は横になつてまた眠りに付いた。

人見知りの上海が何かを知ろうとするのは良い傾向だと思つが、今回の事はちゃんと説明してやるべきだったと思つけどな。

……まさかとは思つが、アリスの奴上海が喋れるのを知らないんじゃないだろうな。

そんな予感が脳裏を過ぎると、誰かが階段を上がってくる音が聞こえてきた。

一体誰が上がってくるのか気になり、音がする階段の方を注目している

「おついたいた。リュウ、わたし達と一緒にお茶でも飲まないか？」

「……なんだ、魔理沙か」

「だからそう言う反応は止めろつて」

階段を上がつてこの部屋にやつて来たのは魔理沙だけだった。お茶でもないかと誘いに来たつてことは、アリスは下で茶会の準備中つて所か。

アリスの事だからきつと紅茶だと思つけど……偶には何時もと違う茶を飲むのも良いかもな。

「ほら、早く行くぞリュウ」

「分かつたから急かすなつて」

急かして来る魔理沙を適当にあしらいつつ、俺達は下に居るアリスの元へと向かつた。

上海が喋れる事については今は触れないで置くとするか。

今この事を伝えたら、変なところで二の足を踏んで作業が先に進まなそうだな。

第五十八話 アリスの人形工房（後書き）

？なんかリユウ頭よくな？？って思つかもしれませんが、自動自立人形を二体も創れるなら、この位の会話は出来ると思います。

## 第五十九話 蓬萊の人の形

十月も後半に入ったある日、俺は買い物物の為に人里に来ていた。

何度も訪れているからか、里の八百屋や魚屋なんかともすっかり顔馴染みになり、たまに値段を安くしてくれる。

その分、危険な妖怪が住んでいる場所で釣れた魚を分けて欲しいと頼まれたりするけどな。

「……頼まれたのはコレで全部かな」

「今日はえらく沢山買ったな」

「最近、霊夢の奴が料理を作るのにはまったみたいで」

「お前さんの頑張ってるのかい？」

「それは如何なのかな？ ……でも、霊夢の作る料理は美味しいですよ」

「惚気かこのヤロウめ」

「そんなんじゃないって」

八百屋のおっちゃん和他愛のない話しをしていたら、後ろの方で殺気めいた何かを感じた。

その気配に反応して慌てて後ろを振り向くと、眉間にシワを寄せて怖い顔をしている上白沢さんの姿を見つけた。

如何やら今感じたのは、殺気ではなく怒気の様なものみたいだが……なんでこんな昼間からイライラしてるんだ？

寺子屋で教師をしているって聞いたけど、今日の授業の時になにか嫌な事でも遭ったのだろうか。

「……………」

俺の詮索を他所に、上白沢さんは恐い顔をしたまま横を通りすぎていった。

周りの事なんて眼中に無いつて感じだったが、其処まで苛立ちを募らせるなんて、そうそう起こる事じゃないと思うんだけどな。

「なんだつたんだ今の？」

「ん？ リユウは今の慧音先生を見たのは初めてかい？」

「そうだけど……もしかして有名なのか？」

「里で暮らしてれば一度は目にする……つて、お前さんは神社で暮らしてるんだつたな」

「……??？」

イマイチおっちゃんの話を理解出来ず、俺は首を傾げて不思議がある事しか出来なかった。

そんな俺を見かねたのか、おっちゃんが咳払いをし後で手招きをしてくる。

おっちゃんの行動も理解出来ないが、とりあえず話を聞くために店の中へと入る。

するとおっちゃんは、内緒話でもするかのように俺の耳もとに手を当てて小声で話し始めた

「実は慧音先生な、月に一回のペースであんな風にイラつくんだよ」

「なんでまた？」

「詳しい事は知らん。…でも、俺は子供の時に見ちまったんだ」

「見たつて……一体なにを」

「満月の夜に角の生えた慧音先生が何かを紡いでいる姿さ。先生の姿を見て声を掛けようとしたんだが、誰かに後ろから襲われちまつて結局解らずじまいさ」

「ふ〜ん………ん？ 今、おっちゃん？子供の頃？つて言わなかつ

「たか？」

「嗚呼、言ったぞ。慧音先生は半分は妖怪だからな、俺が小さい頃はお世話に為ったもんだよ」

「人は見かけに抛らないって言うけど……なんか意外だな」

「……ちよつと言葉の使い方が変な気がするぞ」

「そうか？」

おっちゃんから話を聞いた俺は、八百屋から出て、少し急ぎ足で博麗神社に帰ることに。

神社へと帰る道中に俺の頭にあるのは、さっきの上白沢さんの様子だった。

普段から厳しい事を言う人が苛立つなんて、満月の夜に一体何をしているんだろう？

一度でも気になりだすと、夜中にあの人に何をしているのか暴きたくなってくる。

……今夜にでも霊夢を誘って上白沢さんのもとを尋ねてみようかな。

……

……

：

そんなこんなで俺は、月が天高く昇った深夜遅くに霊夢を連れて神社を出た。

今夜の目的を彼女に話したところ、物凄くいやそうな顔をしてきたが……なんだかんだ言っただけで一緒に来てくれた。

神社を出るときに色々と言っていたが、割と何時もの事なので軽く聞き流しておく。

「全く、なんでこんな夜遅くに慧音の元を尋ねないといけないのよ。昼間で良いじゃない昼間で」

「俺は満月の夜に何をしてるのか知りたいんだ」

「そんなの翌日に本人から聞けば良いじゃないの」

「まあ、暇潰しみたいなものだしな」

「……そんなにはつきりと言っただけじゃないわよ」

霊夢の愚痴に適当な相槌を打ちつつ、とりあえず人里目指して直進していると……前方から白い服に赤いズボンを穿いた、白髪の少女が俺達の近付いてきた。

何度か里で彼女の姿を見た記憶があるけど、こんな夜遅くに一体何をしているんだ？

他人の事を言えた義理じゃないが、深夜遅くに独りで空を飛んでいたら不審者以外の何者でもないな。

自分たちも似たようなモノだと自覚しているものの、彼女の姿を見ていると如何してもそう思ってしまう。

そんな事を考えていると、白髪の少女は俺達の十数m手前の地点で静止した。

「其処の二人。こんな遅くに何処に行く心算」

「ちよつと上白沢さんの所に」

「慧音の？ …… 一体なんの用で」

「いや、別に用って程のものでもないかな」

「コイツは慧音が夜中に何をしているのか見に行くだけよ」

「ちょッ?! 物凄く誤解を招く言い方は止めて!!」

「事実でしょうが」

こんな真夜中に連れ出したのがいけないのか、霊夢の奴が何故だか物凄く不機嫌に見える。

でも、こんな時刻に俺一人であの人の元に尋ねられる程、特別仲の良い関係って訳でもないしな。

…… やっぱり、夜が明けてから上白沢さんに聞けばよかったかな？

「何が目的か知らないけど、お前を慧音の所には行かせない」

「あ、標的は俺だけなのね」

「そりやそうでしょ」

「直ぐに終わらせるから抵抗はするな！」

そう言った白髪の少女は、何処からか取り出した大量の札を俺に向かって投げて来る。

俺は持つて来ていた愛刀を抜き、飛んでくる札を次々に切り裂いて行く。

札を斬っている間に霊夢が攻撃してくれると助かるんだが、今回は完全にやる気がないらしく後ろで傍観している。

なんか霊夢のやる気を出す方法はないかとも思うが、彼女を無理矢理連れ出したのは俺なんだし、今回は一人で頑張ろう……。

小さな溜息を一つ吐いた俺は、頭を切り替えて白髪の少女に向かって斬撃を飛ばす。

俺の斬撃は札を切り裂きながら飛んでいき、あと少しで彼女に当たると言う所まで飛んでいった。

…… だが、当たる寸前で少女は斬撃の上を飛び越え、俺の一撃を上



手く躲されてしまふ。

「私の弾幕を斬り裂けても、当たらなければ如何と言う事はない」  
「んなの言われなくても解ってる」  
「ッ?！」

今の一撃は避けられると思っていた俺は、斬撃が切り開いた道を通って彼女との間合いを一気に詰める。

白髪の少女は新たな札を展開するが、完全に展開される前に間合いを詰めた俺は、その札ごと一気に彼女を斬り裂いた。

俺の攻撃はその一撃に留まらず、袈裟斬りから胴薙ぎに繋ぎ、更に斬り上げて、シメに脳天から強烈な一撃を叩き込む。

防がれる事なく叩き込まれた連撃、その攻撃の前に白髪の少女は力なく下へと落ちて行くが、突如として出来ていた傷が治り、背中に赤い炎の翼が出現した。

「不死『火の鳥―鳳翼天翔―』」

彼女がスペカを宣言すると、俺に向かって赤い火の鳥を放ってきた。俺は鳥を難なく斬り捨てるが、火の鳥が通った後に残っている火の粉に襲われそうになる。

その火の粉を躲すために後ろに後退すると、狙ったように二羽目の鳥が俺に襲い掛かってきた。

「チッ。…凍刃『氷牙<sup>ヒョウガ</sup>』！」

今の体勢では鳥を斬っても火の粉に襲われると判断した俺は、ポケットに入っていたスペカを宣言し、迫り来る火の鳥を氷付けにして粉砕した。

二羽目を凌いだところで体勢を整え、続いてきた三羽目も『氷牙<sup>ヒョウガ</sup>』

で氷付けにしていく。

その後も四羽・五羽・六羽と襲ってくる鳥を氷付けしていると、コシ以上は突破出来ないと言ったのか白髪の少女は攻撃を止めた。

「私の弾幕を氷付けにするなんて大した能力だ」

「俺としてはさっきの傷の治り方に付いて聞きたいがな。……あんな、蓬萊の薬でも飲んだのか」

「…如何してその薬の事を知っている」

「この前知り合った奴に聞いた」

「……そうか、お前輝夜の知り合いか。なら、手加減はいらないな」  
「なんでそうなるんだよ」

俺が輝夜と知り合いだと解った少女は、いきなりやる気を漲らせて、  
またも大量の札を投げつけてきた。

この二人にどんな因縁があるのか知らないが、俺をそれに巻き込むのは止めて欲しいもんだがな。

そんな事を思いつつ、俺は飛んでくる札を斬り裂き、彼女に向かって斬撃を飛ばすなどして反撃していく。

もう一度間合いを詰めるタイミングを見計らうが、さっきの連撃を警戒してか中々隙を見せない。

斬撃で道を切り開いても、彼女がアチコチに動き回るもんだから、間合いを詰めたくてもソレが出来ない状況になっている。

こうなったら『せんぎり』でも使うかと、ポケットに入っているスペカを取り出そうとしたら、少女の方が先にスペカを取り出し宣言してきた。

「不滅『フェニックスの尾』」

彼女がスペカを宣言すると、少女から炎の塊の様なモノが放たれ、その塊から大量の火の粉が周辺に振り撒かれた。

火の粉が俺に向かって来るわけじゃないが、放たれてる数が多く愛刀だけでは手が足りなくなる。

俺は左手に叢雲を取り出し、左右に持った二つの剣で切り払っていいが、それでも火の粉の方が数が多い。

叢雲の力で雨でも呼ぼうかとも思ったが、水を掛けて全て鎮火するまでどの位掛かるのか分かったもんじゃない。

そう判断した俺は、左手に持つ叢雲を逆手に持ち替えて、ポケットの中から一枚のスペカを取り出し宣言した。

「真円『円舞陣』」

カードを宣言した俺は、二つの剣を構えてその場で一回転し、周囲に円形の斬撃を飛ばす。

円形の斬撃は火の粉を次々に切り裂き、少女にも刃が届きはしたものの、流石に一撃で倒すのは無理みたいだ。

俺の斬撃が消えると、火の粉はまた周囲に撒き散らされ、その密度をドンドン高めて行く。

風を使つて吹き飛ばそうにも、そんな事したら火の勢いが増すだけ……。

火や土の魔法も大した効果は期待出来ないし、今の状況で『せんぎり』は決定力に欠けるか。

「……仕方が無い、久々に使うか」

小さな声で一言呟いた俺は、二つの剣を仕舞い、ポケットから新たなスペカを取り出した。

白髪の少女は取り出したカードになど目もくれず、炎の塊を操って火の粉を振り撒き続ける。

俺は火の熱に身を焦がされながら、手にしたカードを掲げ宣言する。

「氷竜『ジャバウオック』」

カードを宣言すると、足元から火の粉を吹き飛ばしながら赤いオーラが立ち上る。

そのオーラに包まれた俺は、中で人から竜人へと姿を変え、包んでいた赤いオーラを吹き飛ばした。

白髪の少女は、人から竜人へと姿を変えた俺に驚いたのか、攻撃の手を止めて呆然とした様子で此方を見てくる。

彼女は俺に声を掛けようとしたが、そんな事をお構い無しに両手に二つの剣を呼び出し、少女との間合いを一気に詰めて滅多斬りにした。

「ッ!？」

少女は、滅多斬りにされて地面へとまた落ちそうになるが、直ぐに傷を再生して炎の翼をはためかせて飛び上がる。

俺は彼女が飛び上がったところを狙って、幾つもの斬撃を飛ばして切り刻んで行く。

少女も札を展開して迎撃しようとしてくるものの、竜変身トランスした俺の攻撃を止めるには火力不足にも程がある。

結局、彼女の攻撃は俺の斬撃を防ぐ事はできず、先ほどとは違って一方的な展開になって来た。

俺はトドメの一撃として愛刀から特大の斬撃を放つが、その攻撃が届く前に少女は新たなスペカを宣言してきた。

「蓬莱『凱風快晴 フジヤマヴォルケイノ』!」

彼女がカードを宣言すると、少女から爆風が巻き起こり俺の斬撃をなんとか弾き飛ばした。

その爆風は次々に巻き起こり、コッチに向かって襲い掛かってくる。

俺は二つの剣で斬撃を飛ばして爆風を斬り裂くものの、向こうの勢いに負けて少女にまで攻撃が届かない。

爆風だけならまだ楽だが、魔法陣のようなものが俺の傍に出現して、突如として爆発してきた。

魔法陣を回避するのは難しくないが、ソツチに気を取られていると爆風に飲み込まれる。

だからと言って、爆風にはかり集中していると、魔法陣の接近に気付かず爆発をまともに受けてしまう。

出現する魔法陣は幾ら斬っても、直ぐに別の奴が出現するから幾ら斬り裂いても意味が無い。

……要約すると、あの白髪の少女と魔法陣、まとめて攻撃してしまえば良いだけの事だ。

そう判断した俺は、二つの爆発を避けながら剣を仕舞い、手の中に一枚のスペカを取り出し宣言する。

「ラストスペル『ヘルブリザード』」

カードを宣言すると、俺を中心にして黒い壁の様なものに覆われる。その中で俺は、ヒレの様な翼を持ち水棲生物にも似たシアン色の翼竜へと変身し、周りにある黒い壁を討ち破った。

爆風の熱から逃れるように飛び上がった俺は、空に昇る満月をバツクにして少女へと狙いを付ける。

彼女に目標を定め、口元に大きな氷塊を作り上げ、その塊を少女に向かって撃ち放った。

氷塊は空気中の水分を凍り付かせながら進み、巻き上がる爆風にも負けず……少女の元に辿り着き炸裂した。

彼女の元で炸裂した氷塊は、少女や魔法陣を飲み込んで巨大な氷の柱を創り上げる。

氷付いた空気中の水分が、満月の明かりに照らされてキラキラと輝く中、俺と白髪の少女の戦いは静かに幕を下ろした……。

……  
……  
……

「さて、如何するかなコレ」

「如何するかな……じゃないでしょ」

変身を解いた俺は、霊夢と共に氷付けにした少女をどうやって助け出そうか考えていた。

蓬莱人だから死ぬ事はないだろうけど、流石にこのまま放置して置くわけには行かない。

氷だし、炎で溶かしてしまえば良いんだが…… 久し振りに使ったから少し加減を間違えてようだ。

前の世界で使ったときは、此処まで巨大な氷柱は作った事がないし、出来たとしても直ぐに砕け散ったから特に気にした事も無かった。

この大きさと為ると…… 『ジャブジブ』でも使ったほうが速いかもしれないが、変身を解いて直ぐに変身するのも面倒だな。

「……いつその事砕くか？」

「そんな事出来るの？」

「分かん」

「出来るか如何かも分からない方法を取る前に、ちゃんと助けられる方法を取らないか」

「立て続けに変身するのも面倒なんだよ」

「言い訳をする前にさっさと……やれッ!」

「ぬがッ?!」

霊夢と二人で話してると思ったたら、何時の間にか第三者の声が聞こえ、その声の主に強烈な頭突きを後頭部に貰ってしまった。

あまりの痛みの前に、目の前が白黒に点滅して周りの風景がよく見えなくなる。

俺は後頭部を押さえながら後ろを振り返ると、其処には薄緑の髪に角と尻尾が生えた上白沢さんの姿があった。

「か、上白沢さん。何時の間に……」

「お前達が戦っている最中からだ。全く、お前も妹紅も何をしているんだ」

「リュウがアンタの様子を見に行こうとしたら、あそこで氷付けにされている子に襲われたのよ」

「半分は霊夢の言い方にも問題があったと思う」

「私は事実を言っただまですよ」

「……なんでも良いから、さっさとアイツを助けてやってくれ」

「了解つと」

下手な事を言っただけでまた頭突きを喰らいたくない俺は、愛刀を取り出して刀身に炎を纏わせて、氷柱を焼き斬る事にした。

このやり方だと時間がどの位掛かるのか分からないけど、砕いたり焼き尽くしたりしないだけマシかな。

「ところで霊夢、お前はアイツの正体を知った上で共に暮らしているのか」

「そうだけど、なんか悪い」

「悪いとは言わないが……博麗の巫女として、それで良いのか？」

「私は巫女であるよりも、一人の女として生きるって決めたの」

「……お前がそんなんだから、神社から人が減るんだ」

「私達の仲は龍神も認めるから良いのよ」

「はぁ……。もう好きにしろ」



第五十九話 蓬萊の人の形（後書き）

忘れた頃にやってきた永夜抄EX。

妹紅が使う弾幕の表現物凄く大変でした……いや、楽な方が少ないんですけどね。

まあ作者個人としては、リュウが変身出来る竜を全部出せたので良かったです。

## 第六十話 猫が居る昼下がり（前書き）

サブタイを読んで橙を期待した方々には申し訳御座いませんが、今回はあの子は出て来ませんし、今後もし出て来るのか分かりませんが、キャラの出番は作者の独断と偏見で決めてるので、出番の偏りはご理解下さい。

## 第六十話 猫が居る昼下がり

霊夢 Side

そろそろ秋も終わりに近付いてきた10月の後半。

今日は魔理沙が遊びに来ていているけど、私はいたってマイペースにこの間買った料理本を読んでいる。

時折りアイツが話し掛けてくるのに相槌を打ち、本の内容を見ながら今晚の献立を考えていた。

「最近どうなんだ霊夢。リュウの奴とは何か進展したのか」

「ん〜普通じゃない」

「普通って……わたしとお前の仲なんだし、別に隠す事無いだろ？」

「隠し事なんてしてないわよ」

「……マジで進展なしかよ」

魔理沙が何か呆れた声を出すけど、正直な話どうでも良いので特に気にしない。

ソレよりも問題なのは今晚の献立を何にするかと言う事。

リュウはどんな料理を作っても美味しいって言うけど、毎回同じ反応だと本当にそう思っているのか分からなくなるのよね。

別に不味いなんて言われたい訳じゃないけど、偶にはアイツの驚いた顔を見てみたいのよ。

何か変わった料理か、普段作らないような珍しい料理を夕食に出せば良いのかな？

「まったく、一つ屋根の下で暮らしていて、更にお互いに想い合っているのに進展なしって如何言う事だ」

「想い人のいない魔理沙に偉そうな事を言われたくない」  
「グハツ!? ……リユウの前だと素直に為れなくせに、如何してわたしの前だとズバズバ言えるんだよ」  
「そんなの知らないわよ」

うづん……今日は何時もの和食じゃなくて、洋食か中華でも作ってみようかな？

この本のお陰で和食以外の作り方も分かったんだし、有効活用しない手はないわよね。

あ、でも、中華を作ろうにも調味用が足りないか。

中華を作るのはまた今度にして、今ウチに有る調味料で作れる洋食はないかな〜っと。

魔理沙に適当な相槌を打ち、夕食の事を考えながら本を捲っている

「ごめんくださ〜い」

玄関の戸をノックしながら誰かが声を掛けてきた。

「ん？ 聞きなれない声だが、誰が来たんだ？」

「さあ？ とりあえず出てみれば分かるわよ」

私は本を閉じてから席を立ち上がり、玄関へと赴き、戸を開けて客人と対面する。

戸の向こうに居たのは、永遠亭にいた妖怪ウサギの片割れ。

リユウは彼女の事を『ウサ耳二号』とか呼んでたし、私もそれに倣って『ウサ耳（仮）』とでも呼ぼうかな。

……え、名前？ そんなの尋ねた事無いんだから知る訳ないじゃないの。

「あ、やっと出て来た」

「何の用よウサ耳。この間の借りでも返しにきたの？」

「ウサ耳ってなによ！ 確かに耳は付いてるけど、私には『鈴仙・優曇華院・イナバ』って名前があるの！」

「……………長いからうどんで良いわね」

「変な略し方しないでよ！！」

「そんな事より、今日は一体なんの用できたのよ」

「（もうやだこの人……………）…師匠のお使いで、貴女に薬を渡しに来たの」

「薬なんて頼んでないわよ」

「私は渡すように頼まれただけよ」

そう言っとうどんは、持っていた袋を私に押し付けるようにして渡してくる。

袋を受け取り中を確認してみると、入っていたのは細長い瓶に入った二つの液体だった。

うどんは？薬を渡しに来た？って言ったから、コレが薬なのは間違いないんだけど何の薬かしら？

「用は済んだし、私はもう帰るね」

「あ、ちよつと。コレが何の薬なのか説明しなさいよ」

「中に紙が入ってるからソレを読んでよ。…それじゃあね」

薬を押し付けるだけ押し付けたうどんは、此処から逃げるようにさつさと帰って行ってしまった。

玄関に残された私は、彼女が言っていた紙を袋から取り出し、書かれている内容を読んでみる。

紙には？色々と苦労してる貴女の為に用意させたわ、上手く活用してね。紫より？って書かれていた。

…………あれ、彼女の師匠って確か永琳よね？　なんで紫からのメッセ

ージになつてるの？

イマイチ釈然としないまま、玄関の戸を閉めて、魔理沙が待つている居間へと戻る事にした。

「遅かつたな霊夢。一体誰が来てたんだ？」

「永遠亭のうどんよ」

「……マジで誰が来たんだよ」

「だからうどんようどん。名前が長いから略してるのよ」

「そこは略さないでちゃんと言おうぜ？」

「覚えてないわよ」

私はさっきまで座っていた席にもう一度座り、袋の中から薬を取り出し、他に何か入ってないか確認してみる。

袋を逆さにして上下に振ってみるものの、二種類の薬とさっきの紙くらいしかない事が分かった。

何が目的で薬を用意させたのか知らないけど、ちゃんと薬の中身くらい書きなさいよね。

「なんだこりゃ？ 霊夢が頼んだのか？」

「違うわよ。紫の奴が私の為だとか言つて、永遠亭の薬剤師に用意させたのよ」

「……つて事は、リュウの奴に使えつて事か」

「さあね。上手く使えとは書いてあつたけど、誰に使えとは書いてなかつたわ」

「なら、霊夢用つて可能性もあるのか」

魔理沙はそう言いながら薬の一つを手に取り、ジロジロと探るように薬を見回す。

私も残りの一本を手にとって見てみるけど、それだけじゃコレが何の薬なのか分かる訳がない。

この薬がなんなのか知る一番手っ取り早い方法は、やっぱり実際に飲んでみる事だろうけど……こんな怪しいのを飲むのはちょっとねえ。

せめて如何言う効果なのか分かれば良いんだけど、それが分からないから踏ん切りがつかないのよね。

「折角だから、わたしはこの薬を飲んでみるぜ」

「別に良いけど……どんな事になっても私は知らないわよ」

「分かってるって。それでは……いざッ!!!」

魔理沙は変な気合を入れて、瓶の蓋を開けて中に入っている薬を一気に飲み干した。

薬を飲み干して口から瓶を離しても、魔理沙に何の変化も訪れない。顔色も普通だから、毒とかじゃないみたいだけど……本当に何の薬を飲んだのかしらね。

「……ん」

「如何したのよ魔理沙、いきなり変な声を出して」

「いや、ちよつと胸の辺りが苦しくなつてな」

「服のサイズが合つて無いんじゃないの？」

「そんな事はないと思うけど……まさかッ!?!」

何かに気付いた魔理沙は、突然席を立ち上がり居間から飛び出していった。

一体なにが起こつたのか知らないけど、アイツが戻つてこないと分かる訳ないんだから、今は大人しく待っているしかない。

そう思いながら5、6分待っていると、魔理沙が慌てた様子で居間に戻つて来た。

「大変だ霊夢!」

「一体何が大変だつて言うのよ」

「薬を飲んだら胸が大きくなってた!!」

「……はい？」

慌てて戻ってきたと思つたらいきなり何を言い出すのやら。

私はそう言つて切り捨て様としたけど、よく見てみると確かに魔理沙の胸の辺りの生地がキツそうに為ってる。

流石に薬を飲んだだけで胸が成長するなんて思いたくないけど、不老不死の薬を作れるんだし豊胸剤の一つや二つ創れても不思議じゃない。

そう思つてしまった私は、席を立ち上がり恐る恐る魔理沙の胸を触診して見る事にした。

軽く触れた彼女の胸は、確かに普段よりも……と言うか、私よりも確実に大きくなっている感じがした。

「そんな……バカな……」

「これが現実なんだぜ、霊夢」

「……」

あまりにも無常な現実の前に崩れ落ちそうに為るけど、私は直ぐにもう一本の薬が残っている事を思い出す。

その薬を迷わず手にし瓶の蓋を開けて、中に入っている液体を一気に飲み干す。

空になった瓶を床に放り投げ、胸が成長するのを楽しみに待っていたら……何故か目の前が真っ暗になり始める。

「あ……れ……」

「おい、霊夢?!」

心配する魔理沙の声を最後に、私の目の前が真っ暗になり……その



まま気を失い倒れてしまう。  
意識がドンドン薄れて行き、真っ暗な暗闇の中で最後に私が感じたのは、自分が別の何かに変わってしまったような感覚だけだった。

霊夢 Side out

……  
……  
……

「今日は豊作つと」

午前中から道具集めに出掛けていた俺は、籠一杯に色々なモノを詰め込んで神社に帰ってきた。

見付からない時はトコトン駄目だが、運が良ければ今日みたいに豊作の日もある。

幾つ当たりの品があるのか分からないけど、今度の納品の時に香霖堂に持って行くのが楽しみだな。

そんな事を考えながら、集めた物を裏庭で選別しようとして行く……家の居間で魔理沙が一人でお茶を飲んでいた。

「あれ、居たのか魔理沙。霊夢は如何したんだ？」

「帰ってきた第一声がそれか。……とりあえず霊夢なら何処かに居

るぜ」

「何処かってどこだよ」

「それは自分で探してくれ」

「ったく」

俺は小さくボヤキながら集めて来た荷物を庭に置いて、縁側から母屋に入り霊夢を探すことにした。

客が来ているのに勝手に何処かに行く奴じゃないし、魔理沙の言う通り家の何処かには必ず居るだろ。

そう考えた俺は、まず手始めに霊夢の部屋から探すことにした。

着替え中の可能性もあるから、一度襖を軽く叩いてから声を掛けてみる事にする。

「おゝい、霊夢。居ないのか」

「にゃあ」

「……にゃあ？」

声を掛けてみたものの返事はないが、代わりに別の鳴き声の様なものが聞こえてきた。

聞こえてきた鳴き声からして猫だったのは分かるけど、どうして霊夢の部屋から猫の鳴き声が聞こえてくるんだ？

不思議に思った俺は、悪いと思いつつも襖を開けて部屋の中に入る事にした。

部屋の中は綺麗に片付いているが、化粧棚の傍に『パンク』の人形が置いてあるのは如何にかならないのだろうか。

目に付いた人形を見て俺は溜息を零すと、足元に綺麗な毛並みの黒猫が近寄ってきたのが分かった。

ここらじゃ見ないし、迷い猫だろうか？ そんな風に考えていると

「イダツ?!」

足の甲の部分を爪で思いつきり引つかかれた。

血は出ていないものの、猫の爪が鋭いのか結構な痛みが足の甲から感じ取れた。

「何するんだよ、この猫」

「フシャーッ!」

引っ掻いてきた猫を叱ろうと思ったら、何故か毛を逆立てて威嚇されてしまった

なんで猫に威嚇されないといけないのか分からないが、このまま野良猫を霊夢の部屋にいさせとく訳にも行かない。

そう判断した俺は、威嚇している猫を徐に抱き上げて、一緒に霊夢の部屋から出て行く事にした。

猫がまた入らないように襖を確り閉めて、霊夢を探す為に猫を抱いたまま母屋や本殿の中を探すことに。

本当なら外に放しても良かったんだが、俺が抱いてやると何故か大人しくなったのでこのままにしておく。

「おい、霊夢。何処に行った」

「にゃあ」

「お前じゃないっての」

「にゃふ」

俺が霊夢に呼びかけると何故か黒猫が鳴き声を挙げる。

紛らわしいから猫を叱り付けると、耳と尻尾をたれ下げてガツカリした様に頂垂れてしまった。

その様子を見てみると怒り過ぎた気に為るが、霊夢に呼びかける度に鳴かれてしまう。

此処は心を鬼にして、しっかりとこの黒猫を躡けて行かないとな。  
心の中でそんな決意を固めながら、俺は黒猫と一緒に霊夢を探す為  
に神社の敷地内を歩き回るのだった。

……

……

…

一時間くらい掛けて神社の主だった場所を探したが、霊夢の姿は何  
処にも見当たらなかった。

コレだけ探しても全然見付からないし、こうなつて来ると魔理沙の  
奴が嘘を付いている可能性も出てくるな。

そう考えた俺は、探している間に懐いた猫を連れて魔理沙が居る居  
間へと戻る事にした。

居間では魔理沙の奴が、買って戸棚に仕舞っておいた煎餅を取り出  
し、お茶と一緒に勝手に食べていた。

俺だつて鬼じゃないし、食べるなどは言わないが……せめて一言声  
を掛けてから食べよな。

「お、戻ったのか。霊夢は見付かったか」

「はあ……。まだだよ」

「案外直ぐ近くに居るかもしれないし、そんなに気落ちするなつて」

「今の溜息の半分はお前が原因だけだな」

「ふえ？」

煎餅を口に入れてマヌケな声を出す魔理沙に呆れながら、俺は彼女

の対面に座り煎餅に手を伸ばす。  
猫は邪魔に為るから直ぐ其処の畳の上に逃がすが、何故か直ぐに俺の膝の上に登って丸くなってしまふ。

「ククク…。随分と猫に好かれた様だな」

「特に何もしてないんだがな」

そう言いながら煎餅を口に銜え、猫を膝の上からなんとか退かす。  
だが猫は、俺に退かされてもめげずにまたしても膝の上に座ろうとしてくる。  
何度も退かしたり座られたりを繰り返していると、猫が幼子の様に縋る様な眼差しで俺を見上げてきた。

「うぐっ……………」

「如何すんだリュウ。その猫を無碍にするのか？」

「……………はあ。もう好きにしるよ」

「にゃあ」

根負けした俺が膝の上に座る事を許可したら、猫は心底嬉しそうな声を挙げて俺に擦り寄ってきた。

その様子を見て背中を優しく撫でてやると、猫は気持ち良さそうに目を細める。

目を細めた時の猫の姿が、酔っ払って甘えてきた時の霊夢と重なって見えたんだが……………なんでだ？

おかしいな幻視を見て、俺は変な事もあるもんだなって思っている。猫は満足したのか俺の手を離れて膝の上に登り丸くなった。

膝の上で大人しくしている猫をそのままにし、俺は食べかけの煎餅を口の中に放り込んでバリバリと食べる。

珍しく気を利かせてくれた魔理沙が、俺の分のお茶を湯の身に入れてくれたので、ソレを飲んで喉を潤しつつ、二人して黙々と煎餅を

齧り続ける。

お互いに喋る事無く煎餅を食べていると、この沈黙に耐えかねたのか魔理沙が口を開いてきた。

「ところでさ、リュウ。前から聞きたい事があつたんだが良いか？」

「内容によるけど……なんだ」

「リュウは霊夢のどくら辺が好きになつたんだ？」

「はあ？」

「ぎにヤッ?!」

魔理沙の変な質問も気になったが、それ以上に過剰な反応をした黒猫の方が気に為る。

まさかこの猫が霊夢……な訳ないよな。流石に人が猫に変身するのは想像出来ないって。

「如何なんだよリュウ」

「うーん……どくら辺がねえ」

「……………」

膝の上から黒猫の視線を感じるが、今は関係ないし、とりあえず無視しておこう。

しかし、霊夢のどくら辺を好きに為つたかなんて考えたこともなかったな。

アイツと一緒に居るのは何かと楽しいし、気が付いたら何時も傍にるのが当たり前前に為ってたっけか。

コレは勘だけど、八雲紫の一件がなかったとしても、霊夢とは今みたいな関係を築けたと思う。

……だとしたら俺は一体アイツの何処に惹かれたんだ？

俺は腕を組んで目を瞑り、今まで見てきた霊夢の言動を振り返って

みる事にした。

脳裏に映るのは霊夢の怒ったり笑ったりしてる時の顔と、その時に喋っていた言葉の数々。

こうして振り返ってみると、幻想郷での日々の殆どがアイツと一緒に過ごしてきた思い出になるんだな……。

そんな事を思いながら記憶を振り返ること約十分……くらいが経ったのかな？ 兎に角、俺の中で質問の返事が漸く出すことが出来た。瞼を開いて魔理沙の方を見直すと、何故かちゃぶ台の上に黒猫が少し不安そうに俺の事を見ていた。

何時の間に台の上上がったのか分からないが、とりあえず今は放置して、魔理沙に質問の返事をすることにした。

「……はつきりと言うと、俺にもよく分からん」

「なんだそりゃ？」

「にゃ？」

「今まで何処が好きかなんて考えた事もないんだ、いきなり聞かれても分かる訳ないだろ」

「それじゃ、なんてリュウは霊夢と一緒に居るんだよ」

「……やっぱり霊夢の傍に居て楽しいからかな」

「なんともツマラン返事だな、おい」

「ほっとけ」

呆れる魔理沙と何故か落ち込んでいる猫を余所目に、俺は湯のみを手にして温くなったお茶を飲む。

流石に十分近くも台の上で放置してたから、お茶はかなり温くなってしまった。

急須にも温かいのは残ってないだろうし、今湯のみに入っているのを飲み終わったら新しく入れるか。

「なら逆の質問するけど、霊夢に嫌いな所は何処だ」

「……今日の魔理沙は変な質問ばかりだな」

「偶には良いじゃねえか」

「……まあ良いけど」

そう呟きながら霊夢の嫌いな所を考えてみるが、コレと言って思い当たる所が……一つだけあったな。

好きな所と違って直ぐに思い当たるのも何かと思うが、アレだけは止めて欲しいと思う事がある。

「その顔は…何か思い当たる節があるのか」

「嗚呼。酔っ払ったときの霊夢だ」

「って言うത്？」

「あの時の霊夢も可愛いんだけど、俺を抱き締めるのはなんとかならないかなあ」

「そういや、確かに絶対に放さないって言わんばかりに抱き付いてるもんな」

「お陰でトイレに行くのも一苦労だ」

極端に酒に弱い訳じゃないから、宴会のたびに酔っ払いはしないけど……一度甘えだすと何かと大変で。

ちよっとした用事で席を外しただけで、俺の服の袖を掴んで泣きそうに為るし、アイツの手を振り払うと本気で泣き出すからな。

たまに甘え上戸なんじゃなくて、泣き上戸なんじゃないのかって思うくらいなんだよ。

「……そんだけか？」

「そうだけど……如何かしたか？」

「なんだよそれー。全然面白くねえー」

「いや、面白がるどころじゃないだろ」



魔理沙は不貞腐れたように文句を言うが、本当にコレくらいしか思い当たらないんだから仕方が無い。

その事をはつきり言っても更に不貞腐れるだけだろうし、この事は俺の心に止めておくけどな。

「絶対他にも何かあるはずだろ」

「他って……例えばどんなのだよ」

「霊夢の齒に衣着せぬ言い方が嫌だとか、人の事をぞんざいに扱すぎだろとか」

「……それはお前が感じてる不満だろ」

「兎に角！ 他に何かある筈だろ！！」

「んな事言われても、それが『博麗霊夢』なんだし、嫌いになる訳ないだろ」

「……如何言う事だよ」

魔理沙は怪訝そうに、黒猫は不思議そうにコツチを見てくる。

コレは特に隠す様な事でもないの、俺は思っている事を一人と一匹に打ち明ける事にした。

「俺はな魔理沙。アイツの話し方も、他人に興味を持たない所も、意地を張って素直になれない所も全て含めて『博麗霊夢』だと思ってる。……だから、霊夢の口調や性格で嫌いになったりはしない」

「……」

「そりゃ偶には友人を大切にした方が良いとは思うけど、そう言った所も霊夢の一部だからな。俺はアイツの良い所も悪い所も全部受け止めるだけだよ」

俺が話し終わると魔理沙は口を開けて呆然として、黒猫は何故か気恥かしそうに俯いてしまっている。

魔理沙が呆然とするのは分かるが、黒猫が恥かしがってるのはなん

でなんだ？

黒猫をチラ見しつつ、俺は残っている煎餅に手を伸ばし、バリバリと齧り始めるのだった。

「……なありユウ。お前は？愛？って漢字の意味を知ってるか？」

「いや、知らん」

「それなら、今度辞書でも引いて調べとけ。わたしはもう帰る」

「ん？ もう帰るのか？」

「お前の話しを聞いてたらお腹一杯に為ったわ。精々末永くイチャついてるってんだ」

「なんだそりゃ」

「鈍い奴には分からんだろつよ。……んじゃまたな」

最後の最後でおかしな事を言い捨てた魔理沙は、縁側で脱いでいた靴を履いて、箒に跨り何処かへと飛んでいってしまった。

その後姿を見送った俺は、台所で新たなお湯を沸かし、お茶のお代わりを用意し始める。

お湯が沸くまで暇だなくって思っていると、ちゃぶ台から降りた黒猫が俺の足元に擦り寄ってきた。

「如何かしたのか猫」

「にゃあ〜」

足元にやってきた黒猫は、俺に何かをうつたえる……言うよりも何かを問う様に鳴き声を挙げる。

動物の言っている言葉なんて分からないが、猫の眼を見ると大切な事を聞いている様な気がした。

「……悪いな、お前が何を聞きたいのか分からないんだ」

「にゃあ……」

「でも、さっきの事ならアレが俺の偽りのない本音だって言い切れるぞ」

「……にやぶ」

如何やらさっきの事を聞いていたらしいが、俺の言葉を聞いたら猫は何故か変な声を出す。

俺は喉に何か詰まらせたのかと思って、猫を抱き寄せて近くで様子を見てみることにした。

コレと言って苦しがつている様子はないが、その代わり猫の顔が少しずつ近付いているような気がする。

本当に如何したんだと不思議に思っていたら

ポフン

「……へっ？」

変な効果音と共に猫が煙に包まれ、ソレが晴れたと思ったら……俺の目の前には何故か霊夢の顔が間近にあった。

如何して霊夢が猫になっていたのかって言う疑問は置いておくとして、この状況は一体如何すれば良いんだろうか？

お互いに顔が直ぐ傍にあるから、見る場所と角度によっては俺達がキスしているように見えなくもない。

此処は台所だから、見付かる事はないと思うけど……ここから如何動けば良いのか検討が付かないな。

「……」

「……」

「……」

「……よ、よ」

「~~~~~ッ!~!~!~!」

俺が軽く声を掛けると、霊夢の顔はみるみる赤くなっていき、コッ  
チが心配に為るくらい真っ赤になった。  
今までの経験上から言うなら、この状況で声を掛けても掛けなくて  
も、俺は痛い目に遭うんだよな。  
そんな事を考えて現実逃避していると

「……き、キヤアアアアアアアアアツ!!!!!!」  
「うわッ?!」

羞恥心が限界を超えたのか、霊夢に思いつきり突き飛ばされ  
てしまう。  
運よく頭はぶつけなかったものの、碌な受身も取れなかったから尻  
餅をついてしまった。

「いって〜ッ」  
「あ、ごめんリュウ。でも今はなんて言うか……その……」  
「俺は大丈夫だから落ち着け霊夢」  
「……とにかく今はごめ〜んッ!!」

自分でも何を言っているのか分かっていない霊夢は、俺に一方的な  
謝罪をした後、顔を真っ赤にしたまま何処かへと走り去ってしまっ  
た。

まあ、夕食までには帰ってくると思うが……久々に凄く慌てた霊夢  
を見た気がするな。  
そんな事を思いながら立ち上がった俺は、ズボンに付いた土を払い、  
お湯が沸いたヤカンを手に取ってお茶の用意をするのだった。

第六十話 猫が居る昼下がり（後書き）

国語辞典で？愛？と言う字を調べると？個人の立場や利害にとらわれず、広く身のまわりのもの全ての存在価値を認め、最大限に尊重していききたいと願う、人間本来の暖かな心情？だそうですね。

此処で？リュウは人間じゃ無いだろ？ってツツコミは野暮ですよ。

## 第六十一話 常闇の妖怪

「あ、あのさ……リュウ。ちょっと頼みがあるんだけど」

「ん？ なんだ？」

「え、えっと……」

木々についていた枯れ落ち、山の景色も寂しくなり始めた十一月。

神社の倉庫から冬対策の防寒具を取り出していたら、突然霊夢から頼み事を頼まれた。

両手をモジモジさせて少し落ち着きがないように見えるが、正直なところコレでもまだマシになったほうだ。

霊夢は猫の変わった一件で、俺の本音を聞いてしまい、顔を合わせる度に真っ赤にして逃げ出されてたからな。

なんで逃げるのかイマイチ理解できなかったが、霊夢もこのままではいけないと思ったのか、今ではこうして話が出来るくらいにまで回復した。

……それでもまだ恥かしそうにしているけど、この調子ならその内何時もの霊夢に戻ってくれるだろ。

「それで頼みつてのはなんだ」

「……リュウは肉料理って嫌い？」

「いや好きだけど……今晚の夕食か？」

「その心算なんだけど、ちょっとお肉がなくて」

「なら今から買いに行くか」

「……お金あるの？」

「……ないな」

此処まで来て漸く霊夢が何を頼みたいのか理解する事が出来た。

要するに、今晚の夕食に肉料理を出したいが、お金が無いから今から動物を狩って来て欲しいんだな。  
前の道具蒐集で得たお金は、野菜やら調味料やら米なんかを買ったら直ぐになくなるし、年末の準備の為に貯蓄は残しておかないといけないだったか。

「もうお昼回ってるけど、今から狩りに行ってくれないかしら？」  
「別に良いけど、狩る動物はなんでも良いのか」  
「本には牛か豚って書いてあったけど……この際だから贅沢は言わないわ」

「なら夕方までには戻る。留守番よろしくな、霊夢」

「ええ。……気をつけてね、リュウ」

「おう」

留守を霊夢に頼んだ俺は、部屋に置いてある二つの剣を手にして、湖周辺から動物を探すことにした。

あそこは『妖怪の山』に近いから、たまに猪や狼なんかの姿を見かけることがある。

狼があそこに現われるって事は、猪以外の動物も生息してるだろうし、そいつ等を見つけて狩るとするかな。

……

……  
……

そんなこんなで『霧の湖』近くにある森へとやってきた。

地面には枯葉が沢山落ちていて、俺が歩くたびにクシャクシャって音が足元から聞こえてくる。

足元の音を楽しみながら森の中を散策していると、前方に十数頭ほど居る鹿の群れの姿を見つけた。

俺は直ぐに木の陰に隠れて、自分と鹿の群れとの距離を目測で測る。此処から鹿たちまでの距離は……大よそ20mはあるが、コッチはちょうど風下に居るお陰で、奴等に気取られる心配もない。

「……よし、やるか」

鹿たちとの距離を測った俺は、愛刀の鞘を握り締め、何時でも駆け出せるように体勢を整える。

のんびりと木の皮を走り、こっちに気付く気配のない鹿へと向かって駆け出そうとしたその時、突如として発生した真つ暗な闇に飲み込まれ、視界が利かなくなってしまった。

確かに正午は既に回っていたが、夜に為るまでにはまだ時間があるし、この暗闇は幾らなんでも不自然すぎる。

何処に何かあるのか分からない暗闇の中、俺はジッと動かず、この闇の正体を見定めようとする。

視界を黒一色に覆われて眼が殆ど機能しないけど、何者かが近付いてくる気配だけは、はっきりと分かった。

俺はその気配を頼りに、近付いてくる奴にタイミングを合わせて愛刀を抜き、思いつきり力を込めてそいつを斬り飛ばす！

「うぎゃッ!?!」

「……うぎゃ?」



何かを吹き飛ばした手応えはあるが、聞こえてきた声は何処となくマヌケな印象を受けた。

人間の子供がこんな所に来るわけないし、妖精か妖怪なのは間違いないが……コツチのやる気がそがれる様な声だったな。

そんな事を考えていると、周囲を覆っていた暗闇が綺麗に消え去った代わりに、俺の目の前には黒い服に金髪に赤いリボンを着けた子供が倒れていた。

前にも何処かで見たような気がするけど……何処で見かけたのかイマイチ思い出せないな。

俺は頭を捻り、忘却の彼方に消えた記憶を掘り起こそうとすると、目の前に居る女の子が起き上がった。

「うゝ痛いのだ〜……」

「あ、悪い。でも、いきなり襲ってくる君も悪いと思つぞ」

「お腹が減ってたからつい」

「ついで襲うんじゃない」

「へう……」

女の子は俺に怒られてシヨンボリしするが、此処でちゃんと言っておかないと出会う度に襲われてしまいそうだ。

そんな事を考えながら鹿たちが居た方に眼をやると、案の定今の騒ぎの所為で逃げられたらしく、さっきまで居た場所に群れの姿はなかった。

なんとなく予想は出来ていたとは言え、折角の獲物に逃げられたというのは流石にシヨックだ。

新しい得物を探さないと……って思うものの、チャンスを棒に振ったことから溜息が零れてしまう。

「はあ……。速いと二次のを探さないとな」

「何を探しているの？」  
「夕食で食べる動物だよ」  
「わたしも食べたい」  
「だったら鹿か猪でも探してくれ」  
「猪だったらアッチにいるよ」  
「……へっ？」

自分でもマヌケだと思つような声を出しながらも、俺は少女が指を指すほうに眼を向ける。

ソッチの方向には葉の落ちた木々が生えているだけで、この子が言うに猪の姿は何処にも見当たらなかった。

もしかしたら嘘を吐いているかもしれないが、簡単に嘘を吐く様な子には如何しても見えない。

本当の事を言っているとしても、猪の姿が見えないんじゃ素直に信じるのもちよつとな……。

「……一つ聞くけど、本当にアッチの方向にいるのか？」

「うん」

「……………」

俺の質問に満面の笑みで答える少女を見ると、何故だが申し訳ない気持ちで一杯になってくる。

此処は一つ、この子の言葉を信じて、指差した方向に向かってみるとするか。

居なかつたらいなかつたで別の得物を探せば良いんだし、宛もなく森を彷徨うよりはずっとマシだろ。

そう判断した俺は剣を鞘に仕舞い、少女が指を指した方に向かって歩き始める。

何故か少女も浮びながら一緒についてくるが、お腹がすいたと言っていたし、俺と一緒に来て肉を分けてもらおうって考えなのかな。

そんな事を思いながら少女と二人、歩く事約……十五分くらいか。俺達の進行方向の先には、枯れた木々の間に隠れてはいるが確かに大きな猪の姿があった。

大きさは……大体五mくらいはありそうだな。此処最近で見たサイズなら一番の大きさかもな。

「何を食べたらあんなにデカく育つのやら……」

「アレは食べても良いの？」

「欲しいのは二人分の肉だからな。必要な量を取ったら、残りはあげるよ」

「おおー、それなら頑張る」

肉を食べられると聞いてやる気を出したのか、少女は闇を纏って猪へと近付いていこうとする。

だが闇を纏った少女は、この森の中ではあまりにも異様な光景で、これでは直ぐに猪にバレてしまう。

折角見つけた大型の猪を逃がす訳にもいかないので、俺は闇に包まれている少女の首根っこをなんとか掴んで、見付からないように木の陰の中に隠れた。

「なんで止めるのさあー」

「あのまま行ったらバレるからに決まってるだろ」

「わたしは何時もこの方法だよ」

「……それで成功した回数？」

「えつとねえ……」

自信のある方法なのかと思いきや、少女は昔を思い出しながら指折り数え始める。

その姿を見た俺は、なんとなく成功数を察してしまい、回数を数え

る少女の手を止めてしまった。

「どうかした？」

「やっぱり教えなくて良いから。それよりも、あの猪だけを覆うように闇を展開出来るか？」

「……？ てんかいつてどう言う意味？」

「……あの猪の周りを闇で覆えるか」

「うん、出来るよー」

「なら、早速頼む」

「わかったー」

俺が頼むと少女は言われた通りに猪の周りを闇で覆い隠した。

闇の中から驚いた様な鳴き声が聞こえてくるが、その中から猪が出てくると言う事はなかった。

恐らく、あまりにも突然の出来事に驚いて、自分の周囲を見回して警戒でもしているのだろう。

まあなんにせよ、あそこから動かないで居てくれるのなら、こっちの思惑通りなんだけどな。

闇に覆われた事を確認した俺は、木の陰から出て愛刀を鞘から抜いて剣に力を込める。

力を込めると、刀身からは何時もの様に鈍い光が放たれ始めた。

俺はその状態のまま剣を闇に向かって振り下ろし、普段よりも大きな目の斬撃を飛ばして中にいる猪を斬り付けた。

斬撃を飲み込んだ闇の中からは、猪の悲鳴が聞こえてきてソレが森中に響き渡った。

……  
……  
……

仕留めた猪の血抜きを済ませ、必要な分の肉を切り出した俺は、約束どおり少女に余った肉をあげる事にした。

少女は余程お腹をすかせていたのか、すぐさま猪に飛びつき、夢中になって食べ始める。

その時の様子は……うん、忘却の彼方においやって、直ぐにでも忘れたいと思う。

俺みたいに切り出して食べるのかと思ったけど、流石にあの光景はちよつとな……。

「あーお腹いっぱい」

「そ、そうか…良かったな」

「うん。お兄さんありがとうー」

「どういたしまして……」

お腹が膨れてご満悦の少女と比べて、俺はさっきの食事風景の所為で少し具合が悪い。

別に危険な状態って訳でもないが、肉を切り出したら直ぐに帰ればよかったと後悔してる。

「お腹一杯になったし、わたしはもう行くねー」

「ああ。あまり人間を襲うんじゃないぞ」

「わたし妖怪だからソレは無理。……でも、お兄さんは良い人だから襲わないであげる」

「……まあ、それでも良いか。兎に角、気をつけてな」

「じゃあねー」

少女はそう言うと、自分を闇で包み込んで何処かへと飛んでいってしまう。

森の中で共に行動していたけど、凄い能力を持っている割に大して恐くない妖怪に感じたな。

あの性格の所為なのか、変な感じがするリボンの所為か知らないけど、能力が覚醒したらそこらの妖怪よりも強く為りそうだな。

彼女の後姿を見てそう思いつつも、俺は今晚の夕食をちゃんと食べられるのかと、不安を募らせるのであった。

## 第六十一話 常闇の妖怪（後書き）

連日更新は今日が最後になります。

次回からは何時も通りの更新ペースに戻ります。

第六十二話 巫女の秘め事（前書き）

この小説の大半は、作者の？なんとなく思いついたから？で出来て  
います。



## 第六十二話 巫女の秘め事

朝晩の冷え込みが厳しくなる十一月、私は布団に包まって眠っていた。

布団の温もりに包まれてまどろんでいたけど、私の体内時計は正確らしく、何時もの時刻に眼を覚ましてしまった。

部屋の中は薄暗く、まだ完全に日は昇りきっていないらしい。

私は掛け布団を退けながら上半身を起こし、両手を高く上げて、軽く背筋を伸ばす。

軽く体を解した後、布団からもちゃんと起き上がり、ダンスの中に仕舞っている服を取り出し、手早く着替える事にした。

巫女服に着替えた私は、顔を洗い眠気を覚ました後、リュウの部屋へと向かう。

アイツを起こさない様に静かに障子を開けて中に入り、気持ち良さそうに眠っているリュウの横に座る。

リュウは私が入った事にも気付かずスヤスヤと眠ったまま。

私は彼に何かをするわけでもなく、ただ隣りでリュウの寝顔を眺めている。

本当にそれだけだと言うのに、私の胸の鼓動は徐々に速くなり、顔も少しずつ熱くなっっていくを感じた。

「ふふっ」

何が可笑しかったのか自分でも分からないけど、顔が自然と綻んでしまう。

少しの間リュウの寝顔を堪能した私は、起こさないように彼の部屋から出て行く。

そして締め切ったままの雨戸を開けて裏庭に出て、外の新鮮な空気を胸いっぱい吸い込む。

そろそろ本格的な冬が始まるうとしているのか、空気は夏や秋に比べてひんやりと冷え切っている。

このくらい冷たい方が火照った顔にはちょうど良いし、雪さえ降らなければ特に不満もないわ。

「さつて、今日も一日頑張りますか」

私は朝焼けの空を見ながら背を伸ばし、今日一日分の気合を入れる。今日も一日が良い日でありますように…そんな願いを籠めながら…

…

…

…

…

家に戻った私は、早速朝食の準備を始める。

昨日の内に研いでおいた米をお釜に移し、釜戸にセットして火にかける。

リュウが起きてたら火力の調整が楽なんだけど、アイツより先に起きてるのは私なんだし、コレばかりは仕方がない。

そんな事を思いつつ、釜戸の火を弱めに調整して湧き上がるまで待つ。

この間に洗った野菜を切って簡単な付け合せを作ったり、魚を捌いて七輪の上に乗せて焼く。

汁物は昨日の残りが有るからそれで良いとして、あともう一品くらいは欲しいところね。

そんな事を考えながら、野菜を置いてある場所に眼を向けていると、居間の方から物音が聞こえてきた。

「おはよ〜……。今日も霊夢は早起きだな……」

「お早うリュウ。あと私が早起きなんじゃなくて、アンタが寝すぎなだけじゃないの」

「んな事はねえと思うが……ふあ〜……」

「言い訳は良いから、早いところ顔を洗ってきなさいよ」

「そうするわ」

寝惚け半分のリュウは、私に言われるがまま顔を洗いに行った。

アイツが居間から出て行ったのを見て、私は思わず安堵の溜息が零れる。

この間の一件で、どうも気恥ずかしさの様なものが出てしまって、変な空気に為っていたのよね。

……でも、今朝は今までと同じ様な会話を交わすことが出来た。

リュウの顔を見た瞬間、胸の鼓動が高鳴ったけど……変に慌てたりする事もなかった。

これで今まで通りの生活が出来るわね。良かった良かった。

「そっついや霊夢」

「キヤアツ?! あ、アンタ何時の間に傍に居たのよ!?!」

リュウが他の所に行っているかと思いきや、完全に油断していた私は、思わず悲鳴を上げて後ろに下がってしまう。

なんで顔を洗いに行ったコイツがいるのか知らないけど、気配を消して近付くのは止めてよね。物凄く心臓に悪いんだから。

「話し掛けただけで後ろに下がるなよ。地味に傷付くぞ」

「あ、ゴメン……って、なんでアンタが台所に居るのよ!?!」

「俺が台所に居るのは別に良いだろ。それよりも、魚が焦げてるぞ」

「えっ? ……あーッ!!!!!!」

リュウに言われて七輪に眼を向けると、確かに魚から黒い煙が上が  
り始めていた。

真つ黒コゲに為る前に気がつけたお陰で、食べられないほどに焦げ  
付いてはいないみたい。

あのまま考え事していたら今日の朝食は、白米と味噌汁と付け合せ  
の和え物だけに為る所だったわ。

「あ、危なかった……。ありがとリュウ、助かったわ」

「気にするなつて。あと、考え事は程ほどにな」

「アンタが言うな」

「確かにそうだな。…んじゃ、顔を洗ってくる」

リュウは笑いながらそう言った後、台所から出て顔を洗いに向かっ  
た。

私はアイツの笑顔を見て、顔が熱くなって呆けてしまうけど、直ぐ  
に立ち直って準備の続きを始める。

七輪の火力が高いみたいだし、炭を幾つか取り出して、釜戸の中に  
放り込もう。

お釜をセツトした所の火を強くしないといけないし、ちょうど良か  
ったのかもしれないわね。

…  
…

朝食も食べ終わり、神社の仕事も大体が片付いた午後。

私は神社にリュウを一人残して、人里に赴いて今晚の夕食の材料を買ってきた。

今夜は前に出来なかった中華を作りたくて、里にある店を虱潰しに探していたら思ったよりも時間が掛かった。

食材自体は簡単に手に入ったのだけど、調味料が中々見付からなくて苦労したわ。

まあ、十件目くらいのお店で漸く見付かったから別に良いんだけどね。

「ただいま」。……リュウ、居ないの？」

買った食材を持って神社に着くと、境内の中は異様に静まり返っていた。

アイツには留守番を頼んでいるし、勝手に居なくなるわけ無いから、恐らくは昼寝でもしてるんでしょ。

そう思いながら玄関の戸を開け、買ってきた食材を台所に適当に置いてから、居間に行くと……案の定、リュウは縁側で座ったまま眠っていた。

「全く、なに昼間から寝てるんだか」

「ZZZZZZ……」

普段の自分の行動を棚に上げてるけど、今は関係ない事だし気にしないでおく。

今日は天気も良いし、リュウも秋・冬用の長袖を着ているとは言え、今は冬の到来が近付いている十一月。

縁側で寝させておくには寒いだろうと思った私は、自室から薄手の毛布を引つ張り出し、リュウを横に寝かせて毛布を掛けてあげる。リュウを横にしたのは良いけど、このままだと首が曲って寝違えてしまいかもしれない。

そう思った私は、誰も居ないにも拘らず周りに見渡して、本当に誰もいない事を確認してからリュウの頭を私の膝の上に乗せた。

「……よし、起きてないわね」

「ZZZZZZ……」

私が膝枕をしてあげても、リュウは起きる気配もなく熟睡している。こんなにも疲れるまで何をしているのかと思っただけど、一晩寝れば体調が治るって豪語してる奴が、次の日に疲れを残すなんて考えにくい。

もしかしたら、本当に午後の陽気に誘われて眠ってしまっただけなのかも。

そう考えると、私と同じところを発見できた気がしてちょっとだけ嬉しくなってしまう。

「……こんな事で嬉しくなるなんて、私も随分と変わったな」

リュウが来る前と比べて随分変わったのは自覚してたけど、改めて口に出してみると嬉しい様な、そうでもない様な……結構微妙な気がする。

昔だったら絶対こんな事しなかったのに、人間って変わるときはとことん変わるのね。

どこか他人事のように考える自分が妙に可笑しくて、私は思わず笑みが零れてしまう。

リュウを起こさない様に小さく笑っていると、私の手が彼の髪に

触れている事に気が付く。

コイツの髪は結構硬いのか、触れている私の手に細かい針がチクチクと当たっている様な感触がする。

私は手の位置を変えて、今度はリュウの頭を撫でるようにして彼の髪に触れる。

そうやって触ってみると、リュウの髪は意外にも触り心地が良い事に気付く。

上手く説明出来ないけど、こうして触れていると何時までも触っていたくなるような感じ。

……前にリュウも、私の髪を触れて楽しんでた事あったけど、あの時もこんな気分だったのかな。

懐かしい記憶を思い出していると、眠っているリュウがもぞもぞと身体を動かし、仰向けになった。

一瞬、リュウが起き出したのかと焦ったけど、どうやら只の寝返りをうっただけらしい。

リュウがまだ眠っている事に安心して、安堵の溜息を零すと……彼の口から妙な言葉が出てきた。

「ついにみつけたぞグミオウ。きょうこそけんを……ZZZZZ」

「……けんを如何したのよ」

？グミオウ？って言うのは良く分からないけど、寝言から聞こえた声音は、随分と嬉しそうな感じがした。

名前からして女性って事はないでしょうけど、夢の中でリュウは一体何をしているのやら。

もしも？他人の夢を覗ける程度の能力？があるのだとしたら、真っ先にコイツの夢を覗いて見たいものね。

きっと私の想いもよらないような、摩訶不思議な空間が広がっているに違いないわ。

「もしかしたら、アンタの中に居る竜たちが会話をしてるのかもしれないわね」

流石にそれはないと思うけど、リュウの夢なんだし、何が起こっても不思議じゃない。

……でも、叶う事なら、貴方の夢の中にも私が現われて欲しいって想ってしまう。

夢の中にまで一緒にいたいと願う事は、やっぱり贅沢に為っちゃうのかな？

「あ、にげられた……ZZZZZ」

「……ホントにどんな夢を見ているのやら」

リュウの寝言が面白くて、私はつい笑い零してしまう。

彼の言動が可笑しくて笑みが零れて、ふと下に眼を向けたらリュウの唇に眼が留まってしまった。

如何して其処に眼が留まってしまったのか、それは私にも良く分からない。

ただリュウの顔に視線を向けたら、自然と其処に目が行ってしまっただけなのだから。

「……………」

私はもう一度周囲を見回して、近くに誰も居ない事を確認する。

そして誰も居ない事を確認できたら、自然と自分の顔をリュウの顔に近づけていく。

胸の鼓動もドンドン速くなって、顔も熱くなっていくのが分かるけど……コレ以外の事に頭が回らなくなっている。

顔をドンドン近づけて、リュウが吐く息を肌で感じられるくらいに



近付けたその時、近くの茂みで物音が聞こえた。慌てて顔を上げると、茂みの中には魔理沙に萃香にたっちゃんの姿が其処にはあった。

「あ、アンタ等、其処で何してるのよ!?!」

「やべ、バレた。全員撤収!」

「わゝ逃げろ」

「じゃから妾は押すなど言っただんじゃ」

「今はそんな事行ってる場合じゃないだろ!」

「待ちなさい!」

私は逃げる三人をとつちめる為に立ち上がると、膝の上から何かはずり落ち、硬いモノが地面に当たる音が聞こえてきた。

恐る恐る下に眼をやると、其処には私の膝から落ちたリュウが、地面に顔面を強打してノビている姿があった。

「リュウ、ゴメン!」

「……………」

一応声を掛けてみるけれど、完全に気を失っているらしく返事はなかった。

私はリュウを抱き上げ、縁側の上にそつと寝かせてあげた。

「おい、霊夢!」

「なによ、今はアンタに構ってる暇は」

「旦那は大切にしようぜ?」

「霧雨、泣かす!」

「マジで切れやがった! 二人共早く逃げろ……って、誰も居ねえ?!」

「其処を動くなあ!」

「うわ、やっべ」

箒に跨って全速力で逃げる魔理沙を追って、私も全速力で飛びながらアイツに向かって弾幕を放つ。

何時頃から覗いていたのかなんて如何でも良い。とりあえず、あのバカを全力でぶっ飛ばせるならそれで良い！！

頭に血が上った私は、あの二人の事などすっかり忘れて、魔理沙を追い掛け回すのだった。

第六十二話 巫女の秘め事（後書き）

グミオウ狩り……それは、ブレスオブファイア？・？をやり込み上での障害の一つ。

入手確立ごく僅かな剣を手に入れるため、今日も何処かでグミオウ狩りが行われる……。

出現率が低くて逃走確立も高いのに、落とす確率が256分の1とか勘弁して下さいよ……。

## 第六十三話 吸血鬼の戯れ

雪が降り始め、朝晩の冷え込みが一層厳しくなり始めた今日この頃。俺はフランドールと遊ぶために、紅魔館にまでやって来たんだが……屋敷に着くなり、いきなり咲夜に拉致されてレミリアの元まで連行された。

咲夜に連れてかれた場所は、この屋敷にある来客質と思われる広間だった。

部屋には調度品と思われる絵画や花を生けた花瓶があり、真ん中には長テーブルと沢山の椅子が置いてあって、その上座の席にレミリアは腰掛けている。

あまりにも突然の出来事だったから、抵抗も出来ずに強制的に連れてかれた訳だが……レミリアの機嫌を損ねる様な事したかな？

「いらつしゃい、リユウ。立ってないで座りなさいな」

「は、はあ……」

俺はレミリアに促されるまま、彼女と対面の席に座る。

席に座ると、咲夜がちょうど良いタイミングでティーセットを乗せた台を持って姿を現す。

時を止められるとタイミングを計り易いのか等と、咲夜の方を見ながら物凄く如何でも良い事を考える。

「どつぞ」

「あ、どうも」

咲夜が俺の前に出してくれたのは、白いティーカップに入った紅い紅茶だった。

霊夢と暮らし緑茶ばかり飲んでる俺にとっては、紅茶と言うのはあまり馴染みの無い飲み物だ。

旅をしているときはお茶を買う金もなかったし、ウィンディアのお城で出されたのが紅茶だった気がするが……今は関係がないな。

そんな事を思い出しつつ、俺は出されたお茶を一口飲むが……あまり美味しいとは感じない。

やっぱり緑茶ばかり飲んでるから、紅茶の良し悪しってのはイマイチ分からないんだよな。

「……随分と渋い顔してるけど、私の咲夜が淹れたお茶が不味いでも？」

「と言うか、紅茶自体があんまり好きじゃない」

「紅茶は遊びに来るたびに出してると思うけど？」

「折角だして貰ってるのに飲まないのも悪いだろ。出された以上はちゃんと飲むよ」

「それは良い心がけね」

レミリアは俺の言葉に感心したのか、一度頷いた後、優雅にティーカップを口につけた。

見た目は幼いのに、こうして紅茶を飲んでいる姿は中々に絵に為っている。

龍神や萃香も少しは見習ってもらいたい……まあ、アイツ等じゃ無理だろうな。

あの二人は？優雅？とは無縁の存在な気がするし、紅茶を飲んでいる姿自体が違和感しかない。

紅茶を飲んでいる二人の姿を想像して、思わず鳥肌が立ってしまった。

アイツ等は紅茶よりもお酒を飲んでいる方が似合ってると思うのは、大体はあの二人の自業自得だろうな。

「ところで、レミリア。いきなり俺を拉致して如何する心算だ？」  
「拉致なんて人聞きの悪い。私は咲夜にリュウを連れてくるように命令しただけよ」

「……屋敷に着いたと思っただら、いきなり簞巻き状態にされて、ここまで引き摺られたんだが？」

「私は飽く迄も命令しただけで、方法までは指示してないわ」

レミリアの話聞いて、俺は咲夜を思いっきり睨みつけると、彼女は顔色一つ変えずに俺から顔を逸らした。

俺はそんな咲夜を見て肩を落として呆れた様な溜息を付くしかなかった。

「……まあいいや。それでレミリアの用事はなんだ？」

「ちよつと私と戦いなさい」

こんな方法で俺を拉致して何がしたいのかと思ったら、物凄く面倒な事を頼んでくるな。

しかも、今のは？頼み？と言うよりも？命令？に近かったよな気がする……。

「他のやつに頼めよ」

「咲夜たちじゃ手加減するから、戦っててストレスが溜まるのよ」

「フランドールが居るだろ。あの子なら喜んで戦うと思うぞ」

「あの子に頼んだら？リュウじゃないと満足出来ないからいや？ですって。……貴方、随分と好かれたわね」

「……その台詞に悪意を感じるのは俺だけか」

「今のはフランが言った台詞よ」

「純粹って怖い……」

無邪気な顔でそんな事を言ったのかと思うと、呆れて溜息しか出て

こなくなる。

495年間、殆ど外に出ないで地下の部屋に閉じ籠ってたのは知ってるけど、もう少し言い様はなかったのかな……。

「はいはい。何時までも呆れてないで、さっさと戦うわよ」

「……やっぱり拒否権はないのな」

「当たり前でしょ。貴方には一年前の借りを返さないといけないしね」

「借り云々は兎も角、俺も試したい事があるし、丁度良いか。……でも、安全は保障しないぞ」

「構わないわ。寧ろ、その位でないと面白く無いもの」

「……この暇人が」

「悠久の時を生きる者にとって最大の敵は？ 退屈？ よ。この程度の遊びくらい喜んで付き合いなさい」

「そんなので喜べる様な変わった性格じゃないっての」

俺は色々と言いつつも、結局レミリアの暇潰しに付き合っ  
てやることにした。

吸血鬼のレミリアなら、半分人間の妖夢で試せない技が使えるし、  
コツチに取っても都合が良いんだが……この技って吸血鬼に使って  
も大丈夫なのかな？

それ以前に、ちゃんと成功するのもか怪しいんだが……ぶつつけ本  
番でもなんとかなるだろ。

……  
……  
……

戦うための場所として案内されたのが、四方を紅で統一された紅魔館のホール。

中央の床には何らかの魔法陣が描かれているが、特別害は感じないので無視しても大丈夫だろう。

俺は軽く背伸びなどをして、体を解してから愛刀を取り出し、ホルの真ん中で待っているレミリアと対峙する。

「お嬢様、お気をつけて。……リュウ、お嬢様に怪我をさせたら承知しないわよ」

「リュウ、お姉様なんて早くやつつけてフランと遊ぼう」

「……………」

俺とレミリアは、ほぼ対極の応援を受けて、どんな顔をすれば良いのか分からず呆れてしまう。

立会人としてるのが、フランドールと咲夜だけなのだから、応援がこうなるのが必然かもしれないがな。

俺は溜息を吐きながらも頭を切り替え、鞘から剣を抜いて何時でも戦えるように構える。

一方レミリアは爪を伸ばし、何時でもコツチに向かって駆け出せるように体勢を整えた。

「それじゃ始めましょうか」

「多分、弾幕ごっこにならないと思うが……別に良いんだろ？」

「ええ」

「そっか。……なら、手加減抜きで行くぞ」

「そうしなさい。大怪我をしたくなかったらね!!」

そう言うとレミリアは、眼にも止まらない速さで俺との間合いを詰め、両手の爪で切りかかって来た。

俺は愛刀を盾にして後ろへと跳び、一度間合いを調整してからレミ



リアへ斬り掛かろうとする。

だが、速度ではレミリアの方が速く、離れた間合いをあつさりと言われられてしまい、そのまま突撃を貰って後ろへと吹き飛ばされてしまう。

「チツ」

俺は舌打ちをしながらも体勢を整え、剣を横に薙ぎ払い斬撃を飛ばす。

レミリアはその一撃を跳び越える様にして躲し、もう一度間合いを詰めようと駆け寄ってくる。

近付いてきた彼女にタイミングを合わせて剣を振るい、レミリアを力尽くで捻じ伏せた。

其処から更に俺は、彼女を斬り上げて身体を起こしてから胸を穿ち、回転して遠心力をつけた一撃で胴を薙ぎ払う。

まだ追撃しようとして剣を握り締めるが、レミリアは素早く後方の壁に張り付いて、俺の追撃を回避しただけではなく、その状態から俺に向かって錐揉み体当たりを仕掛けてきた。

俺は直ぐに後ろに跳ぶことでなんとか回避するが、レミリアは自身の正面の壁に張り付いてもう一撃仕掛けて来る。

今度は横に跳ぶ事で回避する事が出来たが、次は俺の正面の壁に張り付いて仕掛けきた。

真っ直ぐ体当たりをしてくるだけの技だから、軌道さえ読めれば回避はまだ楽な方だ。

だからと言って、何時までも避けてばかりいても埒が明かないし、次の一撃で勝負を仕掛ける。

そう決めた俺は愛刀に力を注ぎ込み、剣を逆手に構えて何時来ても良いように備えた。

「……覚悟ありって顔ね。良いわ、この一撃を止められるなら止めてみなさい！」

レミリアは、さっきよりも速度を上げて、俺に体当たりを仕掛けて来る。

一方俺は回避する素振りなど見せず、ただ彼女とのタイミングを見計らい続ける。

刻一刻とレミリアが近付いてくる中、俺は剣で迎撃するわけでもなく、彼女とぶつかる刹那の瞬間に合わせて剣を地面に突き刺す。

突き刺した剣に込められている力を解放すると、地面から剣気が勢い良く噴出し、レミリアを遠くへと吹き飛ばした。

吹き飛ばされたレミリアは壁と激突し、そのまま向こうまで突き抜け、崩れた壁から粉塵が舞い散る。

一歩間違えれば自爆していただろうが、なんとかタイミングを合わせる事が出来たか……。

策が成功したものの、レミリアを倒したわけでもないし、まだ油断するには早いな。

そう思いなおし剣を構えなおして、彼女が吹き飛んだほうを睨みつけていると、煙を突き破って紅い槍の様なものが勢い良く飛んできた。

俺は徐に剣を振るい、飛んで来た槍を一撃で粉碎する。

だが、飛んで来る槍は一本だけではなく、粉碎したあとにも更に三本の槍が投げられた。

飛んでくる真ん中の一本を壊し、その間を通り抜けると……レミリアが俺の目の前にまで迫って来た。

レミリアは吹き飛ばされた影響でボロボロになっているが、全身に紅い霧の様な魔力を纏っている。

その状態の彼女に、二回ほど爪で薙ぎ払われた後、両手を勢い良く振り下ろされて後方へと吹き飛ばされた。

俺は直ぐ後ろの壁に激突するが、ダメージ自体は大したこともなく、戦闘に何の支障はない。

……しかし、攻撃を仕掛けてきたレミリアの様子は先ほどとは若干違っていた。

恐らくは全身に纏っている魔力の影響だろうが、彼女の身体は姿を現したときと比べて、若干回復して居るように見える。

相手を傷付けた分だけ回復する魔力か……。確かに？吸血鬼？の名に恥じない力だな。

そんな事を考えながらも俺は立ち上がり、剣を握り締め、戦闘続行の意志を示す。

「あの程度で降参したら如何しようと思ったけど、流石に無用の心配だったわね」

「あのくらいで参るようなら、フランドールの遊び相手は出来ないだろ」

「それもそうね。……なら、これは如何かしら？」

レミリアが両手を前に突き出すと、手の中から一本の紅い鎖が伸びてきた。

彼女の魔力で出来ていると思われるそれは、まるで意志を持っているかの様に俺に絡みついて来る。

俺は拘束される前に鎖を破壊するが、その間にレミリアは間合いを詰めて殴り掛かって来た。

二度、三度と殴られてダメージを負った分だけ、彼女の傷が治り回復していく。

コレ以上回復される前に剣を振るって間合いを離すが、レミリアはその間合いを軽々と詰めて攻撃してきた。

俺は彼女の攻撃を捌いていくが、完全に間合いを詰められている上

に、攻撃速度でも完全に負けている。  
どんなに頑張つて防ぎ続けようとも、僅かな隙を突かれて攻撃を重ねられるのは眼に見ていた。

其処で俺は、接近しているレミリアに向かって斬撃形の弾を飛ばさずに出し、彼女にムリヤリ回避させる。

レミリアはコツチの読み通りに上に跳んで回避し、今度は上空から強襲しようと襲い掛かってきた。

だが、俺はまた彼女に向けて斬撃を出し、もう一度レミリアに攻撃を回避させる。

その後も、レミリアが回避出来るような斬撃を飛ばし、彼女の動きをドンドンと制限して行く。

気が付くと、俺の正面には斬撃の壁の様なものが出来ていて、レミリアの動きを大分阻害できた。

斬撃の壁を作り、レミリアの動きを阻害出来たとしても、彼女はその小柄な身体を使い、壁の隙間を縫って俺に接近してくる。

「私の動きを阻害したのは褒めてあげるけど、その程度じゃ私は倒せないわよ」

「ああ、そうだろうな」

しかし俺も、レミリアがこの壁を掻い潜って、もう一度接近してくる事くらい分かっていた。

だからこそ、彼女が突破出来るように斬撃を周囲に設置し、接近する為のルートも計算して作り上げた。

あとはそのルートに向かって、特大の一撃をお見舞いしてやるだけだ！

「…まさかッ?!」

レミリアは俺の思惑に気が付き、急いで壁の外へと逃げ出そうとするが……少々遅かった。

「ハアアアアアッ！！」

俺は剣にありつたけの力を込め、空間をも断ち切ると言わんばかりの一撃を放つ。

回避が間に合わないかと判断したレミリアは、その場で反転し、目の前に魔力の壁を作って防ごうとするが、壁は呆気なく斬り裂かれ、また壁際へと吹き飛ばされた。

しかし今度は空中で体勢を立て直し、自分の目の前に魔法陣を展開して、小さな蝙蝠の形をした弾を幾つも放ってくる。

俺に向かって飛んでくる弾だが、斬撃の壁に阻まれて一匹たりとも俺に近づく事はできなかった。

「厄介な壁だけど……この一撃で打ち崩す！！」

そう宣言するレミリアは、利き手にありつたけの魔力を集束させ、深紅に染まる巨大な槍を作り出した。

その槍を見た俺は、この壁で防ぎきるのは無理だと判断し、愛刀に溢れんばかりの力を注ぎ込む。

剣は込められた力に反応して鈍く光だし、その力を使って刀身に光の刃を纏わせる。

「貫きなさい！ 神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」

「斬り裂け、竜剣『ドラゴンブレード』！」

レミリアは作り上げた槍を渾身の力で投げ、俺は作り上げた刃を更に巨大にして振り下ろす。

激突した二つの力は途轍もない衝撃波を生み出し、その力は屋敷全

体を震え上がらせる。

俺達がいる丁度真ん中で激突し、一見まったくの互角の様にも見えるが……徐々に俺の刃がレミリアの槍を切り裂き始めた。

「バカなツ！ 私の『グングニル』がツ！？」

「……悪いが、俺は少しでも神性が有ればどんなモノでも滅ぼすぞ」

「そんな事があつて……ツ！！」

「……でりやああああああツ！！！！」

俺の裂帛の気合と共に振り下ろした刃は、レミリアの槍を斬り裂いた。

行き場の無くなった魔力は、その場で弾け飛び、目の前が魔力で出来た紅い霧で覆われてしまう。

俺は伸ばしていた刃を元のサイズにまで戻し、完全にケリを着ける為にレミリアの元へと駆け出す。

紅い霧の中を駆けていると、霧の向こうから利き手に魔力を溜めたレミリアが飛び出して来た。

俺達はお互いに相手を睨みつけ、渾身の力を込めて相手に最後の一撃を叩き込んだ！

「……ツ！！！！」

レミリアは爪を振るい、俺は剣で斬り抜け、お互いに背中合わせの状態でその場に立つ。

霧散していた魔力の霧も徐々に無くなって行き、周囲の状況が明らかになっていく。

立派だったホールも俺達の戦いでボロボロになり、アチコチに輝や亀裂が走っている。

そんな周りに眼を向けていると、俺の身体に爪で引き裂かれた様な傷跡が浮かび上がり、其処から全身に痛みが駆け抜け、片膝を着い

てしまいそうになる。

痛みを堪えてなんとか踏み止まり、痛む身体に鞭打って後ろを振り向くと、レミリアの身体から閃光が迸り、そのまま地面に倒れ伏せた。

倒れたまま動こうとしない彼女を見て、俺は全身の力を抜くように息を吐き出し、その場に座り込んだ。

「か、勝った……」

さつきまで激戦をしていたとは思えない声だが、今はこれ以外の言葉が思い浮かばなかった。

俺はもう一度安堵の溜息を吐いて、出来た傷を治す為に自分で回復魔法を掻ける。

傷を治す一方で、俺は横目で握り締めている剣の状態を調べる。

愛刀に刃毀れなんて出来てないが、刀身は力を込めた時に起こる発光現象がまだ続いていた。

どうやら、剣に込めた力を100%相手に叩き込めなかったらしく、技は不完全な状態で発動したようだ。

今回の戦いで使えることは分かったけど、相手に力を叩き込むのが如何にも難しいな。

コレばかりは練習するしかないかと、自分の中で結論を出した俺は、傷の治癒も終わったので、倒れているレミリアの様子を見るために彼女の傍に近付いた。

「おーい、大丈夫か」

「だ、だいじょうぶなわけないでしょ。さいごのなんなのよ……」

「元にしたのは、此処の門番が使っていた技だ」

「いりよくがおかしいわよ、アレ……」

「……俺の中ではまだ不完全なんだが」

「ばかじゃないの……」

レミリアは最後にそう言うと、気力が尽きたのかそのまま気絶してしまった。

流星にこのままにしておく訳にも行かないので、気を失っている彼女を抱き上げ、咲夜に介抱してもらおう事にしよう。

そう思つて観戦してる筈の彼女を探すのだが……姿は見えず、フランドールも居ない。

何処に行ったのかと周囲を見渡していると、何時の間にか出来上がつていた瓦礫が動き、その中から二人の姿を発見した。

「大丈夫ですか妹様」

「うん、平気。それにしてもさっきの凄かつた」

「私は彼の非常識さに呆れてモノが言えません」

「非常識で悪かつたなおい」

「コレだけの事をおきながら、何を暢気な……つてお嬢様!？」

「あゝお姉様ずるーい!!」

俺が抱き抱えているレミリアの姿を見た二人は、それぞれ違った反応をする。

咲夜の反応は普通だとしても、フランドールの反応は何かの間違っている気がするの、きつと俺だけじゃない筈だ。

そんな的外れな事を思いながら、咲夜にレミリアを渡そうと動き出した瞬間、顔の横を銀のナイフが通過した。

「……あの…咲夜さん？」

「言つたわよねリユウ。お嬢様に何かしたら承知しないって」

「いや、ちよつと待て。少しは俺の話を聞け」

「問答無用。……死ね」

「なんでだーッ?!?!?!」



すっかり頭に血が上った咲夜は、自分の主が居るにも拘らず、沢山のナイフを投げつけてくる。

危ないからレミリアを安全な所に置きたいんだが、今はそんな事をしている余裕もなさそうだ。

俺は仕方がなくレミリアを抱いたまま、咲夜から逃げるために紅魔館中と駆け回ることになった。

「あー咲夜ズルイ！ フランもリュウと弾幕ごっこする!!」

「ちよつと待てフラン！ 今日はきついからまた今度に」

「それじゃいつくよ。禁弾『スターボウブレイク』！」

「いきなりソレかッ!!!」

……訂正、咲夜とフランドールから逃げるために紅魔館中を駆け回ることになった。

不幸は立て続けに来るって言うけど、コレはないだろ……。

第六十三話 吸血鬼の戯れ（後書き）

読んでいれば分かると思いますが、竜剣『ドラゴンブレード』は断  
迷剣『迷津慈航斬』の事です。

なんでこうなったのかと言いますと……只のノリです。

第六十四話 大忘年会（前書き）

大晦日だろうと、正月だろうと何時も通り更新していきます。

## 第六十四話 大忘年会

霊夢 Side

「さあ皆のもの！ 今宵は忘年会だ、今年の嫌な事を忘れてとことん騒ぐぜーッ！！」

「…………おおーッ！！！！」「…………」

「元気だなーアイツ等」

「何時ものことでしょ」

さつき魔理沙が言ったように、今宵は博麗神社での大忘年会。

何処で聞きつけたのか分からないけど、紅魔館や白玉楼に永遠亭の連中が好き勝手に騒いでいる。

…………まあ、コイツ等からしたら騒ぐ口実が出来れば、それで良いんでしょうけど。

「それにしても、魔理沙たちはこのテンションで騒ぎ続ける気か？」

「多分そうでしょうけど…………如何かしたの？」

「いや、五月蠅くて寝れそうにないなあ〜って」

「…………この状況で寝れる訳ないでしょ」

私はリュウの言動に呆れて、この宴会に似つかわしくない溜息を零す。

呆れる私の顔が面白いのか、リュウはコツチを見ながら可笑しそうに笑う。

笑われる方としては何一つ面白くないんだけど、コイツの笑顔を見ていると色々と如何でもよくなってくる。

私は小さく微笑んだ後、手に持っているお酒の入ったぐい飲みを飲

んで、ほっと一息ついた。

リュウも私も、大きな輪の中に入って飲むつもりはないので、二人で静かに飲んでいると

「今、誰かが寝るなどとふざけた事を言っておった様じゃが……何処の誰じゃ？」

「駄目だねえ」。今夜の宴会は誰も寝かさない心算なんだからさあ」

さっきの言葉がたつちゃんと萃香の耳に届いたのが、酒瓶を持った二人が私達の方へと近付いてきた。

宴会のたびに煩くする二人が同時に来るなんて、厄介な事この上ないわね。

まあ、この状況で寝るなんて言い出したリュウが悪いんだし、今回は大人しく酒飲みに絡まれてもらうしかないわね。

「お前等、始まったばかりなのにもう酔って……って、萃香はいつもの事か」

「そんな事よりもじゃ！ ……竜よ、お主いま？寝る？と申したか？」

「そんな勿体のない事を私とたつちゃんがさせると思う？」

「……へっ？」

そう言うと二人はリュウの両腕を掴み、そのままズルズルと輪の中へと連れて行くこととする。

リュウは視線で私に？助けて？と訴えてくるけど、巻き込まれたくないから思いつきり視線を逸らす。

「ちよっ?! 霊夢さん!？」

「……ごめん。私も何度も醜態を曝したくないの」

「そんな理由で見捨てないでーッ!!」  
「ええい、喚くな竜よ! お主も男じゃろうが!!」  
「よし、今日はリュウが吐くまで飲ませるぞ」  
「ちよつと待て! 一歩間違えれば死ぬぞソレ!!」  
「竜がこの程度で死ぬわけがない」  
「そんな信用はいらないって!!」

引き摺られながらもリュウは抵抗を続けるけど、結局は萃香の力に負けて、抵抗も空しく輪の中へと連れて行かれてしまった。

独り残された私は、大きな溜息を一つ吐いた後、手癢で自分のぐい飲みに注いで一気に飲み干した。

……本当は、リュウと二人で飲んでいたかったけど、この状況だと無理だろうし、大人しく諦めよう。

そんな事を思いながら独りお酒を飲んでみると、両手に透明な液体の入ったコップを持った紫がやって来た。

「はあい、霊夢。飲んでるかしら」

「ボチボチ。……それで何の用よ」

「独り寂しく飲んでる貴女を見かねて、私が一緒に飲んであげるわ」  
「遠慮するわ」

「……少しくらい付き合ってくれても良いじゃないの」

「面倒だし……アンタの事だから、ドサクサに紛れて何をするか分かったもんじゃないわ」

「酷い言い様ね」

紫は残念そうに肩を落すけど、ちやっかり私の隣に座り込んでいる。何を言おうが結局となり座るのなら、そんな風に肩を落とす必要が何処にあるのかしらね。

心の中でそう思いつつ、私は紫の存在を無視して、独りで静かに飲み続けることにした。

視線の先に有る輪の中では、たっちゃんがりユウにお酒の飲ませようと、アイツにもたれ掛かっている光景が見える。

そんな二人の姿を見てみると、胸の奥でモヤモヤしたモノが湧き上がってくるけど、あの輪に加わったら間違いないく飲まされてしまう。そうなたら確実に酔っ払って、またアイツに迷惑を掛けちゃうじやないの。

流石に同じ失敗を何度もするのは嫌だし、胸にあるモヤモヤは、後日纏めてアイツにぶつけてやる。

「霊夢、目付きが凄い事になってるわよ」

「ほっといて」

「全く。そんな嫉妬に駆られる貴女に美味しいお水をあげるわ」

「嫉妬に駆られるってのは余計よ」

「そんな事は兎も角、飲みなさいな」

そう言つて紫は持つて来たコップを私に差し出してくる。

コップに入っている液体からは、お酒の独特な匂いは感じないものの……紫が持つて来た時点で、怪しさ満点で飲む気にもならない。

私は紫が差し出してくるコップを無視し、自分のぐい飲みにお酒を注いで飲むことにした。

けれども、既にくい飲みにはお酒が注がれていて、新しく注ぐ余裕なんてなかった。

さっき飲み干したと思つてたけど、私の勘違いだったのかな？  
そんな事を思いつつ、ぐい飲みに入っている一口飲んでみると

「ッ？！」

お酒のアルコールが予想以上に強くて、思わず嘔出してしまった。

口に含んだのが少量だから、大惨事はま逃れたけど……なんだってこんなにも強い酒が入ってるのよ。

「げぼげぼッ……」

「ちよつと大丈夫？ はい、お水」

「わ、悪いわね……」

私は紫が手渡してきたコップに入っている液体を、なんの疑いもせず一気に飲み干してしまった。

液体を飲むと胃がカツと熱くなり、頭もボーっとしてきて考えが上手く纏まらなくなってきた。

飲んだ後で、さっきあんなにも疑っていたのにと後悔するけど……後で悔やみから？後悔？なのよね。

「…よし、飲んだわね。後はこの霊夢を彼の元に放り込むだけね」

「ゆかり〜。私にいったい何をのませたのよ〜」

「ただのお酒よ。それよりもリュウを放つといて良いのかしら？」

「ふえ？」

言われるがままに、紫が指を指した方を見てみると其処には、リュウがたっちゃんとか話しているのが見える。

あの二人の姿を見ると、胸のモヤモヤが苛立ちや寂しさに変わってくるけど……此処は我慢どころ。

前にリュウが？酔った私は嫌い？みたいな事を言ってたから、此処は我慢しないとアイツに嫌われちゃう。

「あら？二人の所に行かなくて良いの？」

「いきたいけど……」

「踏ん切りがつかないわね。……景気づけにもう一杯飲む？」

「もちろっ」



考えが纏まらない私は、紫に注がれるがままに自棄酒をあおる事にした。  
なんか前にも似た様な事があつた気がするけど、良く思い出せないから気にしないでおう。

霊夢 Side out

……

……

…

リュウ Side

「ええい、いい加減に離れろって」

「折角の忘年会じゃぞ。この位は良いではないか」

「あのなあ……」

酒飲み二人に拉致された俺は、一番大きな輪の中に連れてかれてしまった。

萃香の奴は、何かを用意してくるとか言つて何処かに行ったが、龍神は俺の背中にもたれ掛かり、逃がさない様に抱きついてくる。

龍神はちっこいから、ムリヤリ振り払つても良いんだが……それをやると後が煩いからな。

他の連中は見てみぬフリ……と言うか、今の俺の状況を楽しんで放置しているようにも見える。

楽しければそれで良いって風潮の幻想郷だし、こうなるのはなんとなく読めてたが……少しくらい助けてくれても良いだろ。

「あの…龍神様。その様なお戯れは程ほどに……」

「うっさいぞ衣玖。今宵は宴会なのだから楽しまんて如何する」

「ですが」

「……あまり煩いと来年から仕事を追加するぞ」

「すみません、わたくしが間違っていました」

「衣玖さん……」

折角の衣玖さんが出してくれた助け舟だが、龍神の一言で一蹴されてしまう。

て言うか龍神よ、それはあまりにも酷すぎるだろ……。

そろそろこの状況に諦めを感じ始めた俺は、深い溜息を吐いて乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

「なんじゃ竜。宴会にその様な笑みは不粋じゃぞ」

「誰の所為だよ、誰の」

「元を正せば、寝ようとしたお主の所為じゃな」

「俺が何を言っつて拘束してきただろ」

「うむ！」

満面の笑みで言い切る龍神を見て、俺はとうとう頭が痛くなり始めた。

昔からこんな奴だったのか覚えてないが、よく昔の俺はコイツと長い事旅をしていられたよな。

フォウルに近い性格だとしたら、旅を始めて直ぐに龍神と袂を別つてそうだけど……そうしなかったのは、只単に興味が無かっただけなのか、龍神の性格のお陰が良く分からないな。

今となつては誰にも分からない事を想っていると、突如背中に張り付いていた龍神が誰かに持ち上げられた。

その勢いで、龍神の手が俺の首に絡まってかなり苦しい……てか、さっさと離せよ龍神。

「誰じゃ！？ 妾の首根っこを掴みあげる輩はー！」

「たっちゃん、そこじゃま」

「霊夢？ ……お主、相当酔っておるじゃろ」

「そんな事はいいから、早くどきなさいよ」

「退いてと言われてものお。妾も萃香の奴にコヤツを逃がさんと約束しておって」

「そんなの知らないからどきなさいって」

俺の後ろでなにやら変な言い合いが行われているが、こっちは気にしている余裕もない。

引き剥がそうとする霊夢に、俺に抱きついてくる龍神。

その結果、俺の首がドンドン絞まって行って、そろそろ息が苦しくなってきた。

まあ、アンフィニのお陰で死ぬ事はないだろうけど……いい加減いしきがあぶない……かな……。

「ちょっと待て霊夢、竜の顔色がかなりヤバイ事に」

「なら、たっちゃんが手をはなせば良いでしょ」

「……ならばコレは如何じゃ？ 妾が背中から抱きつくから、お主は正面から竜に抱きつけ」

「そんな事したらリュウにきらわれる」

「コヤツがお主を嫌いになる事などありえんって」

「……ほんと、リュウ？」

「なんでもいいから……たすけて……」

「抱きついてもいい？」

「それで……このくるしみからかいほつされるなら……いくらでも……」

「わかった」

霊夢はそう言うと、龍神を引っ張っていた力がなくなり、俺の首は漸く解放される。

窒息する数歩手前にまで行つてた気がするからか、宴会で酒臭いにも拘らず、肺に入ってくる空気は何時も以上に美味しく感じた。

今までに、炎で焼かれたり、剣で刺されたり、銃で撃たれたり、棍棒で殴られたりと色々な方法で死に目に遭つて来たけど、首を絞められるつてのは今までにない方法だったなあ。

ついさつきまで死にそうになっていたからか、霊夢を怒る前に旅の記憶が蘇ってきて、あの冒険での様々な危機を思い返してしまう。

そんな事をする前に一言文句を言うべきだと思つけど、今俺の目の前にいる霊夢を見ると現実逃避の一つや二つしたくなるつて。

「リュウ…うごかないでね……」

「……（動くに動けない状況なんだけどな……）」

酔つ払つて顔を真っ赤にしている霊夢は、龍神が言った様に正面から俺に抱き付いてきている。

酒を相当飲んでいるのか、かなり酒臭い霊夢だが……本人は至つて幸せそうだ。

俺の胸に顔を埋めているところを見ると、明日はまた自己嫌悪で立ち直れなくなつてそうだな。

周りの連中は生暖かい眼差しを向けてくるし、一部の連中はニヤニヤと嫌な笑いを浮かべているし……。

なんなんだコイツ等？俺に喧嘩でも売っているのか？

だったら全部買ってやるぞ、今ならアンフィニを解放しても構わない位の気持ちなんだからな！！

「おつまたせし準備出来たよ……つて、コレは如何言う状況？」

「萃香が気にすることは無い。それよりも例のものを竜の前に」

「おっけ」

何処に行っていた萃香が持つて来たのは、ウチのちゃぶ台くらいはありそうなサイズの杯だった。その杯には大量の酒が注がれていて、一体誰がコレを飲むんだって聞きたいくらいの量だ。

……まあ、俺の前に持つて来ている時点で、誰の為に用意したのかなんて丸分かりなんだけどな。

「さあ！ 宴会を盛り上げる為にこの酒を飲み干すが良い！！」  
「んな事出来るかぁーッ！！！」

耳元で大声を出す龍神にイラッと来て、大声を出しながら龍神の顔に肘を叩き込む。

だが、叩き込んだ肘はあっさりと受け止められてしまい、憂さを晴らすことは出来なかった。

「ええ〜一気やらないのかよ〜。つまらないぜ〜」

「大丈夫よ。何だかんだで彼はやる男だから。……そうでしょ、リュウ」

「私は如何でも良い事だけど、お嬢様の期待を裏切ったら承知しないわ」

「リュウさん……南無」

「頑張つてねえ〜」

「この位出来て当然よね、竜神さん？」

「……貴方つてこう言う場だとホントに味方がいないわね。まあ、私も助けないけど」

「ご武運を。……祈る事しか出来ないわたくしを許して下さいまし」  
「酔い覚ましの薬なら、わたしの永琳に言つて用意させるから、安心して逝つてきなさいな」

誰一人として助けようとしないうこの状況に本気で泣きたくなかった。せめて衣玖さんくらいは、助け舟を出してくれると思ってたが……龍神には逆らえないのか。

俺は最後の望みとして霊夢に視線で訴えるが、今の状態でこの状況を覆せるかなあ……。

「霊夢……」

「リュウ……わたしも、リュウのカッコイイところをみてみたいな」「屈託のない笑顔でそんな事言うなーッ!!」

正直、酔っ払ってるから大して期待してなかったけど、笑顔で言われたくなかったよ!!

あーもう、こう言う事になるから宴会とかは嫌いなんだよ……。

「まあ……なんだ、諦めも肝心じゃぞ?」

「元凶の一人が何を言う……」

「そうは言うが、もうお主が酒を飲み干さんと場は収まりそうにないぞ」

「……………」

龍神の言う通り、周りの連中は俺が何時酒を飲むのかと期待の眼差しを向けている。

この空気の中で飲まないと突っ撥ねたら、宴会のたびにこの事でグチグチと言われそうだな……。

如何足掻いても見逃してくれない空気を察した俺は、この空気を作った奴を全力で呪いながら杯を手を取った。

「それじゃ行くぞ」

「零すんじゃねえぞ!」

「……とりあえず、魔理沙は後でぶちのめす」

「なんでだ?!」

魔理沙の抗議の声を無視して、俺は零さないように気をつけながら杯の酒を飲んでいく。

器が大きいのは良いが、ホントに気をつけないと直ぐに零れそうになるから気が気じゃない。

酒が喉を通っていくたびに、胃が燃えるように熱くなり、徐々に息も苦しくなってくる。

周りの連中は暢気に掛け声を掛けてくるが、飲んでる方からしたらちっとも嬉しくない。

酔いが回ってくるよりも先に、アイツ等に腹が立ってくるが文句はコレが飲み終わってからだな。

そう自分を奮い立たせて………やっとの思いで杯に注がれた酒を飲みきる事が出来た。

「……おおー!」「……」

「……これで文句ねえな」

「やるねえ〜リュウ。それじゃもう一杯」

「その前に俺がテメエの首を刎ねるが……それでも良いのか萃香」

「……すいません、調子に乗ってました」

俺の脅迫に土下座で謝る萃香を見て、周りの連中は大口開けて笑うが……コッチは全然面白くない。

とりあえず、邪魔になる杯を放り投げた俺は、不機嫌そうな顔のまま適当な料理を摘む事にした。

「なんじゃ竜。宴会なのに面白く無さそうなのツラをしおって」

「あんな事させられたらこうなるわ」

「なっはっはっはッ。すまぬ、許せ」

「笑いながら謝ってんじゃねえよ」

「でも、さっきのリユウカツコよかったよ」  
「……………」

こんなにも不機嫌そうな顔をしてるのに、気にせずそんな事を言えるなんて……………色んな意味で大物だな。

「……………? どうかしたの?」

「いや、俺に暢気だとか言う割には霊夢も相当暢気だなぁって思っ  
て」

「そんな事ないとおもっけど?」

「合ってると思うが……………まあ良いか」

「よし! では、まだまだ盛り上がっていくぞ!」

「……………おおーッ!」

「……………好きにしてくれ」

リユウSide out



## 第六十四話 大忘年会（後書き）

年末と言う事で忘年会ネタ。

今日は大晦日だけど、そんな細かい事は気にしたらいけないと思う。

……まあ、俺は正月も大晦日も関係なく更新するんですけどね。

ちなみに次回の更新は一月二日を予定してます。

それでは皆さん、よいお年を。

第六十五話 幻想郷の正月（前書き）

新年明けましておめでとう御座います。

本年も完結目指して頑張りますので、応援の程どうか宜しくお願  
い  
します。

## 第六十五話 幻想郷の正月

年が明けて新たな一年が始まったばかりの頃。

人里だけではなく、妖怪たちも新年を祝っている中で俺達は、何時もの様にコタツを囲んでお茶を飲んでいた。

本来なら今の時期は、神社に取って一番忙しくなり時期らしいんだが……ウチの神社に人なんて来る訳もなく、やる事のない俺と霊夢は暇を持て余している訳だ。

今日は朝早くから衣玖さんも来ているが、彼女は仕事先の新年会から抜け出してきたとかなんとか。

そう言うのは参加した方が良いと思うんだが、衣玖さんなりの考えがあるんだろうし、深く考えないようにしよう。

「それにしても暇だなあ〜」

「ほんとよねえ〜。なんで誰も来ないのかしら」

「里では？妖怪神社？と呼ばれてますからね。好き好んでくる人などそうは居ませんよ」

「リユウは妖怪じゃないわよ」

「誰もリユウさんの事だと言ってません」

霊夢は衣玖さんの事をジト目で睨むが、彼女はソレを軽く受け流してお茶を飲む。

妖怪神社については、前にも聞いてるから何も言わないけど、衣玖さんは『竜宮の使い』って種族の妖怪だよな。その事に関してのツッコミを入れておいたほうが良いのかな？

「あ〜あ。先代の頃はちゃんと参拝客が来てたのになあ〜」

「それは流石に嘘だろ」

「霊夢さん。幾ら新年だからと言っても、その冗談は面白くないですよ」

「……アンタ等ねえ」

俺達の容赦のないツツコミに、霊夢は自分の湯の身を握り締めて怒りを堪えている。

そこまで怒りを買うとは思ってなかったが、幾らなんでも参拝客が来ていたと言うのはうそ臭い。

人の居ない事で里でも有名な神社なのに、先代の頃はまだ人がちゃんと来ていたつてのはなあ……。

その事が事実だとしたら、霊夢の代になってから、この神社は衰退し始めたつて認めてるようなもんだろ。

「コレでも先代が居た頃はまともな神社だったのよ」

「……それつて、霊夢さんがこの神社を駄目にしてると」

「アー聞コエナイ聞コエナイ」

「……一応自覚してるんですね」

衣玖さんも俺と同じ事を思っていた様だし、霊夢本人も一応自覚はしていたんだな。

その事に感心すれば良いのか、呆ればいいのか良く分からず、俺は思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「とにかく！ 先代の頃は普通だったのよ！」

「それなら先代の真似をすれば、参拝客も戻るんじゃないのか？」

「それだけは絶対にいや」

「なんでだ？」

「……私、あの人嫌いのなのよ」

「……はい？」

霊夢の先代嫌い発言に、俺と衣玖さんは思わず変な声を出してしま  
った。

他人に興味がないって言ってる霊夢が、誰かの事をはっきり嫌いだ  
と言うのはかなり珍しい。

……でも、先代って事は霊夢の母親に当たるのか？ なら、他人つ  
て訳でもないか。

「先代の方が嫌いと言うのは如何してですか？」

「あの人、物凄く真面目な巫女なの。……まあ、『博麗の巫女』と  
して見るなら文句なしでしょうけど、修行の時になると何かと口煩  
くて大変なのよ」

「それは霊夢さんを立派な巫女にしたいからでは？」

「だからと言っても、アレは煩すぎよ。元々私は、修行なんて好き  
じゃないのに強要してきたり……って言うか、私の修行嫌いはある  
人が原因ね」

「……そ、其処まで言いますか」

「大体あの方は」

修行時代を思い出したのか、霊夢はあの頃の愚痴を俺達にぶちまけ  
て来た。

よっぽど鬱憤が溜まっていたのか、衣玖さんの呆れ顔にも気付かず、  
霊夢は長々と不満を言ってくる。

俺はそれに耳を貸しながらも、適当な相槌を打ちながら、コタツの  
上に出している漬物を食べながらお茶を飲む。

そんな事していると、家の裏庭に誰かがやって来たらしく、縁側  
の雨戸が数回ノックされた。

「ん？ この時期に誰だ？」

「参拝客でも来たのかしら。だったら表に回って欲しいわね」

「表に何も無いから裏に回ったのでは？」

「寶錢箱があるじゃないの」

「……………」

コンコン

「はいはい、今出ますよつと」

頭を抱えている衣玖さんを置いてコタツから出た俺は、ノックされている箇所を雨戸を開けた。

すると其処には、色鮮やかな花の刺繍が施された紺色の着物を着た金髪の女性と、上海を連れたアリスの姿があった。

「いらつしゃいアリス。そっちの着物の女性はアリスの知り合いか？」

「おいおい、新年早々酷いぜ」

「だから私は気が付かないって言ったのよ」

「わたしだリュウ。よく見てみるって」

「……？」

親しそうに話しかけてくる女性に、俺は眼を凝らしてもう一度よく見てみる。

正月だから着物を着ているのは良いけど、金髪の女性の知り合いなんて、そんなに多くは居ない筈。

でも向こうは、俺の事をよく知っているみたいなの口ぶりだし……何処かで会ったのかな？

「リュウ、誰が来たの……って、その格好は如何したのよ魔理沙」

「流石霊夢。よく気付いてくれた」

「霊夢。魔理沙の奴が来てるのか？」

「着物を着てるのがそうよ」

「……………ええ」

「なんだよその反応は」

「いや…だつてなあ……」

イマイチ信じられない俺は、半信半疑のまま着物の女性をよく見てみる。

金髪と口調を考えれば、確かに魔理沙の特徴ではあるんだけど……なんかが違う気がするんだよな。

俺の中にある魔理沙像は、白黒の服を着て黒い帽子に箒を持っているイメージだから、それ以外の格好だと誰だか良く分からなくなるんだよ。

……あ、だから、目の前に居る奴を魔理沙だと認識できないのか。納得した。

「漸く合点がいったか」

「嗚呼。何時もの服じゃねえと誰だかわからねえや」

「ひでえなおい」

「……どうでも良いんだけど、いい加減上がらせて貰えないかしら」

「参拝客じゃないなら帰れ」

「…新年早々酷い夫婦だぜ」

「まだ夫婦じゃないわよ！」

「？まだ？ねえ……」

「アリスもうつさい!!」

……

……

…

なんやかんやと揉め事はあったが、アリスと魔理沙の二人はウチに上がってもらった。

一度に五人も来たと言う事もあって、あまり大きくないコタツが更に狭くなり、五人で囲むには少々窮屈になってしまう。

隣同士の幅は狭くなったものの、色々と座席を工夫して、なんとか五人でコタツを囲むことが出来た。

座席を決めるときに、魔理沙がしつこい位に俺の隣りを霊夢にしようとして来たが、誰が何処に座っても同じだと思っただけか？ まあ、霊夢も座席の場所は此処が良いと言って来なかったので、魔理沙の言う通りになり、俺の右隣りには霊夢が座る事で落ち着いた。左隣にはアリスが座り、その隣りには魔理沙、衣玖さんと言う形でそれぞれの座席が決まった。気を利かせてくれた衣玖さんが、新しいお茶を用意してくれて、俺達の前には淹れたてのお茶が並んだ。

「……あゝ、ずっと外に居たからお茶が美味いぜ」

「私は紅茶派だけど、偶には緑茶も悪くないわね」

「衣玖の淹れるお茶は美味しいからね。飲み慣れない奴でも美味しく頂けるわよ」

「有り難う御座います、霊夢さん。お世辞でも嬉しいですよ」

「お世辞抜きに美味しいと思うけどな」

「リュウさんまで……」

俺が本当の事を言うと、衣玖さんは恥かしそうに顔を紅くして、畏縮してしまった。

あまり褒められる事になれていないのか、こんな事でも直ぐに顔を紅くする事がある。

一体どんな職場で働いているのか気になるけど、深く関わったら面倒な事になりそうだな。

なんて言うか……天界の連中に喧嘩を吹っ掛ける様な、そんな確信にも似た予感だ。



「むう……」

「ん？ どつた霊夢」

「別に何でもないわよ」

「……？」

「霊夢。其処は素直に言った方が良いぞ」

「魔理沙つつさい」

イマイチ良く分からないが、どうやら俺は霊夢の機嫌を損ねてしまつたらしい。

別に変な事を言つたわけでもないし、今の会話の何処に霊夢を怒らせる要素があつたのか、皆目見当も付かない。

魔理沙だけではなく、他の二人にも検討が付いているみたいだし、後でこつそりと聞いておこうかな。

「ところで魔理沙さん。今日は珍しく着物など着てますが、それは如何したのですか？」

「この間大掃除をしていたら、部屋の奥から出てきてな。正月だし

丁度良いと思つて着てきたんだぜ」

「良くカビたり、茸が生えたりしなかつたわね」

「タンスの奥には茸生えてたけどな」

「……あの光景は本当に酷かつたわ」

「アリス、お疲れ」

吐き捨てるように言うアリスに、俺は彼女に労いの言葉を掛けるしかできなかつた。

恐らく、いきなり押し掛けてきた魔理沙にムリヤリ連れ出されて、そのまま家の大掃除を手伝わされたんだらうな。

アリスは結構面倒見が良いからな、色々と文句を言いながらも手伝わんだらう。

「一体どんな状況だったんですか？」

「……一言で言うなら魔境ってところね。荷物が多くて訳が分からなかったわ」

「そんな事無いと思うんだけどなあ」

「貴女は住んでるから感じないだけ。普通ならあんな所に住めないわよ」

「……本当に如何いう状況だったんですか」

「深く考えないほうが良いわよ、衣玖。魔理沙は収集癖持ちだから、恐らくは、そこ等で集めた道具が部屋に散乱してるのよ」

「霊夢、正解」

「ひでえなお前等」

魔理沙が不貞腐れながら言うと、俺達は何故だか一斉に笑い出す。

その様子に魔理沙は、更に不貞腐れてしまつが……面白かつたんだから仕方が無い。

流石に笑うのも可哀相だけど、俺も良く笑いものにされているんだし、今日くらいは我慢してもらおう。

「……そついや、霊夢って着物とか持つてないのか？」

「なによ唐突に」

「だって、普段から巫女服ばかり着てるだろ？ だから、それ以外の服って持つてないのかなって」

「……着物くらいなら持つてるけど、着る機会なんて殆どないんだし、着てないのは当然よ」

「ほう、それは良い事を聞いたぜ」

「魔理沙？」

俺達の会話に割り込んできた魔理沙は、何か面白い事でも思いついたのか、口角を釣り上げて嫌な笑みを浮かべる。

その笑みを見て、何かを察した霊夢は一目散に逃げ出そうとするが、

意外にも衣玖さんの羽衣に掴まってしまふ。

本当に意外な人が手を貸したけど、この二人は霊夢で一体何を  
心算なんだ？

「ちよつと衣玖！ アンタ、いきなり何するのよ！！」

「逃げ出そうとした霊夢さんをつまえただけです」

「それが何でかって聞いているの！！」

「何故って……折角のお正月ですし、振袖の一つを着てみるのも良  
いかと思ひまして」

「そんなの自分のを着れば良いじゃないの！！」

「一応、此処には奉公に来ていますので、それはご勘弁を……」

「ナイスだぜ衣玖！ それじゃ、早速霊夢の部屋を探索するか」

魔理沙に促された衣玖さんは、羽衣に包んだ霊夢を引き摺って居間  
から出て行くこととする。

その見た目は、駄々を捏ねる子供をムリヤリ連れて行く、母親の様  
にも見えなくもない。

「いやー！ 助けてリュウーツー！！」

霊夢は最後の頼みの綱として、俺に助けを求めてくるが……視線を  
逸らす事でそれを拒絶した。

「……悪い、俺も霊夢の着物姿を見てみたい」

「う、裏切り者……」

「では、行きましようか」

羽衣に包まれた霊夢は、そのまま楽しげな二人に引き摺られて居間  
から出て行くのだった。

ちよつと可哀相な事をした気もするけど、霊夢の着物姿を見たのは

本当だし、偶には違う格好をするのも良いんじゃないのか。  
年がら年中、似たような服を着ている俺が言うのもただけだな。

「リュウ。貴方って好きな子を苛めるタイプ？」

「そんな事はないけど、霊夢の反応は見てて楽しいかな」

「……（惚気なのか、肯定してるのか微妙な所ね）」

……  
……  
……

霊夢たちが居間から出て行って十数分くらいが経った頃。

漸く着付けが終わったのか、魔理沙と衣玖さんの二人が居間へと戻ってきた。

二人は戻ってきたのだが……幾ら待っても霊夢が姿を表そうとしな  
い。

直ぐ傍にしているのは分かるんだけど、俺の位置からだと言になっ  
ていて全然見えないんだよな。

「ほら、霊夢さん。その様な所に隠れてないで、早く入って来て下  
さいまし」

「いや……だって恥かしいし……」

「恥かしがるなんて霊夢らしくないぞ」

「五月蠅いわよ魔理沙！」

魔理沙と衣玖さんが霊夢を呼ぶものの、恥かしがって全然姿を見せ

てくれない。

このまま待つていても無駄と判断した俺は、気付かれないようにコタツから抜け出し、そっと霊夢の傍に近付いた。

「うわあッ?! リユウ、アンタ何時の間に!?!」

霊夢が着ている着物は、薄紅色の下地に桜の花びらや赤と白の花の刺繍が施された綺麗な一品。

普段から紅白の巫女服を着ているからか、霊夢には赤系統の服が良く似合う。

彼女の黒髪にも、普段のリボンだけではなく綺麗なかんざしが挿しあつて、霊夢の髪によくマッチしていた。

「…………へえ」

「な、なによ。似合わないと言っても言う心算」

「いや、良く似合っているし、綺麗だぞ霊夢」

「ッ!?!」

「霊夢は元々可愛いんだし、偶には違う格好もしたら如何だ?」

「あ……う……」

俺が普通に褒めてやると、霊夢の顔はドンドン紅くなっていき、最終的には熟れたトマトの様になっていた。

口をパクパクと動かして、何かを言おうとしているが……一向に言葉が出てこない。

そのまま何を言うのかと待つていたら、霊夢が唐突に下を向いて、小さな声で何かを呟いた。

「……………う」

「ん? 何か言ったか?」

「なんでもない! ほら、アンタもこんな所で突っ立ってんじやな

いわよ!!」

「あ、おい、押すなって霊夢!」

顔を真っ赤にした霊夢は、俺の背中をグイグイと押してきた。

その様子を見て、ニヤニヤと笑っていた魔理沙を見つけた霊夢は、彼女を大きな声で怒鳴りつける。

正月だって言うのに、本当に何時もと変わらない状況に、俺は思わず笑い出してしまう。

俺が笑い出したのに釣られて、皆も同じ様に笑い始める。

新年早々に何をしてるのやらと思うが、こうしてる方が俺達らしくて良いのかもな。

第六十六話 スキマと亡霊の陰謀（前書き）

今回はリュウと霊夢は一切出てきませんし、割と短いです。所謂、前フリ回ですのでご了承ください。

## 第六十六話 スキマと亡霊の陰謀

妖夢 Side

三が日が過ぎ、正月が明けたある日、私は主である幽々子様に朝早くから呼び出しを受けた。

本当なら今日は、私の宿敵であるリュウさんの所に赴き、今年最初の勝負を挑む心算でしたが……幽々子様に呼ばれたのでは、仕方がありませんね。

「幽々子様。魂魄妖夢、只今参りました」

「入りなさい」

「失礼します」

私は目の前の屏風を開け、幽々子様の自室へと入らせていただく。部屋の真ん中には、幽々子様が上品に正座しておられ、その直ぐ脇には一振りの長刀が置かれている。

あの方の剣術指南役兼庭師としてお仕えいるけど、幽々子様の脇にある長刀を見るのは初めて。

直接拝見させて貰わないと分からないけど、恐らくは、何らかの曰く付きの刀と見て良いと思う。

……でも、そんな刀を持ち出して一体如何したというのだろうか？

「妖夢。入り口に居ないでもっと近くに寄りなさいな」

「あ、はい」

幽々子様に言われるがまま、私はあの方の近くにより、礼儀正しく正座する。



私が座ると、幽々子様は脇に置いてある刀を持ち、それを何も言わず私に差し出してきた。

私は幽々子様の意図が分からず、差し出された刀と主人を交互に見比べてしまう。

「あの…幽々子様、この刀は一体……」

「この『斬馬刀』は、その昔に龍を斬ったと言う逸話が残り刀よ」

「なんと……」

私は幽々子様の話を聞いて、思わずあの方が差し出している刀を凝視してしまう。

鞘に納められているけど、一見は何処にでも有りそうな大太刀にか見えない。

幽々子様がコレを何処で手に入れたのか気になるけど、この刀があれば私はあの人に勝てるのだろうか……。

「……………」

「妖夢」

「あ、はい。なんでしょう、幽々子様」

「この刀を貴女に託します。大事に使いなさい」

「……えっ？」

私は一瞬、幽々子様が何を言っているのか理解出来ず、思わずあの方の顔を見上げてしまった。

だけど幽々子様は、そんな私など気にも留めず、そっと私の手を取って長刀を握らせてきた。

手の中で長刀のズッシリとした重さが伝わり、この刀を握っているんだと言う実感が湧いてくる。

……だけでも、如何して幽々子様はこの刀を私に託して下さるのだろうか？ ご自身で使わないにしろ、私に託す意味なんて何処にもな

い筈なのに。

「話は以上です。下がりなさい、妖夢」

「……一つだけ質問をしても宜しいでしょうか」

「何かしら？」

「如何してこの刀を私に託してくださるのですか？ 私には『楼観剣』と『白楼剣』がありますので、別に新しい刀が必要と言つ訳では……」

「確かに貴女には二つの刀があるわね。……でも、その二つを使つて彼に勝てたのかしら」

「そ、それは……」

幽々子様に手厳しい事を言われ、私は何も言い返すことが出来なかった。

リュウさんと戦つようになつてから勝負を挑んだものの、今まで一度たりとも彼に勝てた試しがない。

追い詰める事は出来ても、後一步と言う所で逆転され、幾度と無く苦汁を舐めさせられてきた。

何度も？火力がもつと有れば？と悔やみ、筋力を上げようかと思ひ悩んだ事もある。

……でも私は、祖父から教わつた戦い方を捨てる事ができず、結局は何時もと同じ戦法で挑み続けた。

「貴女が二つの剣と、妖忌から学んだ事を大切にしているのは知ってるわ。……だけど、それだけでは彼に勝つことは出来ないわ」

「ですが、幽々子様。私は……ッ！」

「妖夢。……貴女は武器を選ばずに勝てるほどの達人なのかしら……ッ」

「意地悪と思うかもしれないけど、私はコレ以上、思い悩む貴女を見たくないのよ」

「幽々子様……」

私は幽々子様のお気持ちに感動し、思わず涙が出てしまいそうになる。

零れそうな涙を押し殺して、私は手の中にある刀をもう一度良く見  
てみた。

どのような経緯で、この刀が幽々子様のもとに来たのか分からないけど、  
私がこの方の思いに応える方法はただ一つ。

それは、この斬馬刀を使って今度こそリュウさんに勝つこと。それ  
以外で幽々子様の気持ちに報いる術などない！

心に強くそう思った私は、服の袖で涙を拭い、顔を上げて幽々子様  
を見詰める。

「幽々子様、この斬馬刀……有り難く頂戴いたします」

「ええ。…頑張りなさい、妖夢」

「はい！ それでは、私はこれで失礼させて頂きます」

「分かったわ」

「では……」

私は幽々子様に一礼した後、あの方の自室を出た。

そのまま真っ直ぐに中庭へと赴き、鞘を抜いて頂いたばかりの刀の  
刀身を見つめる。

刀は『楼観剣』と比べるとかなり重いが、光を反射して輝く刀身は、  
あの剣にはない凄みがあった。

龍を斬ったと言うこの刀が、あの人にどの程度通用するのか分から  
ない。

……でも、幽々子様の期待に応える為にも、次の勝負で必ずやリュ  
ウさんに勝ってみせる！

「まずはこの重さに慣れる所から始めないと。……よっし、頑張る

ぞー！」

そう言つて気合を入れてから、私は刀を握り締めて徐に素振りを始めた。

剣を振り下ろすと言うよりは、剣に振り回されている気もするけど…… コレは単純に、私がこの剣を扱い切れていない証拠。

長さ的には、普段使っている楼観剣と大差ないんだし、間合いを修正する必要なんて無いんだ。

今はただ、この剣の重さになれないと、まともな勝負すら出来そうに無い。

私は自分のそう言い聞かせながら、ただ黙々と刀を振るい続けた。

妖夢 Side out

幽々子 Side

妖夢が私の部屋から出て行くのを見送ると、今度は目の前にスキマができ、其処から紫が顔を出した。

「はあい、幽々子。貴女の従者はちゃんと刀を受け取った？」

「ええ、ちゃんと受け取ってくれたわよ」

「それは良かったわ。……コレでちゃんとした賭けが成立しそうね」

「まだ近くに居るかもしれないんだから、そう言う事は口にしないで頂戴」

「大丈夫よ。幽々子に応援されたのが嬉しくて、珍しく上機嫌みただいだから」

「覗き見なんて趣味が悪いわよ」

「私が覗いてたの知っていたじゃないの」

「あら、何のことかしら？」

「またまたすつ呆けちゃって」

紫は微笑みながら問いかけてくるけど、此処は何時も通り誤魔化させて貰いましょう。

ウチの庭師を賭けの対象にしてるのだし、この位の誤魔化しは見逃してもらいたいものね。

「ところで紫。彼の方はどうなっているのかしら？」

「相変わらず霊夢と仲睦まじくしていたわ」

「そうじゃなくて、今回の賭けを教えるのかって事」

「教えてるわけ無いじゃない。そんな事したら霊夢が五月蠅いに決まってるし」

「……………それもそうね」

私は紫が言ってきた一言を聞いて、思わず納得してしまった。

あの紅白巫女が、最愛の彼と私の妖夢の勝負が、ごく一部で賭けの対象にされているなんて知ったら、どんな行動に出るのか分かったもんじゃないわ。

最悪の場合、本気になった巫女が私達に襲い掛かってくる……………なんて事もありそうね。

「とにかく、霊夢と妖夢、それと竜神さんにはこの事を教えちゃ駄目よ」

「ええ、分かったわ」

「それで幽々子はドツチに賭ける？ やっぱ妖夢かしら？」

「当然じゃない。何時までも負け続けてるあの子じゃないわ」

「……………こう言ったら悪いけど、妖夢の勝利はかなりの大穴よ」

「なら、あの子が勝ったら凄い事に為りそうね」

「今の倍率なら………大体10倍ってところかしらね」

「それなら私は、妖夢の勝利に十万ほど賭けさせてもらっわ」

私は懐から茶封筒を取り出し、その袋を紫に差し出した。

袋を受け取った紫は、中に入っているお金を数えた後、感心した様な呆れた様な顔で私を見てきた。

「また大きく出たわね」

「この位しないと面白くないじゃないの」

「確かにね。………だったら私は、引き分けに十万を賭け様かしら」

「ソツチの方が大穴じゃないの？」

「妖夢の勝利ほどじゃないわよ」

「あら、皆ひどいのね」

紫の話聞いて、賭けの参加者からの評価がどれだけ低いのが良く分かる。

確かに今までの戦いで全敗している妖夢だけど、今回はあの剣を授けてあるからそう簡単に負けはしない。

その為に態々紫に頼んで、あの剣を探して来てもらったのだから、今回ばかりは頑張って貰わないと。

「ふふつ。次の試合で皆の驚く顔が目に浮ぶわ」

「自信満々なのは良いけど、本当に勝てるのかは分からないわよ」

「大丈夫よ、あの子はやれば出来る子だもの」

「………親馬鹿よねえ」

「別に良いじゃないの」



第六十六話 スキマと亡霊の陰謀（後書き）

賭けの参加者は、あの二人以外には魔理沙や萃香、レミリアにたっちゃんも、登場予定は無いですけど、天魔などが参加しています。毎回賭けにしている訳ではありませんが、一種の娯楽に為っていました。

折角の辰年だから、たっちゃんの絵でも出そうかと思ったのですが

……美術

の成績が悪かったので、結局諦めました。

……たまに絵をかける人が羨ましいときがあります。



第六十七話 真冬に咲く桜の花（前書き）

今回は全編妖夢視点です。

## 第六十七話 真冬に咲く桜の花

幽々子様から剣を頂いてから一月が経ちました。

この間に私は、一度もリュウさんと戦う事はせず、ちゃんと扱える様にするため我武者羅に剣を振るい続けた。

その甲斐があつてか、何時もの『楼観剣』ほどではないにしろ、大分扱えるようになって来た。

まだ剣の重さに慣れないところもあるけど、この剣で『未来永劫斬』と『六根清浄斬』を放つ事が出来んだ。

この二つの技が放てる様になった今なら、あの人に今日こそ勝つことも夢じゃない筈!!

「……と言う訳で、リュウさん勝負です!!」

「久々に来たと思つたら、いきなりソレか」

朝早くからきた私は、境内の雪掻きをしていたリュウさんに勝負を申し込んだ。

リュウさんは、此方の顔を見るなり嫌そうな顔をしてきたけど、そんな事知つた事じゃない。

既に連敗数が100を超えているし、幽々子様にも応援されている以上、絶対に勝ち逃げなんて許しませんよ。

「別に勝負しに来るなって言わないけど……雪掻きくらいはさせてくれ」

「なら、私もお手伝いします。二人の方が早く片付きますからね」

「まあな。(……コイツ、どれだけ勝負したいんだよ)」

リュウさんは、自分が使っていたスコップを私に手渡した後、倉庫

から別のスコップを取りに行きました。

私は彼の居ない間に、自分の荷物を賽銭箱の上に置き、リュウさんの代わりに雪掻きを始めた。

この後に大事な勝負が控えているので、無駄な体力を使わないようにしないと。

……  
……  
……

途中で戻ってきたリュウさんと共に、私は手早く雪掻きと戦うための場所を確保した。

足元には若干雪が残っているけど、滑るような状態でなければ、戦いに何の支障も無い。

私は足元の状態を確認しながら、賽銭箱の上に置いておいた『斬馬刀』を背中に背負い、腰に『白楼剣』を差した。

リュウさんは何時もの剣を構え、何時でも私と戦えるように体勢を整えてくれる。

久し振りの勝負に気分が高揚してるのを感じながら、私は背中に背負っていた『斬馬刀』を抜いて構えた。

「……その刀、何時もの奴じゃないな。何処で手に入れたんだ？」

「一月前に幽々子様から授かりました。この刀で、今日こそ貴方に勝ってみせます！」

「そうか」

リュウさんは、私の気合に何の感慨もなく一言呟くだけだったけど、警戒する様な視線を『斬馬刀』に向けていた。

もし、この刀の事を知っていて警戒しているのなら、私にとってはかなり有利に事が運びそう。

……でも、有利だからと言って油断をしていると、簡単に足元を掬ってくるのがリュウさんだ。

油断なく攻めていても、僅かな隙からあつという間に逆転された事なんて、過去に何度も経験している。

この刀のお陰で有利に運ぶからと言って油断していると、何時もの様に返り討ちに遭うのがオチだ。

今回は如何しても負けられない以上、何時も以上に気を引き締めて戦わないと……！

「…さて、そろそろ始めるか」

「何時でもどうぞ」

私とリュウさんは、自分の武器を握り締めて、間合いとタイミングを計り始める。

地面を確りと踏み締め、呼吸を整えた後……臆する事無く、前へと駆け出していく！

足元の雪を蹴り飛ばし、眼前に居るリュウさんとの間合いを詰めた私は、力強く踏み込んで剣を振り抜く。

「ハアアアアツ！！」

リュウさんは、私が剣を振るのに合わせて自分の剣を振るい、何時もの様に剣同士をぶつけ合わせてきた。

何時もなら此処で力負けするけど、この刀の重さに加えて、長いリチから生まれる遠心力が合わさり、単純にぶつかっただけでは競

り負けたりはしない。

私とリュウさんは、お互いの剣をぶつけたまま身動きが取れず、膠着状態になる。

「……普段なら力押しでいけるんだが、随分と重い一撃だな」

「この刀は『楼観剣』よりも重いですからね。初撃で競り負けたりしませんよ」

「だとしても、力では俺の方が上だ」

そう言うとリュウさんは、剣に力を込めて、私を押し潰そうとしてくる。

私は押し切られる前に身体を捻り、リュウさんの剣を刃の上で滑らせ、彼の体勢を一気に崩しに掛かる。

刃の上で剣を滑らせることで、剣が離れると共に膠着状態が解け、私は身動きが取れるようになり、押し潰そうとしていたリュウさんはバランスを崩した。

動けるようになった私は、身体を捻った勢いで回転し、今度は重さや遠心力だけではなく、速さも乗った一撃を叩き込む。

私の刀は吸い込まれるようにリュウさんへと奔るが、当たる直前で後ろへと跳ばれてしまい、有効打にはならなかった。

攻撃を躲されても私は気にせず前に出て、剣を振るい続けてペースを握っていく。

思うように攻勢に出れないリュウさんは、私の攻撃を防いだり躰したりしている内に、ドンドン後ろへと追い詰められていった。

これ以上、後ろに下がることが出来なくなったリュウさんは、剣を脇腹の辺りで構えて、一気に斬り込んで来た。

咄嗟の判断で防ぐ事はできたけど、リュウさんの一撃で後ろに吹き飛ばされ、折角詰めた間合いを大きく離されてしまう。

私は直ぐに間合いを詰めようと駆け出すが、リュウさんは自身の正面に、何故か飛ばない斬撃形の弾を出して来た。

その攻撃を右に回避すると、またしても飛ばない斬撃を出して、私にその攻撃を回避させてくる。

あの人が何を狙っているのか分からず、私はリュウさんが繰り出して来る攻撃を次々と回避していく。

幾度と無く攻撃を回避していると、気が付いた時には、私の周りは斬撃に取り囲まれていて、既に逃げ場が無い状態に追い込まれていた。

「これは……斬撃の檻？」

「俺から見たら壁なんだが……どの道気が付くのが遅かったな！」

リュウさんは、私に向かって特大の斬撃を放ち、取り囲んでいる弾ごと叩き斬つて来た。

上下左右に回避出来る場所はなく、残っているのは後ろのみだけ……下がった所である斬撃を躰せる訳じゃない。

何処かに躰せる場所はないかと探していると、斬撃と斬撃の間に僅かな隙間があるのを見つけた。

一人が通り抜けられるか如何かと言う位の隙間だけど、他に回避出来る場所が無い以上、あの隙間に飛び込んでいくしかない。

私は恐怖を押し殺し、迫り来る斬撃にも臆さずに、見つけた僅かな隙間へと向かって飛び込んだ！

「……………避けれた！」

「マジかよ……………」

斬撃に服を掠らせながらも、なんとか避ける事の出来た私は、内心で喜びながらも直ぐに体勢を整え、リュウさんへと向かって一気に斬り込んでいく。

あの人も直ぐに迎撃しようとするけど、私が斬り込みの方が速かった。

先に放った私の『現世斬』は、リュウさんの胸を見事に斬り抜け、あの人を上へと大きく吹き飛ばした。

今までに無い手応えを感じた私は、追撃としてリュウさんの真下を通り抜けながら、地面に剣を叩き込んでいく。

空中で体勢を整えたリュウさんが地面に着地すると同時に、地面に込めておいた剣気が吹き上がった。

追撃の『桜花閃々』は、ギリギリの所で防がれてしまったけど、リュウさんの体勢を崩す事は十分に出来た。

このチャンスを逃す前に、剣に妖力を注ぎ込み、巨大な刀身を作り上げて……一気に振り下ろした！

「貰ったアツ！！」

「……舐めんなツ！！」

私が剣を振り下ろすのに合わせて、リュウさんも同じく力を注ぎ込んで、巨大な刀身を作り振り上げてきた。

二つの刃がぶつかった勢いで、大きな衝撃波が発生し、神社の境内の中を駆け巡った。

私とリュウさんは、刃をぶつけ合ったまま動けずに居るけど……少しずつ、私の刃が押し始めた。

僅かな時間で刀身を作り上げた事と、リュウさん自身の体勢が悪いらしく、イマイチ剣に力が乗らないみたいだ。

コレを好機と読んだ私は、剣を握る手に力を込めて、一気にリュウさんを押し潰しにかかった。

少しずつ私の刃がリュウさんの刃を押しして行き、あと少しで勝てる……そう思った瞬間、新たな光の刃が出現して、二つの刃で私の刃

を受け止められてしまう。

一体何処から出ているのかと辺りを見てみると、リュウさんの手に

はもう一本の剣が握られていて、その剣でもう一つの刃を作っているのが見えた。

「……まさか、二刀の『迷津慈航斬』だとも?!」  
「でえりやああアアアアッ!」

私の疑問が解消される前に、リュウさんは二つの刃で私の刃を押し折ってきた。

『迷津慈航斬』が破られた時に、行き場を失った妖力は暴発してしまい、雪混じり粉塵が巻き起こる。

粉塵の所為で視界が悪くなり、リュウさんの姿が見えなくなるが、煙の向こうからやってくる人影を見つけた。

間合いに入られる前に剣を振るい、なんとか迎撃しようとしたけど、リュウさんは私の間合いの外から光の刃を振り下ろして来た。

ギリギリの所で気が付いた私は、腰に差していた『白楼剣』を抜き、迫ってきている刃をなんとか防ぐ。

未だに『迷津慈航斬』を維持している事に驚いていると、今度は煙を薙ぎ払いながら別の刃が迫ってくる。

私は直ぐに後ろに跳んで、迫って来た刃を回避して、一度リュウさんから間合いを取る。

粉塵の向こうから出てきたリュウさんは、左右の剣の長さを『冥想斬』ほどの長さに調整していた。

確かに『迷津慈航斬』だと、刀身が長くなりすぎて振るうには少々不便だし、妖力の消費も大きい。

でも、半分ほどの長さの『冥想斬』なら、妖力の消費も抑えられる上に、技量さえ伴えば双剣で振るう事も出来なくは無い。

……出来なくは無いとしても、一体どれだけの鍛練を経験を積みれば良いのだろう。

私は『楼観剣』に妖力を纏わせるので精一杯なのに、簡単にやって



のけるこの人の技量って一体……。

「考え事か、妖夢。……そんなんじゃ死ぬぞ、お前」  
「クッ！」

考え事に集中しすぎた私は、リュウさんの接近に気付かずに一撃貰ってしまふ。

妖力が抑えられているからか、一撃の威力は其処まで高くは無いの、そう何度も受けられる様なものでもない。

私は剣を握り締め、真っ直ぐリュウさんを見据えて、臆する事無く立ち向かっていく。

特に策らしい策も立てず、後ろに引くことも考えずに、我武者羅になつて剣を振るう。

その様子は酷く滑稽に映るかもしれないけど、後手に回つたら負ける以上は滑稽だとしても立ち向かって行くしかない！

「ハアアアアッ！」

「オラアッ！！」

私が振り下ろした剣は、リュウさんの左手の剣で弾かれてしまふ。

弾かれて出来た隙に、彼の右手の剣が私の胸を薙ぎに来るけど、素早くしゃがむ事でその一撃を躲す。

その体勢から立ち上がるのと同時に、リュウさんの喉に向かって剣を突き上げていく。

リュウさんは、後ろに跳ぶ事で私の突きを躲してくるけど、そんな事気にもせず一歩踏み込み、両手で剣を握り締めて一気に振り下ろした。

私が振り下ろした一撃は、彼の肩から脇腹に掛けて叩き込めたけど、まだリュウさんは倒れない。

振り切った傍から、私は素早く彼の胸を薙ぎ払い、更に斬り上げる

まで繋いで叩き込んだ。

リュウさんは多少よろけるものの、直ぐに立て直して左右の剣を同時に振るってくる。

私は後ろには下がらないで、横をすり抜けるようにして移動し、リュウさんの背後を取った。

そのまま剣を振るうが、素早く反転したリュウさんの剣に弾かれ、もう一本の剣で私の胸を薙ぎに来る。

私は弾かれた剣をムリヤリ振り下ろし、胸に迫って来ていた剣を弾き落とし、刃を返して彼の首を狙いにいく。

……だが、それよりも先にリュウさんの突きを貰ってしまい、後ろへと突き飛ばされてしまう。

なんとか体勢を立て直したけど、私が間合いを詰めるよりも先に、リュウさんに間合いを詰められてしまった。

突きを繰り出したのと同時に、間合いを詰めて来ていたリュウさんは、二つの剣を同時に振るって私の胸を薙いだ後、剣を逆手に持ち替えて力強く地面に突き刺した。

すると、地面から扇状の剣気が噴出し、私は下から立ち上ってきた光の奔流に飲み込まれた。

胸薙ぎを喰らって体勢が崩れていたから、今の一撃を躲す事はおろか、防ぐ事もできずまともに受けてしまうが……私はまだ剣を握って立っている。

何度もリュウさんの苛烈な剣技を受けていた所為か、あの人と戦う前に比べて、身体が丈夫になったのは自覚していた。

そのお陰で、今の一撃を貰っても気絶する事無く、こうして剣を握り続けることが出来る。

私は痛む体に鞭打って、なんとか体勢を整えようとするが、ソレよりも先にリュウさんが斬りかかって来ていた。

力を使い切ったのか、光の刃は形成してなかったけど、この一撃を受けても耐えていられる自信はない。

……だから私は、力を振り絞って最後の賭けの出ることにした。

迫り来る刃を『白楼剣』でいなして、フットワークを活かして五人に分身しながら、リュウさんの周りを駆け回る。

この五人で同時に斬り込むと、リュウさんを中心にして桜の花が咲き誇る。

彼に斬り込んだ後に上空に飛んでいた私は、勢い良く落下して……  
渾身の力を込めた一撃を、桜の中心にいるリュウさんに叩き込んだ  
！！

「が……ッ」

私が一撃を叩き込むと、咲き誇っていた桜は散り、リュウさんも地面に倒れ伏せていた。

倒れているリュウさんを見て、私は勝てたのかと思っただが、最後の最後に油断して負けた事が何度もある。

私は本当に気絶しているのか確かめる為、少し離れたところから切っ先でリュウさんを軽く突いてみた。

リュウさんは、切っ先で突かれてもピクリとも動かず、立ち上がる気配を全く見せなかった。

その様子を見て、私は漸くリュウさんに勝てたという実感が湧いてきた。

「……勝った。……やっとリュウさんに勝ったーッ！！！」

私は声を張り上げて、声高々にあの人に勝てた事を喜んだ。

リュウさんに挑み続けて既に半年以上が経つけど、今日漸くこの人に勝つことが出来た。

戦えば戦うほどに強くなつていく人から、リュウさんには勝てないんじゃないのかって思ったこともある。

何度も自分の弱さを嘆いて、リュウさんの強さを羨んだのかも分からない。

……だけど今日！ 私はやっとこの人に勝つことが出来たんだ！ 幽々子様に頂いたこの刀のお陰か……は、イマイチ分からなかったけど、あの方の応援が励みになったのは確かだ。

「見ていますか、幽々子様に師匠。私、妖夢は、彼に漸く勝つことが出来ました……」

「へえ〜。アンタが誰に勝ったって言うのかしら？」

「それは勿論、リュウさんに決まってるじゃないですか……」

突如聞こえてきた第三者の声に反応して、声の方を振り向いた瞬間……勝利の喜びが綺麗に消え去ってしまった。

何故なら、声の主はこの神社の主『博麗霊夢』その人だったからだ。

「ん？ 如何したの妖夢？ 随分と怯えてるじゃない」

「いや……あの……」

何か声を掛けなければと思うけど、霊夢さんの笑顔が妙に恐くて、言葉が上手く出てこない。

彼女は確かに笑顔の筈なのに、眼がまったく笑ってないし、両手には札を持っている。

なんで臨戦態勢なのか不思議に思ったけど、周りの状況を見て直ぐに理由が分かった。

私達が戦った影響で、境内の中が滅茶苦茶に為っていて、直ぐ傍でリュウさんが倒れている。

神社の主で、彼の事が好きな霊夢さんの事だから、きっと物凄く怒っているに違いない。

「とりあえずだけど……妖夢」

「な、なんでしよう」

「『夢想封印』いつとく？」

「リュウさんを気絶させたのは勝負だから仕方ないですし、境内を滅茶苦茶にしたのはリュウさんも同罪だと思います……！」

「アイツには後で説教するから良いのよ。でも、先に起きているア  
ンタから……よね？」

「わ、私にそんな確認を取らないで下さい……！」

「問答無用。……神霊『夢想封印』」

「イヤ……ッ……！」

私は勝利の余韻に浸る間もなく、霊夢さんのスペカをまともに受けてしまう。

境内を滅茶苦茶にしたのは、私よりもリュウさんの技の方が多いのに……。

私はこの状況に理不尽さを感じながら、必至の弁解も空しく、霊夢さんの光弾の前に気絶するのだった……。

## 第六十七話 真冬に咲く桜の花（後書き）

今回、妖夢が勝てた最大の要因は『斬馬刀』にあります。

この剣は、ブレス？に存在する武器で、特性が？ドラゴン系の敵に通常の1.5倍のダメージを与える？と言うものです。

妖夢が最後に使った『六根清浄斬』のダメージが5000だとして、その1.5倍なので……大体7500ダメージになりますね。

実際の所は、もうちょっと威力がありますので……9000オーバーは行つてたでしょう。

それにしても、この手の話は考えるのは大変ですけど、書いていて楽しいです。

……出来の良し悪しは別ですけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2724w/>

---

竜が辿り着いた幻想郷

2012年1月6日16時49分発行